榛東村遺跡発掘調査報告書　第12集

史跡　茅野遺跡

圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書

（二）遺物編

２０２１

榛東村教育委員会

史跡　茅野遺跡

圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書

（二）遺物編

口絵写真１　土偶（手前中央）と土製耳飾り

口絵写真２　縄文土器・土製品

口絵写真３　石器・石製品

序

本書は、長岡地区圃場整備事業にともなって、平成元年度から２年度にかけて榛東村教育委員会が発掘調査を実施した、榛東村茅野遺跡の調査成果のうち、出土遺物についてまとめたものです。

発掘調査では縄文時代後期後半から晩期前半を主体として営まれた榛名山東麓の集落遺跡として注目され、多数の土製耳飾りをはじめとする土器や石器、祭祀に関連する道具などの豊かさは、我々を驚かせました。平成４年に榛東村耳飾り館が開館し、出土遺物のうち代表的な出土品は常設展示にて皆様にご覧いただいておりましたが、平成18年度の遺構編刊行を経まして、ここに遺物編として発掘調査の成果を取りまとめることができました。この発掘調査の成果が今後の縄文時代研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解ならびに保護の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、本書の制作にあたり御協力いただきました地元の方々ならびに関係機関の皆さまに、心からの感謝を申し上げます。

令和３年２月吉日

榛東村教育委員会

教育長　阿佐見　純

例　　言

１．本報告書は、榛東村遺跡発掘調査報告書第12集　史跡　茅野遺跡　圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書（二）遺物編である。

２．遺跡の概要は以下のとおりである。

所 在 地　群馬県北群馬郡榛東村大字長岡字神薬師
1200番地１、1289番地、1290番地１、1291番地１、1292番地１、1292番地２、1293番地１、1294番地４、1297番地１、1298番地、1299番地、1300番地１、1300番地２、1301番地１、1301番地２、1303番地１、1303番地２、1304番地

遺跡番号　榛東村0035

調査面積　12,125.84㎡（Ａ区調査面積　8,000㎡）

指 定 日　2000年（平成12年）３月７日付　文部省告示第25号

史跡面積　12,125.84㎡

３．本書を刊行するにあたっての整理作業体制は以下のとおりである。

・平成31年度

榛東村教育委員会事務局

事務局長　小池　賢一

局長補佐　一倉　　学

文化財保護係　係長　角田　祥子

耳飾り館　　主任　牧島　徹平

臨時職員　池田登美子　　田胡　直子　　南雲　富子

【遺物実測・製図・図版作成】　角田　祥子　　田胡　直子

【製図（石鏃）・土製耳飾り胎土観察】　株式会社　測研

【口絵写真撮影】　小川　忠博

・令和２年度

榛東村教育委員会事務局

事務局長　井口　克三

局長補佐　一倉　　学

文化財保護係　係長　角田　祥子

耳飾り館　　主任　牧島　徹平

会計年度　　職員　池田登美子　　南雲　富子

【本文作成】

第１章第４節１．石鏃、６．打製石斧　大工原　豊(國學院大學)、第１章左記以外　角田　祥子

第１章第１節縄文土器　本文監修・指導　林　克彦（石洞美術館）

第４章考察編の原稿の執筆は、林　克彦、大工原　豊、建石　徹（奈良県庁）、三浦麻衣子（帝京大学文化財研究所）、二宮　修治（東京学芸大学）各氏に依頼した。

【図版作成】　南雲　富子　　角田　祥子

４．本報告書の作成は、榛東村教育委員会文化財保護係　角田祥子が担当した。

５．本報告書にかかる記録図面・写真等の資料、出土遺物は榛東村教育委員会が保管する。

６．下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

（50音順、敬称省略）

秋池　武　　石坂　茂　　小川忠博　　大野淳也　　久保誠二　　後藤佳一　　小林達雄
佐藤雅一　　佐藤信之　　芹澤清八　　早田　勉　　大工原豊　　建石　徹　　角田真也
林　克彦　　洞口正史　　宮尾　亨　　群馬県地域創生部文化財保護課
群馬県埋蔵文化財調査事業団　　群馬県立歴史博物館

凡　　例

1．本報告書に掲載した遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器（土器片1/2、完形土器1/4もしくは1/5）

土製品　1/2（手燭形土製品は1/3）

打製石器　2/3（打製石斧は1/3）

磨製石器　1/3（石棒・石剣は1/4）

土版・岩版　1/2

その他縮尺は図版下に示したとおりである。

2．本報告書に掲載した遺物写真の縮尺は以下のとおりである。

土器（土器片1/2、完形土器1/4もしくは1/5）

土製品　1/2（土製円盤・手燭形土製品は1/3）

打製石器　2/3（打製石斧は1/3）

磨製石器　1/3（石棒・石剣は1/3ないし1/6）

岩版　2/3

その他縮尺は図版下に示したとおりである。

3．本報告書での重要文化財の取り扱い

出土遺物のうち土製耳飾りの総数577点を含む1,950点が、平成４年に国の重要文化財に指定されている。本書では遺物を種類・出土遺構ごとに取り扱い、指定文化財をそれ以外の遺物と同列に掲載している。

器種の見直しを行い、必要なものは平成４年度に付番した重要文化財番号（例：石鏃000、石匙000）の器種名から変更し、重要文化財番号は遺物観察表備考欄にすべて記載した。

4．遺物の実測の方法は、小川忠博氏が撮影した実測用写真をトレースし、表・裏・側面図を作成した。また、断面図は実物を実測した。

5．縄文土器を除く遺物の製図は、実測図をシャープペンシルでトレースした図をスキャンし、オートトレース（一部手作業によるトレース）し、作成した。

6．縄文土器・土製耳飾りは、手作業により実測・トレースした。レイアウト用紙に作成した版をスキャニングしデジタル図版を作成した。

7．遺物写真は実測用写真をトリミングしてレイアウトした。

8．デジタル画像作成に使用したソフトはAdobe Illustrator CC2018、Adobe Photoshop CC2018である。

9．実測図上の表現について

土製耳飾り　正面図下に断面図と側面図を表した。中央線右側に断面と内側面（破片の場合は中央線に寄せて表示）を、中央線左側に側面図を示した。

石　　鏃　付着物を黒色のトーンで示した。石材名を記載した。ただし無記載は黒色頁岩である。

打製石斧　使用痕ならびに着柄による摩耗の範囲を、灰色のトーンで示した。

磨製石斧　研磨痕を灰色のトーンで表した。

砥　　石　使用痕の観察される範囲を断面に矢印で示した。

岩　　版　微細な擦り痕を灰色のトーンで表した。

目　　次

史跡　茅野遺跡　発掘調査報告書（二）遺物編

口絵写真１　土偶（手前中央）と土製耳飾り
口絵写真２　縄文土器・土製品
口絵写真３　石器・石製品
序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
遺構編目次

第１章　縄文時代の遺物…… 3
第１節　縄文土器…… 3
１．概観…… 3
２．Ａ区出土の土器…… 3
３．配石土坑・土坑埋設土器…… 8
４．確認調査部分出土の土器…… 8
５．Ｂ区出土のその他の土器…… 9
第２節　土製耳飾り…… 58
１．土製耳飾りについて…… 58
２．部位の呼称について…… 59
３．土製耳飾りの各要素の特性について…… 60
４．分類の方法　～系列の設定～…… 64
第３節　その他の土製品…… 90
１．土偶…… 90
２．手燭型土製品…… 93
３．小型土器…… 93
４．土版…… 93
５．異形土製品…… 93
６．スタンプ型土製品…… 93
７．土製円盤…… 93
第４節　石器…… 99
１．石鏃…… 99
２．石錐…… 103
３．石槍…… 103
４．石匙…… 103
５．スクレイパー…… 104

６．打製石斧…… 104
７．その他の打製石器…… 105
８．磨製石斧…… 133
９．砥石…… 133
10．敲石…… 133
11．凹石…… 133
12．石皿…… 134
13．多孔石…… 134
14．石錘…… 134
第５節　石製品…… 147
１．岩版…… 147
２．玉類…… 157
３．石棒…… 159
４．石剣…… 162
５．独鈷石…… 164
６．石針…… 165
７．小形敲石…… 165
８．軽石製品…… 165
第６節　その他の石器・石製品…… 167
１．棒状礫…… 167
２．配石土坑から出土した自然礫…… 167
３．板状石製品…… 167
４．剝片…… 167

第２章　弥生時代の遺物…… 168
１．土器…… 168

第３章　茅野遺跡出土土製耳飾りの実体視顕微鏡による胎土観察報告書…… 169

第４章　考 察 編…… 198
茅野遺跡出土の土製耳飾りについて…… 198
茅野遺跡の縄文土器概観…… 207
茅野遺跡の後・晩期の石器について…… 212
茅野型石鏃の研究…… 215
縄文時代晩期の遺跡テリトリーと居住人口について…… 227
茅野遺跡・下新井遺跡出土黒曜石資料の産地分析…… 230

第５章　ま と め…… 236

図版目次

第 1 図　茅野遺跡の位置…… 1
第 2 図　茅野遺跡全体図…… 2
第 3 図　1号住居跡出土土器…… 11
第 4 図　2号住居跡出土土器（1）…… 12
第 5 図　2号住居跡出土土器（2）…… 13
第 6 図　2号住居跡出土土器（3）…… 14
第 7 図　2号住居跡出土土器（4）…… 15
第 8 図　2号住居跡出土土器（5）…… 16
第 9 図　3号住居跡出土土器（1）…… 17
第10図　3号住居跡出土土器（2）…… 18
第11図　3号住居跡出土土器（3）…… 19
第12図　3号住居跡出土土器（4）…… 20
第13図　4号住居跡出土土器（1）…… 21
第14図　4号住居跡出土土器（2）…… 22
第15図　4号住居跡出土土器（3）…… 23
第16図　5号・6号住居跡出土土器（1）…… 24
第17図　6号住居跡出土土器（2）…… 25
第18図　7号住居跡出土土器（1）…… 26
第19図　7号住居跡出土土器（2）…… 27
第20図　8号住居跡出土土器（1）…… 28
第21図　8号住居跡出土土器（2）…… 29
第22図　8号住居跡出土土器（3）…… 30
第23図　9号住居跡出土土器…… 31
第24図　11号住居跡出土土器…… 32
第25図　12号住居跡出土土器（1）…… 33
第26図　12号住居跡出土土器（2）…… 34
第27図　13号住居跡出土土器…… 35
第28図　14号住居跡出土土器（1）…… 36
第29図　14号住居跡出土土器（2）…… 37
第30図　15号住居跡出土土器（1）…… 38
第31図　15号住居跡出土土器（2）…… 39
第32図　15号住居跡出土土器（3）…… 40
第33図　15号住居跡出土土器（4）…… 41
第34図　15号住居跡出土土器（5）…… 42
第35図　16号住居跡出土土器（1）…… 43
第36図　16号住居跡出土土器（2）…… 44
第37図　17号住居跡出土土器（1）…… 45
第38図　17号住居跡出土土器（2）…… 46
第39図　17号住居跡出土土器（3）…… 47
第40図　17号住居跡出土土器（4）…… 48
第41図　18号住居跡出土土器（1）…… 49
第42図　18号住居跡出土土器（2）…… 50
第43図　18号住居跡出土土器（3）…… 51
第44図　18号住居跡出土土器（4）…… 52
第45図　18号住居跡出土土器（5）…… 53
第46図　18号住居跡出土土器（6）…… 54
第47図　配石土坑・土坑出土土器・埋設土器…… 55
第48図　Aトレンチ1号埋設土器…… 56
第49図　Eトレンチ出土土器（1）…… 56
第50図　Eトレンチ出土土器（2）…… 57
第51図　土製耳飾り（1）…… 72
第52図　土製耳飾り（2）…… 73
第53図　土製耳飾り（3）…… 74
第54図　土製耳飾り（4）…… 75
第55図　土製耳飾り（5）…… 76
第56図　土製耳飾り（6）…… 77
第57図　土製耳飾り（7）…… 78
第58図　土製耳飾り（8）…… 79
第59図　土製耳飾り（9）…… 80
第60図　土製耳飾り（10）…… 81
第61図　土製耳飾り（11）…… 82
第62図　土製耳飾り（12）…… 83
第63図　土製耳飾り（13）…… 84
第64図　土製耳飾り（14）…… 85
第65図　土製耳飾り（15）…… 86
第66図　土製耳飾り（16）…… 87
第67図　土製耳飾り（17）…… 88
第68図　土製耳飾り（18）…… 89
第69図　土偶（1）…… 91
第70図　土偶（2）…… 92
第71図　手燭型土製品…… 94
第72図　小型土器…… 95
第73図　土版・異形土製品・スタンプ型土製品…… 96
第74図　土製円盤（1）…… 97
第75図　土製円盤（2）…… 98
第76図　石鏃（1）…… 106
第77図　石鏃（2）…… 107
第78図　石鏃（3）…… 108
第79図　石鏃（4）…… 109
第80図　石鏃（5）…… 110
第81図　石鏃（6）…… 111
第82図　石鏃（7）…… 112
第83図　石鏃（8）未成品…… 113
第84図　石鏃（9）未成品…… 114
第85図　石鏃（10）未成品、模造品…… 115
第86図　石鏃（11）模造品…… 116
第87図　石鏃（12）模造品…… 117
第88図　石鏃（13）模造品…… 118
第89図　石鏃（14）模造品…… 119
第90図　石錐（1）…… 120
第91図　石錐（2）…… 121
第92図　石錐（3）…… 122
第93図　石槍…… 123
第94図　石匙・スクレイパー…… 124
第95図　打製石斧（1）…… 125
第96図　打製石斧（2）…… 126

第 97 図　打製石斧（3）…… 127
第 98 図　打製石斧（4）…… 128
第 99 図　打製石斧（5）…… 129
第100図　打製石斧（6）…… 130
第101図　その他の打製石器…… 131
第102図　磨製石斧…… 132
第103図　砥石（1）…… 135
第104図　砥石（2）…… 136
第105図　砥石（3）…… 137
第106図　砥石（4）…… 138
第107図　砥石（5）…… 139
第108図　砥石（6）…… 140
第109図　敲石…… 141
第110図　凹石（1）…… 142
第111図　凹石（2）…… 143
第112図　石皿（1）…… 144
第113図　石皿（2）…… 145
第114図　多孔石・石錘…… 146
第115図　岩版（1）…… 148
第116図　岩版（2）…… 149
第117図　岩版（3）…… 150
第118図　岩版（4）…… 151
第119図　岩版（5）…… 152
第120図　岩版（6）…… 153
第121図　岩版（7）…… 154
第122図　岩版（8）…… 155
第123図　岩版（9）…… 156
第124図　玉類…… 158
第125図　石棒（1）…… 159
第126図　石棒（2）…… 160
第127図　石棒（3）…… 161
第128図　石剣（1）…… 162
第129図　石剣（2）…… 163
第130図　独鈷石…… 164
第131図　石製品…… 166
第132図　弥生時代の土器…… 168

表 目 次

表１　住居跡出土土器の型式…… 10

胎土観察報告写真・表目次

写真１　土製耳飾り胎土写真（1）…… 179
写真２　土製耳飾り胎土写真（2）…… 180
写真３　土製耳飾り胎土写真（3）…… 181
写真４　土製耳飾り胎土写真（4）…… 182
写真５　18号住居跡出土土器胎土写真…… 183
写真６　手燭型土製品胎土写真…… 184
第１表　胎土の分類内容一覧…… 185
第２表　耳飾り胎土の観察内容一覧…… 190
第３表　大別分類の点数・比率一覧とグラフ図…… 195
第４表　各大別分類の細別点数一覧…… 195
第５表　土器胎土観察内容一覧…… 197
第６表　手燭形土製品胎土観察内容一覧…… 197

写真図版目次

PL．1　１号住居跡出土縄文土器
　　２号住居跡出土縄文土器（1）
PL．2　２号住居跡出土縄文土器（2）
PL．3　２号住居跡出土縄文土器（3）
PL．4　３号住居跡出土縄文土器（1）
PL．5　３号住居跡出土縄文土器（2）
PL．6　３号住居跡出土縄文土器（3）
PL．7　４号住居跡出土縄文土器（1）
PL．8　４号住居跡出土縄文土器（2）
　　５号住居跡出土縄文土器
　　６号住居跡出土縄文土器
PL．9　７号住居跡出土縄文土器
PL.10　８号住居跡出土縄文土器（1）
PL.11　８号住居跡出土縄文土器（2）
　　９号住居跡出土縄文土器（1）
PL.12　９号住居跡出土縄文土器（2）
　　11号住居跡出土縄文土器
PL.13　12号住居跡出土縄文土器
　　13号住居跡出土縄文土器
PL.14　14号住居跡出土縄文土器
PL.15　15号住居跡出土縄文土器（1）
PL.16　15号住居跡出土縄文土器（2）
PL.17　15号住居跡出土縄文土器（3）
PL.18　16号住居跡出土縄文土器

PL.19　17号住居跡出土縄文土器（1）
PL.20　17号住居跡出土縄文土器（2）
PL.21　18号住居跡出土縄文土器（1）
PL.22　18号住居跡出土縄文土器（2）
PL.23　18号住居跡出土縄文土器（3）
　　配石土坑・土坑出土土器・埋設土器
PL.24　３号埋設土器・Ａ区遺構外出土土器
　　テストピット３出土土器（1）
PL.25　テストピット３出土土器（2）
　　テストピット６出土土器
PL.26　Ａトレンチ埋設土器
　　Ｅトレンチ出土土器（1）
PL.27　Ｅトレンチ出土土器（2）
　　Ｂ区出土土器
PL.28　土製耳飾り（1）
PL.29　土製耳飾り（2）
PL.30　土製耳飾り（3）
PL.31　土製耳飾り（4）
PL.32　土製耳飾り（5）
PL.33　土製耳飾り（6）
PL.34　土製耳飾り（7）
PL.35　土製耳飾り（8）
PL.36　土製耳飾り（9）
PL.37　土製耳飾り（10）
PL.38　土製耳飾り（11）
PL.39　土製耳飾り（12）
PL.40　土製耳飾り（13）
PL.41　土製耳飾り（14）
PL.42　土製耳飾り（15）
PL.43　土偶（1）
PL.44　土偶（2）
PL.45　手燭型土製品
PL.46　小型土器・土製品
PL.47　土製円盤
PL.48　石鏃（1）
PL.49　石鏃（2）
PL.50　石鏃（3）
PL.51　石鏃（未成品）
PL.52　石鏃（模造品）（1）
PL.53　石鏃（模造品）（2）
PL.54　石鏃（模造品）（3）
PL.55　石錐（1）
PL.56　石錐（2）・石槍
PL.57　石匙・スクレイパー
PL.58　打製石斧（1）
PL.59　打製石斧（2）
PL.60　打製石斧（3）
PL.61　その他の打製石器
PL.62　磨製石斧・砥石（1）
PL.63　砥石（2）
PL.64　砥石（3）
PL.65　敲石・凹石
PL.66　多孔石・石錘
PL.67　石皿
PL.68　岩版（1）
PL.69　岩版（2）
PL.70　岩版（3）
PL.71　岩版（4）
PL.72　岩版（5）
PL.73　玉類
PL.74　石棒
PL.75　石剣
PL.76　独鈷石・石針・小型敲石・軽石製品
PL.77　棒状礫・配石土坑から出土した自然礫
PL.78　弥生時代の土器

遺構編目次

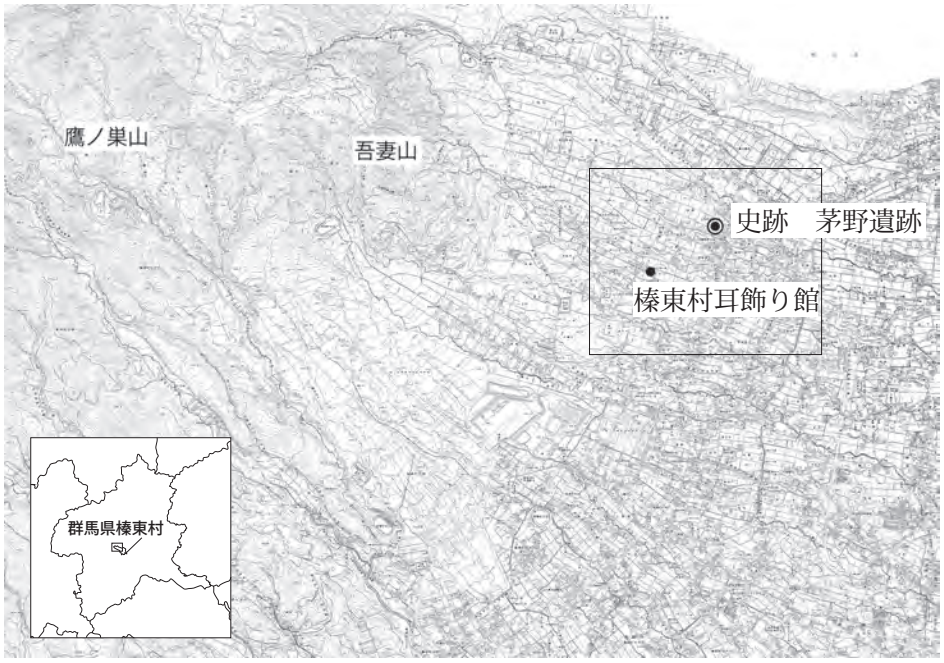
史跡　茅野遺跡　（一）遺構編

榛東村遺跡発掘調査報告書第10集　2005.３.31発行

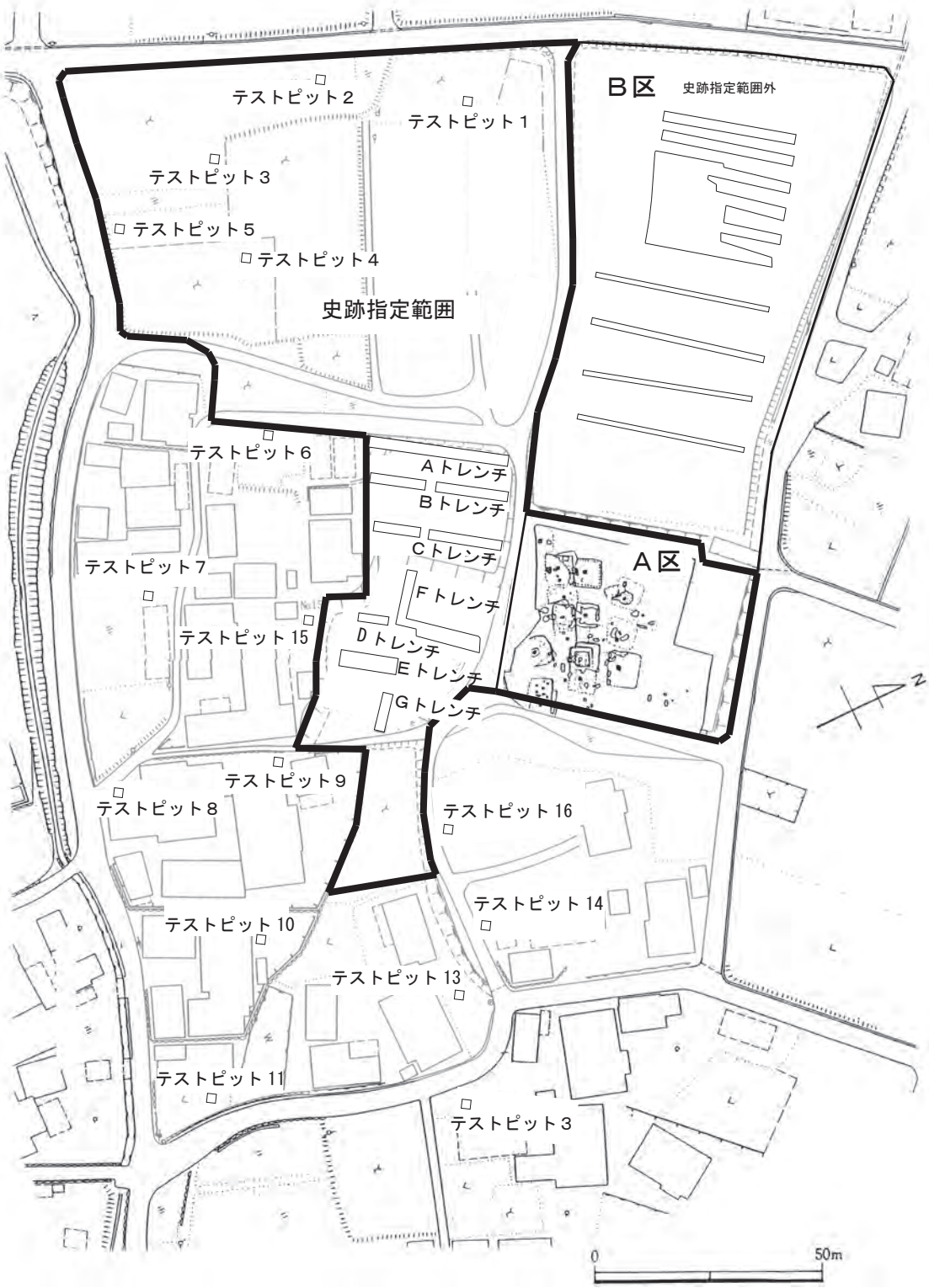
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　序章…… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯…… 1
　第２節　茅野遺跡の立地と周辺の遺跡…… 1
第２章　調査の概要…… 2
　第１節　調査目的…… 2
　第２節　調査経過と標準土層…… 2
第３章　Ａ区の調査…… 7
　第１節　調査区と地層…… 7
　第２節　住居跡…… 7
　第３節　配石土坑…… 25
　第４節　配石…… 32
　第５節　土坑…… 34
　第６節　埋設土器…… 35
第４章　Ｂ区の調査…… 39
　第１節　調査区と地層…… 39
　第２節　遺構…… 39
第５章　確認調査（テストピット部分）…… 40
　第１節　調査区と地層…… 40
　第２節　遺構と遺物…… 40
第６章　確認調査（トレンチ部分）…… 44
　第１節　調査区と地層…… 44
　第２節　遺構と遺物…… 44
　第３節　大形石皿及び水場遺構…… 51
　第４節　まとめ…… 55
第７章　茅野遺跡における自然科学分析…… 56
第８章　ま と め…… 91

写真図版…… 93



第１図　茅野遺跡の位置（上）1/80,000（下）1/20,000


B区
史跡指定範囲外
テストピット２
テストピット１
テストピット３
テストピット５
テストピット４
史跡指定範囲
テストピット６
Ａトレンチ
Ｂトレンチ
Ｃトレンチ
Ａ区
テストピット７
Ｆトレンチ
テストピット 15
Ｄトレンチ
Ｅトレンチ
Ｇトレンチ
テストピット９
テストピット８
テストピット 16
テストピット 14
テストピット 10
テストピット 13
テストピット 11
テストピット３
0
50m

第２図　茅野遺跡全体図

第１章　縄文時代の遺物

第１節　縄文土器

１．概　観

平成元年度調査において出土した土器は深型のテン箱に150個分以上におよび、住居跡出土分で100箱程である。平成２年度調査では70箱分の土器が検出している。多量の土器片から完形復元が可能なものを抽出し、45点については平成４年に重要文化財の指定を受けている。

土器の整理・復元作業では、土器片は①文様がありある程度全体がわかる破片と、②文様がみられるが小片であるもの、③無文土器の破片を分けた。本書に掲載したものは①のうち各遺構から代表的な様相を呈するものを抽出した一部の資料にとどまることを断らないとならない。

時期は縄文時代前期、中期の時期も見られるが後期後半から晩期前葉が中心である。無文粗製土器が非常に多くみられる。また東北地方の土器の影響を受けたものや北陸系の土器も見られる。

図は住居跡出土のものを中心に掲載した。発掘調査時の記録から、遺物の出土状況は層位的な確認が非常に難しかったことがわかる。住居跡はプランの確認が困難であり、床面に近い出土遺物の集中範囲によって遺構を判定しているものも多かったとみられる。

２．Ａ区出土の土器

１号住居跡出土の土器（第３図）

６点を図化した。深鉢口縁部である。001は波状口縁であり、沈線で画した微隆帯上に連続刻目を刻む。002は平口縁で平行沈線の間に半截竹管による連続刺突を施す。003は２条の微隆帯上に連続する刻目を施文。004は平口縁上に小突起を有し沈線に沿い連続刻目を施文する。05・06は口縁部の形状から同一個体と思われる。後期後半～晩期前半。瘤付土器Ⅲ段階（小林圭一氏の段階設定に基づく（小林2008））主体であるが、安行２式あるいは３ａ式も見られる。

２号住居跡出土の土器（第４図～第８図）

99点を図示した。高井東式、瘤付土器、大洞Ｂ式、安行３ａ式の各型式を主体的に出土する。中期阿玉台式、後期称名寺式、堀之内式、加曽利Ｂ１、Ｂ２式、安行１、２式、晩期安行３ｂ式、大洞 BC 式、天神原式（粗製）土器が客体的にみられる。052は沈線により鍵の手状の文様を施文した中屋１～２式の蓋である。063の香炉型土器は皿部に透かし彫り状の文様がみられ、晩期前葉のものである。067は口縁がやや外反し丸みを帯びた器形の浅鉢である。胴部に斜位の玉抱三叉文が配置される。大洞Ｂ式に比定される。069の台付土器は台部に玉抱三叉文の変化形文様をレリーフ状に配するが、土製耳飾りに類似する文様をもつものがある。（土製耳飾り No. 423、501）瘤付土器第Ⅳ段階もしくは大洞Ｂ式に比定される。

３号住居跡出土の土器（第９図～第12図）

102点を図示した。安行２式、安行３ａ式、安行３ｂ式の土器型式が主体的にみられるほか、前期諸磯式、中期阿玉台式、後期称名寺式、堀之内１式、加曽利Ｂ１、Ｂ２式、高井東式、瘤付土器第Ⅳ段階、晩期では大洞 B、BC 式、Ｃ１式、天神原式、千網式土器などが混在する。また、中部高地系の隆帯文土器（中ノ沢Ｂ類型）もみられる（019）。83は平口縁に小突起を有し、平行する沈線間に縦に区画

線を施文する。大洞Ｃ１式。84、85は同一個体であり、小突起を有し、口縁部に並行する浮線文を有する。千網式。

４号住居跡出土の土器（第13図～第15図）

60点を図示した。高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ式または安行３ａ式土器を主体とする。ほかに中期阿玉台式、後期称名寺式、堀之内式、安行２式土器が混在する。001は隆帯に沿ってへら状の工具で連続的に刺突を施す。阿玉台式。003、004、006は口縁に沿って隆帯や沈線で区画した内側に丸棒状の工具で列点を施文する。堀之内式。012は口縁部に沿った隆帯上に５ミリ幅の施文具による連続刻目、浅い沈線によるＸ字状区画文、綾杉文を施文する。安行２式。030は口縁部に縦位に貼付た上に横位の刻目、036、037は同一個体。横位の楕円形貼付＋刻目。隆帯上に縄文。009は幅４～６ミリの工具で横位に連続する刻目を施文。瘤付土器。010は沈線間に幅4.5ミリの工具で連続刻目を施文。011は横位の沈線による区画間に幅９ミリの工具による横位に連続する刻目。瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階。013は口縁に沿って２条の沈線を施す台形の口縁部突起。高井東式。014～016は波状口縁に沈線文による縦位の稲妻状文を施文する。安行２～３ａ式併行（中ノ沢Ｂ類型）。017～026、039～041は浅めの沈線文による三叉文、入組三叉文、玉抱三叉文等の表現で磨消縄文と組み合わされる。大洞Ｂ式または安行３ａ式。056は注口土器。胴部が強く張る。頸部に羊歯状文。注口下部に蕨手状渦巻き文。磨消縄文。大洞 BC 式。

５号住居跡出土の土器（第16図上段）

16点を図示した。大洞Ｂ式、天神原式土器を多く出土する。堀之内式土器、加曽利Ｂ１式土器もみられる。001は口縁部小突起に沿って八の字状の沈線、下部に横位の楕円貼付上に刻目。平行沈線。細かい刺突文充填。002は沈線区画内に細かい刺突文の充填。006は口縁部を折り返状にして縄文を施文する。008、009は沈線文間に細かい刺突を充填。以上５点は天神原式。005は口縁部破片。口縁の縄文帯は外傾する。浅い盲孔を中心とする玉抱き三叉文。010は浅い盲孔を中心とする同心円文、三叉文、縄文。大洞Ｂ式もしくは安行３ａ式。

６号住居跡出土の土器（第16図下段・第17図）

31点を図示した。高井東式、大洞Ｂ式あるいは安行３ａ式が主体的に出土する。ほかに加曽利Ｂ１式、安行２式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、隆帯文系土器、天神原式土器を出土する。001は口縁部に平行沈線と刻目を施文し、屈曲部から下位に綾杉文を浅い沈線で施文する高井東式古～中段階の土器。002は口縁屈曲上部に幅３ミリ角の工具を横位に押圧して２列の列点を施す。005は口縁に沿った隆帯上に押圧。隆帯文系土器。009は口縁部小突起、口縁下に平行する２本の沈線間に細い刺突列点。012は刺突の充填。天神原式に比定される。015～019は沈線文により三叉文、玉抱三叉文を施文している。磨消縄文。大洞Ｂ式もしくは安行３ａ式土器。

７号住居跡出土の土器（第18図～第19図）

31点を図示した。高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ式または安行３ａ式土器を主に出土する。ほかに安行１式を出土する。001、003、005～007は波状口縁突起破片。口縁に沿って沈線、隆帯上に刻目を施す。高井東式。002は元住吉山Ⅱ式の波状口縁深鉢形土器と考えられる。008は鉢形土器。胴部に４単位の円形貼付と貼付間に上下２本ずつの沈線文。024は浅鉢破片である。胴部中央の小貼付を

横位に弧状につなぐ沈線文。高井東式。013は３条の平行沈線上に縦位の貼瘤、縄文施文。016は平行沈線間に横位の連続刻目、小突起下に貼瘤。017は平行沈線と横位の連続刻目、横位の入組文。以上３点は瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階に比定される。004は口縁部に小突起を有し、玉抱三叉文、三叉文＋弧線文を配する。地文に縄文。大洞Ｂ式。015は粗い縄を転がした縄文帯の間に横位の三叉文・入組文。大洞Ｂ式または安行３ａ式。

８号住居跡出土の土器（第20図～第22図）

63点を図示した。高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ式または安行３ａ式期の土器を主体的に出土する。001は紐状貼付上に刻目。002～003は弧状の重沈線文。中期。049は胴部中央にＸ字状の貼付。瘤付土器第Ⅳ段階の山辺沢式日向南系列と呼ばれている土器に相当する。050は平口縁の台のある浅鉢で沈線と磨消縄文により連続する三叉文を表す。安行３ａ式。051は丸底の浅鉢で、沈線と磨消縄文により斜位に連続する入組三叉文を表す。安行３ａ式あるいは大洞Ｂ式。055、056は口縁部にＢ字状の小突起が付く無文深鉢。053は平底の小型浅鉢で口縁から側面部に隆起する４単位の突起を有し、主文様帯は横位の沈線文と４単位の菱形文。後期後葉～晩期前葉。

９号住居跡出土の土器（第23図）

22点を図示した。出土する型式は高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階を主とする。ほかに加曽利Ｂ２式もみられる。001、004は加曽利Ｂ２式の深鉢口縁突起。002は口縁に沿って並行する沈線の間に棒状工具により連続刺突を施す。高井東式。005は口縁に沿った３条の沈線上に円形の貼付文。006は横位の沈線文と貼付文。007は波状口縁に沿って引いた八の字の沈線（凹線）と、頂部に上下２段の突起を貼付ける。高井東式。009～011は貼瘤がみられるもの。瘤付土器。010は平行沈線と縄文を施文。011は平行沈線間に横位の連続刻目を施文。018は浅鉢と思われる。口唇部に縦位の貼付とその上に刻目。弧状の沈線文と縄文を施す。貼瘤を有す。瘤付土器。019は底部を欠損するほぼ完形の深鉢で、６単位の波状口縁を有する。波状口縁の頂部に円形の貼付、同じく底部にＢ字状の突起を貼り付けする。口縁部には沈線と横位の連続刻目を施す。胴部の文様帯は７単位の円文と弧線文の組み合わせ文様を基本とし、横位の連続刻目と対の貼り瘤を特徴とする。連続刻目を施文する工具は幅約６ミリのへら状で、横の並びはやや不揃いな印象を受ける。瘤付土器第Ⅲ段階に比定される。021は口縁部を欠損した注口土器で、胴部の張り部分に４単位の円形貼付と沈線、地文に縄文を施文する。高井東式に併行する時期のものと思われる。

11号住居跡出土の土器（第24図）

26点を図示した。高井東式、安行３ａ式を主体的に出土するほか、前期（諸磯ｂ式）、中期（阿玉台式）の土器型式も見られる。003、005、007～011は高井東式土器である。004は波頂部下に縦方向の沈線がみられ、元住吉山Ⅱ式の可能性がある。012～015は沈線により円文、弧状文、三叉文が施文され、安行３ａ式に比定される。017は台付土器破片。018、020、022も安行３ａ式に比定される。019は沈線による三叉文がみられ安行３ａ式もしくは大洞Ｂ式。024は後期～晩期の粗製の鉢で内面に指痕が２条みられる。

12号住居跡出土の土器（第25図・第26図）

44点を図示した。後期後半～晩期前半にかけての土器（瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、高井東、大洞Ｂ式、

安行３ａ式）を主体的に出土する。ほかに中期（阿玉台式、加曽利Ｅ３式）、後期（加曽利Ｂ２式）、晩期（天神原式、千網式）の土器も出土する。001～003は中期の土器である。004、005、007、008、010～012、014、023は波状口縁を有する深鉢の口縁部破片で高井東式に比定される。032は注口土器破片と思われるが縦長の貼付、横位の沈線文間に縦２ミリの刺突文を施す薄手で赤彩のある土器である。高井東式に伴う。006は深鉢口縁部に横位に連続する刻目と沈線を施す。016は小突起を有し、幅６～７ミリの横位の連続刻目と沈線を施文し、対の貼瘤が付く。018～021も連続刻目と沈線文、貼瘤を有する瘤付土器である。027は波状口縁部頂部の破片で、突起と頂部に刻目を有し、波状に沿った沈線間に細かい刺突を充填する。天神原式。025は波状口縁の深鉢形土器で安行３ａ式に比定される。029～031、034、037は主に沈線により三叉文、玉抱三叉文が表される。大洞Ｂ式または安行３ａ式に比定される。026、028は沈線文による区画と磨消縄文の組み合わせがみられる安行３ａ式～３ｂ式である。041は小型の浅鉢で、口縁は平らでやや外反し、平底である。浮線文による上下の区画内に楕円文と円と直線を連結した文様が４単位施される。

13号住居跡出土の土器（第27図）

13点を図示した。高井東式を主体とする。ほかに、中期（阿玉台式）の土器のほか、後期から晩期の型式では加曽利Ｂ３式、安行２式、３ａ式、大洞 BC 式が見られる。001、002は中期の土器である。005は深鉢の胴部で屈曲する部位に浅い沈線で綾杉文が施文される加曽利Ｂ３式に比定される土器である。006は口縁に隆帯を貼りその上に刻目を横位に施す。口縁下に沈線文で入組文・楕円文を施文する。安行２式と考えられる。004、008、011は高井東式。013は粗製の深鉢で口唇部小突起上に刻目を施す。安行２～３ａ式に比定される。

14号住居跡出土の土器（第28図・第29図）

34点を図示した。高井東式を主体とし、安行１、２式土器を出土する。001は波状口縁の頂部に貼付と刻目を有し中央に貫通孔をもつ。沈線と縄文を八の字状に施文する。002、009、025とともに、安行１式の土器である。003は波状口縁基部の破片で厚みのある口縁上に縄文を施文する。豚鼻状の突起を貼り付けする。安行２式に比定される。004、007は口縁部を横位の沈線で区画しその内側に平行沈線、刺突文を施す高井東式である。005、010、011は波状口縁を有し、沈線よりも貼付けた隆帯による稜線的な表現がなされる高井東式の土器である。019～022も同じく波状口縁の突起部破片である。高井東式。023、024、026～028も高井東式の波状口縁を有する深鉢。029～033は平口縁の深鉢である。

15号住居跡出土の土器（第30図～第34図）

86点を図示した。後期から晩期の土器が主体で高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ式、安行３ａ式、安行３ｂ式を出土する。ほかに堀之内２式、大洞 BC、大洞Ｃ１式を出土する。003は波状口縁破片、高井東式である。002は横位に連続する刻目と沈線を施文し、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階の土器。004は貼付けた隆帯上に丸棒状工具による連続刺突。隆帯文系土器で安行３ａ式併行。005、006は弧線文と平行沈線の組み合わせに磨消縄文と対の貼瘤を施す、同一個体とみられる。007は深鉢破片で口唇部上部に列点を施し平行沈線間に横位の連続刺突を２段に施文する。天神原式に類する。008～010は横位に連続する刻目と沈線を有する。011、012は瘤付土器第Ⅳ式段階の土器と想定される。014は注口土器で注口部真下に１つの貼付を有する、大洞Ｂ式または安行３ａ式。018は同心円文、019は小円を中心とする玉抱三叉文に沈線と磨消縄文を施文する大洞Ｂ式または安行３ａ式。020は薄手の深鉢胴部破片で対

の貼瘤、弧状の沈線文と縄文を配す瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階。027、028は深鉢波頂部の破片。頂部から下位の縦位貼付上に押圧する。029は口縁部突起で深い刻目を頂部に施し、所謂豚鼻状貼付をもち、安行３ａ式に比定される。030～038は横位に連続する玉抱三叉文もしくは三叉文を沈線により表す、大洞Ｂ式または安行３ａ式に比定される土器である。042は頸部の下位でくびれ、胴部が張る器形で、沈線で蕨手文を表す。大洞 BC 式に類する。口縁部の連続刺突と沈線による弧線文のある044、046も大洞Ｂ式または安行３ａ式とみられる。047～049はいずれも安行３ａ式ないし安行３ｂ式併行で、沈線文を主体として磨消縄文を持つものなど。048は深鉢口縁部で小突起を持ち沈線と三叉文と沈線間に列点を有する。瘤付土器第Ⅳ式段階～大洞Ｂ式あるいは安行３ａ式。051は口縁が少し外反し、胴部との境で屈曲する。安行３ａ～３ｂ式。053は折返し状の口縁上に上向きに連続する刺突をつける安行３ａ式併行の土器、057は胴部に屈曲を持つ深鉢破片で安行３ａ式。058は深鉢の口縁部から胴部破片で胴部に巡らせた３条の沈線上に貼付を施す。高井東式である。059は口唇部に隆帯を貼り付ける。隆帯文系土器である。063の深鉢は口縁に小突起を有し三叉文と弧線文を配す。胴部に変形の三叉文を斜位に連続させる。縄文を磨り消している。大洞Ｂ式または安行３ａ式。064は台付土器で口縁部は外反し皿部は丸みを帯びる。円弧文と三叉文を組み合わせ磨消縄文を施す。台部はやや長く斜位に連続する三叉文のモチーフに貫通する円孔を組み合わせる。安行３ａ式。065は４単位の小突起がある平口縁の台付土器で、沈線による横位の三叉文を施文する。安行３ｂ式。069は胴部が張る安行３ｂ式の広口壺形土器で、沈線による斜位の入組三叉文、屈曲部の横位の楕円貼付を繋ぐ弧線文、沈線文を主なモチーフとして地文に縄文を施す。

16号住居跡出土の土器（第35図・第36図）

39点を図示した。安行３ａ式、安行３ｂ式を主体的に出土する。後期の堀之内２式、高井東式、晩期前半の大洞Ｂ式、天神原式のほか、千網式と思われる土器もみられる。

001、002は堀之内２式の深鉢口縁部突起である。003～005、007は高井東式の口縁部破片で003の口縁突起破片は頂部を上から見たモチーフが土製耳飾りに類似するものがある。020、021は天神原式の深鉢口縁部破片で貼付と口縁にめぐらす弧線文がみられる。028は皿型土器で背面に磨消縄文を用いて中央の文様帯に入組文、その外側に弧線文を配す。034は千網式の浅鉢である。

17号住居跡出土の土器（第37図～第40図）

72点を図示した。後期後半の瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、高井東式新段階、大洞Ｂ式、安行３ａ式が多くみられる。001は後期安行２式、005～010は高井東式の口縁部波頂部破片である。011～017は高井東式の深鉢破片である。065は底部のみ欠損した３単位波状口縁の深鉢である。帯縄文・沈線により三角の区画を成し、三角の内側は三叉文、縦沈線文、無文を呈す。横位の沈線による区画と弧線文、磨消縄文とそれらの交点などの文様構成の要所への豚鼻状貼付が施される。

18号住居跡出土の土器（第41図～第46図）

96点を図示した。後期後半の高井東式、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、晩期前半の大洞Ｂ式、安行３ａ式期の土器が主体的にみられる。ほかに堀之内１式、加曽利Ｂ１式、安行２式、隆帯文系土器、天神原式土器などがみられる。

３．配石土坑・土坑埋設土器（第47図）

・３号配石土坑出土土器

1.63×0.5メートル、掘り込み５～10センチの配石土坑から出土した。底部破片。無文。径3.5センチの小型の底部から直線的に開く器形を呈する。

・８号配石土坑出土土器 No.　1

1.46×1.41メートル、ほぼ円形のプランが確認された、彫り込み約５センチの配石土坑から確認された２個体のうちの１個体。全体の70％ほどが出土した深鉢。底部を欠く。胴部が緩やかに屈曲する器形で口縁部には魚尾状把手を呈す。胴部上半に沈線を横位と斜位につなぎ、沈線の交点・中間点に、刻目を施した縦長の瘤を貼り付ける。地文に縄文を施文。安行３ａ～３ｂ式に比定される。他の一個体である８号配石土坑出土土器 No.　２は無文深鉢であった。

・５号土坑出土土器

1.43×0.9メートル、堀り込み約20センチの土坑の北東隅から出土した。口縁に沿った沈線を有し３単位の貫通孔のある突起をもつ。頸部は強くくびれを持ち、胴部はゆるやかに張る。横位の沈線から縦位に２つ描くことを意識した渦巻き文と、ゆるい弧を描き垂下させた沈線文を交互に施文し、胴部上半を埋めている。渦巻き文は蕨手文に類似している。口縁と底部のそれぞれ一部分を欠損している。堀之内１式に比定される。

・１号埋設土器

６単位の小突起を持つ平口縁の無文浅鉢。後期後半から晩期前半の所産と考えられる。

・２号埋設土器

１号埋設土器と隣接して、粗製深鉢の破片が出土した。

・３号埋設土器

口縁に沈線を持ち、突起は５単位であるが、貫通孔のある２つの突起と、それよりも小さく貫通孔のない３つの突起が等間隔ではなく配される。頸部が強くくびれ、ゆるやかに張る胴部の上部に横位の平行沈線をめぐらせ、円筒状工具の押圧による円文から周囲を垂下する縦位の沈線で５分割し、内側に蛇行する沈線（蕨手文に類似する部分あり）を垂下させる。地文に縄文を施す。堀之内１式期の土器に比定される。

・４号埋設土器

底部から直線状に開く器形を呈する、無文深鉢の底部破片。

４．確認調査部分出土の土器

⑴　テストピット部分出土の土器（写真図版のみ）

テストピット３出土の土器

中期の焼町系土器などの他、後期後半から晩期前半に比定される土器が出土している。01は深鉢の口縁付近に、横位の連続刺突文と沈線文を交互にめぐらせる。後期後葉の所産である。02口縁部は外傾し胴部との境に屈曲部をもち、胴部は丸く張る。無文の深鉢である。網代痕を有する。03は壺形土器の口縁～頸部～肩部破片。

テストピット６出土の土器

後期後半から晩期前半に比定される土器が出土している。01は深鉢口縁部～胴部破片で、波状口縁に沿って弧状の沈線文、縄文帯の下位に沈線で入組み三叉文を巡らせる。磨消縄文を施す。安行３ｂ式。02、03は粗製無文壺形土器の口縁～胴部で晩期前半の所産と考えられる。

⑵　トレンチ調査区出土の土器（第48図～第50図）

Ａトレンチ出土の土器

01は深鉢口縁部～胴部の破片で粗製無文深鉢である。１対の補修孔を有する。ほかに加曽利Ｂ２式、安行２式、３ａ式、３ｂ式、大洞Ｃ１式に比定される土器が出土している。

Ｂトレンチ出土の土器

安行２～３ａ式、３ｂ式を主体に後期末から晩期前半の土器が出土している。

Ｅトレンチ出土の土器

01～03は中期加曽利Ｅ式系統の土器である。05は口縁に屈曲部を持ち、口縁部と張り出し部分に円形の貼付を施す。07､09は細い隆帯を貼り付けた上に連続的な刺突を施す。09は突起の装飾が内面に及ぶ。堀之内２式である。10の口縁部破片は横位にめぐらせた２本の隆帯の上に連続する押圧文を施す。13、14は横位の連続する沈線を重ね、縦位に短い区画沈線を階段状に施す。地文に縄文を有す。15～19は加曽利Ｂ２式の深鉢把手である。22、23、27は内面に沈線の装飾を持ち、口唇部に刻目を有す。加曽利Ｂ１式。74点を図化したが、中期から晩期大洞Ｃ１式期までの土器片が出土している。なお、Ｅトレンチは水場状遺構の検出した調査区であり、出土遺物全体的に言えることだが他の調査区と比較して明らかに風化が進んでいない。

５．Ｂ区出土のその他の土器（写真図版 PL.27）

Ｂ区では前期諸磯ｂ式、阿玉台式、勝坂式、堀之内式、加曽利Ｂ２式の土器が出土している。

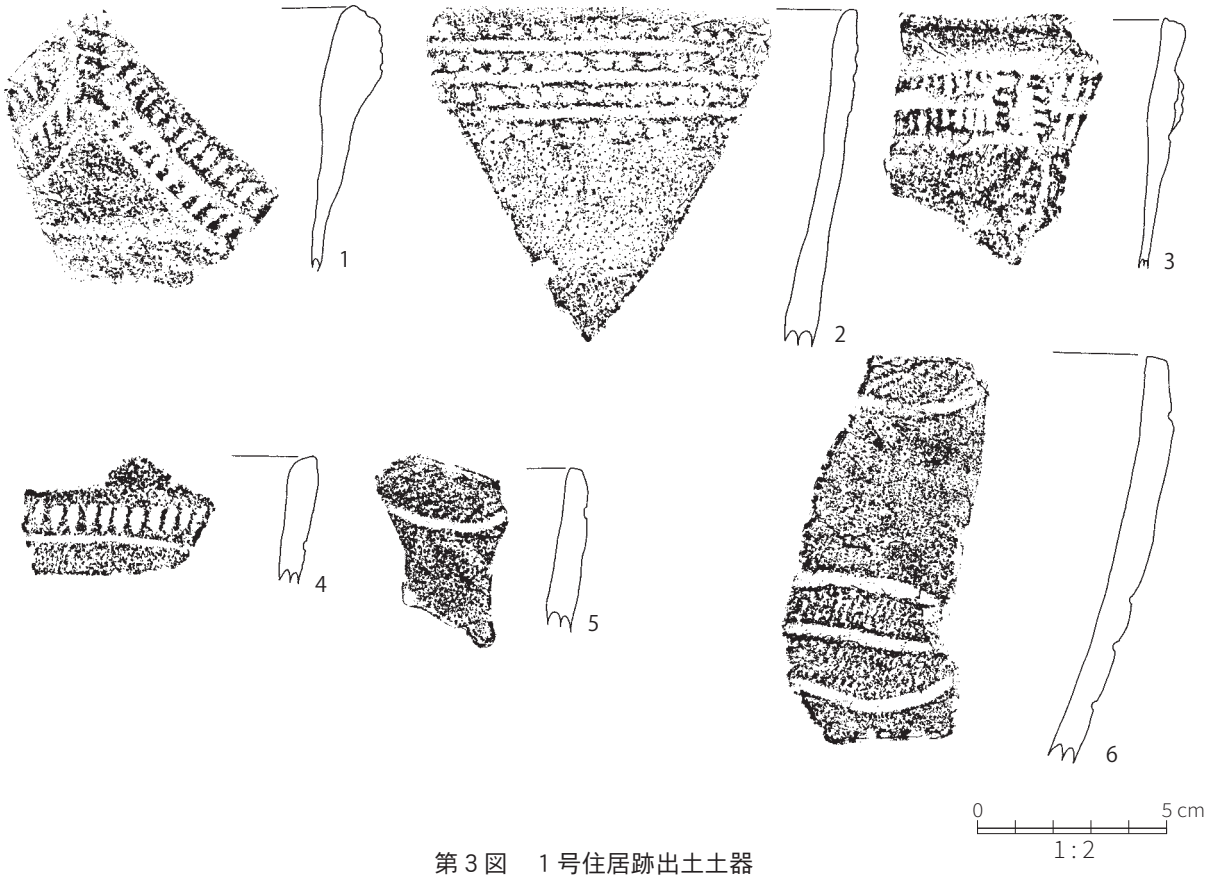
参考文献

小林圭一　2008 「瘤付土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

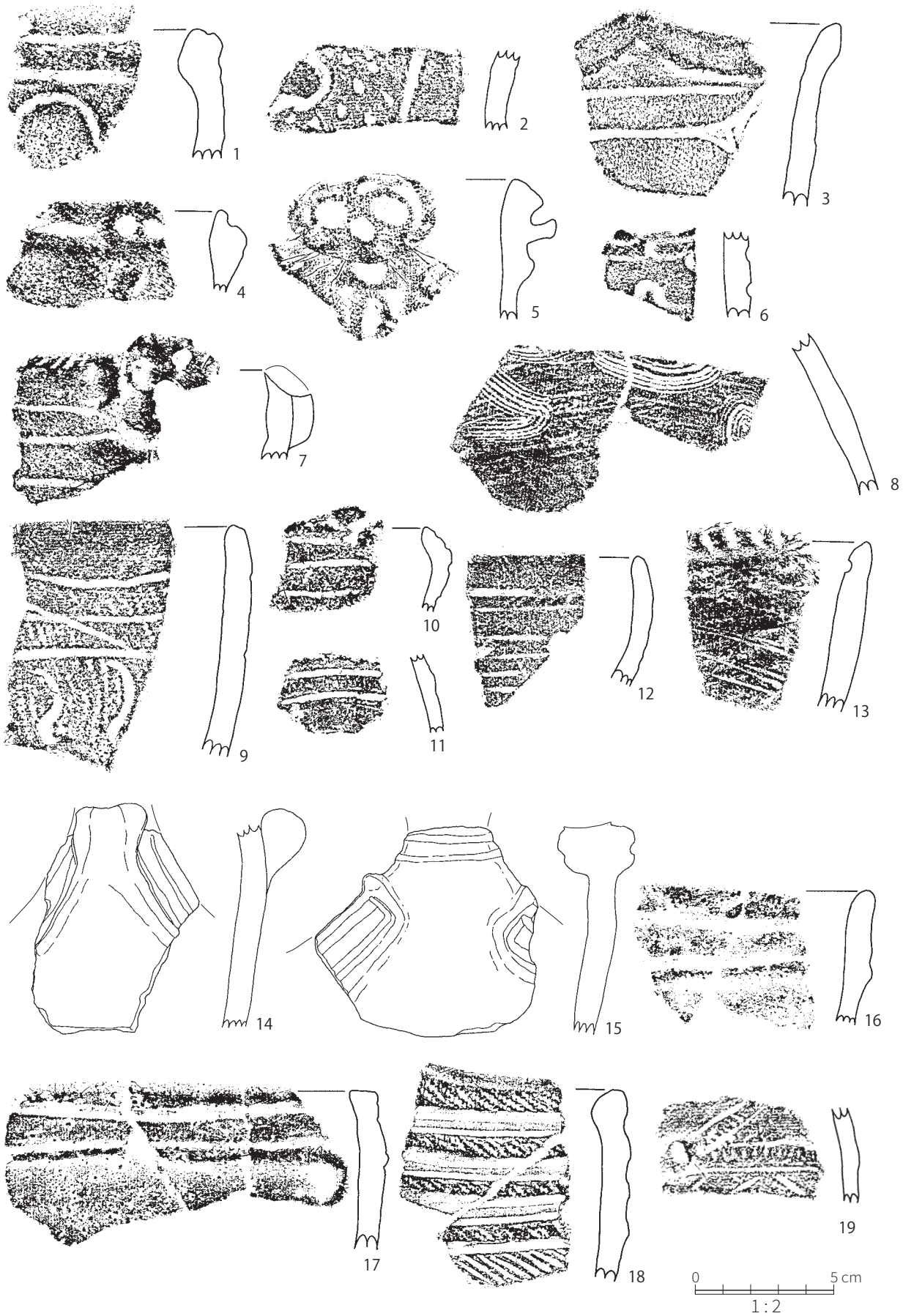
調査区	遺構名	主　　体	客体（型式名の表記順は占める割合を示さない）
Ａ区	Ｊ－１号住居跡	瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階	安行２～３ａ
Ａ区	Ｊ－２号住居跡	高井東、安行３ａ、大洞Ｂ	阿玉台、称名寺、堀之内１、２、加曽利Ｂ１、Ｂ２、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、安行１、２、３ｂ、天神原粗製、隆帯文系、大洞 BC、中屋１～２
Ａ区	Ｊ－３号住居跡	安行３ａ、大洞Ｂ	諸磯ａ、ｂ、阿玉台、称名寺、堀之内１、加曽利Ｂ１、Ｂ２、高井東、瘤付土器第Ⅳ段階、安行２、３ｂ、天神原、隆帯文系、大洞 BC、Ｃ１、千網
Ａ区	Ｊ－４号住居跡	安行３ａ、大洞Ｂ	阿玉台、称名寺、堀之内、高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、安行２、中ノ沢Ｂ、大洞 BC
Ａ区	Ｊ－５号住居跡	大洞Ｂ、天神原	堀之内１、加曽利Ｂ１
Ａ区	Ｊ－６号住居跡	高井東、大洞Ｂ、安行３ａ	加曽利Ｂ１、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、安行２、隆帯文系、天神原
Ａ区	Ｊ－７号住居跡	高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ、安行３ａ	安行１、元住吉山Ⅱ
Ａ区	Ｊ－８号住居跡	高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ、安行３ａ	堀之内、加曽利Ｂ２、安行２、大洞Ｃ１
Ａ区	Ｊ－９号住居跡	高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階	※加曽利Ｂ１　加曽利Ｂ２、大洞Ｂ（安行３ａ）
Ａ区	Ｊ－11号住居跡	高井東、安行３ａ	諸磯ｂ、阿玉台、大洞Ｂ、元住吉山Ⅱ？
Ａ区	Ｊ－12号住居跡	瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、高井東、大洞Ｂ、安行３ａ	阿玉台、加曽利Ｅ３、加曽利Ｂ２、天神原、安行３ｂ？、千網
Ａ区	Ｊ－13号住居跡	高井東	阿玉台、加曽利Ｂ３、安行２～３ａ、３ａ～３ｂ、大洞 BC
Ａ区	Ｊ－14号住居跡	高井東	安行１、２
Ａ区	Ｊ－15号住居跡	大洞Ｂ、安行３ａ	堀之内２、加曽利Ｂ２、高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、安行２、３ｂ、隆帯文系、天神原、大洞 BC、大洞Ｃ１
Ａ区	Ｊ－16号住居跡	安行３ａ、安行３ｂ	堀之内２、高井東、大洞Ｂ、天神原、千網　※佐野Ⅱ
Ａ区	Ｊ－17号住居跡	瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、高井東、大洞Ｂ、安行３ａ	堀之内１？、２、加曽利Ｂ２、安行２、隆帯文系
Ａ区	Ｊ－18号住居跡	高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、大洞Ｂ、安行３ａ	堀之内１、加曽利Ｂ１、Ｂ３、安行２、隆帯文系、天神原、安行３ｂ
Ａ区	５号土坑	堀之内１	
Ａ区	８号配石土坑	安行３ａ～３ｂ	
Ａ区	１号埋設土器	晩期	
Ａ区	２号埋設土器	晩期	
Ａ区	３号埋設土器	堀之内１	
Ｂ区	遺物包含層	称名寺、加曽利Ｂ２	諸磯ｂ、阿玉台、勝坂、堀之内
確	テストピット３	中期～晩期前半	焼町系、加曽利Ｅ、加曽利Ｂ２、Ｂ３、高井東、瘤付土器第Ⅲ～Ⅳ段階、安行１～３ｂ
確	テストピット６	※後期前半～高井東	安行３ａ、３ｂ、天神原、大洞Ｂ
確	Ａトレンチ	※加曽利Ｂ２、安行２～３ａ、安行３ｂ、安行３ｃ、大洞Ｃ１	
確	Ｂトレンチ	※後期末から晩期前半　安行２～３ａ、３ｂ	
確	Ｅトレンチ	中期から晩期半ばまで	加曽利Ｅ、堀之内１、２、加曽利Ｂ１、Ｂ２、Ｂ３、高井東、瘤付土器第Ⅳ段階、天神原、安行３ａ、３ａ～３ｂ、大洞Ｂ、大洞Ｃ１

第１表　住居跡出土土器の型式

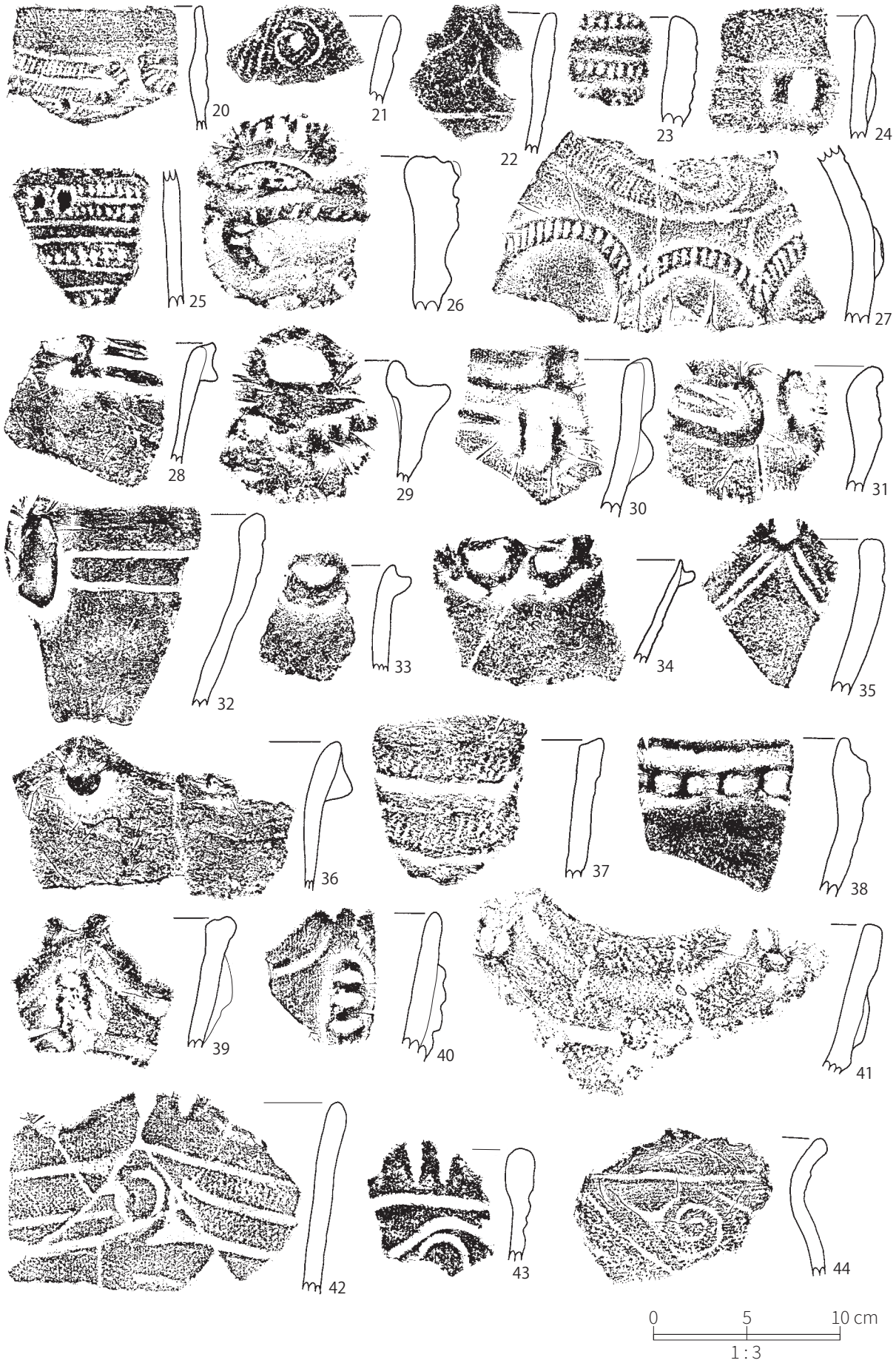
※印は掲載していない



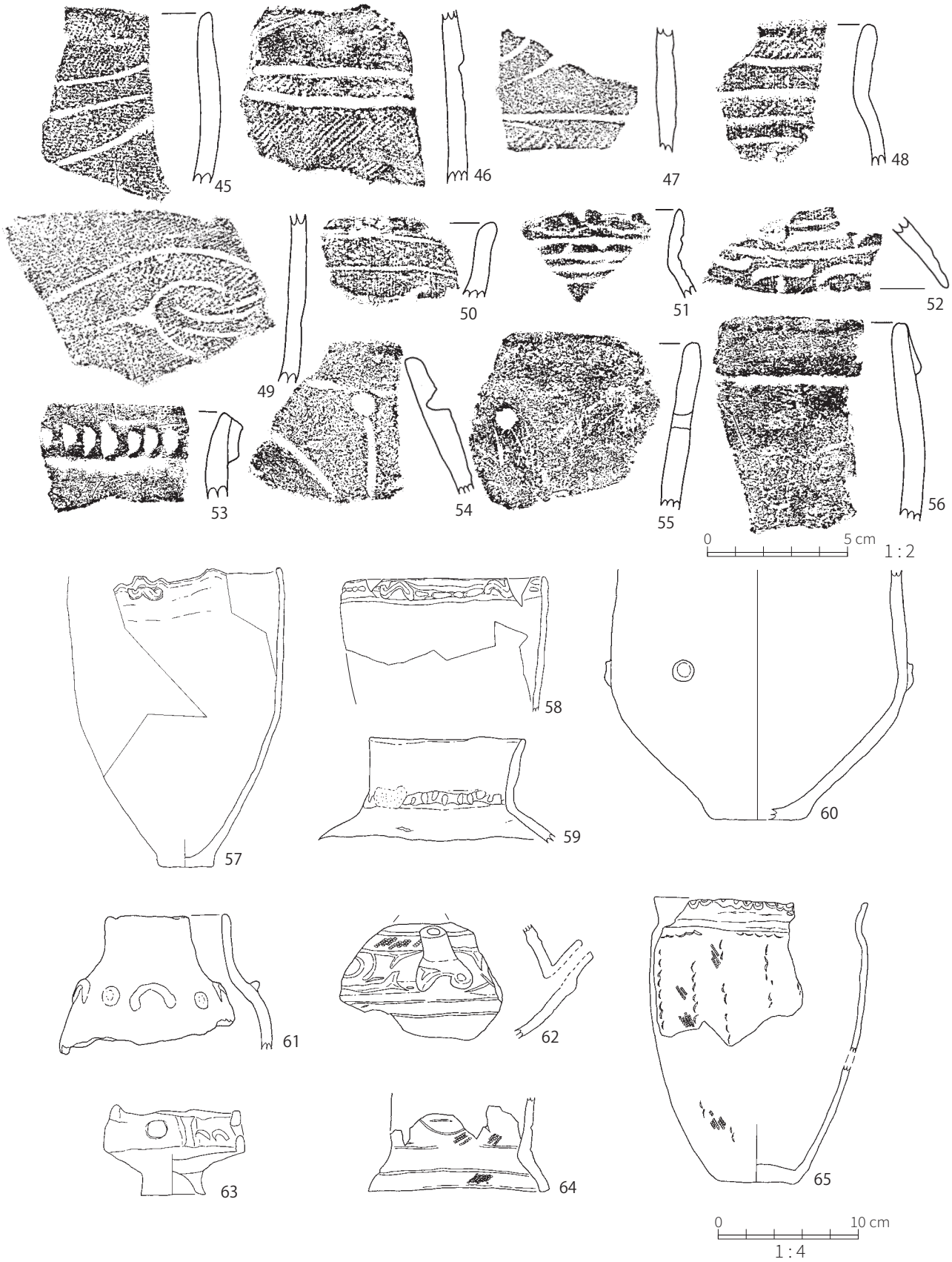
第３図　１号住居跡出土土器



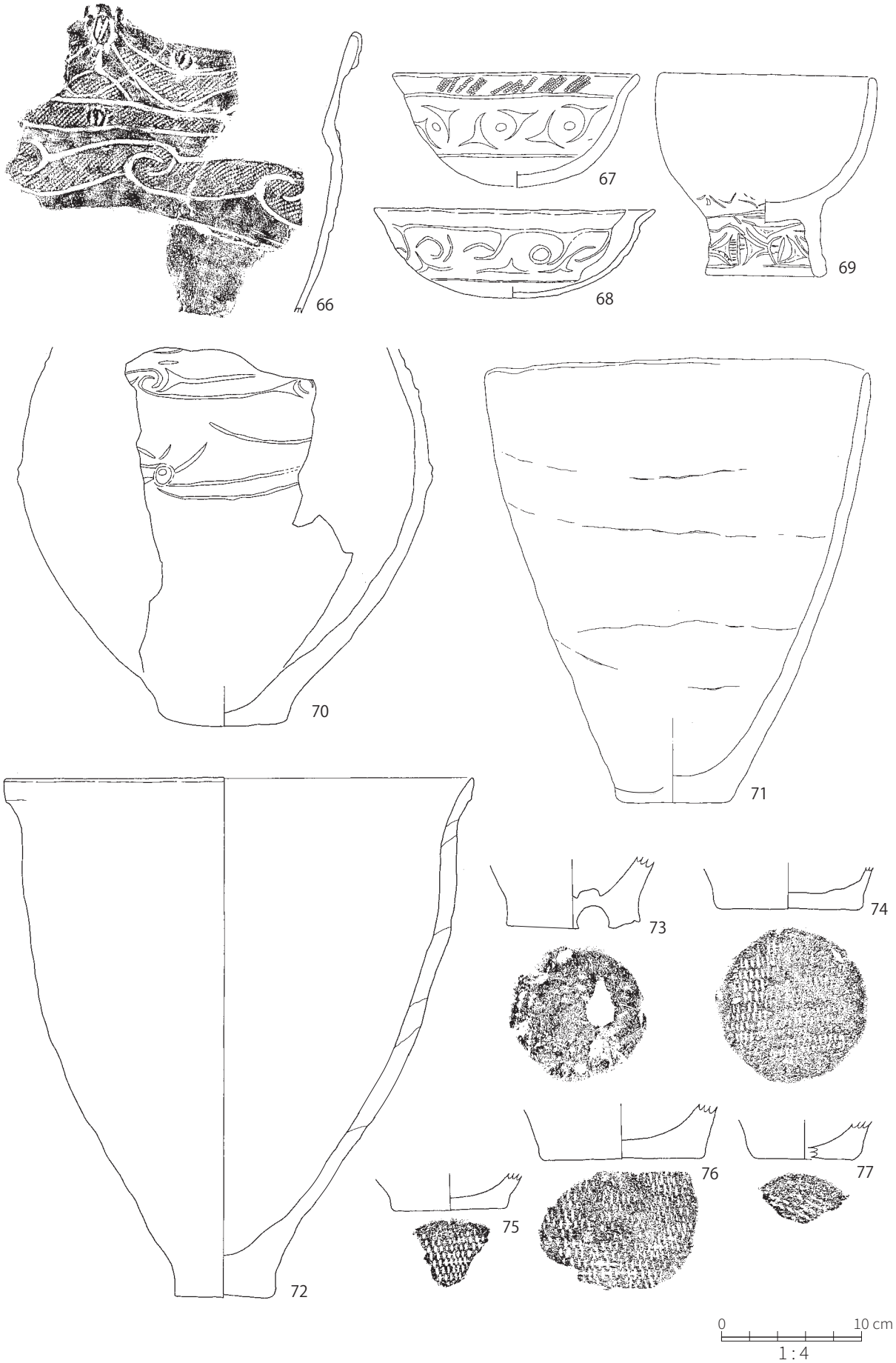
第４図　２号住居跡出土土器（1）



第５図　２号住居跡出土土器（2）

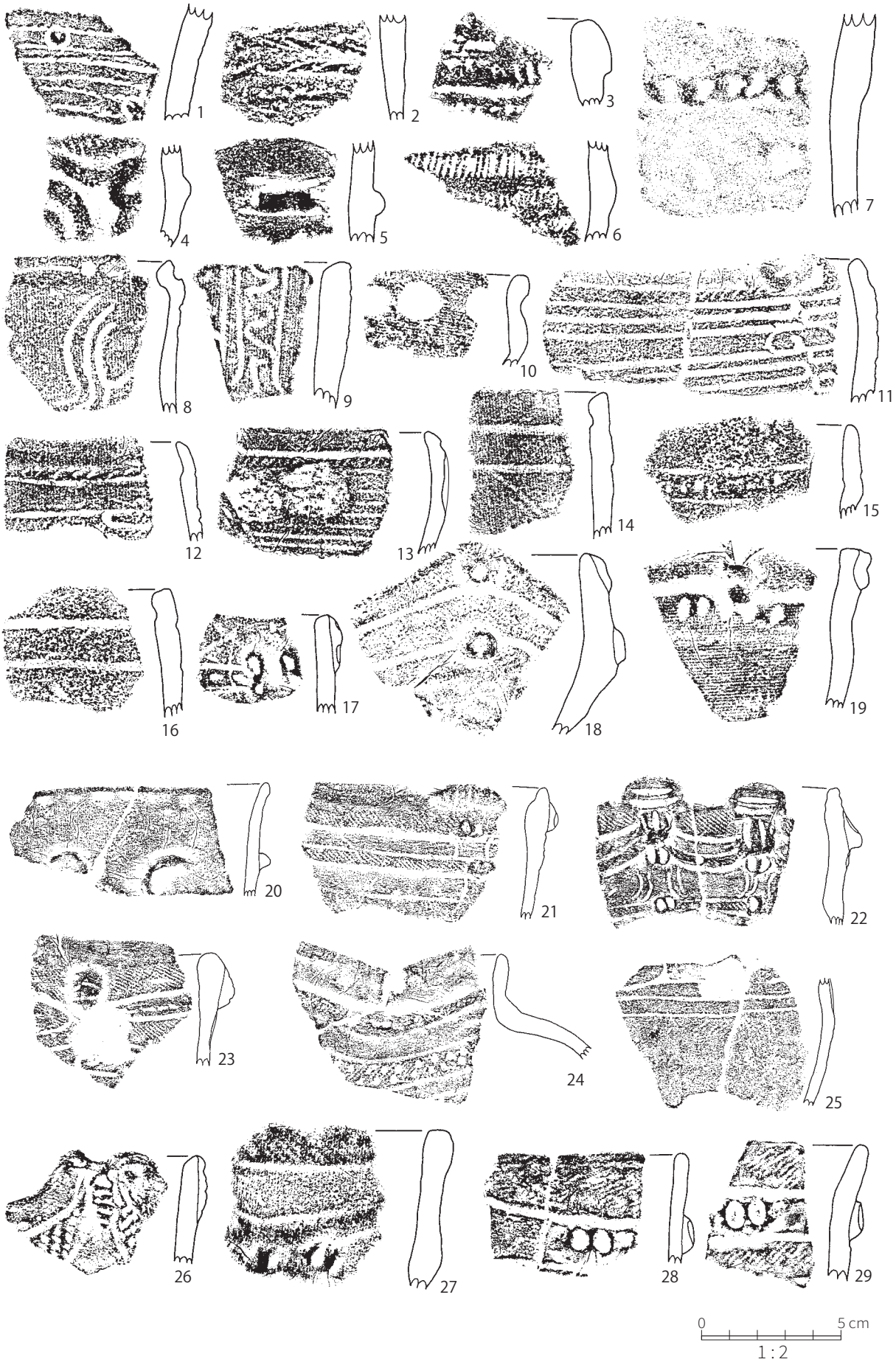


第６図　２号住居跡出土土器（3）

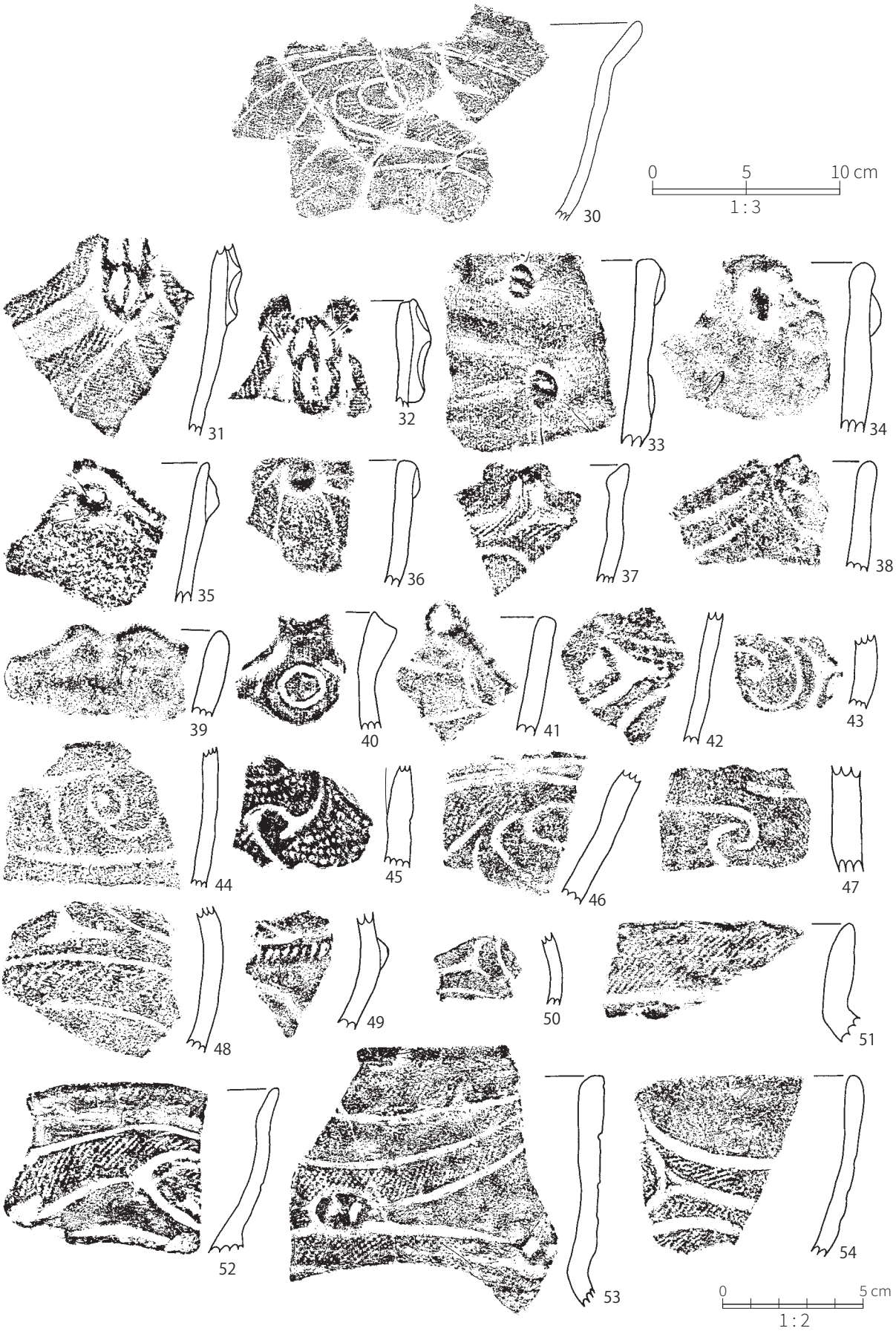


第７図　２号住居跡出土土器（4）

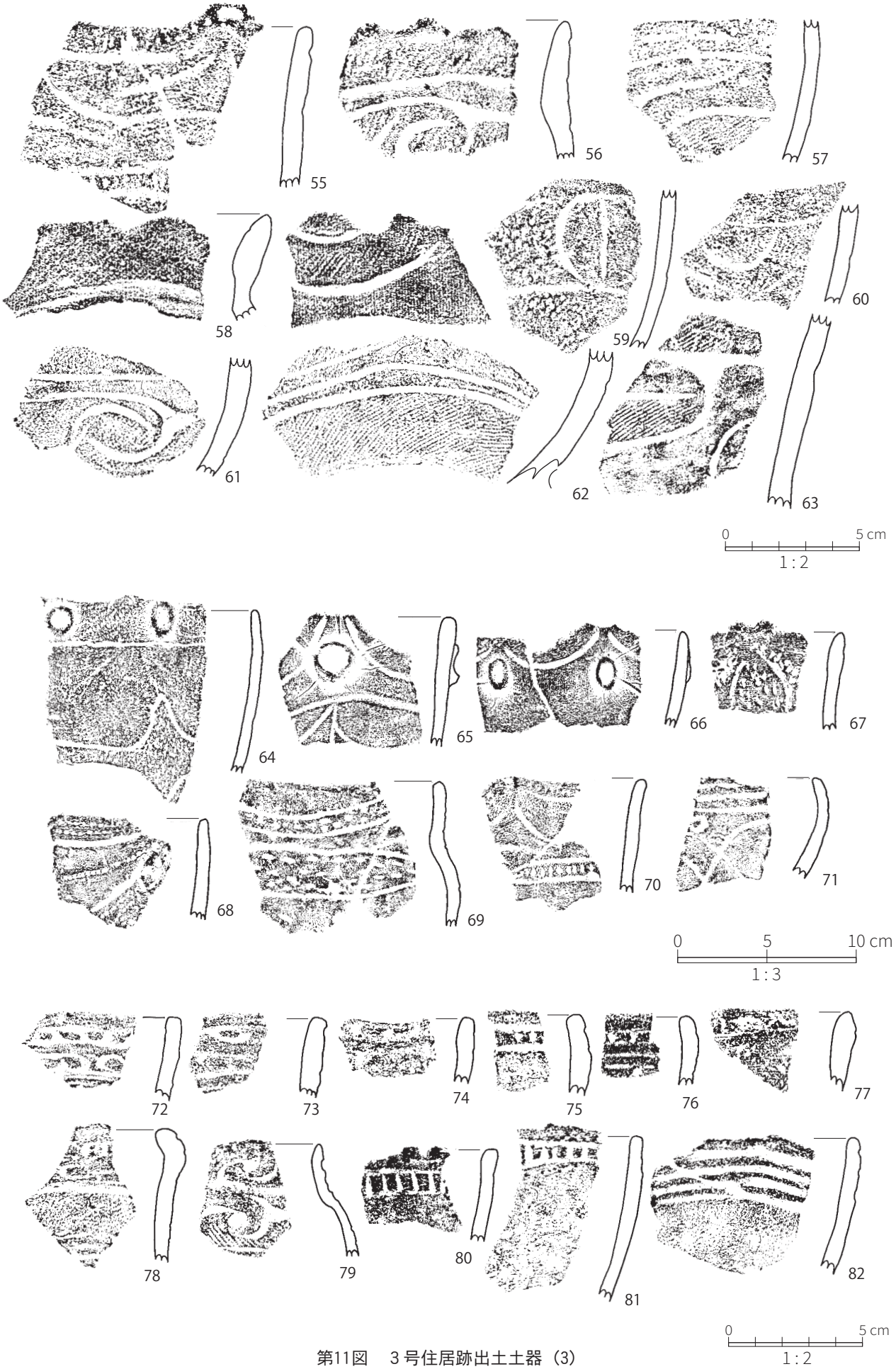
第８図　２号住居跡出土土器（5）



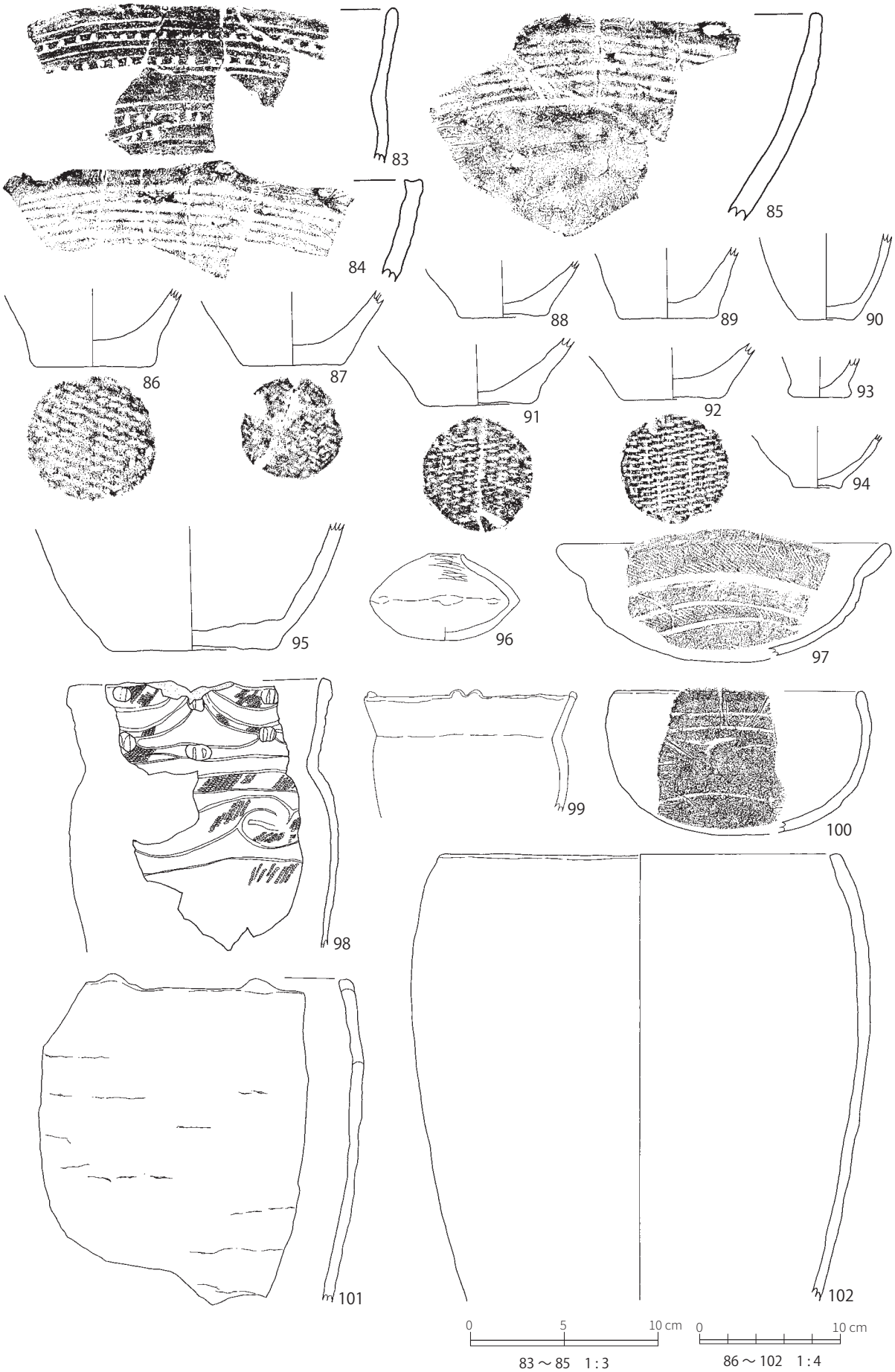
第９図　３号住居跡出土土器（1）



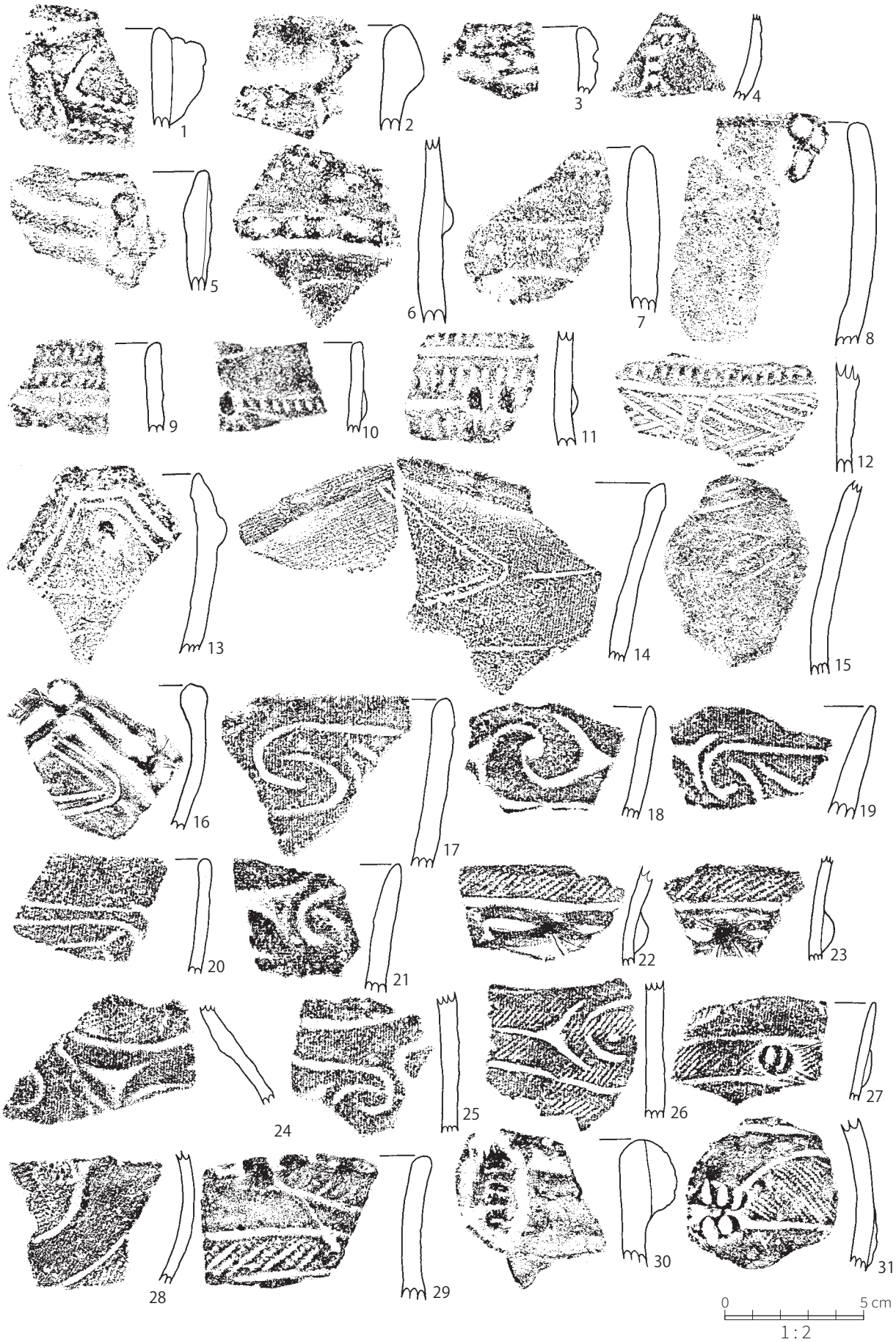
第10図　３号住居跡出土土器（2）



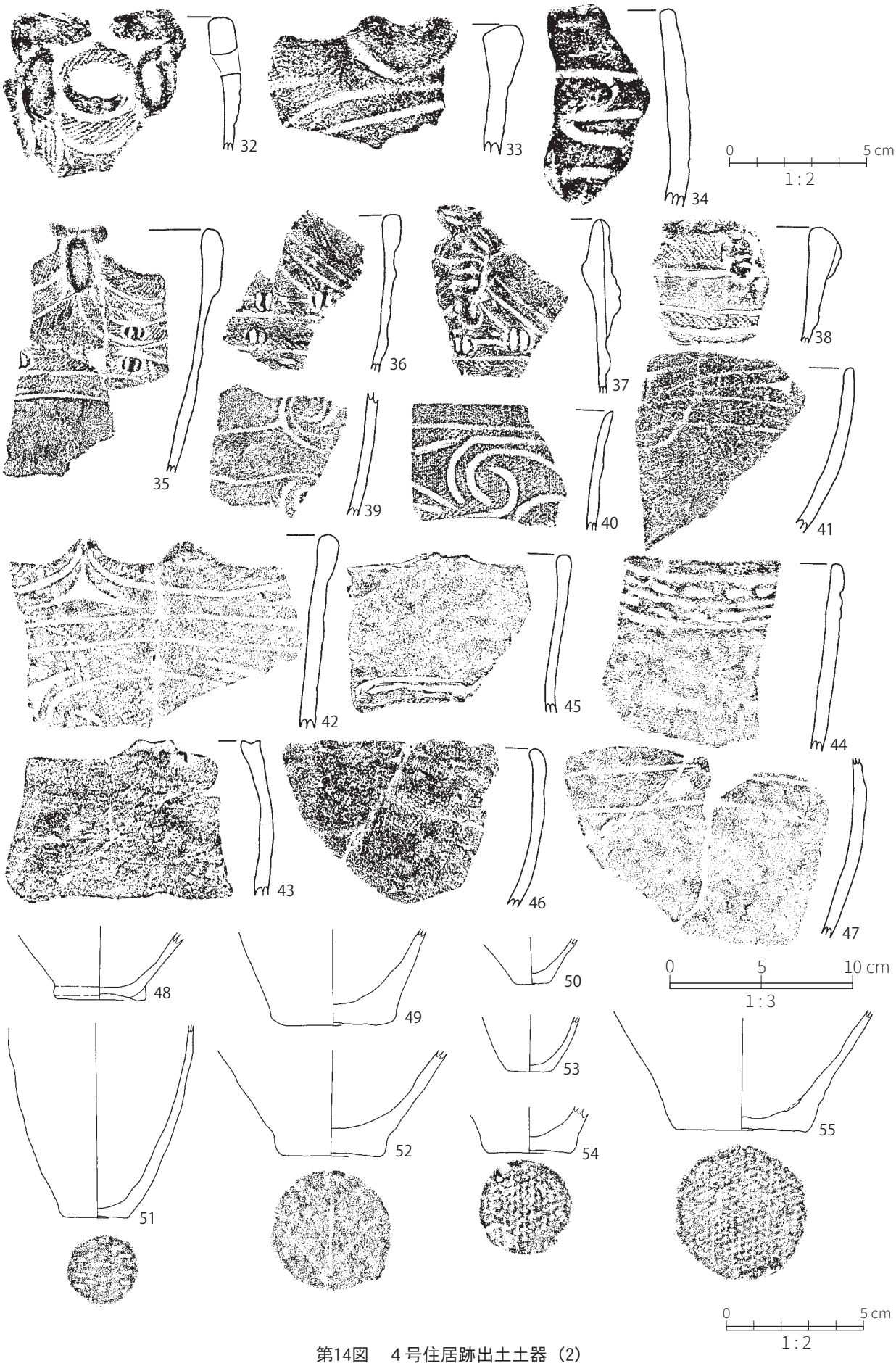
第11図　３号住居跡出土土器（3）



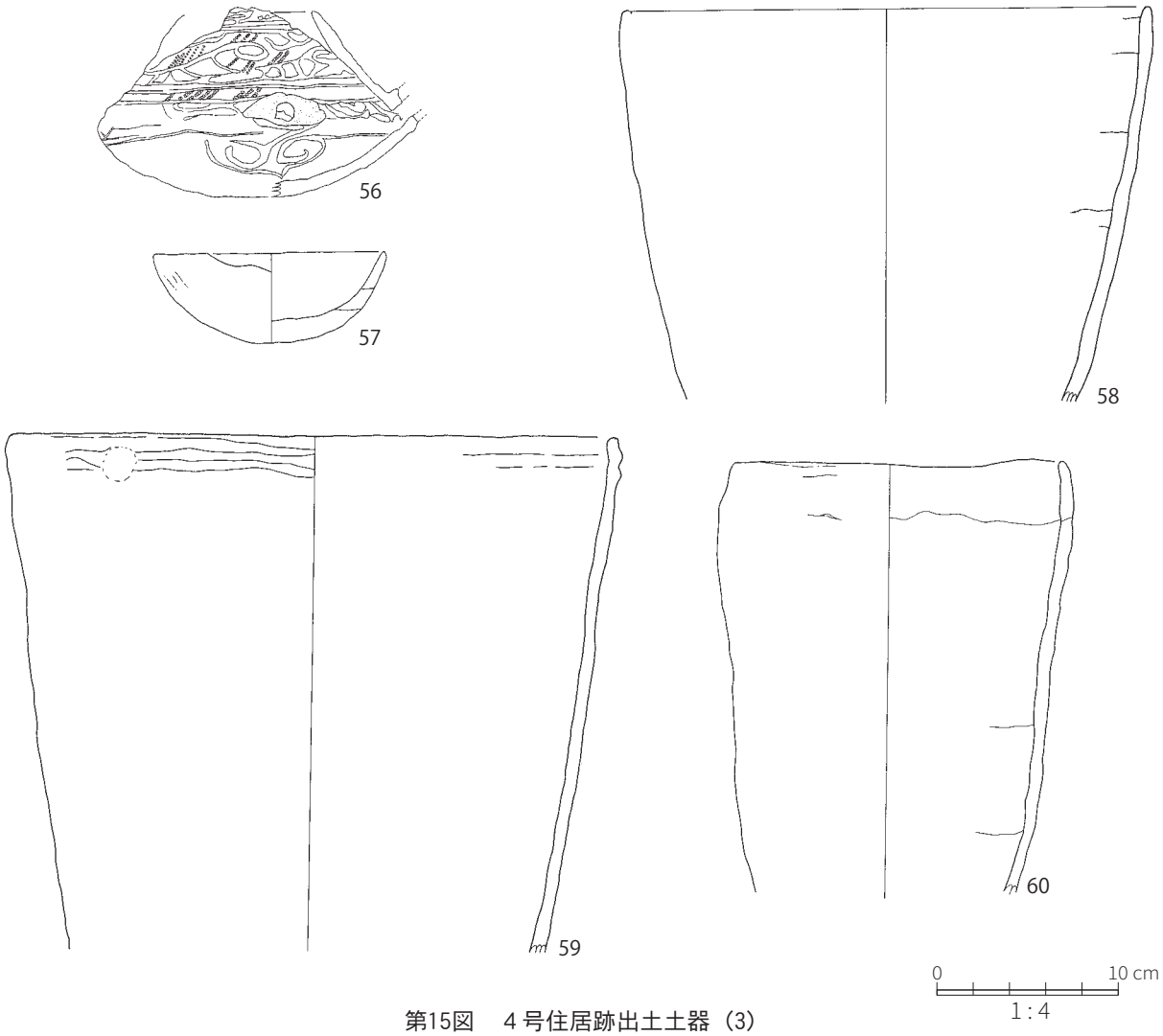
第12図　３号住居跡出土土器（4）



第13図　４号住居跡出土土器（1）

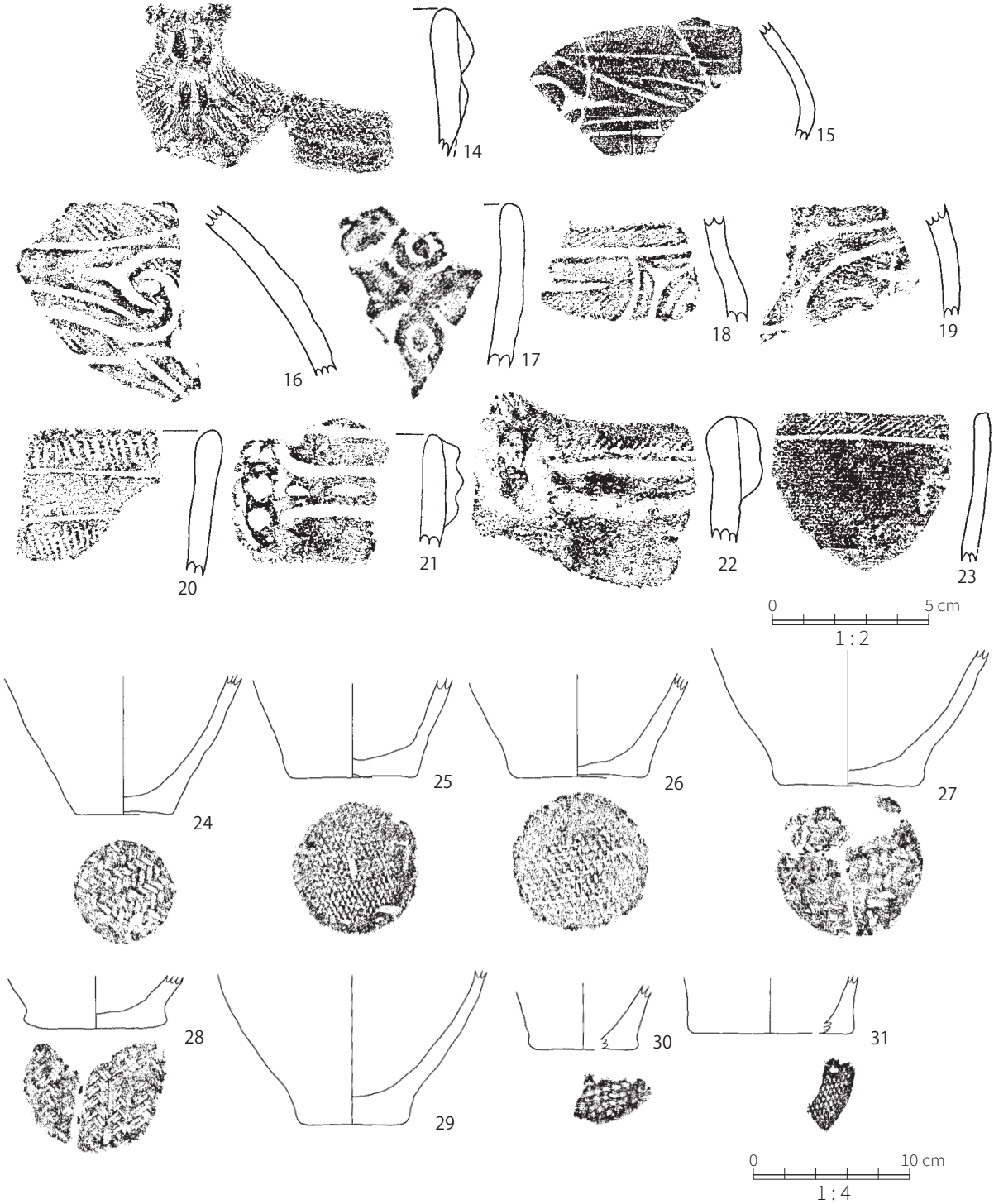


第14図　４号住居跡出土土器（2）

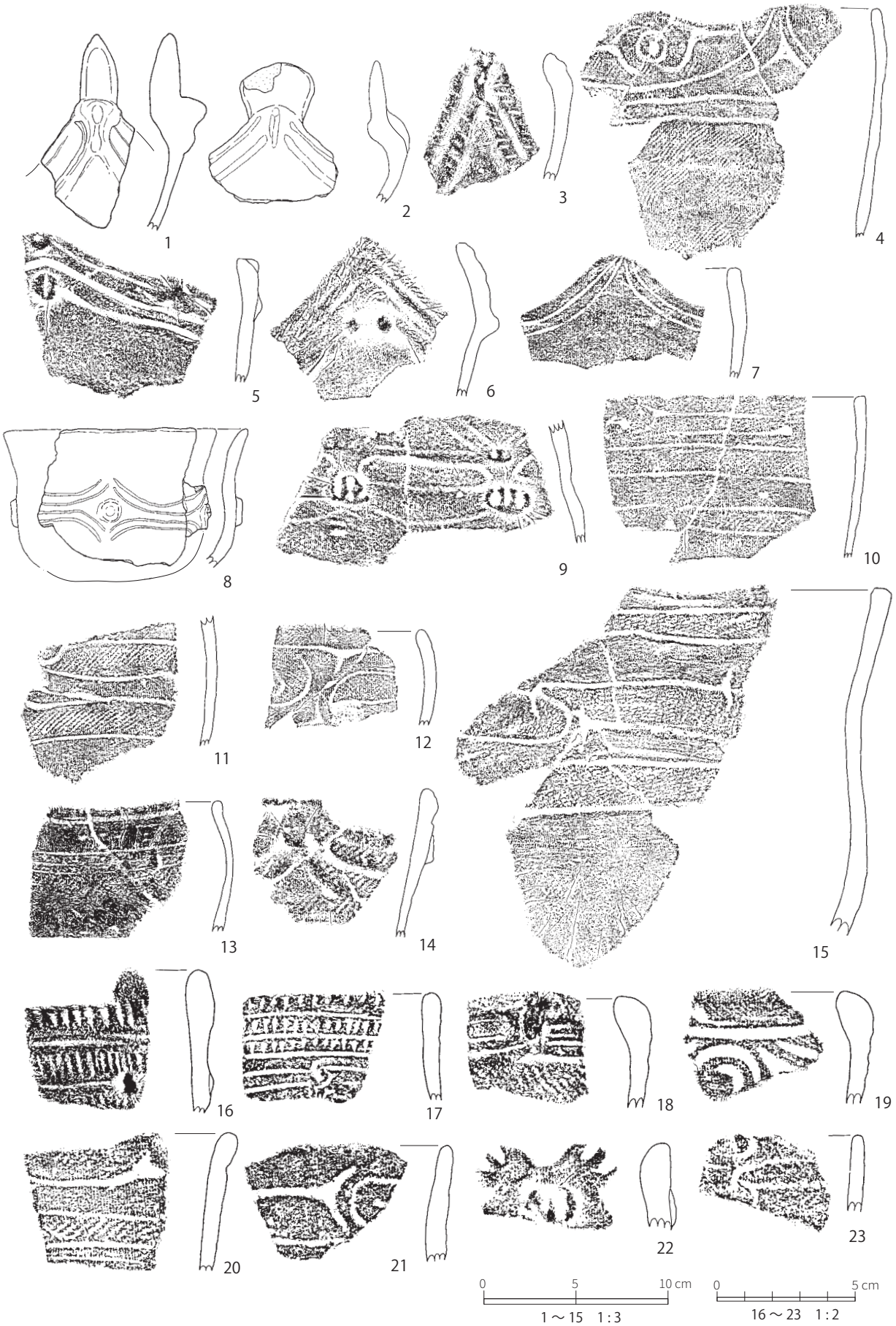


第15図　４号住居跡出土土器（3）

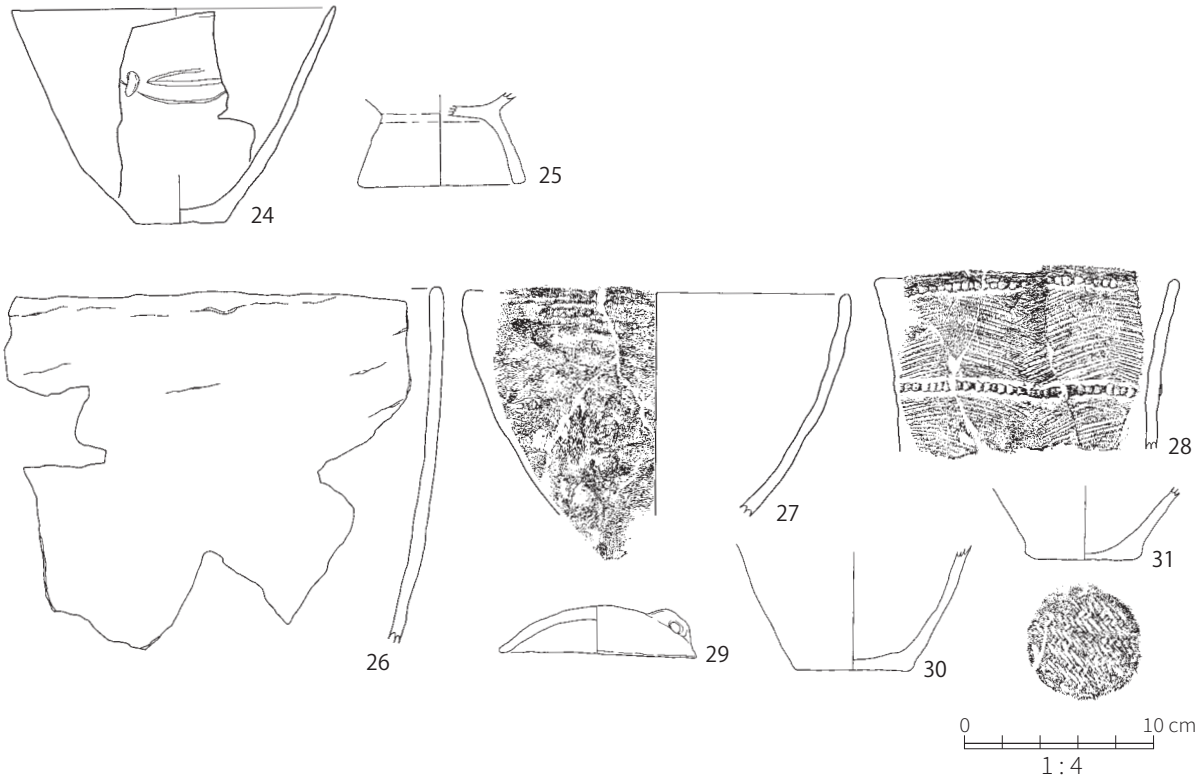
第16図　５号・６号住居跡出土土器（1）



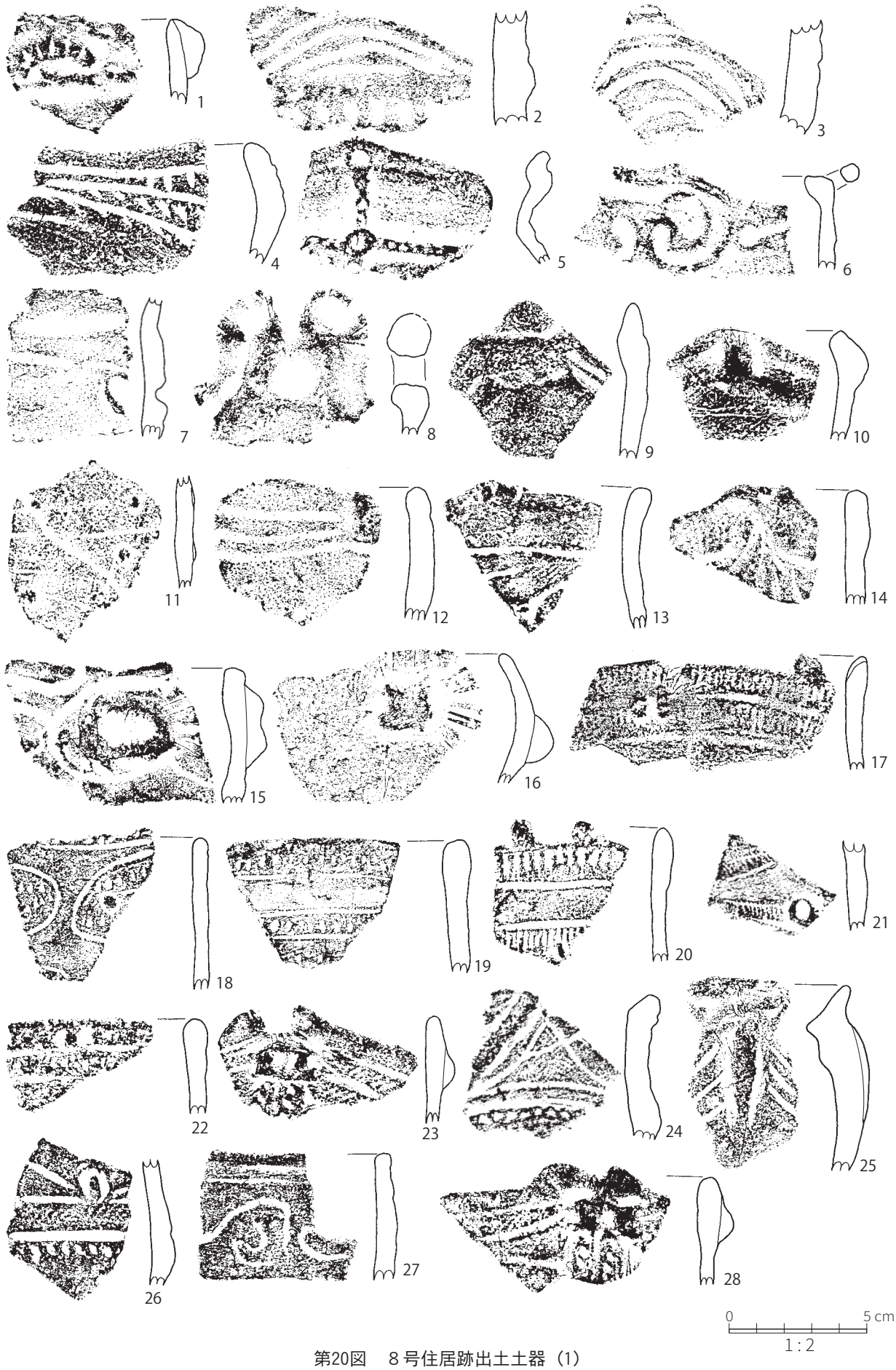
第17図　6号住居跡出土土器（2）



第18図　７号住居跡出土土器（1）

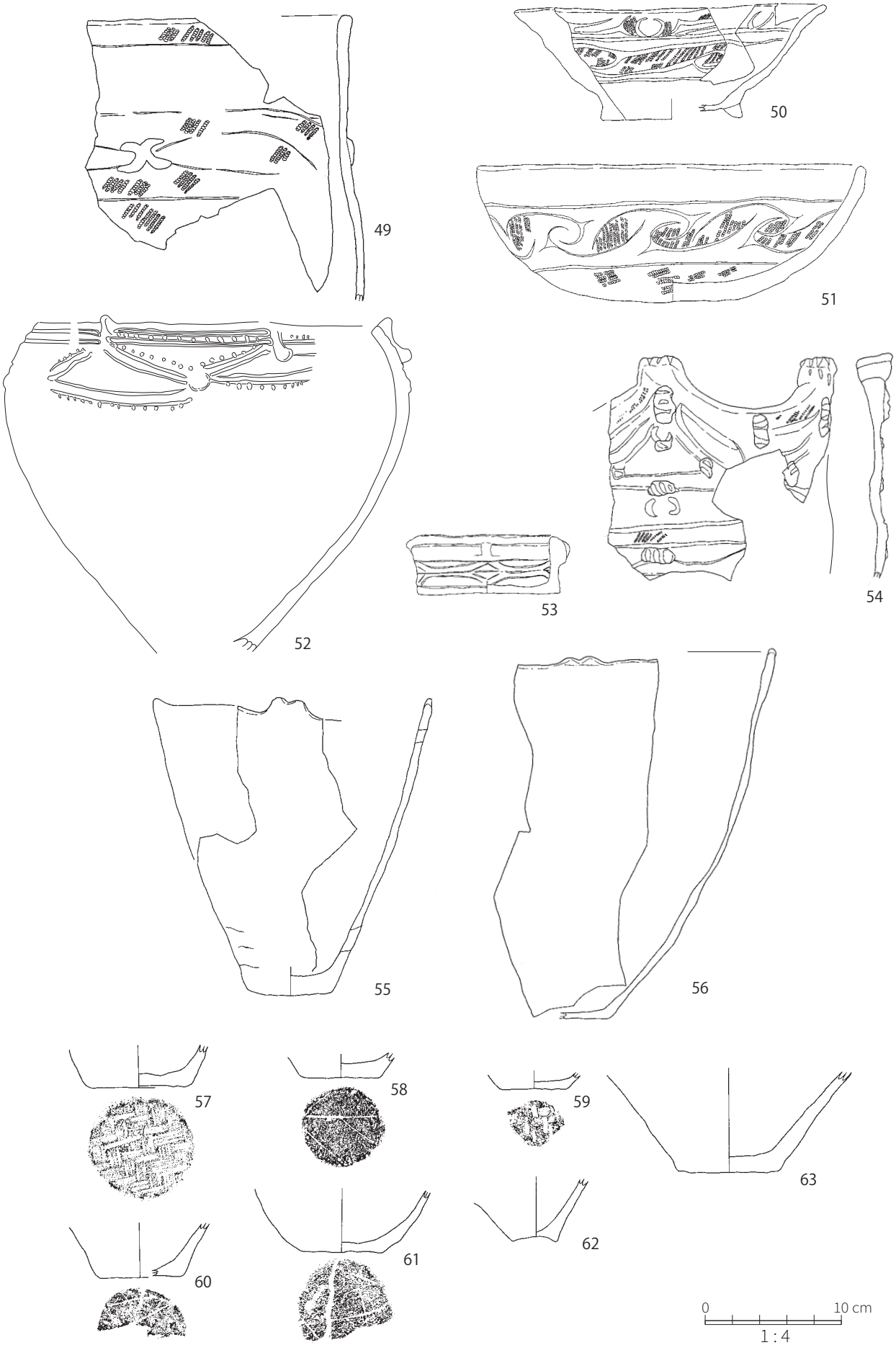


第19図　７号住居跡出土土器（2）

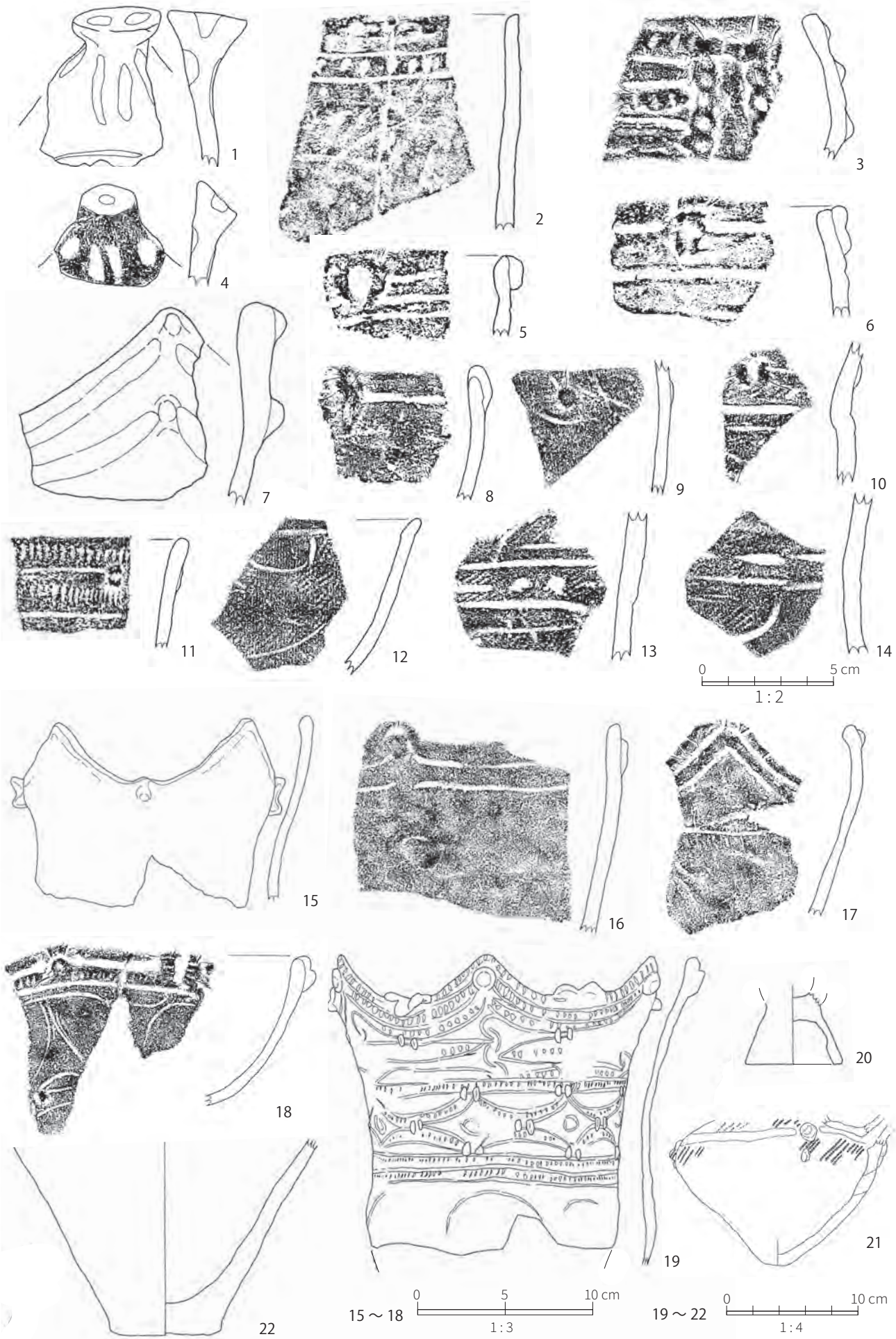


第20図　８号住居跡出土土器（1）

第21図　８号住居跡出土土器（2）



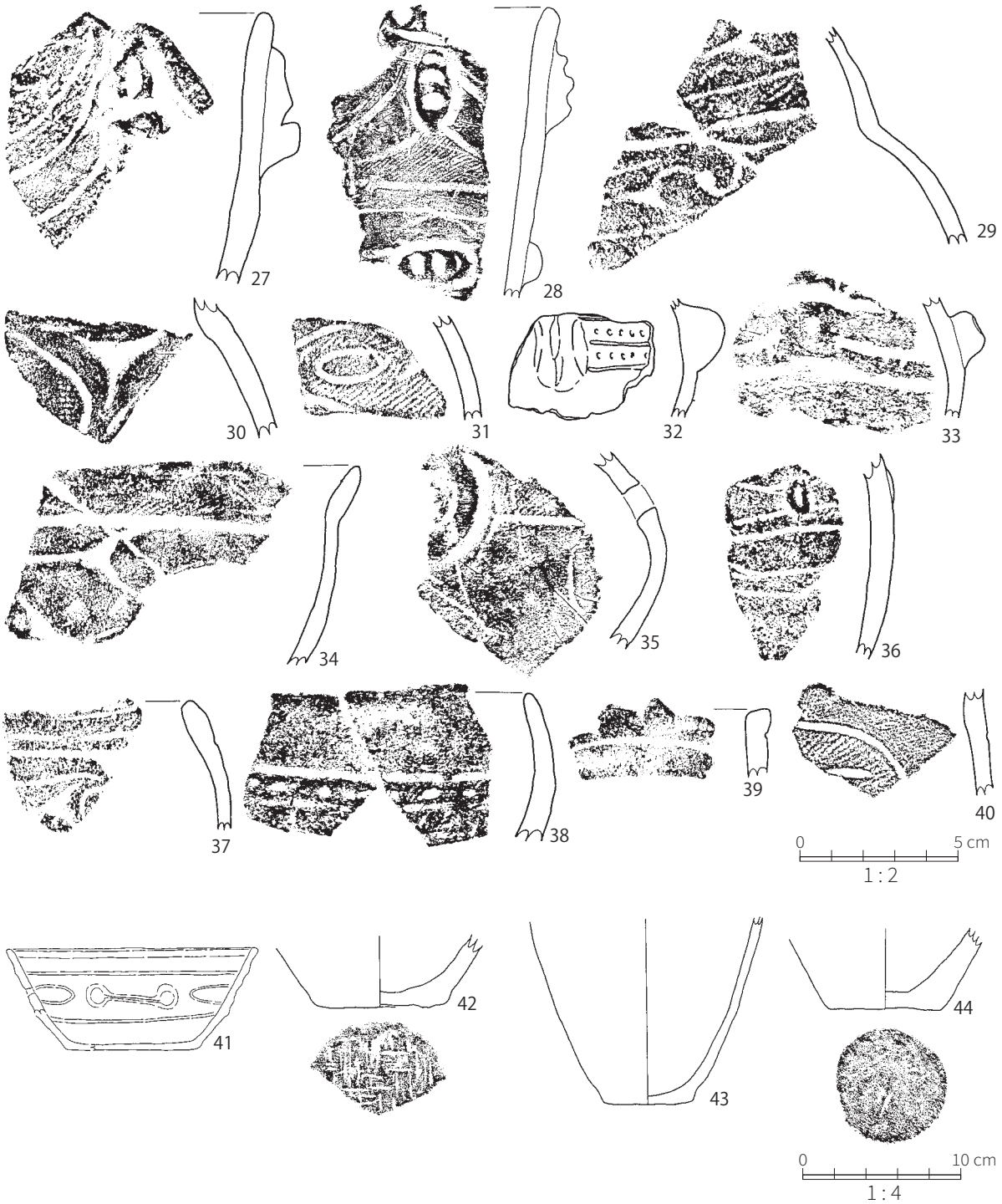
第22図　８号住居跡出土土器（3）



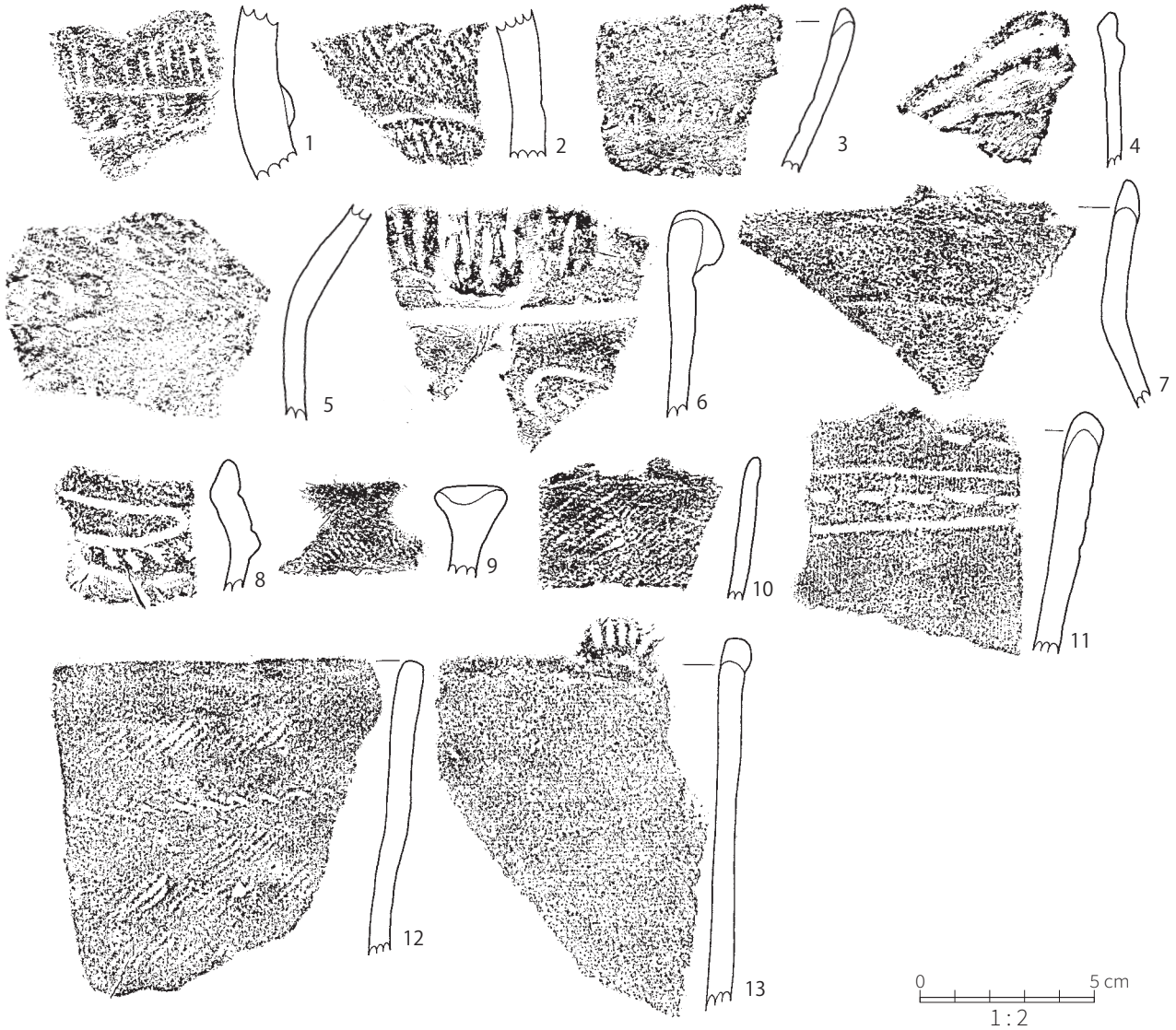
第23図　９号住居跡出土土器

第24図　11号住居跡出土土器

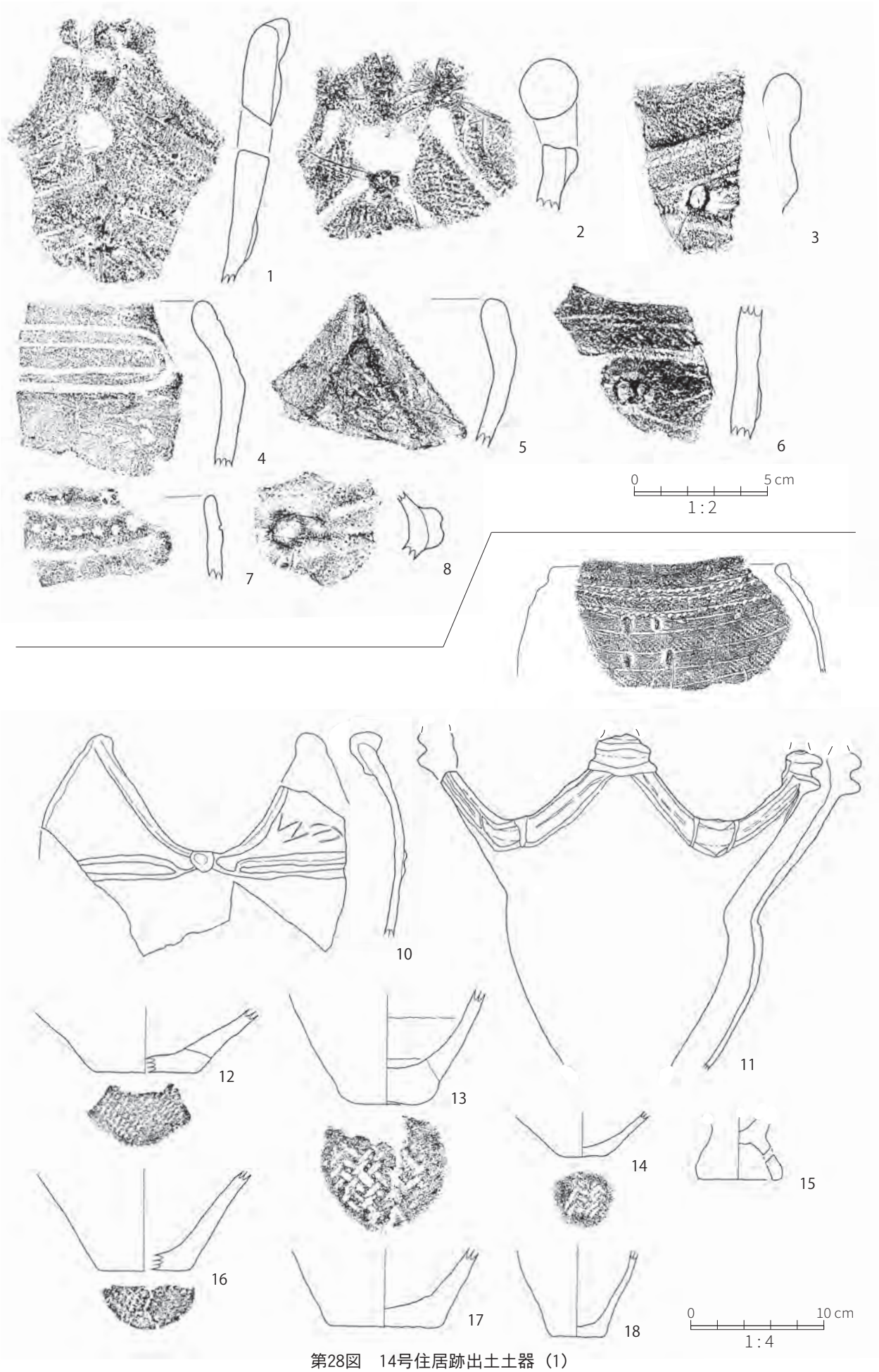
第25図　12号住居跡出土土器（1）



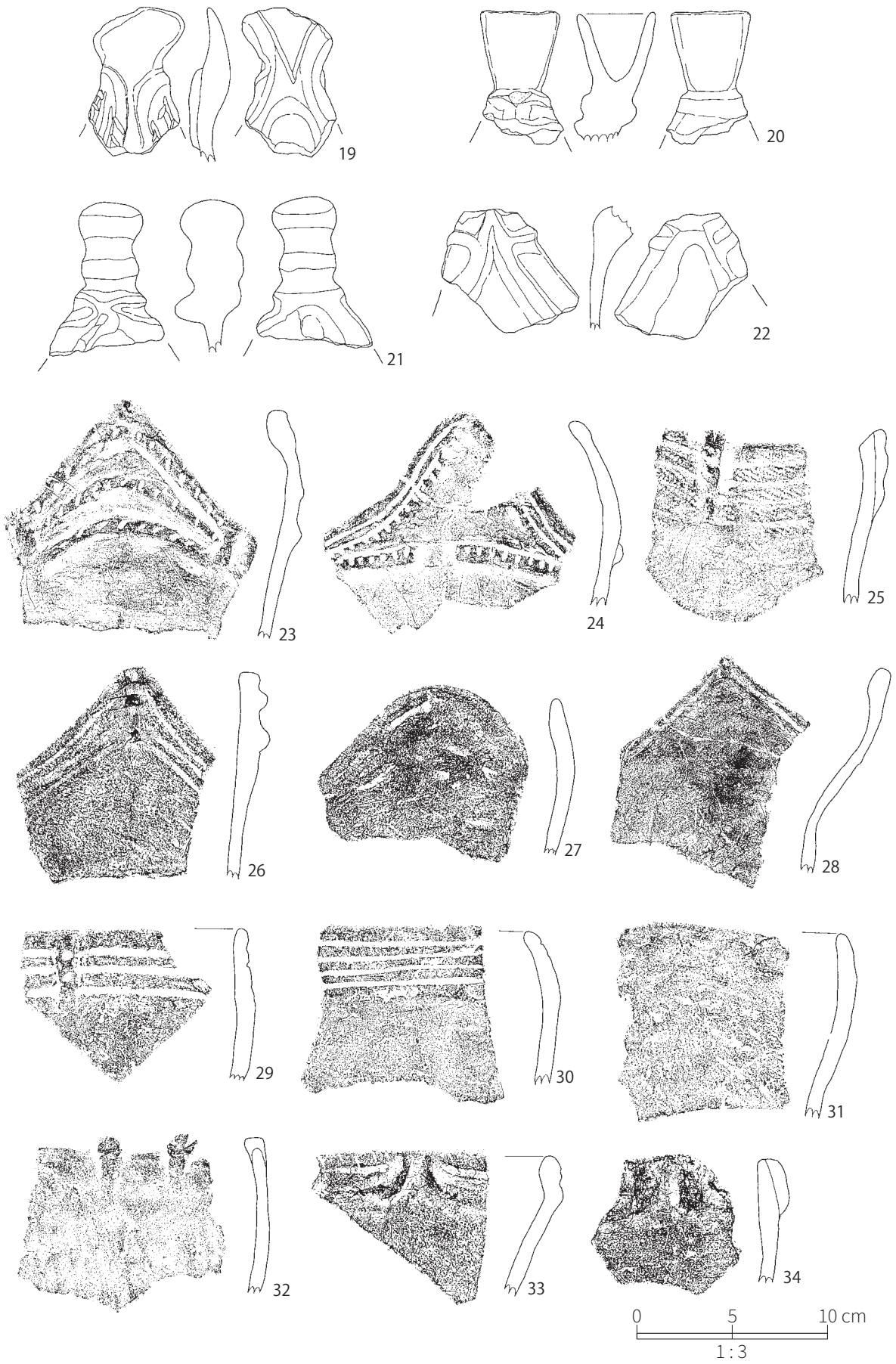
第26図　12号住居跡出土土器（2）



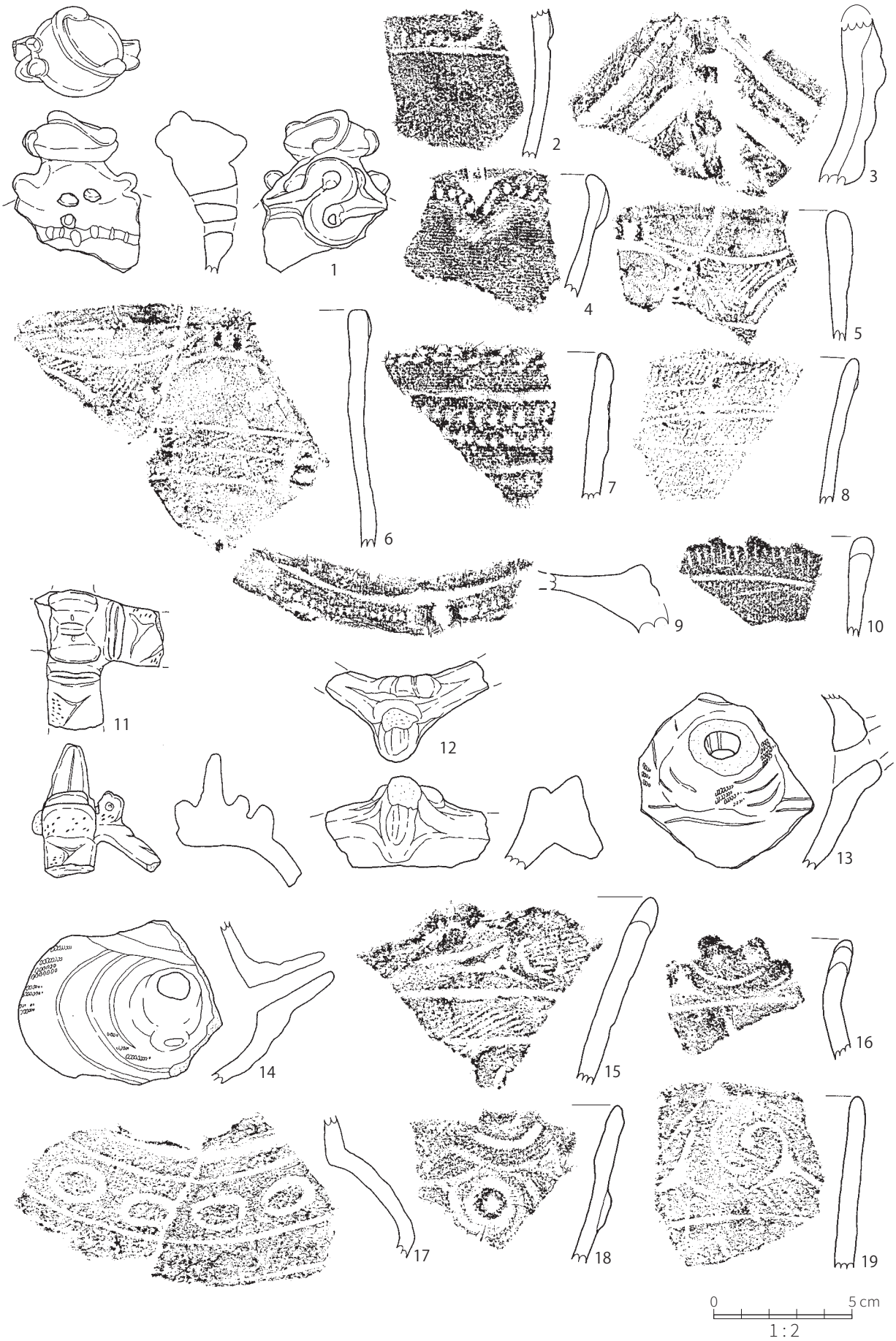
第27図　13号住居跡出土土器



第28図　14号住居跡出土土器（1）

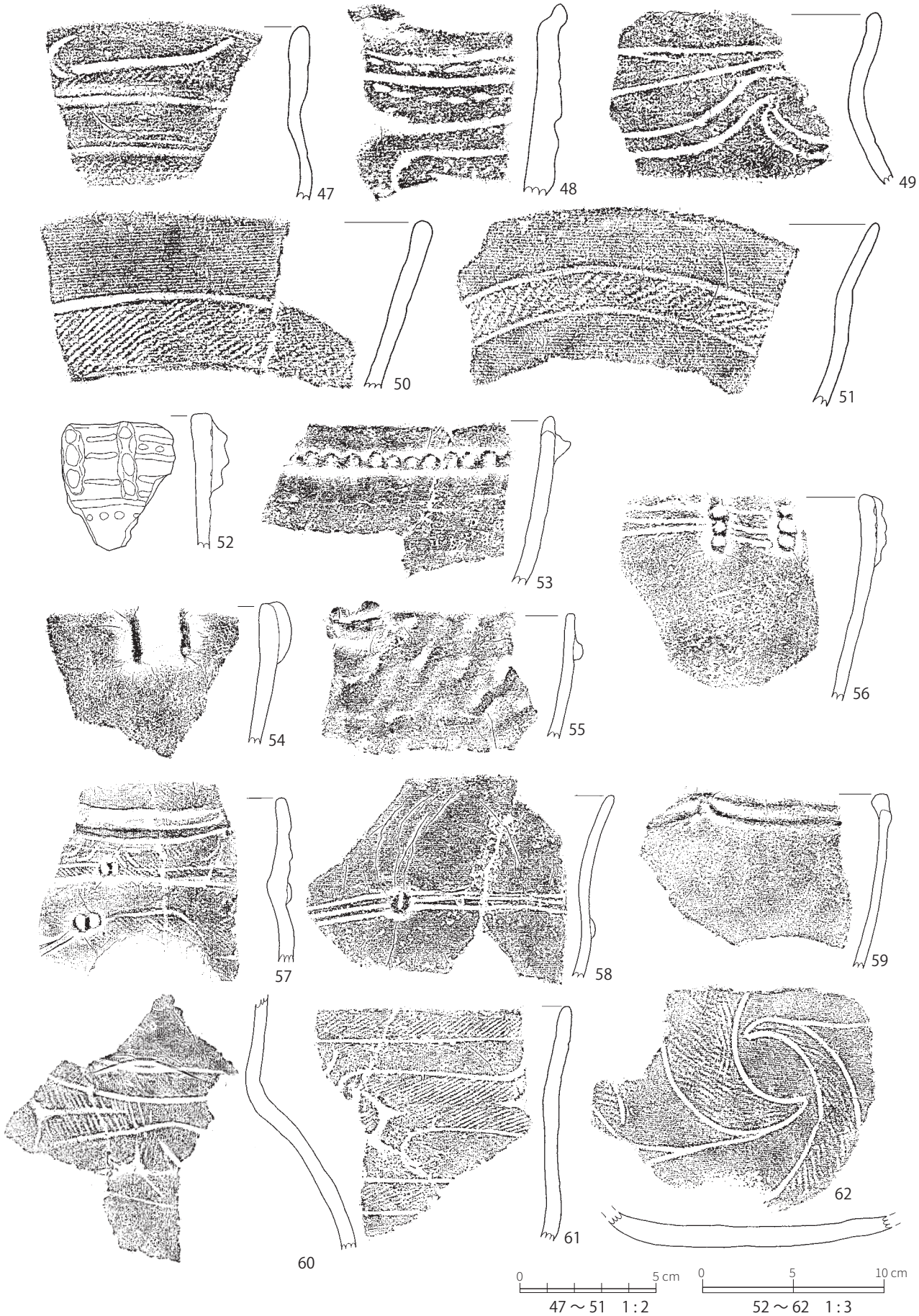


第29図　14号住居跡出土土器（2）

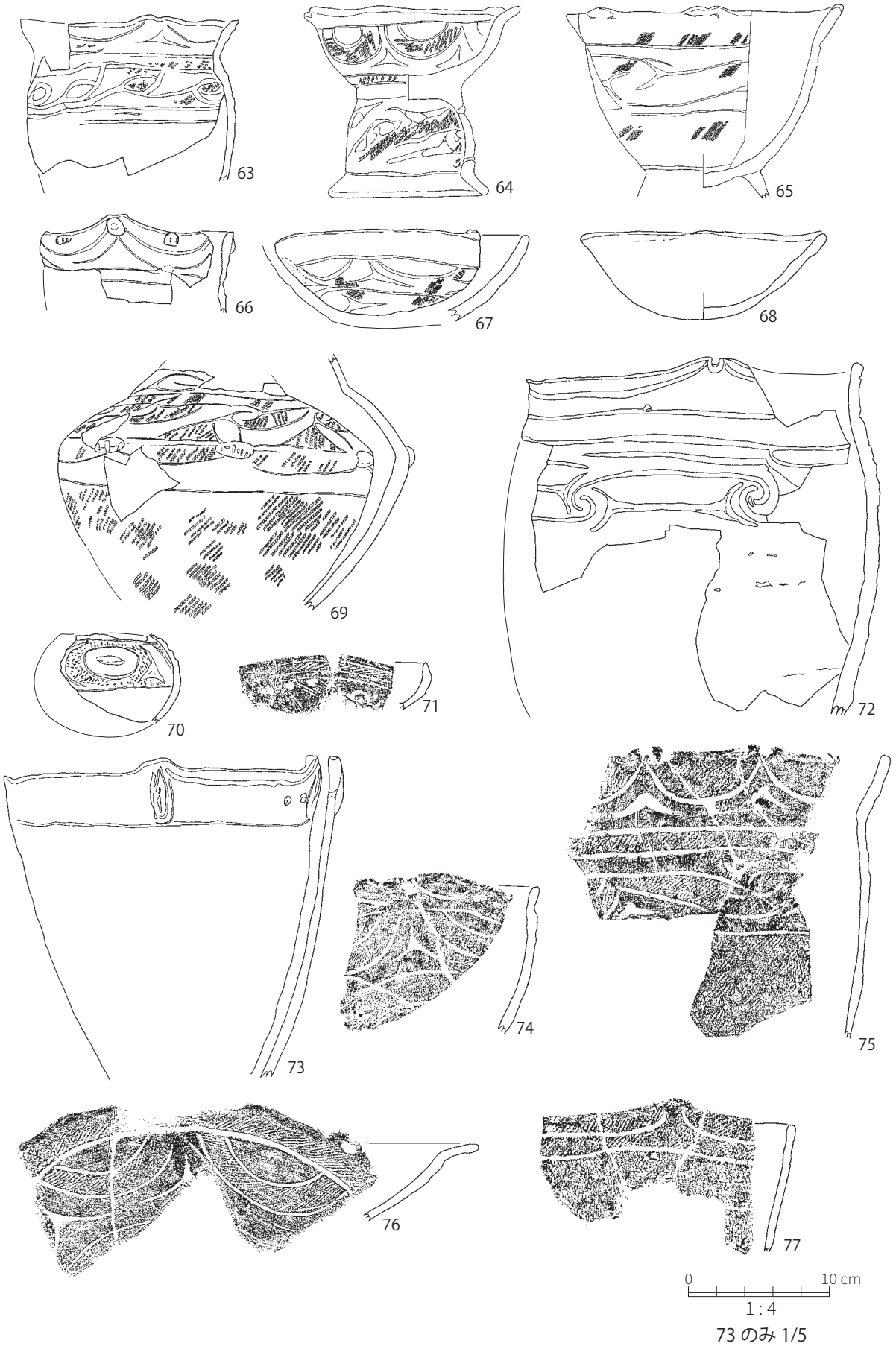


第30図　15号住居跡出土土器（1）

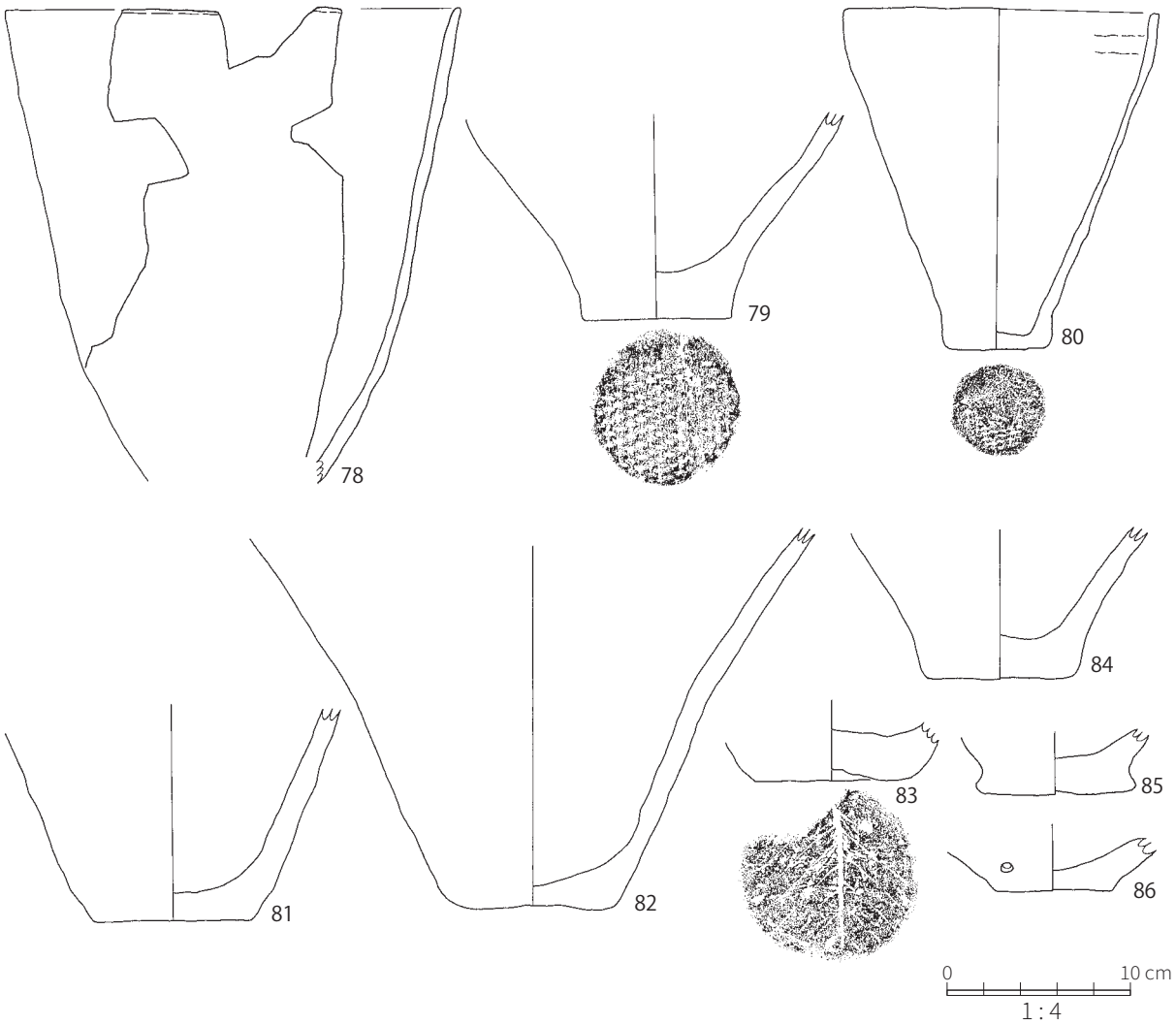
第31図　15号住居跡出土土器（2）



第32図　15号住居跡出土土器（3）

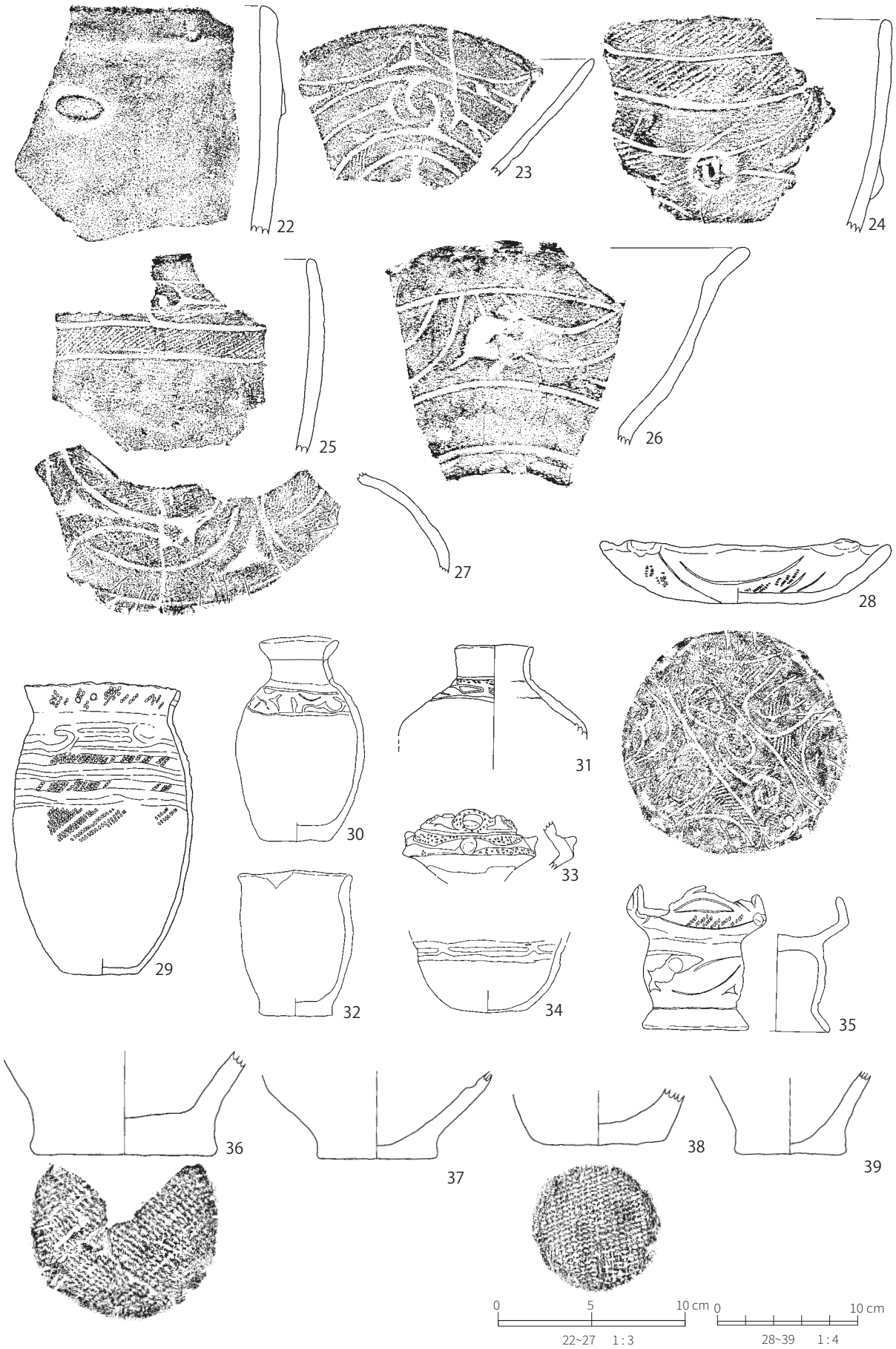


第33図　15号住居跡出土土器（4）

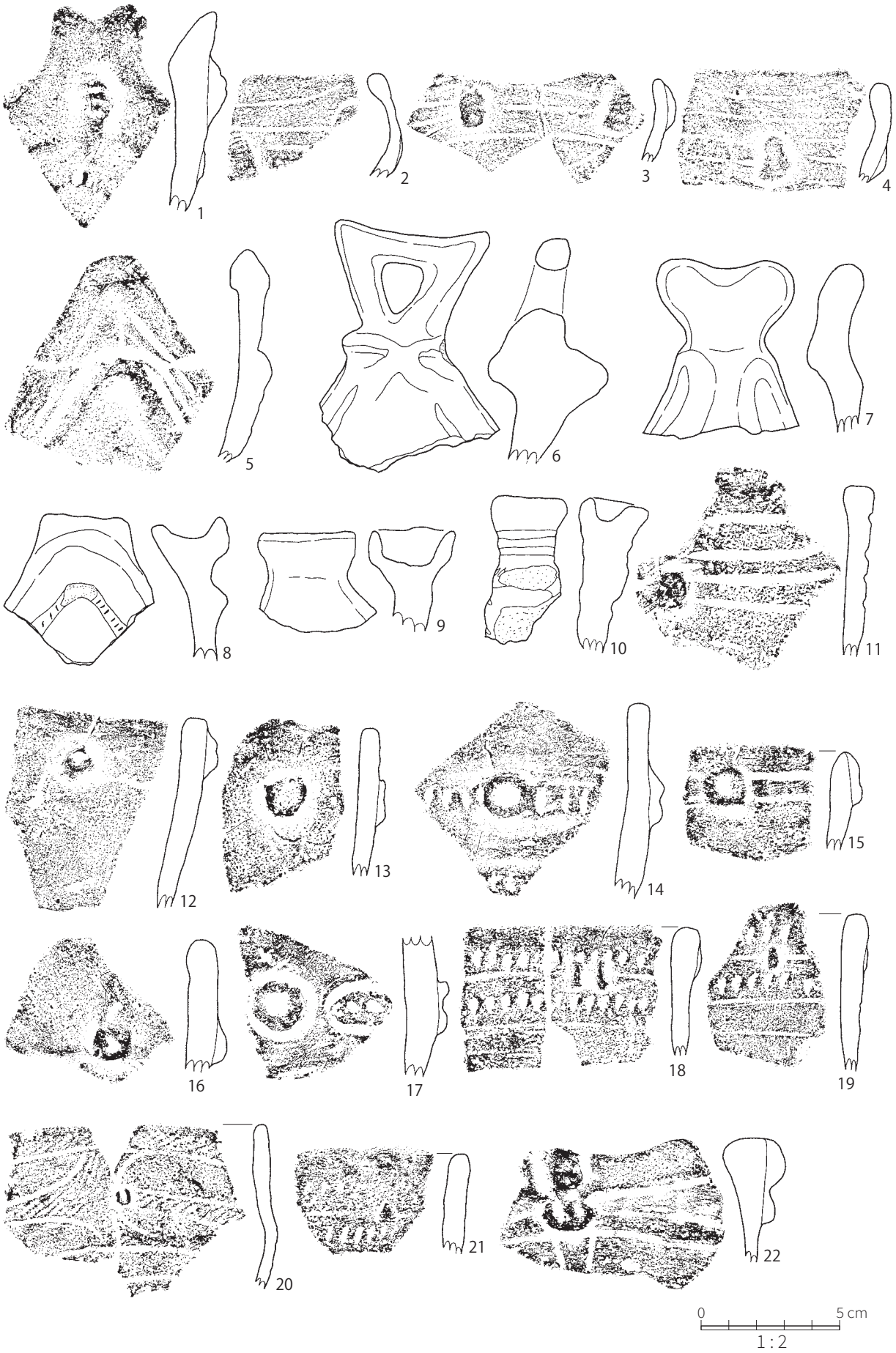


第34図　15号住居跡出土土器（5）

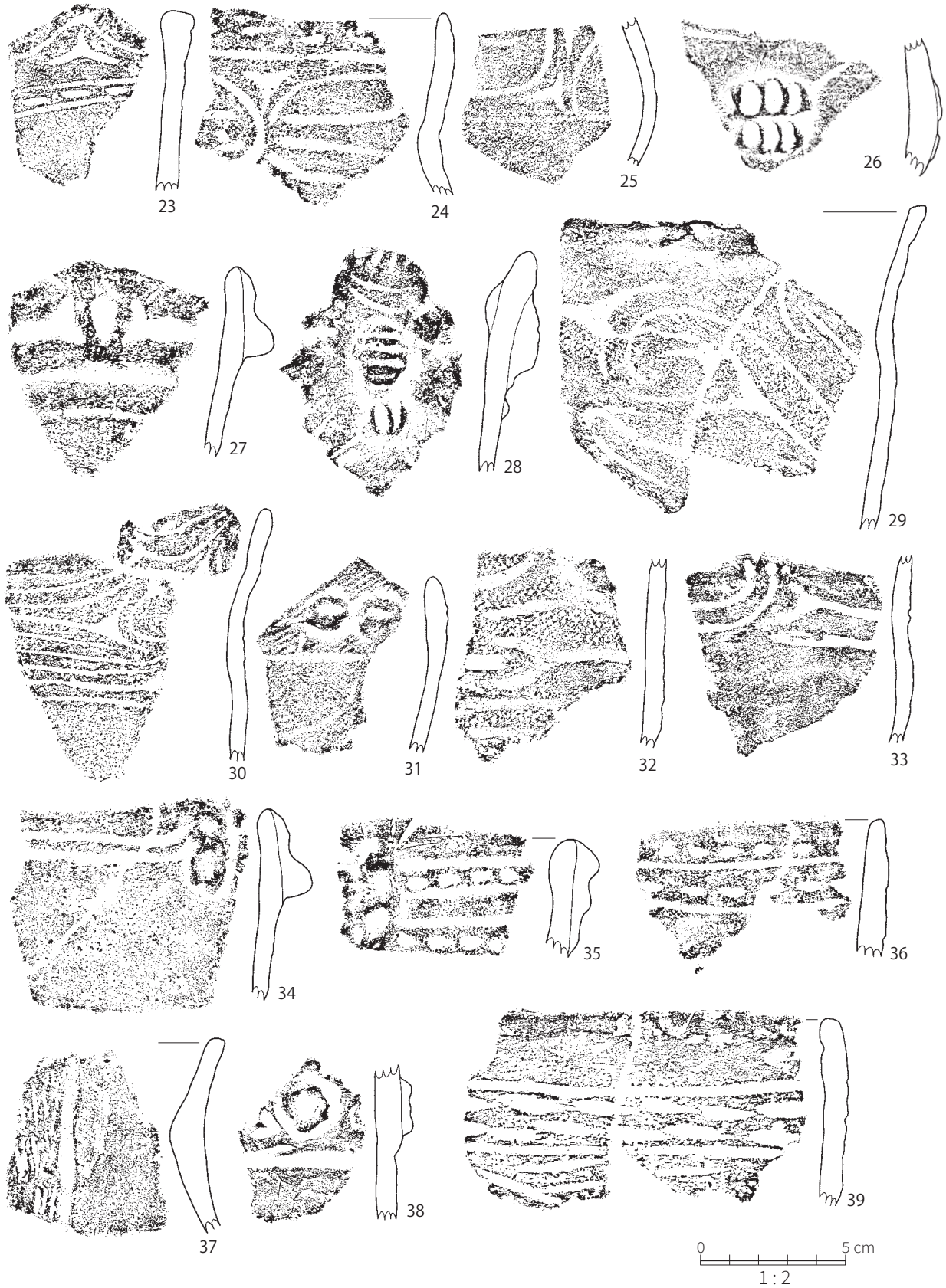
第35図　16号住居跡出土土器（1）



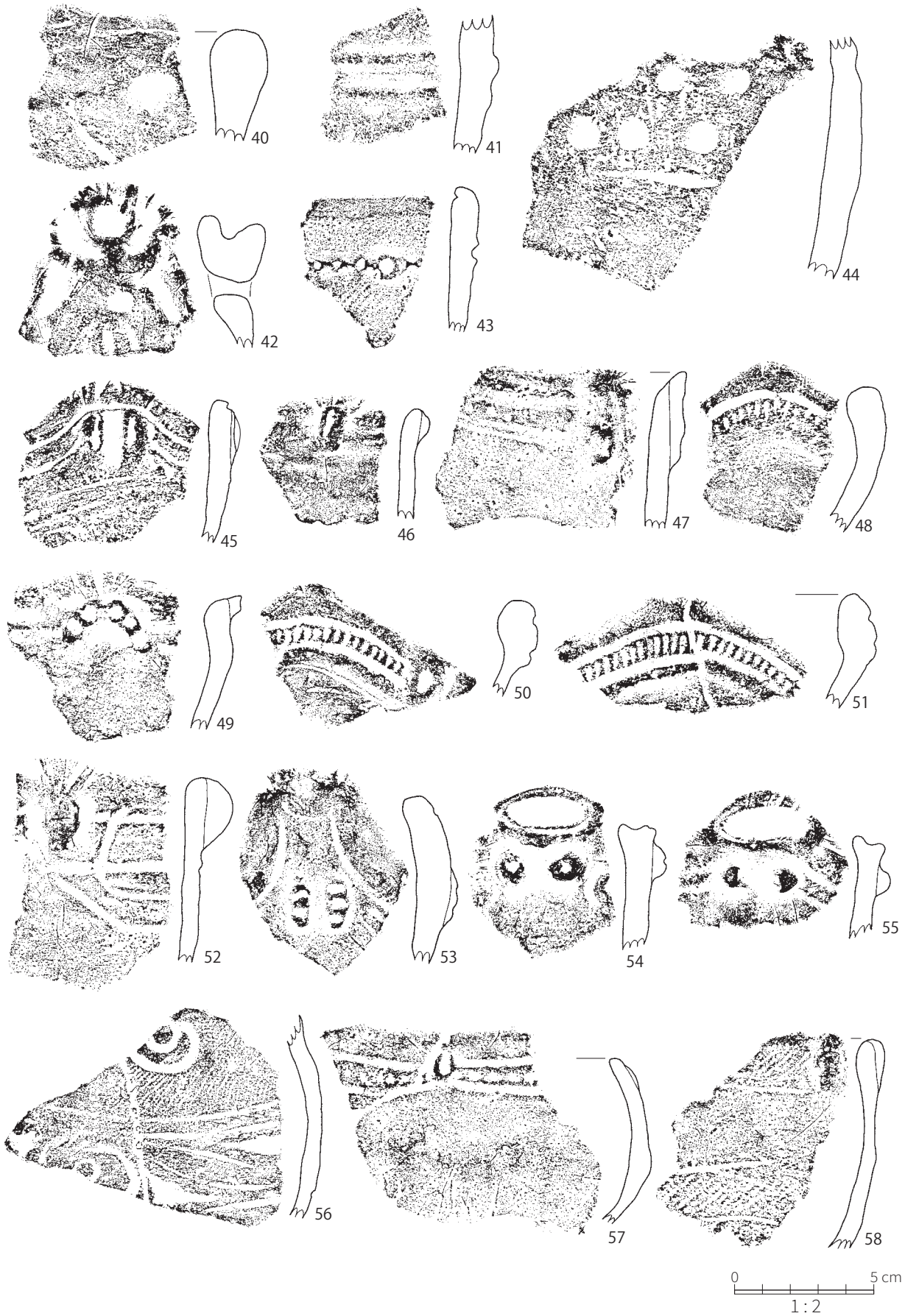
第36図　16号住居跡出土土器（2）



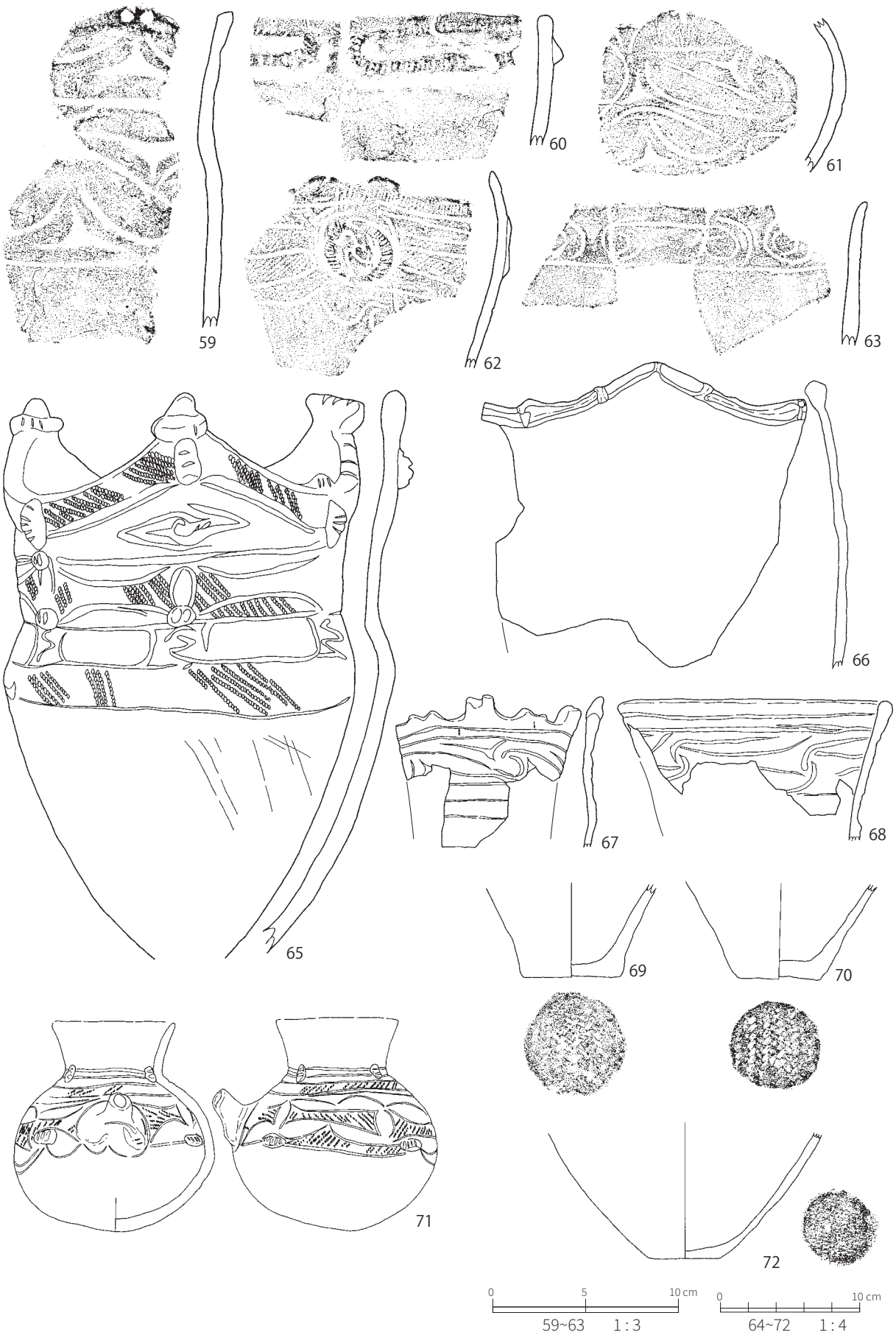
第37図　17号住居跡出土土器（1）



第38図　17号住居跡出土土器（2）

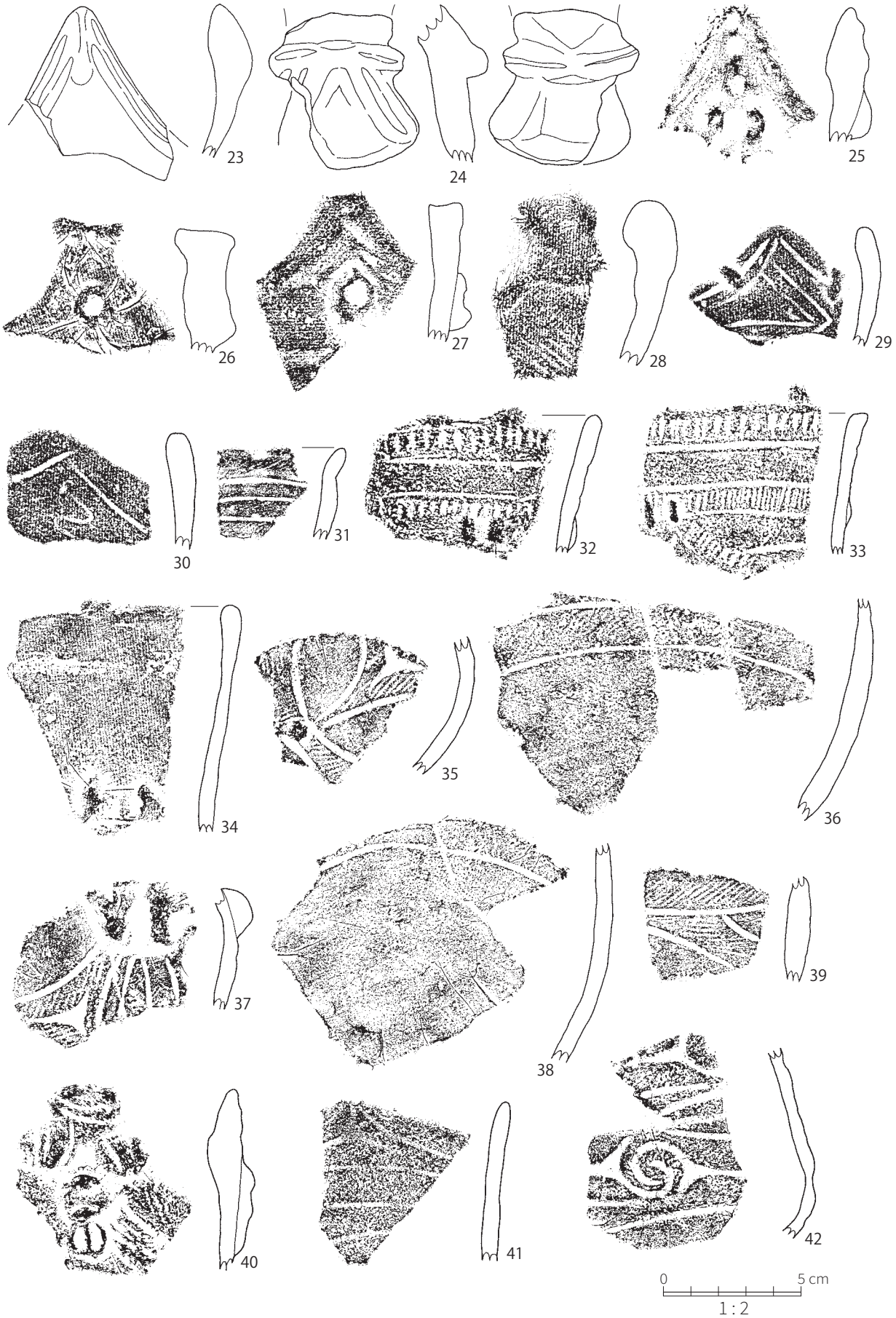


第39図　17号住居跡出土土器（3）

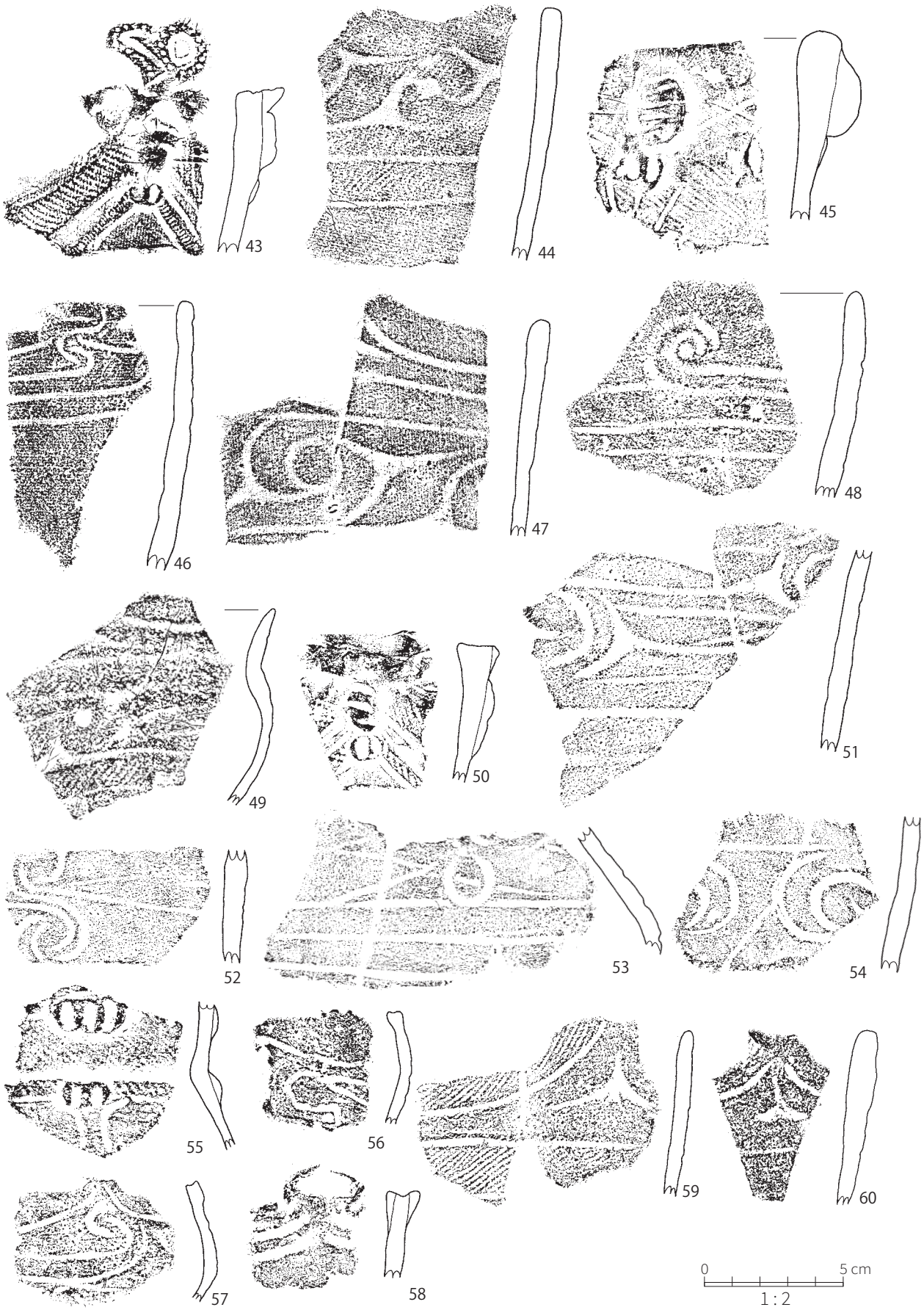


第40図　17号住居跡出土土器（4）

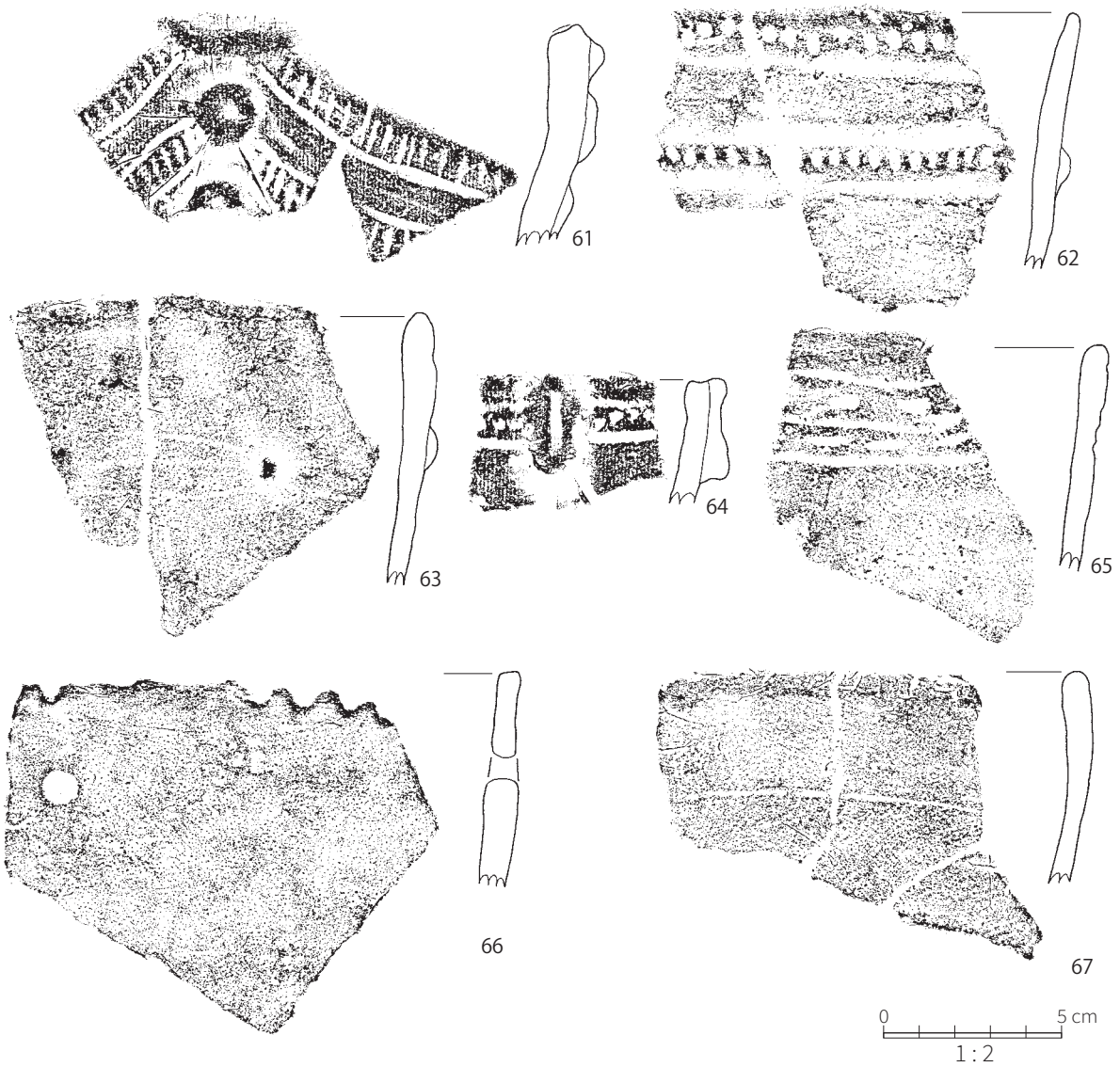
第41図　18号住居跡出土土器（1）



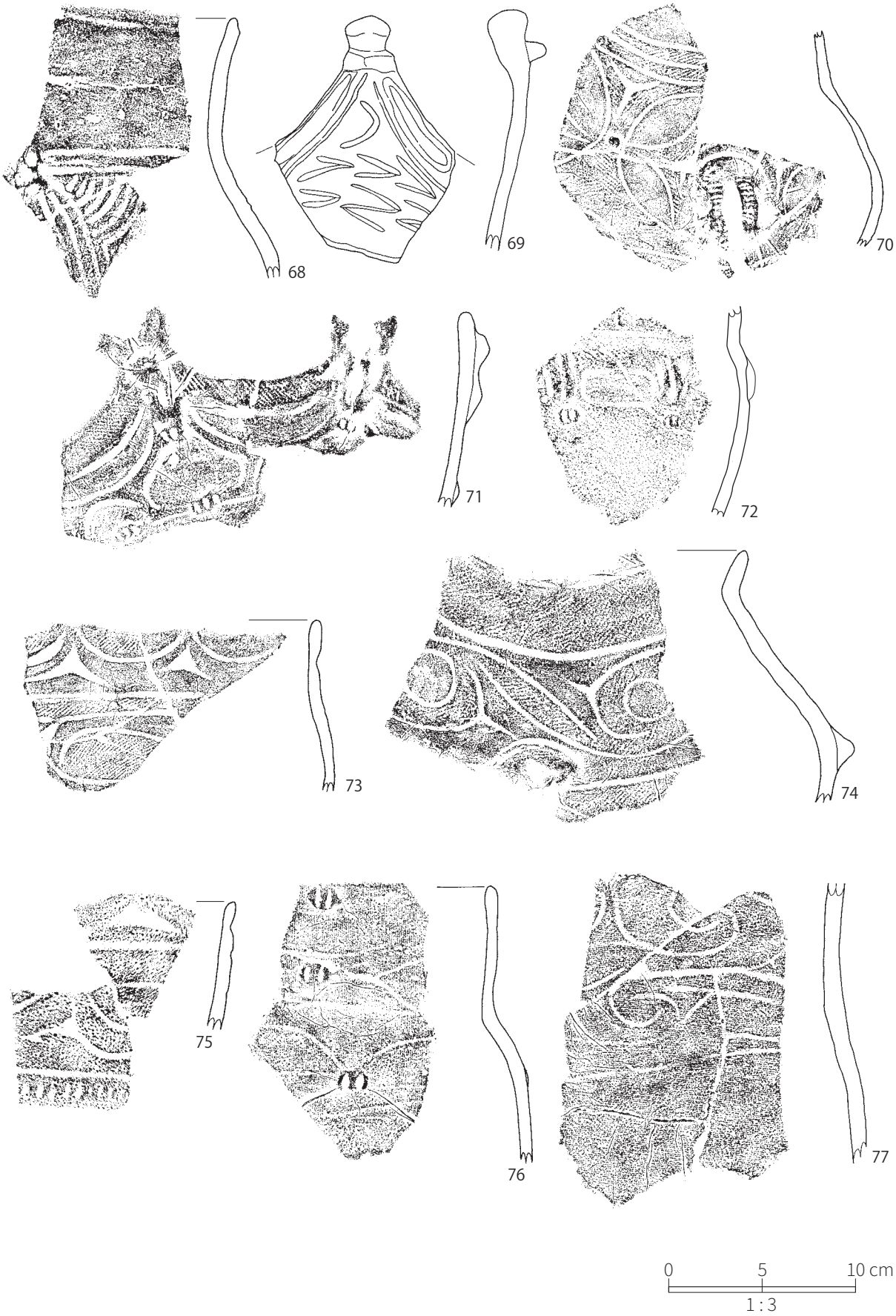
第42図　18号住居跡出土土器（2）



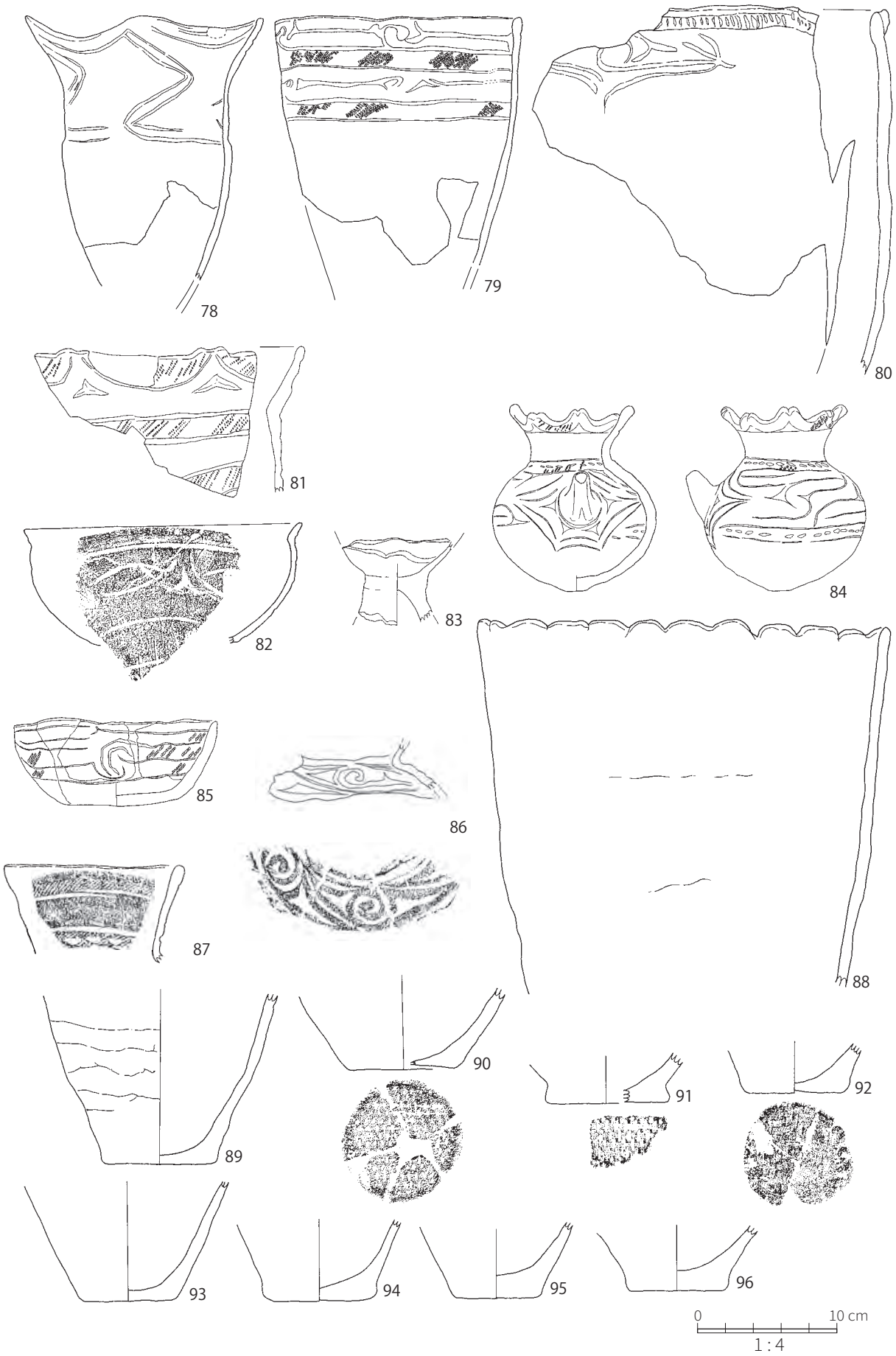
第43図　18号住居跡出土土器（3）



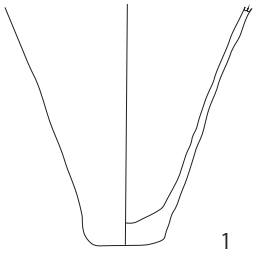
第44図　18号住居跡出土土器（4）



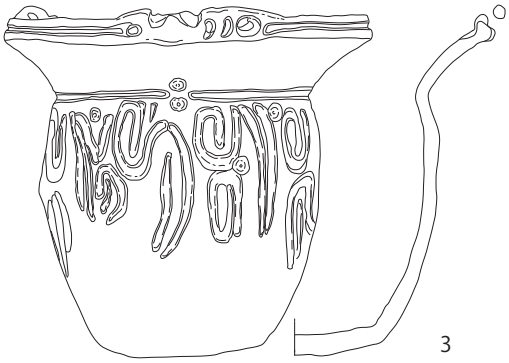
第45図　18号住居跡出土土器（5）



第46図　18号住居跡出土土器（6）

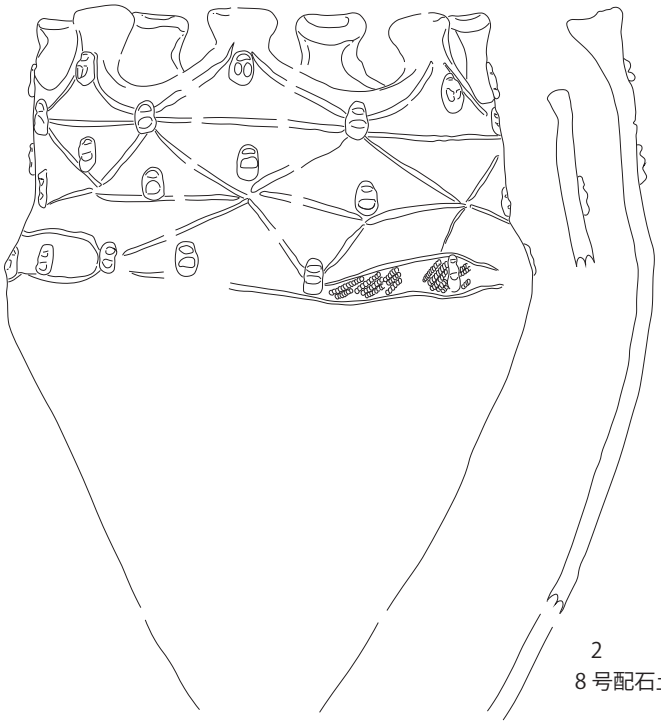


1
3 号配石土坑

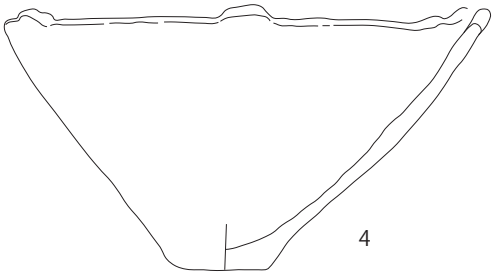


3
5 号土坑

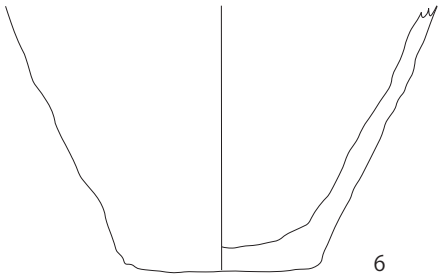
0 5 10 cm
1 : 3



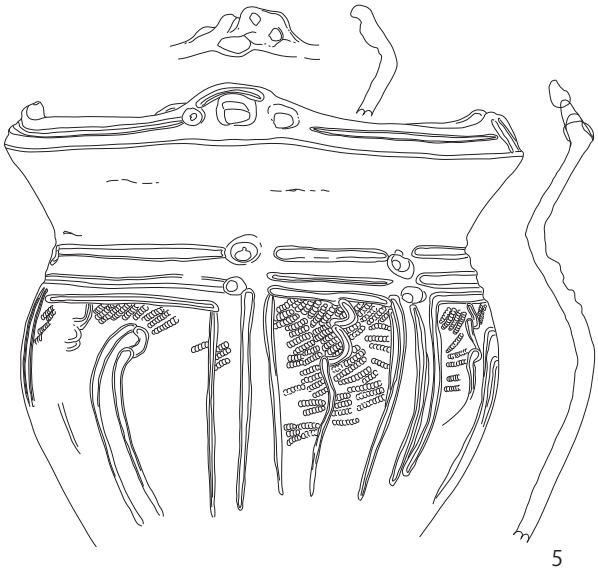
2
8 号配石土坑



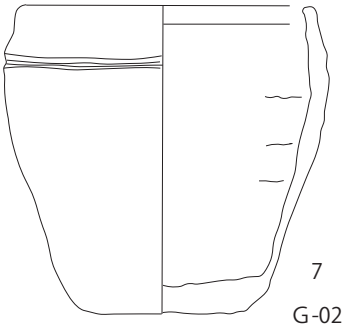
4
1 号埋設土器



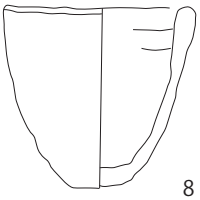
6
4 号埋設土器



5
3 号埋設土器



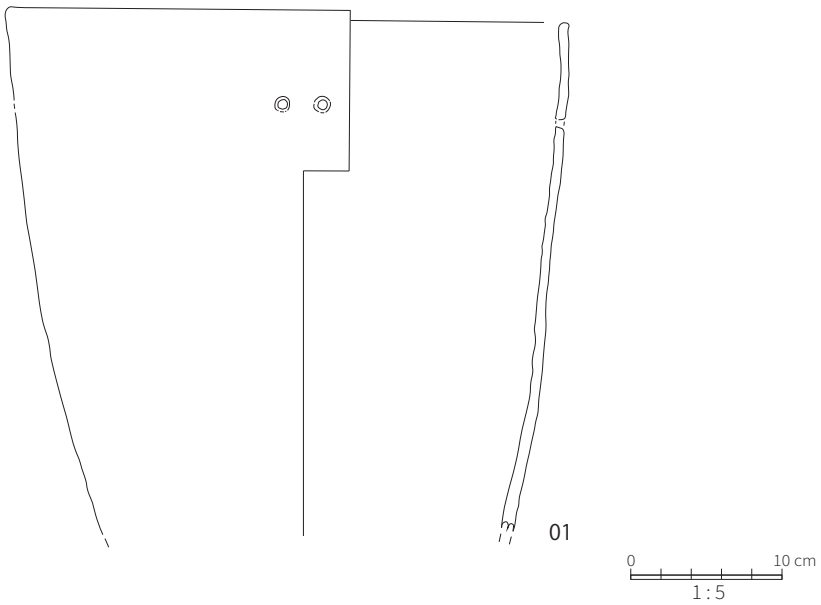
7
G-02
A 区遺構外



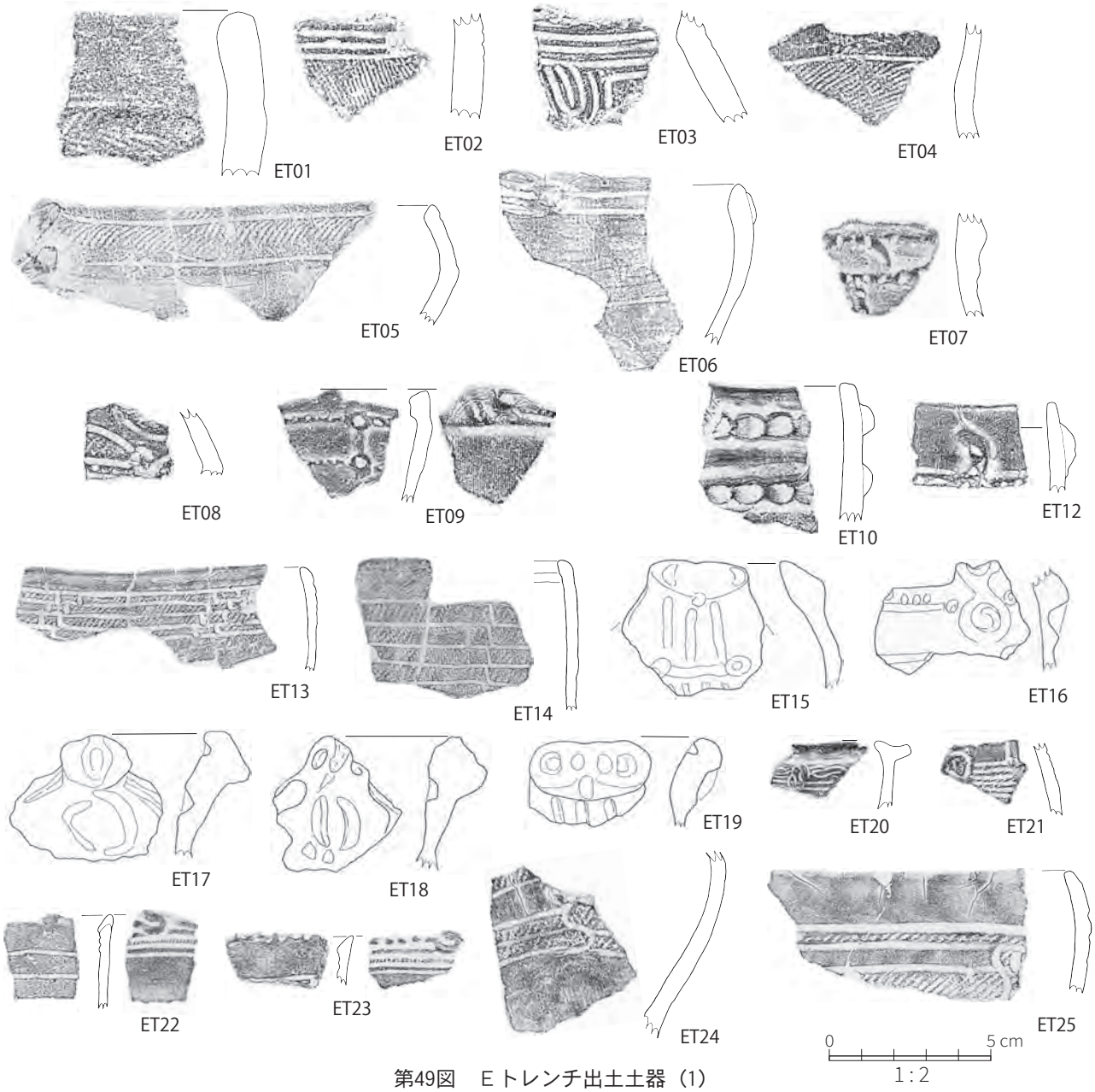
8
G-03
A 区遺構外

第47図　配石土坑・土坑出土土器・埋設土器

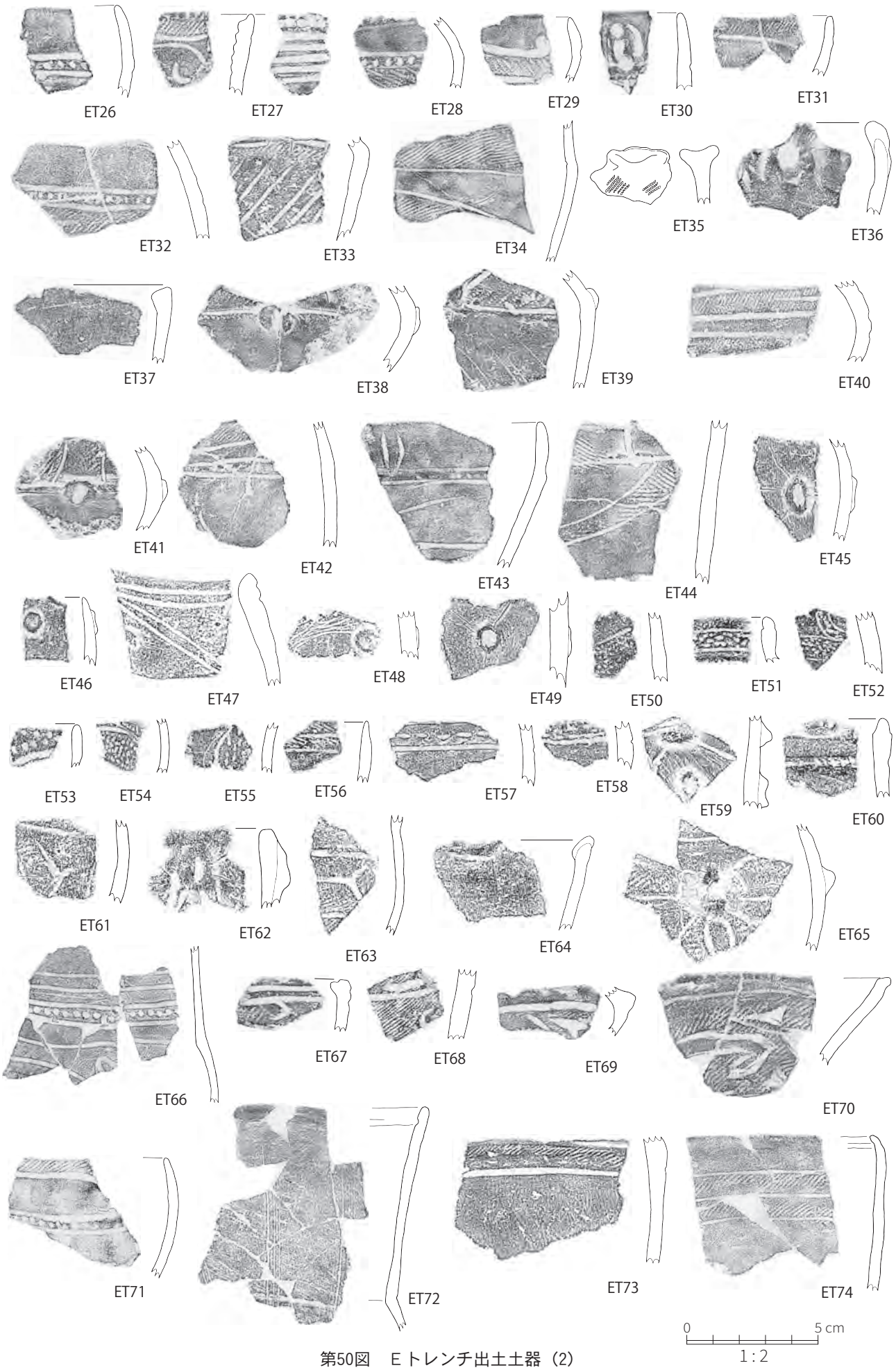
0 10 cm
1 : 4



第48図　Ａトレンチ１号埋設土器



第49図　Ｅトレンチ出土土器（1）



第50図　Ｅトレンチ出土土器（2）

第２節　土製耳飾り

１．土製耳飾りについて

出土した総点数577点のうち、遺構出土のものはすべてを図化し、遺構外出土のものは文様を持つものを優先して図化した。掲載した図と写真は修復前のものである。

遺構別出土点数は以下の図のとおりである。

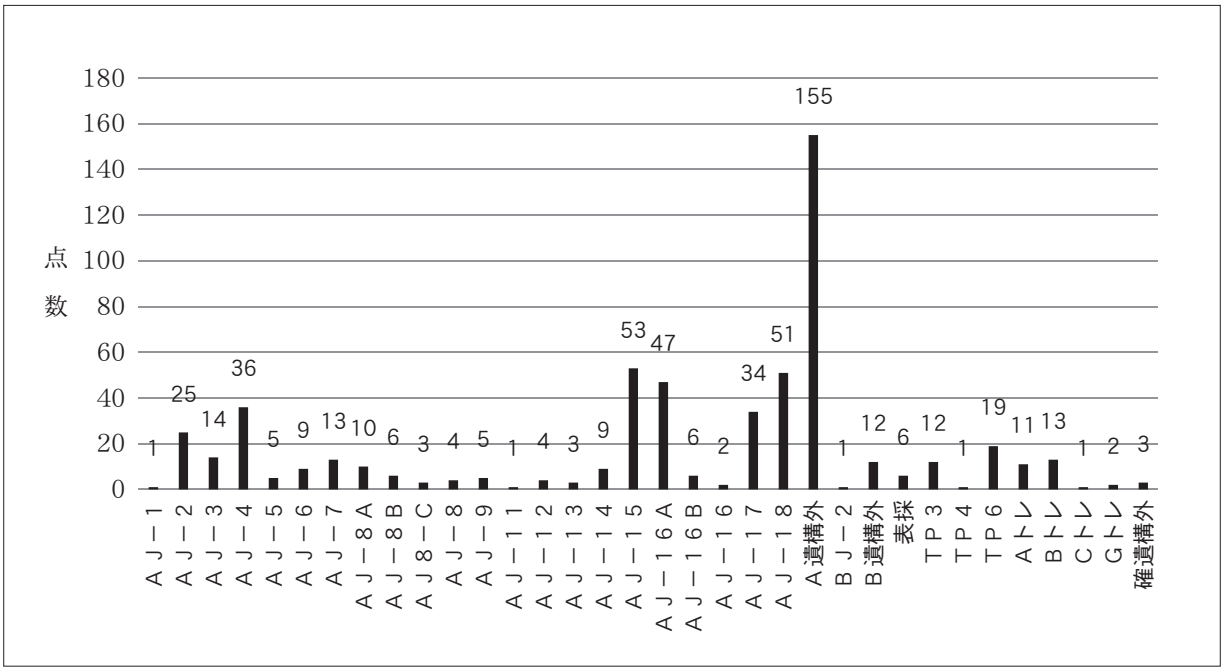


図１－２－１　土製耳飾り遺構別出土数

国内最古の土製耳飾りは縄文時代早期に南九州の事例が知られている。前期には石製のものから材質転換したとみられる土製玦状耳飾りが登場し、中期には円筒形の耳飾りが制作される。これらはおおむね渦巻き文様や刺突文の施された素朴なものである。後期前半には中期の流れをくみ、ボビン状の形態となる。精緻な粘土をし、入念な磨きを施す点に技術の向上が伺われる。後期後半以降、土製耳飾りは急速に発展する。大型化が進み、なかには直径10センチ以上の耳飾りも登場する。直径は耳朶の伸長の限界に迫る一方で、制作技術も限界を極める。複雑な文様が貴重とされ、それを制作するための技術に磨きがかかったのだろう。その結果、桐生市千網谷戸遺跡にみるような繊細かつ優美な大型の耳飾りが造られるに至った。

これまで様々な分類が試みられてきたが、「一時期においてさまざまな型式の耳飾りの使用された時期が存在した」（設楽 1983）という指摘や、「各々の形に関連があり、中間形というべきものも多く必ずしも、はっきりと分類できるものではない。各々の形態は、密接に関係し合って別の形を作っていったものと思われる。」と高井東遺跡調査報告書（1974）述べられるように、時期・地域により変化のある土製耳飾りを単系的に捉えることは難しい。エリ穴遺跡発掘調査報告書では細分化により「記号化されたこれまでの分類を採用せず、系統的な変遷を把握するのに有効な分類を模索したい。」という意見を示しており、本書においてもこの立場に賛同したい。

ここでは茅野遺跡から出土した土製耳飾りの形状と文様から、本節の第４章に８つの系列を設定した。土製耳飾り個々が互いに影響を与え合うような変異幅のある遺物であるという性格から、要素を細

分化して組み立てる方法ではなく、遺物のデザインを包括的に捉える方法であるが、１点の耳飾りに含まれている諸要素を分解してとらえる作業を行わなければ、分類に客観性を持たせることができない。

２．部位の呼称について

以下のように着眼し、部位の呼称をあらかじめ記すこととする。これは系列に分類する際の基準にも通じる。

・正面・背面　表裏で直径が異なるもの、文様が片方にのみあるものは表裏を決定づけることができる。両面の形状が同じでありかつ両面とも無文のもの、あるいは両面に文様を有するものは正面・背面が決定できない。

・側面　装着した時に耳たぶに接する部分。中央部分がくびれているもの、正面に向かってしだいに径が大きくなるよう作られているもの、円筒形、円筒形だが上側が広がっているものなどある。

・内側　側面の反対側の面。環状に成形したものや、粘土をへら状の工具で削り込み、成形、施文したものがある。施文には沈線文、立体透かし彫りを掘りこんだものなどがある。また、正面から見たときに段差のある突出部分を内面の内側に作り出して、奥行きのある二重円のような文様効果を生み出すものがある。この二重円の内側に連続刻目を施したものがあり、この部分を内面刻目帯とよぶこととする。

・ブリッジ　正面の中央に橋状の部分を削り出すものがある。この部分を「ブリッジ」とよぶ。円環状に後付けするのではなく、ブリッジ部分を残して周囲を彫り込んで制作している。

・環状　文様のある耳飾りの多くは、正面が平面的に近くなるように、つまり正面側に文様のデザイン構成をする面積が多くなるように成形されている。しかし中には環状のもの、きしめん状の粘土紐を円環状に成形したような、正面側の表面積の小さなものもある。この、環状の耳飾りの場合は正面から内側に施文場所を持つことがある。

・肩部　また、精製品の一部に、肩部（正面と側面の間）に面取り状に作り出した文様帯を設けることがあり、（一単位系列５類、花弁系列２、３類）微細な刻目や玉抱三叉文を陰刻する。本書ではこの文様帯を肩部文様帯と呼ぶこととする。

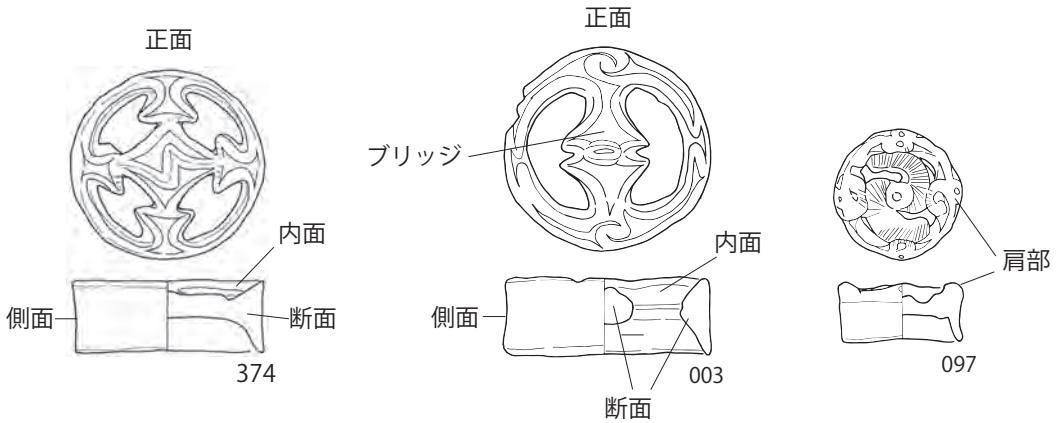


図１－２－２　耳飾りの部位の呼称

３．土製耳飾りの各要素の特性について

土製耳飾りがもつ要素から制作者の意図を想定すると、大きさ：使用者の耳朶の孔に合うこと、またより大きなものを志向する何らかの社会的な価値、重さ：軽いほうが良いという装着場の利便性、文様：精神的な象徴にあたるモチーフの採用、身に着けたい、欲しいという願望を掻き立てる嗜好、材料：入手・調整して用意することができる粘土の質、顔料の入手機会があるかどうか。技術：作り手の力量、制作意義：制作しようとする耳飾りが目的に合っているかどうか、社会的な役割を果たすものかどうか、といったように、作り手の様々な意図と条件が反映されている。

このように、製作者と所属する集団が保有する諸要素が複雑に絡み合って目的に適った「かたち」が採用されるため、製作意図を意識して行う分類が、時間的地域的な変異を捉えるのに役に立つのではないかと考えている。系列ごとの解説の前に、要素として、大きさ、文様モチーフ、胎土、彩色、形状、文様帯、成形痕跡、時期について記述する。

(1)　大きさ

577点の土製耳飾りの直径について、５ミリ間隔で点数を表したグラフは次ページのとおりとなった。ただし、数値には推定径も含まれていることと、装着部の径ではなく最大径を計測した値である。直径を扱った研究として金成・宮尾両氏による成果がある（金成・宮尾 1996)。両氏は論中で扱った78遺跡968点の土製耳飾りの直径に、３センチと６センチにサイズのピークがあると分析しており、茅野遺跡でも共通する傾向を読みとることができる。ただ、茅野遺跡には６センチのあと、７センチにもピークが見られることから、このことは大量出土遺跡である茅野遺跡の性格として直径のバリエーションの豊富さを示すものと考える。

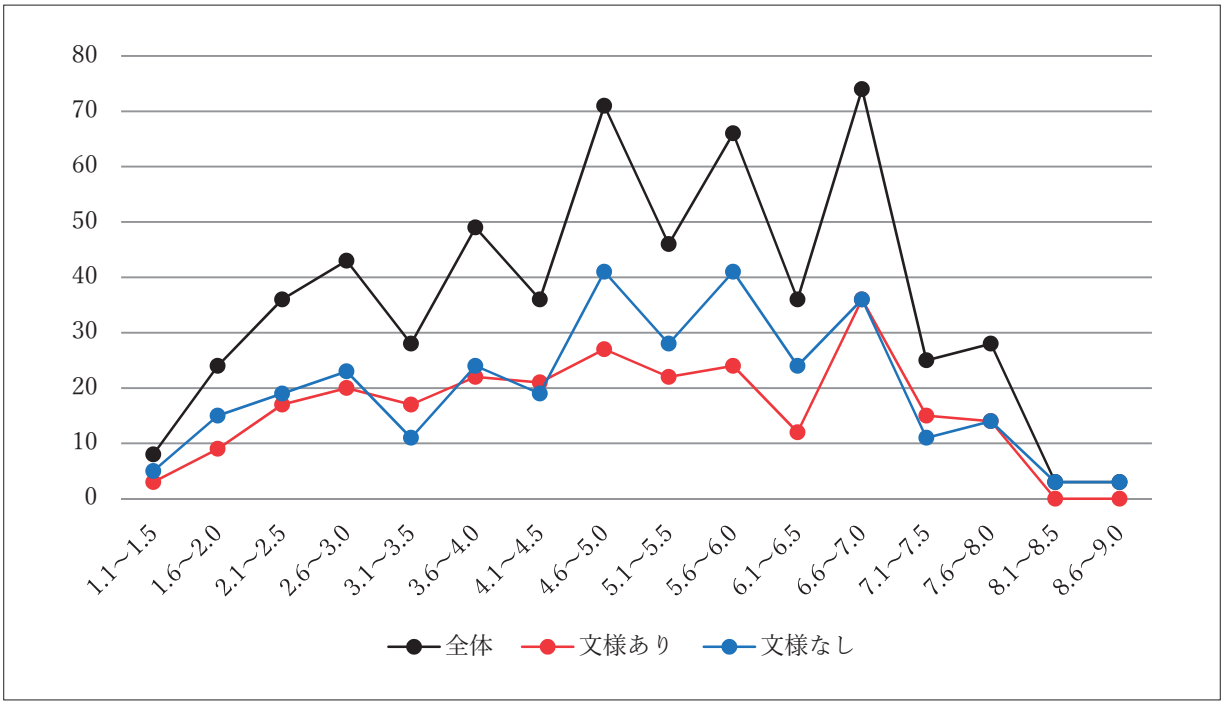


図１－２－３　茅野遺跡土製耳飾りの直径

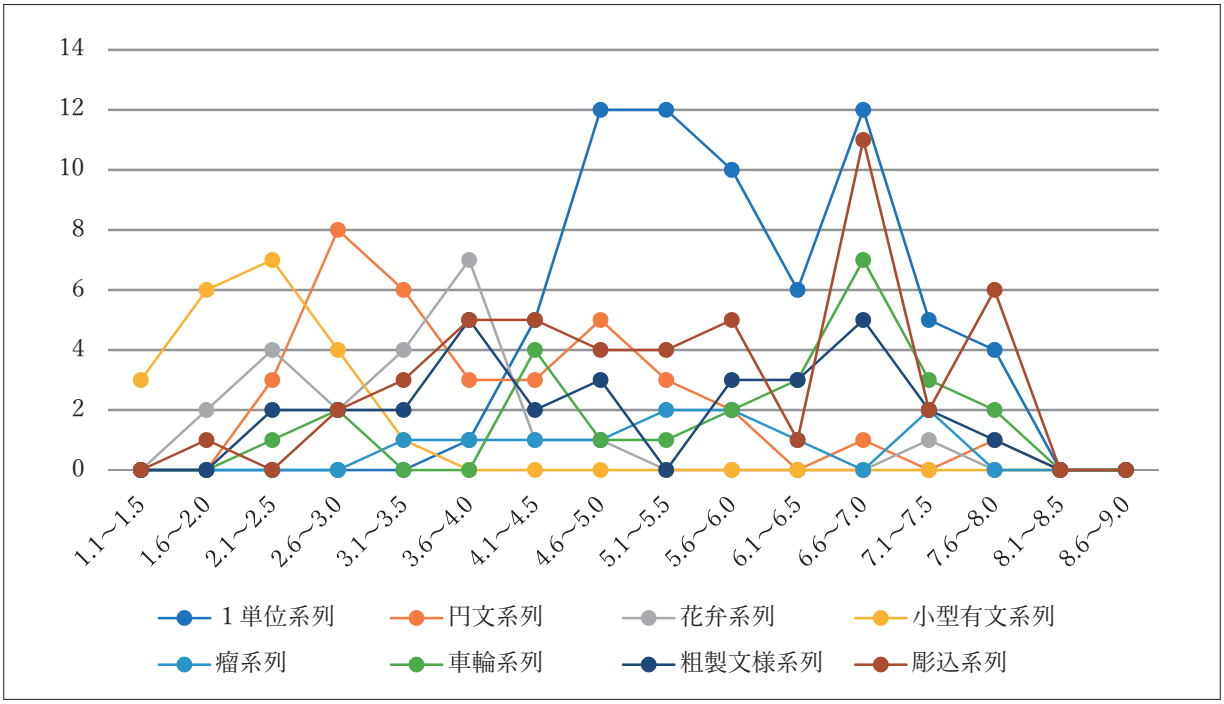


図１－２－４　茅野遺跡土製耳飾り系列別の直径

⑵　文様モチーフ

主文様と副文様に分けて捉えて観察表に記載した。主文様はデザインの主要モチーフを指す。多くは円の中央に配され、割合的に大きな面積を占める。副文様はその他の構成要素ともいえ、周縁の刻目、文様モチーフの間を充填する刺突、などである。主文様が系列の判別基準になるかという点については、必ずしもそうではなかった（例として彫込み系列の抽出ならびに系列内の類を確定するための視点を述べると、ブリッジ中央にある、主要モチーフに見える部分よりもブリッジ付け根部分に施されるモチーフのほうが個体間の変異幅にまとまりがあり、系列を決定する要素として有効であった）。

⑶　彩色

総数577点のうち121点の耳飾り（全体の20.9％）に赤彩がみられた。２種類の顔料（ピンク系の紅色、茶系の朱色）が使われていることが肉眼で観察することができる。顔料の科学的分析を実施していないので、観察表への記載は区別しなかった。黒彩が認められるものは５点であった。系列にみられる特徴として、花弁系列は21点中15点（65.2％）に赤彩が施されており、系列中でも高い割合を示す。次いで一単位系列が47.7％、彫り込み系列が46％であった。

⑷　胎土

肉眼でわかる範囲で、特定の系列の耳飾りに非常に緻密な粘土を使用している傾向がみられ、胎土の「緻密」なものと「非常に緻密」なものを観察表に記した。両者どちらにも区分できない中間の胎土も多数あるが、その程度が顕著なものを抽出した。「非常に緻密」の粘土は精製土器に使用するものよりもきめが細かい印象を受ける。それらの中には白色もしくは薄茶色の淡い色調のものが目立ち、粘土の特別な選択がおこなわれている可能性がある。

※特定の鉱物の含有と系列の関係の可能性

土製耳飾り344点、縄文土器17点、手燭形土製品３点の含有鉱物の顕微鏡観察を行った。

胎土に含まれる鉱物・岩石等の観察によって、材料調達の一端を明らかにすることに期待が向けられた。胎土観察の詳細な報告は169～197頁に掲載するが、ここでは概要について報告する。

胎土観察によって、長石、輝石、角閃石、石英、雲母、火山ガラス等が含有されている結果を得られた。その結果、設定した系列によって、含有鉱物に一定の傾向が表れることがわかった。

・車輪系列に分類した耳飾りの中でも、他遺跡に広域にわたってみられるもの（177、202、276）はいずれも多種にわたる鉱物を含むＤ類である。車輪系列のバリエーションで在地系のもの（298、359、384、431、436）は雲母・花崗岩片や結晶片岩を含むＡ類・Ｂ類、角閃石を含み、緻密な胎土のＣ類、火山ガラスを微量含むきわめて緻密な胎土のＩ類などである。

・一単位系列ではＣ類とＤ類が多くみられる。植物珪酸体を含む緻密な胎土のＧ類とスコリアを含むＨ類も散見される。

・堀込系列１類の胎土はＣ類とＤ類に分類される。ブリッジの付け根に中央モチーフが渦巻き状になる入り組み三叉文を配する003、212はいずれも植物珪酸体が確認されたＧ類であった。

彫込系列２～４類のブリッジを有するものは雲母を特徴的に含むＡ類、結晶片岩を特徴とするＢ類、Ｃ類に分類された。

・花弁系列では小型の１～３類のうち027、219がＡ類、033、097、460はＣ類、096はＤ類、160、211、430がＧ類で、千網谷戸タイプの大型品破片である54は赤チャート礫を含む緻密な胎土のＪ類であった。花弁系列の胎土は「非常に緻密」もしくは「緻密」に分類された。

これらの観察から、土製品の胎土に混入する在地系・非在地系の岩石・鉱物等が胎土の入手場所を示すかどうかを判別する手掛かりになる可能性を示唆している。

耳飾りの胎土に在地系の素材でないものが含まれていることへの解釈は、①耳飾りそのものが持ち込まれた場合②あらかじめ入手されていた石材を粉砕するなどしたものを土器や土製品制作時に胎土に混入し、制作した場合が想定される。

雲母を内包する緑色片岩は石棒や石皿、石器の素材としてだけでなく大量の自然礫が住居跡や包含層から出土していること、土器の胎土にも角閃石だけではなく雲母片や結晶片岩を含むものもみられることなどからも、遺跡内でこれらの石材は素材として利用できる状態であった。土製耳飾りの製作地を求める上では工房跡の確認や製作途中の遺物、工具など制作工程を示す出土品の確認が必要で、理化学的な分析や胎土の顕微鏡観察といった手法は補助的に援用するべきであろう。遺跡周辺の地質環境の把握とあわせ、今後同様の観察報告が各地で行われデータが蓄積されることによって、縄文時代の社会活動を探るうえでの有意義なアプローチ方法になるであろう。

⑸　形状

土製耳飾りの形状を以下のように分類し観察表に記載した。

①滑　車　形　413点。側面が滑車状にくびれており、削りにより内側がくり抜かれているもの。

②鼓　　形　153点。中実形。中身が詰まった形であるため重量がある。

③筒　　形　４点。正面の径に対して高さがある中実のもの。

④棒　状　形　５点。断面が楕円形で、平面をもたない中実のもの。

⑤大型漏斗形　２点。裏面の径よりも表面の径が大きく広がるもの。

⑹　文様を施文する部位と文様帯

先述のように文様帯は耳飾りの「かたち」と関連が強い要素である。茅野遺跡出土土製耳飾り577点のうち、文様を持つものは333点で全体の57.7％であった。施文される場所により以下のようにとらえた。

①正　面　円を平面的に使い施文。

②環状形の正面（内側にせり出した形も含む）　円環状に施文。

③環状形の正面から内面　真正面から文様は見えにくいが幅を生かした施文。

④彫込文様　内側に透かし彫り状に施した文様帯。正面を意識し、彫刻様の技法をとる。

⑤内面刻目帯。内面に段差を持たせ削出した文様帯。非常に微細な刻目を施す。緻密な胎土である必要がある。奥行のある装飾効果が得られる。

⑥肩部（肩部文様帯）　外周に外側に傾斜させた幅の細い文様帯。繊細な装飾効果、大きく見せる効果がある。一単位系列５類、花弁系列２、３類の特徴である。

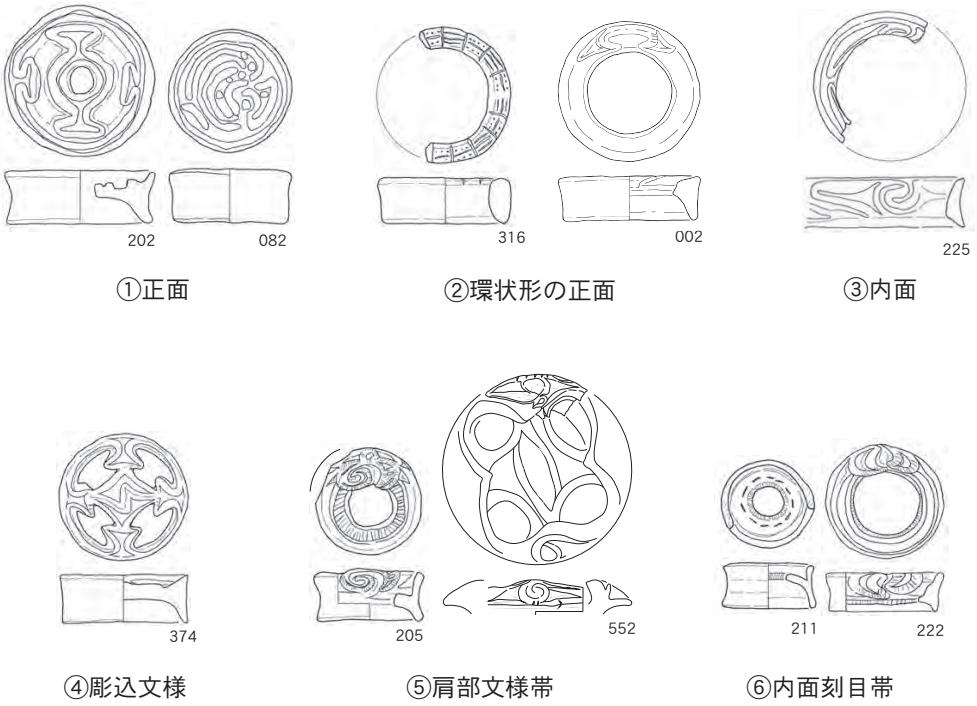


図１－２－５　土製耳飾りの文様部位

⑺　成形痕跡

土製耳飾りの成形痕跡に着眼して、抽出した。ここでいう成形痕跡の定義は、

・肉眼で観察することができるもの

・破損した断面に観察することができるもの

とした。土製耳飾り破片287点のうち20点に成形の痕跡が確認された。土製耳飾りが破損した断面を観察すると、粘土塊同士の接合の度合いが強いものから順に、

①粘土塊同士をなじませた境目部分が完全に一体化せず筋が残っているもの

②破損した断面に粘土塊同士をなじませた境目部分が段差になっている様子を観察することができるもの

③粘土塊同士の境目が一体化せず空洞部分がみられるもの

これらの３種類の成形痕跡が認められた。これらの耳飾り成形時に生じた粘土塊同士の接着方法から３つに分類した。

Ａ　貼り合わせ　12点に認められた。芯になる粘土を成形の段階で太くするために張り合わせた際に生じたもの。

Ｂ　巻き込み　３点に認められた。土台を太くした痕跡である点でＡと同じだが、正面を薄く伸ばした粘土で覆い被せるように成形したもの。

Ｃ　うわがけ　５点に認められた。ある程度成形した土台の外側に１ミリほどの薄さで、きめの細かい層が覆っていて、境目がわかるもの。

成形痕跡が認められた土製耳飾りは20点で全体の７％である。長野県松本市エリ穴遺跡で報告されている破片断面の観察による成形技法がみられた土製耳飾りの数は、技法の確定ができたものが報告点数2,962点中194点（6.5％）、技法を推定できるものも含めると634点（21.4％）である（松本市教育委員会 2018）。

破損面に現れる成形痕跡は、成形時のなでつけや貼り合わせ加工が不十分であるため観察することができるので、成形作業の粗製品といえよう。本遺跡で成形痕跡が確認できた20点が属する系列をみると、１点が粗製有文系列、他はすべて無文であった。破損面に成形痕跡が確認できる個体の文様並びに全体の様子は、粗製あるいは無文の耳飾りであり、粗製（無文）の耳飾りを制作する際は、素材の境目の一体化がていねいに行われていない等、作業段階から粗製品として扱われている可能性がある。

⑻　時期

住居址の時期を出土土器の形式から設定しており（10頁　第１表）、土製耳飾りの系列のなかでの時間的推移をつかむために、住居跡の時期を目安に使用する。次項以下系列ごとの項目本文中に記載する年代は、土製耳飾りの単品ないし系列に対して直接的に与え得る年代観ではないことを留意されたい。

４．分類の方法　～系列の設定～

本書では、土製耳飾りの分類の方法として、土器の型式に相当するグループ複数の群に相当する「系列」を設定する。「系列」は共通の雰囲気を持ち、一定の共通要素を持つ群である。これは縄文土器における「様式」に近い概念であるが、地域的なまとまりが捉えきれていない。「系列」は一定の時間幅を持っており、他地域の系列と互いに影響しあうこともある（角田 2000）。

茅野遺跡の土製耳飾りを観察し、諸要素の組み合わせから８つの系列を抽出し設定した。

⑴　１単位系列（68点）

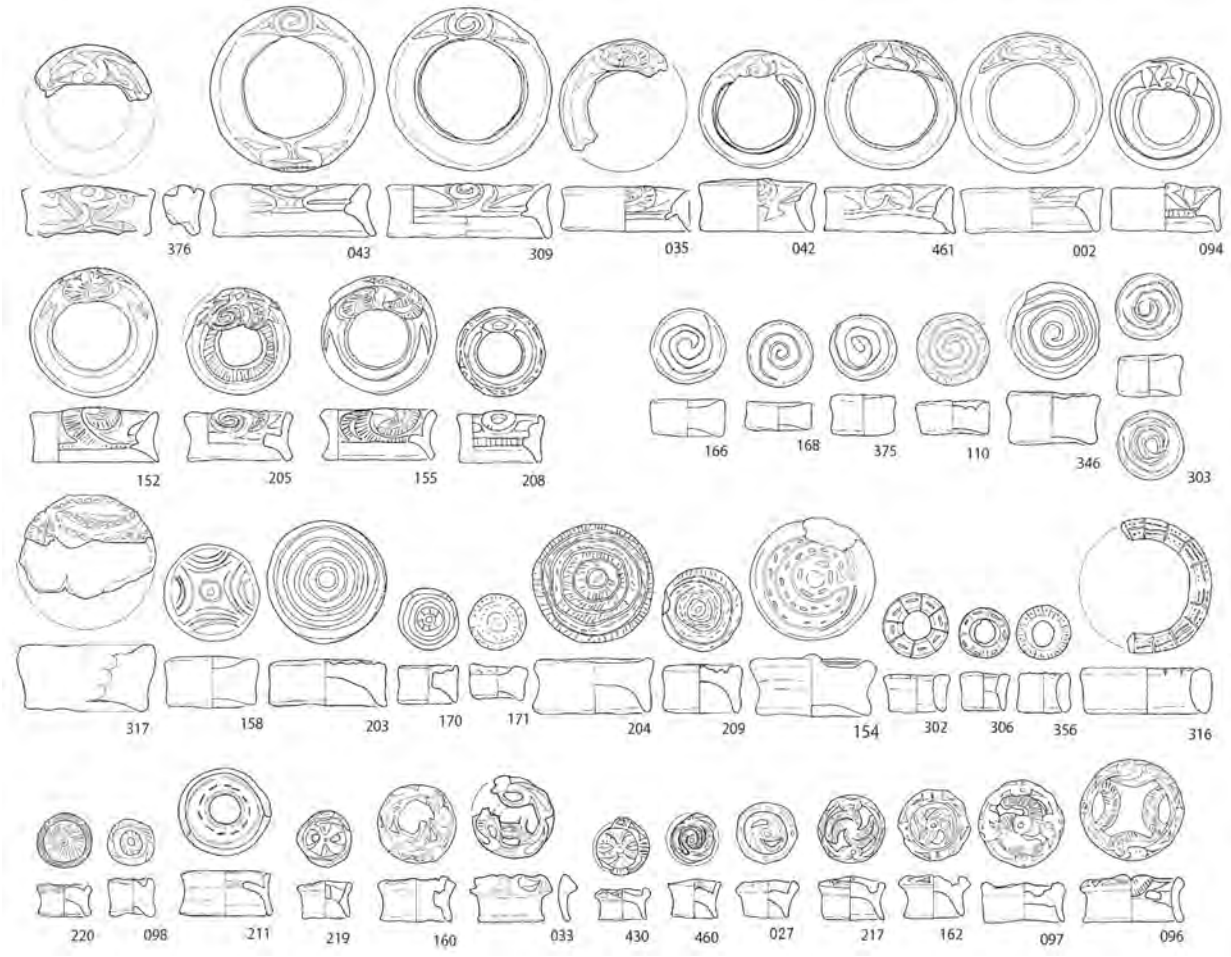
１類　411、322、125、311、376（６点）

入り組み三叉文が施されるもの。入り組みの部分が中心に配され、三叉文が左右に伸びるように広がる。２類の渦巻き＋三叉文と連続性が考えられる。

２類　渦巻き文を中心に配し、左右に三叉文を配すもの。時期は１よりも２が新しいと考えられる。

２―１類　渦巻き文様の周囲を彫り込んで渦巻きを浮きださせた表現をするものと、さらに渦巻き模様の部分を高く盛り上げて際立たせるもの。70、43、278、309、480（５点）

２―２類　内面側に帯状に作り出された内面刻目帯や、正面の文様にも連続した刻目を施すなどの特徴を同時に持つ。12、35、42、162、253、271（６点）



１単位系列　１類（376）２―１類（043、309）２―２類（035、042）３―１類（461）３―２類（002）４類（094）５類（152、205、155、208）円文系列　１類（166、168、375、110、346、303）２類（317、158）３類（203、170、171、204、209）４類（154）５類（302、306、356、316）花弁系列　１類（220、098、211、219）２類（160、033、430）３類（460、027、217、162、097、096）

図１－２－６　土製耳飾り系列分類図（1）縮尺は1/3

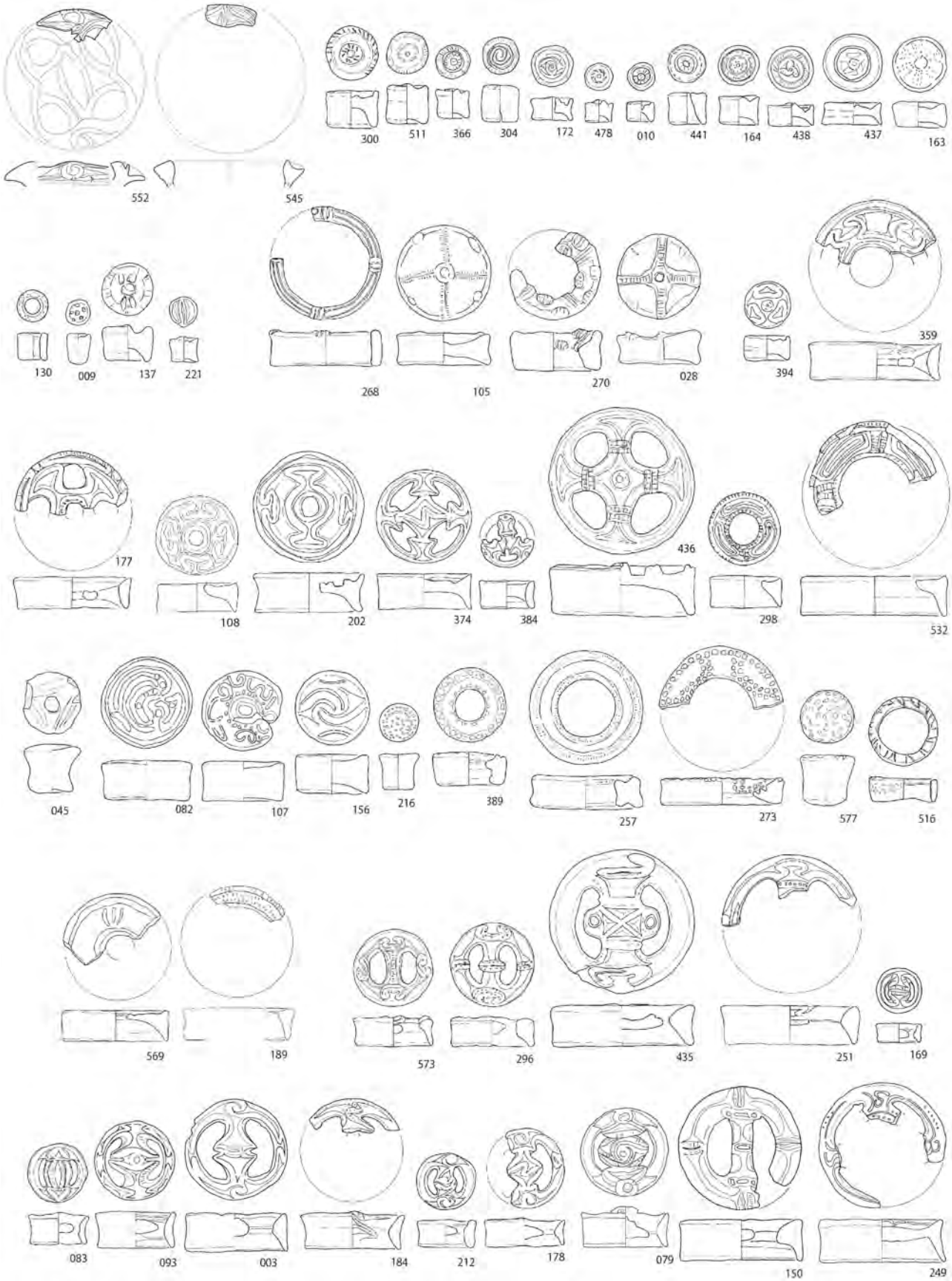
３類　工字文を中心に配し、左右に三叉文を配するもの。出土遺構の時期からみると１よりも２が新しいと考えられる。12点を本類とした。

３―１類　陰刻で表した工字文が中心となり、左右に三叉文を配するもの。62、136、149、275、442、461（６点）

３―２類　陰刻した工字文と盛り上げてあらわしたU字文が組み合わされ、左右に三叉文が配されるもの。左右の三叉文が小形省略化する傾向がみられる。002、254、323、396（４点）

４類　中央に玉抱三叉文を配するもの。１～３類で観察した左右に配された三叉文が玉抱三叉文の一部としてあらわされる。10点中３点に内側面に帯状に作り出された内面刻目帯を伴う。時期は相対的に古い段階で、出土遺構に晩期主体のものは少ない。21、26、49、58、75、94、280ほか（10点）

５類　花弁系。中央の主文様は盛り上げの強い渦巻き文または玉抱三叉文が配され、左右に三叉文が組み合わされる。緻密な胎土を用い、すべてに内側面に帯状に作り出された文様帯に連続する刻目を施し（内面刻目帯）、肩部文様帯に玉抱三叉文を配する、要素の組み合わせに固定化の強さを持つ類といえる。出土遺構の時期は晩期が多い傾向があるため、本類の時期は晩期前半とみられる。95、133、152、155、205、208、222（７点）



花弁系列４類（552、545）小形有文系列１類（300、511、366、304、172）２類（478、010、441、164、438、437）３類（163、130、009、137）４類（221）瘤系列１類（268、105）２類（270、028）車輪系列１―１類（394、359、177）１―２類（108、202）２類（374、384、436）３類（298、532）粗製文様系列１類（045、082、107、156）２類（216、389、257、273）３類（577）４類（516、569）５類（189）堀込系列１類（573、296、435）２―１類（251、169）２―２類（083、093）３―１類（003）３―２類（184、212）３―３類（178）４―１類（079）４―２類（150）５類（249）

図１－２－７　土製耳飾り系列分類図（2）縮尺は1/3

一単位系列の形状は、68点中滑車形が67点（98.5%）、鼓形が１点（1.4%）で滑車形が多い。胎土は緻密なものが32点含まれる。特に緻密なものは11点含まれる。特に５類は７点中全てにあてはまっている。彩色は68点中33点（48.5%）に赤彩が認められ、黒色塗彩が１点みられる。系列内でみると１類が５点中４点、２類が11点中７点、３類は12点中３点、４類は10点中３点、５類は７点すべて、６類は23点中黒色が１点、赤色が９点で、５類と１類の赤彩率が高い。出土遺構の比定される時期から、１類は後期末葉、２類と３類は後期後半から晩期前半、４類は後期後半、５類は晩期前半に時間的傾向を見ることができると考える。

⑵　円文系列（36点）

１類　渦巻き文様をもつもの。後期後半から晩期前半にみられる。110、166、168、303、346、375、529（７点）

２類　中央の円を中心として半円を外向きに配した文様を持つもの。後期後半から晩期前半にみられる。４単位のほか６単位のものもみられる。158、317、451、452、468、548（６点）

３類　同心円文をもつもの。完結した円を同心円状に重ねて表現したもの。
２重～５重の円を表現したもの、円文に沿って刻目を施したもののバリエーションがあり、刻目を施したもののほうが新しい段階に比定される。106、111、157、170、171、183、203、204、209、415、446、458（12点）

４類　Ｃ字文をもつもの。円を中心としてＣ字を沈線または隆帯で表したもの。円状に施された刻目を伴う。出土する遺構の共伴土器の傾向から晩期あるいは晩期に差し掛かる新しい段階に現れる類型と考えられる。７、41、154、466（４点）

５類　その他　円文系列であるが破片も含み１～４類に分類されないもの。260、302、306、316、351、356、559（７点）

円文系列35点のうち、形状は、滑車形を呈するものが10点（27.7%）、鼓形のものが26点（72.2%）で鼓形が多い。胎土は緻密なものが３点含まれる。系列の中では３類に２点、５類に２点である。彩色が認められたのは３点（8.3%）である。系列内では３類に２点、類に属さないものに１点みられる。時期は系列全体として後期後半から晩期前半に比定されるが、３類は晩期前半がやや多く占め、系列内では新しい類の可能性がある。

⑶　花弁系列（21点）

１類　小形品。緻密な胎土が用いられ、中心から放射状に刻目が施されるもの。40、98、219、220、348、538ほか９点

２類　小形で立体的な透かし彫りが施されるもの。文様のモチーフは左右非対称。肩部文様帯に三叉文が施される。緻密な胎土が用いられる。33、160、179、185、430（５点）

３類　小形で風車様の回転系モチーフを中央に配するもの。肩部文様帯に玉抱三叉文が施される。緻密な胎土が用いられる。27、96、97、162、217、460（６点）

４類　千網類型　千網谷戸遺跡から出土した類型。上面に向かって開く大型品で、立体的に交差する透かし彫りが施される。文様は４単位。緻密な胎土が用いられる。545、552（２点）

花弁系列21点の形状の内訳は、滑車形が18点（78.2%）で、鼓形が３点（13%）、大型漏斗状２点

（８％）である。胎土は緻密なものが19点、中でも特に緻密なものは18点と多くみられる。彩色のあるものは、赤色15点（65.2％）、黒色２点（8.6％）、計17点（73.9％）と高めである。系列内での点数は、１類が９点中７点（77.7％）、２類では５点中２点（40％）が黒色、３点（60％）が赤色、３類では６点中５点（83.3％）である。時期は後期末から晩期初頭に広がるが、１類と２類はやや晩期前半に多い傾向がみられる。

⑷　小形有文系列（21点）

１類　周縁に連続する刻目が施される。緻密な胎土を用いる。172、300、304、366、511（５点）

２類　中央に連続的な刻目を法放射状に有する。緻密な胎土を用いる。10、30、161、164、355、358、437、438、441、478（10点）

３類　連続する刺突によりデザインを表現する。緻密な胎土を用いる。９、130、137、163（４点）

４類　その他　１～３のいずれでもないもの。緻密な胎土を用い、きめの細かい施文を行う。８、221（２点）

小形有文系列は21点である。形状の内訳は滑車形３点（14.2％）、鼓形18点（85.7％）である。胎土の密なものは５点で、そのうち特に緻密なものは４点である。赤彩は全体の３分の１にあたる７点に認められた。系列のなかでは１類に１点、２類に４点である。時期は、後期後半から晩期前半にかけてであるが、２類はやや新しい時期のものとみられる。

⑸　瘤系列（11点）

貼り付けた瘤状の突起を特徴とする。

１類　瘤上に刻目を施し、全体を４単位十字に分割した文様構成をとるもの。105、268、533（３点）

２類　連続的に瘤をめぐらせるもの28、200、270、556（４点）

３類　４単位の粘土の貼り付けと、その間を沈線でつなげ文様をあらわすもの。266、417（２点）

４類　その他　１～３類のいずれでもないもの。破片を含む。519、571（２点）

瘤系列の耳飾りは総数11点であった。形状の内訳は滑車形９点（81.8％）、鼓形が３点（27.2％）である。彩色は、１類に１点、２類に１点赤彩がみられ、計２点である。胎土は11点のうち３点（27.2％）が緻密である。系列の時期は後期後半が主体であるが、２類は後期後半から晩期にかけてのやや新しい類である傾向がみられる。

⑹　車輪系列（27点）

彫り込み系列との相互の影響が大きい系列。U字は陰刻の工字（もしくはＩ字）モチーフの周囲に盛り上げた帯状の表現によるものとする。工字、Ｉ字、三叉文は同じ文様の変化の様式を示すと思われる。中心の円モチーフをめぐって配される円環の線と一体に組み合わせたデザインがとられる。中心のモチーフの新旧は、穿孔しない円→穿孔のある円→□、稲妻などのモチーフが施されたものの古い段階を示すと思われる。また、隆帯状に連続的に刺突を施すものは古い段階にみられる。胎土は緻密ではない。U字文様の間を抜いて透かし彫りにしたもののほうが新しい段階とみられる。

１類―１　U型　U字形の文様モチーフを、４単位を基本として構成するもの。91、177、182、276、

359、394（６点）
１類―２　Ｕ型　２組のＵ字の文様モチーフを対角に内向きと外向きに配するもの。108、202（２点）
１類―３　逆Ｕ型　２組のＵ字モチーフを逆向きに十字に配するもの。428、431（２点）
２類　１類よりが変化して発生したと考えられる。Ｕ字の内側の工字文が細くなりその周りの部分が発達したもの。232、324、345、374、384、436（６点）
３類　工字文がされに細くなり、中央孔の周囲にめぐる横長楕円沈線文の間にＩ字文が付加されるもの。385、402、298、532（４点）
４類　その他　１～３の系列に含まれないもの。226、228、264、281、380、495（６点）

車輪系列の分類点数は27点である。形状は21点（80.7％）が滑車形であり、残り５点（19.2％）が鼓形である。彩色は黒色塗彩が１点（3.8％）、赤色塗彩が８点（30.7％）である。緻密な胎土を有するものは12点（44.4％）である。特にその他の類とした４類の６点中５点に緻密な胎土がみとめられた。車輪系列の時期は後期末から晩期前半と考えられる。

⑺　粗製文様系列（29点）

粗製の文様がつくもの。特徴の強い要素がなく、さまざまなバリエーションがみられる。出土遺構に伴う土器の検討から比較的古い段階にこのような様々なバリエーションが作られたとみられる。

１類　正面に沈線によりランダムな文様を表し、刺突を施すもの。45、52、82、107、114、156、159（７点）
２類　連続する刺突により区画をあらわすもの。216、257、273、282、286、389（６点）
３類　刺突を充てんするもの。131、332、577（３点）
４類　ランダムな文様を沈線により表すもの。516、560、569、570（４点）
５類　環状の周縁部に刺突を施すもの。189、191、413、420、520（５点）
６類　粗製系列であるが１～５類のいずれにも属さないもの。破片も含む。245、434、524、527（４点）

粗製文様系列は30点を分類した。形状の内訳は滑車形が19点（63.3％）、鼓形が９点（30％）、筒形が２点（6.6％）である。赤彩は30点中４点（13.3％）に認められた。胎土は９点（30％）に緻密なものを使用している。この系列の時期は後期後半から末にかけてであるが、２類は晩期に入っても作られる新しい類である傾向がみられる。

⑻　彫り込み系列（49点）

彫刻的な文様モチーフの表現が目立つ系列である。環状形の中心に１本渡された「ブリッジ」が特徴である。車輪系列と相互影響関係がみられる。耳飾りのブリッジの付け根部分の文様を主要な分類要素とし、中心部分（ブリッジ中央）の文様モチーフの観察と組み合わせにより分類を行った。縁取り状の隆帯上に連続した刺突による列点を施文したものは古い段階とみられる。

１類　ブリッジ根元に陰刻したＵ字のモチーフとそれを取り囲む隆帯、両脇に三叉文の組み合わせを持つもの。60、153、192、272、277、296、308、310、412、435、573（11点）
２類　ブリッジ付け根部分のモチーフが工字の陰刻またはそこから派生した三叉文の配置、それを取り

囲む隆帯、両脇に陰刻する三叉文が連続的に表されるもの。１類との連続性が推定される。

２―１類　ブリッジ付け根部分に工字の陰刻と取り囲む隆帯、両脇に陰刻する三叉文が連続的に表されるもの。59、169、187、230、251、318（６点）

２―２類　ブリッジ付け根部分に三叉文の陰刻と取り囲む隆帯、両脇に陰刻する三叉文が連続的に表されるもの。83、93、231（３点）

３類　ブリッジ付け根部分に入組三叉文が施されるもの。ブリッジ中央のモチーフによりさらに分類した。

３―１類　ブリッジ中央に玉抱三叉文が表されるもの。３（１点）

３―２類　ブリッジ中央に入組三叉文が表現されるもの。14、50、56、184、212、307、260、404、547（９点）

３―３類　ブリッジ中央に稲妻のようなモチーフが表されるもの。車輪系列（374）に共通性がみられる。ブリッジ中央のモチーフは玉抱三叉文→入組三叉文→稲妻モチーフへと変化する。晩期前半主体の比較的新しい類と考えられる。178、248（２点）

４類　ブリッジ付け根部分に玉抱三叉文が施される。玉の特徴でさらに２つに分類した。

４―１類　ブリッジ付け根部分に円形の文様を施し左右を三叉文で挟むもの。79、421、493、543（４点）

４―２類　ブリッジ付け根部分の円形が縦線＋刻目に変化し、その左右を三叉文で挟むもの。150、390、502（３点）

５類　彫り込み系列で１～４類のいずれにも属さないもの。１、20、193、225、227、249、447、541、553（９点）

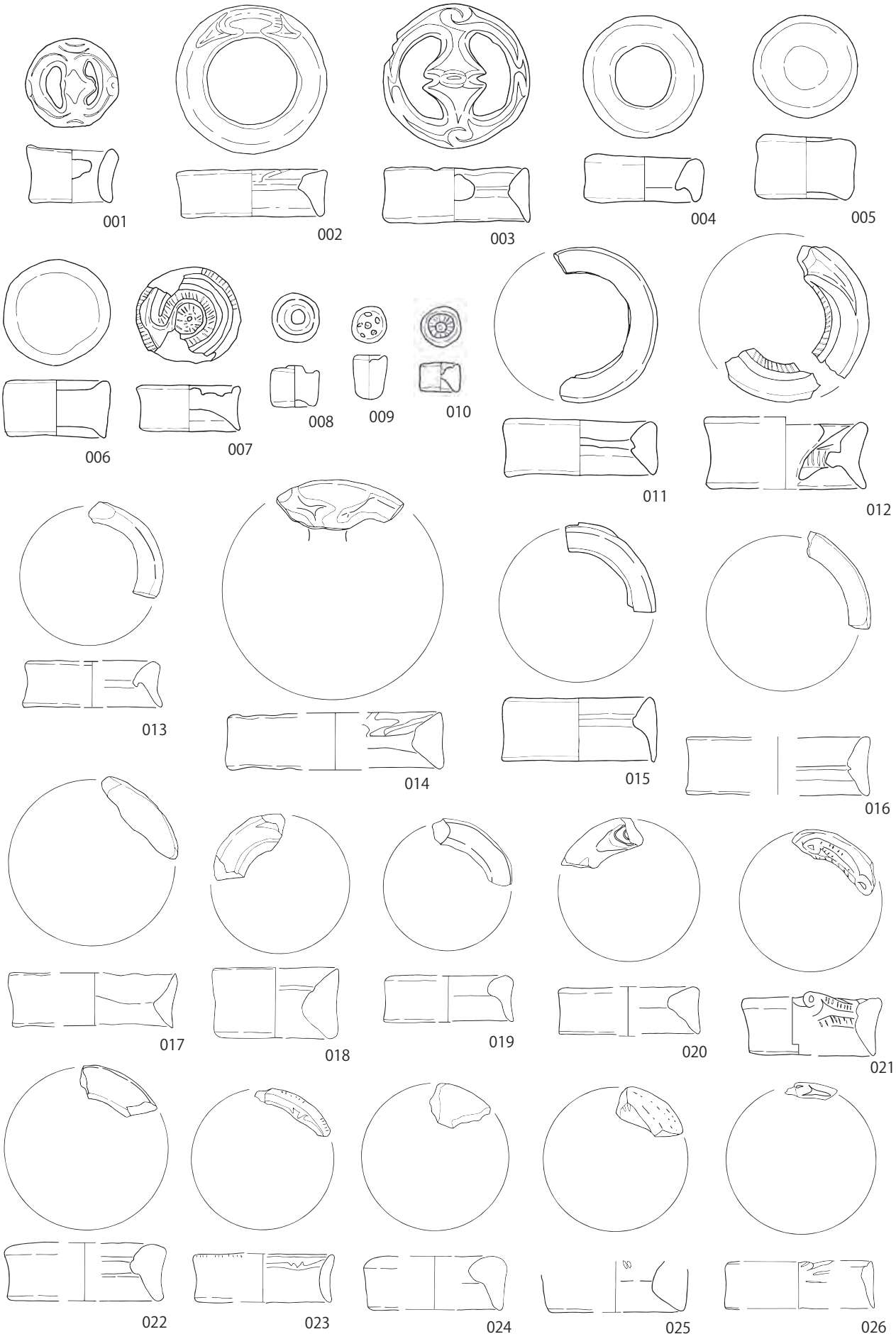
彫り込み系列は49点であり、１単位系列に次いで多く分類された。形状の内訳は、滑車形が48点(97.9%)、鼓形が１点である。胎土の傾向は、49点中18点（36.7%）に緻密なものがみられた。なかでも特に緻密な胎土であるものは10点であった。赤彩は23点（46.9%）に認められた。時期は後期後半から晩期前半にわたるが、３類は晩期前半にやや比重を持ち、系列内では新しい時期とみられる。

⑼　その他の耳飾り

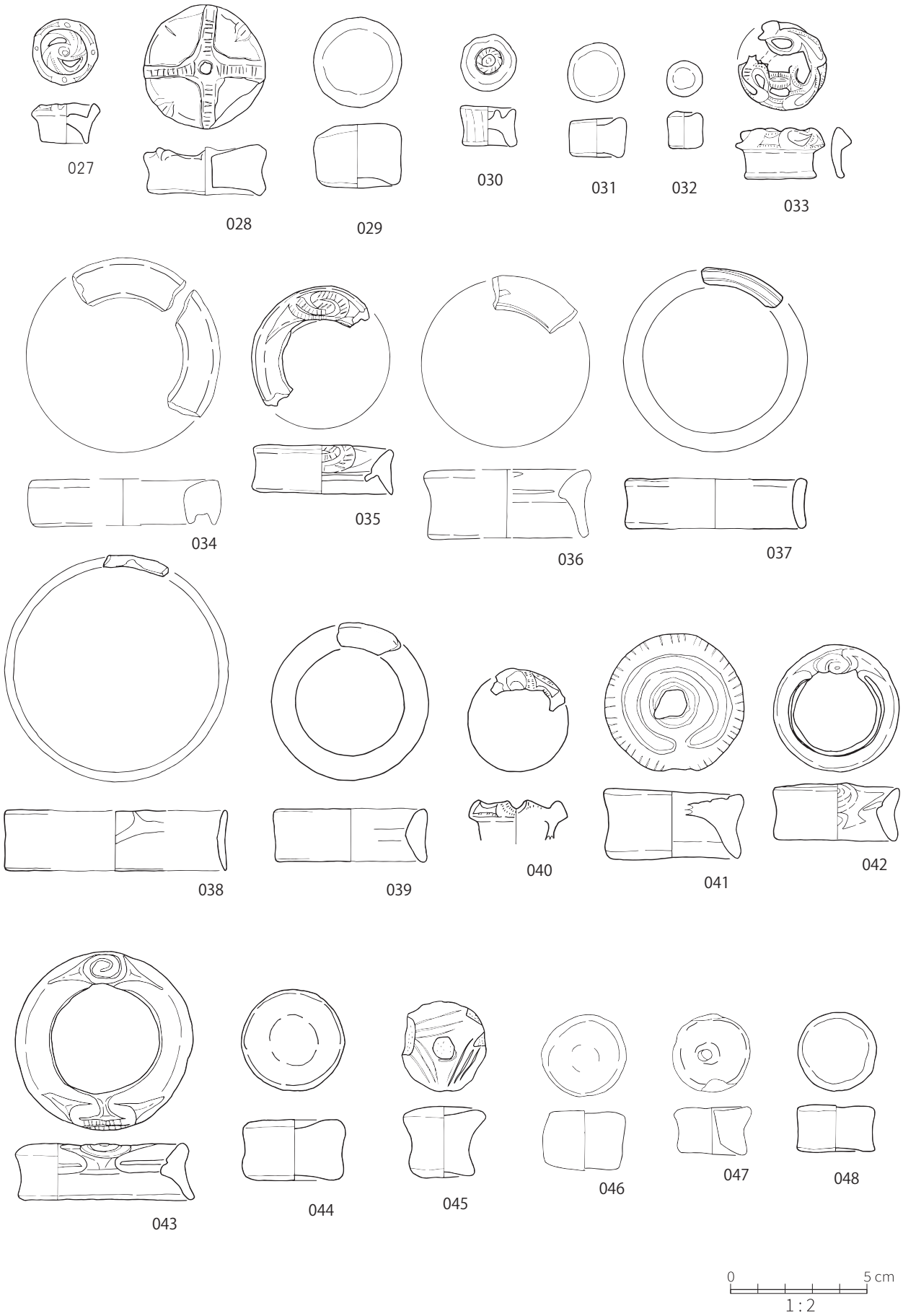
いずれの系列にも分類されなかった土製耳飾りが577点中314点であった。これらの土製耳飾りは無文であるか、小破片であるため全体の文様が判別できないものである。形状、彩色、胎土の傾向を同様に報告する。314点のうち、沈線や刻目などの文様の一部が認められるものをＡ群（86点）、無文のものをＢ群（228点）とした。Ｂ群の破片にはもし残存状態が良好であったならば文様を有していた個体も含まれる。形状はＡ群の81点（94.1%）が滑車形、５点（5.8%）が鼓形である。Ｂ群は136点（59.6%）が滑車形、85点（37.2%）が鼓形、２点（0.8%）が筒形、５点（2.1%）が棒状形である。顔料塗彩は、Ａ群では86点中15点（17.4%）に赤彩がみられ、Ｂ群は228点中赤彩が12点（0.4%）、黒彩が１点であった。胎土の緻密なものは、Ａ群で86点中39点（45.3%）含まれ、そのなかでも特に緻密なものは７点、Ｂ群では228点中41点（17.9%）あり、特に緻密なもの９点を含む。

引用・参考文献

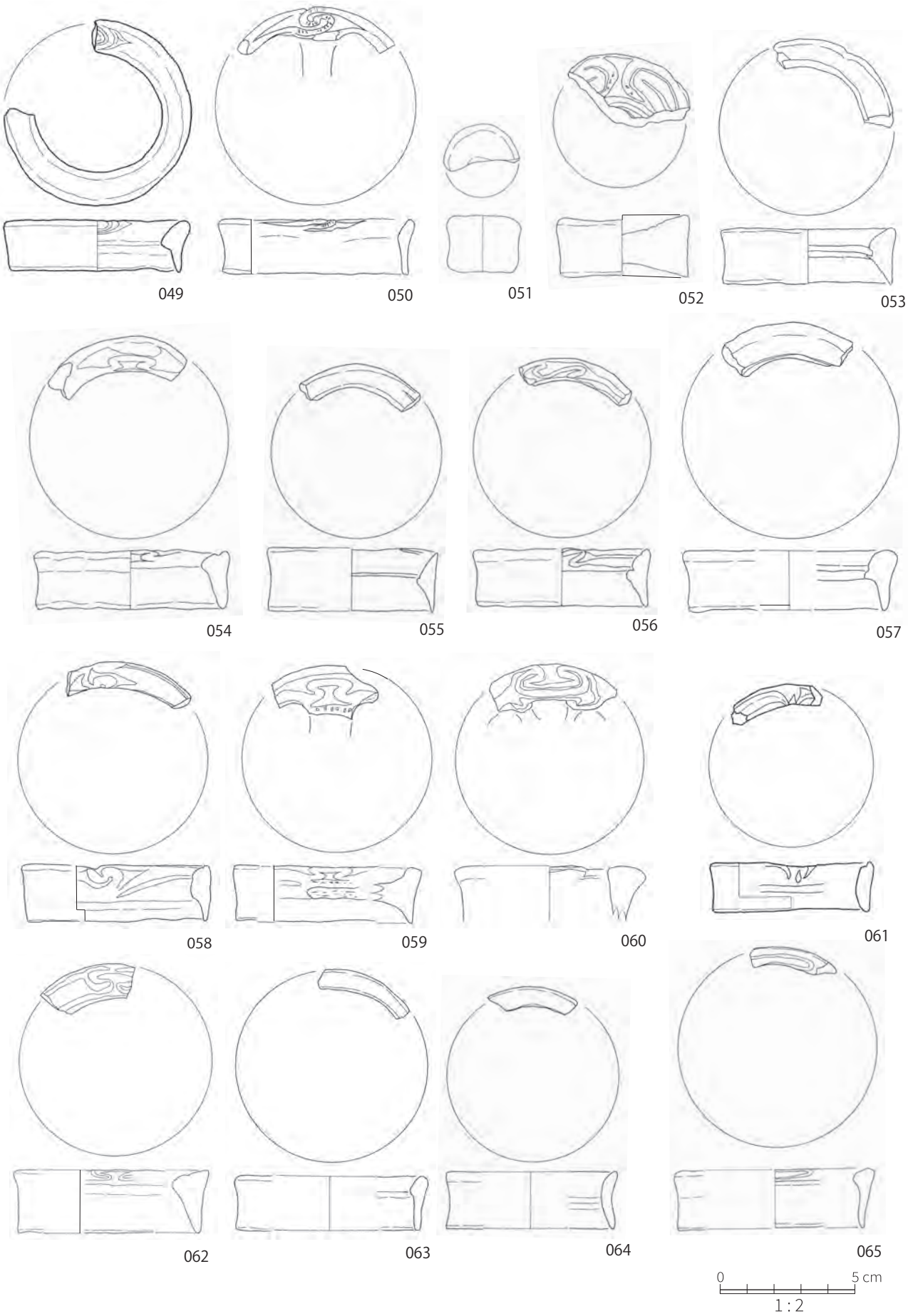
埼玉県遺跡調査会　1974　『埼玉県遺跡調査会報告　第25集　高井東遺跡調査報告書』
設楽博已　1989　「土製耳飾」『縄文文化の研究９縄文人の精神文化』雄山閣出版
金成南海子・宮尾　亨　1996　「土製耳飾りの直径」『國學院大學考古学資料館紀要』第12輯國學院大學考古学資料館
角田祥子　2000　「土製耳飾り観察の視点」『東国史論』第15号　群馬考古学研究会
新潟県中郷村教育委員会　2000　『籠峰遺跡　発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』
松本市教育委員会　2018　『松本市文化財報告 No.228　長野県松本市エリ穴遺跡―発掘調査報告書―遺物編』


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
0
5 cm
1 : 2

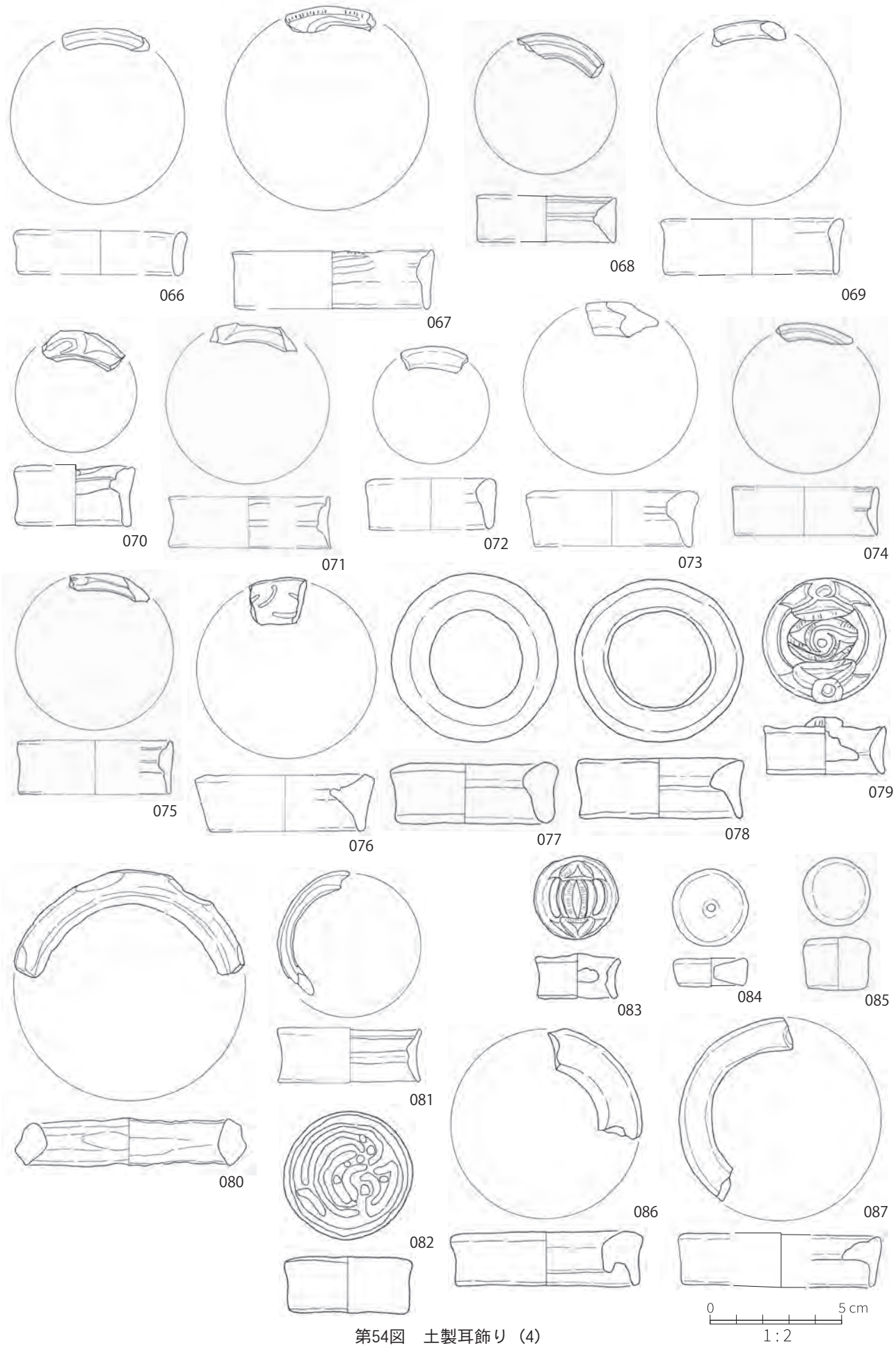
第51図　土製耳飾り（1）


027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
0
5 cm
1 : 2

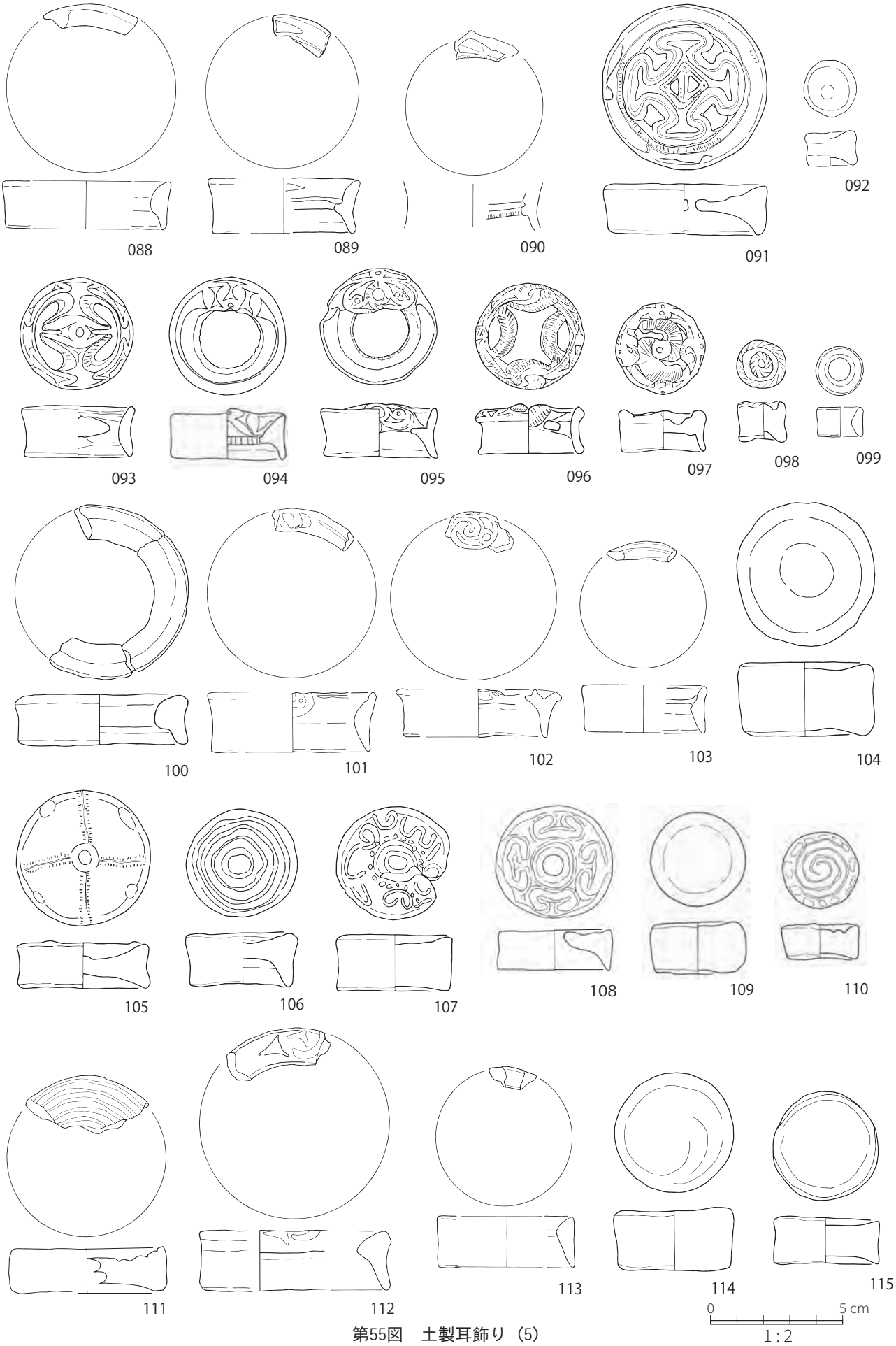
第52図　土製耳飾り（2）


049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
0
5 cm
1 : 2

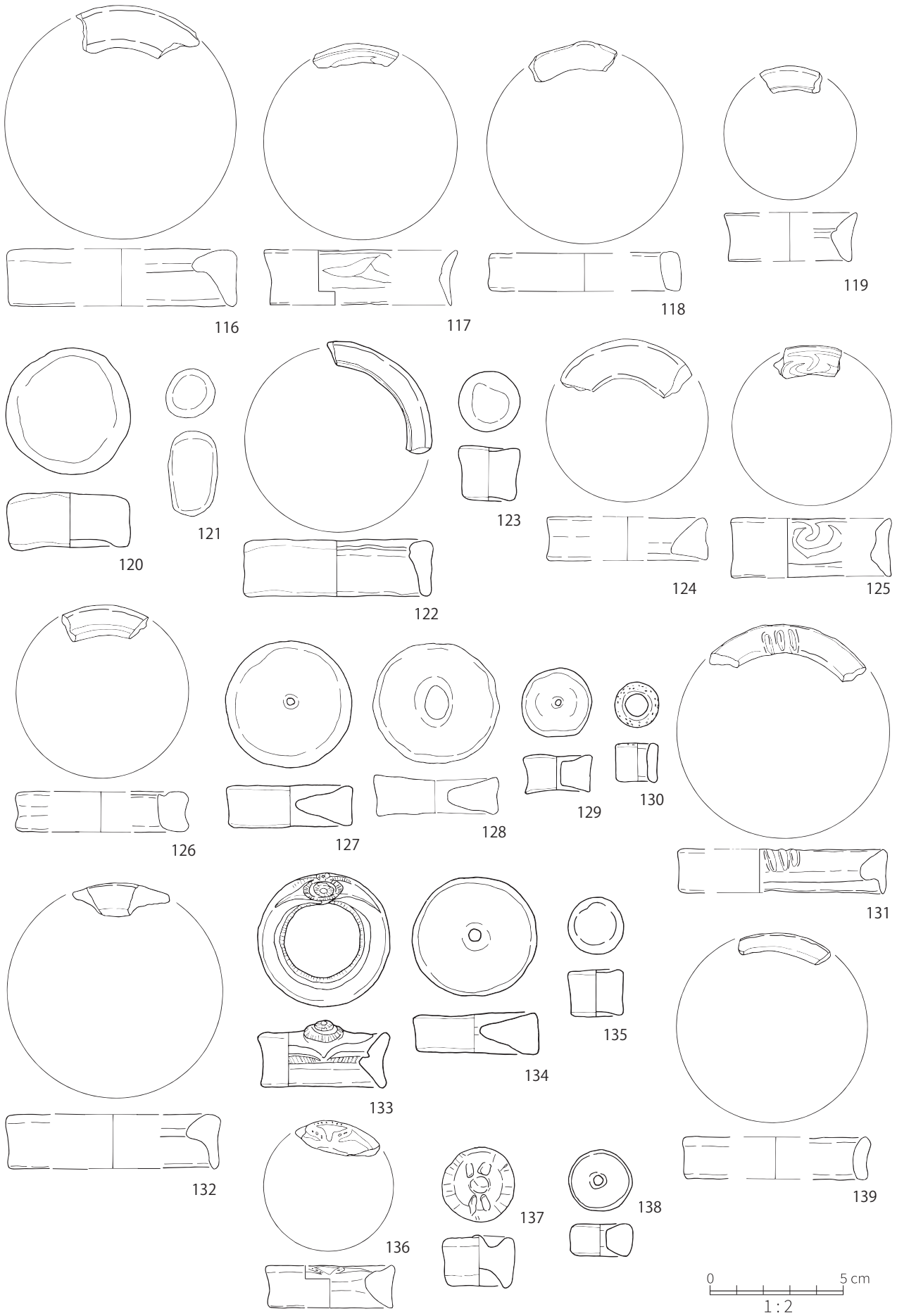
第53図　土製耳飾り（3）


066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
0
5 cm
1 : 2

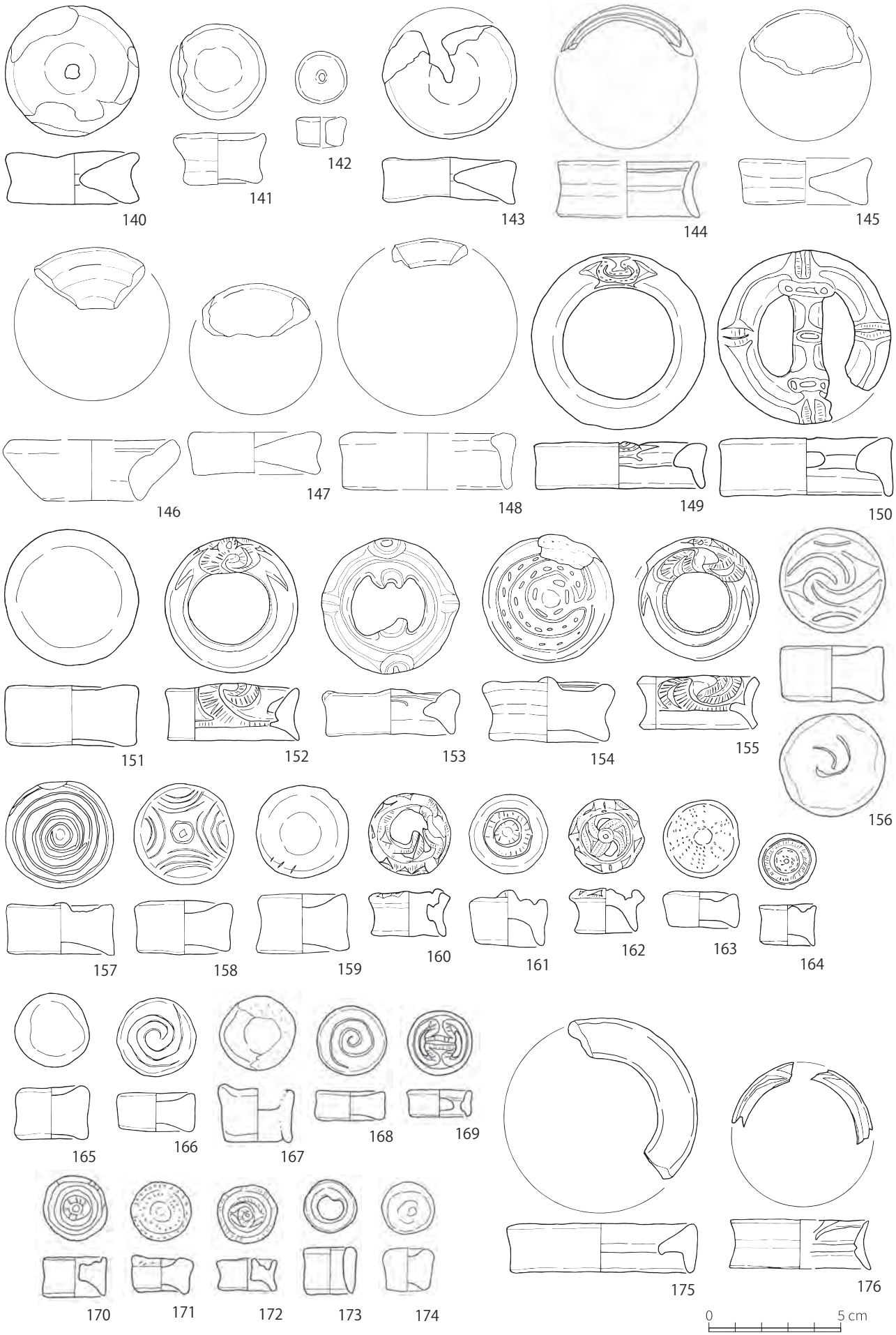
第54図　土製耳飾り（4）


088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
0
5 cm
1 : 2

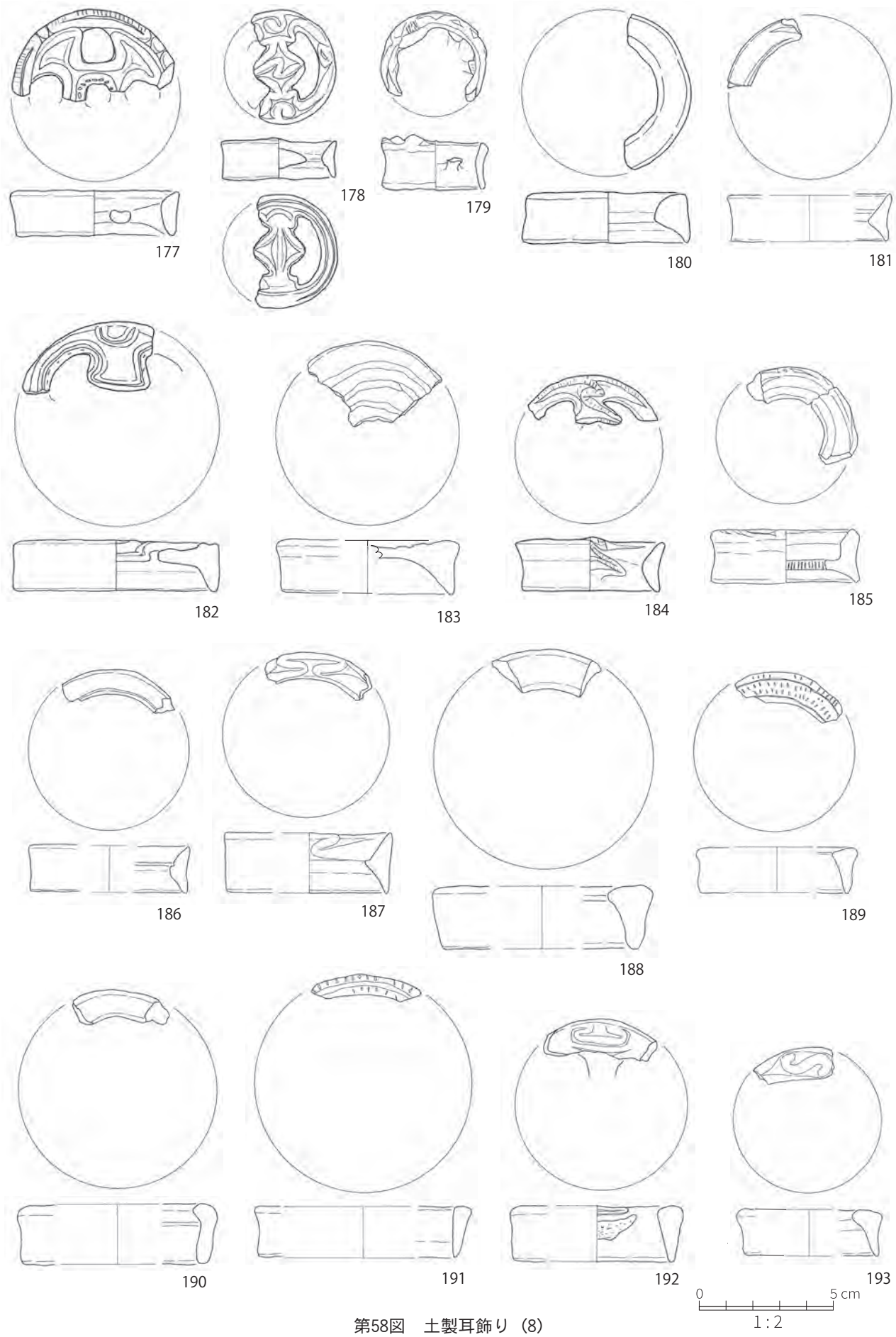
第55図　土製耳飾り（5）


116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
5 cm
1 : 2

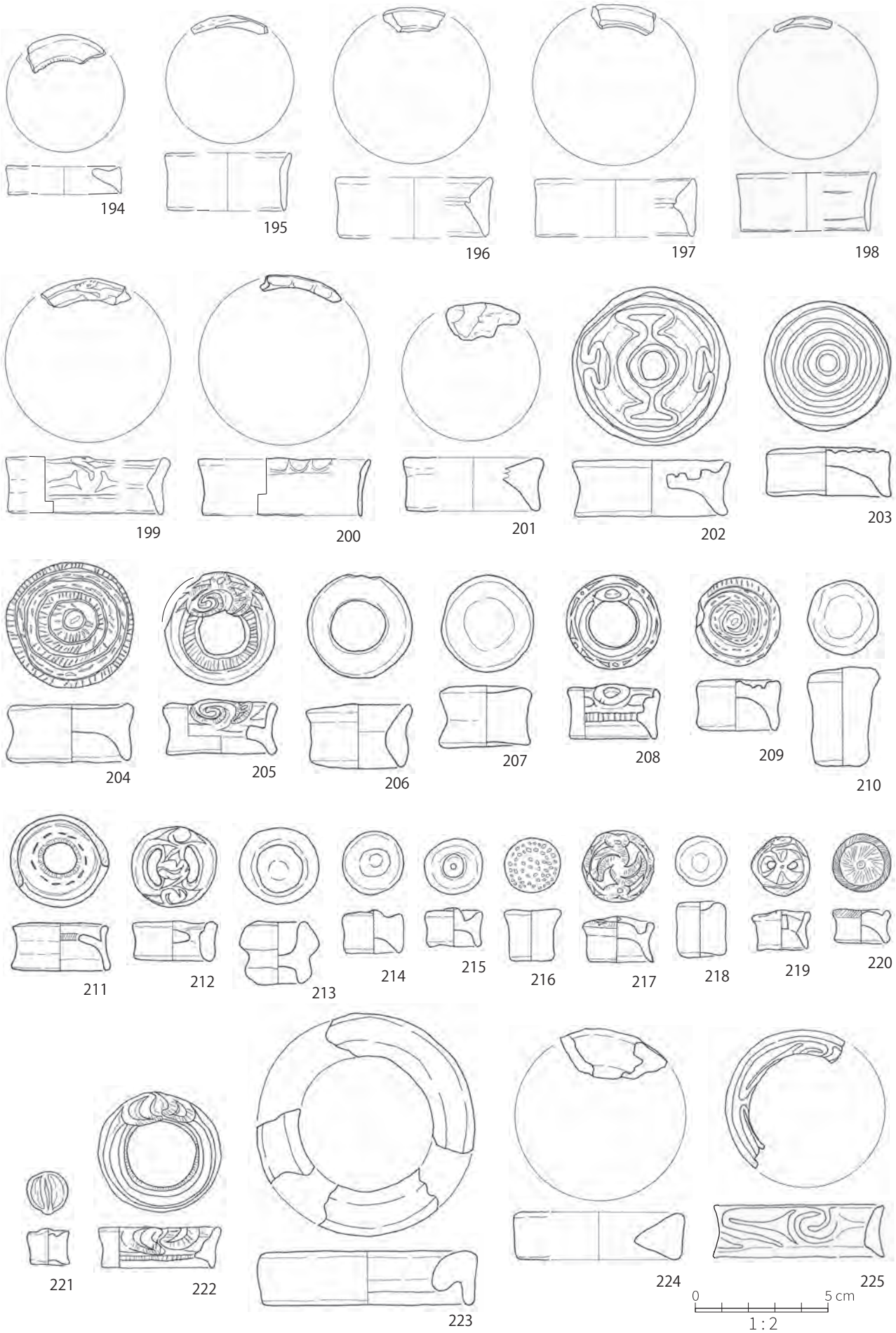
第56図　土製耳飾り（6）


140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
0
5 cm
1 : 2

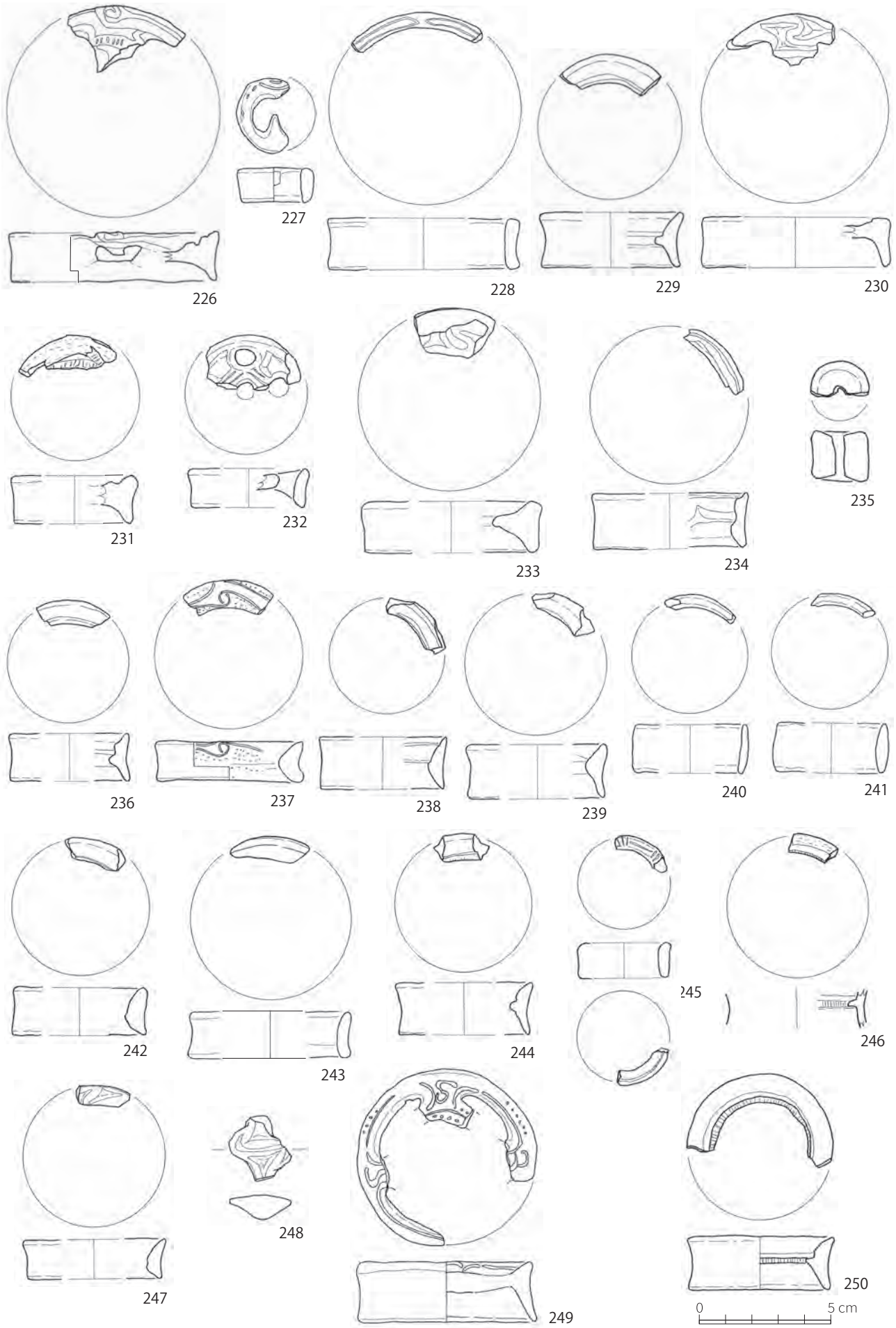
第57図　土製耳飾り（7）


177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
0
5 cm
1 : 2

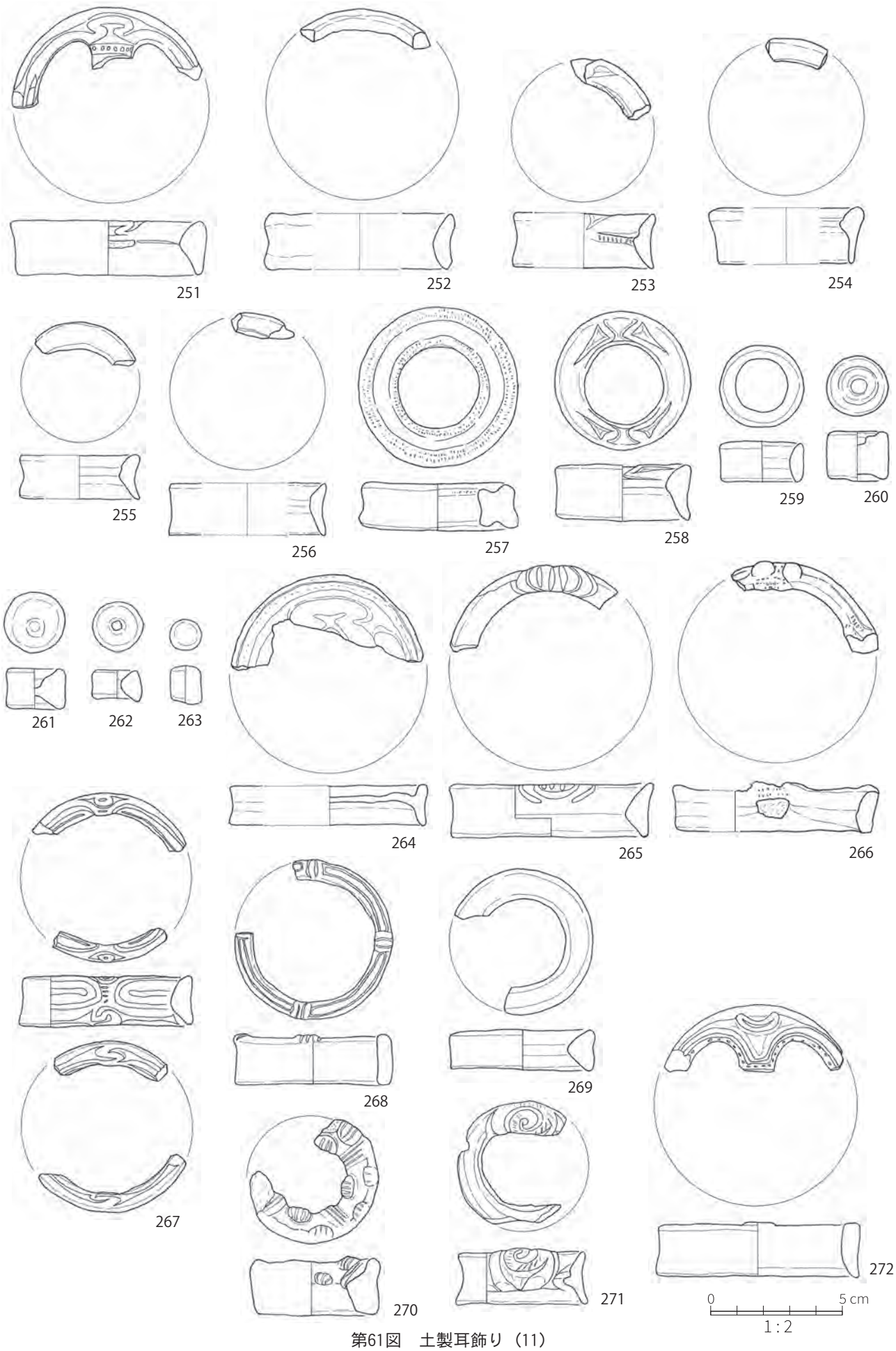
第58図　土製耳飾り（8）


194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
0
5 cm
1 : 2

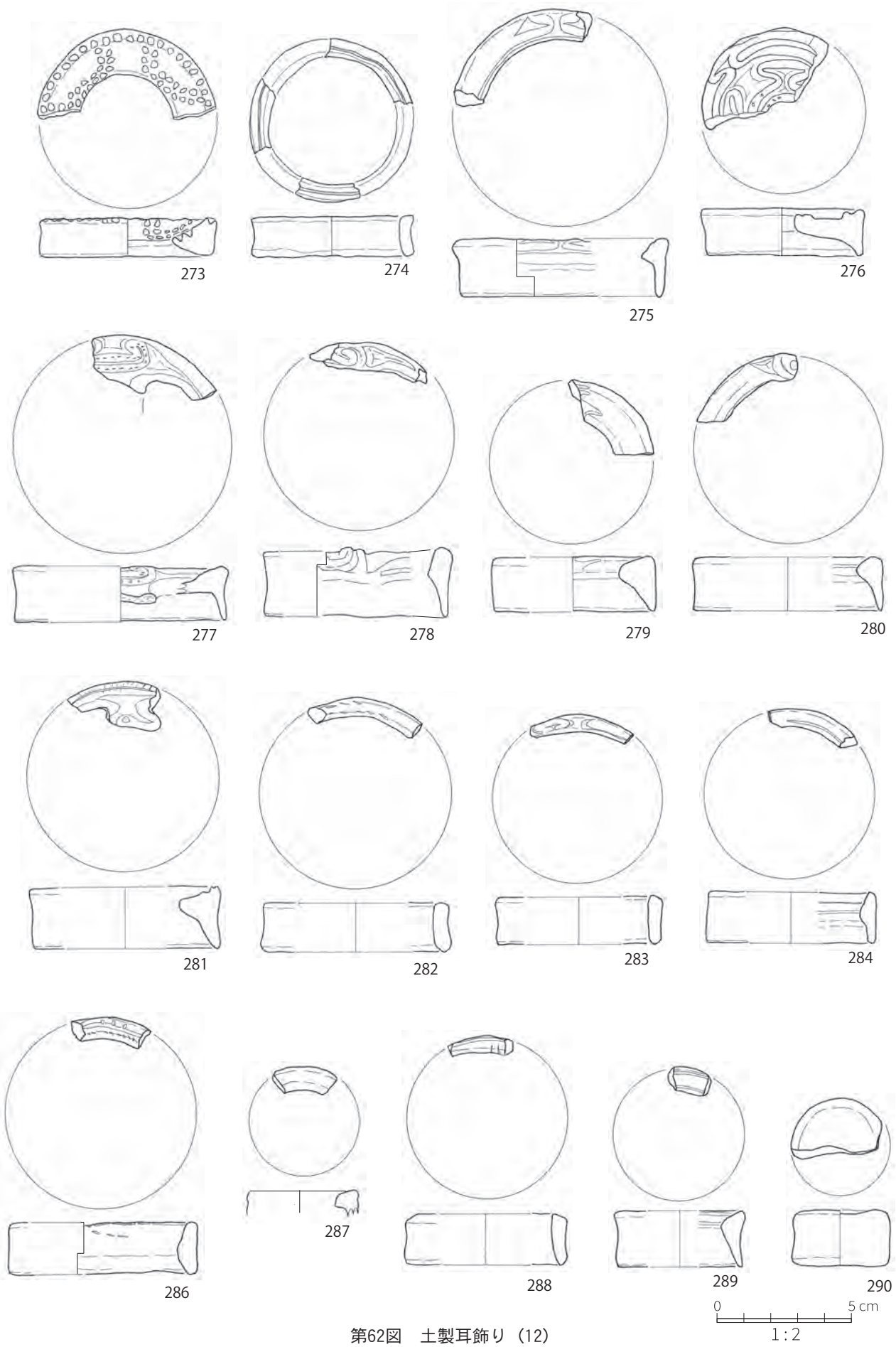
第59図　土製耳飾り（9）



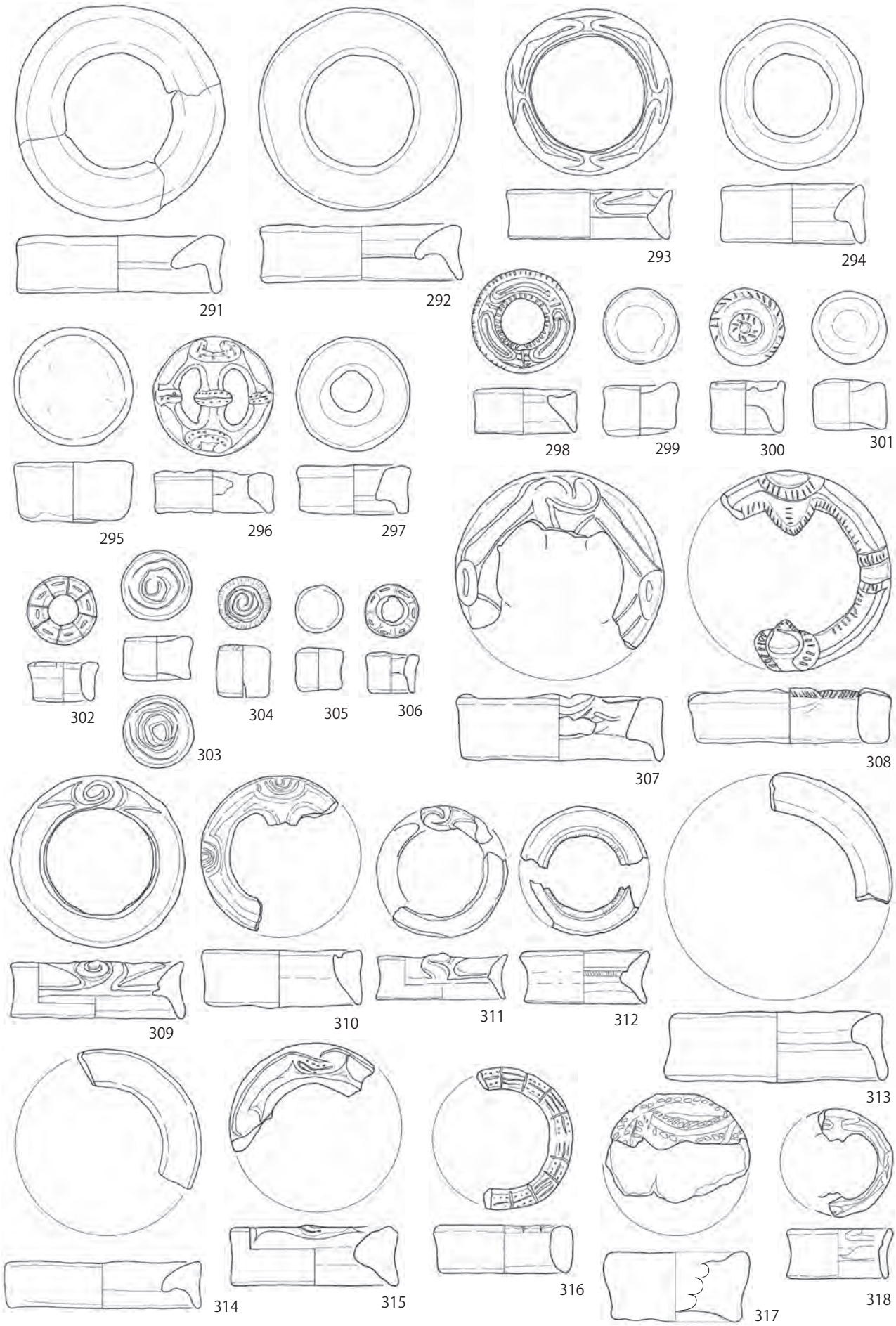
第60図　土製耳飾り（10）



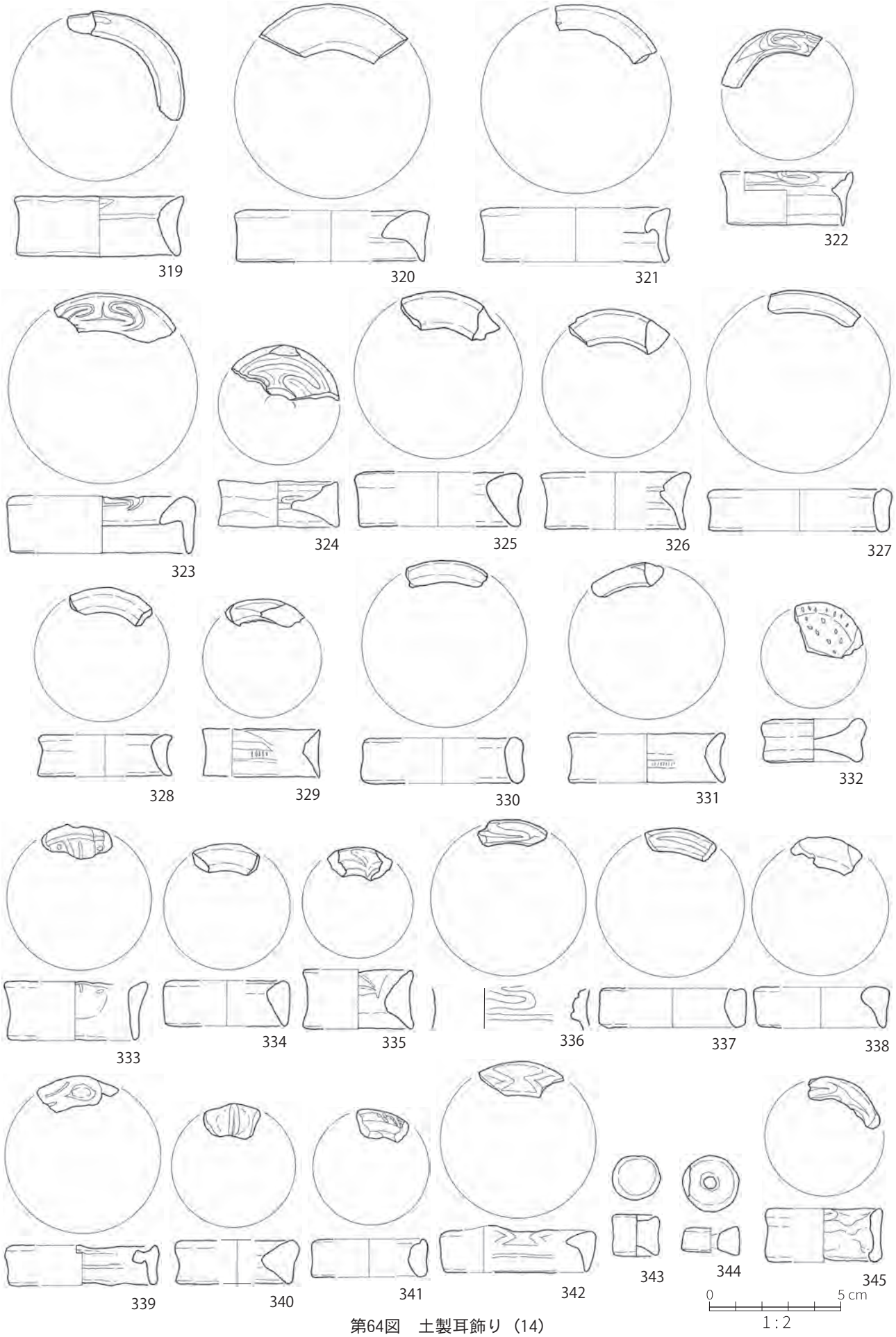
第61図　土製耳飾り（11）



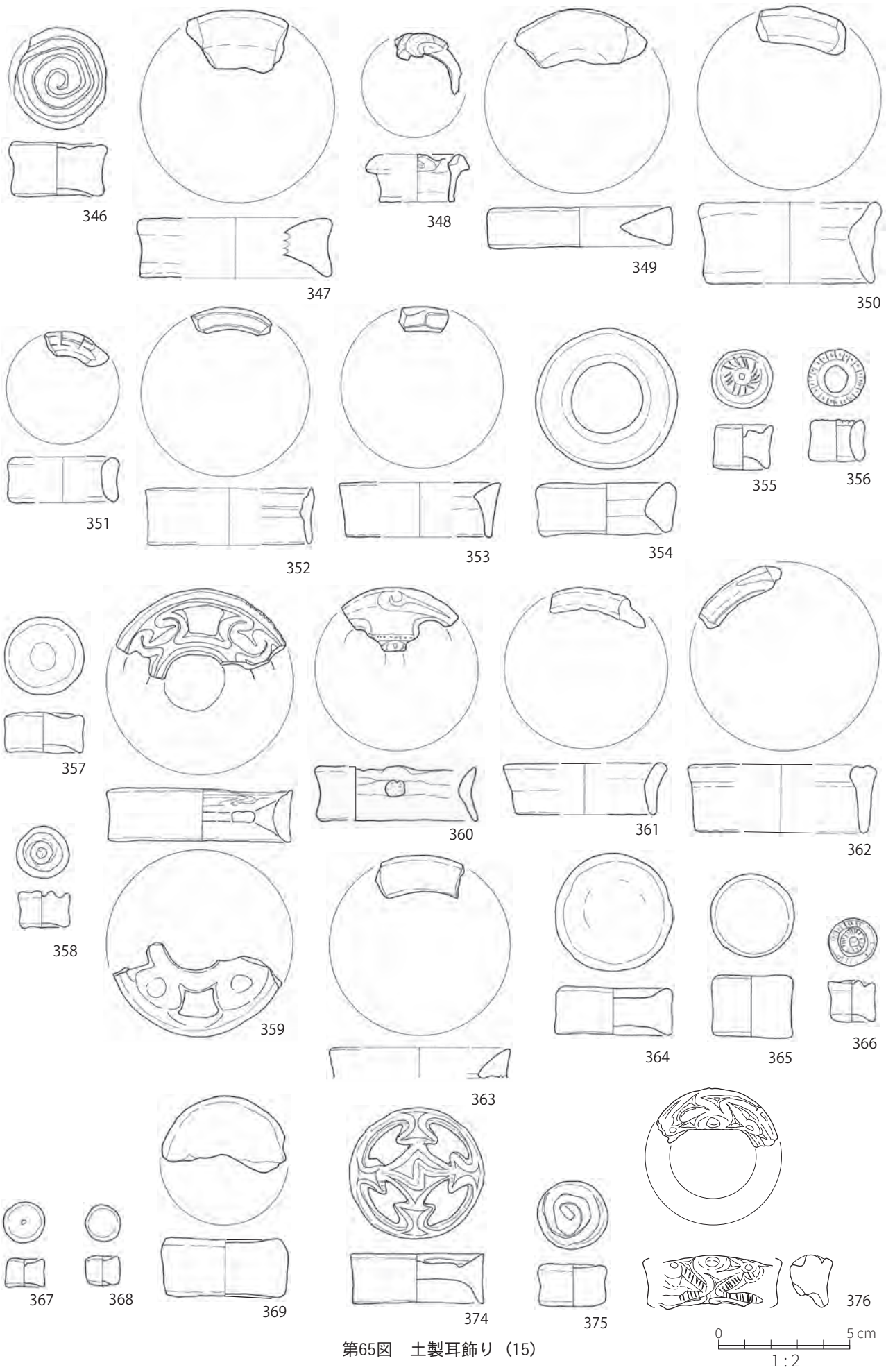
第62図　土製耳飾り（12）



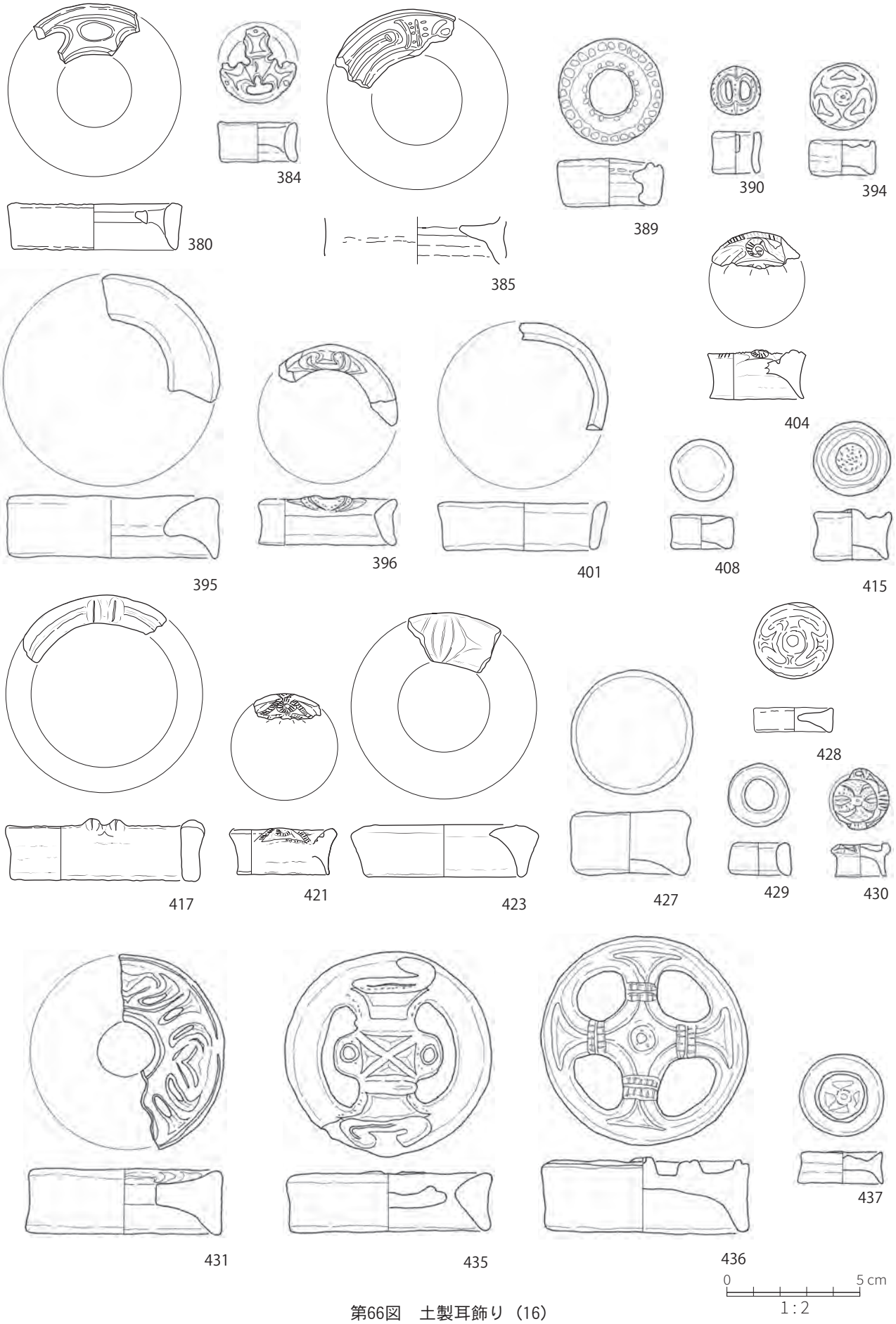
第63図　土製耳飾り（13）



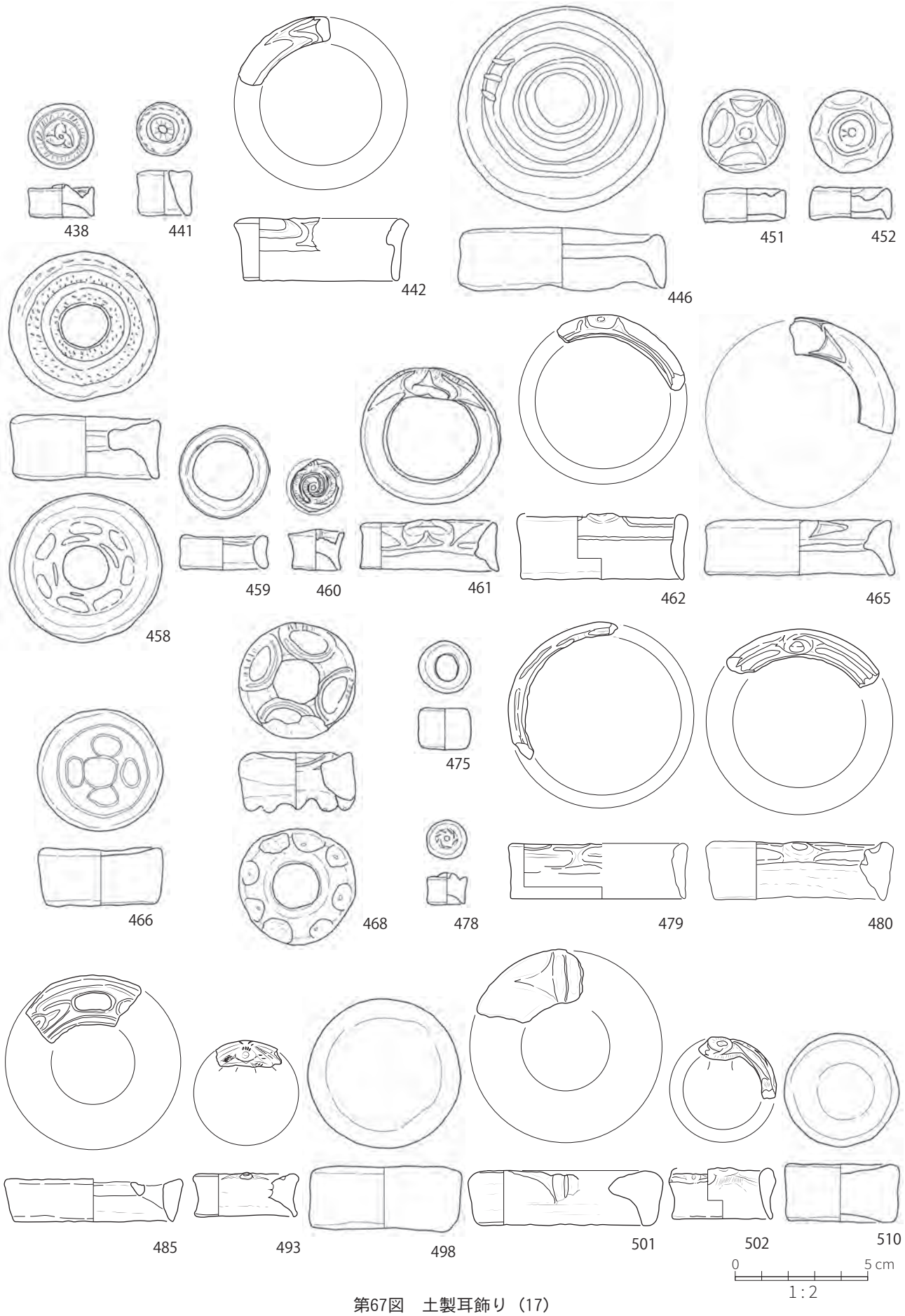
第64図　土製耳飾り（14）



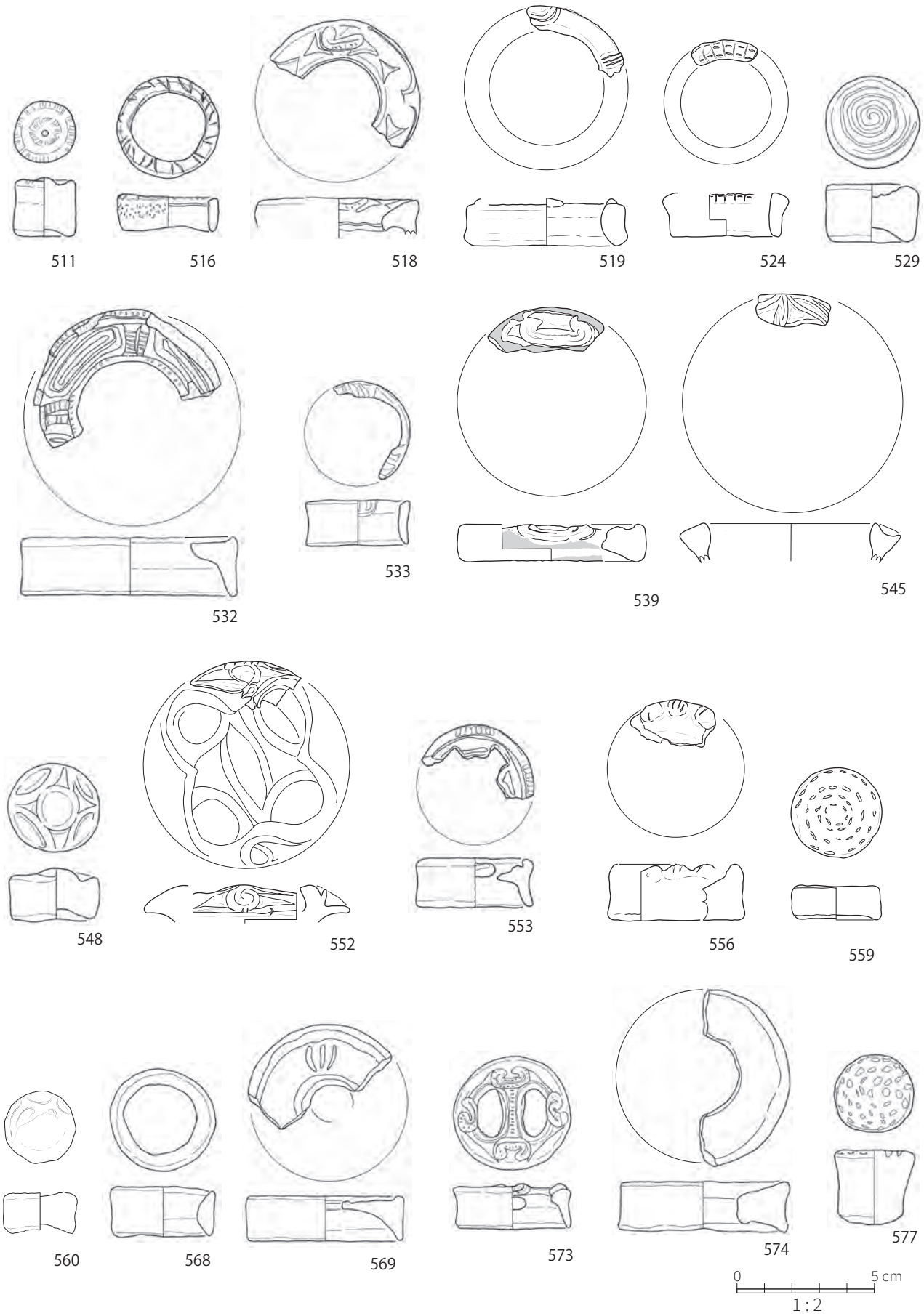
第65図　土製耳飾り（15）



第66図　土製耳飾り（16）



第67図　土製耳飾り（17）



第68図　土製耳飾り（18）

第３節　その他の土製品

１．土　偶（第69図・第70図）

出土した土偶21点のすべてを図化した。

出土地点が遺構にともなうものはＡ区住居跡覆土５点、確認調査テストピット内住居跡覆土３点の計８点である。それ以外では包含層から出土したもの12点、表面採集１点である。

⑴　脚部（１～３、５～７、９、10、12、14～18、20）

１は大型の中空土偶の脚部破片である。膝とみられる屈曲部に沈線による同心円を表現し、その左右に三叉文を表現している。脚部全体を沈線で施文し、脛部の沈線間にはすり消し縄文を施す。脚部付け根～胴体の基底部付近に径８ミリほどの貫通孔がみられる。赤彩の痕跡がわずかにみられる。３は足指状突起表現がある。ふくらはぎ側に縦筋状の窪みがみられる。５は正面側に足指状突起表現、浅く巾広い沈線が横方向に引かれる。６は左側脚部で沈線による足指表現がある。背面に沈線、正面～左側面～背面にかけて縄文を施す。７は正面にへら状工具による調整痕がある。２、９は脚部と台帳に記載されるが特徴から腕部の可能性がある。成形時の粘土塊接合面が残る。10は端部が欠損している。12は右側脚部と推定される。背面に沈線文がみられる。14は中空の脚部で、芯棒を抜いた後のような空洞を呈する。膝とみられる屈曲部から背面側にかけて円弧文を施している。15は膝とみられる屈曲部の表現がある。胴体部分と接合していた欠損面は縦に広い。16、17はともに上部横方向に破損面がみられる。足の甲部分の表現がみられる。18はがに股状に胴部に接合していた脚部である。足首・踵に相当する部分を屈曲させ足の甲を表現している。20も18と同様であるが剥落面の観察により成型時の粘土塊接合面が観察される。

⑵　頭部（８、11）

８は頭部破片である。やや扁平に成型されているが後頭部に厚みを持たせ、鶏冠状突起を施している。眉丘突起から鼻筋にかけてつなげ、盛り上げている。目、口はくぼみにより表現している。粘土の貼り付けにより耳飾りの表現がみられる。箆状工具による正面の調整痕がみられる。11はハート形土偶とみられる。顔面の大部分は剥落により欠損しているが横方向の沈線により目を表し、その上に横方向に眉にあたる部分を粘土紐の盛り上げで表現している。背面中央に中央がくぼんだ突起をつけ、上下に円弧状あるいは円形の沈線文が施される。

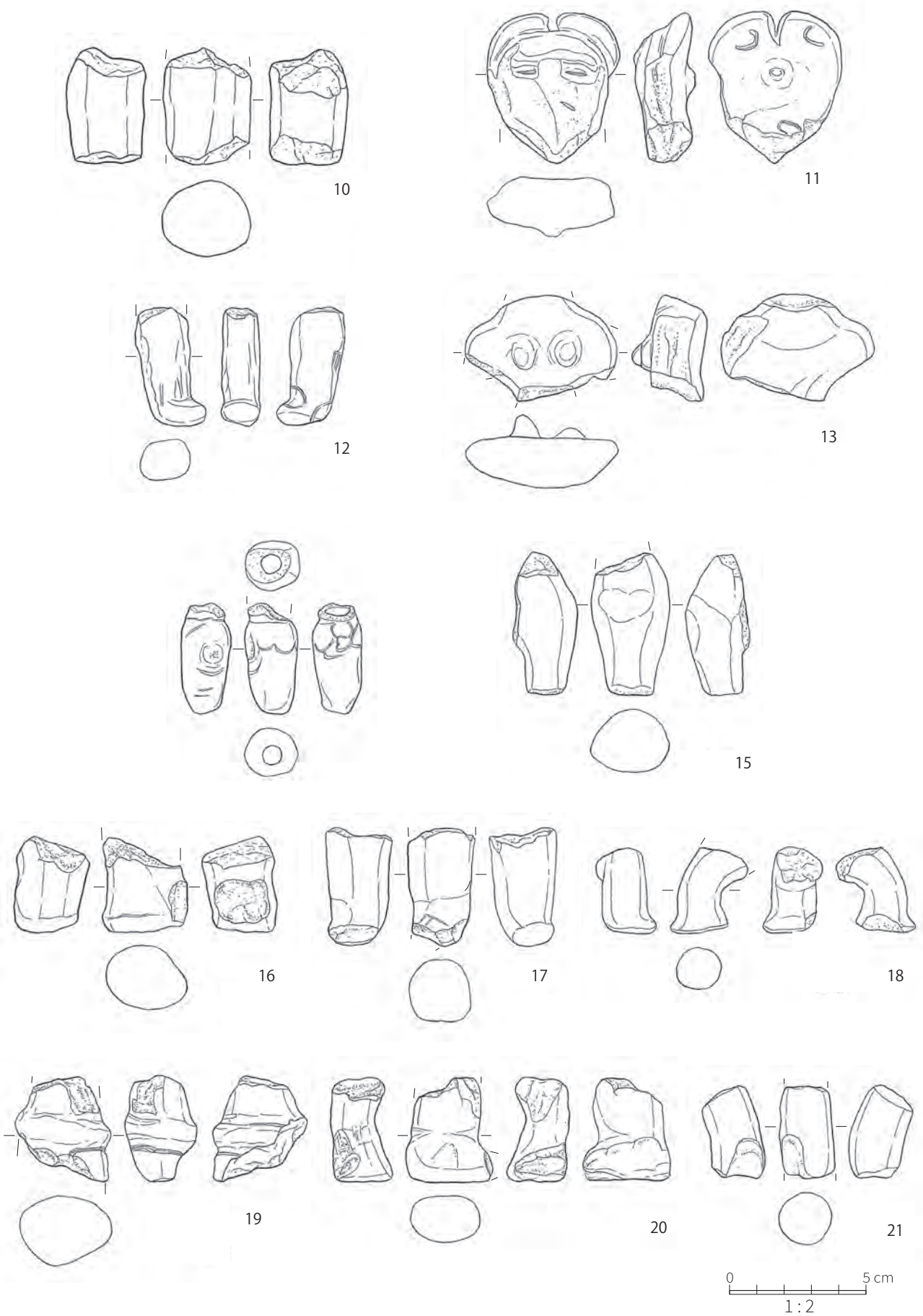
⑶　胴部（４、13、19）

４は胴部～右側脚部破片である。赤彩ならびに黒彩が確認される。臍にあたる部分に貫通孔を有す。貫通孔から上部には三叉文を組み合わせて構成される沈線文を施し、貫通孔を囲み菱形に沈線を引く。表裏は左右対称に近い文様構成である。欠損面の観察から、粘土を胴体芯部と正面部の２層にして整形していることがわかる。13は正面に乳房状の突起が表現されており胴部の上半部とみられる。断面から背側が丸みを帯びた三日月形で、側面から背を反って胸を突き出した形状が観察される。19は胴部とされるが欠損部分が激しく他の部位との関係性が不明確である。

⑷　腕部（21）

21は腕部の一部とみられる。無文で端部を欠損している。

第69図　土偶（1）



第70図　土偶（2）

２．手燭型土製品（第71図）

手燭型土製品は５点出土した。１、柄部は皿部との接合部分から欠損している。皿部口縁部は全体の６分の５ほどを欠損している。文様は施されない。２、柄部は中間部分から欠損している。柄部付け根付近の左側に１箇所、右側に２箇所の刻目がある。他に文様はない。器面調整のための削り痕跡が外面と底面にみられる。３、皿部口縁の４箇所に等間隔ではない小突起を有する。１箇所は欠損しており、５個の小突起があったと思われる。周縁部に細かい刻目を施文する。板状の把手の上側に渦巻き様の粗い沈線文を施文する。把手端部の中心近くに小さな貫通孔を有す。４、皿部に４単位の同心円文を沈線で表し中央円は貫通孔である。円文の間は楕円の貫通孔でつながれ口縁部に小突起をつける。欠損部はあるが４単位と推定される。把手部は中央に楕円形の孔のある形態で、楕盲孔の左右に３箇ずつの貼付小瘤をつけ、貼付上に沈線刻目を施文する。把手端部にも弱い隆起と沈線による隆帯上の文様がみられる。５、皿部から柄部の接合部分の破片である。柄部の付け根部分から柄部に盲孔がある。口縁部のほとんどは欠損している。皿部・柄部ともに無文である。

３．小型土器（第72図）

14点出土した。01、04、07、08、09は無文で台の付く盃状を呈する。02、05は丸底で無文である。03は蓋形。無文で胴部に４単位の孔を有する。06は指頭痕のあるいびつな筒形。10は平底で胴部が丸く張る。沈線で横位に長方形を数段施文する。11は船形である。12は口縁部を欠損しているが平底で垂直に立ち上がり、底部に木葉痕を有する。13は盃状で台がつく。胴部下半に円弧と刺突で文様が表現される。14はやや平底の皿形で無文である。

４．土版（第73図）

土版は１点出土した。両面ともに左右対称の文様を線刻する。正面は長軸中央縦位の沈線上に７つの円文を配し、円の形状に沿うような三叉状の沈線を左右にたくさん伸ばす。背面はほぼ同じモチーフであるが円文が縦位に５つ、中央部分に三叉文がみられる。赤色顔料が塗彩される。

５．異形土製品（第73図）

１点出土した。板状を呈する用途不明の土製品の破片である。２か所に貫通孔を有する。三叉文を基調とし部分的に縄文を施す。赤色顔料を塗彩している。

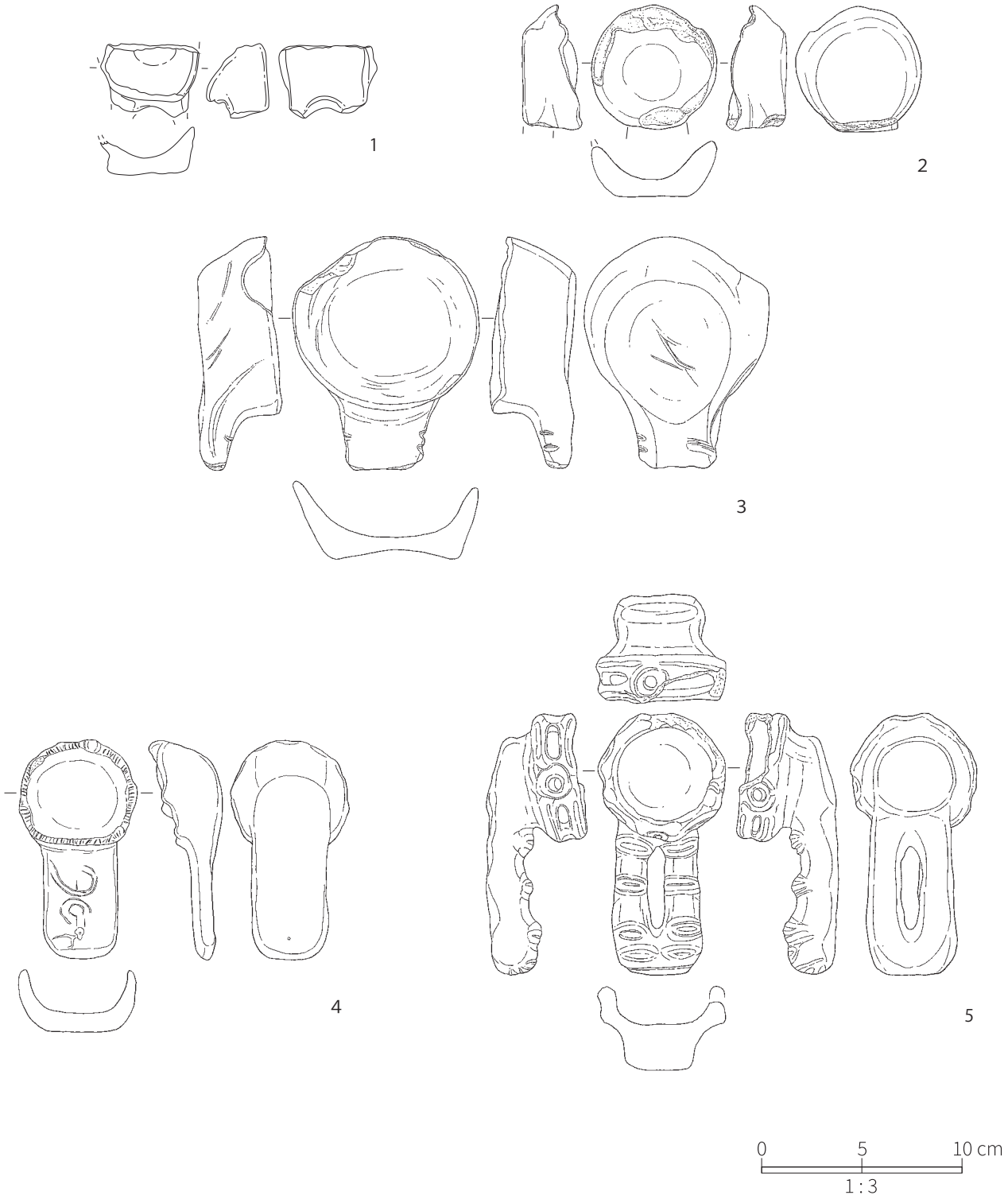
６．スタンプ型土製品（第73図）

１点出土した。細い棒状のつまみに幅2.2センチほどの円すい形を呈する部分がつく。円形の下面はくぼんでおり、無文である。

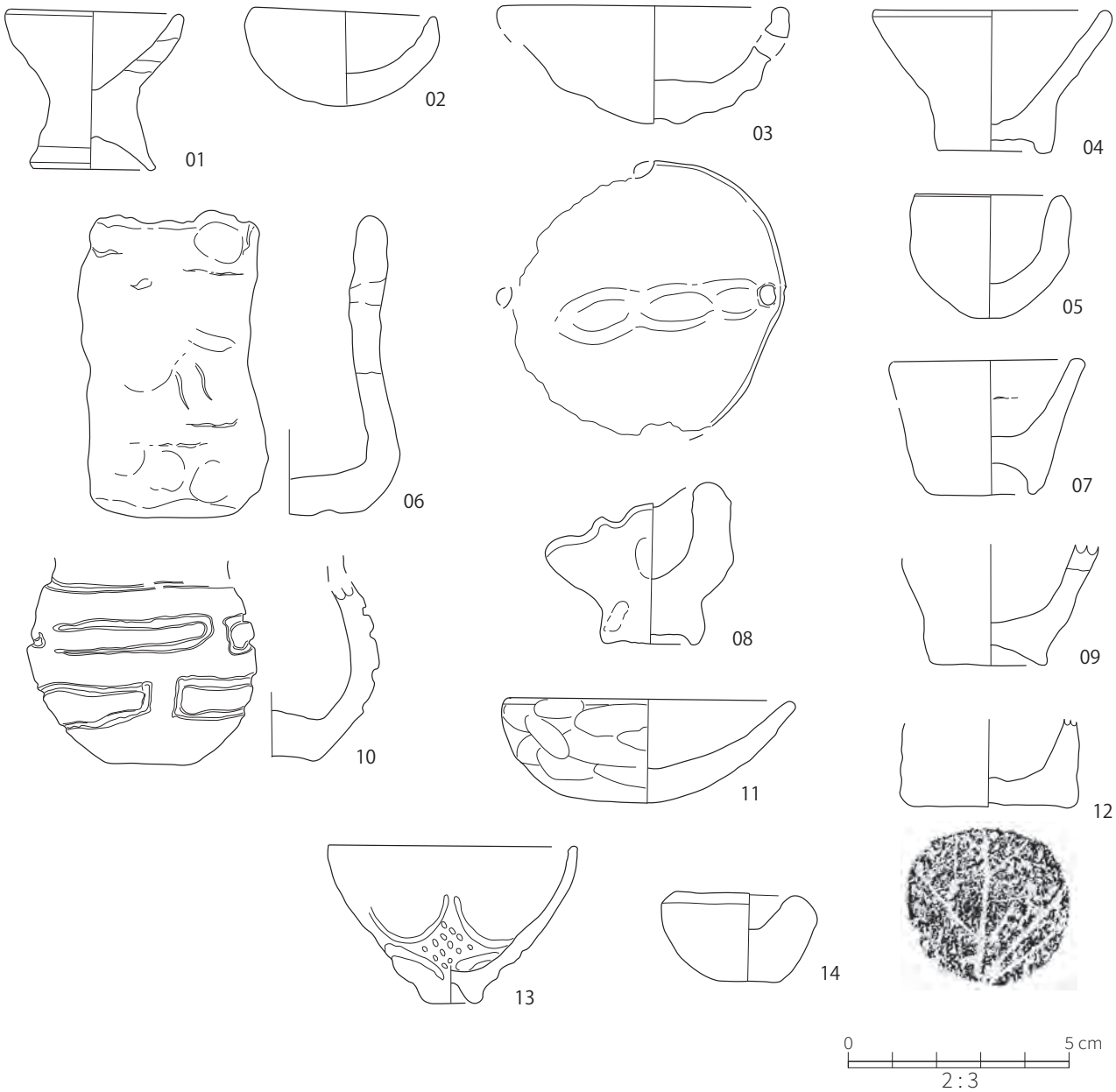
７．土製円盤（第74図・第75図）

土製円盤は土器片を打ち欠き周縁を擦って成形した、あるいは使用の結果、周縁が磨滅した土器破片の再利用品で、用途は不明である。周縁の一部に土器の口縁部を残したものもある。形状は不定形のほか、隅丸方形に近いもの、部分的に直線を呈するものがある。断面は曲面のほか、正面並びに背面に傾けて擦る動作をした結果稜線が生じたもの、また、断面が直線に近い形状となっているものもあり、これは土器片の上下を反転させず擦る動作を行った結果と見られる。なかには13のようにほかの個体と比べて大型のものもあるが、おおむね同じくらいの大きさのように感じられる。元の土器の傾きを想定し

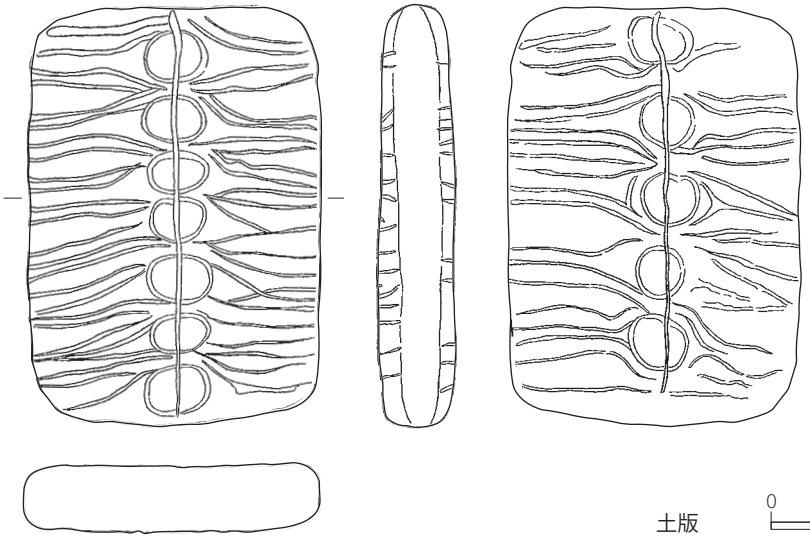
て上下の向きを決定した。大きさの平均数値は高さ2.4センチ、幅2.4センチである。文様が判別できるものもあり、晩期前半の土器が多くみられる。06、20、25、37は文様の貼付の部分が含まれ、片側寄りの中央に近く道具としてのつまみやすさを意識しているようでもある。



第71図　手燭型土製品

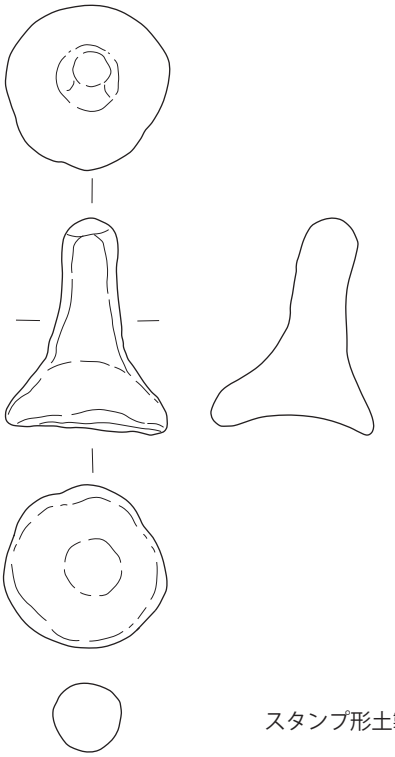


第72図　小型土器



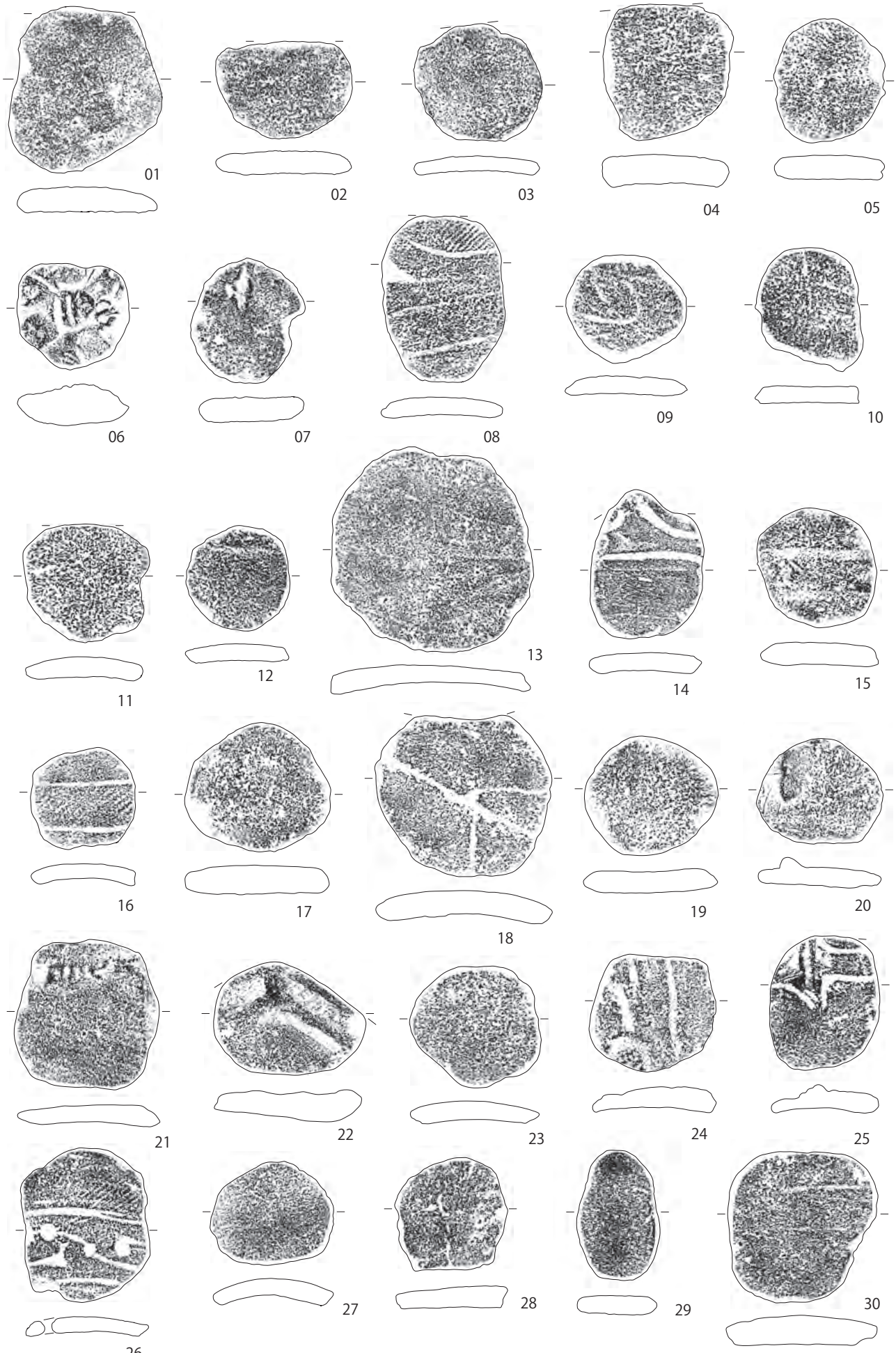
土版　0　5 cm　2 : 3

異形土製品　0　5 cm　2 : 3

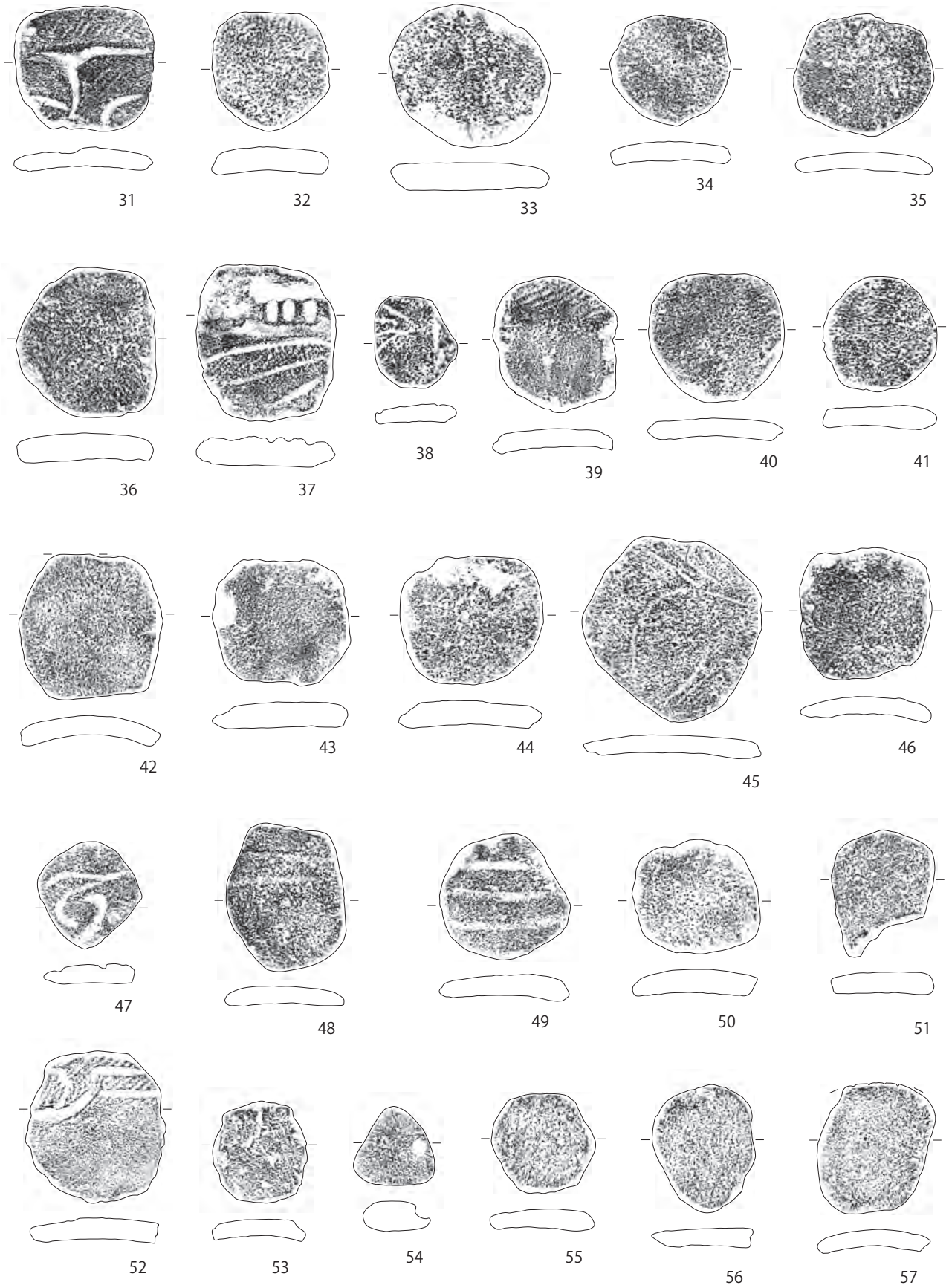


スタンプ形土製品　0　2.5cm　1 : 1

第73図　土版・異形土製品・スタンプ型土製品


01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第74図　土製円盤（1）


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57

第75図　土製円盤（2）

第４節　石　　器

茅野遺跡出土石器の総量は、106～166頁に図示した石器のほかに、Ａ区、Ｂ区、確認調査部分あわせて、剥片（使用痕のあるもの、調整痕のあるもの含む）と石核が中型のテン箱で20箱、片岩の剥片が２箱、打製石器が９箱ある。棒状石製品、多孔石、石皿、凹石など磨製石器類は深型のテン箱に49箱出土した。ここではすべての出土石器を図示することはかなわなかったが、重要文化財指定分を中心に掲載した。

１．石　鏃（第76図～第89図）

本遺跡からは石鏃308点、石鏃未成品76点、石鏃模造品406点が検出されている。これらは晩期前葉のものが大部分を占めているが、一部他時期のものが含まれている。石鏃は重要文化財に指定されているものを中心に図示した。また、石鏃として指定されたものの中には、他器種も含まれていたので、最近の研究成果をもとに今回再分類をおこなった。これらは次のように形態分類することができる。

⑴　凹基無茎鏃（001～020）

縄文時代に通時代的に存在する形態であるが、本遺跡では比較的小形のものが多い。また、石材では黒曜石・黒色安山岩・チャートなど黒色頁岩以外の石材が多い。これは完成品として搬入したものが多かったことを示すものである。そして、晩期以外の時期（おそらく後期）の石鏃である可能性が高い。

⑵　平基無茎鏃（021～025）

この形態は非常に少ない。細身（021）、幅広大形（023）、幅広小形（024・025）のものがある。黒曜石・チャート・黒色頁岩のものがある。

⑶　関東型局部磨製石鏃（026）

黒曜石製の局部磨製石鏃である。形態的に関東２型（平基無茎・縦研磨：大工原 2006）に分類されるもので、晩期前葉のものと判断される。

⑷　凸基有茎鏃（027～274・278～308）

本遺跡で大多数を占める形態であり、さらにいつくかの形態に細分することができる。形態的特徴が明確で、型式認定できる安通型（大工原 2016ａ）、茅野型（大工原 2016ｂ）と（仮称）押手型（大工原 2014）が存在する。

①茅野型（027～039）

黒曜石製の細身の凸基有茎鏃で、やや大形の１形態（027～030・035・036・039）とやや小形の２形態（031～034・037・038）に細分できる。ほとんどが安行３ａ～３ｂ式期の住居址から出土しているので、この時期のものと判断される。すべて星ヶ塔産の良質の黒曜石製である。(註1) 同時期の周辺遺跡の黒曜石製凸基有茎鏃に比べやや大形であることと、ほとんど完形であることから、実用品ではなく威信財として保有されていたものと考えられる。040・041は茅野型の未成品である。石鏃素材剥片を作出せず、板状の超小形原石（30ｇ以下）から、いきなり押圧剥離により製作されている。この製作技法は非常に特殊なものであり、「カヤノ技法」と呼称しているが、茅野型の大きな特徴の一つである。同型式の石鏃が瀧沢遺跡、安通・洞№２遺跡、横壁中村遺跡、石川原遺跡など群馬県北半部の遺跡から出土し

ている。

②安通型（042・043）

精緻な押圧剥離（片面ずつ調整）により製作された大形の凸基有茎鏃で、黒色頁岩製である。基部形状の違いから042は１ａ形態、043は２ａ形態に分類される。茎部や先端部が欠損しており、実際に使用されたものと判断される。群馬県北半部の山間部を中心に分布する石鏃であり、平野部では確認できない。そのため、山間部で行われる儀礼・祭祀に用いられた石鏃と推定される（大工原 2016ｂ）。また、同形態でやや小形の精製のもの（044～051）は、安通型と共通の範型で製作されたものであり、類似形態と言えよう。

③（仮称）押手型（209）

大形で先端部がやや屈曲する特徴的な形態で、黒色頁岩製である。本遺跡では１点のみで異質な存在である。渋川市押手遺跡にも同形態のものが存在しており、ここから搬入されたものと推定される。

044～274・278～308は一般的な凸基有茎鏃である。044～051は安通型と類似形態のやや小形のものである。おそらく、同じ範型をもとに製作されたものであろう。

それ以外のものについてもいくつかの形態に細分することができる。基部・茎部が明確なもの（052～162・207～212・216～274）と基部が明確でない柳葉形のもの（163～206・213～219）、木葉形のもの（278～308）に大別される。基部・茎部が明確なものにはさまざまなバリエーションが存在しているが、細身のものが多い。これは晩期前葉の周辺地域でも同様であり、時期的な特徴と言える。それ以外の形態も将来的には型式として細分可能なものが含まれている。例えば、221・222は珪質頁岩製の茎部の長い特徴的な形態であり、その可能性が高い。

また、柳葉形・木葉形のものサイズ的には石鏃の範疇に入るので、石槍ではなく凸基有茎鏃の形態が崩れたものと考えられる。

なお、本形態の大部分は黒色頁岩製のものであり、利根川から石材を入手し本遺跡で製作されたものと判断される。同じ利根川で入手可能な石材でも、黒色安山岩は非常に少ないので、黒色頁岩が選択的に用いられていたことが分かる。しかし、小形のもの（125～162・220～274・302～308）では黒曜石・チャート・珪質頁岩・珪質流紋岩などが多い。これらの石鏃は周辺地域から完成品として搬入されたものと推定される。

⑸　凹基有茎鏃（275～277）

晩期中葉以降に一般的な形態であり、これらもこの時期のものと判断される。275は両面交互剥離により側縁部を鋸歯状に作出している。また、276は押圧剥離でほぼ完成させた後、剥片を用いて鋸歯を作出して仕上げたものと推定される。この手法は晩期後葉から弥生時代前期にかけて特徴的に存在するものである。

⑹　石鏃未成品（309～384）

薄手の剥片（石鏃素材剥片）から押圧剥離により二次加工が施されたもののうち、形状がやや不整形のものを石鏃未成品とした。ほとんどが凸基有茎鏃の未成品であり、木葉形のものとの区別がつきにくい。これらの中にも石鏃が含まれている可能性があるが、上記の基準により未成品に分類した。なお、384は大形石鏃のブランクである。このように製作不能な状態に陥っていない未成品が多数存在する理由としては、石鏃製作が成品化まで連続するものではなく、一旦未成品を製作し、必要に応じて石鏃

（成品）を製作していたことによると推測される。

⑺　石鏃模造品（385～510）

従来粗雑な石鏃、あるいは石鏃未成品と呼称されていたものである。このうち厚手の剥片（非石鏃素材剥片）から直接打撃で二次加工が施されたものを「石鏃模造品」として区別した（大工原 2017）。完成品の石鏃は、①薄手の剥片が石鏃素材剥片として選択している、②二次加工は原則として押圧剥離のみで行われる、③完成品の重量は有茎鏃でも３ｇ以下である、④先端部を明確に作出する、⑤基部は矢柄・根鋏に装着できるように薄く仕上げられる、といった特徴がある。しかし、石鏃模造品はこうした条件を満たしておらず、一般的な石鏃製作工程に配置することができない。つまり、石鏃模造品からは石鏃を完成させることができない。したがって、これらは石鏃未成品ではなく、このような「石鏃のようなもの」を目的として製作された別器種と考えられるのである。

こうした石鏃模造品は、晩期前葉に西関東から甲信地域で大量に出土しており、時期的・地域的特徴としてとらえられている。そして、この時期の石鏃激増現象は石鏃そのものの増加というよりはむしろ、石鏃模造品の激増として理解すべきである。こうした石鏃模造品を筆者はかつて粗製濫造モードとして理解し、その要因を石鏃の武器としての利用と考えたことがある（大工原・林 1995）。しかし、本遺跡や千網谷戸遺跡・矢瀬遺跡などの集落遺跡だけではなく、本来石鏃場所ではない天神原遺跡や瀧沢遺跡のような儀礼・祭祀の遺跡でも大量に出土していることに本来の意味があると考えるに至った。儀礼・祭祀の場で生業の道具（第一の道具）である石鏃を大量に製作することは不自然なのである。こうした理由から石鏃模造品は儀礼・祭祀の道具（第二の道具）として製作・使用された石器と推定される。つまり、晩期においては石鏃模造品を装着した模造弓矢を用いた「石鏃祭祀」が行われていたと考えておきたい。晩期前葉の石鏃では地域ごとに特徴的な石鏃型式が出現するのも、これと関連する現象と思われる。

本遺跡の石鏃模造品の中には、直接打撃のみのものと、最終段階で押圧剥離が施されたものが存在する。後者については、石鏃未成品の可能性のあるものが含まれているが、粗雑であること、厚過ぎることから石鏃模造品に分類した。なお、505～510のような大形のものは、石槍模造品であった可能性もある。

小　結

・晩期前葉の黒曜石を用いた細身の凸基有茎鏃（茅野型）は、本遺跡で製作された特徴的な石鏃であり、茅野集団を表徴するものである。茅野型は群馬県北半部に散在しており、これらの地域との交流があったことを示している。

・本遺跡では晩期前葉の関東型局部磨製石鏃は１点しか出土していない。また、村内の後期後葉を中心とする下新井遺跡でも１点しか出土していない。筆者はこの石鏃は漁撈用に用いられたと考えているが、河川から離れた榛名山東麓でほとんど出土しないことは、これを傍証するものである。

・本遺跡で大部分を占める細身の凸基有茎鏃は、黒色頁岩が圧倒的に多い。これに対し、凹基無茎鏃や小形の凸基有茎鏃では黒曜石・黒色安山岩・チャート・珪質頁岩など黒色頁岩以外の石材が多用される傾向が認められる。前者は剥片・石核・未成品が揃っていることから、大部分は本遺跡で製作されていたものと判断される。しかし、後者は周辺地域から完成品として搬入されたものと推定される。

・黒色頁岩製でも安通型石鏃や（仮称）押手型石鏃は数点しか存在していないことから、赤城南麓の安通・洞遺跡や北毛地域の矢瀬遺跡から搬入されたものと考えられる。

・晩期前葉には石鏃模造品が多数製作されているが、本遺跡ではこれを用いた儀礼・祭祀が行われていたと考えられる。
・凹基有茎鏃は形態的特徴から晩期中葉以降のものと判断される。（大工原）

註

1　茅野型石鏃が出土した住居址出土の黒曜石製剥片・石核の蛍光Ｘ線分析の結果、78.4％が星ヶ塔産（諏訪産）であることが判明している（建石ほか 2011）。その後、2019年には眞島英壽氏（明治大学黒耀石研究センター）により、ポータブル蛍光Ｘ線分析装置により茅野型石鏃・同未成品全点（15点）の分析を実施し、すべて星ヶ塔産であることが確認されている（正式な分析結果は未公表）。

引用・参考文献

大工原豊・林　克彦　1995 「配石墓と環状列石」『信濃』47−４　信濃史学会　pp.32−54
大工原豊　2006 「縄文時代後・晩期の局部磨製石鏃―縄文石器の型式変化に関する研究―」『縄文時代』17　縄文時代文化研究会　pp.23−50
大工原豊　2008 『縄文石器研究序論』六一書房
大工原豊　2014 「群馬県域における石鏃の型式について」『2014年度青山考古学会研究発表要旨』青山考古学会
大工原豊　2016ａ 「安通型石鏃の研究―群馬地域の後・晩期の石鏃型式―」『青山考古』31・32合併号　青山考古学会　pp.5−23
大工原豊　2016ｂ 「茅野型石鏃の研究」『資源環境と人類』６　明治大学黒耀石研究センター　pp.1−12
大工原豊　2017 「下布田型石鏃の研究―縄文晩期中葉の飛行機鏃の型式―」『石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備』（科学研究費補助金 基盤研究（Ｃ）25370894）大工原豊　pp.94−110
大工原豊・長田友也・建石　徹編　2020 『縄文石器提要』ニューサイエンス社

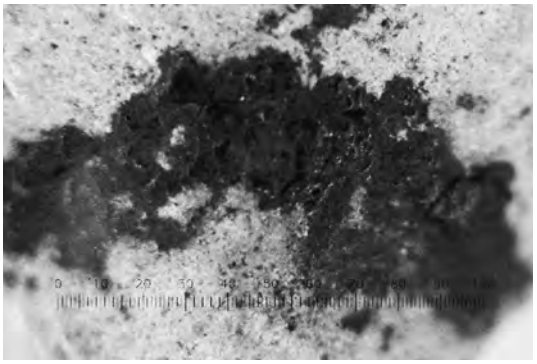
※付着物が確認された石鏃について

16点の石鏃に、基部などへの付着物が肉眼で観察できたため、実体視顕微鏡で確認した。すべての資料で付着物は褐色で層状を呈していた。外側の層は樹脂光沢を有する黒褐色であり、剥落を免れた部分で観察できた。下層は茶褐色の土か木屑様のペースト状に見える。表面に樹脂光沢を呈することと、内側が粉っぽく土か木屑様に見えること、付着物と接する石材の表面に茶褐色の色素定着があることなどから、付着物は漆もしくは膠である可能性が考えられる。

なお、湯淺健太（明治大学大学院理工学研究科）らは、埼玉県南鴻沼遺跡から出土した縄文時代後期前葉から中葉の矢柄についた状態で発見された石鏃に付着していた膠着材に熱分解 -GC/MS 分析を行ったところ、膠着材の素材は漆のほか天然アスファルト成分に含まれるテルペノイドやステロイドが含まれるという結果を得ており、この報告は２種類以上の素材を混ぜ合わせて接着剤として使用したことを示している。（角田）

引用・参考文献

早坂仁敬・目黒まゆ美・湯淺健太・本多貴之・宮腰哲雄　2014「南鴻沼遺跡における縄文出土遺物の調査報告」『歴史的な漆工芸品を科学分析評価するシステムの構築』第1号（2013年度研究報告）明治大学バイオ資源科学研究所



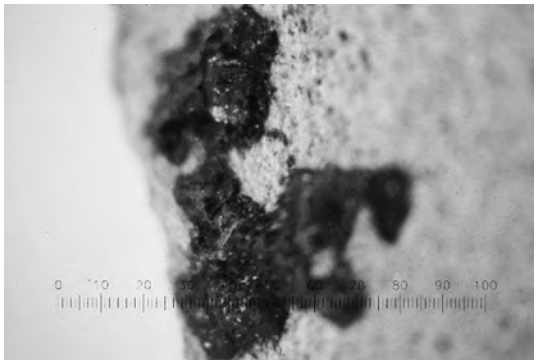


写真１－４－１　石鏃付着物確認部分（左：No.46、右：No.119　縮尺不同）

２．石　錐（第90図～第92図）

剥片を素材とした石器で、一部を棒状に加工して錐部を作り出したもの。回転による穿孔に使用したと想定される。次の基準に則り分類した。錐部は錐として使用する棒状の部分の形状、大きさを基準とした。つまみ部は形状が左右対称であるかどうかを基準とした。結果、以下のＡ～Ｄの８類に分類し、分類結果を観察表に記載した。

分類	特　　徴	番号・点数
Ａ　類	つまみがなく棒状のもの	１～10　10点
Ｂ　類	上部が太くなるもの	11～22　11点
Ｃ　類	つまみ部があり、つまみの形状は左右非対称であるもの	23～28　５点
Ｄ　類	つまみ部があり、つまみの形状は左右対称のもの	29～46　17点
Ｅ　類	つまみ部が大きく縦長のもの	47～50　４点
Ｆ　類	つまみ部の付け根が横に広がるもの	51～63　12点
Ｇ　類	つまみ部に対して錐部が小さなもの	64～68　４点
Ｈ　類	上下に錐部を有するもの（石鏃再利用品も含む）	69～78　９点

石材は78点のうち黒色頁岩61点（78.2％）と最も多く、次いで珪質頁岩８点、チャート５点、硬質頁岩３点、黒色安山岩１点である。

３．石槍（第93図）

全部で５点である。01は木葉形を呈す。両面交互剥離技法により素材を成形し、左右両側面を押圧剥離により調整している。基部を折損している。02は素材剥片を細長形に成形後、上半部に細かく調整を加えている。下半部は階段状剥離をなす。03は断面三角形の素材剥片を両面交互剥離により荒く成形し、側縁に調整を加えている。中期の特徴を示している。04細長形に両面交互剥離により成形後、先端から側縁にかけて押圧剥離により製作している。05は素材の原礫面と主要剥離面を残す。一部の縁辺を両面交互剥離技法により成形し、上下端部の一部に押圧剥離を行っている。使用痕は確認されない。先端部の欠損は発掘調査時のものである。

４．石　匙（第94図）

１点図示した。完形。身は三角形で両面から押圧剥離を施す。片面に使用痕をのこす。

５．スクレイパー（第94図）

４点を図示した。１、完形である。身は横型で三角形を呈し、片面からの剥離により成型されている。つまみが端に片寄る。２、完形。身は横型で三角形。両面から押圧剥離を施す。使用痕をのこす。３、先端の一部を欠損する。身は縦型で三角形を呈し、片面からの押圧剥離により成型する。つまみの一部に原礫面をのこす。４、剥片を素材としている。両側縁に使用痕を残す。石材は１～４すべて黒色頁岩である。

６．打製石斧（第95図～第100図）

本遺跡からは715点の打製石斧が出土している。ここでは重要文化財指定資料を中心に、代表的な形態のものを図示した。打製石斧の石材はほとんどが利根川で入手可能な黒色頁岩である。

⑴　分銅形（側湾形）（001～014・016～036）

いわゆる分銅形打製石斧のうち、側縁部が湾曲する形態のものである。両面交互剥離技法により楕円形の原形を製作し、その後、側縁部を敲き整形する垂直打撃技法により湾曲部を作り出す方法で製作されている。そのため、側縁部は大きく波打つものが目立つ。上下両端部に刃部が作出されており、上下を装着し直して使用されたと推定される。刃部・装着部に摩耗痕が観察されるので、「土掘具」として用いられたものである。装着部の磨耗痕は、紐と石斧の間に土が入り込み、それが研磨剤となって磨耗したものと考えられる。この形態は群馬地域では後期前葉に出現するもので、後葉まで使用され続けたものと推定される。

⑵　分銅形（抉入形）（015）

側縁部中央に抉入部を作出する特徴的な形態であり、側湾形とは区別される。側湾形に比べて大形であり、剣先状の刃部を有する。製作技法は側湾形と同じである。本例では抉入部に装着による磨耗痕が観察される。この形態は後期初頭に山間遺跡（藤岡市）で出現するが、群馬地域に広く普及するのは、後期中葉である。山間遺跡以外の遺跡では出土数は少なく、特殊な用途に用いられたと推定される。かつて、筆者は天神原遺跡出土例を闘斧の可能性があると推定したが、本例は大きさ・形態ともこれに酷似している。

⑶　分銅形（上下非対称形）（037～044）

分銅形のうち、上部（基部）が小さくなり、下部（刃部）が大きくなる上下非対称のものである。製作技法は側湾形と同じである。刃部磨耗痕は下端部のみに観察される。この形態は後期後葉～晩期前葉のものである。

⑷　大形撥形（045～050）

上下非対称形の基部の膨らみが失われ、直線状となった形態である。製作技法は上下非対称形と同じである。この形態が弥生時代前期末葉以降には、定型化して石鍬と呼ばれるようになる。

⑸　短冊形（051～088）

短冊形を呈するものであるが、側縁部がやや湾曲するものもこの形態に分類した。垂直打撃技法により、側縁部を中心に加工したものである。この形態は中期に盛行するものであり、分銅形が普及すると

衰退するが、後期以降でも存在し続ける。

⑹　短冊形（寸詰まり形）（089～092）

短冊形であるが、短く寸詰まりのものを分類した。この形態は後期以降に少数存在する。

⑺　撥形（093～105）

両面交互剥離技法や垂直打撃技法で作られているので、前期前葉～中葉の撥形形態とは区別されるものである。

⑻　打製石斧素材剥片（106）

強い直接打撃で剥離された剥片で、周囲にわずかに加工が施されている。おそらく利根川の河原でこの状態まで加工し、遺跡へ搬入されたものと推定される。打製石斧の製作工程を解明する上で重要な資料である。

７．その他の打製石器（第101図）

⑴　小形打製石斧（01～18）

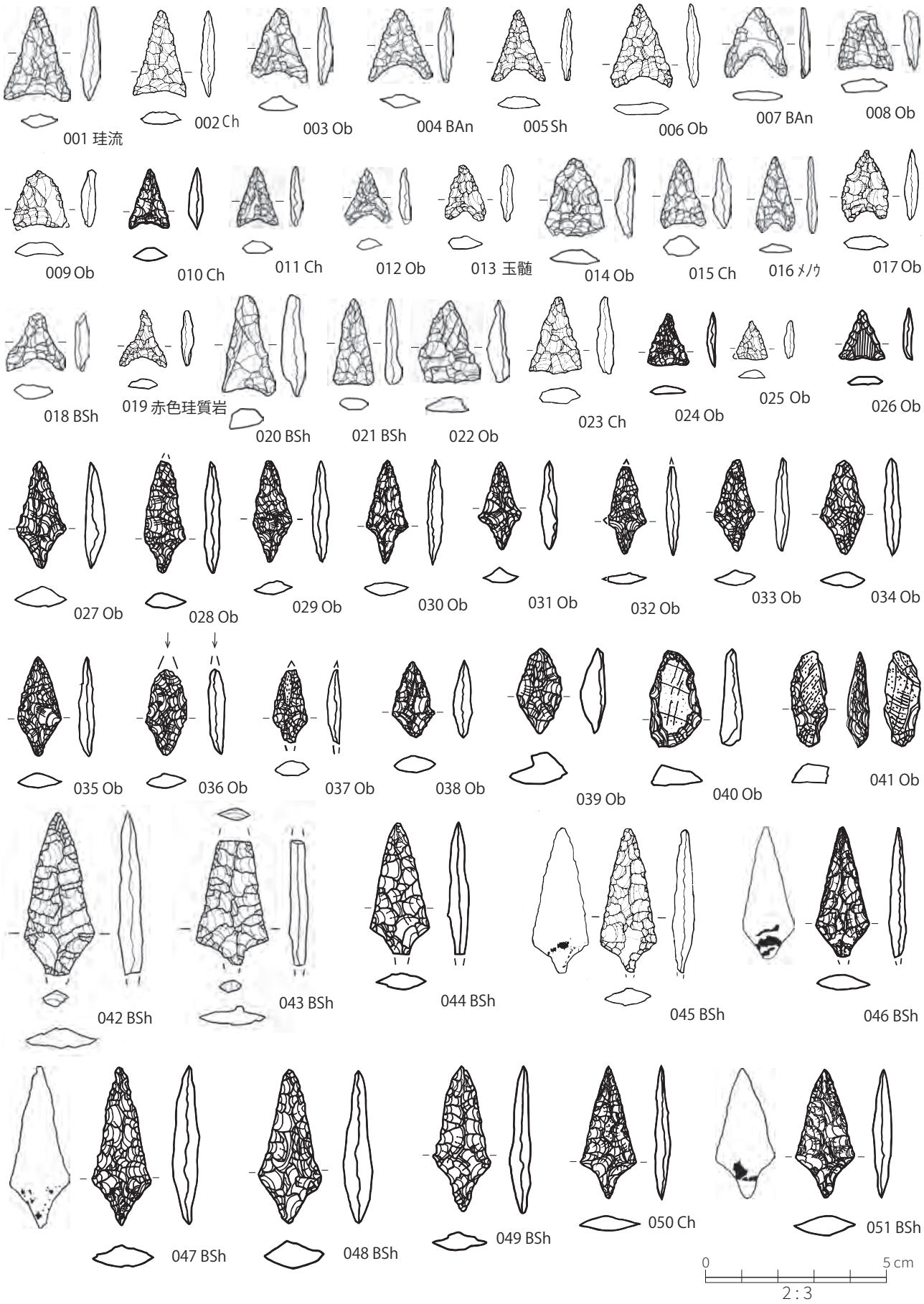
一般的な打製石斧と同じように、両面交互剥離技法や垂直打撃技法で製作された小形の打製石斧である。しかし、刃部に磨耗痕が観察されるものは少ないので、用途は異なっていたと推定される。

⑵　その他の打製石器（20～33）

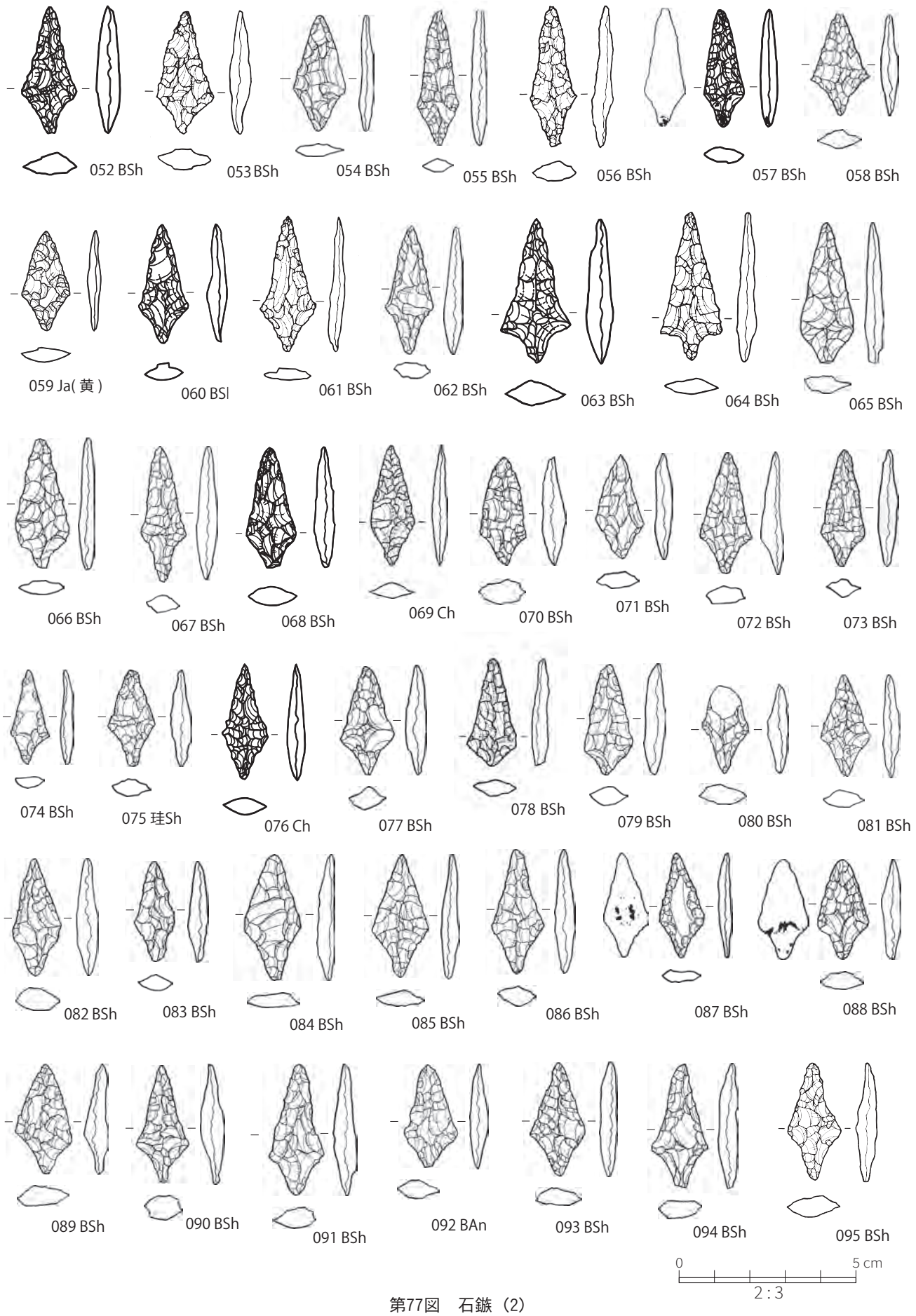
定型化していない打製石器を一括した。こうした不定形な石器はどの遺跡でも一定数存在しているが、用途・機能は不明である。

参考文献

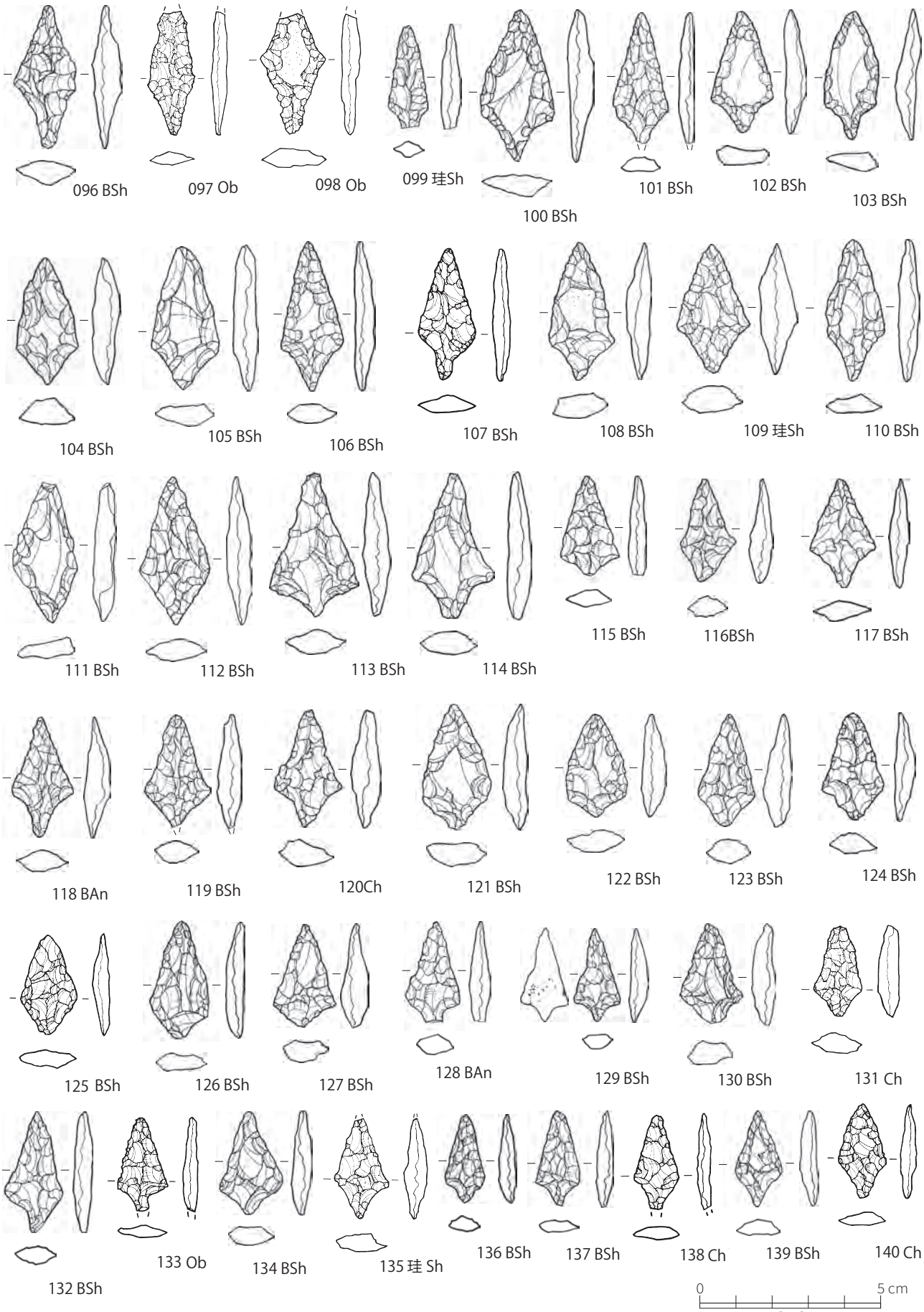
大工原豊編　1994　『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会


001 珪流
002 Ch
003 Ob
004 BAn
005 Sh
006 Ob
007 BAn
008 Ob
009 Ob
010 Ch
011 Ch
012 Ob
013 玉髄
014 Ob
015 Ch
016 ﾒﾉｳ
017 Ob
018 BSh
019 赤色珪質岩
020 BSh
021 BSh
022 Ob
023 Ch
024 Ob
025 Ob
026 Ob
027 Ob
028 Ob
029 Ob
030 Ob
031 Ob
032 Ob
033 Ob
034 Ob
035 Ob
036 Ob
037 Ob
038 Ob
039 Ob
040 Ob
041 Ob
042 BSh
043 BSh
044 BSh
045 BSh
046 BSh
047 BSh
048 BSh
049 BSh
050 Ch
051 BSh
0
5 cm
2 : 3

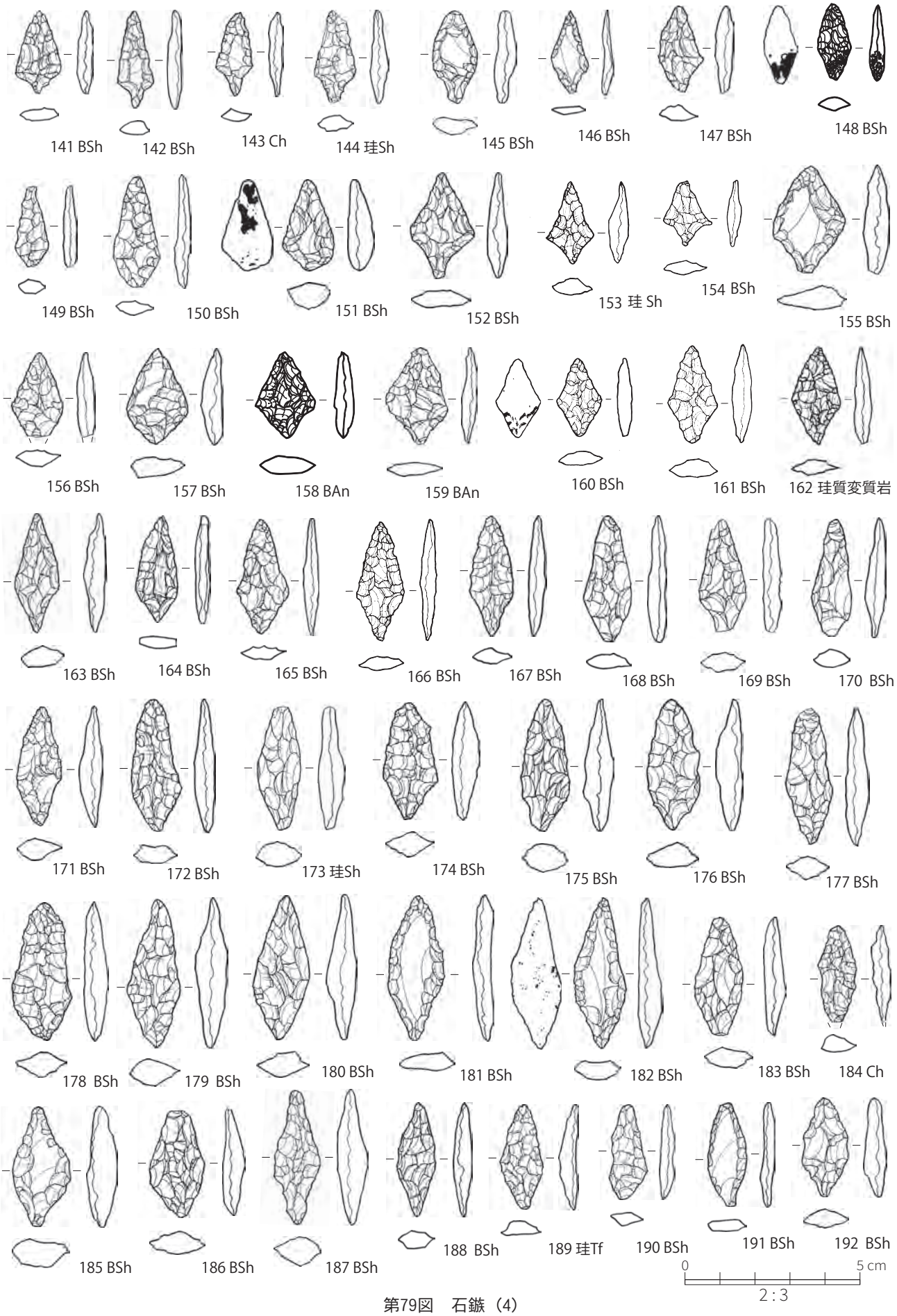
第76図　石鏃（1）


052 BSh
053 BSh
054 BSh
055 BSh
056 BSh
057 BSh
058 BSh
059 Ja(黄)
060 BSl
061 BSh
062 BSh
063 BSh
064 BSh
065 BSh
066 BSh
067 BSh
068 BSh
069 Ch
070 BSh
071 BSh
072 BSh
073 BSh
074 BSh
075 珪Sh
076 Ch
077 BSh
078 BSh
079 BSh
080 BSh
081 BSh
082 BSh
083 BSh
084 BSh
085 BSh
086 BSh
087 BSh
088 BSh
089 BSh
090 BSh
091 BSh
092 BAn
093 BSh
094 BSh
095 BSh
0
5 cm
2 : 3

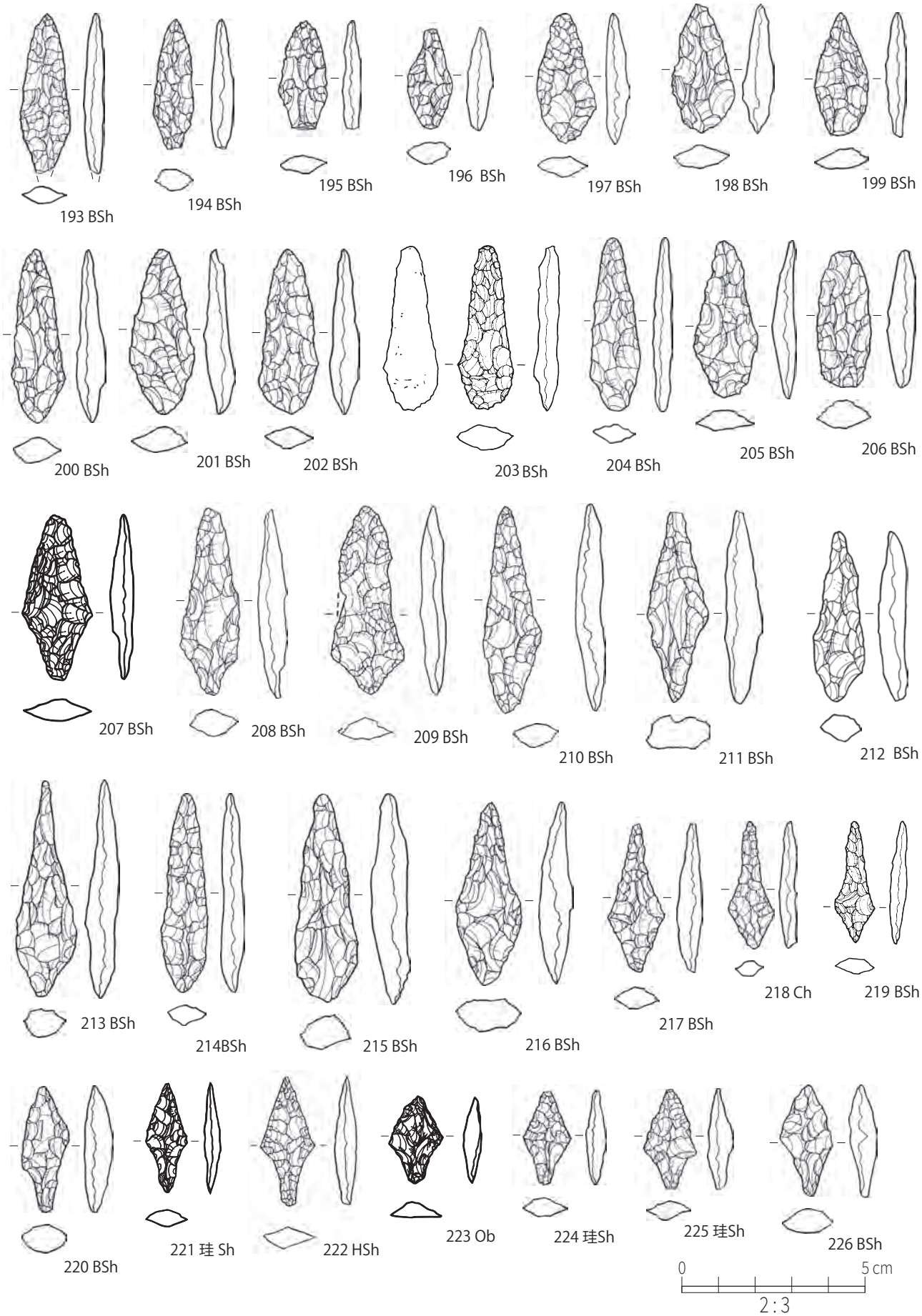
第77図　石鏃（2）


096 BSh
097 Ob
098 Ob
099 珪Sh
100 BSh
101 BSh
102 BSh
103 BSh
104 BSh
105 BSh
106 BSh
107 BSh
108 BSh
109 珪Sh
110 BSh
111 BSh
112 BSh
113 BSh
114 BSh
115 BSh
116BSh
117 BSh
118 BAn
119 BSh
120Ch
121 BSh
122 BSh
123 BSh
124 BSh
125 BSh
126 BSh
127 BSh
128 BAn
129 BSh
130 BSh
131 Ch
132 BSh
133 Ob
134 BSh
135 珪 Sh
136 BSh
137 BSh
138 Ch
139 BSh
140 Ch
0
5 cm
2 : 3

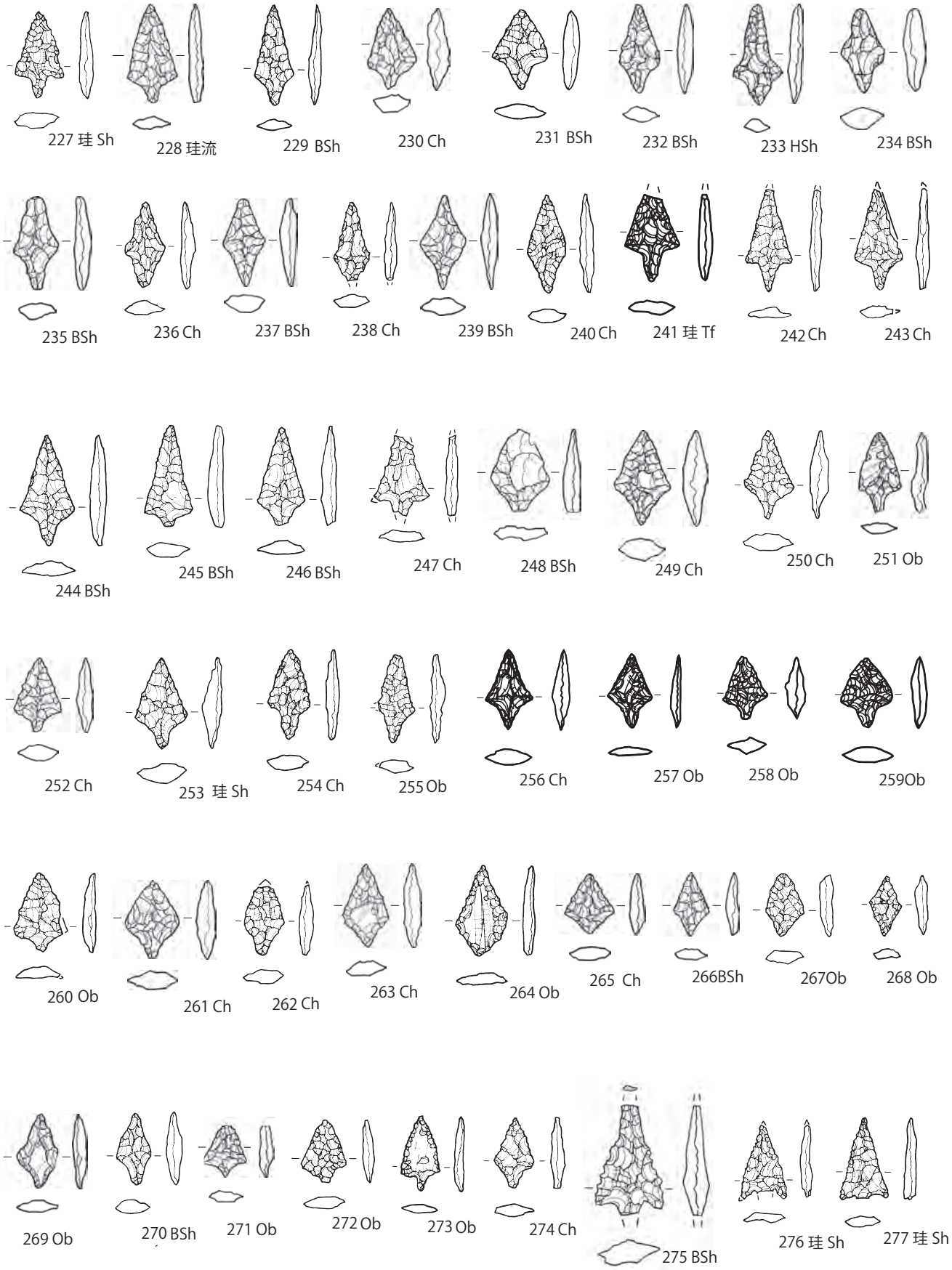
第78図　石鏃（3）


141 BSh
142 BSh
143 Ch
144 珪Sh
145 BSh
146 BSh
147 BSh
148 BSh
149 BSh
150 BSh
151 BSh
152 BSh
153 珪 Sh
154 BSh
155 BSh
156 BSh
157 BSh
158 BAn
159 BAn
160 BSh
161 BSh
162 珪質変質岩
163 BSh
164 BSh
165 BSh
166 BSh
167 BSh
168 BSh
169 BSh
170 BSh
171 BSh
172 BSh
173 珪Sh
174 BSh
175 BSh
176 BSh
177 BSh
178 BSh
179 BSh
180 BSh
181 BSh
182 BSh
183 BSh
184 Ch
185 BSh
186 BSh
187 BSh
188 BSh
189 珪Tf
190 BSh
191 BSh
192 BSh
0
5 cm
2:3

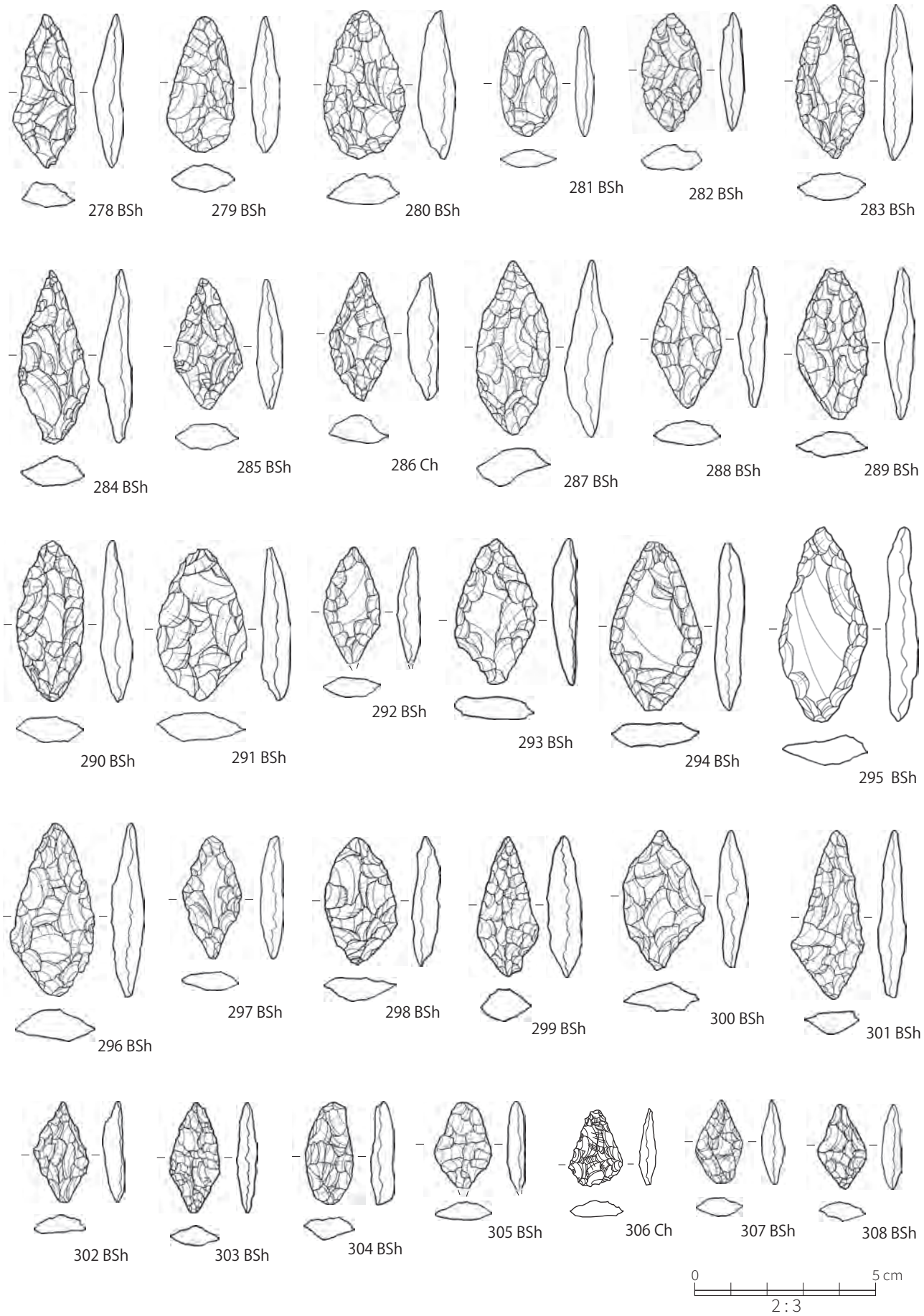
第79図　石鏃（4）


193 BSh
194 BSh
195 BSh
196 BSh
197 BSh
198 BSh
199 BSh
200 BSh
201 BSh
202 BSh
203 BSh
204 BSh
205 BSh
206 BSh
207 BSh
208 BSh
209 BSh
210 BSh
211 BSh
212 BSh
213 BSh
214BSh
215 BSh
216 BSh
217 BSh
218 Ch
219 BSh
220 BSh
221 珪 Sh
222 HSh
223 Ob
224 珪Sh
225 珪Sh
226 BSh
0
5 cm
2:3

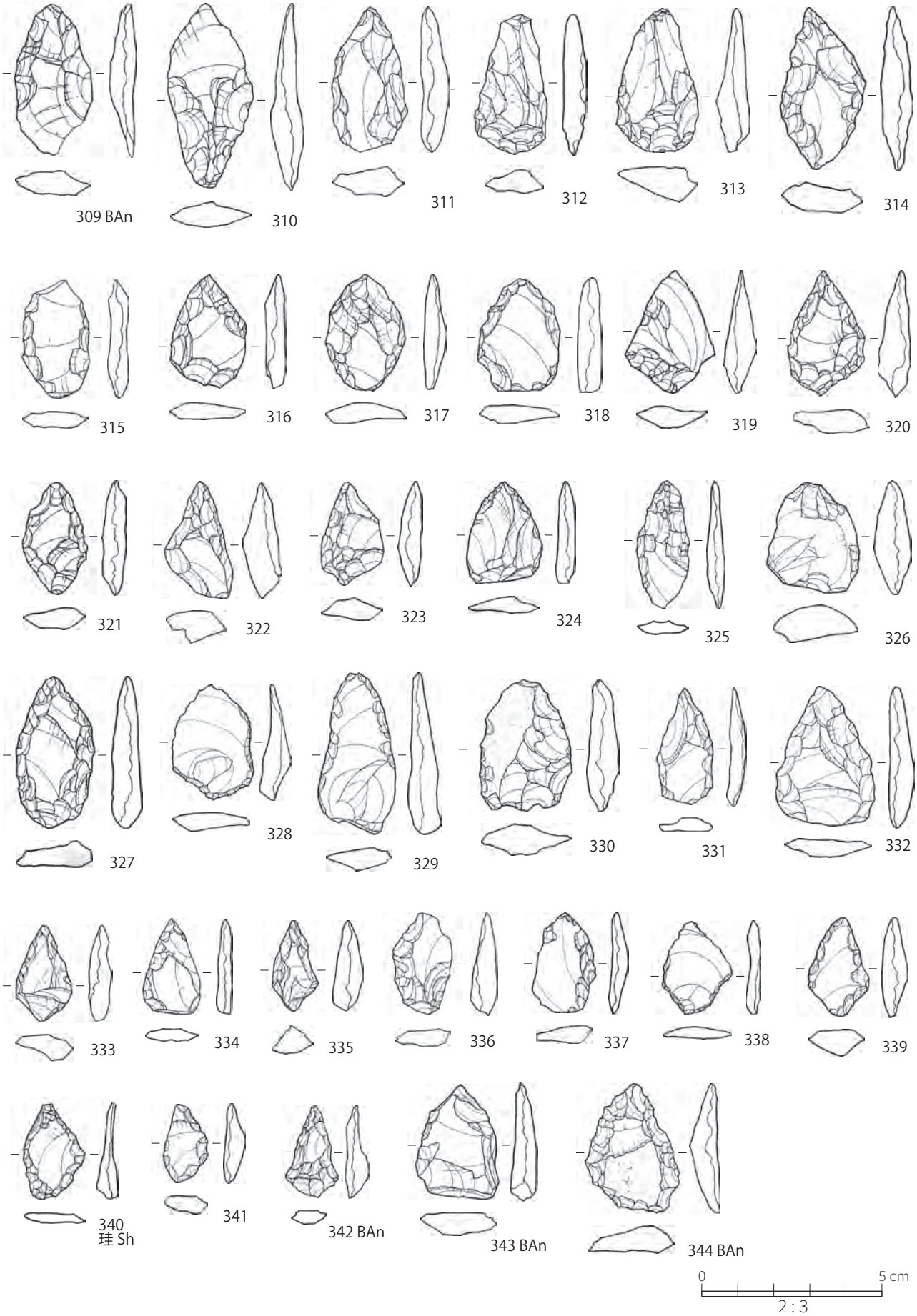
第80図　石鏃（5）


227 珪 Sh
228 珪流
229 BSh
230 Ch
231 BSh
232 BSh
233 HSh
234 BSh
235 BSh
236 Ch
237 BSh
238 Ch
239 BSh
240 Ch
241 珪 Tf
242 Ch
243 Ch
244 BSh
245 BSh
246 BSh
247 Ch
248 BSh
249 Ch
250 Ch
251 Ob
252 Ch
253 珪 Sh
254 Ch
255 Ob
256 Ch
257 Ob
258 Ob
259Ob
260 Ob
261 Ch
262 Ch
263 Ch
264 Ob
265 Ch
266BSh
267Ob
268 Ob
269 Ob
270 BSh
271 Ob
272 Ob
273 Ob
274 Ch
275 BSh
276 珪 Sh
277 珪 Sh
0
5 cm
2 : 3

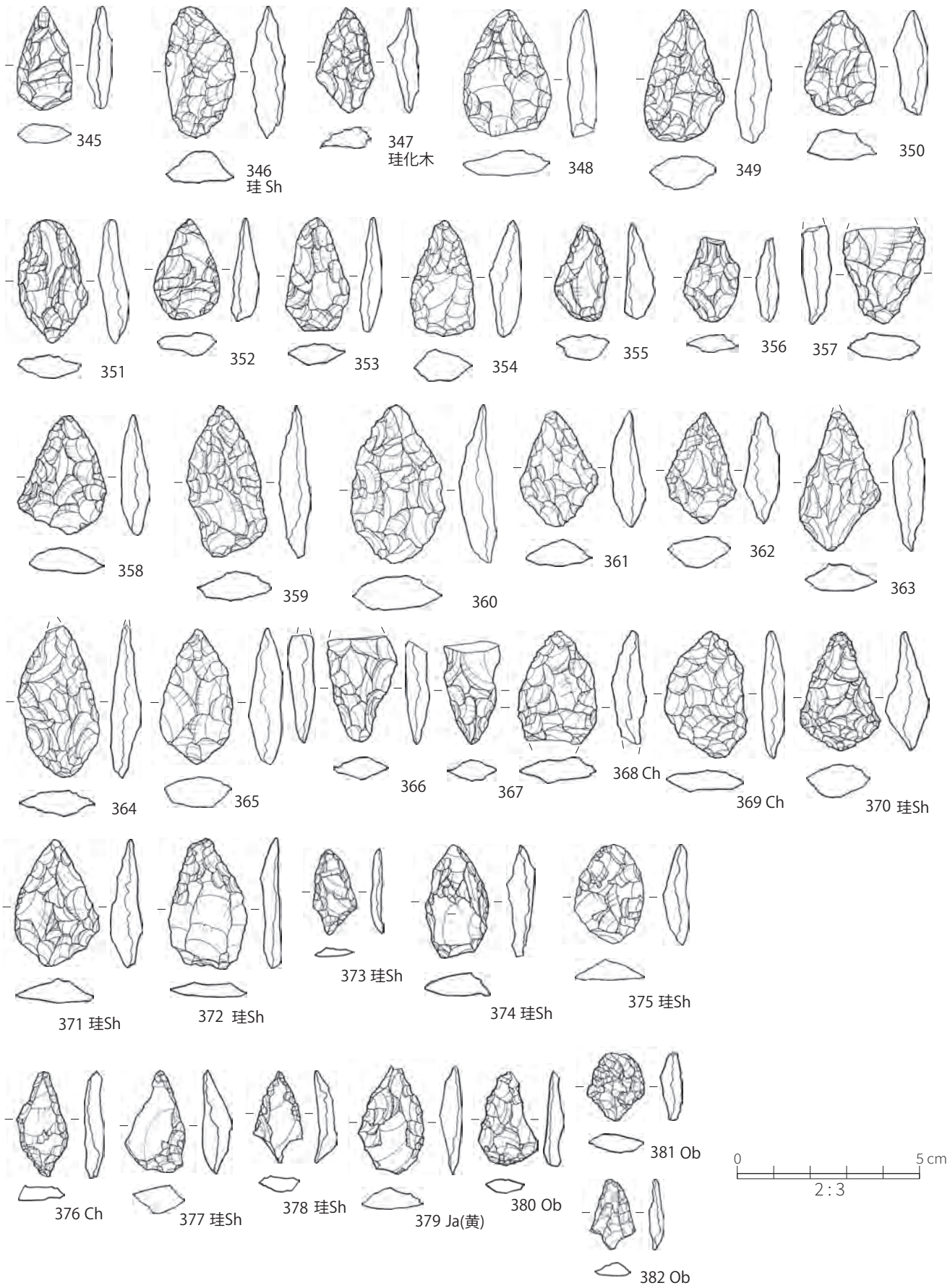
第81図　石鏃（6）


278 BSh
279 BSh
280 BSh
281 BSh
282 BSh
283 BSh
284 BSh
285 BSh
286 Ch
287 BSh
288 BSh
289 BSh
290 BSh
291 BSh
292 BSh
293 BSh
294 BSh
295 BSh
296 BSh
297 BSh
298 BSh
299 BSh
300 BSh
301 BSh
302 BSh
303 BSh
304 BSh
305 BSh
306 Ch
307 BSh
308 BSh
0
5 cm
2 : 3

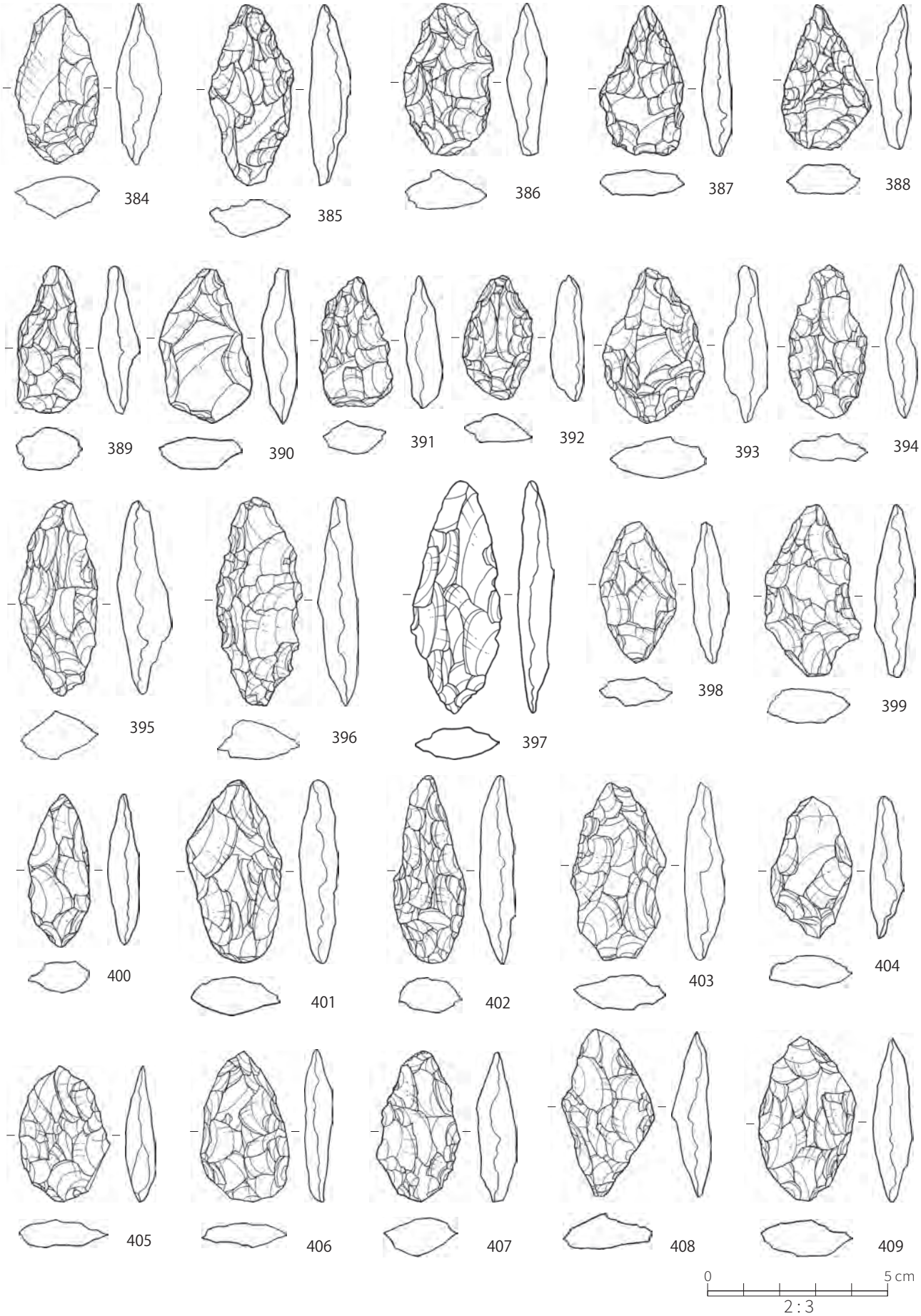
第82図　石鏃（7）


309 BAn
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
珪 Sh
341
342 BAn
343 BAn
344 BAn
0
5 cm
2 : 3

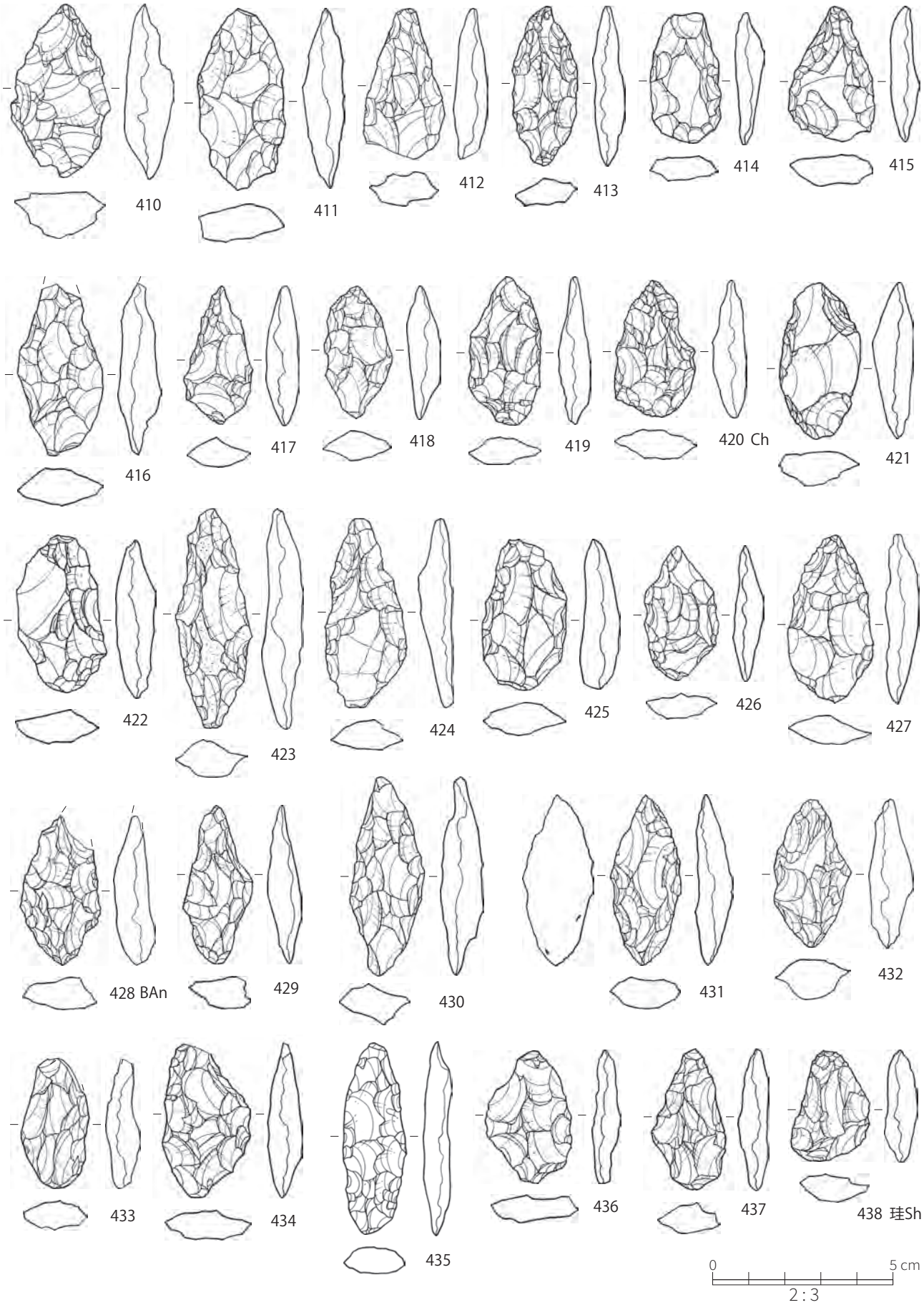
第83図　石鏃（8）未成品


345
346
珪 Sh
347
珪化木
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368 Ch
369 Ch
370 珪Sh
371 珪Sh
372 珪Sh
373 珪Sh
374 珪Sh
375 珪Sh
376 Ch
377 珪Sh
378 珪Sh
379 Ja(黄)
380 Ob
381 Ob
382 Ob
0
5 cm
2 : 3

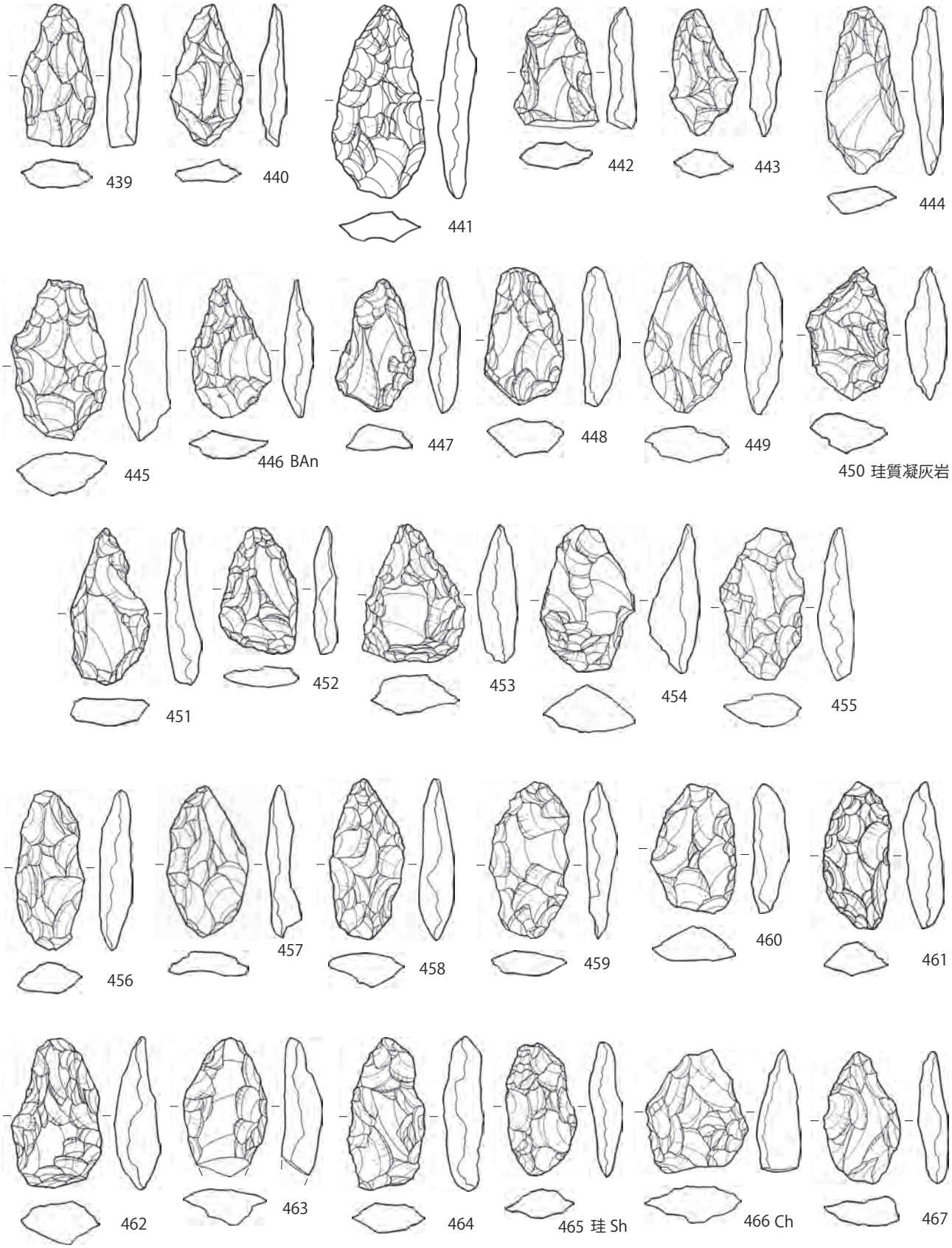
第84図　石鏃（9）未成品



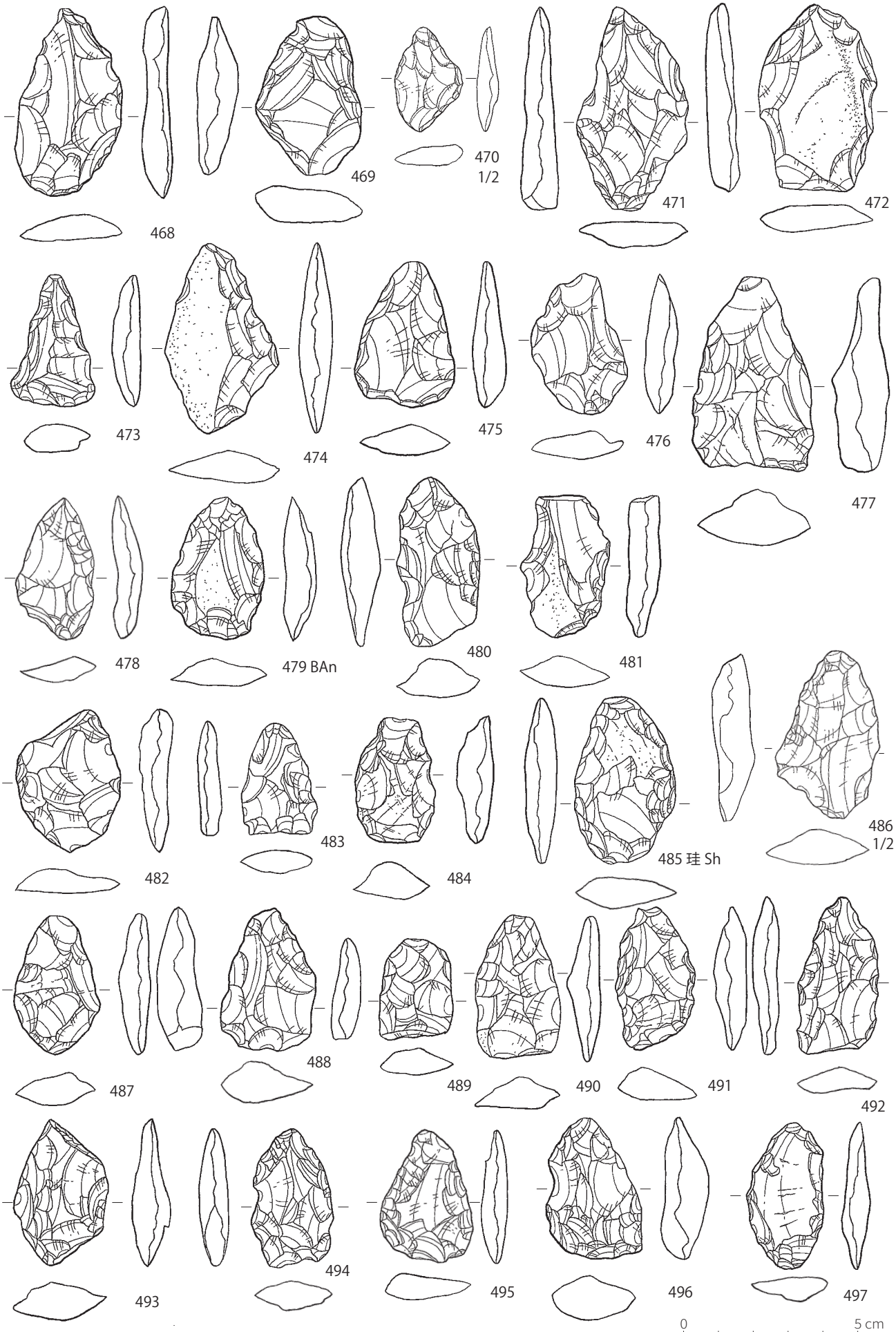
第85図　石鏃（10）未成品（384）、模造品（385～409）



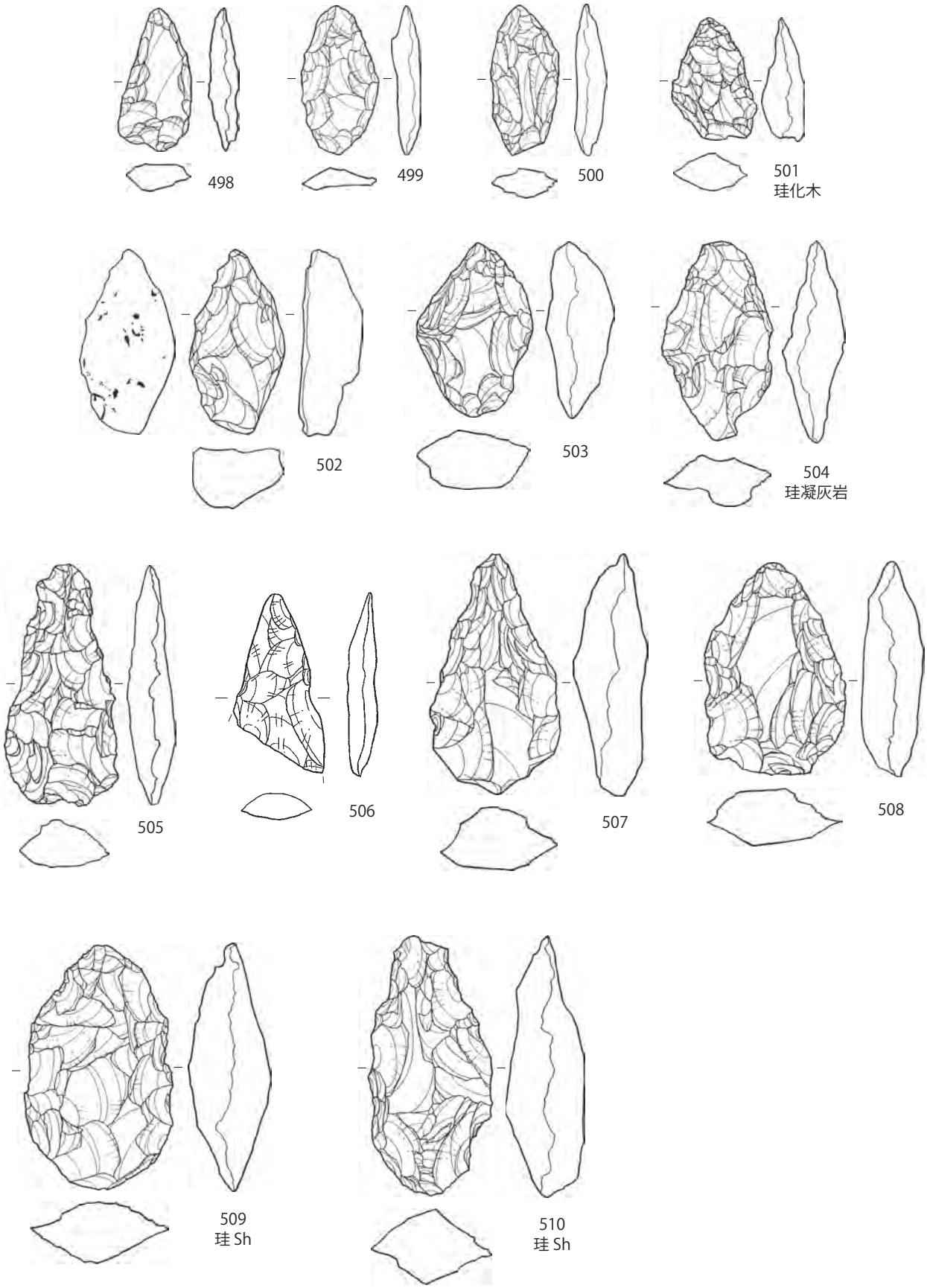
第86図　石鏃（11）模造品



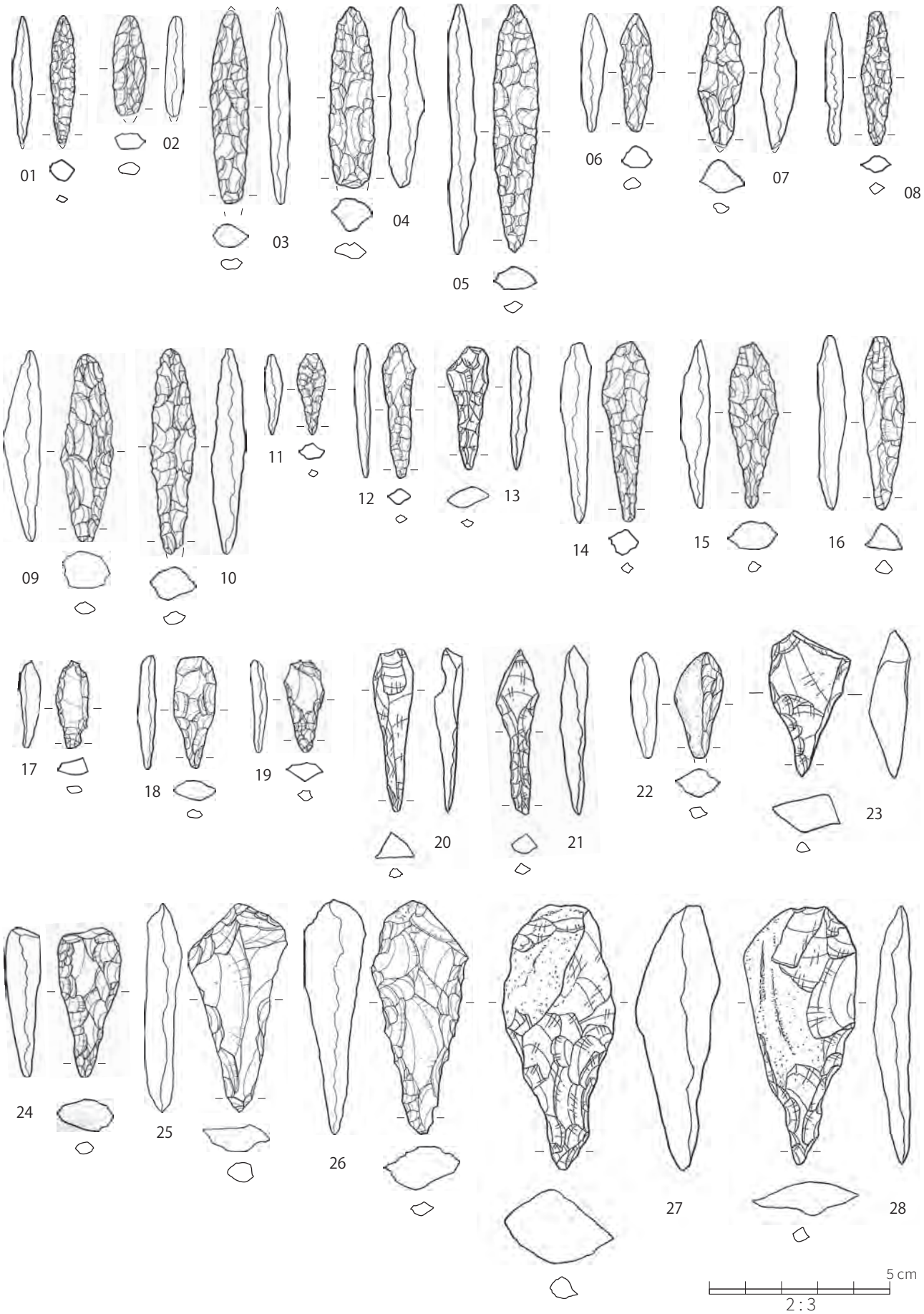
第87図　石鏃（12）模造品



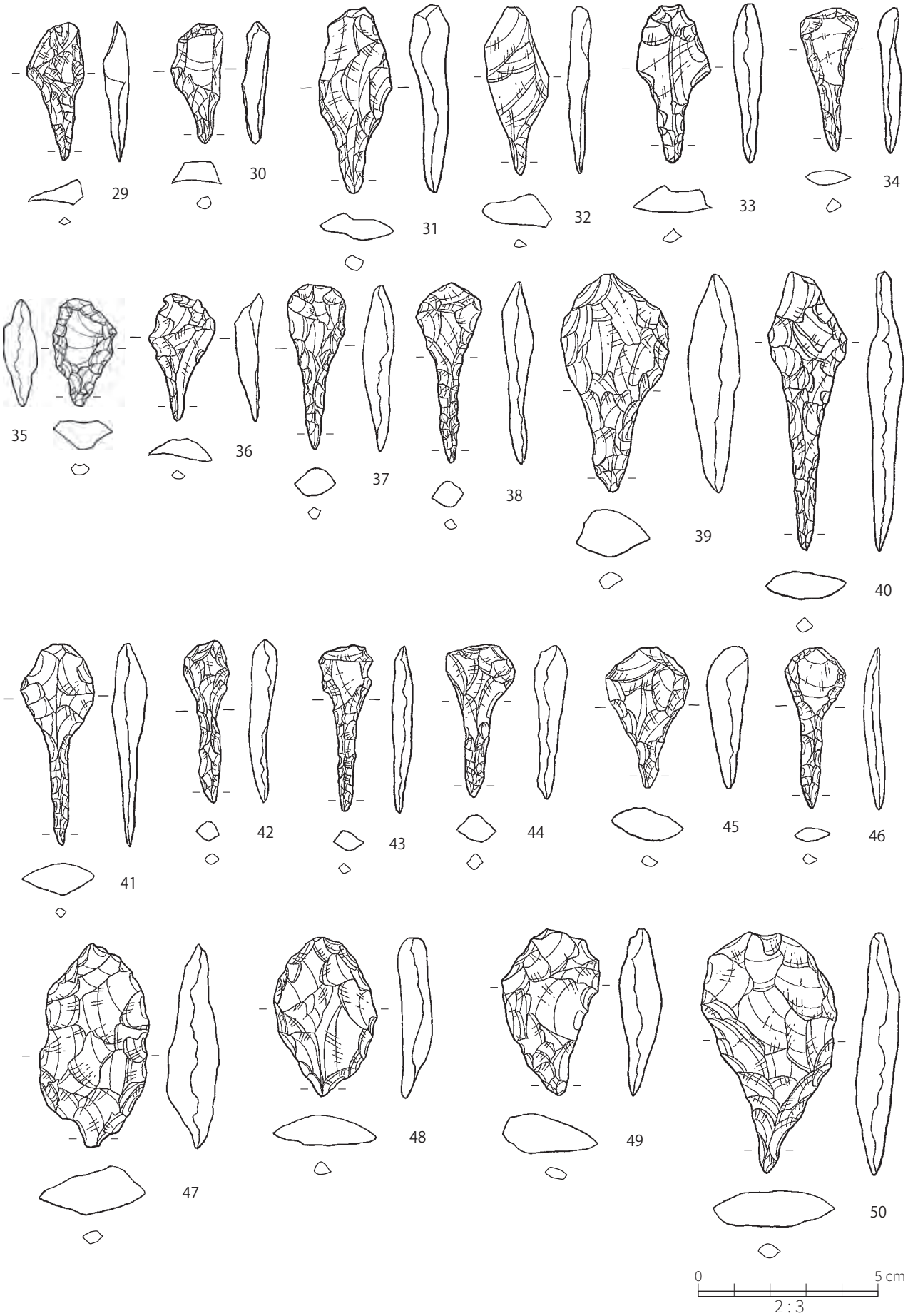
第88図　石鏃（13）模造品



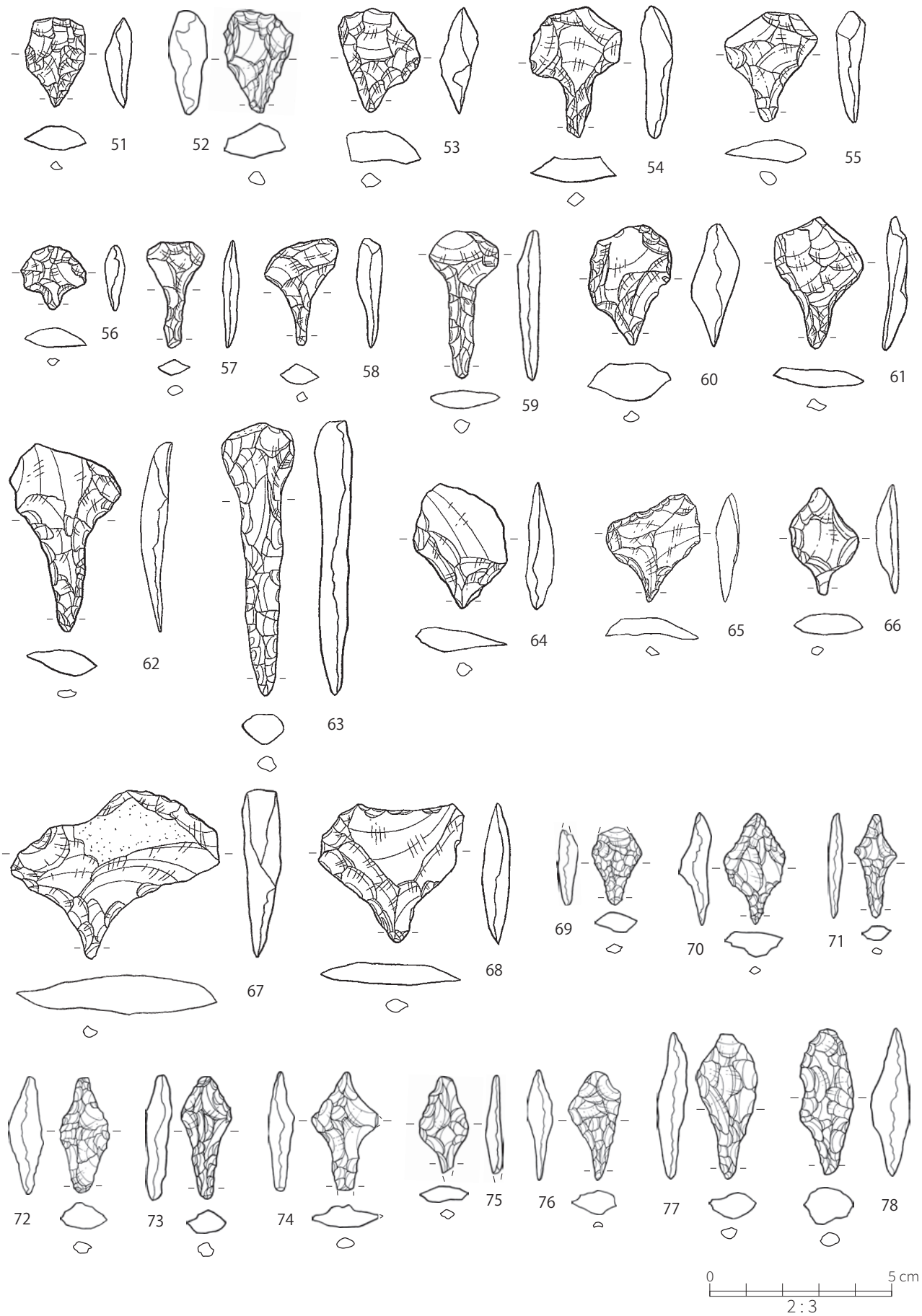
第89図　石鏃（14）模造品


01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
5 cm
2 : 3

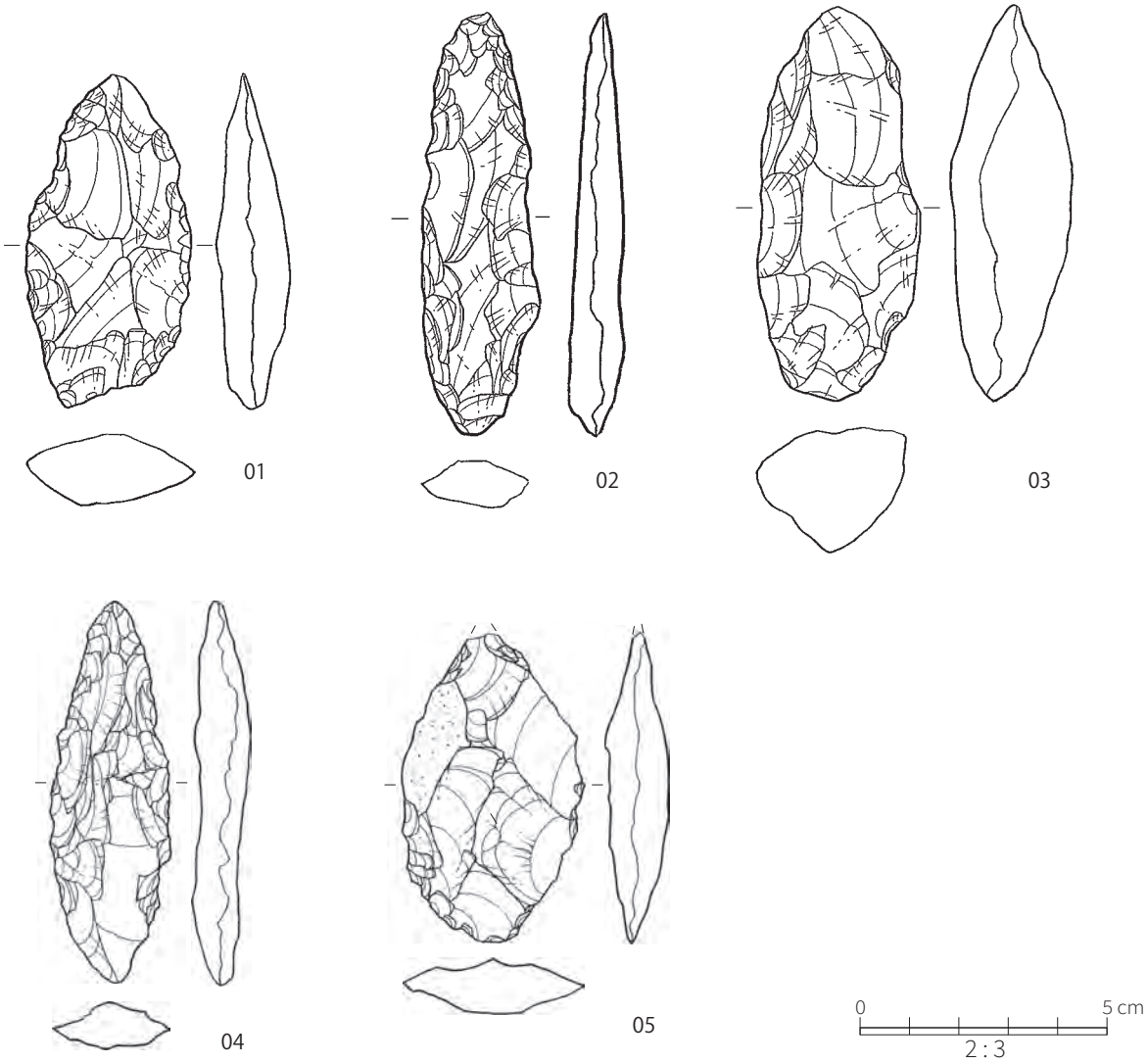
第90図　石錐（1）


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
5 cm
2:3

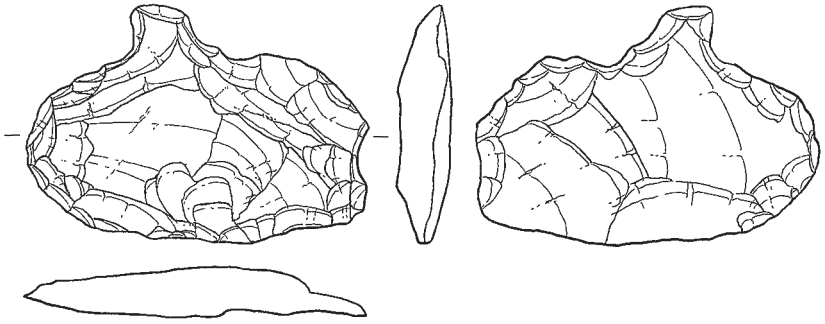
第91図　石錐（2）


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
5 cm
2 : 3

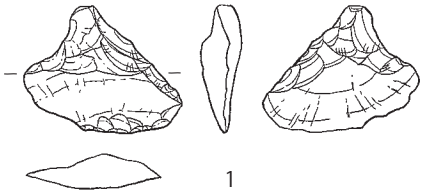
第92図　石錐（3）



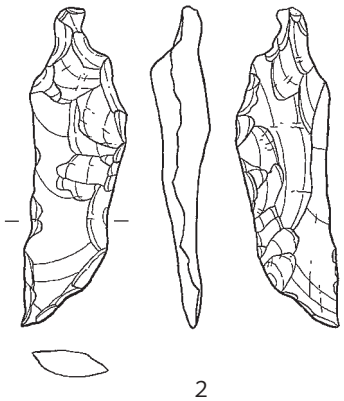
第93図　石槍



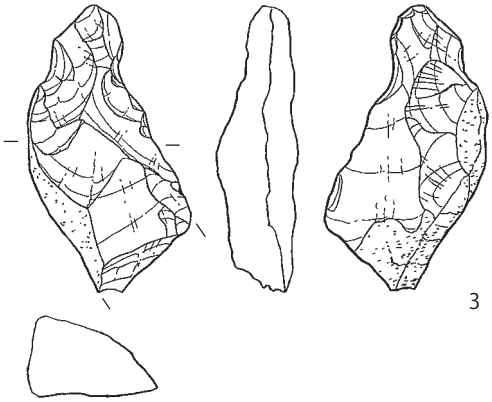
石匙



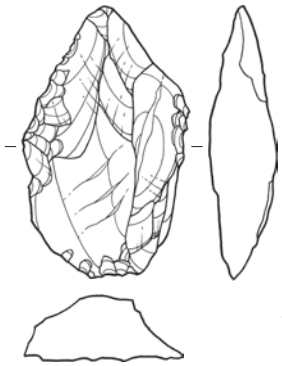
1



2



3



4

スクレイパー

0　5 cm
2 : 3

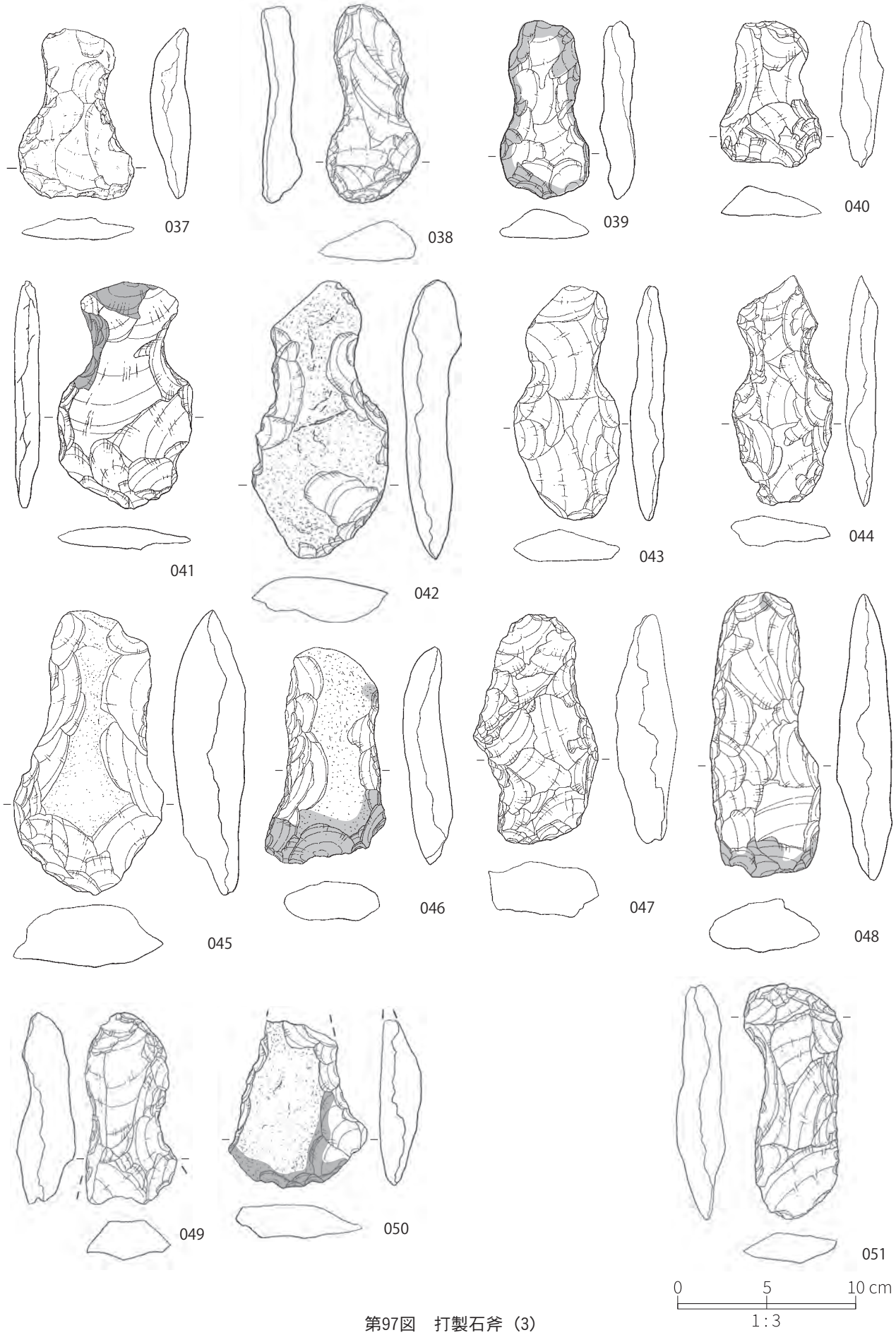
第94図　石匙・スクレイパー

001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
0
5
10 cm
1:3

第95図　打製石斧（1）

016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
0
5
10 cm
1 : 3

第96図　打製石斧（2）


037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
0
5
10 cm
1:3

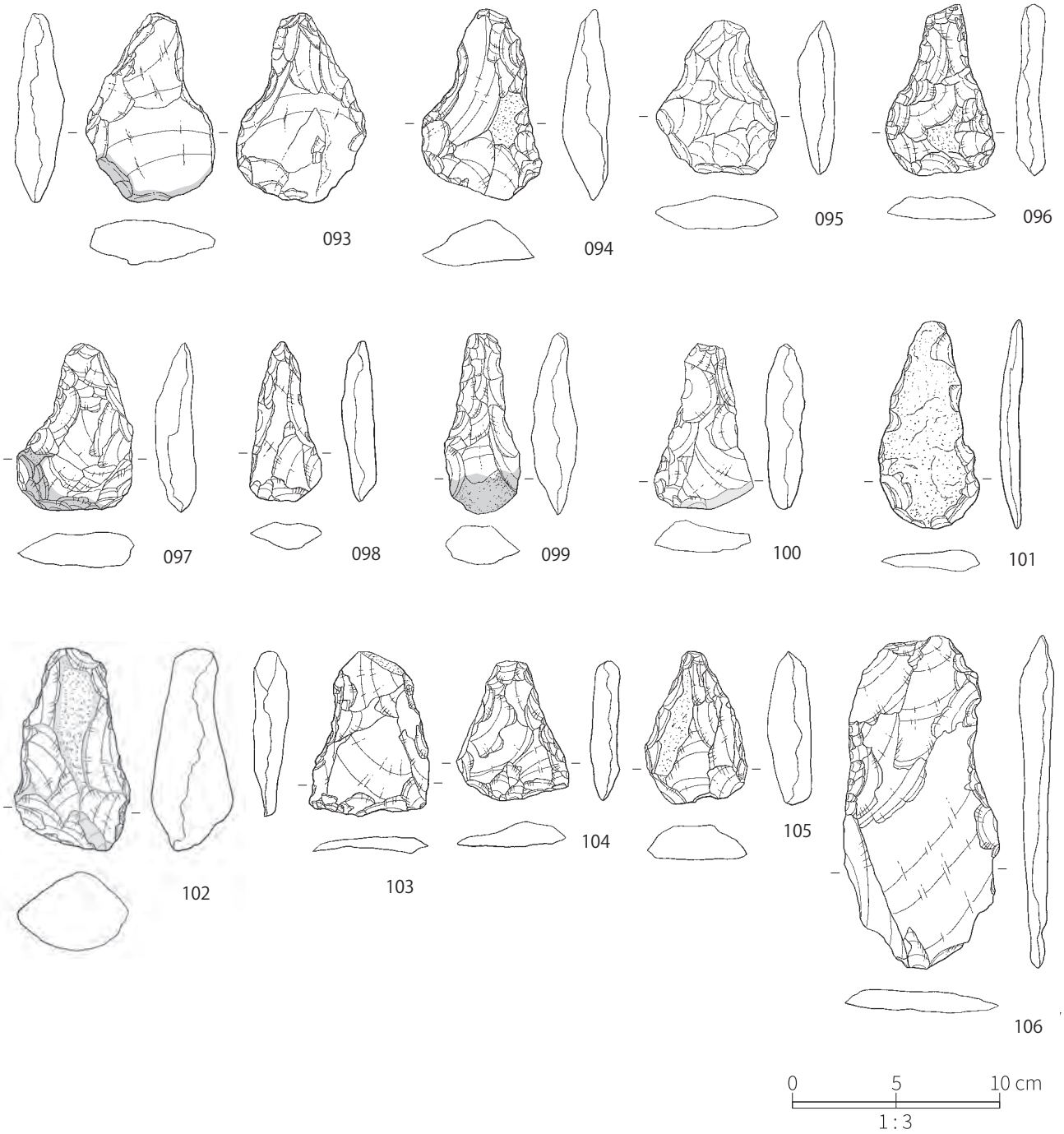
第97図　打製石斧（3）

052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
0
5
10 cm
1 : 3

第98図　打製石斧（4）

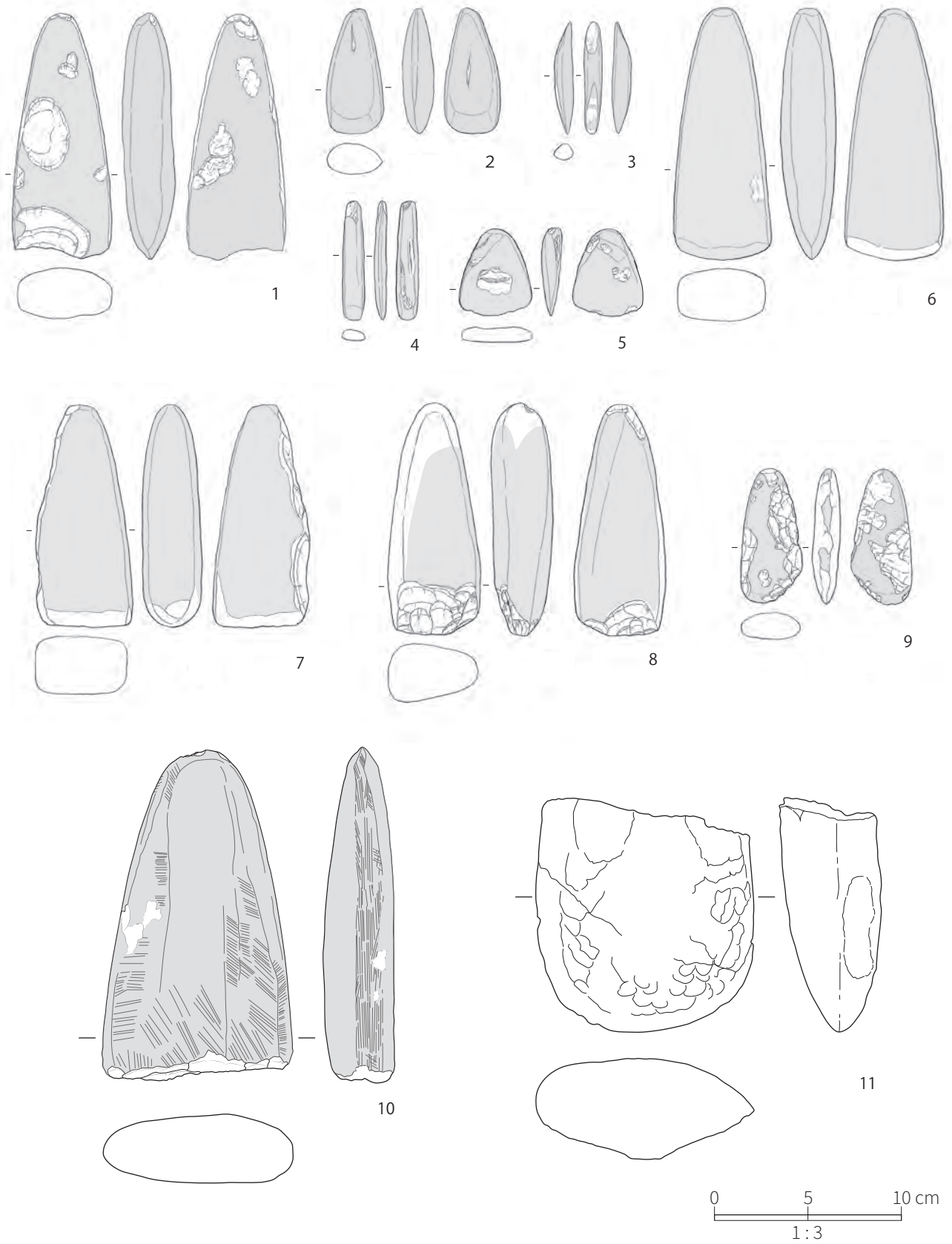
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
088
089
090
091
092
0
5
10 cm
1:3

第99図　打製石斧（5）


093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
104
105
106
0
5
10 cm
1:3

第100図　打製石斧（6）

第101図　その他の打製石器



第102図　磨製石斧

８．磨製石斧（第102図）

11点を図示した。研磨痕はトーンで表した。住居跡出土のもの８点、包含層出土のもの３点である。１、６～８は長さ12～13センチ台、刃部幅４～５センチ台をはかり、いずれも全体に丁寧な研磨が施されている。１、６、８は刃部に使用によるものと思われる欠損がみられる。６は刃部の両面に使用痕がみられる。７は左側の側縁に研磨が施されておらず、刃部に欠損がみられる。刃部先端の両面に使用による擦痕がある。８は断面がやや三角形の自然礫を使用したと思われる。刃部と頭部に剥離がみられる。２は全体に丁寧に研磨されており使用痕はみられない。３は径１センチほどの丸棒状に加工している。４は細形の定角式である。上端部に折損痕があるが研磨されている。全体に丁寧な研磨が施されている。５は刃部先端の欠損後にも研磨を施している。全体に丁寧な研磨が施されている。９は成形・研磨後、全体に剥離と敲打が加わっている。10は大形品でＡ区Ｊ−11号住居跡の出土である。長さ27.5センチ、幅10.2センチ、厚さ3.7センチである。緑色岩製。表面はなめらかに研磨されている。刃部付近を大きく破損した後に、破損面の周縁に沿った幅１～３センチの剥離面が複数確認される。11は大形品で、Ａトレンチ遺物包含層からの出土である。長さ12センチ、幅12センチ、厚さ5.2センチ。緑色岩製。上半部は欠損している。表面は研磨されているが被熱により荒れている。破損品である。

図示した以外にＡ区・Ｂ区あわせて中型のテン箱１箱分の磨製石斧が出土している。

９．砥石（第103図～第107図）

150点を図化した。平面の形状を、「楕円形～台形（隅丸方形）」、「木の葉形」、「菱形」、「不定形」の４種類に分類した。また、断面の形状は「板状」、「扁平礫」、「不定形」に３分類した。また、「打撃により形状を成形した痕跡を残す」ものと、「打撃により成形した後に使用した痕跡がみられる」ものを別に表記した。所謂「石包丁様石器」が多くみられる。研磨面は「両面に認められる」が26点、「片面にのみ認められる」が121点、その他３面を研磨しているもの１点、表裏両面と側面を研磨に使用しているとわかるものが４点であった。研磨の痕跡は幅の細さによって「溝状」「筋状」「くぼみ状」に分類し観察表に記載した。

10．敲石（第109図）

５点を図示した。１、３は小型品で楕円形を呈する。２、４、５は大型品である。上下端部に敲打による使用痕跡がみられるものを敲石とした。これら３点は正面のほぼ全面に摩耗痕がみられる。１は上下面に叩打痕がみられる。中央部の表面は細かな擦り痕がみられる。２は全体的に擦り痕があり、なめらかである。下端部に敲打痕を有する。３は全体的に滑らかに擦られており丸棒状の形態である。上下の面が荒くなっており使用痕と考えられる。４は全面によく擦られている。正面の下部に敲打による小剥離がみられる。５は全面に使用及び成形によるものと思われる擦り痕がある。平面的な摩耗痕が表の右側に顕著である。上下端に敲打によると思われる剥離がみられる。石材は２のみデイサイト、２以外はすべて粗粒安山岩である。

11．凹石（第110図、第111図）

15点を図示した。やや大型の２を除き、片手で握ることのできる大きさの楕円もしくは円形礫である。石材は１～12、14、15が粗粒安山岩、13は花崗岩である。

１は正面と両側縁に敲打痕を有する。２は周縁に敲打による成形痕跡を残す。正面・背面ともにすり跡がみられ、正面中央部分と下端部に著しい敲打痕跡がみられる。３はやや扁平な自然石を利用し、正

面に縦に二か所敲打による使用痕がある。上下端部に敲打による使用痕を残す。４は正面に２箇所、背面に１箇所の敲打痕がみられる。上下端部に使用による擦痕がある。全体的に研磨されているが表裏の稜線の内側が非常に良好に研磨されている。５はやや角張った楕円形を呈する。正面中央付近に縦に二つの敲打痕、上下端に打撃による剥落痕がみられる。表裏とも複数の擦面が認められる。６はやや扁平で丸い自然石の表裏中央に敲打痕が認められる。正面・背面ともに擦痕がみられる。７は正面・背面の中央に２箇所の敲打痕、上下端面に使用痕跡が認められる。８は全体に研磨されてなめらかである。正面に２箇所、背面に１箇所、敲打痕を有する。下端部に打撃による剥離がみられる。９は正面中央付近に小さな敲打痕を２箇所有する。握り拳大の丸石を使用している。10は自然石の正面・背面を擦り、両面ともに縦に２箇所の浅い敲打痕が認められる。11は正面・背面に縦に２つの浅い敲打痕を有する。12は丸型の自然石の正面・背面に平面的な擦痕、両面の中央に敲打による浅いくぼみがある。13は丸型の自然石の正面・背面に平面的な擦痕と中央の浅いくぼみがみられ、周縁には敲打による荒れがみられる。材質は花崗岩である。14は楕円形で正面・背面・側縁全体に面的な擦痕と両面の中央に縦に２つずつ浅いが凹みが認められ、上下端部に敲打による使用痕と正面に荒れがみられる。15はやや角張った平面形を呈し、正面には全面的な擦痕のほか、敲打による側縁の剥離と正面・背面・右側面に凹みが認められる。図示したもの以外に深型テン箱３個分の凹石が出土している。

12. 石皿（第112図、第113図）

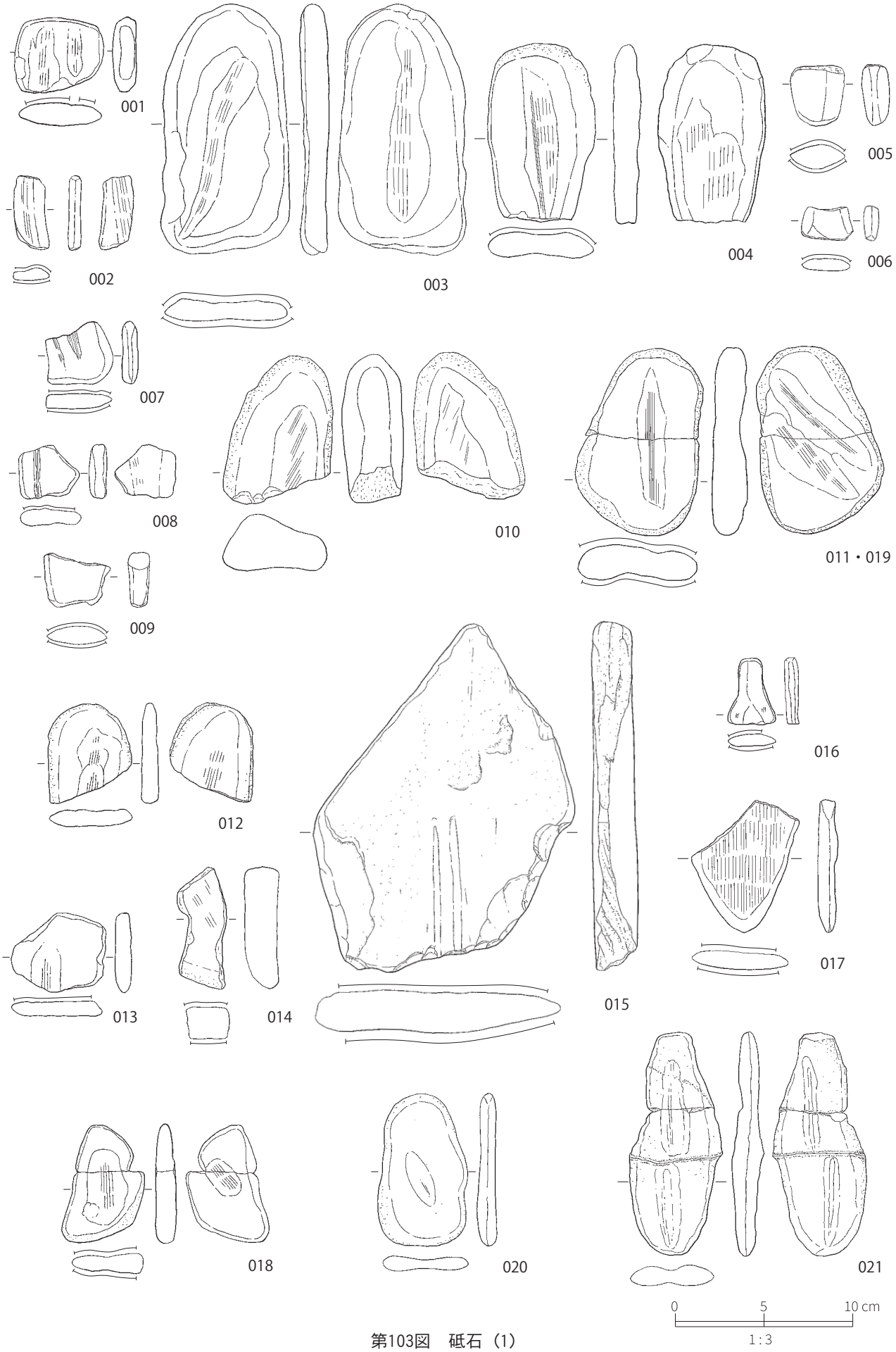
３点を図示した。１は板状の緑色片岩の破片を使用したもので、形状は不定形である。中央にむかって使用による浅い凹みが正面・背面ともにみられ、正面に赤色顔料の付着がみとめられる。２は脚付石皿で、上部がやや尖った楕円の平面形をしており、丸みを帯びた底部に高さ１センチ程の短い円筒状の脚が５箇所削り出されている。イノシシなどの動物の四肢と頭部を想像させる。粗粒安山岩製である。図示した以外にＡ区から深型のテン箱に11箱分、確認調査部分から１箱分出土した。３は不定形な板状の緑色片岩を使用した石皿の右下半分である。左上部に擦り面が残る。最も深い部位で4.2センチのくぼみとなっており、使用により破損したものと考えられる。裏面に３か所のくぼみを有す。

13. 多孔石（第114図）

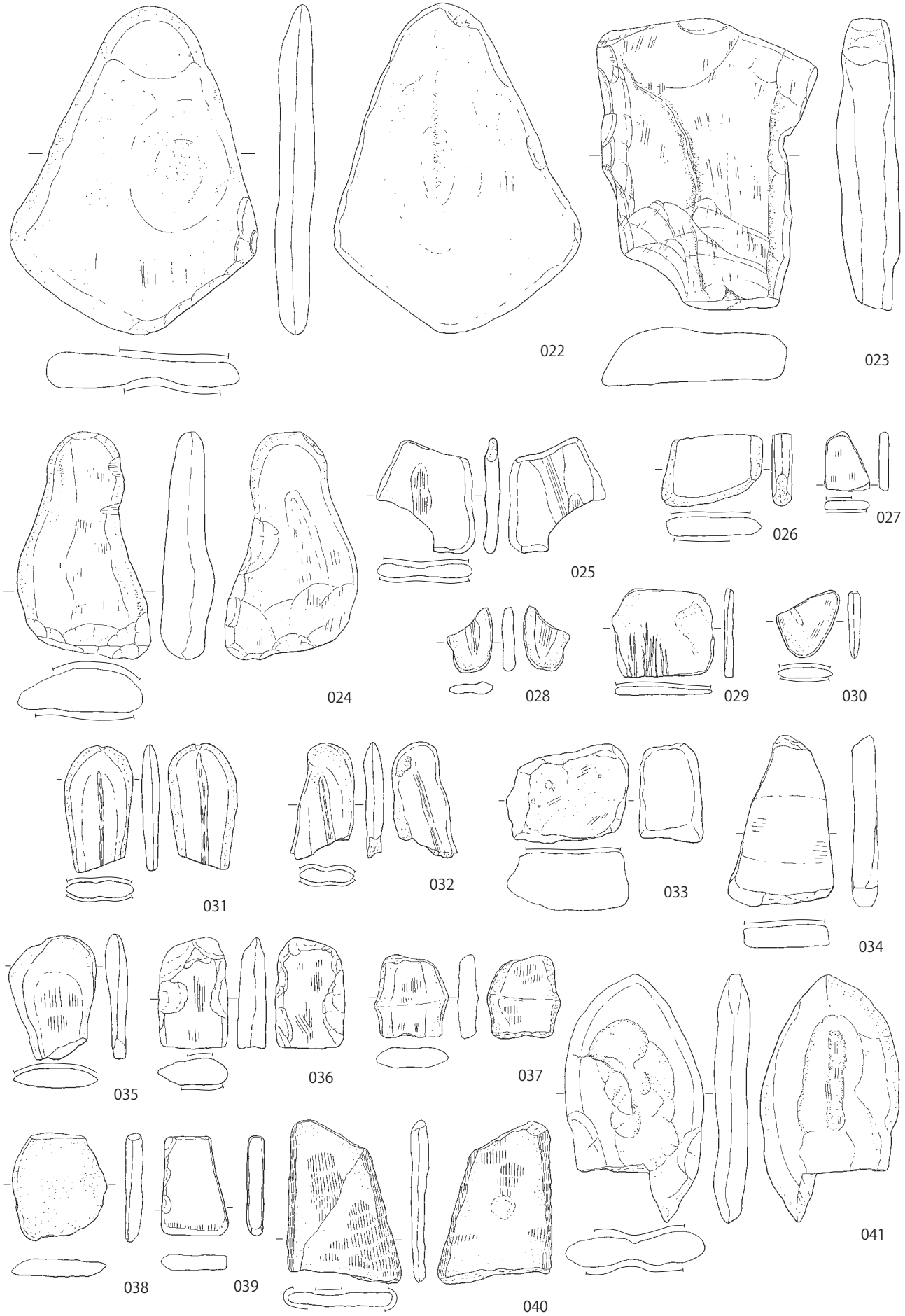
１点を図示した。２号住居より出土した。直径15.6センチとやや大型の楕円形である。正面全体が中央に向けてくぼんでおり、径１～２センチの浅いくぼみが10箇所以上認められる。背面の中央部分に１センチ程の凹みが１か所、周辺に小さな使用痕が複数個所みられる。白色凝灰岩製である。図示した以外に、深型のテン箱にＡ区から12箱分、Ｂ区から１箱分出土している。

14. 石錘（第115図）

７点を図示した。１、４は礫の上下端に切れ目を有する切れ目石錘である。４は半分を欠損している。２、７は長軸上に打撃を受けた剥離面を有する礫石錘である。２は縦方向に割れ裏面が欠損しており未成品である。３、６は長軸上に一本の溝を有する有溝石錘である。


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011・019
012
013
014
015
016
017
018
020
021
0
5
10 cm
1:3

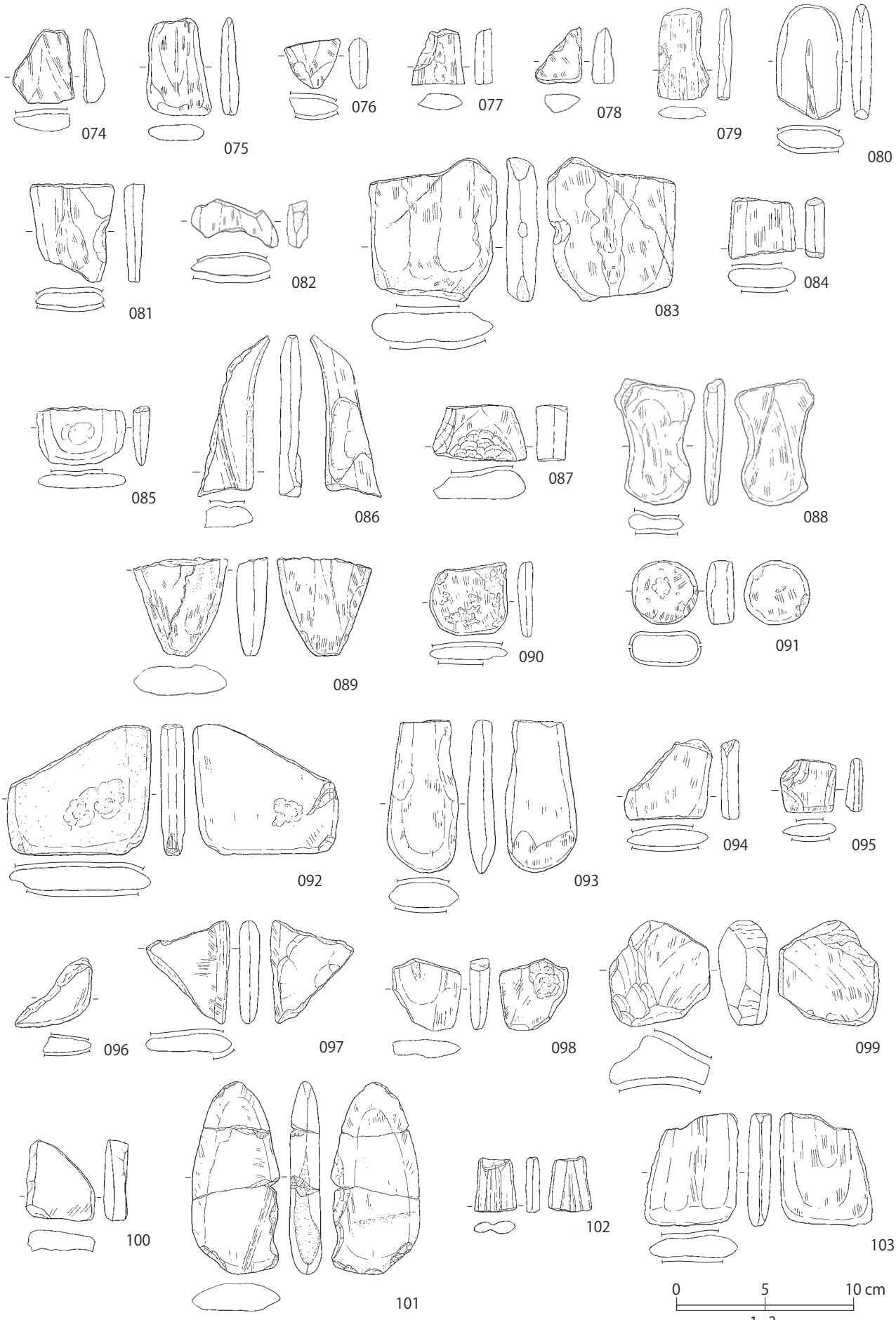
第103図　砥石（1）


022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
0
5
10 cm
1:3

第104図　砥石（2）

042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
0
5
10 cm
1:3

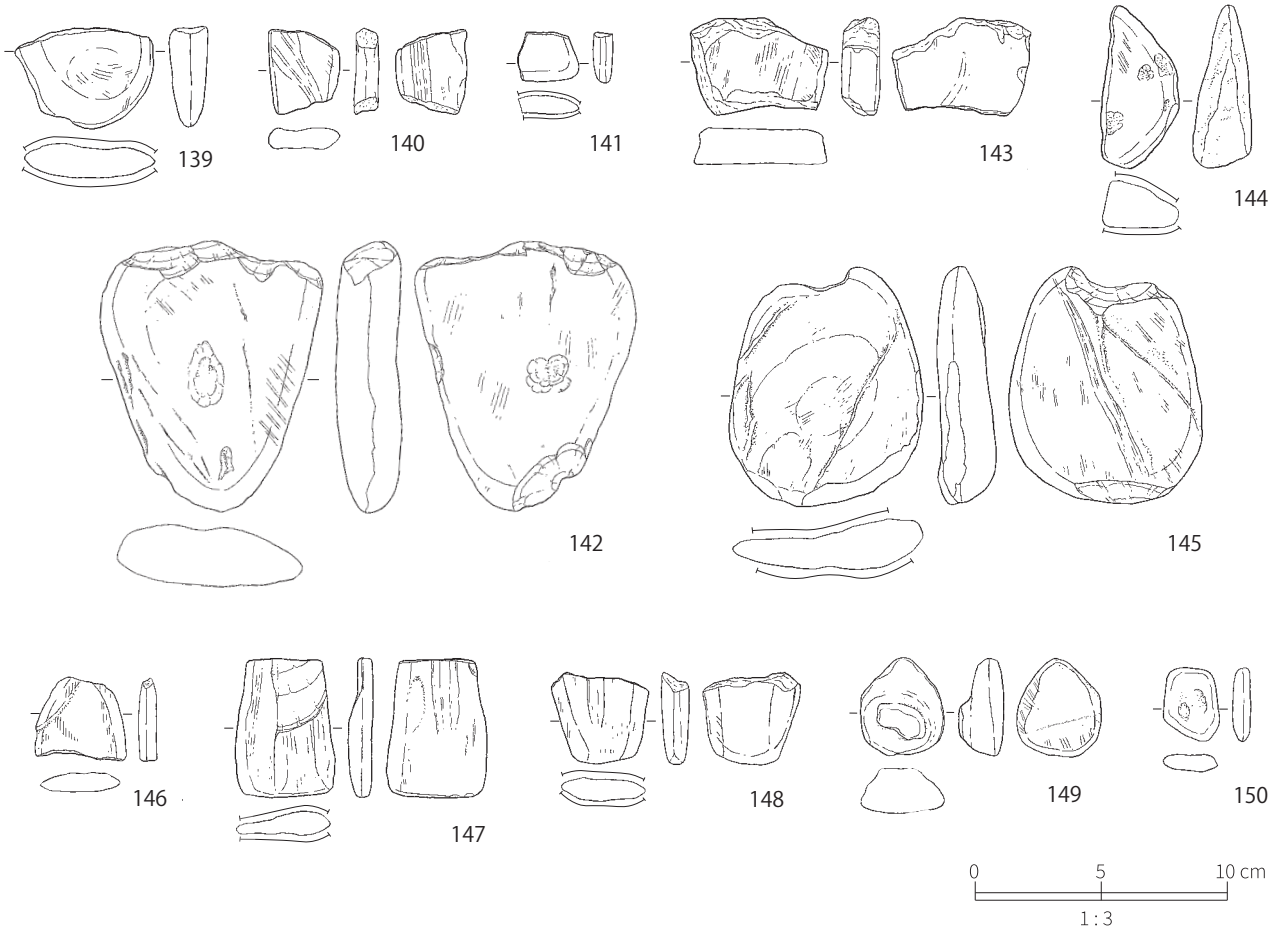
第105図　砥石（3）


074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
0
5
10 cm
1 : 3

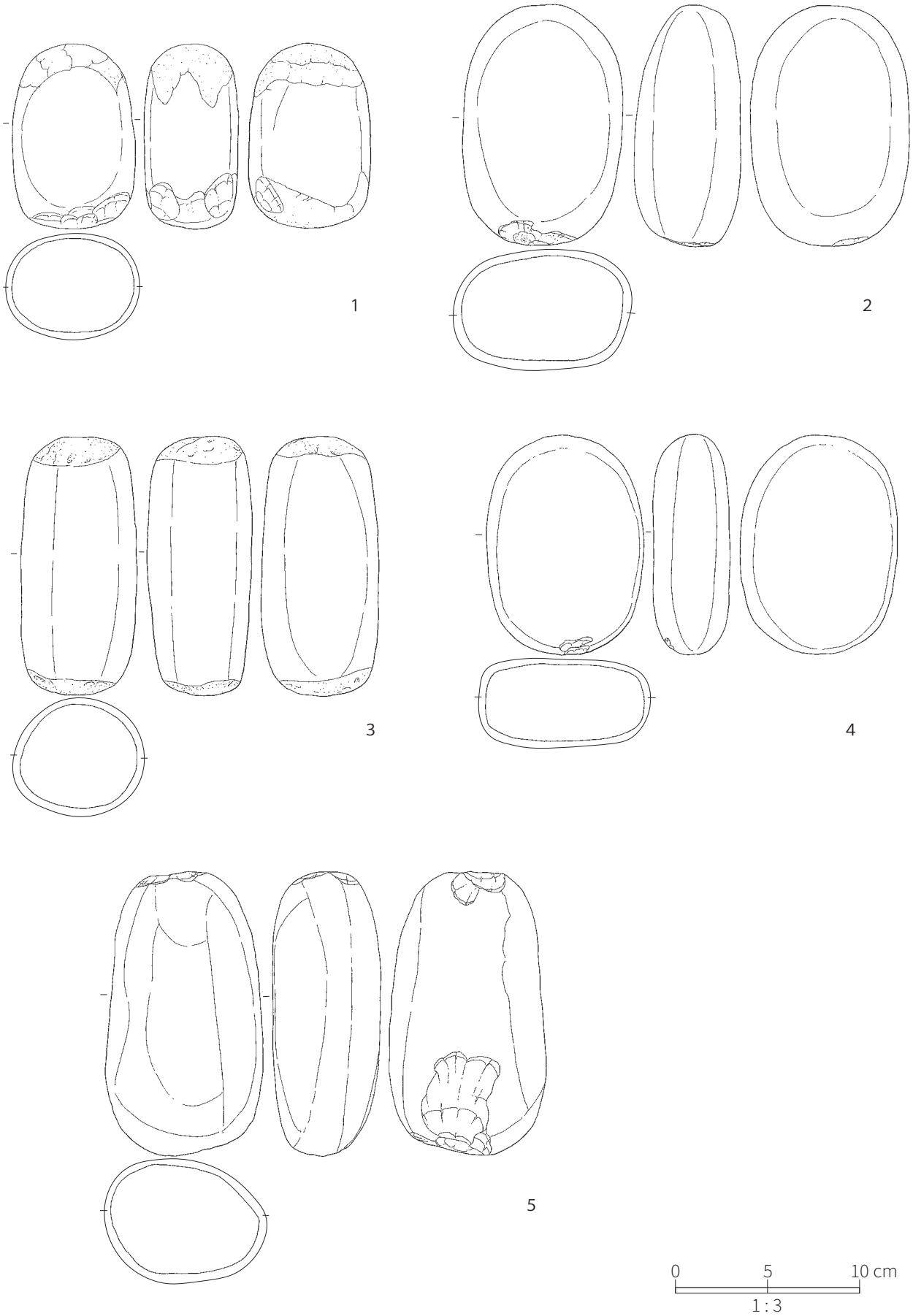
第106図　砥石（4）

104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
0
5
10 cm
1:3

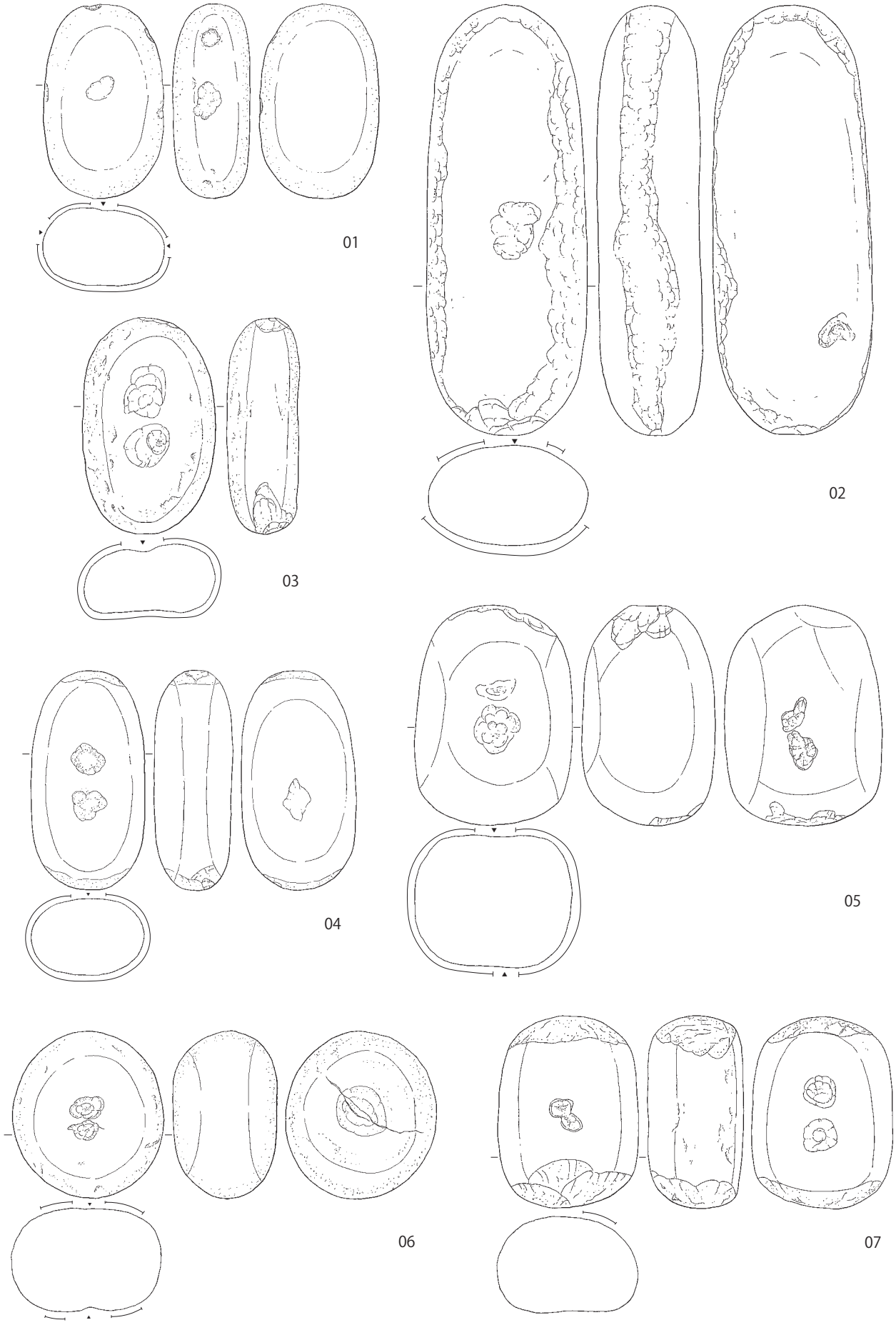
第107図　砥石（5）



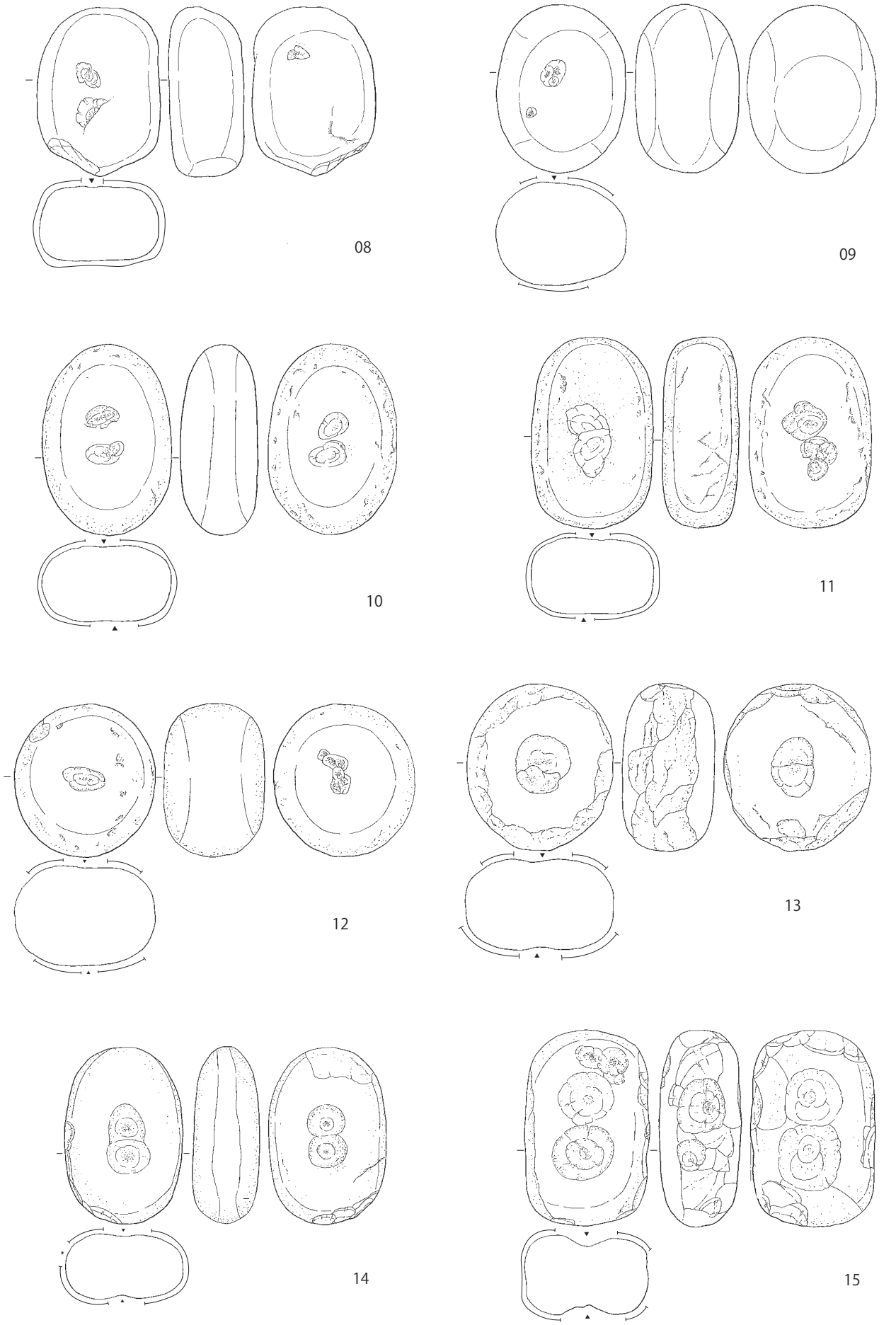
第108図　砥石（6）



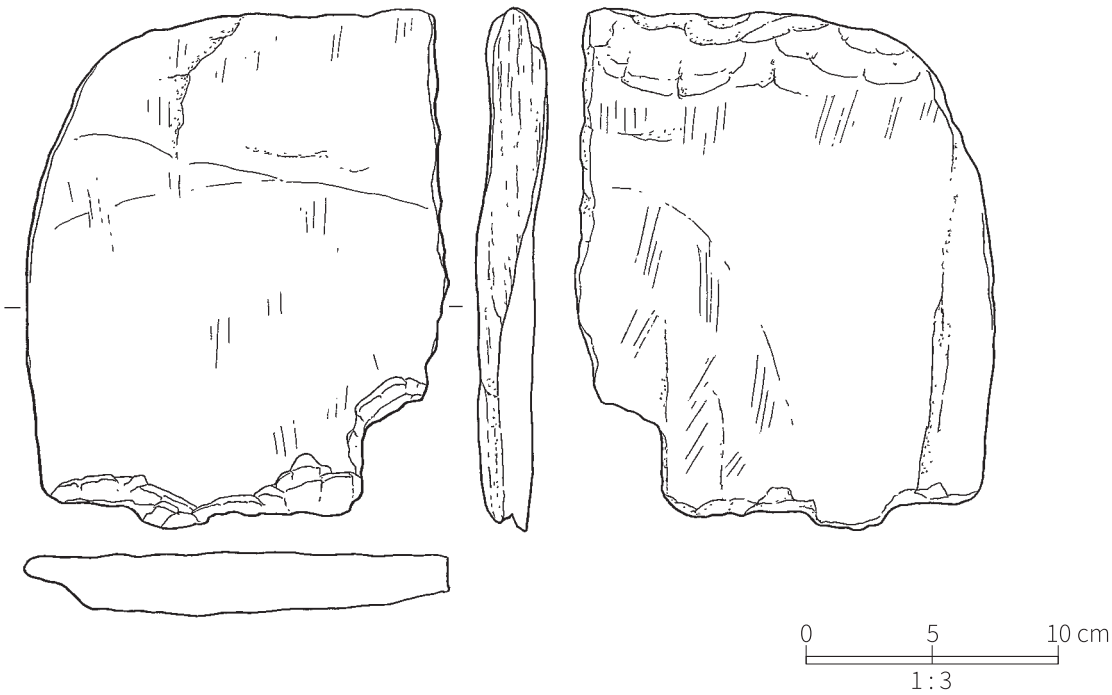
第109図　敲石



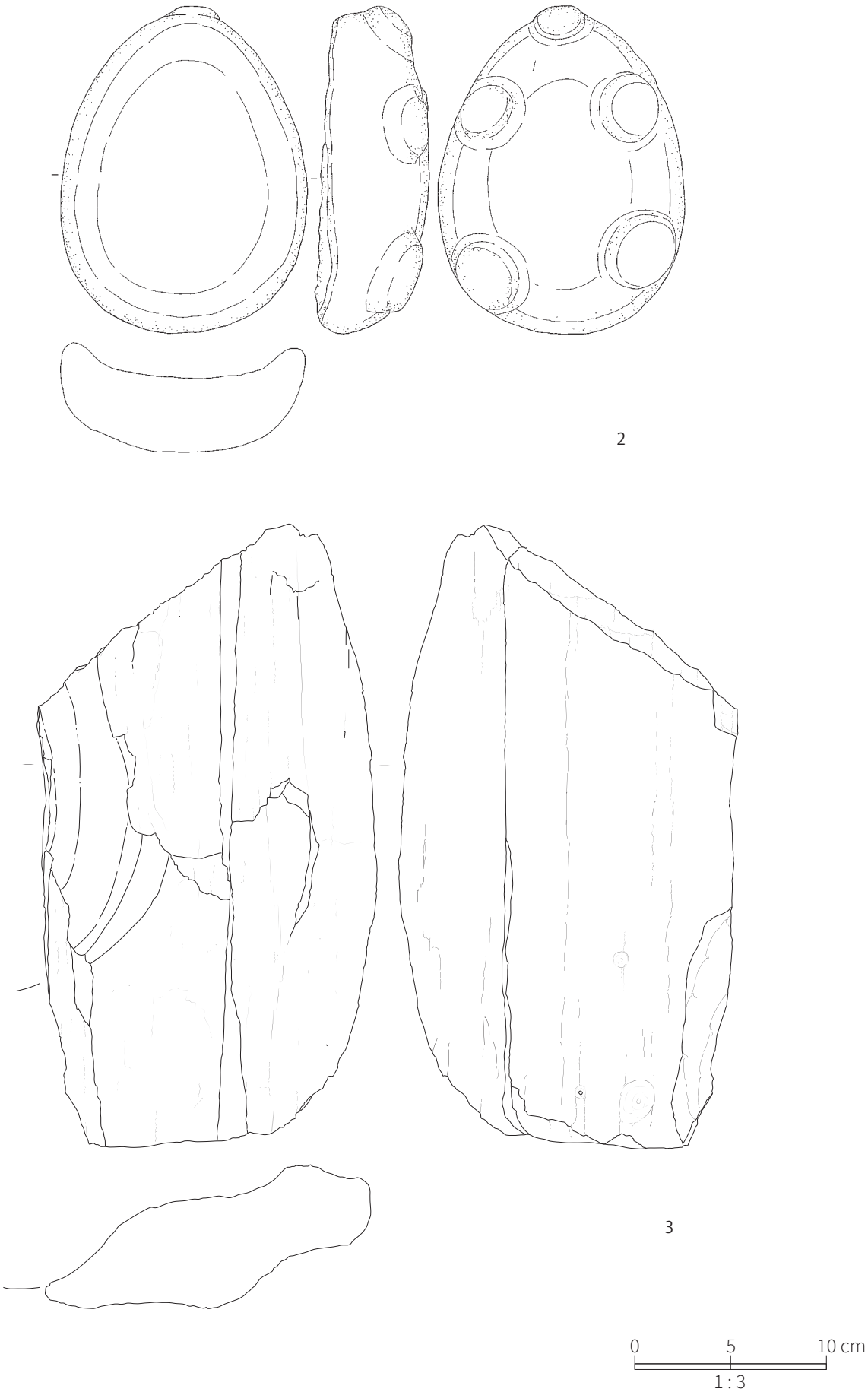
第110図　凹石（1）



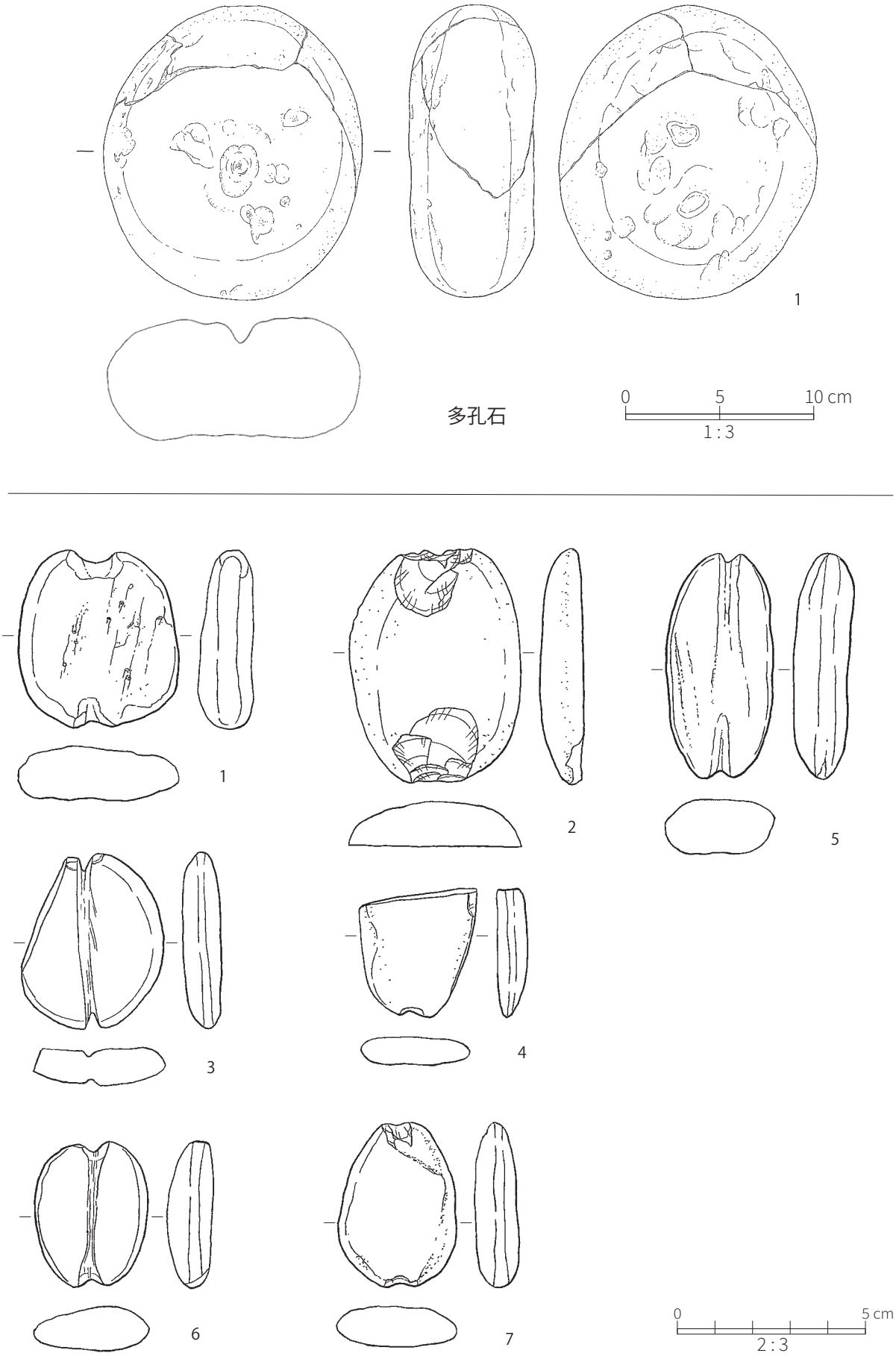
第111図　凹石（2）



第112図　石皿（1）



第113図　石皿（2）



第114図　多孔石・石錘

第５節　石 製 品

１．岩版（第115図～第122図）

⑴　岩版の分類

本遺跡出土の岩版のうち、55点を図示した。文様から７つに分類した。

Ⅰ―１　長軸に縦の中心線を持ち、左右対称の三叉文または玉抱三叉文のモチーフで正面を埋めるもの。文様は陰刻により中心部分を浮き出させる。19、33、34、43、44

Ⅰ―２　長軸に縦の中心線を持ち、左右対称に縦の鋸歯文を線刻する。07、09、53

Ⅱ―１　横方向の文様帯に、渦巻き文と三叉文を組み合わせた文様を構成するもの。22、24、42

Ⅱ―２　横方向の文様帯に、渦巻き文と三叉文、Ⅰ字文を組み合わせた文様を構成するもの。21

Ⅱ―３　横方向の文様帯に、１字文が施文されるもの。49、51、55

Ⅲ　渦巻き状の文様が線刻されるもの。01

Ⅳ　沈線による区画、ランダムな文様等。08、10、11、23、38、39、45、46

Ⅴ　無文。

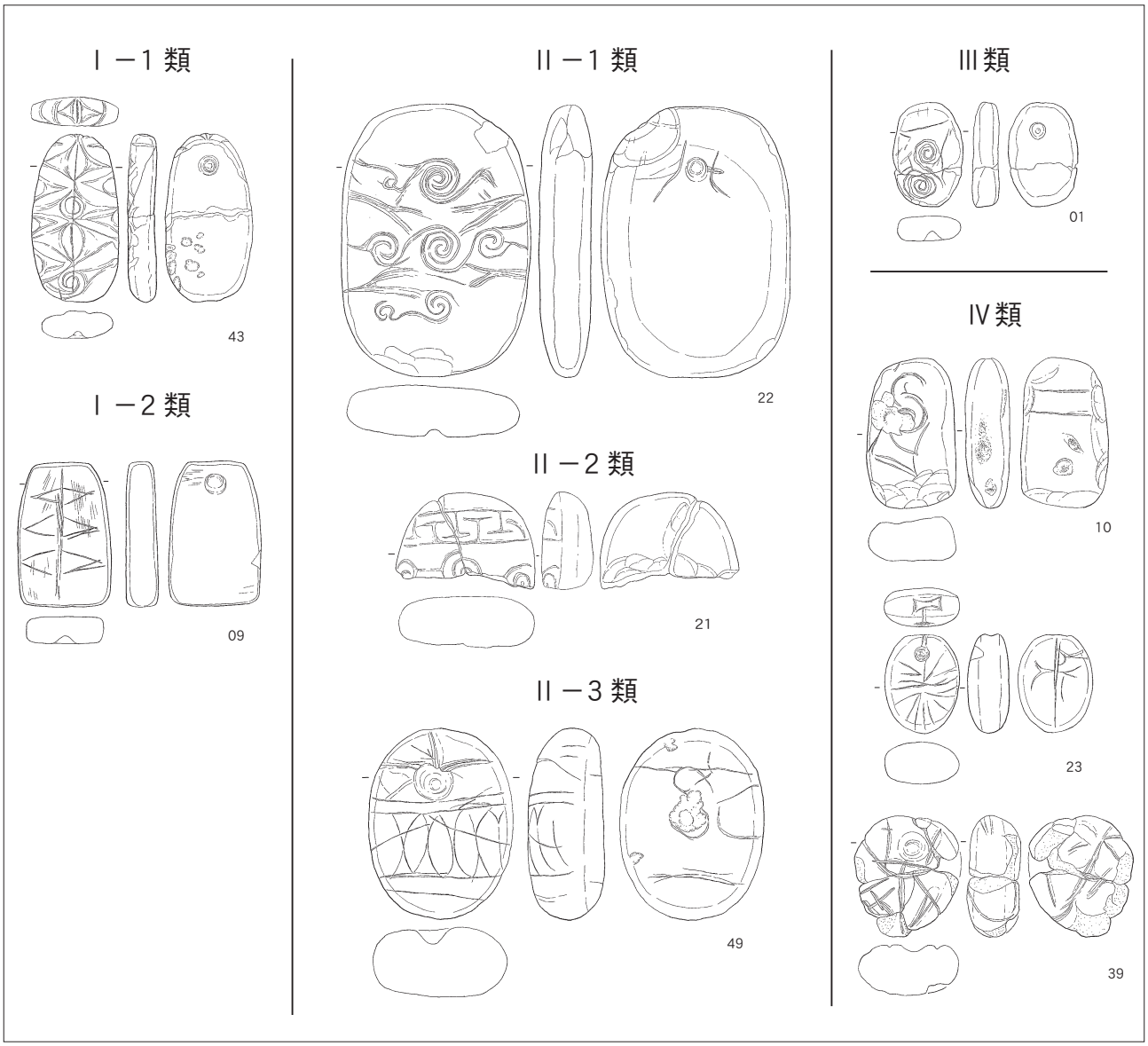
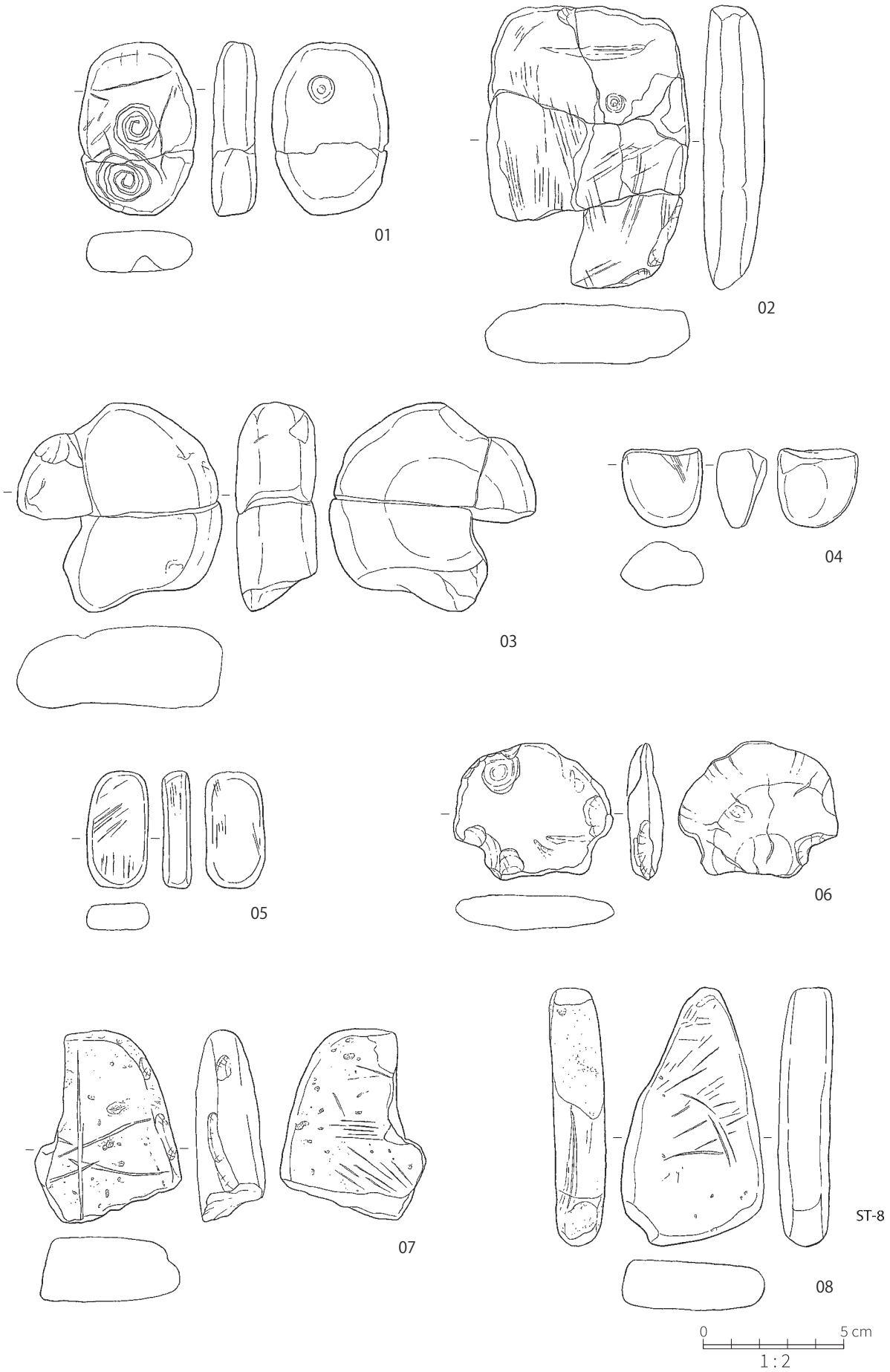
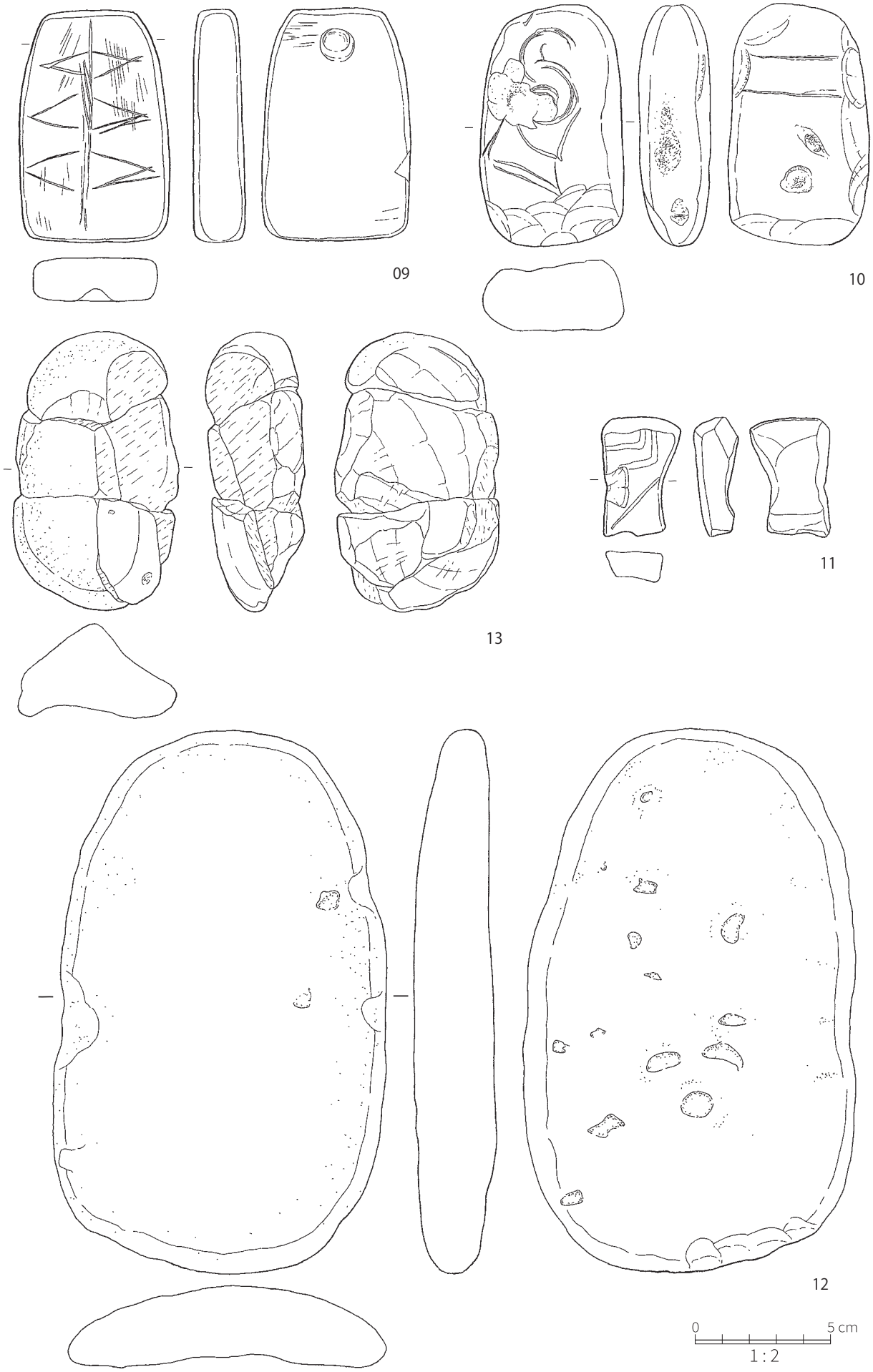


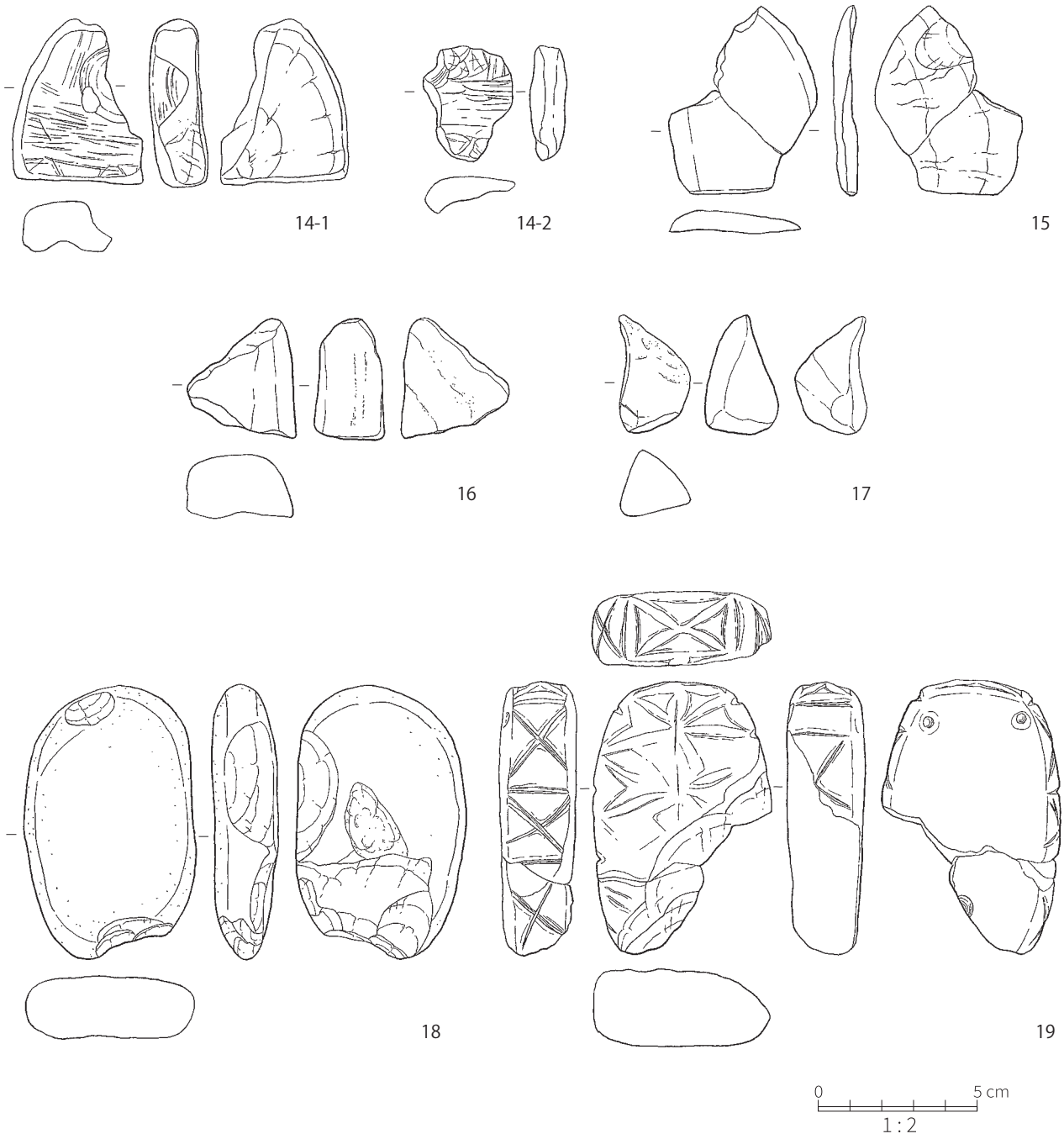
図１－５－１　岩版の分類



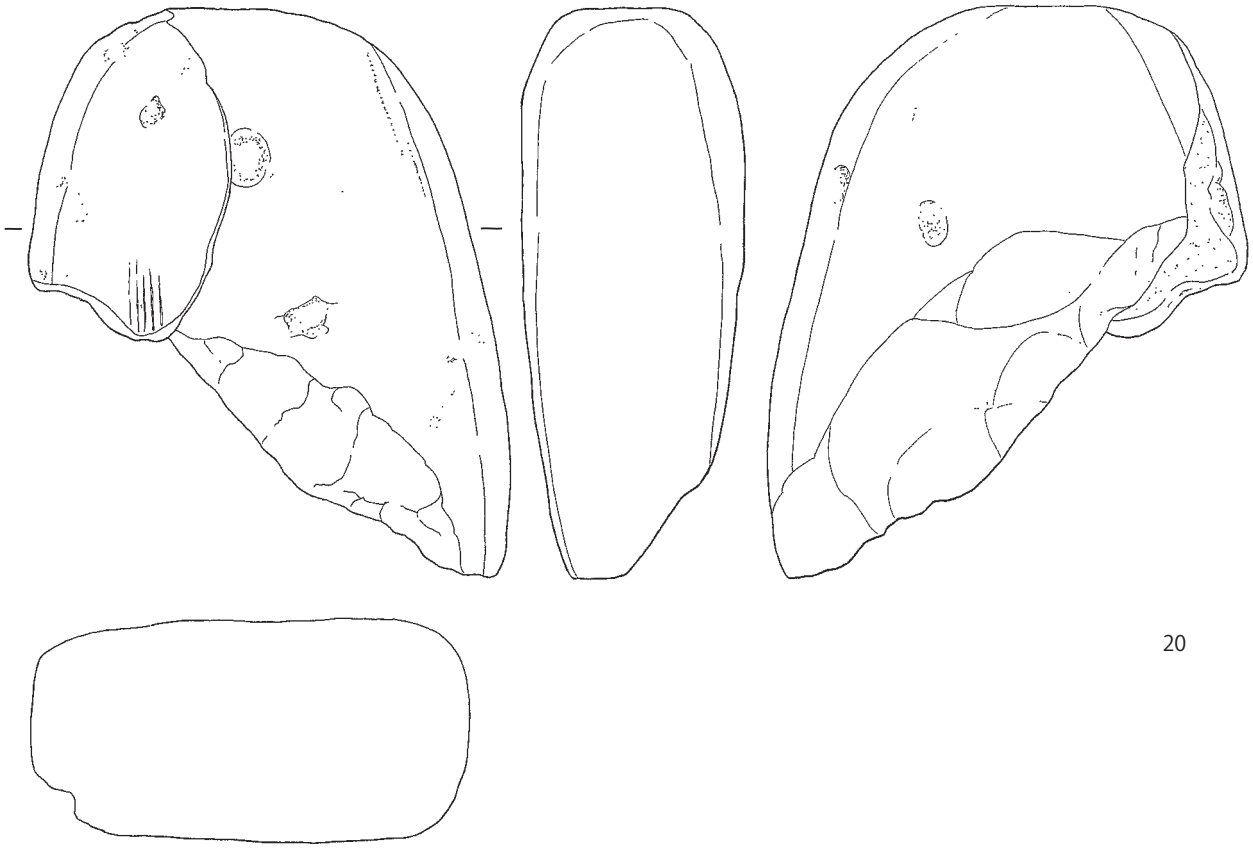
第115図　岩版（1）



第116図　岩版（2）

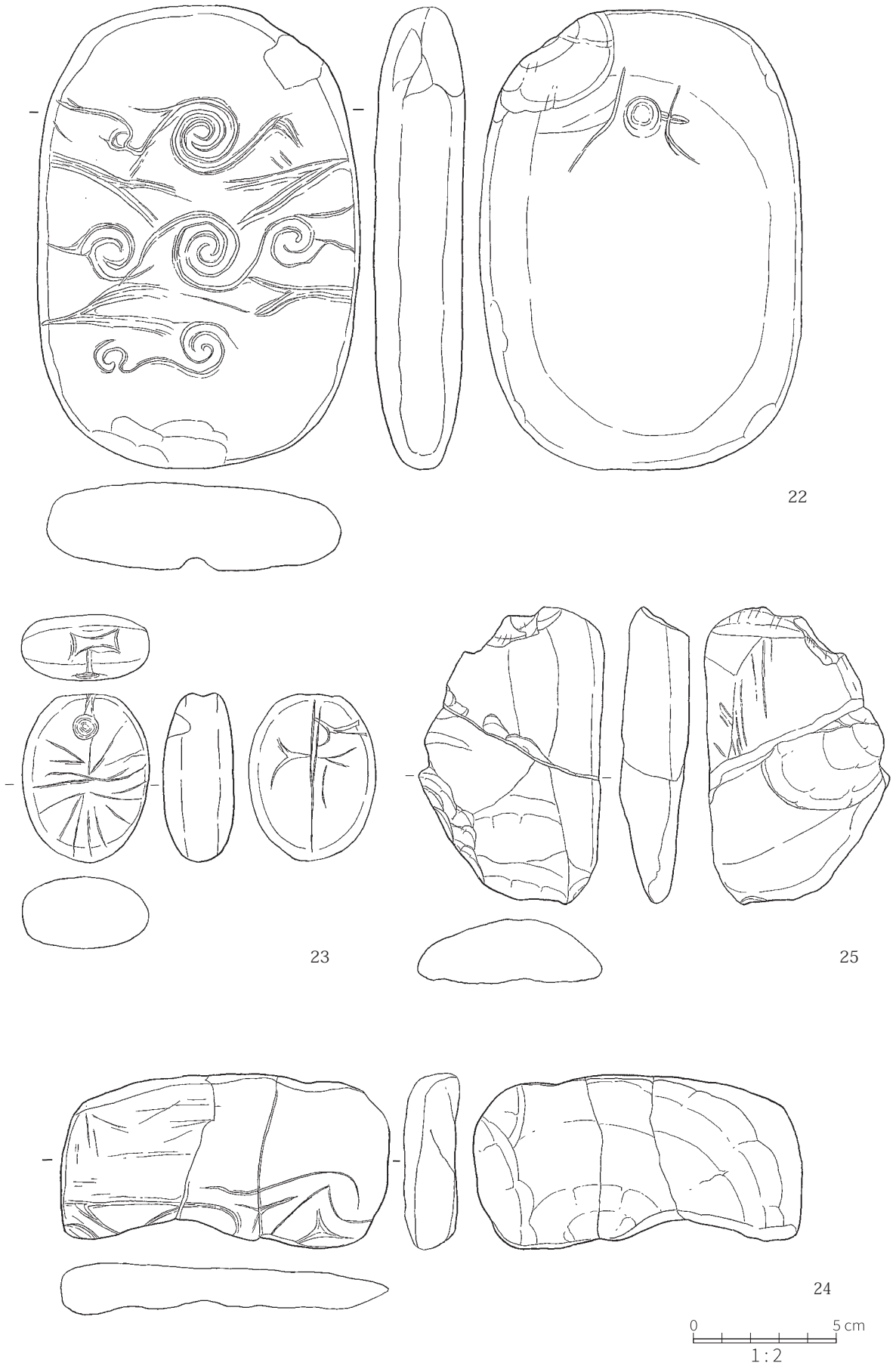


第117図　岩版（3）



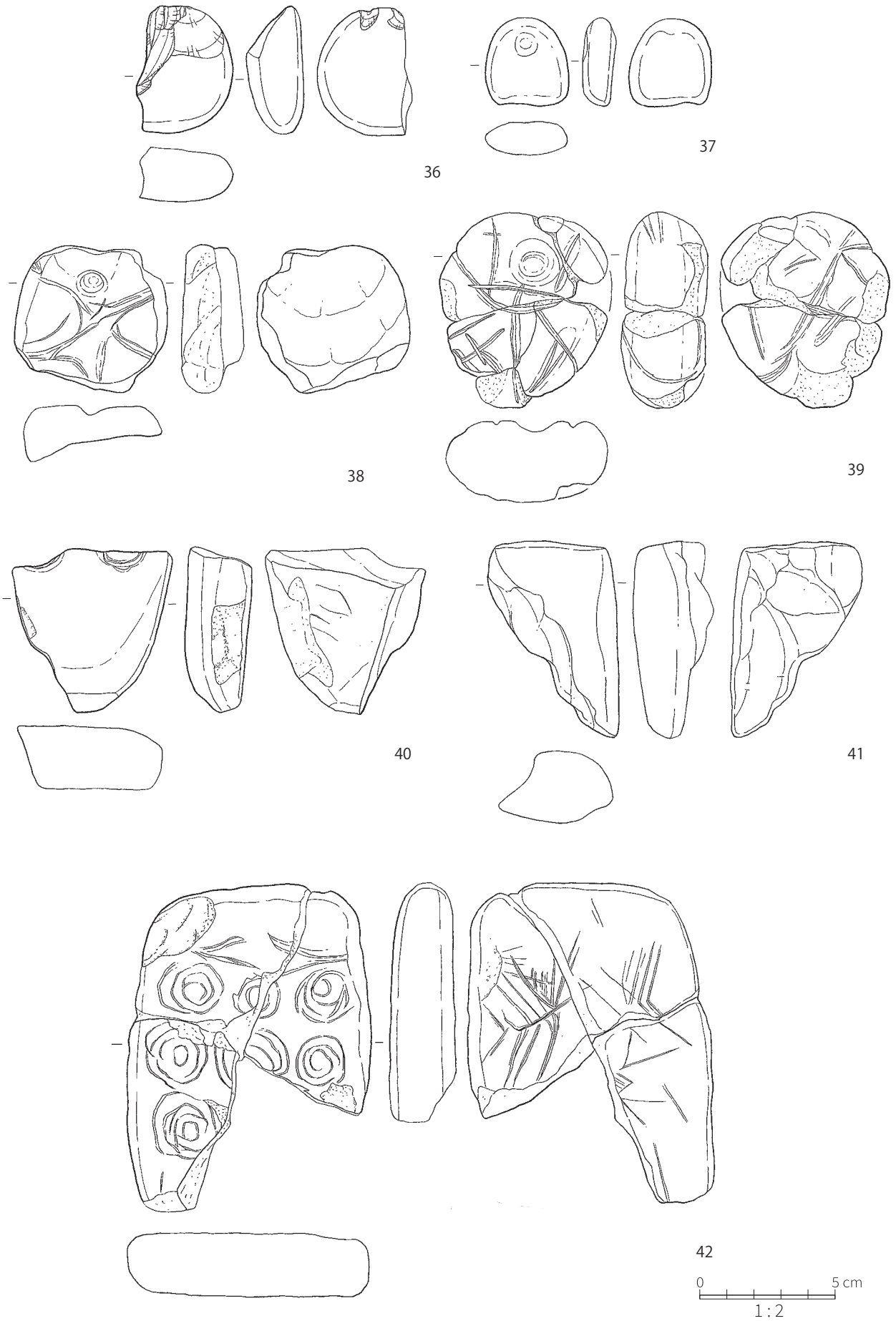
0 5 cm
1:2

第118図　岩版（4）

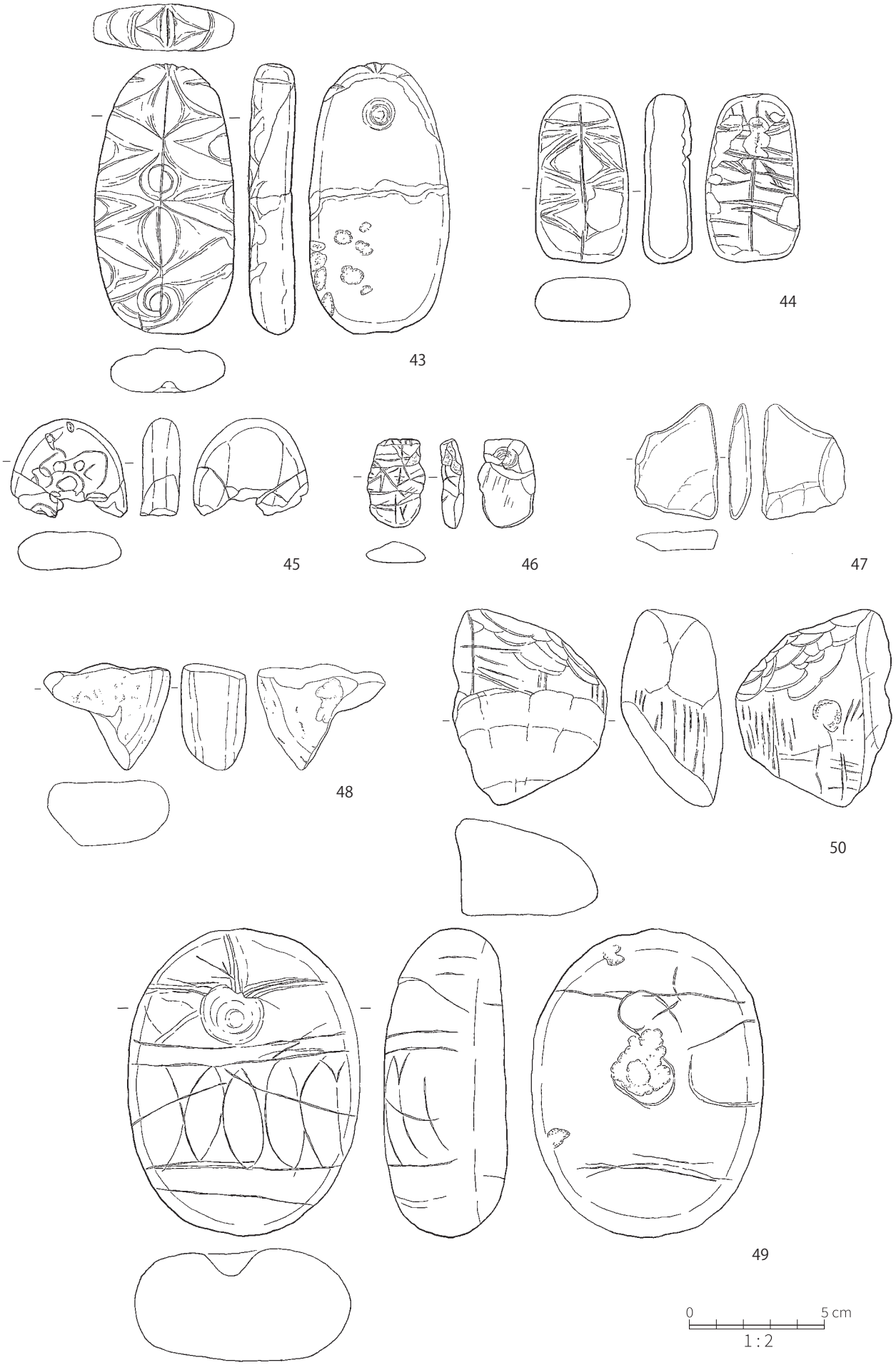


第119図　岩版（5）

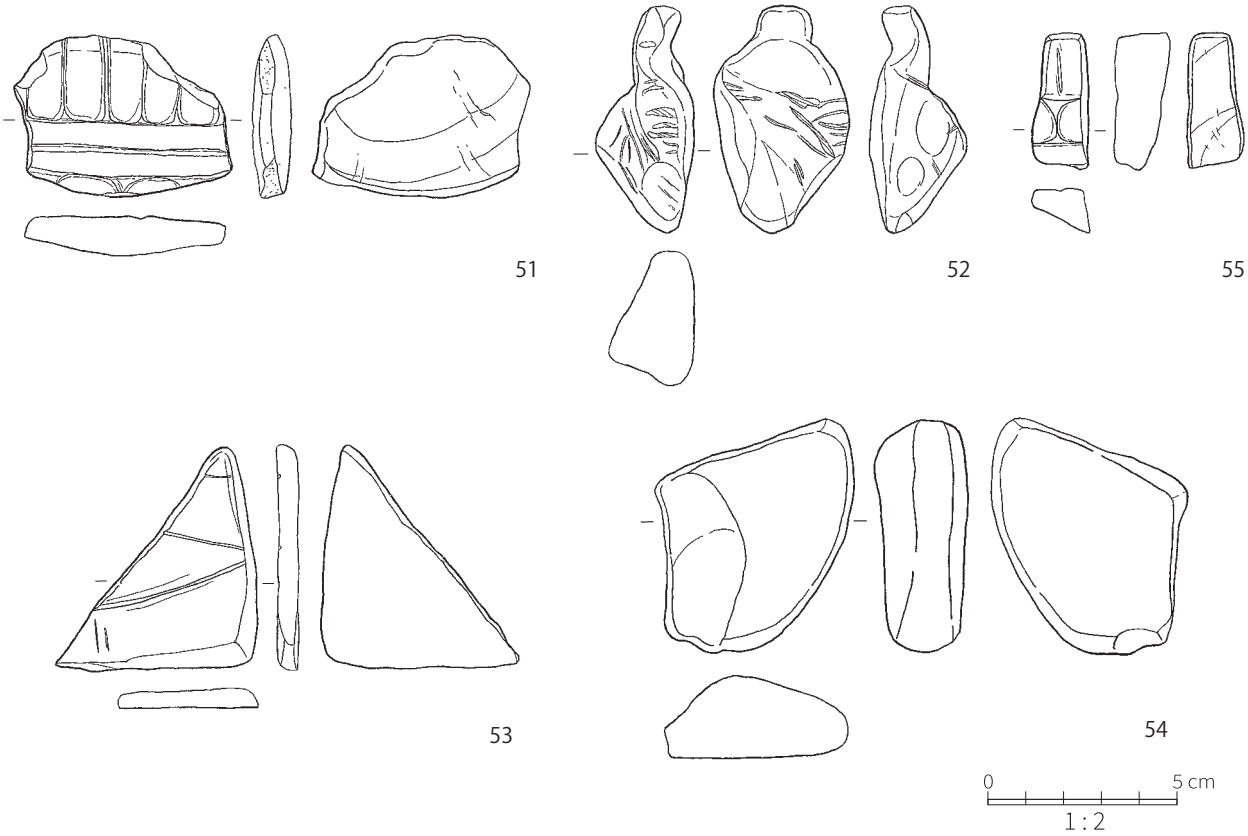
第120図　岩版（6）



第121図　岩版（7）



第122図　岩版（8）



第123図　岩版（9）

⑵　出土した岩版

また、岩版の成型後に影響されたと思われる各種の痕跡については以下のとおり観察表に記載した。穿孔痕の有無、直径、深さ、数について。たすき状の擦切り痕がみられるものについても記載した。被熱の有無については石材の変色（橙・灰色）の有無を記載した。

掲載資料の55点中20点が破片である。ほかに図示することができなかったものに、文様のないもの、破片（小片も含む）が200点以上出土している。破損面の観察から人為的に打撃が加えられた結果の破損であるのかを判断することが難しい資料もある。

使用痕は丸棒状の道具の使用が推定される貫通しない回転擦痕と、ナイフ状の道具によるたすき掛け状擦痕が観察される。制作→擦痕をつける何らかの行為（回転、たすき掛け）→被熱、破損→廃棄の過程が想定される。

⑶　岩版の石材

今回図示した55点のうち流紋岩質凝灰岩１点を除く54点が白色凝灰岩である。

茅野遺跡出土岩版の石材分析については遺構編に掲載したとおりである。土版の出土点数が１点であるのに対し、岩版は破片を合わせて269点出土している。

白色凝灰岩の石材産出地として群馬県利根川上流地域に地蔵橋白色凝灰岩原産地が確認されるとともに、縄文後・晩期遺跡である矢瀬遺跡、瀧沢遺跡、谷内遺

写真１－５－１　茅野遺跡出土資料（１・上段）と利根川採集の白色凝灰岩（２・下段）

跡、中栗須滝川Ⅱ遺跡では、白色凝灰岩性の岩版が土版の出土点数を大幅に上回ることから利根川上流域からの石材供給の可能性が指摘されている（写真１－５－１）。

参考文献

角田真也　2010 「関東地方における〈土版・岩版〉研究の前提　―群馬県の白色凝灰岩原産地とその意味―」國學院大學学術資料館　考古学資料館紀要　第26輯　97～121頁　國學院大學研究開発推進機構

２．玉　類（第124図）

⑴　大珠

１点出土した。緑色を呈する蛇紋岩製のもので、6.4センチあるが３分の１程度を欠損している。正面は丁寧に磨かれており部分的に擦痕が残る。加工中に正面上端部付近の節理面に生じた凹凸をなめらかにしようと特に入念に磨いたためか平坦面が生じている。直径９ミリの貫通孔はほぼ垂直に真っすぐ穿孔されており、裏側の孔の直径は１ミリほどである。

⑵　勾玉

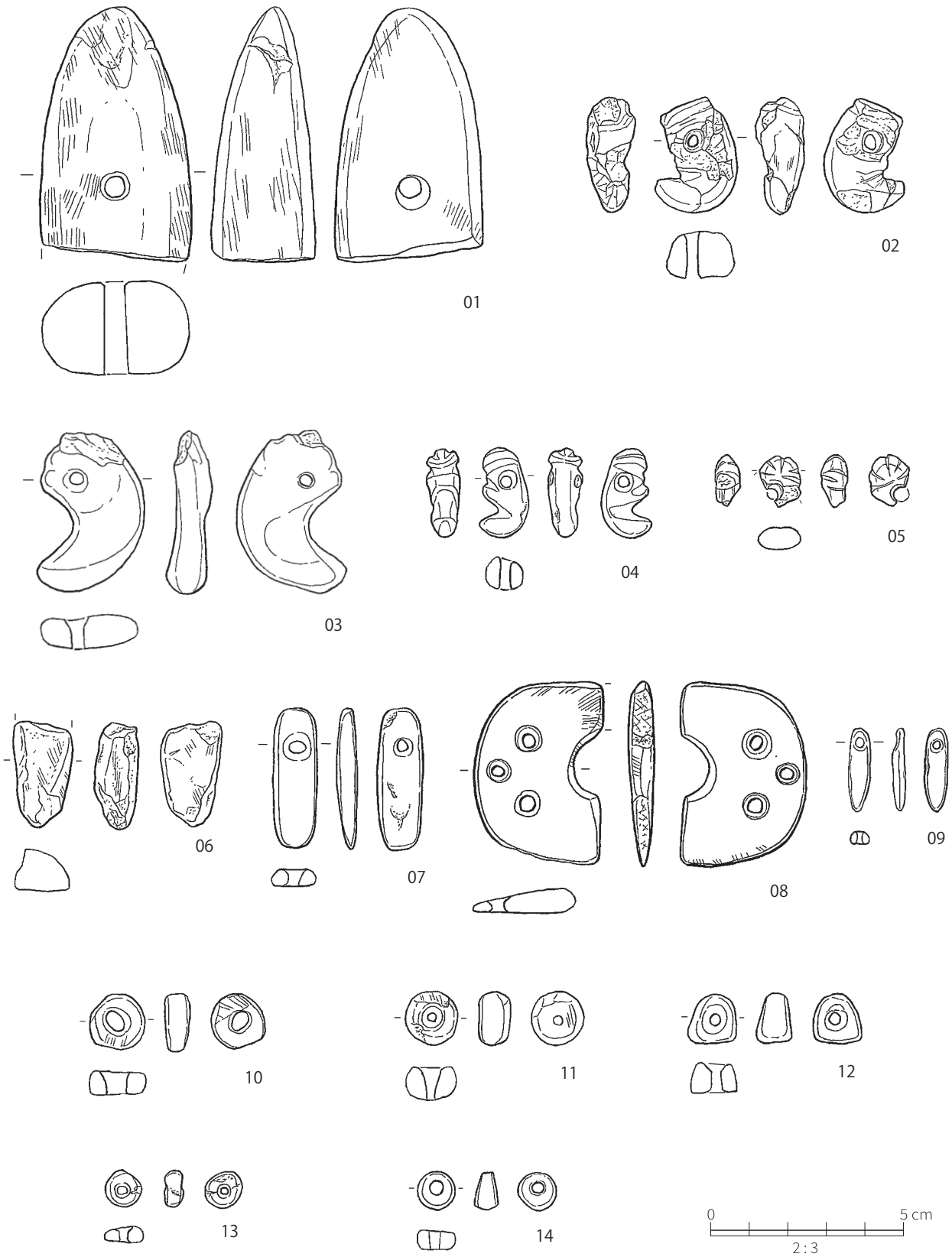
４点出土し、図示した。２は破損しており、表面は剥離している。貫通孔上部と屈曲部分に刻目が施される。両面穿孔。葉蝋石製で乳緑白色を呈する。３は軽石製で頭部にゆるやかな刻目を有する。片面穿孔。４は上端部に横位の刻目が２本、左側縁から２箇所刻目が施される。両面からの穿孔で全体に丁寧に磨きが施されている。葉蝋石製で乳緑色を呈する。５は上端部の破片である。上端部に正面～背面に連続する５条の刻目を施す。片面穿孔。葉蝋石製で乳緑色を呈する。

⑶　垂飾

４点出土し、図示した。６は未成品である。穿孔痕はない。７は扁平な隅丸長方形に加工し、片面から穿孔する。黒緑色でよく研磨されている。８は蛇紋岩製の玦状耳飾りの再生品と思われる。中央部分から破損した薄型の玦状耳飾りの半分に、３箇所の穿孔を両面から行い、研磨を施している。破損面を加工した時にできたとみられる擦痕が左側面全体に認められる。全体的に丁寧な研磨が施される。９は小型品である。下端部を細くした長方形に成形し、上端部近くに両面から穿孔している。滑石製。

⑷　丸玉

５点出土し、図示した。10は円形に加工され、中央孔は両面から穿孔される。正面・背面とも研磨時に形成された平坦面が残る。滑石製で黄灰色を呈する。11は円形に加工され片面から中央に穿孔される。丁寧に研磨され非常に光沢がある。蛇紋岩製。12は白色凝灰岩製で二つの隅を持ついびつな円形を呈す。両面から穿孔される。13は葉蝋石製で厚みは４ミリほどである。円形で中央孔を両面から穿孔している。14は白色凝灰岩製で緑色を呈し、円形に成形し片面から穿孔される。Ｂトレンチ７号住居址の床面上から出土している。



第124図　玉類

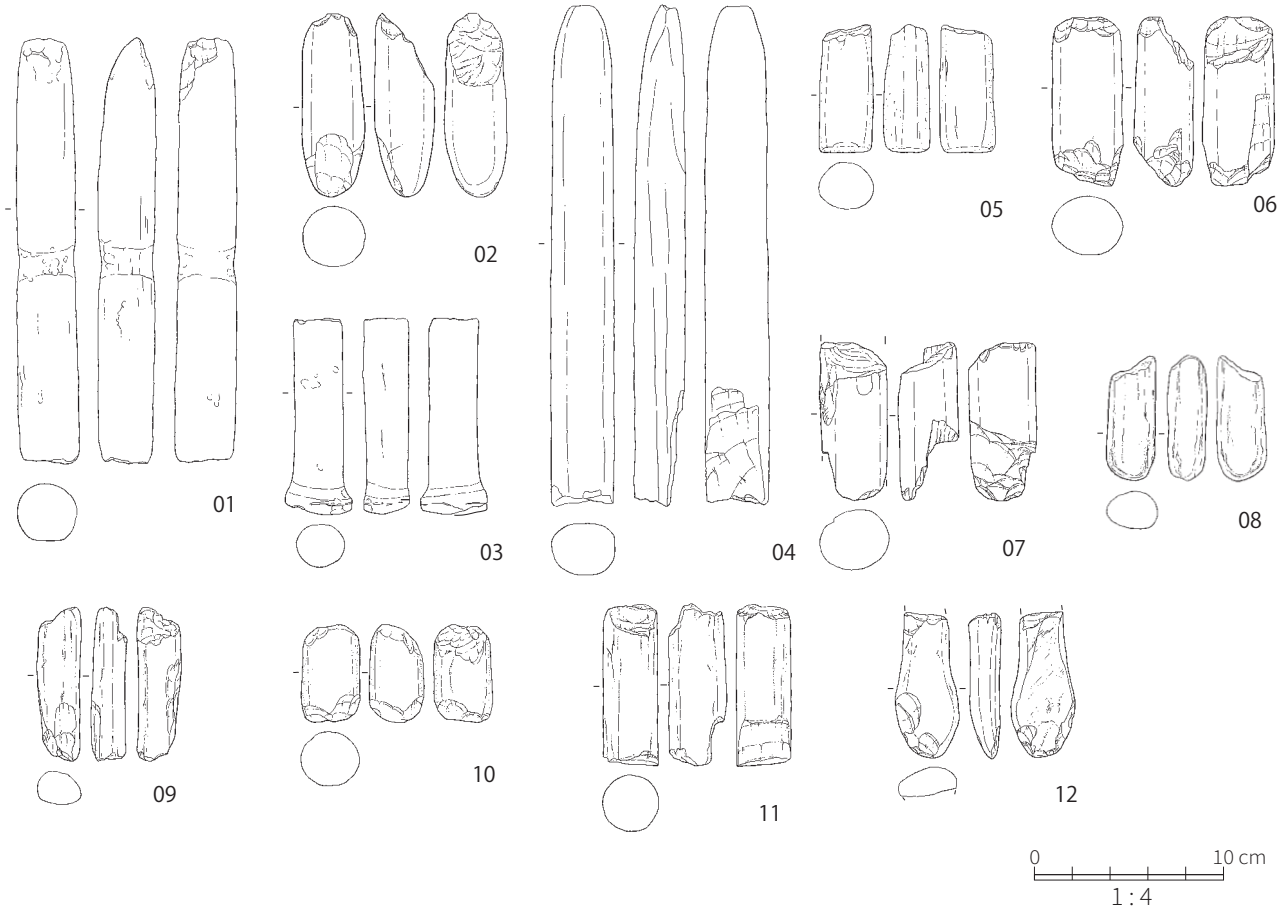
３．石　棒（第125図～第127図）

断面の形状が円形ないし楕円形を呈するものを石棒とした。27点を図示した。断面の径から小型、中型、大型の３種類に分類した。小型は断面の径（以降、数値には推定を含む）が３センチ台以内のものとした。中型は径４センチ以上～８センチ台のものとした。大型は径９センチ以上のものである。

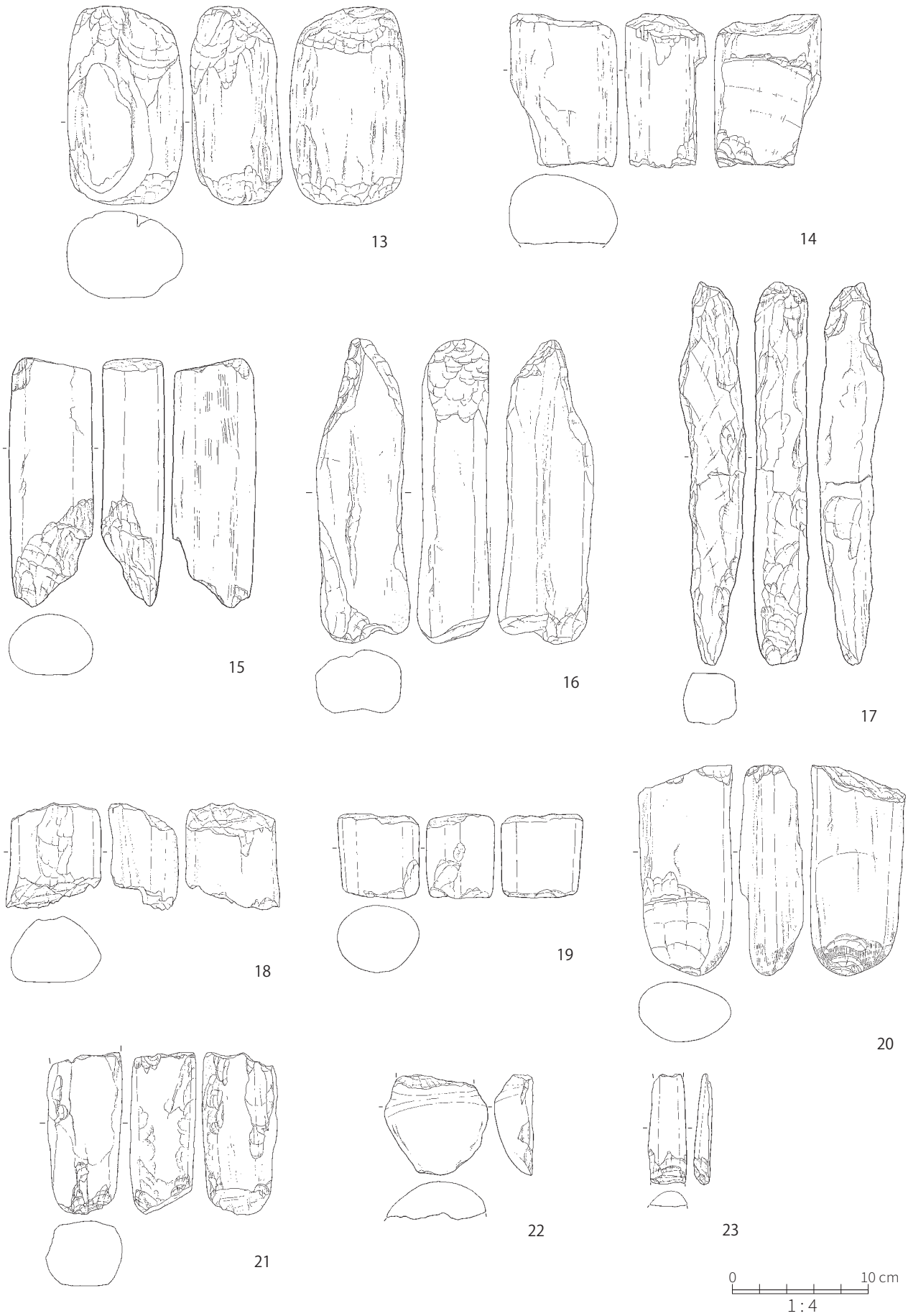
27点のうち小型は12点、中型11点、大型４点であった。断面形をみると、ほぼ正円に近い円形のものが10点あり、そのうち８点が小型、中型と大型にほぼ円形のものが１点ずつみられる。楕円形（破片のため推定の５点も含む）が最も多く13点で、内訳は小型が４点、中型が６点、大型品３点である。

16は背面に縦に擦痕がみられる。17は上下端が打撃により尖った形状で、中央から２つに割れている。

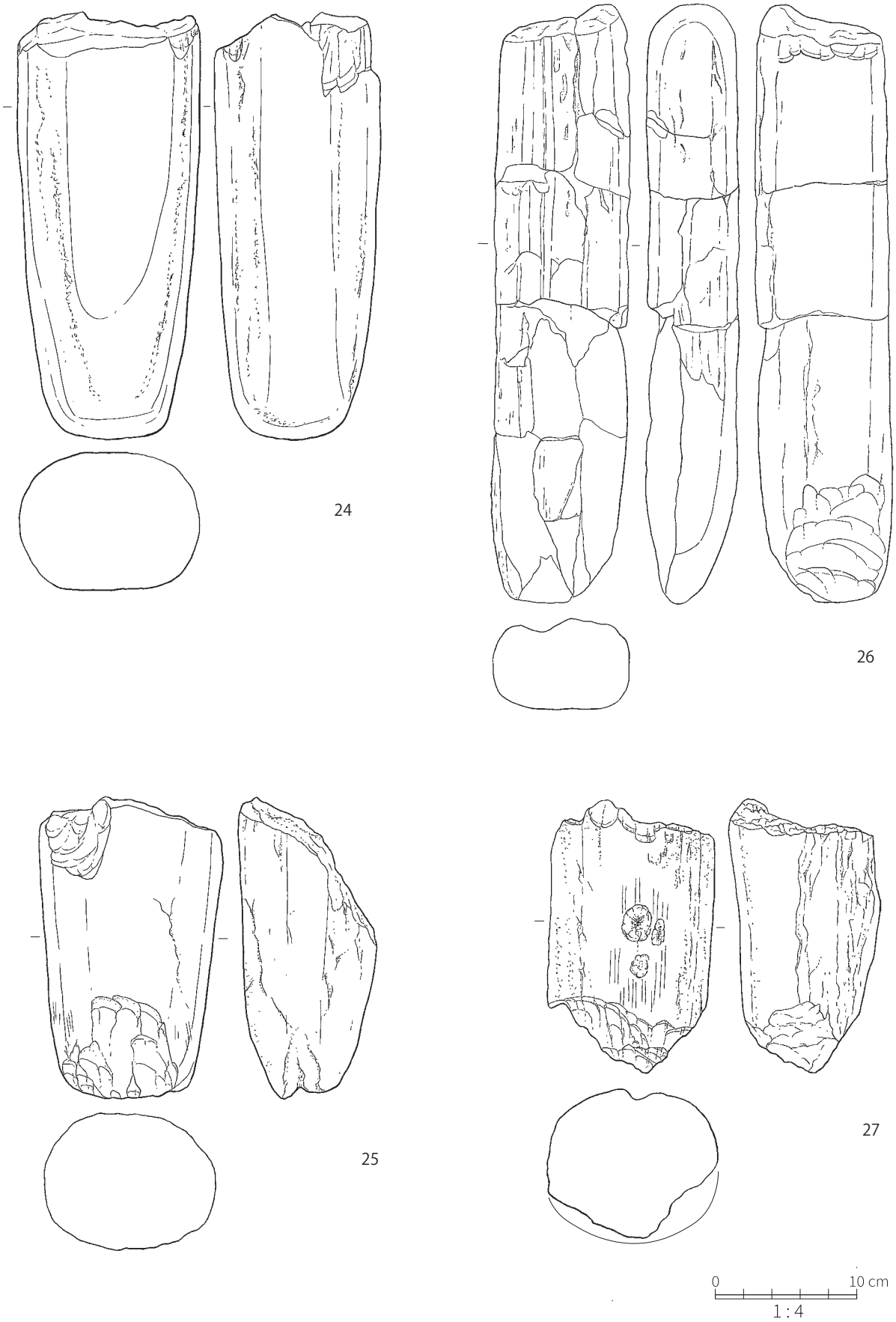
出土状況は住居跡出土が15点、水場状遺構が検出したＥトレンチから出土したものが３点、包含層出土が８点、表面採集資料が１点である。



第125図　石棒（1）



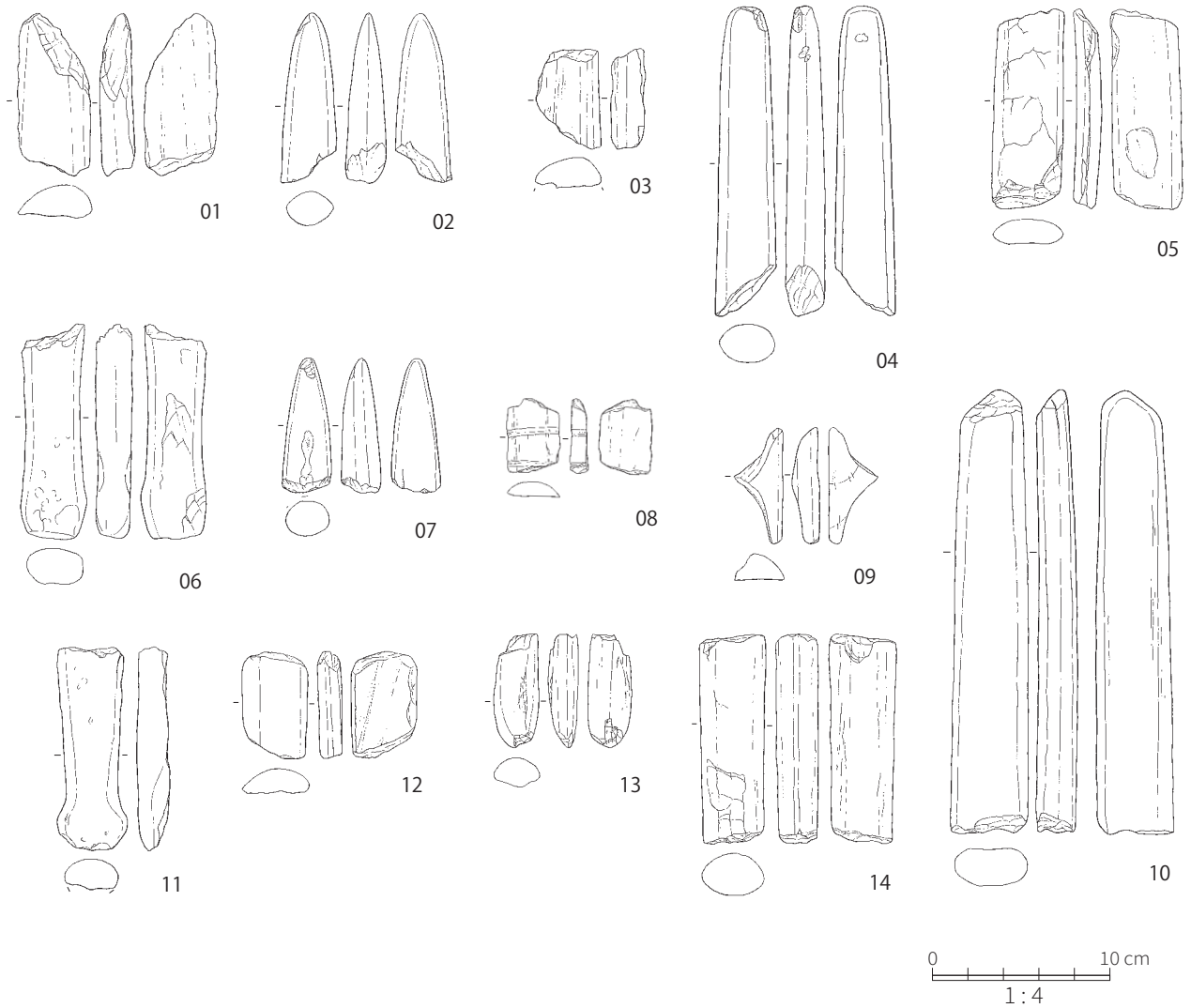
第126図　石棒（2）



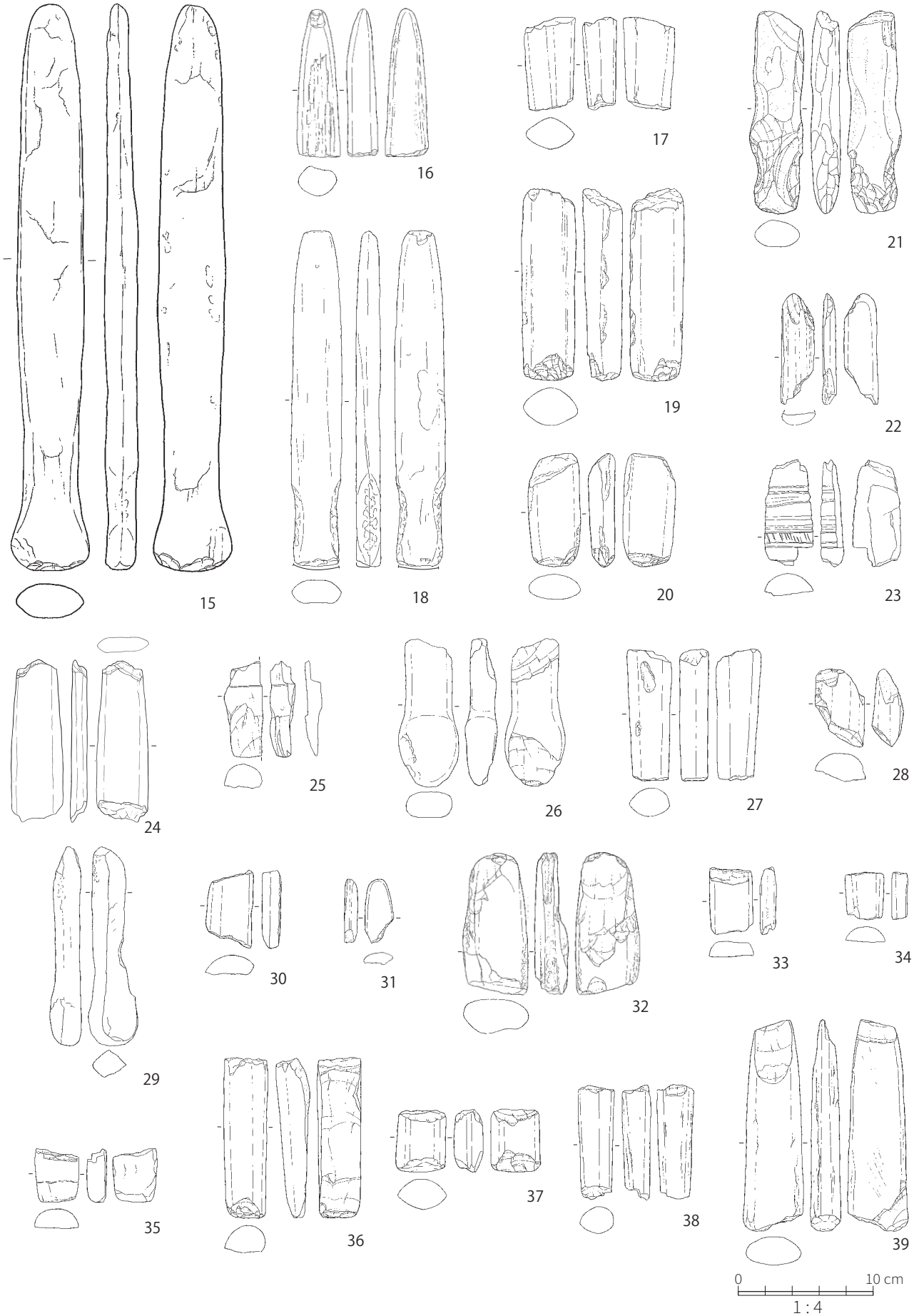
第127図　石棒（3）

４．石　剣（第128図、第129図）

断面の形状の片側ないし両側に稜を有するものを石剣とした。39点を図示した。断面の形状は楕円形、ソロバン玉形、扁平楕円形、円形、隅丸方形に分類した。楕円形は23点で最も多く、次いでソロバン玉形が５点、扁平楕円が５点、円形が２点、隅丸方形が１点であった。残存状況をみると完存は２点、先端部ないし先端部の一部とみられる破片は13点、末端部ないし末端部の一部は６点、中間部の破片は20点であった。出土地点は住居跡出土のものが23点、グリッドないし包含層出土が15点、表面採集資料が１点である。ほぼ片岩系の石材で制作されているが頁岩製のものも９点みられる。



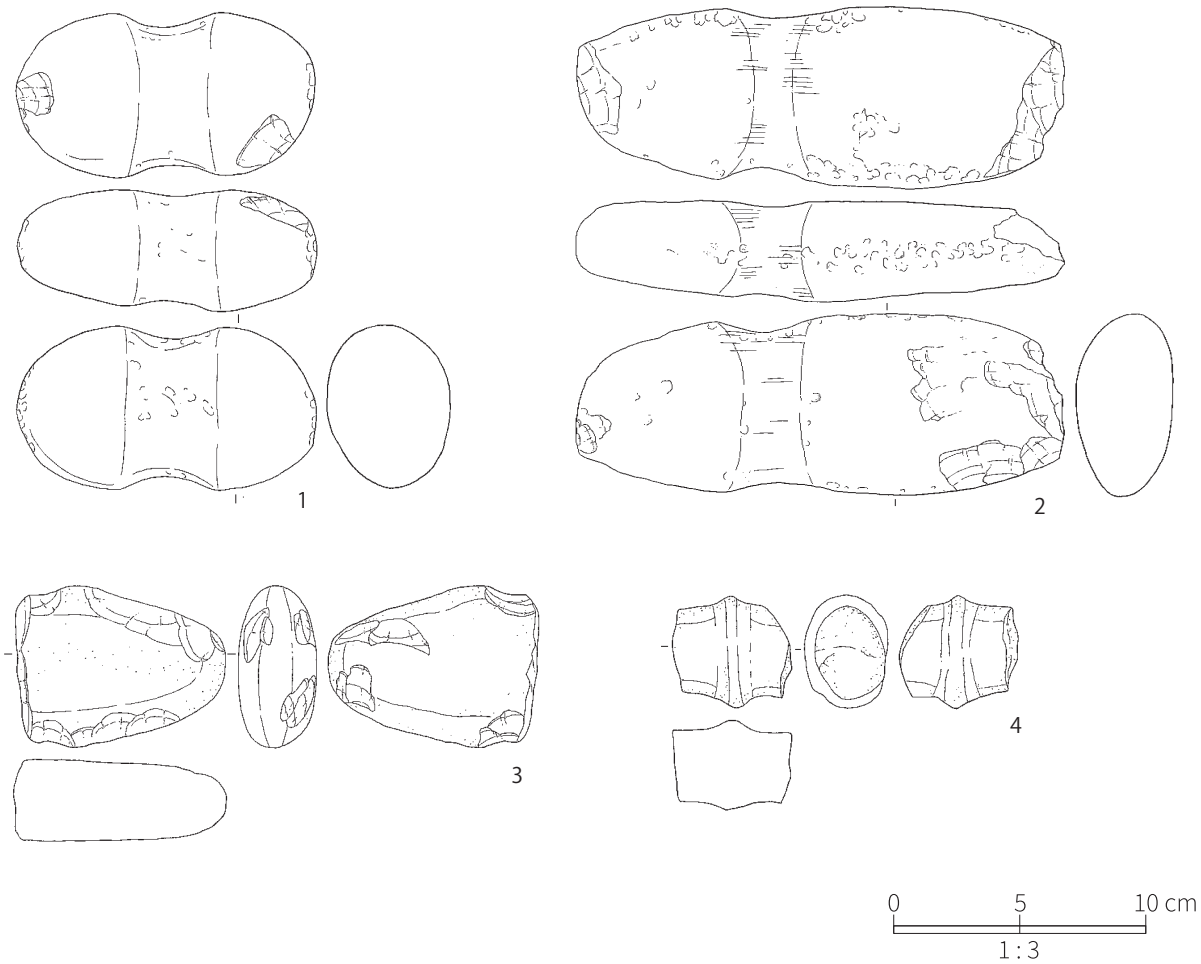
第128図　石剣（1）


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10 cm
1 : 4

第129図　石剣（2）

５．独鈷石（第130図）

４点出土した。１はほぼ完形で、全体に丁寧に磨かれている。上下の端部に敲打痕、剥離痕がみられ、成形後に打撃が加えられたものとみられる。２はほぼ完形で、両端部とその周辺に打撃痕がみられる。側面に成形時の敲打痕がみられる。３はほぼ中央で破損している。割れ口の方向は不明である。周縁部に成形のための剥離痕跡がみられる。頂部には両面に打撃による剥離がみられる。４は両端部を欠損している。割れ口の方向は不明である。全体に被熱している。



第130図　独鈷石

６．石　針（第131図）

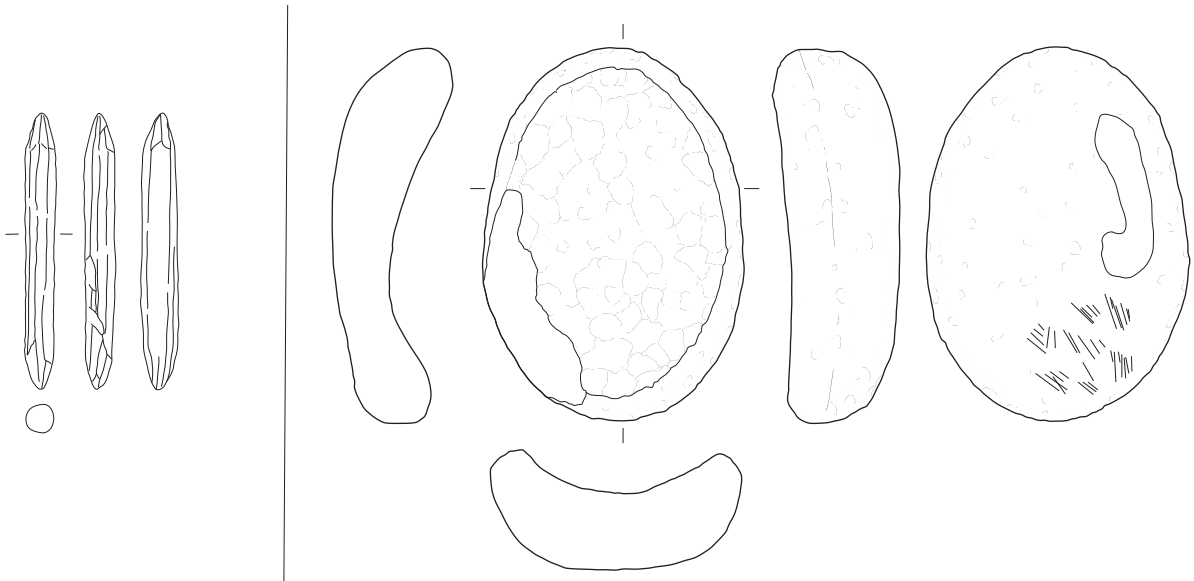
１点出土した。長さ7.4、幅0.7、厚さ0.5センチ。よく研磨され光沢を呈する。両端が面取りされたように丸みを帯びた円柱状に成形されている。黒色頁岩製。

７．小形敲石（第131図）

Ａ区Ｊ−12号住居跡から出土した。長さ7.4、幅5.2、高さ2.5センチ、楕円形で中央部分が弱い敲打によりくぼむ。使用痕からみて、擦る作業はなされていないため、石皿・すり石ではない。多孔質の安山岩製である。

８．軽石製品（第131図）

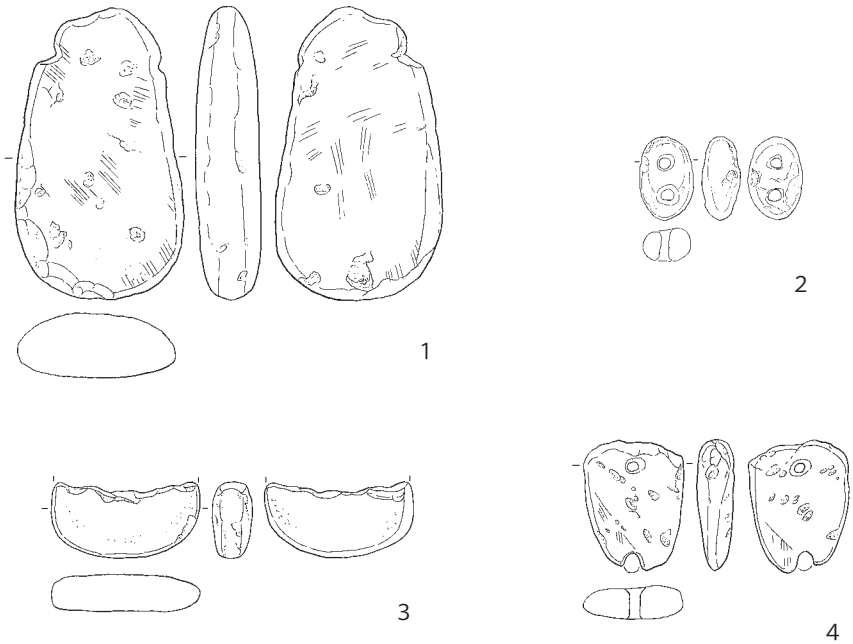
４点を図示した。１は長さ11.8センチの長楕円形を呈しており上端部付近の側縁に抉りがある。２は楕円形の長軸上に２か所の貫通孔を有する。３は１と類似する長楕円形の製品の破片であり、下端部付近と思われる。４は楕円形の長軸上に二か所の穿孔がある。部分的に欠損している。



石針

小型敲石

0 5 cm
2 : 3



軽石製品

0 5 10 cm
1 : 3

第131図　石製品

第６節　その他の石器・石製品

１．棒状礫

写真のみ掲載する（PL.77）。自然礫として遺跡に持ち込まれたとおもわれる棒状礫で、幅５センチ以内長さ20センチ以内である。石材は緑色片岩などである。一部に使用痕が認められるものがある。Ａ区内住居跡から54点、Ａ区包含層から22点、確認調査テストピットから２点、トレンチ調査部分から５点出土した。

写真１は11号住居から出土した。長さ17.4センチ、幅5.4センチ、厚さ1.8センチで、両端部と側縁部に打撃による使用痕が認められる。

写真２は包含層から出土したもので長さ8.8センチ、幅4.5センチ、厚さ1.4センチで長軸の端部と側縁に使用痕とみられる剥離がある。

写真３はＡ区19号住居跡から出土した。長さ11センチ、幅4.5センチ、厚さ1.4センチ。炉中から出土し全体に被熱している。全面が滑らかに擦られており、やや細まっている側の先端から側縁にかけて８ミリから1.2センチの剥離面が数か所みられる。

２．配石土坑から出土した自然礫

写真のみ掲載する。写真１は１号配石土坑から出土した。雲母を含む緑色片岩製の楕円扁平礫で、手のひらより大きいサイズのいびつなしずく形である。長さ14.1センチ幅10センチ厚さ2.3センチをはかる。太い側の端部に打撃痕がある。

写真２は２号配石土坑から出土した。緑色片岩製の楕円扁平礫で、手のひらの大きさのしずく形である。長さ12センチ、幅8.2センチ、厚さ5.2センチ。細い側の長軸上端部が打撃により剥離している。幅広の側の端部には擦痕がある。

写真３は４号配石土坑から出土した。点紋のある緑色片岩の棒状礫で、大きさは長さ28.5センチ、幅７センチ、厚さ5.2センチ。両端部は丸みを帯びているが擦痕は明瞭ではない。

３．板状石製品

住居跡覆土から深型テン箱２箱分出土している。緑色片岩などの石材を扁平に打ち割り、加工したものと思われる。

４．剝片

浅型のテン箱に３個分出土している。

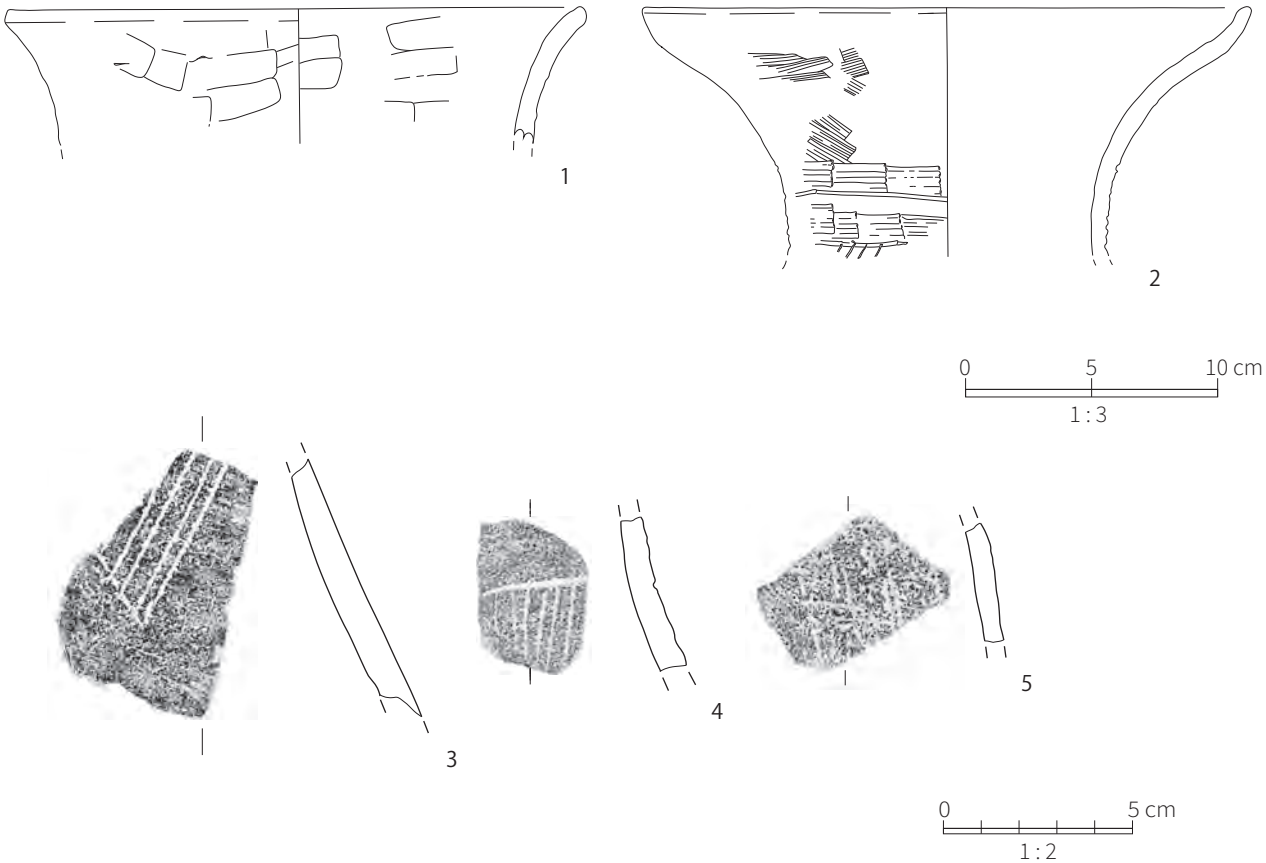
第２章　弥生時代の遺物

１．土　器（第132図）

弥生時代後期とみられる土器の破片が出土している。出土状況の詳細は不明である。

１は壺形土器の口縁部付近で無文である。２は沈線のある胴部破片である。いずれもＪ−11住居跡の一括遺物である。

３はＪ−18住居跡の一括遺物で壺形土器口縁部～頸部の破片である。頸部に横位の刷毛目と沈線文がみられる。４は壺形土器胴部破片である。５は遺構外出土の壺形土器胴部破片である。



第132図　弥生時代の土器

第３章　茅野遺跡出土土製耳飾りの実体視顕微鏡による胎土観察報告書

㈱測研　石　坂　　茂

１．はじめに

本業務報告は、「令和元年度　茅野遺跡出土遺物製図・図版作成、胎土観察業務委託」の内、土製耳飾り344点（250点＋参考94点）を対象としたその胎土観察業務に係るものである。その全てが国指定重要文化財であることから、形状保全とともに非破壊を前提とした実体視顕微鏡による耳飾り表面の胎土観察を実施した。尚、耳飾り胎土の特徴を把握するための参考資料として、耳飾りと併行期の土器17点や手燭形土製品３点の胎土についても同様の顕微鏡観察を行った。

以下、胎土観察の方法と結果について報告する。

２．耳飾り胎土内の含有鉱物・岩石の観察・記録用機器と保存データ形式

⑴　使用機器類

①顕微鏡：㈱マイクロネット製　Ｃマウント三眼ズーム式実体視顕微鏡「伸太」
　　接眼レンズ倍率10×　補助対物レンズ２×　総合倍率6.7×～90×

②撮影用カメラ：キャノン EOS M6

③データ保存機器：Dell ノートパソコン、WD 社製外付け SSD Elements 2TB（バックアップ用）

⑵　撮影・データ保存条件

①撮影条件：露出１/60秒、ISO 感度1600～3200、マニュアル・分割測光、画像サイズ6000×4000、
　　解像度180ppi、

②撮影倍率（ミクロメーター目盛）：16倍×（63.6μm）、45倍（22.7μm）、90倍（11.3μm）

③撮影データ保存：ファイル形式 JPEG、カラーモード RGB

３．耳飾り胎土内の含有鉱物と岩石の内容

⑴　含有鉱物

土製耳飾りの胎土内における鏡下観察が可能な鉱物には、長石・輝石・角閃石・石英・雲母・火山ガラスの６種類がある。また、これらの中で石英・雲母・火山ガラスについては、下記のようないくつかの特徴が認められる。

①石英：鋭角の破断面を持つ無色透明・不定形のものが主体を占めるが、ソロバン玉状の12面体をもつ自形結晶石英も少数の胎土に認められる。

②雲母：黒雲母が加水風化等により金色の光沢を帯びているが、六角形の蛇腹状のものと不定形状のものに大別される。不定形状のものは、その大半が結晶片岩との共在関係にある。

③火山ガラス：無色透明で、電球の破片状の曲面を持つ。バブルウォール型を主体として、中間型がわずかに認められる。

⑵　含有岩石

比較的粒径が大きく岩石名の特定可能なものとして、結晶片岩・花崗岩・角閃石安山岩・黒曜石・チャート・軽石・スコリア等が認められる。また、岩石名が特定できないものについては、下記のよう

に便宜的な名称を付した。

①火成岩類：微細な岩片が多く岩石名が特定できないため、色調により灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片等の名称を付して分類した。

②珪質岩類：上記①と同様に岩石名は特定できないが、珪化の度合いや色調により珪質乳白色岩片・珪質赤色岩片・珪質黒灰色岩片の名称を付して分類した。尚、珪質乳白色岩片については長石が風化して表面の白濁化したものが主体と考えられるが、厳密な判別が困難なため当該岩片名に一括した。

⑶　その他

鉱物や岩石類ではないが、微量の植物珪酸体を含有するものが少例ながら認められ、耳飾り生産地の異同を示す可能性もあることから指標の一つとして分類した。形状としては、棒状と球状の２種類が共在する。

４．胎土分類の内容

上記３項の特徴的な鉱物や岩石の含有の有無を中心にして、Ａ類～Ｊ類の10類に大別した。さらに各鉱物・岩石の含有量の多寡（多量・中量・少量・微量）やその粒径・磨耗度等および素地粘土の密度を勘案して、各類を総数128種類に細別した。この分類内には、耳飾り胎土との比較を行うために併行期の土器・土製品の胎土分類も加筆されているが、ちなみにA13・B14・Ｅ４・G11・Ｉ９類は土器固有の胎土であり、同様にD37類は手燭形土製品固有の胎土である。尚、粒径の区分については、「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠し、礫：＞２㎜、粗砂：２㎜～0.2㎜、細砂：0.2㎜～0.02㎜とした。また、それらの含有量の程度については、便宜的に多量・中量・少量・微量の４段階に区分した。

以下にＡ類～Ｊ類の各類の分類内容を記載するが、それら個々の細別内容については別表の「第１表 胎土の分類内容一覧」・「第２表　耳飾り胎土の観察内容一覧」・「第３表　大別分類の数量・比率とグラフ図」・「第４表　各大別分類の細別点数一覧」・「第５表　土器胎土の観察内容一覧」・「第６表　手燭形土製品胎土の観察内容一覧」を、また各類の鉱物・岩石の胎土内の混在状況については別添の「耳飾り胎土写真⑴～⑸」・「Ｊ18住居土器胎土写真⑴～⑶」・「手燭形土製品胎土写真」等の顕微鏡観察写真を参照して頂きたい。

⑴　Ａ類

①含有鉱物・岩石の特徴：加水風化した金色光沢の黒雲母を含有するものを一括した。胎土内の雲母は六角形・蛇腹状を呈し、粒度は粗・細砂で極めて薄層で剥離する。Ａ１～A12類に12細別され、観察総数344点中に23点（6.7％）が確認できる。いずれも雲母の含有量は微量であるが、輝石・石英等の鉱物や灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片等の岩石等の含有も微・少量である。ただし、長石や珪質乳白色岩片はＡ４～Ａ７・Ａ９～A12類などで中～多量に認められ、Ａ類では主体的な鉱物・岩石である。また、全体的な粒度は粗・細砂を主体としている。A10類のように花崗岩片の粗・細砂を含有するものがあり、これらは雲母を含む花崗岩が風化・破砕されて河床等に堆積した粗・細砂を素地粘土に混入した可能性が高い。また、火砕流や火山灰との撹乱・堆積により生成された素地粘土内に元々含有されていた可能性もあり、当該観察のみでの確定は難しい。この他に、Ａ９類には少量ながら自形結晶石英の礫・粗砂が認められる。

②素地粘土の性状：Ａ５・Ａ７～Ａ10類の８点は、鉱物や岩石の礫・粗砂をやや多めに含むこともありやや粗い性状を有する。次いでやや緻密な性状を持つＡ４・Ａ６・Ａ11・Ａ12類が７点、緻密な性状を持つＡ２・Ａ３類が６点、極めて緻密な性状を持つＡ１類が１点となる。全体的には、やや緻密または緻密な性状を有するものが主体を占めている。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(51)8-560・同(52)1-560、同(53)3-572・4-572

(2)　Ｂ類

①含有鉱物・岩石の特徴：結晶片岩を含有するものを一括した。Ｂ１～Ｂ13類に13細別され、Ａ類と同様に観察総数344点中に23点（6.7％）が確認できる。主体的な鉱物・岩石には、結晶片岩の他に珪質な乳白色・灰白色・赤色・黒灰色岩片の礫・粗砂が目立つ。特に結晶片岩の礫は、Ｂ１・Ｂ２・Ｂ４～Ｂ６・Ｂ10類などの12点に中～多量に含有されている。また、不定形状の雲母粗・細砂は、Ｂ10・Ｂ11類の２点を除いた全てに微・少量含有されるのも特徴の一つであるが、Ａ類のような六角形状の結晶構造を持たないことから、高圧により生成された結晶片岩内に元々含有されていたものが、風化や破砕により産出されたものと考えられる。結晶片岩をはじめとする岩石類は円磨度が進んでおり、河床等に堆積した礫・粗砂を素地粘土に混合した可能性が高い。この他に、長石の粗・細砂が少～多量に含まれるのに対して輝石・石英は微・少量であり、角閃石は全く含まれない。また、Ｂ13類には少量ながら自形結晶石英の粗・細砂が認められる。

②素地粘土の性状：Ｂ１・Ｂ４・Ｂ６・Ｂ８類の10点は、鉱物や岩石の礫・粗砂をやや多めに含むこともありやや粗い性状だが、Ｂ５・Ｂ９・Ｂ12・Ｂ13類の６点は礫をほとんど含まないやや緻密な性状である。これら以外のＢ２・Ｂ７・Ｂ10類の５点は緻密な性状を、Ｂ３・Ｂ11類の２点は極めて緻密な性状を持っており、いずれも礫を含有しない。また、Ｂ１・Ｂ３・Ｂ５・Ｂ９類の９点には、滑り感のある胎土性状が認められるが、これは結晶片岩に含まれる滑石成分が影響を及ぼしていると考えられる。全体的には、緻密な性状を持つものと粗雑な性状を持つものとが拮抗している。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(5)5-131、同(13)3-230、同(26)8-363、同(33)3-418、同(38)5-464、同(41)3-484

(3)　Ｃ類

①含有鉱物・岩石の特徴：珪質乳白色・灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片等の火成岩類を主体に、長石・輝石・角閃石・石英等の鉱物を含有するものを一括した。Ｃ１～Ｃ29類に29細別され、観察総数344点中に122点（35.5％）が確認でき、各類を通じて最多数を占める。ただし、これら各種の岩石・鉱物の全てを含有するのはＣ７・Ｃ21・Ｃ28類の６点に過ぎず、他はいずれかの岩石・鉱物を１種類以上欠落する。粒度的には灰白色・赤色岩片を中心に円磨度の進んだ礫・粗砂の比率が高い一方で、長石・輝石・角閃石・石英等の鉱物は粗・細砂を主体とする。また、長石は破断面が円磨されない細砂状を呈するものが44点に認められ、人為的な混合物ではなく生成段階から素地粘土の中に混在していた可能性が高い。角閃石を含むものは、Ｃ１・Ｃ３・Ｃ５・Ｃ７・Ｃ12・Ｃ15・Ｃ17・Ｃ21・Ｃ28類の29点であり、比較的少数にとどまる。角閃石を含有する火成岩類は榛名山麓の広範なエリアに認められるにもかかわらず、胎土内での角閃石の希薄な存在状況は、耳飾りの製作地を想定する上で留意すべき事象である。この他に、Ｃ７・Ｃ14・Ｃ16類には少量ながら自形結晶石英の粗・細砂が認められる。

②素地粘土の性状：Ｃ１・Ｃ２類の24点は、粗・細砂を主体とした混入物の存在が少・微量であり、極めて緻密な性状を持つ。Ｃ３・Ｃ５・Ｃ７・Ｃ９～Ｃ13・Ｃ15・Ｃ17類の52点は緻密で、Ｃ４・Ｃ

６・Ｃ８・Ｃ14・Ｃ24・Ｃ25・Ｃ27・Ｃ29類の28点はやや緻密な性状を持つ。Ｃ16・Ｃ18～Ｃ23・Ｃ26・Ｃ28類の18点は、鉱物や岩石の礫・粗砂を比較的多めに含むこともありやや粗い性状を持ち、後述する晩期の土器類とも共通性が認められる。全体的には、緻密な性状を持つものが多数を占める。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(3)3-95、同(3)5-97、同(5)4-126、同(9)6-195、同(15)5-252、同(22)1-335、同(25)8-352、同(31)4-404、同(38)7-467、同(45)8-515、同(52)7-566

⑷　Ｄ類

①含有鉱物・岩石の特徴：含有鉱物・岩石の種類は前述のＣ類とほぼ同様であり、珪質乳白色・灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片等の火成岩類と長石・輝石・角閃石・石英等の鉱物が認められるが、中～多量の長石の粗・細砂を主体としている点が特徴的であり、Ｃ類とは弁別される。また、長石が風化した可能性のある珪質乳白色岩片や輝石の含有量が他類に比べて多いのも特徴の一つである。Ｄ１～Ｄ36類に細別される多様性を持ち、観察総数344点中に108点（31.4％）というＣ類に次ぐ数量を占める。上記の各種岩石・鉱物の全てを含有するのはＤ３・Ｄ６・Ｄ23・Ｄ30類の16点であり、全体的には１種類以上の岩石・鉱物を欠落するものが主体となる。また、角閃石を含有するのはＤ１・Ｄ３・Ｄ６・Ｄ16・Ｄ21・Ｄ23・Ｄ30・Ｄ31類の32点であり、その占有比率が高くない点でＣ類と類似した傾向を有する。長石に関しては、円磨の度合いが極めて低い細砂状を呈するものがＤ１～Ｄ３・Ｄ17～Ｄ21の19点に認められ、Ｃ類でのあり方と同様に当初から素地粘土の中に混在していた可能性が高い。この他に、Ｄ５・Ｄ９・Ｄ13・Ｄ24類には少量ながら自形結晶石英の粗・細砂が認められる。一方、Ｄ５類やＤ11・Ｄ16類は花崗岩や角閃石安山岩の礫・粗砂を含有するが、数量的には僅か３点にとどまる。

②素地粘土の性状：主体を占めているのは、灰白色・赤色岩片等の礫の含有量が比較的少ないやや緻密な性状を持つＤ２・Ｄ９・Ｄ12～Ｄ14・Ｄ23～Ｄ25・Ｄ27・Ｄ29・Ｄ31・Ｄ32・Ｄ35類の46点であり、次いで灰白色・赤色・黒色岩片をはじめ長石・石英の礫を多く含んだやや粗雑な性状を持つＤ３～Ｄ７・Ｄ10・Ｄ11・Ｄ15・Ｄ16・Ｄ18～Ｄ20・Ｄ28・Ｄ30・Ｄ33・Ｄ34・Ｄ36類の38点、各岩石の礫含有が皆無なＤ１・Ｄ８・Ｄ21・Ｄ22・Ｄ26類の23点、長石を除いた各岩石・鉱物を微量にしか含有しない極めて緻密な性状を持つＤ17類の１点の順となる。やや粗雑な胎土の比率は36％であり、全体的には緻密な性状を持つものが多い傾向にある。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(1)5-28、同(7)1-153、同(12)6-221、同(17)3-279、同(19)8-320、同(28)5-380、同(34)2-425、同(43)7-498、同(50)2-549・3-549、同(51)5-558・6-558

⑸　Ｅ類

①含有鉱物・岩石の特徴：上述のＣ・Ｄ類とほぼ同様の長石・輝石・角閃石・石英や珪質乳白色岩片・灰白色片・赤色岩片・黒色岩片等の鉱物・岩石を含有する点では共通性が認められるが、その中でも輝石と角閃石が中～多量に含有されている点で他類とは弁別される。Ｅ１～Ｅ３類に細別され、観察総数344点中に７点（２％）が存在する。上記の各種岩石・鉱物の全てを含有するのはＥ２・Ｅ３類の２点であるが、Ｅ１類でも角閃石のみの欠落にとどまる。輝石の含有状況は、いずれも中量の粗・細砂を主体としており、他の鉱物・岩石は礫を含まない粗・細砂であると共に灰白色岩片や長石を除いて微・少量に過ぎない。この他に、Ｅ１類には少量ながら自形結晶石英の粗・細砂が認められる。

②素地粘土の性状：各鉱物・岩石の粒状は、礫を含まない粗・細砂で構成されその含有量も少量であることから、全体的には緻密な性状を持つ。ちなみに、Ｅ１・Ｅ２類の６点はやや緻密な性状を、Ｅ３類の１点は緻密な性状を持ち、やや粗雑な性状を持つものは皆無である。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(26)6-362、同(41)2-483、同(41)4-485

(6)　Ｆ類

①含有鉱物・岩石の特徴：基本的な含有鉱物・岩石の種類には、Ｃ類・Ｄ類との大きな差異はないが、量的に自形結晶石英を主体とすることや黒曜石の調整剥片と想定される細片を含有する点で弁別される。Ｆ１～Ｆ４類に細別され、観察総数344点中に５点（1.5％）が確認される。各類とも角閃石を欠落するが、Ｆ３類の１点はソロバン玉状の12面体を持った中量の自形結晶石英の礫・粗砂や、円磨度の進んだ長石・輝石と珪質乳白色岩片・灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片を含有する。Ｆ４類の２点も自形結晶石英の粒状が粗・細砂となることや灰白色岩片が礫状であること以外は、Ｆ３類とも類似する。黒曜石の粗・細砂を含むＦ１・Ｆ２類の２点は、赤色・黒色岩片が欠落する点で共通するものの、Ｆ１類には石英も欠落する点で差異がある。全体的には各鉱物・岩石の含有量は少量で粒状も粗・細砂を主体とするが、Ｆ３・Ｆ４類は自形結晶石英や灰白色岩片の礫・粗砂を相当量含んでいる。

②素地粘土の性状：上述のように、鉱物・岩石の粒状や含有量にも起因して、Ｆ１類やＦ２類は極めて緻密またはやや緻密な性状を持つが、Ｆ３・Ｆ４類はやや粗雑な性状を有する。総数が５点と少ないことから、全体的な性状の傾向を判断することは難しい。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(27)6-373、同(39)3-471、同(48)3-535

(7)　Ｇ類

①含有鉱物・岩石の特徴：基本的な含有鉱物・岩石の種類は、Ｃ類・Ｄ類との大きな差異はないが、微量～中量の植物珪酸体を含有する点で弁別することができる。Ｇ１～Ｇ10類に細別され、観察総数344点中に27点（7.8％）が存在する。植物珪酸体の様態は、粒度では0.2㎜以下の細砂に区分され、灰白色の棒状や球状の形態と極めて軟弱な性状を有している。Ｇ１～Ｇ７類の20点に含まれる植物珪酸体は、微量または極めて微量であるのに対して、Ｇ８～Ｇ10類には中量程度が認められる。他の鉱物・岩石については、長石・輝石や円磨度の進んだ珪質乳白色岩片・灰白色岩片の粗・細砂が主体を占め、少～中量程度の含有が確認できる。長石については、Ｃ・Ｄ類に見られたのと同様の破断面が円磨されていないものが、Ｇ２・Ｇ３・Ｇ６・Ｇ９・Ｇ10類などの16点に認められ、素地粘土の生成段階には混在していた可能性が高い。

②素地粘土の性状：総数27点の内で主体を占めているのは、含有鉱物・岩石が微量かつ粗・細砂で構成される極めて緻密な性状を持つＧ２・Ｇ９類の10点であり、次いで緻密な性状を持つＧ１・Ｇ３・Ｇ４類の９点、やや緻密な性状を持つＧ５・Ｇ８・Ｇ10類の６点となる。また、中～多量の長石・輝石や珪質乳白色・灰白色岩片の粗・細砂を含むＧ６・Ｇ７類の２点は、やや粗雑な性状を持つ。全体的には、緻密な性状を持つものが93％を占めている。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(20)2-322～4-322、同(22)2-336～5-336、同(24)6-348～8-348・同(25)1-348、同(25)3-350～6-350、同(47)7-531・8-531・同(48)1-531

(8)　Ｈ類

①含有鉱物・岩石の特徴：基本的な含有鉱物・岩石の種類は、Ｃ類・Ｄ類との大きな差異はないが、少量～多量の軽石やスコリアを含有する点で弁別される。Ｈ１～Ｈ５類に細別され、観察総数344点中に10点（2.9％）が存在する。角閃石はＨ１類を除いて、また黒色岩片はＨ３類を除いて各類とも含有しないが、それら以外の長石・輝石・石英や円磨度の進んだ珪質乳白色岩片・灰白色岩片・赤色岩片等

の粗・細砂は、微量～中量程度を含有する。同様に円磨度の進んだ軽石やスコリアについては、少量～中量の粗・細砂を含むＨ１～Ｈ３類の８点があり、これに対してそれらの礫を中量～多量に含むＨ４・Ｈ５類の各１点は、Ｈ類の中でも際立っている。全体的な各鉱物・岩石の様態は、粗・細砂の粒度を基本として少量が認められる程度だが、長石に関しては各類共に中量程度を含んでいる。

②素地粘土の性状：上述のように、鉱物・岩石は少量かつ粗・細砂の粒状で含有されているが、Ｈ１・Ｈ２類の５点は緻密またはやや緻密な性状を持つものの、Ｈ３～Ｈ５類の５点はやや粗雑な性状を有する。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(14)6-242、同(16)2-258、耳飾り胎土写真(52)3-562

⑼　Ｉ類

①含有鉱物・岩石の特徴：基本的な含有鉱物・岩石の種類は、Ｃ類・Ｄ類との大きな差異はないが、微量～多量の火山ガラスの細砂を含有する点で弁別される。Ｉ１～Ｉ８類に細別され、観察総数344点中に13点（3.8%）が存在する。火山ガラスについては、３(1) ③項で既述したようにバブルウォール型を基本として僅かながら中間型も認められ、Ｉ１～Ｉ６類の９点には微量に、Ｉ７・Ｉ８類の４点には中量～多量に含まれている。一方、各類とも角閃石を含有しないが、黒色岩片の含有はＩ５・Ｉ８類の各２点のみにとどまる。また、Ｉ６類の１点にはＧ類に特徴的な植物珪酸体が中量含まれている点で注意を要する。他の鉱物・岩石の含有量は微量～少量を基本とするが、長石や珪質乳白色・灰白色・赤色岩片などを中量含むＩ１～Ｉ３類もある。

②素地粘土の性状：上述のように、鉱物・岩石は少量かつ粗・細砂の粒状で含有されており、全体的に緻密な性状を持つものが多い。ちなみに、極めて緻密な性状を持つものはＩ４・Ｉ６類の３点、緻密な性状を持つのはＩ１・Ｉ３類の３点、やや緻密な性状を持つのはＩ５・Ｉ８類の４点、やや粗雑な性状を持つのはＩ２・Ｉ７類の３点となる。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(17)8-282・同(18)1-282～3-282、耳飾り胎土写真(27)1-369・2-369、同(27)7-376・8-376・同(28)1-376、同(32)4-413～7-413

⑽　Ｊ類

①含有鉱物・岩石の特徴：基本的な含有鉱物・岩石の種類は、Ｃ類・Ｄ類との大きな差異はないが、少量の赤色チャートの礫・粗砂を含有する点で弁別される。このチャートについては、鉄石英や玉髄と誤認している可能性もあり、確定的ではない。Ｊ１・Ｊ２類に細別され、観察総数344点中に２点（0.6%）が存在する。チャートは円磨度が進んだ礫や粗・細砂が少量含有される程度であるが、Ｊ１類は輝石・石英・角閃石を、Ｊ２類は赤色・黒色岩片・角閃石を各々欠落している。尚、チャートを除く他の鉱物・岩石の含有量や粒状では、Ｊ１・Ｊ２類ともに破断面の円磨されていない長石の細砂を中量含む点が特徴的である。

②素地粘土の性状：全体的に鉱物・岩石の含有量が微量～少量であることや粗・細砂を主体としていることもあり、Ｊ１・Ｊ２類ともに緻密な性状を持つ。

③代表的な顕微鏡観察写真：耳飾り胎土写真(49)6-545、同(51)2-557・3-557

⑾　分類不可

耳飾りの国指定重要文化財登録に際して、経年劣化や風化により脆弱化した完形品の遺物番号12・182・324・552の４点については、器面への薬剤塗布による保存処理が実施されたために顕微鏡観察が

できなかった。したがって、当該４点に関わる第２表の胎土分類では「不明」と記載してある。ちなみに、552は精緻な透かし彫り技法により成形された漏斗状の形態を持つ大形の「千網型」耳飾りである。

５．土器胎土および手燭形土製品胎土の内容

耳飾り胎土の特徴を把握するための一環として、併行段階の後期後半～晩期前半の土器17点と手燭形土製品３点の胎土について、耳飾りと同様の手法で顕微鏡観察を行った。対照するためのサンプル数としては不充分ではあるが、以下にその観察結果を記載する。

⑴　土器胎土の観察内容

①後期後半の土器胎土：観察対象の土器型式は、加曽利Ｂ１式と新地式が各１点、高井東式４点の合計６点である。加曽利Ｂ１式は微量の雲母やバブルウォール型火山ガラスの粗・細砂を含むＡ13類、新地式は少量の植物珪酸体の細砂を含むＧ11類であり、共に耳飾り胎土には認められない土器固有の胎土を持つ。一方、高井東式は中量の結晶片岩の礫・粗砂を含むＢ14類と中量～多量の長石の粗・細砂を含むＤ６・Ｄ33類、中量の輝石の礫・粗砂を含むＥ４類に分かれるが、Ｂ14・Ｅ４類は土器固有の胎土である。胎土の性状は、やや粗雑な胎土が４点と多く、緻密・やや緻密が各１点にとどまる。

②晩期前半の土器胎土：観察対象の土器型式は、安行３ａ式４点、安行３ｂ式５点、晩期前半の粗製土器２点の合計11点である。安行３ａ式は微量の雲母の粗・細砂を含むＡ２類と中量の長石の粗・細砂を含むＤ９・Ｄ22類、微量のバブルウォール型火山ガラスや植物珪酸体の粗・細砂を含むＩ９類に分かれるが、Ｉ９類は土器固有の胎土である。安行３ｂ式は、中量～多量の結晶片岩の礫・粗砂を含むＢ１・Ｂ７・Ｂ13類と少量の長石・輝石・珪質乳白色岩片等の粗・細砂を含むＣ６類、微量の植物珪酸体の細砂を含むＧ６類に分かれる。粗製土器は微量の雲母の粗・細砂を含むＡ２類と中量の長石の粗・細砂を含むＤ６類である。胎土の性状は、緻密・やや緻密が各４点、やや粗雑が３点であり、前述の後期後半の土器と共に「極めて緻密」な胎土性状が欠落する点に注意を要する。

⑵　手燭形土製品胎土の観察内容

総数３点のみの観察内容であるが、微量の雲母の粗・細砂を含むＡ８類と多量の長石の粗・細砂を含むＤ37類、微量の植物珪酸体の細砂を含むＧ６類に分かれ、Ｄ37類は当土製品固有の胎土である。胎土の性状は、いずれもやや粗雑である。

６．考　察

⑴　耳飾り胎土内の鉱物・岩石の産出地について

上記の３項で記載したように、胎土内に存在する主な鉱物には長石・輝石・角閃石・石英・雲母・火山ガラスの６種類が認められる。また、岩石としては結晶片岩・軽石・花崗岩・角閃石安山岩・黒曜石・チャートの他に、性状・色調により名称を付した珪質乳白色岩片・灰白色岩片・赤色岩片・黒色岩片等の10種類を確認できる。これらの鉱物は、一般的な造岩鉱物類であり群馬県内でも広い地域に分布しているため、その産出地を特定することは難しい。また、それは岩石類についても同様である。

ただし、含有鉱物の中で雲母や火山ガラスについては、ある程度の絞り込みは可能である。先ず、Ａ類に見られる六角形状の結晶構造を持つ雲母は、主に花崗岩内の含有鉱物として認知されている。群馬県内での花崗岩の主たる産出地は、当遺跡から直線距離で約40～50km 離れた県東部に位置する袈裟丸山東麓の渡良瀬川上流域と、県北部に位置する武尊山東麓の片品川上流域や至仏山西麓の利根川上流域

に確認できる。こうした花崗岩が風化・砂礫化することにより、そこから分離されて近縁の河床内に堆積した雲母を採取して耳飾り胎土内への混入物に利用したと推定されるが、Ａ類の耳飾りが当遺跡での製作品とすれば交易等を通じて雲母を入手した可能性が高い。

ただし、このような胎土内の雲母については、必ずしも花崗岩起源に限定される訳ではない。近年、長野県の裾花凝灰岩地帯では火砕流により形成されたローム堆積土内に含有された状態で確認されており、素地粘土内に当初から混在していた可能性も考慮すべきだろう。

Ｉ類に含有されるバブルウォール型火山ガラスについては、新井房夫らの研究により群馬県内でも約３万年前に噴出した姶良 Tn 火山灰（A-Tn）と、約7300年前の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の二つが確認されている。前者の火山ガラスは中部ローム層最上部の暗色帯の上位に薄層での堆積が確認されるが、後者はローム層上位の黒ボク土内に混在した状態で検出されている。この両火山ガラスの差異については屈折率を計測することにより判別可能とされるが、100℃前後の加熱により化学組成が変化することや耳飾り胎土に関しては非破壊観察が前提であり、実体視顕微鏡下の観察のみでは判別し難い。また、この姶良 Tn 火山灰の堆積層は地表面下２～３ｍに存在し、多くの場合地下水での風化作用によりその上下層のローム土は粘土化しているのに対して、地表下約１ｍ前後にて鬼界アカホヤ火山灰を混在する黒ボク土には、そうした粘土化は認められない。こうした状況を加味すれば、前者の方が耳飾りの造作用粘土に適合していることは自明であり、その粘土採取時に姶良 Tn 火山灰の火山ガラスが混在した可能性が想定される。具体的な粘土採取地点については特定できないが、仮に当遺跡近縁で考えれば湧水地付近や榛名山麓末端の沖積地近縁などの可能性もある。

一方、岩石類の中でＢ類の円磨度の進んだ礫・粗砂の粒状を持つ結晶片岩の産出地については、当遺跡より約30Km 南方に離れた群馬県西部域の三波川変成帯に求められ、同域を流れる三波川や鏑川・烏川などの河床内で多量に確認できる。特に、雲母を含有する結晶片岩では鏑川流域の絹雲母片岩があり、この河床の礫・粗砂を採取・混入している可能性がある。

また、産地の特定は困難であるが、Ｄ類を中心に含有される円磨されていない長石細砂については、既述したようにローム堆積土内に当初から含まれていた鉱物と考えられる。

同様に、Ｇ類に含有される全長0.2㎜以下で極めて軟質な性状を持つ植物珪酸体については、どのような植物に由来するのか同定できないが、鉱物・岩石のような人為的な混入物ではなく、素地粘土の生成過程における植物の繁茂状況に関連性があると考えられる。また、植物珪酸体を含有しない他類については、第一義的には植物の繁茂状況の差異を反映した結果と想定されるが、それとは異なる要因にも留意する必要があろう。

この他に、Ｆ類をはじめ各類の中に散見される自形結晶石英は、約５万年前の白川火砕流堆積物層内に多量に含有されており、同層を給源とする可能性がある。また、Ｆ類の黒曜石の粗・細砂は石鏃等の調整剥片を混入したものと思われる。Ｊ類のチャートの産出地に関しては、県西部域の足尾山地に求められるが、鉄石英や玉髄および他類に含有されている岩石名不詳の珪質な赤色岩片との識別が困難であり、参考例としての記載にとどめる。

⑵　耳飾りと土器との胎土比較

前述したとおり、耳飾りと土器・手燭形土製品とではサンプル数に大きな乖離があり、相互の比較自体に有効性を持たせることはやや難しい。ここではサンプル数３点の手燭形土製品を除外し、参考値としての耳飾りと土器との異同を記載する。

先ず土器の大別分類では、Ｆ・Ｈ・Ｊ類が欠落するが、この３つについては耳飾りの中でも僅かに17

点が存在するのみであり、サンプル数の差異を考慮すれば耳飾りと土器との間に大きな差はないとも言えよう。特に、雲母を含むＡ類、結晶片岩のＢ類、植物珪酸体のＧ類、バブルウォール型火山ガラスのＩ類が土器胎土にも認められる点は、両者の胎土の近縁性を示唆するものだろう。

次に、胎土の性状比較であるが、耳飾りの各類を通算してその性状傾向を見ると、極めて緻密な性状を持つものが43点（12.6％）、緻密な性状を持つものが103点（30.3％）、やや緻密な性状を持つものが104点（30.6％）とそれらの合計が全体の74％を占め、やや粗雑な性状を持つものが90点（26.5％）と少数にとどまる。一方、土器胎土の場合は、緻密およびやや緻密な性状を持つものが各５点（29.4％）に対して、やや粗雑な性状を持つものが７点（41.2％）であり、前・後者の差異が僅少なことや極めて緻密な性状を持つものが皆無である点に注意を要する。

このような異同点を積極的に評価すれば、下記の通りとなる。

①耳飾り胎土の含有鉱物・岩石の総体的な傾向は、少量～中量の粗・細砂を主体に構成される。その一方で、胎土性状の緻密なものが７割以上を占める点は、素地粘土内への鉱物・岩石の混入量を少なく調整するだけではなく、水簸等の素地粘土精製作業を行っている可能性がある。これは、呪術・宗教的観念を有した耳飾り装身具としてより精緻な器肌の製品作出を意図したか、あるいは漏斗状の千網型耳飾りのように精巧な造作には緻密な胎土が必要不可欠であったことも関連性を持つだろう。

②土器胎土の含有鉱物・岩石の種類は、基本的に耳飾り胎土と大差はなく、両者ともに類似した素地粘土を使用した可能性が高い。ただし、その粒状や性状には差異がある。この点に関しては改めて言うまでもなく、膨張と収縮を繰り返す実用的煮沸具としての土器の機能・用途差に由来すると考えられる。

⑶　胎土に混入した雲母鉱物への理解

前述したように、雲母を含有するＡ類については、耳飾りと共に併行期の土器にも認められる共通した胎土である。こうした雲母の胎土混入について考古学的に概観すれば、縄文時代前期末葉の十三菩提式や同中期初頭～中葉にかけた十三菩提式・五領ヶ台式や阿玉台式・新巻土器・焼町土器、同晩期の佐野式等の土器胎土内に多見され、広域かつ多時期に及ぶ事象として認識されている。このような雲母混入土器を珍重した背景には、金色の光彩を放つ雲母に対して何らかの呪術・宗教的観念をいだき、それを継続的に保持・共有するような社会的同質性が一定の区域内に存在したためと考えられる。土器と耳飾りの胎土内雲母に関わる呪術・宗教的観念の異同については判然としないが、両者間に共通する事象として注目する必要があろう。

また、Ａ類ほどではないが結晶片岩を混入するＢ類にも雲母の粗・細砂が含まれている。この雲母は六角形状の結晶構造を持たない点でＡ類とは異なっているが、微細ながらも類似した金色の光彩を認めることができる。ちなみに、胎土に結晶片岩を混入する土器については、群馬県内では早期前半～晩期にかけて少量ながらも一定数を確認することができるが、これらは結晶片岩というよりも雲母鉱物を重視した結果とも考えられ、Ａ類の雲母と同様な呪術・宗教的観を背景として混入された可能性を指摘しておきたい。

⑷　大別・細別分類の有意性と耳飾りの製作地推定について

当業務における耳飾り胎土の顕微鏡観察は、含有鉱物・岩石の内容差を基準とした場合にどのような分類が可能なのか、またその分類差が耳飾り自体の製作地や型式の差異とどのように関連性を持つのかを知るための、いわば基礎的な作業である。

その結果として、耳飾りの胎土はＡ～Ｊ類に10大別されたが、その細別状況には各類相互にかなり大

きな違いが生じている。特に、Ｃ類やＤ類は他類に比べて極めて多岐にわたる細別分類数を有するが、その分類が合理的かつ有意な差異を表示するのか否かが問題となる。仮に、これらの混入鉱物・岩石を同一河床内で調達する場合、採集地点が若干ずれただけでも鉱物・岩石の含有種類や比率および粒度等は、微妙に変わることが予測し得る。また、それらの含有量の多寡も厳密に計量された混入結果でなければ、その差異の背後に有意な人間の意識・行動差を想定しても的外れなことになろう。そうした点では、各大別分類内における細別分類数の違いには、あまり大きな意味付けができないことも考慮すべきであろう。

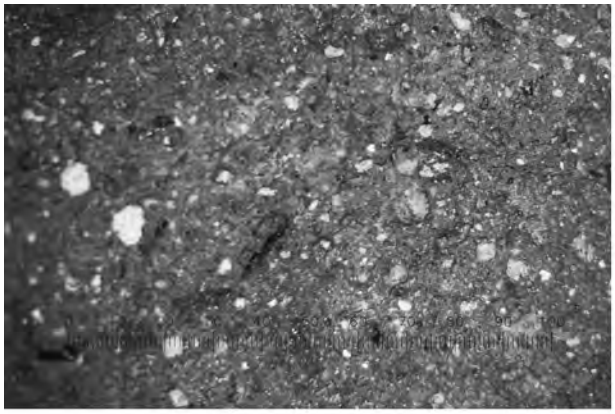
上記のような諸点に留意しつつ、次にその製作地にかかわる問題を若干考察してみたい。先ず、顕微鏡観察を行った344点の耳飾りの中で、極めて精巧な透かし彫りによって造作された遺物番号552の大形漏斗状の逸品の存在である。当該耳飾りは、重要文化財指定に係る表面全体への薬剤塗布保存処理が行われており、顕微鏡による胎土観察・分類ができなかったが、その形態や製作技法から桐生市千網谷戸遺跡での製作品と推定されている。このような特別な製作技法を必要とする耳飾りは、千網谷戸遺跡の特定工人にしか作出できない特産品であり、交易品としての付加価値を十二分に備えたものであったろう。これほどの技巧品を他の耳飾りの中に見出すことはできないが、こうした搬入品の存在は他の耳飾りの中にも少なからず潜在している可能性を示すものである。

例えば、茅野遺跡の近縁では採取できない雲母や結晶片岩等の特徴的な鉱物・岩石を含有するＡ・Ｂ類の胎土を持つ耳飾りも、そうした候補の一つに挙げることができよう。ただし、こうした胎土混入物の理解については、前述したような呪術・宗教的観念を共有する広域集団において雲母や結晶片岩自体が、あるいはそれらを含有する素地粘土自体が交易品として流通したことも想定でき、茅野遺跡製作品としての可能性にも留意する必要はあろう。

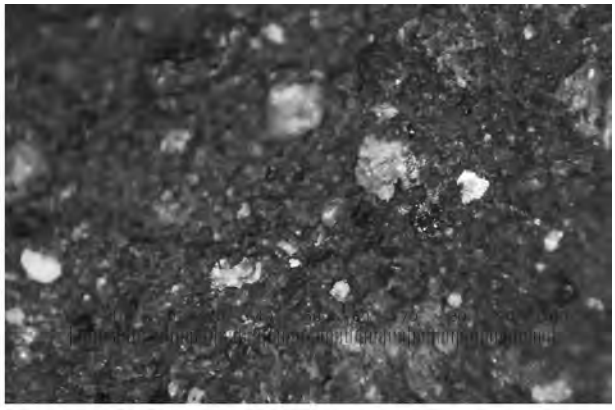
他方、茅野遺跡が立地する榛名山南麓には、50万年前に遡る火山噴出物が多量に堆積するが、この山麓を侵食する河床内には角閃石安山岩や軽石などの砂礫と共に、これらの岩石からもたらされた角閃石の粗・細砂も多量に混在している。耳飾りの造作が当遺跡で行われたとすれば、粘土混和剤の砂礫を周辺の河床内から採取していることが想定され、その場合には角閃石の含有率も高くなることが考えられる。しかし、角閃石を含有する耳飾りはＣ・Ｄ類を主体として、69点（20％）が確認されるに過ぎない。

こうした点を重視すれば、先のＡ・Ｂ類を含め当遺跡内で製作された耳飾りはかなり僅少であり、その多くが交易品として遺跡外から搬入された可能性を示唆するものであろう。

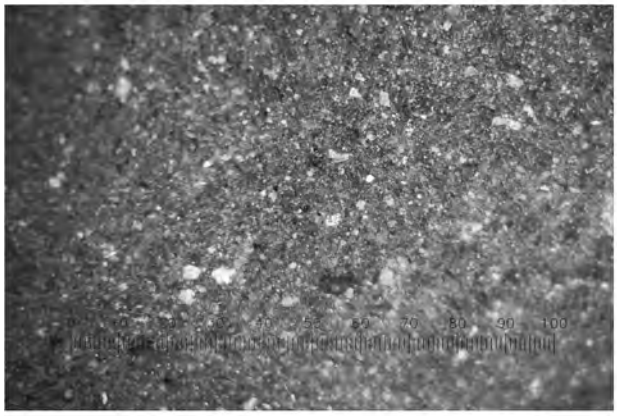
本報告書を作成するに際し、火山ガラスおよび植物珪酸体の同定について、矢口裕之氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団資料１課長・立正地理学会会員）に御教示を頂いた。文末ながら、記して感謝の意を表する次第である。



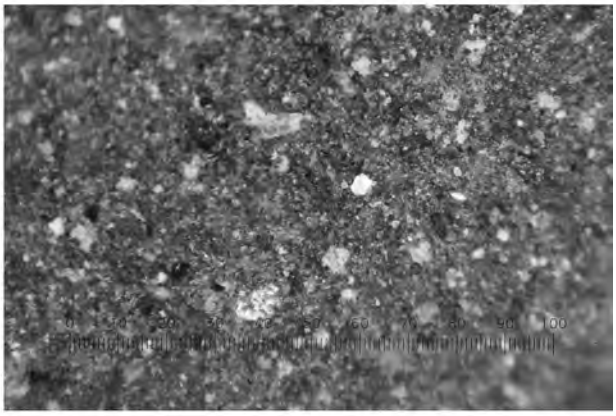
560(63.6μm)　胎土分類A11



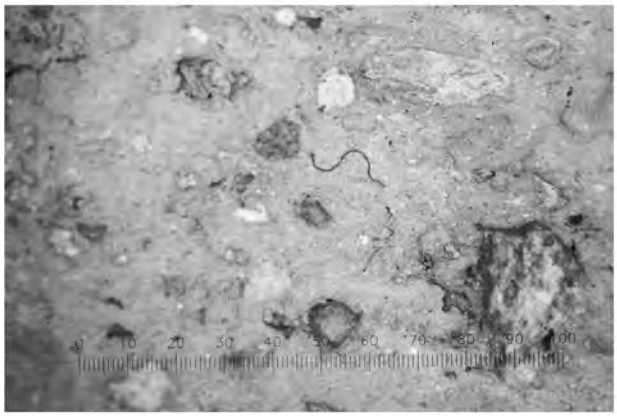
560(22.7μm)　胎土分類A11



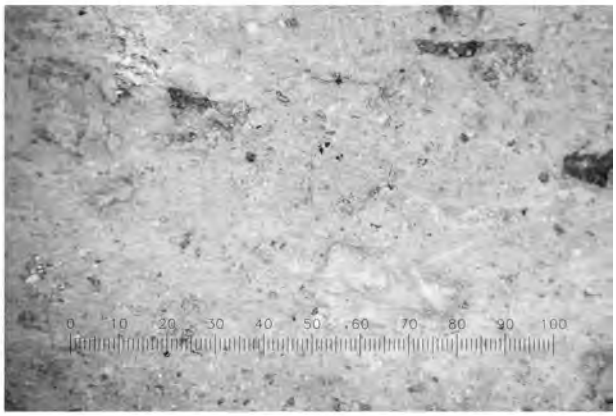
572(63.6μm)　胎土分類A12



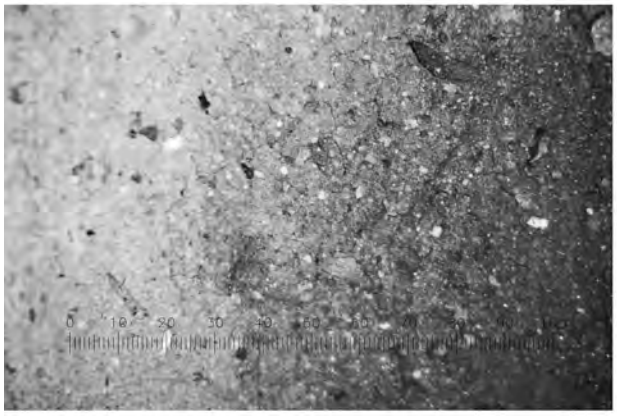
572(22.7μm)　胎土分類A12



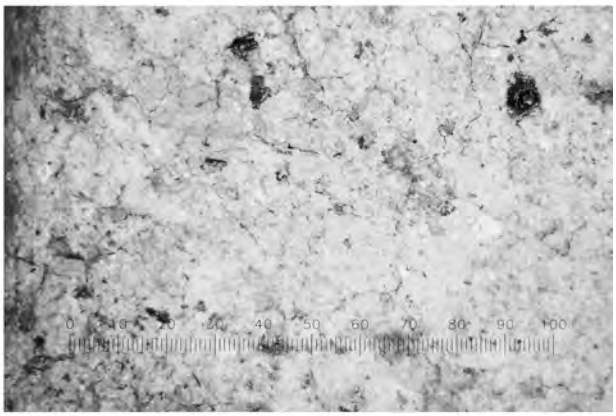
230(63.6μm)　胎土分類B1



363(63.6μm)　胎土分類B5

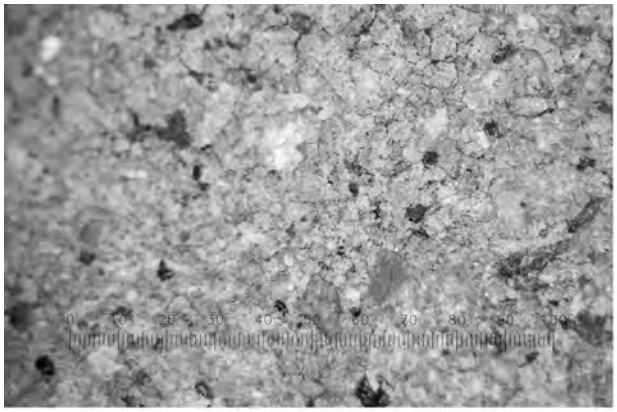


097(63.6μm)　胎土分類C1

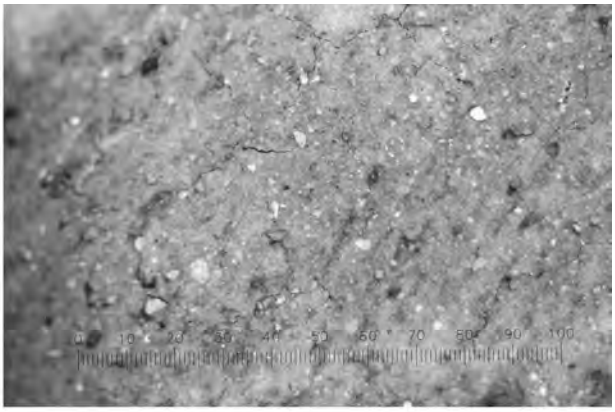


353(63.6μm)　胎土分類C 7

土製耳飾り胎土写真（1）

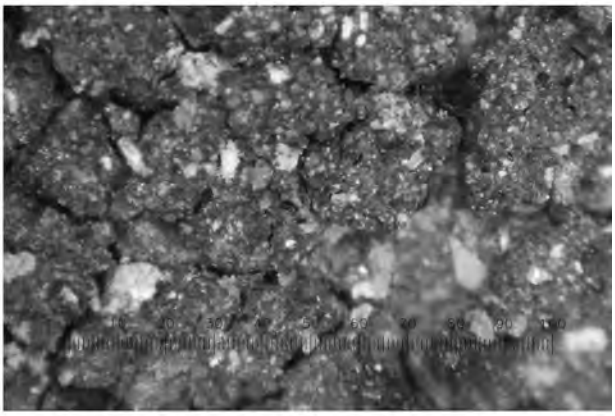


381(63.6μm)　胎土分類C28

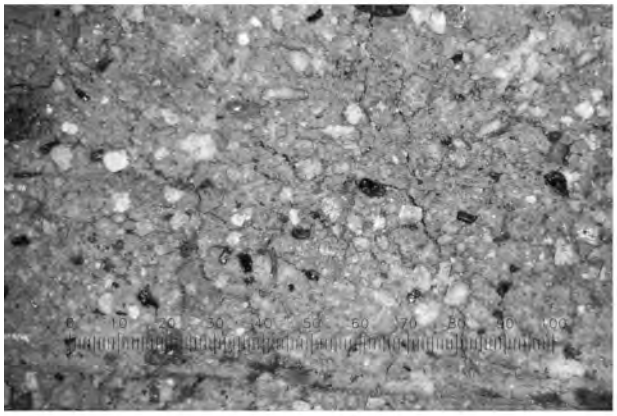


179(63.6μm)　胎土分類D17

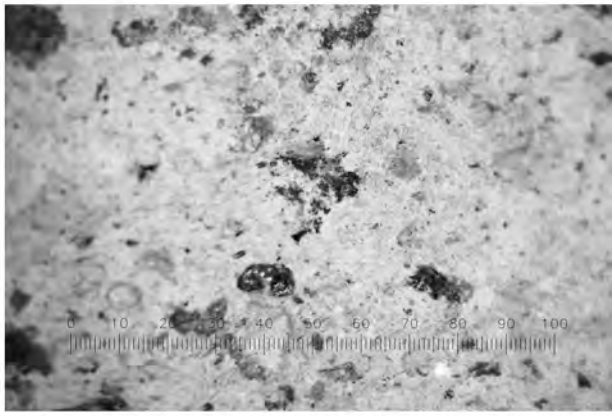
549(63.6μm)　胎土分類D19



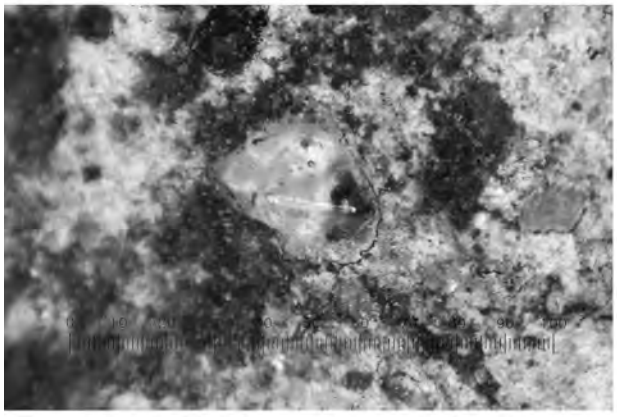
549(22.7μm)　胎土分類D19



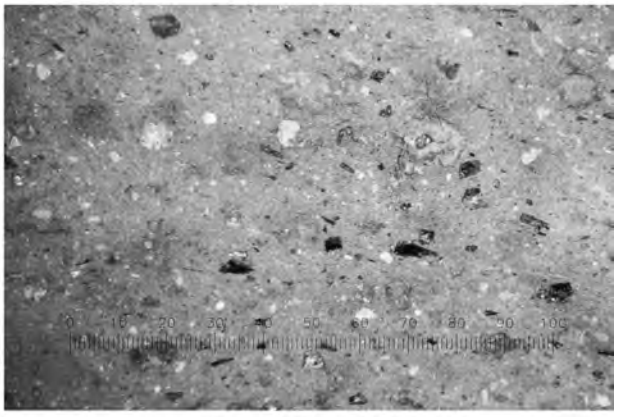
320(63.6μm)　胎土分類D24



362(63.6μm)　胎土分類E1

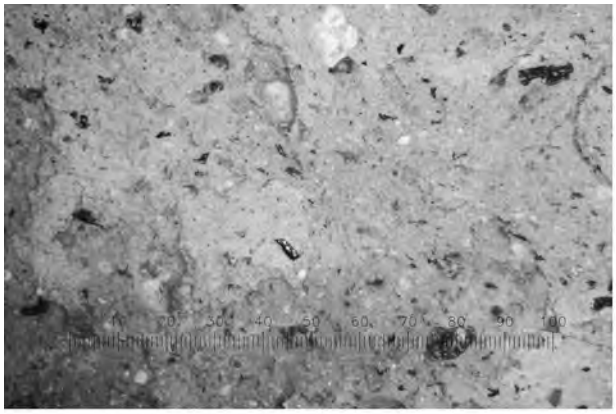


362(22.7μm)　胎土分類E1

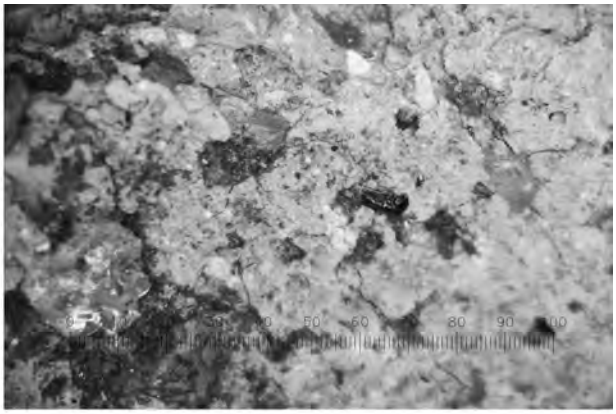


483(63.6μm)　胎土分類E2

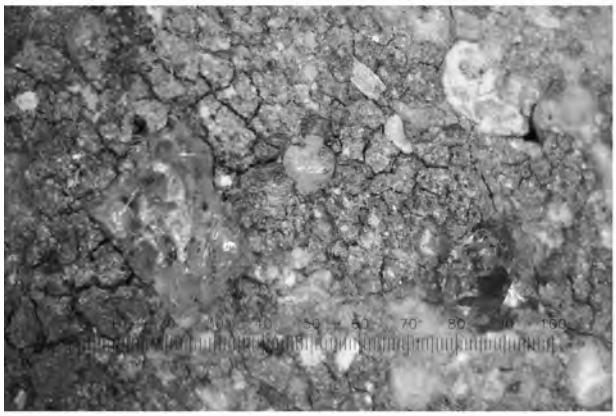
土製耳飾り胎土写真（2）



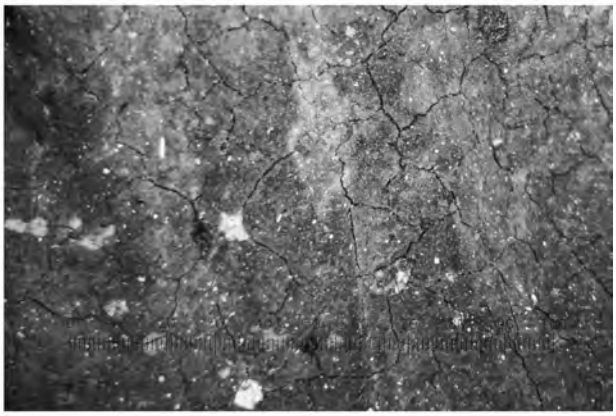
485(63.6μm)　胎土分類E3



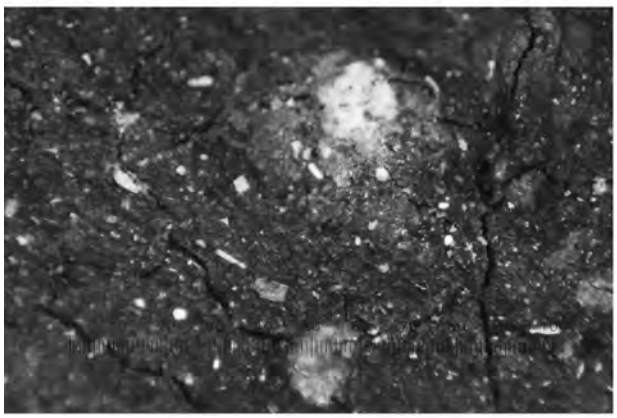
373(63.6μm)　胎土分類F1



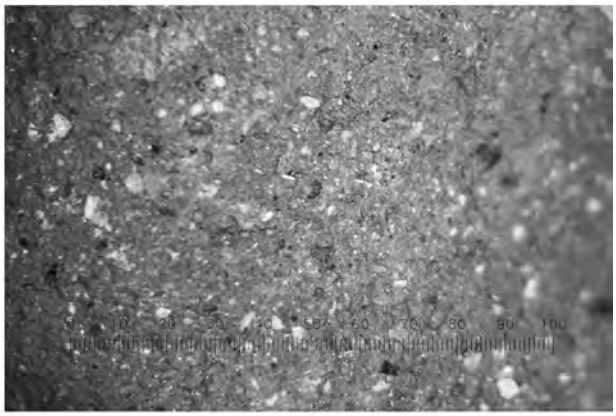
535(63.6μm)　胎土分類F3



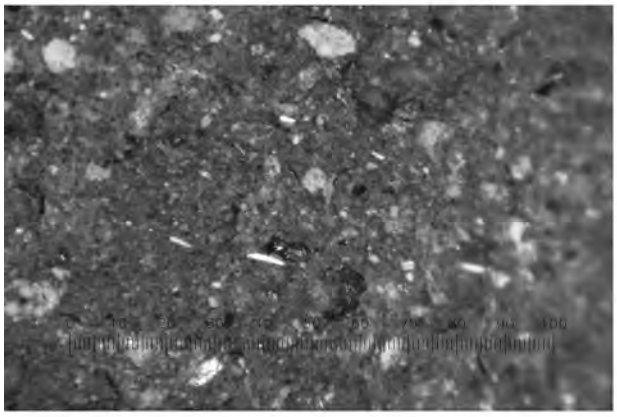
322(63.6μm)　胎土分類G2



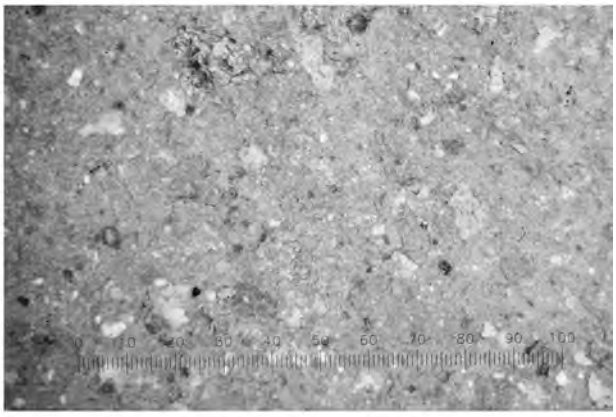
322(22.7μm)　胎土分類G2



531(63.6μm)　胎土分類G10

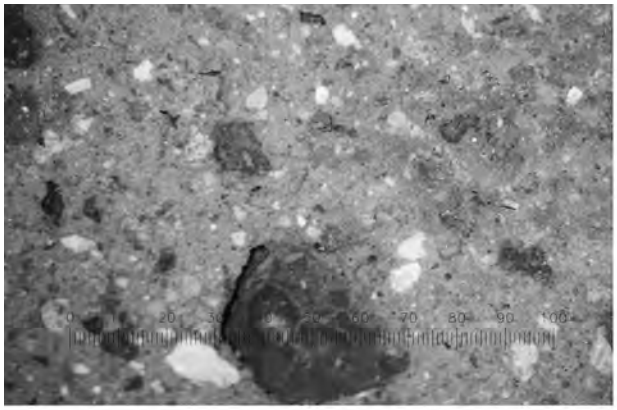


531(22.7μm)　胎土分類G10

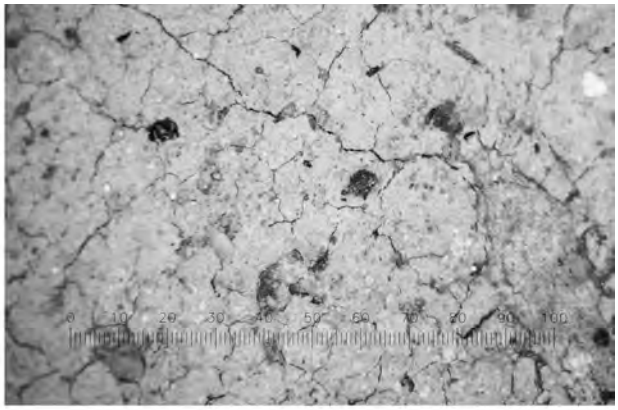


242(63.6μm)　胎土分類H3

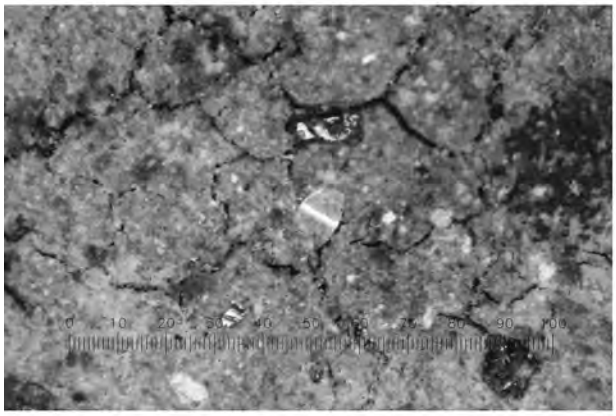
土製耳飾り胎土写真（3）



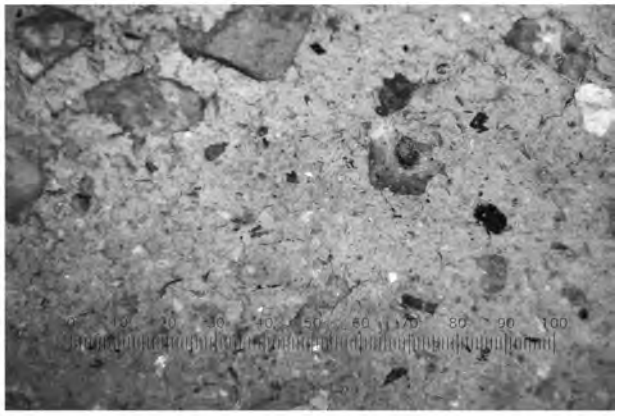
258(63.6μm)　胎土分類H5



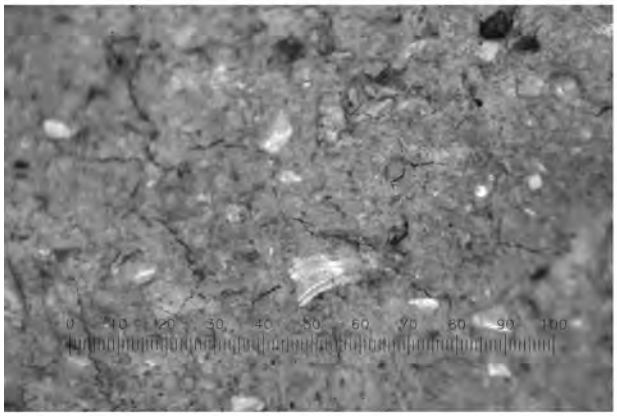
369(63.6μm)　胎土分類I5



369(22.7μm)　胎土分類I5



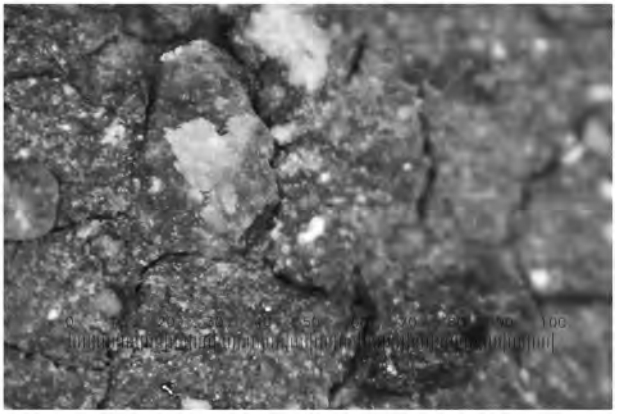
413(63.6μm)　胎土分類I7



413(22.7μm)　胎土分類I7

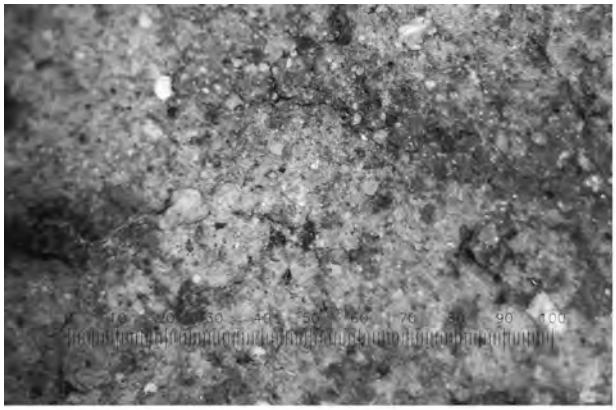
545(63.6μm)　胎土分類J1

557(63.6μm)　胎土分類J2

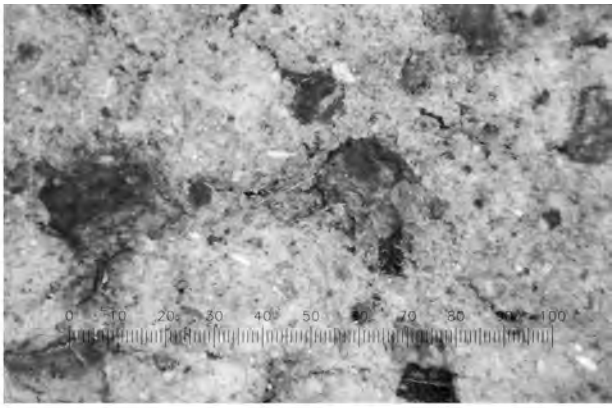


557(22.7μm)　胎土分類J2

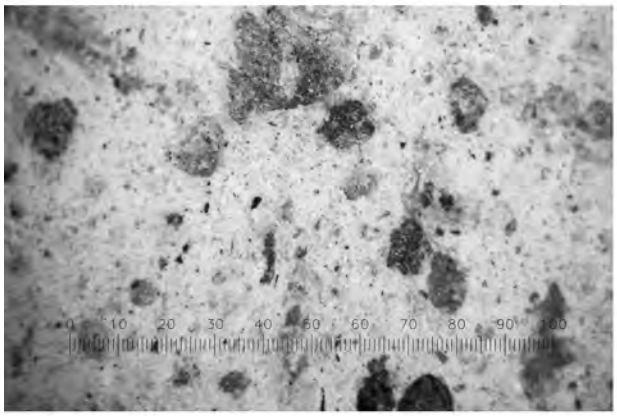
土製耳飾り胎土写真（4）



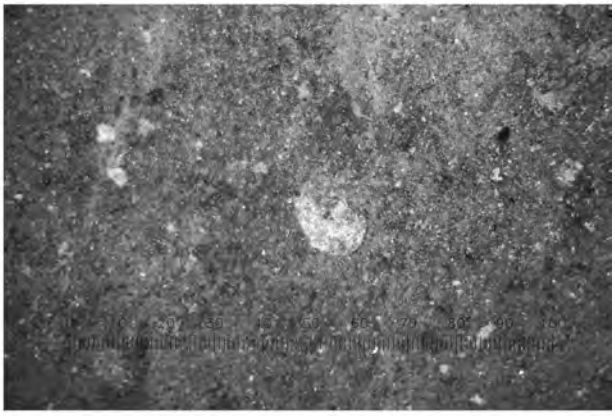
J18①-1(63.6μm)



J18①-1(22.7μm)



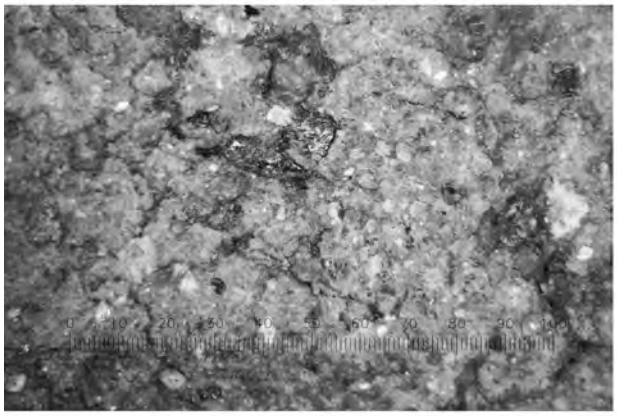
J18①-2(63.6μm)



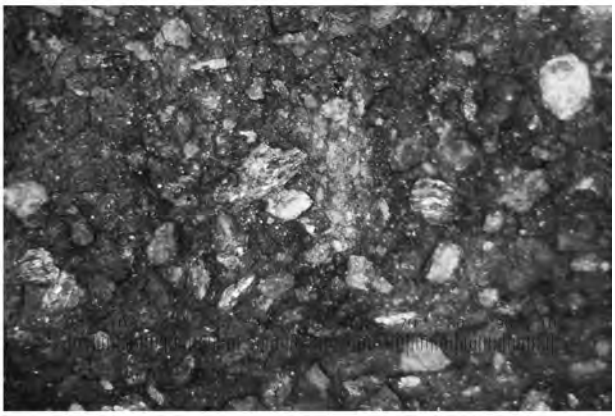
J18①- 3 B(63.6μm)

J18①-3(22.7μm)

J18②-1(63.6μm)



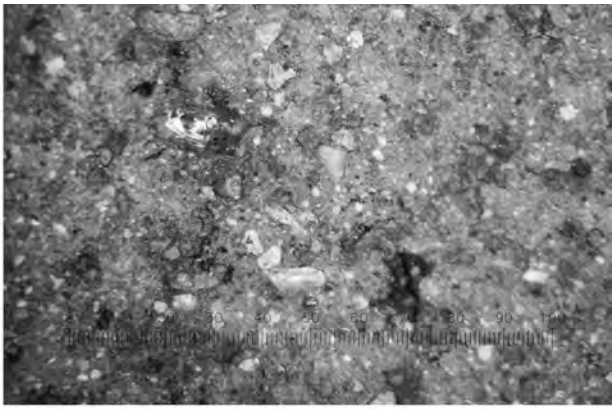
J18②- 2 (63.6μm)



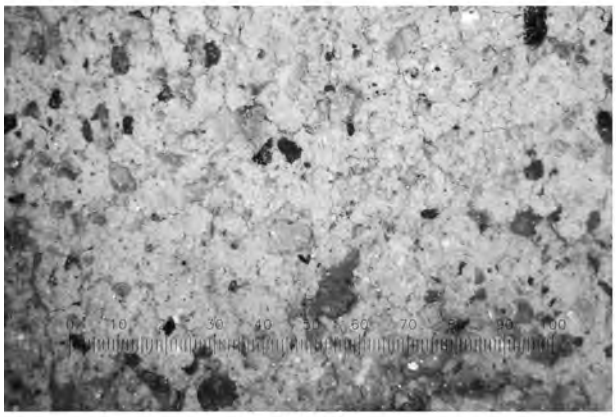
J18②-6(63.6μm)

18号住居跡出土土器胎土写真

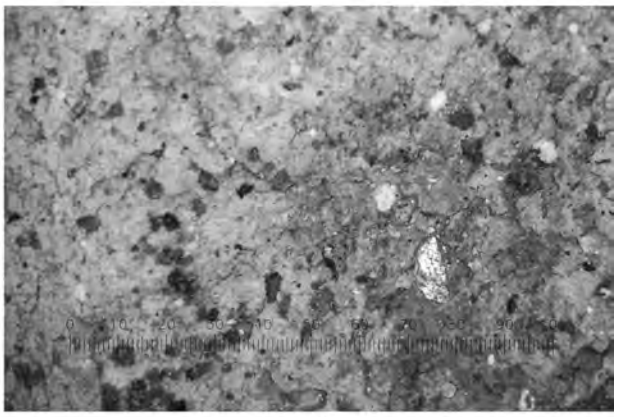
J18②-8(63.6μm)



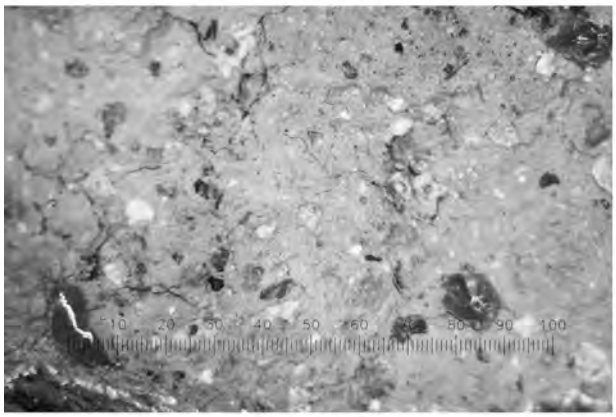
J18②-11(63.6μm)



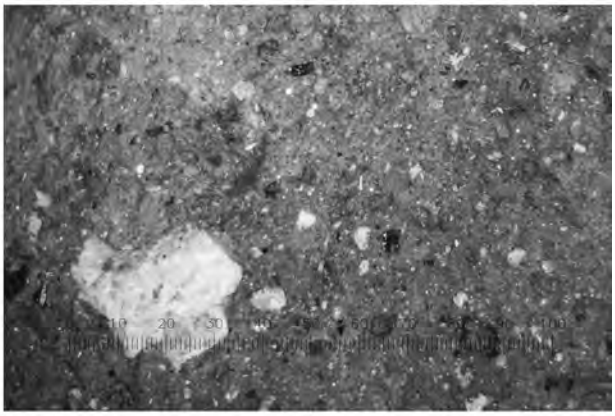
J18①-2A(63.6μm)



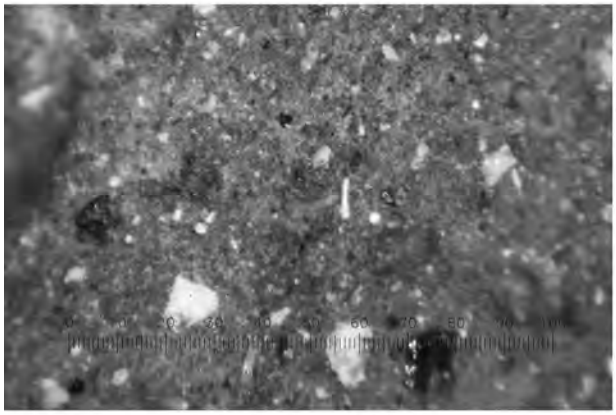
J18⑤-2B(63.6μm)



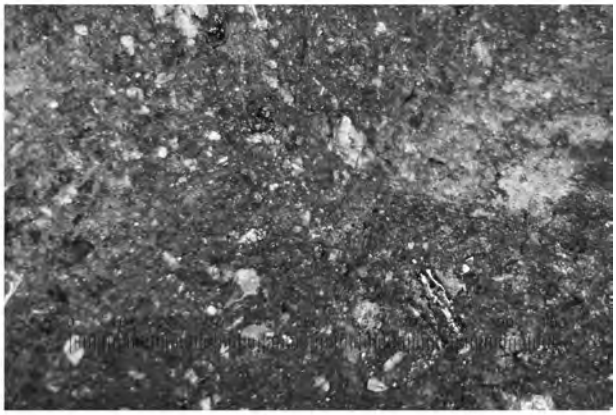
手燭20(63.6μm)



手燭84(63.6μm)



手燭84(22.7μm)



手燭105-a(63.6μm)

手燭形土製品胎土写真

表３－１－１　胎土の分類内容一覧

分類		含有鉱物・岩石の特徴	胎土の性状	備　考
A類	A１	微量の雲母・長石・輝石・石英・珪質乳白色岩片の粗・細砂を含む。	◎	主として六角形状の雲母を含有するグループ
	A２	微量の雲母・長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	A３	少量の長石・石英や珪質乳白色・灰白色岩片と微量の雲母・輝石および黒色・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	A４	中量の長石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ灰白色岩片や微量の雲母・輝石・石英の粗・細砂を含む。	△	
	A５	中量の円磨度の進んだ長石礫・粗砂と中量の輝石や珪質乳白色・灰白色岩片、少量の赤色岩片の粗・細砂および微量の雲母細砂を含む。	▲	
	A６	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と少量の珪質赤色岩片や微量の雲母・輝石・石英の粗・細砂を含む。	△	
	A７	中量の円磨度の進んだ長石・石英・珪質乳白色岩片と少量の雲母・角閃石や灰白色・黒色岩片・石英、微量の輝石の粗・細砂および微量の赤色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	A８	中量の円磨度の進んだ石英と少量の長石・輝石・角閃石や珪質乳白色・灰白色・黒色岩片および微量の雲母・珪質赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	A９	多量の長石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ輝石や灰白色・赤色・黒色岩片、微量の雲母の祖・細砂および少量の自形結晶石英の礫・粗砂を含む。	▲	
	A10	多量の長石・珪質乳白色岩片と中量の円磨度の進んだ花崗岩や少量の輝石・石英、灰白色・軟質赤色岩片および微量の雲母・角閃石の粗・細砂を含む。	▲	
	A11	多量の長石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ輝石や灰白色・黒色岩片および微量の雲母・赤色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	A12	多量の長石や珪質乳白色・赤色・黒色岩片と微量の輝石・角閃石・灰白色岩片の粗・細砂および微量の雲母の細砂を含む。	△	
	A13	多量の長石・珪質乳白色岩片と中量の円磨度の進んだ花崗岩や少量の輝石・石英、灰白色・軟質赤色岩片および微量の雲母・バブルウォール型火山ガラスの粗・細砂を含む。	△	
B類	B１	多量の円磨度の進んだ結晶片岩の礫・粗砂と中量の長石や珪質な灰白色・赤色・黒灰色岩片、雲母および微量の輝石・石英の粗・細砂を含む。やや滑り感有り。	▲	主として結晶片岩を含有するグループ
	B２	多量の円磨度の進んだ長石や中量の石英と少量の輝石・灰白色岩片、微量の雲母・バブルウォール型火山ガラス・赤色岩片の粗・細砂および中量の珪質乳白色岩片と微量の結晶片岩の礫・粗砂を含む。	○	
	B３	中量の雲母細砂と微量の長石・輝石・石英や珪質な乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。滑り感有り。	◎	
	B４	中量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質な乳白色・赤色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の長石・灰白色岩片や微量の輝石・石英の粗・細砂および微量の雲母細砂を含む。	▲	
	B５	中量の円磨度の進んだ結晶片岩の礫・粗砂と少量の珪質な乳白色・黒灰色岩片や長石・輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂および少量の雲母細砂を含む。滑り感有り。	△	
	B６	中量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質な乳白色・黒灰色岩片と少量の灰白色岩片の礫・粗砂および少量の長石・輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂や微量の雲母細砂を含む。	▲	
	B７	中量の長石と少量の結晶片岩や灰白色・珪質乳白色岩片および微量の雲母・輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	B８	中量の円磨度の進んだ珪質な乳白色・灰白色・赤色岩片と少量の結晶片岩・長石や微量の雲母・輝石の粗・細砂および中量の黒灰色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	B９	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片や少量の結晶片岩・珪質赤色岩片と微量の輝石・石英・灰白色岩片の粗・細砂および微量の雲母細砂を含む。滑り感有り。	△	
	B10	少量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質乳白色・灰白色岩片の礫・粗砂と微量の輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	B11	少量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	B12	中量の円磨度の進んだ結晶片岩や少量の珪質な乳白色・黒灰色岩片と長石・軟質赤色岩片および微量の雲母・輝石・石英の粗・細砂を含む。	△	
	B13	多量の円磨度の進んだ結晶片岩・長石や中量の珪質な乳白色・赤色・黒色岩片と少量の輝石・自形結晶石英の粗・細砂および少量の雲母細砂を含む。	△	
	B14	中量の円磨度の進んだ長石・軟質赤色岩片と少量の珪質な乳白色・灰白色・赤色岩片や結晶片岩・輝石および微量の石英の粗・細砂を含む。	○	

表３－１－２　胎土の分類内容一覧

分類		含有鉱物・岩石の特徴	胎土の性状	備　考
C類	C１	極めて微量の長石・珪質乳白色岩片・輝石・角閃石や円磨度の進んだ灰白色・軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	◎	主として灰白色・赤色・珪質乳白色岩片や長石･輝石･石英等を含有するグループ
	C２	微量の長石・珪質乳白色岩片・輝石・石英や円磨度の進んだ灰白色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	C３	微量の長石と円磨度の進んだ輝石・角閃石や珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C４	少量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色岩片と微量の石英・輝石および赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	C５	微量の長石・輝石・角閃石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の粗・細砂および微量の石英の礫・粗砂を含む。	○	
	C６	少量の長石・輝石や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂と少量の円磨度の進んだ石英・赤色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	C７	少量の円磨度の進んだ輝石と微量の長石・自形結晶石英・角閃石や珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C８	少量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色・軟質赤色・黒色岩片と微量の輝石・石英の粗・細砂を含む。	△	
	C９	少量の円磨度の進んだ灰白色・珪質乳白色岩片と微量の長石・輝石・石英・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C10	少量の円磨度の進んだ長石・軟質赤色岩片や微量の灰白色岩片・輝石・石英の粗・細砂および微量の珪質乳白色岩片の礫・粗砂を含む。	○	
	C11	少量の円磨度の進んだ長石・輝石や灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C12	少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片と微量の長石・輝石・角閃石の粗・細砂を含む。	○	
	C13	少量の円磨度の進んだ長石・灰白色岩片と微量の輝石・石英や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C14	少量の円磨度の進んだ長石・輝石・自形結晶石英や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂と少量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	C15	少量の円磨度の進んだ灰白色・珪質乳白色岩片や輝石と微量の長石・角閃石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	C16	中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片と少量の長石・輝石・自形結晶石英・黒色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C17	中量の円磨度の進んだ軟質赤色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・灰白色岩片と微量の石英・角閃石・珪質乳白色の粗・細砂を含む。	○	
	C18	中量の珪質な乳白色・黒灰色岩片や少量の長石・輝石の粗・細砂を含む。	▲	
	C19	中量の円磨度の進んだ珪質な乳白色・黒色岩片や灰白色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・石英や軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C20	中量の円磨度の進んだ灰白色・黒色・赤色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石および微量の石英の粗・細砂を含む。	▲	
	C21	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・石英・角閃石や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C22	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片や少量の石英・軟質赤色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石、珪質乳白色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C23	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と中量の珪質乳白色・黒色岩片や少量の長石・輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C24	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と中量の長石・珪質乳白色岩片や少量の輝石および微量の石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	C25	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の珪質乳白色・赤色岩片や長石・輝石および微量の石英の粗・細砂を含む。	▲	
	C26	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の長石・輝石・石英や微量の珪質乳白色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	C27	中量の円磨度の進んだ灰白色・黒色岩片と少量の珪質乳白色・赤色岩片や微量の長石・輝石・石英の粗・細砂を含む。	△	
	C28	多量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片、中量の赤色・黒色岩片、少量の長石・輝石、微量の石英・角閃石等の粗・細砂と多量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	C29	多量の円磨度の進んだ赤色岩片や中量の長石・珪質乳白色岩片と少量の輝石・灰白色岩片および微量の石英の粗・細砂を含む。	△	

表３－１－３　胎土の分類内容一覧

分類		含有鉱物・岩石の特徴	胎土の性状	備　考
D類	D１	中量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の灰白色岩片や微量の黒色岩片・輝石・石英・角閃石の粗・細砂を含む。	○	主として長石を多量に含有するグループ
	D２	中量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の灰白色岩片・輝石や微量の軟質赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	D３	中量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と中量の灰白色・黒色岩片の礫・粗砂や少量の輝石・石英および微量の角閃石・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	D４	中量の極めて円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と少量の灰白色岩片・石英や微量の輝石・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	D５	中量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ輝石・軟質赤色岩片と少量の自形結晶石英、灰白色・黒色岩片の粗・細砂および微量の花崗岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D６	中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の輝石・石英や珪質乳白色・軟質赤色・黒灰色岩片および微量の角閃石の粗・細砂を含む。	▲	
	D７	中量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の輝石、赤色・黒色岩片の粗・細砂および微量の石英の礫・粗砂を含む。	▲	
	D８	中量の長石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ灰白色岩片や微量の輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	D９	中量の長石・珪質乳白色岩片や少量の円磨度の進んだ輝石・自形結晶石英・軟質赤色岩片と微量の黒色岩片の粗・細砂および中量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	D10	中量の長石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ輝石や灰白色・黒灰色岩片および微量の石英の粗・細砂を含む。	▲	
	D11	中量の長石・珪質乳白色岩片や少量の円磨度の進んだ輝石・石英・花崗岩片・黒灰色岩片の粗・細砂と中量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D12	中量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ輝石・軟質赤色岩片と少量の石英・灰白色岩片および微量の黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	D13	中量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ軟質赤色岩片と少量の自形結晶石英・輝石・灰白色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	D14	中量の長石と少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片や輝石、微量の石英の粗・細砂よび中量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	D15	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・珪質乳白色岩片や微量の赤色・黒色岩片の粗・細砂と中量の灰白色岩片や少量の石英の礫・粗砂を含む。	▲	
	D16	中量の長石・輝石と少量の円磨度の進んだ石英や珪質乳白色・黒色岩片、微量の角閃石・軟質赤色岩片の粗・細砂および少量の角閃石安山岩の礫・粗砂を含む。	▲	
	D17	多量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の円磨度の進んだ灰白色岩片や微量の輝石・石英・黒色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	D18	多量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の円磨度の進んだ輝石、灰白色・黒色岩片や微量の石英の祖・細砂および少量の軟質赤色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D19	多量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の円磨度の進んだ輝石や微量の石英、赤色・黒色岩片の粗・細砂および中量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D20	多量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の円磨度の進んだ輝石や微量の石英・赤色岩片の粗・細砂および多量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	

表３－１－４　胎土の分類内容一覧

分類		含有鉱物・岩石の特徴	胎土の性状	備　考
	D21	多量の長石・珪質乳白色岩片と少量の輝石や微量の角閃石の細砂を含む。	○	
	D22	中量の円磨度の進んだ長石と少量の珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片や輝石・石英の粗・細砂を含む。	○	
	D23	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・珪質乳白色岩片と少量の灰白色・赤色岩片や微量の石英・角閃石の粗・細砂を含む。	△	
	D24	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と少量の輝石、灰白色・黒色岩片や微量の自形結晶石英の粗・細砂および微量の赤色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	D25	中量の円磨度の進んだ長石や珪質乳白色・赤色岩片と少量の輝石・石英および灰白色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	D26	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と少量の灰白色岩片・石英や微量の輝石の粗・細砂を含む。	○	
	D27	中量の円磨度の進んだ長石や少量の輝石・石英の粗・細砂と少量の珪質乳白色・灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	D28	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片や少量の輝石・石英と微量の軟質赤色岩片の粗・細砂および少量の灰白色・黒色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D29	中量の円磨度の進んだ長石・石英や珪質乳白色・灰白色岩片と少量の輝石、赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	D30	中量の円磨度の進んだ長石・輝石と少量の石英、珪質乳白色・灰白色岩片や微量の角閃石安山岩・赤色岩片の粗・細砂および微量の珪質黒灰色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D31	多量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と中量の灰白色岩片や少量の輝石・石英・赤色岩片および微量の角閃石の粗・細砂を含む。	△	
	D32	多量の長石や中量の輝石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ珪質な赤色・黒色岩片や灰白色岩片の粗・細砂および微量の石英の礫・粗砂を含む。	△	
	D33	多量の長石・珪質乳白色岩片と中量の円磨度の進んだ輝石および少量の石英や灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	D34	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・灰白色岩片の粗・細砂や少量の赤色・黒色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	D35	多量の長石や中量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色岩片と少量の輝石および微量の石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。やや砂質。	△	
	D36	多量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色・軟質赤色・黒色岩片と中量の輝石および少量の石英の粗・細砂を含む。	▲	
	D37	多量の長石や中量の輝石と少量の珪質乳白色岩片、微量の円磨度の進んだ自形結晶石英・軟質赤色岩片の粗・細砂および微量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。やや砂質。	▲	
E類	E１	中量の円磨度の進んだ輝石・灰白色岩片と少量の長石・自形結晶石英・黒色岩片や微量の角閃石・軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	△	主として輝石や角閃石を多量に含有するグループ
	E２	中量の円磨度の進んだ輝石と少量の長石・石英や珪質乳白色・灰白色・黒色岩片および微量の赤色岩片・角閃石の粗・細砂を含む。	△	
	E３	中量の角閃石と少量の長石・石英や珪質乳白色・灰白色・黒色・赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	E４	中量の円磨度の進んだ輝石・灰白色岩片の礫・粗砂と中量の長石や少量の石英・軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
F類	F１	少量の円磨度の進んだ長石や珪質乳白色・黒曜石岩片と微量の輝石・灰白色岩片の粗・細砂を含む。	◎	主として自形結晶石英や黒曜石を含有するグループ
	F２	中量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片と少量の輝石・石英や珪質黒灰色・赤色岩片および微量の黒曜石の粗・細砂を含む。	△	
	F３	中量の円磨度の進んだ自形結晶石英の礫・粗砂や灰白色岩片の粗・細砂と少量の長石・珪質乳白色岩片および微量の輝石・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	F４	中量の円磨度の進んだ自形結晶石英や赤色・黒色岩片と少量の長石・輝石・珪質乳白色岩片の粗・細砂および中量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
G類	G１	極めて微量の棒・球状珪酸体細砂と微量の長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	主として棒・球状珪酸体を含有するグループ
	G２	微量の棒・球状珪酸体の細砂と円磨度の進んだ長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	G３	微量の棒・球状珪酸体細砂と長石や円磨度の進んだ輝石・角閃石および珪質乳白色・灰白色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	G４	微量の棒・球状珪酸体細砂と円磨度の進んだ長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	G５	微量の棒・球状珪酸体細砂と中量の円磨度の進んだ赤色岩片や少量の長石・灰白色岩片および微量の輝石の粗・細砂を含む。	△	
	G６	微量の棒・球状珪酸体細砂と中量の長石・輝石・珪質乳白色岩片・円磨度の進んだ灰白色岩片や少量の石英・軟質赤色岩片の粗・細砂および微量の黒色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
	G７	微量の棒・球状珪酸体の細砂と多量の円磨度の進んだ長石・珪質乳白色岩片や少量の輝石・石英・灰白色岩片および微量の赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	

表３－１－５　胎土の分類内容一覧

分類		含有鉱物・岩石の特徴	胎土の性状	備　考
	G８	中量の棒・球状珪酸体細砂と多量の円磨度の進んだ輝石や中量の長石・珪質乳白色岩片、少量の石英・赤色岩片の粗・細砂および少量の灰白色岩片礫・粗砂を含む。	△	
	G９	中量の棒・球状珪酸体細砂と微量の長石・輝石・石英や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	G10	中量の棒・球状珪酸体の細砂と中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片や少量の輝石、珪質乳白色・軟質赤色岩片および微量の石英・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	G11	少量の棒・球状珪酸体の細砂と多量の円磨度の進んだ長石や微量の珪質乳白色岩片・輝石・自形結晶石英の粗・細砂および少量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	▲	
H類	H１	少量の円磨度の進んだ軽石・灰白色岩片と微量の長石・角閃石・自形結晶石英や赤色岩片の粗・細砂を含む。	○	主として軽石やスコリアを含有するグループ
	H２	中量の長石と少量の軽石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・軟質赤色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	H３	中量の円磨度の進んだ軽石・長石・灰白色岩片と少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片や輝石・石英の粗・細砂を含む。	▲	
	H４	中量の円磨度の進んだ軽石の礫・粗砂と少量の長石・輝石や珪質乳白色・灰白色岩片および微量の石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	H５	多量の黒灰色スコリアや円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂と中量の長石・珪質乳白色岩片および少量の輝石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
I類	I１	微量のバブルウォール型火山ガラスや中量の珪質乳白色・赤色岩片と少量の長石・輝石・石英、灰白色岩片の粗・細砂を含む。	○	主としてバブルウォール型火山ガラスを含有するグループ
	I２	微量のバブルウォール型火山ガラス・輝石と中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片や少量の長石・黒色岩片の粗・細砂を含む。	▲	
	I３	微量のバブルウォール型火山ガラス・石英・赤色岩片と中量の長石および少量の輝石や灰白色・珪質乳白色岩片の粗・細砂を含む。	○	
	I４	微量のバブルウォール型火山ガラス・長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含む。	◎	
	I５	微量のバブルウォール型火山ガラス・長石・輝石・石英や珪質乳白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂と少量の灰白色岩片の礫・粗砂を含む。	△	
	I６	微量のバブルウォール型火山ガラス・長石・輝石・石英・珪質乳白色岩片の粗・細砂と中量の棒・球状珪酸体の細砂とを含む。	◎	
	I７	多量のバブルウォール型火山ガラスと少量の極めて円磨度の進んだ珪質の乳白色・灰白色・赤色の変成岩や微量の輝石の粗・細砂を含む。	▲	
	I８	中量のバブルウォール型火山ガラスと少量の円磨度の進んだ長石・輝石・石英や珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む。	△	
	I９	微量のバブルウォール型火山ガラス・角閃石・雲母や中量の長石・輝石・珪質乳白色岩片と少量の円磨度の進んだ灰白色・軟質赤色岩片の粗・細砂および微量の棒・球状珪酸体の細砂を含む。	△	
J類	J１	中量の長石・珪質乳白色岩片や円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の青灰色チャート・軟質赤色岩片および微量の黒色岩片の粗・細砂を含む。	○	主としてチャートを含有するグループ
	J２	中量の長石・珪質乳白色岩片の細砂と少量の円磨度の進んだ輝石・灰白色岩片や微量の石英および少量の青灰色チャートの礫・粗砂を含む。	○	

凡例（胎土の性状）

◎	極めて緻密な胎土
○	緻密な胎土
△	やや緻密な胎土
▲	やや粗雑な胎土

表３－２－１　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
1	1	J１	C10	1	16	63.6μm		
2	3	J２	G１	2	16・45	63.6・22.7μm		
3	12	D16	不明	1	16	63.6μm		表面薬剤処理のため観察不能
4	27	J３	A２	1	16	63.6μm		
5	28	J３	D９	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
6	33	J３	C２	1	16	63.6μm		
7	34	J３	B13	1	16	63.6μm		
8	40	J３	C９	1	16	63.6μm		
9	52	J４	D23	1	16	63.6μm		
10	56	J４	D28	1	16	63.6μm		
11	70	J４	B11	1	16	63.6μm		
12	71	J４	C９	1	16	63.6μm		90と同一個体か？
13	74	J４	G９	2	16・45	63.6・22.7μm		
14	79	J５	A10	1	16	63.6μm		
15	80	J５	A11	1	16	63.6μm		
16	83	J５	A10	1	16	63.6μm		
17	90	J６	A11	1	16	63.6μm		71と同一個体か？
18	95	J７	C10	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
19	96	J７	D１	2	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
20	97	J７	C１	1	16・45	63.6・22.7μm		Ｃ類の典型例
21	98	J７	D12	1	16	63.6μm		
22	101	J７	D33	1	16	63.6μm		
23	102	J７	C２	1	16	63.6μm		
24	103	J７	G３	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		Ｇ類の典型例
25	113	J８A	C15	1	16	63.6μm		
26	116	J８B	D23	1	16	63.6μm		
27	117	J８B	D31	1	16	63.6μm		
28	118	J８B	C14	1	2	51.1μm		
29	119	J８B	D26	1	16	63.6μm		
30	124	J８	C23	1	16	63.6μm		
31	125	J８	C12	1	16	63.6μm		
32	126	J８	C21	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
33	131	J９	B１	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
34	132	J11	D31	1	16	63.6μm		
35	133	J12	D23	1	16	63.6μm		
36	136	J12	E１	2	16	63.6μm		漆塗布後に赤色塗彩か？
37	139	J13	C20	1	16	63.6μm		
38	144	J14	C２	1	16	63.6μm		還元二次焼成か？
39	145	J14	C26	1	16	63.6μm		147と同一個体か？
40	146	J14	C25	1	16	63.6μm		
41	147	J14	C26	1	16	63.6μm		145と同一個体か？
42	148	J14	C27	1	16	63.6μm		
43	150	J15	B６	2	16	63.6μm		
44	153	J15	D31	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
45	154	J15	G10	2	16・45	63.6・22.7μm		
46	155	J15	D８	1	16	63.6μm		
47	156	J15	C17	1	16	63.6μm		
48	160	J15	G２	2	16・45	63.6・22.7μm		
49	169	J15	C13	1	16	63.6μm		
50	170	J15	D13	1	16	63.6μm		
51	172	J15	D35	1	16	63.6μm		
52	174	J15	D25	1	16	63.6μm	耳栓状	
53	177	J15	D11	1	16	63.6μm		
54	179	J15	D17	1	16	63.6μm		
55	181	J15	D６	1	16	63.6μm		
56	182	J15	不明	1	16	63.6μm		表面薬剤処理のため観察不能
57	186	J15	C13	1	16	63.6μm		
58	188	J15	C13	1	16	63.6μm		
59	190	J15	A11	1	16	63.6μm		
60	191	J15	C10	1	16	63.6μm		
61	192	J15	D22	1	16	63.6μm		
62	193	J15	A１	1	16	63.6μm		
63	194	J15	A１	1	16	63.6μm		
64	195	J15	C２	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
65	196	J15	C５	1	16	63.6μm		
66	197	J15	C５	1	16	63.6μm		
67	198	J15	C５	1	16	63.6μm		
68	199	J15	F２	1	16	63.6μm		

表３－２－２　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
69	200	J15	C２	1	16	63.6μm		
70	201	J15	D23	1	16	63.6μm		
71	202	J15	D31	2	16・45	63.6・22.7μm		
72	203	J15	D28	1	16	63.6μm		
73	204	J15	D30	1	16	63.6μm		
74	205	J15	G10	4	16・45	63.6・22.7μm		
75	208	J15	H２	1	16	63.6μm		
76	211	J15	G２	4	16・45	63.6・22.7μm		
77	212	J16A	G10	2	16・45	63.6・22.7μm		
78	219	J16A	A３	1	16	63.6μm		
79	221	J16A	D９	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
80	224	J16A	C５	1	16	63.6μm		
81	226	J16A	C11	1	16	63.6μm		
82	228	J16A	D25	1	16	63.6μm		
83	229	J16A	D22	1	16	63.6μm		
84	230	J16A	B１	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
85	231	J16A	C24	1	16	63.6μm		
86	232	J16A	A５	1	16	63.6μm		
87	233	J16A	C23	1	16	63.6μm		
88	234	J16A	C23	1	16	63.6μm		
89	235	J16A	C25	1	16	63.6μm	耳栓状	
90	236	J16A	D26	1	16	63.6μm		
91	238	J16A	C６	1	16	63.6μm		
92	239	J16A	C26	1	16	63.6μm		
93	240	J16A	H１	1	16	63.6μm		241と同一個体か？
94	241	J16A	H１	1	16	63.6μm		240と同一個体か？
95	242	J16A	H３	1	16	63.6μm		Ｈ類の典型例
96	244	J16A	C15	1	16	63.6μm		
97	245	J16A	D８	1	16	63.6μm		
98	246	J16A	C15	1	2.0	51.1μm		
99	247	J16A	C11	1	2.0	51.1μm		
100	248	J16A	C13	1	2.0	51.1μm		
101	250	J16B	C６	1	16	63.6μm		
102	252	J16B	C16	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
103	253	J16B	D31	1	16	63.6μm		
104	254	J16B	D23	1	16	63.6μm		
105	255	J16	D35	1	16	63.6μm		
106	256	J16	D２	1	16	63.6μm		
107	258	J17	H５	1	16	63.6μm		Ｈ類の典型例
108	264	J17	C13	1	16	63.6μm		
109	266	J17	C25	1	16	63.6μm		
110	270	J17	I８	2	16・45	63.6・22.7μm		
111	275	J17	D７	1	16	63.6μm		
112	276	J17	D29	1	16	63.6μm		表面薬剤処理のため不確定
113	277	J17	C24	1	16	63.6μm		
114	278	J17	D23	1	16	63.6μm		
115	279	J17	D26	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
116	280	J17	B３	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
117	281	J17	B７	1	16	63.6μm		
118	282	J17	I７	4	16・45	63.6・22.7μm		Ｉ類の典型例
119	283	J17	I２	1	16	63.6μm		
120	284	J17	C９	1	16	63.6μm		
121	285	J17	A６	1	16	63.6μm		
122	286	J17	D８	1	16	63.6μm		
123	287	J17	D22	1	16	63.6μm		
124	288	J17	C18	1	16	63.6μm		
125	289	J17	C13	1	16	63.6μm		
126	290	J17	D33	1	16	63.6μm		
127	292	J18	D18	1	16	63.6μm		
128	293	J18	C24	1	16	63.6μm		
129	298	J18	I４	2	16・45	63.6・22.7μm		
130	299	J18	D９	1	16	63.6μm		
131	309	J18	D９	1	16	63.6μm		
132	312	J18	D１	1	16	63.6μm		
133	317	J18	D６	1	16	63.6μm		
134	318	J18	D１	1	16	63.6μm		
135	319	J18	D27	1	16	63.6μm		

表３－２－３　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
136	320	J18	D24	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
137	321	J18	D22	1	16	63.6μm		
138	322	J18	Ｇ２	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		Ｇ類の典型例
139	323	J18	C27	1	16	63.6μm		
140	324	J18	不明	0	—	—		表面薬剤処理のため観察不能
141	325	J18	Ｃ９	1	16	63.6μm		
142	326	J18	Ｄ９	1	16	63.6μm		
143	327	J18	Ｈ３	1	16	63.6μm		330と同一個体か？
144	328	J18	C13	1	16	63.6μm		
145	329	J18	Ｃ２	1	16	63.6μm		
146	330	J18	Ｈ３	1	16	63.6μm		327と同一個体か？
147	331	J18	Ｉ４	2	16・45	63.6・22.7μm		
148	332	J18	C20	1	16	63.6μm		
149	333	J18	Ｄ７	1	16	63.6μm		
150	334	J18	Ｃ５	1	16	63.6μm		表面に漆塗布か？
151	335	J18	C14	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
152	336	J18	Ｇ２	4	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		Ｇ類の典型例
153	337	J18	Ｇ４	4	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
154	338	J18	Ｃ２	1	16	63.6μm		
155	339	J18	D15	1	16	63.6μm		
156	340	J18	Ｇ５	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
157	341	J18	C12	1	16	63.6μm		
158	342	C17	Ｃ２	1	16	63.6μm		
159	344	D10	Ｄ７	1	16	63.6μm		
160	345	D11	Ｇ４	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
161	347	D14	Ａ８	1	16	63.6μm		
162	348	D14	Ｇ２	4	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		Ｇ類の典型例
163	349	D17	B12	1	16	63.6μm		
164	350	D17	Ｇ１	4	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		Ｇ類の典型例
165	351	D17	D22	1	16	63.6μm		
166	352	E12	Ｃ２	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
167	353	E12	Ｃ７	1	16	63.6μm		
168	359	E14	Ｃ８	1	16	63.6μm		
169	360	E14	D26	1	16	63.6μm		
170	361	E14	Ｇ７	2	16・45	63.6・22.7μm		
171	362	E14	Ｅ１	2	16・45	63.6・22.7μm		Ｅ類の典型例
172	363	E14	Ｂ５	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
173	369	E15	Ｉ５	2	16・45	63.6・22.7μm		Ｉ類の典型例
174	370	E15	Ｃ９	1	16	63.6μm		
175	371	E15	Ｄ９	1	16	63.6μm		
176	372	E15	Ｄ１	1	16	63.6μm		
177	373	E15	Ｆ１	1	16	63.6μm		Ｆ類の典型例
178	376	E16	Ｉ８	3	16・45	63.6・22.7μm		Ｉ類の典型例
179	377	E16	D10	1	16	63.6μm		
180	378	E16	C29	1	16	63.6μm		
181	379	E16	C28	1	16	63.6μm		
182	380	E16	D31	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
183	381	E16	C28	1	16	63.6μm		
184	382	E16	Ａ２	1	16	63.6μm		
185	383	E16	C14	1	16	63.6μm		
186	384	E17	Ｃ４	1	16	63.6μm		
187	385	E17	Ｃ２	1	16	63.6μm		
188	386	E17	D22	1	16	63.6μm		
189	387	F12	C16	1	16	63.6μm		
190	388	F13	D36	1	16	63.6μm	円棒状？	
191	390	F13	D12	1	16	63.6μm		
192	391	F13	D10	1	16	63.6μm		
193	392	F14	D33	1	16	63.6μm		
194	393	F14	Ａ９	1	16	63.6μm		
195	397	F14	D10	1	16	63.6μm		
196	398	F14	Ｃ５	1	16	63.6μm		
197	399	F15	Ｃ８	1	16	63.6μm		
198	400	F15	Ｇ４	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
199	402	F15	Ｇ４	3	16・45	63.6・22.7μm		
200	403	F15	C20	1	16	63.6μm		
201	404	F15	Ｃ２	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
202	405	F15	Ｃ２	1	16	63.6μm		

表３－２－４　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
203	406	F15	C２	1	16	63.6μm		
204	407	F15	C13	1	16	63.6μm		
205	409	F16	E１	1	16	63.6μm		
206	410	F16	E１	1	16	63.6μm		
207	411	F16	C２	1	16	63.6μm		
208	412	F16	C15	1	16	63.6μm		
209	413	F16	I７	4	16・45	63.6・22.7μm		Ｉ類の典型例
210	414	F16	D23	1	16	63.6μm		
211	416	F17	D28	1	16	63.6μm		
212	417	F17	D４	1	16	63.6μm		
213	418	F17	B１	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
214	419	F17	C21	1	16	63.6μm	円棒状？	
215	420	F17	D14	1	16	63.6μm		
216	421	F17	C２	1	16	63.6μm		
217	422	F17	C14	1	16	63.6μm		
218	423	F17	D15	1	16	63.6μm		
219	424	G11	D34	1	16	63.6μm	円棒状？	
220	425	G11	D６	1	16	63.6μm		Ｄ類の典型例
221	426	G11	C15	1	16	63.6μm		
222	428	G12	D６	1	16	63.6μm		
223	430	G12	G２	2	16・45	63.6・22.7μm		
224	431	G12	A10	1	16	63.6μm		
225	432	G12	I５	1	16	63.6μm		
226	433	G12	B２	1	16	63.6μm		
227	434	G12	H２	1	16	63.6μm		Ｈ類の典型例
228	436	G13	B６	1	16	63.6μm		
229	439	G13	C10	1	16	63.6μm		
230	440	G13	C２	1	16	63.6μm		
231	442	G14	D35	1	16	63.6μm		
232	443	G14	E１	1	16	63.6μm		
233	444	G14	C５	1	16	63.6μm		
234	445	G15	I３	2	16・45	63.6・22.7μm		
235	447	G16	C13	1	16	63.6μm		
236	448	G16	H２	1	16	63.6μm		
237	449	H11	C13	1	16	63.6μm		
238	450	H12	C13	1	16	63.6μm		
239	453	H12	C13	1	16	63.6μm		
240	454	H12	G２	6	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
241	455	H12	C２	1	16	63.6μm		
242	456	H12	C８	1	16	63.6μm		
243	457	H12	A３	1	16	63.6μm		
244	460	H13	C１	1	16	63.6μm		
245	461	H13	C17	1	16	63.6μm		
246	462	H13	D32	1	16	63.6μm		
247	463	H13	D10	1	16	63.6μm		
248	464	H13	B４	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
249	466	不明	D５	1	16	63.6μm		
250	467	I12	C19	1	16	63.6μm		Ｃ類の典型例
251	468	I13	D15	1	16	63.6μm		
252	469	I13	D22	1	16	63.6μm		
253	470	I15	C２	1	16	63.6μm		
254	471	Ａ区一括	F４	1	16	63.6μm		Ｆ類の典型例
255	472	Ａ区一括	F４	1	16	63.6μm		
256	473	Ａ区一括	A９	1	16	63.6μm		
257	474	Ａ区一括	C９	1	16	63.6μm		
258	476	Ａ区一括	C４	1	16	63.6μm		
259	477	Ａ区一括	C14	1	16	63.6μm		
260	479	Ａ区一括	G９	5	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
261	480	Ａ区一括	D10	1	16	63.6μm		
262	481	Ａ区一括	D25	1	16	63.6μm		
263	482	Ａ区一括	G４	2	16・45	63.6・22.7μm		
264	483	Ａ区一括	E２	1	16	63.6μm		Ｅ類の典型例
265	484	Ａ区一括	B４	1	16	63.6μm		Ｂ類の典型例
266	485	Ａ区一括	E３	1	16	63.6μm		Ｅ類の典型例
267	486	Ａ区一括	A７	1	16	63.6μm		
268	487	Ａ区一括	G８	4	16・45・90	63.6・22.7・11.3μm		
269	488	Ａ区一括	D10	1	16	63.6μm		

表３－２－５　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
270	489	Ａ区一括	Ｂ９	1	16	63.6μｍ		
271	490	Ａ区一括	D10	1	16	63.6μｍ		
272	491	Ａ区一括	B10	1	16	63.6μｍ		
273	492	Ａ区一括	C13	1	16	63.6μｍ		
274	493	Ａ区一括	Ｃ２	1	16	63.6μｍ		
275	494	Ａ区一括	Ｉ１	1	16	63.6μｍ		
276	495	Ａ区一括	Ｃ２	1	16	63.6μｍ		
277	496	Ａ区一括	Ｉ６	5	16・45・90	63.6・22.7・11.3μｍ		
278	498	Ｂ区一括	D23	1	16	63.6μｍ		Ｄ類の典型例
279	499	Ｂ区一括	Ｇ６	1	16	63.6μｍ		
280	500	Ｂ区一括	C13	1	16	63.6μｍ		
281	501	Ｂ区一括	D16	2	16	63.6μｍ		
282	502	Ｂ区一括	Ｇ２	2	16・45	63.6・22.7μｍ		
283	503	Ｂ区一括	Ｂ８	1	16	63.6μｍ		
284	504	Ｂ区一括	C15	1	16	63.6μｍ		
285	505	Ｂ区一括	C10	1	16	63.6μｍ		
286	506	Ｂ区一括	C14	1	16	63.6μｍ		
287	507	Ｂ区一括	C13	1	16	63.6μｍ		
288	508	Ｂ区一括	C15	1	16	63.6μｍ		
289	509	Ｂ区一括	D23	1	16	63.6μｍ		
290	512	カヤノ表採	C14	1	16	63.6μｍ	円棒状？	
291	513	カヤノ表採	C24	1	16	63.6μｍ		
292	514	カヤノ表採	Ｃ２	1	16	63.6μｍ		
293	515	カヤノ表採	Ｃ５	1	16	63.6μｍ		Ｃ類の典型例
294	517	確３PJ１	Ｄ１	1	16	63.6μｍ		
295	519	確３PJ１	D10	2	16	63.6μｍ		
296	520	確３PJ１	Ｂ１	1	16	63.6μｍ		521と同一個体か？
297	521	確３PJ１	Ｂ１	1	16	63.6μｍ		520と同一個体か？
298	522	確３PJ１	Ａ３	1	16	63.6μｍ		
299	523	確３PJ１	D18	2	16・45	63.6・22.7μｍ		526と同一個体か？ Ｄ類の典型例（細砂型）
300	524	確３PJ１	B12	1	16	63.6μｍ		
301	526	確３PJ３	D18	2	16・45	63.6・22.7μｍ		523と同一個体か？
302	527	確３PJ３	Ｂ７	1	16	63.6μｍ		
303	528	確４Ｐ	Ｃ８	1	16	63.6μｍ		
304	530	確６PJ１	D32	1	16	63.6μｍ		
305	531	確６PJ１	G10	3	16・45・90	63.6・22.7・11.3μｍ		Ｇ類の典型例
306	534	確６PJ１	Ｄ８	1	16	63.6μｍ		
307	535	確６PJ１	Ｆ３	1	16	63.6μｍ		Ｆ類の典型例
308	536	確６PJ１	D12	1	16	63.6μｍ		
309	537	確６PJ１	Ｉ３	1	16	63.6μｍ		
310	538	確６PJ１	Ｂ９	1	16	63.6μｍ		
311	539	確６PJ１	Ａ３	1	16	63.6μｍ		
312	540	確６PJ１	Ｄ９	1	16	63.6μｍ		
313	541	確６PJ１	Ｃ３	1	16	63.6μｍ		
314	542	確６PJ１	Ｃ２	1	16	63.6μｍ		
315	543	確６PJ１	Ｇ１	2	16・45	63.6・22.7μｍ		
316	544	確６Ｐ南	C24	1	16	63.6μｍ		
317	545	確６Ｐ南	Ｊ１	1	16	63.6μｍ		
318	546	確６Ｐ南	D23	2	16・45	63.6・22.7μｍ		
319	547	確６Ｐ南	Ｄ１	1	16	63.6μｍ		
320	549	確ATJ１	D19	2	16・45	63.6・22.7μｍ	円棒状？	Ｄ類の典型例
321	550	確ATJ１	Ｄ２	1	16	63.6μｍ	円棒状？	Ｄ類の典型例（細砂型）
322	551	確ATJ４	Ｃ７	1	16	63.6μｍ		
323	552	確ATJ１	不明	0	—	—	千網型	表面薬剤処理のため観察不能
324	553	確ATJ４	Ｂ７	1	16	63.6μｍ		
325	554	確ATJ４	C22	1	16	63.6μｍ		
326	555	確ATJ４	D19	1	16	63.6μｍ		
327	556	確ATJ４	Ｄ３	1	16	63.6μｍ		
328	557	確ATJ４	Ｊ２	3	16・45	63.6・22.7μｍ		Ｊ類の典型例
329	558	確ATJ４	D20	2	16・45	63.6・22.7μｍ	円棒状？	Ｄ類の典型例（細砂型）
330	559	確ATJ５	D21	1	16	63.6μｍ		
331	560	確ATJ７	A11	2	16・45	63.6・22.7μｍ		Ａ類の典型例
332	561	確BTJ７	D24	1	16	63.6μｍ		
333	562	確BTJ７	Ｈ４	1	16	63.6μｍ		
334	563	確BT北半	Ｄ１	1	16	63.6μｍ		Ｄ類の典型例（細砂型）
335	564	確BT北半	Ｄ９	1	16	63.6μｍ		

表３－２－６　耳飾り胎土の観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式(形状)	備　　考
336	565	確 BT 北半	A４	1	16	63.6μm		
337	566	確 BT 北半	C13	1	16	63.6μm		C類の典型例
338	567	確 BT 北半	C４	1	16	63.6μm		
339	570	確 BT 南半	C４	1	16	63.6μm		
340	571	確 BT 南半	C５	1	16	63.6μm		
341	572	確 CT	A12	2	16・45	63.6・22.7μm		A類の典型例
342	575	確一括	D９	1	16	63.6μm		
343	576	確一括	D12	1	16	63.6μm		
344	J8A-52	J８A	D23	1	16	63.6μm	小形漏斗状	重文指定外

表３－３－１　大別分類の点数・比率一覧とグラフ図

分類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	I類	J類	不明	総数
点　数	23	23	122	108	7	5	27	10	13	2	4	344
比　率	6.7	6.7	35.5	31.4	2.0	1.5	7.8	2.9	3.8	0.6	1.2	100.0

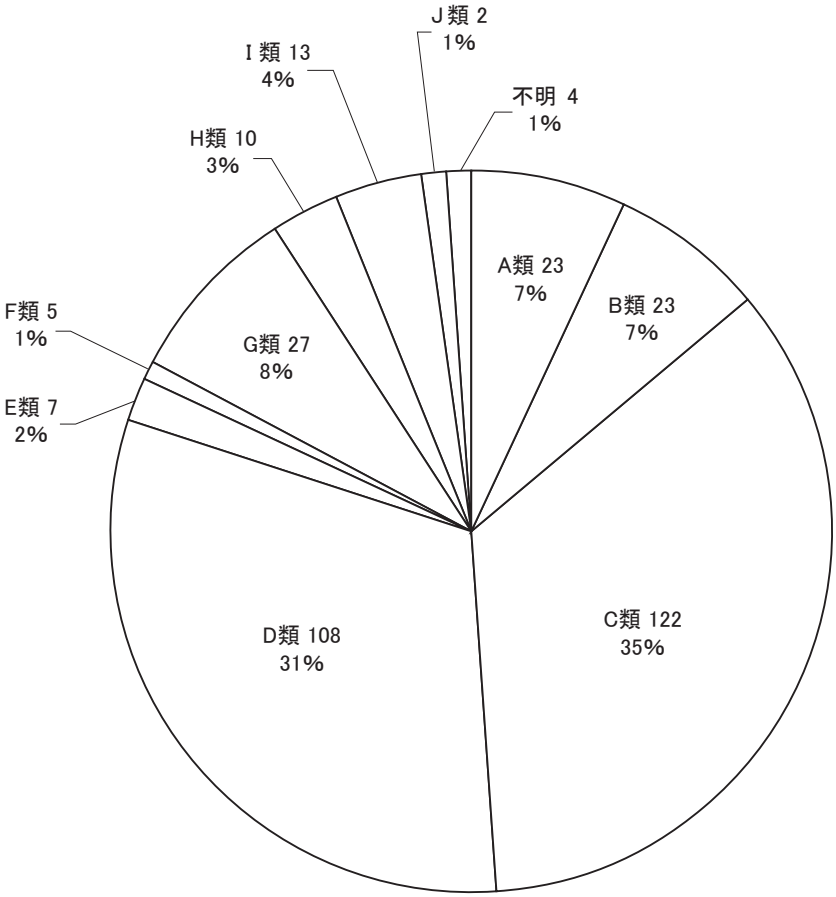


表３－４－１　各大別分類の細別点数一覧

A類

細別	A１	A２	A３	A４	A５	A６	A７	A８	A９	A10	A11	A12	A13	総数
点　数	2	2	4	1	1	1	1	1	2	3	4	1	土器	23

B類

細別	B１	B２	B３	B４	B５	B６	B７	B８	B９	B10	B11	B12	B13	B14	総数
点　数	5	1	1	2	1	2	3	1	2	1	1	2	1	土器	23

表３－４－２　各大別分類の細別点数一覧

Ｃ類

細別	C１	C２	C３	C４	C５	C６	C７	C８	C９	C10	C11	C12	C13	C14	C15	C16	C17	C18	C19	C20	C21	C22	C23
点　数	2	22	1	4	9	2	2	4	6	5	2	2	16	7	7	2	2	1	1	3	2	1	3
細別	C24	C25	C26	C27	C28	C29	総数																
点　数	5	3	3	2	2	1	122																

Ｄ類

細別	D１	D２	D３	D４	D５	D６	D７	D８	D９	D10	D11	D12	D13	D14	D15	D16	D17	D18	D19	D20	D21	D22	D23
点　数	7	2	1	1	1	4	3	4	9	9	1	4	1	1	3	1	1	3	2	1	1	7	10
細別	D24	D25	D26	D27	D28	D29	D30	D31	D32	D33	D34	D35	D36	D37	総数								
点　数	2	3	4	1	3	1	1	6	2	3	1	3	1	手燭	108								

Ｅ類

細別	E１	E２	E３	E４	総数
点　数	5	1	1	土器	7

Ｆ類

細別	F１	F２	F３	F４	総数
点　数	1	1	1	2	5

Ｇ類

細別	G１	G２	G３	G４	G５	G６	G７	G８	G９	G10	G11	総数
点　数	3	8	1	5	1	1	1	1	2	4	土器	27

Ｈ類

細別	H１	H２	H３	H４	H５	総数
点　数	2	3	3	1	1	10

Ｉ類

細別	I１	I２	I３	I４	I５	I６	I７	I８	I９	総数
点　数	1	1	2	2	2	1	2	2	土器	13

Ｊ類

細別	J１	J２	総数
点　数	1	1	2

表３－５－１　土器胎土観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	型式	備　　考
1	①－１	J18	Ｇ６	2	16・45	63.6・22.7μｍ	安行３ｂ式	
2	①－２	J18	Ｃ６	1	16	63.6μｍ	安行３ｂ式	
3	①－３	J18	Ｉ９	3	16・45	63.6・22.7μｍ	安行３ａ式	
4	②－１	J18	A13	1	16	63.6μｍ	加曽利Ｂ１式	
5	②－２	J18	Ｄ６	1	16	63.6μｍ	高井東式	
6	②－３	J18	Ｅ４	1	16	63.6μｍ	高井東式	
7	②－４	J18	D33	1	16	63.6μｍ	高井東式	
8	②－５	J18	B14	1	16	63.6μｍ	高井東式	
9	②－６	J18	Ｂ１	1	16	63.6μｍ	安行3b 式	
10	②－７	J18	B13	1	16	63.6μｍ	安行3b 式	
11	②－８	J18	Ｂ７	1	16	63.6μｍ	安行3b 式	
12	②－９	J18	Ｄ６	1	16	63.6μｍ	晩期前半	粗製土器
13	②－10	J18	Ａ２	1	16	63.6μｍ	晩期前半	粗製土器
14	②－11	J18	Ｄ９	1	16	63.6μｍ	安行３ａ式	
15	⑤－1	J18	D22	1	16	63.6μｍ	安行３ａ式	
16	⑤－2	J18	Ａ２	2	16	63.6μｍ	安行３ａ式	
17	⑤－3	J18	G11	2	16・45	63.6・22.7μｍ	新地式	

表３－６－１　手燭形土製品胎土観察内容一覧

No.	遺物番号	遺構名	胎土分類	撮影点数	撮影倍率	ミクロメータースケール	形式(形状)	備　　考
1	20	Ｊ４	Ａ８	1	16	63.6μｍ	把手部分？	灰白色岩片は珪化木か？
2	84	Ｊ４	Ｇ６	2	16・45	63.6・22.7μｍ		
3	105	J17	D37	2	16	63.6μｍ		

第４章　考 察 編

茅野遺跡出土の土製耳飾りについて

１．系列相互の影響～彫り込み系列と車輪系列を例として～

土製耳飾りの諸要素の観察により、系列同士は同時期にしつつ相互に影響しあい変化していると想定する。茅野遺跡出土の土製耳飾りの彫込系列と車輪系列について相互に与えている影響と変遷を図４−１のように示した。横は系列グループ間の影響の近さを表す。縦は系列内での変遷を示すものであり、時間の経過を示していない。ただし枠内の横線の区画は、出土土器形式から遺構の時期を推定し、時期が判定できる遺構から出土した耳飾りの、後期と晩期の境界を表す。特にないものは、後期後半から晩期前半を主体とする時期のものとしてとらえる。

実線の囲みは彫込系列、破線は車輪系列を区分する。各囲みの上部に示したモチーフは、ブリッジ付け根あるいは４単位に配置される、デザインの主要をなすポイントモチーフであり、ポイントモチーフに着眼することで各系列内での細分を試みた。ポイントモチーフは彫込系列にも車輪系列にも共通して現れる。左端の彫込系列１類は、茅野遺跡以外にもよく見ることができる群である（「広域デザイン」）。車輪系列では１類―２が他遺跡でも共通してみられることが多い「広域デザイン」の群である。また掘込系列の別の群に渦巻＋三叉文をポイントモチーフとする群があり、右端に示した。その他の小さな囲みで示しているものは系列の中でも独自性のあるものとして、茅野遺跡に特徴的な群であり、「ローカルデザイン」の「茅野デザイン」と仮称する。

本書にて設定した系列を用いて土製耳飾りの広域的な在り方をとらえる際には、系統図のような単一的にとらえるのではなく、時間・空間軸を意識しながらも複数の類型群のまとまりが互いに影響するようなイメージであてはめて捉えることが重要だと思われる。

２．分類結果にみえてきた系列ごとの時期

各系列の項目（58～71頁）での考察を踏まえて、時期と系列の関係性について触れたい。繰り返すがここでの土製耳飾りの時期とは、１項にも記したとおり、土製耳飾りが出土した遺構のうち、縄文土器の伴出により土器型式による時期比定ができたものについて、遺構の時期決定を行い、これを同遺構から出土した耳飾りの時期推定に利用したものである。

・一単位の１類は後期中葉から末ごろであるが２類～４類は後期後半から晩期前半に生じる。花弁系列に近い類とし、内面刻目帯と肩部文様帯を持つ精製品である一単位系列５類は、後期後半から成立し始め、晩期前半がピークと位置づけられる。
・花弁系列の小型品（１～３類型）はおもに晩期前半（安行３ａ～３ｂ）中心に作られている
・一単位系列５類と花弁系列１～３類は連続的する関係にあると考えられる。
・花弁系列の４類（千網類型）は晩期の前半から半ばにかけて、茅野遺跡では安行３ｂ式段階に登場すると考えられる。
・円文系列の１～２類は後期後半から晩期にかけて、周縁に刻目が施文される円文系列３類は晩期前半に比定される。
・彫込系列１類と２類に見られ、遺跡間に普遍的にみられるデザインのもの（108、202、276、177）は後期後半から晩期前半の時期のものにあたり、時間的に細かく捉えられない。

注

縦に時間の経過、横に類型の広がりを表し、類型間での影響を示したものであり、変遷を示したものではない。

実線の枠は彫込系列を示し、破線の枠は車輪系列を示している。

枠内のグレーの横線は遺構に共伴する土器から後期後半～末と晩期前半の時期的境界がわかる位置に示した。

ポイントモチーフ（　　など）は耳飾りの外周に施す特徴的な文様モチーフを抽出した。

茅野遺跡出土土製耳飾りのすべての文様を網羅しているものではない。

図４－１　茅野遺跡土製耳飾り系列模式図（彫込系列・車輪系列）

・彫込系列のうち、広域にわたり分布していない本遺跡に特有のものとみられる「茅野デザイン」（079、093、150、178、184、212、435）は、後期の末から制作され始め、晩期にはそのバリエーションに自由度が増しているように見て取れる。
・瘤系列は後期末から晩期前半にかけて使用される。
・小型有文系列は後期後半から晩期前半にかけてみられるが、周縁に刻目を施すものが古く、２類から３類にみられる、中央部分を盛り上げる、刻目を放射状に施文するなど、中央部分を意識したデザインの群は晩期に現れる。
・粗製系列は１類～３類とも数点を除き後期の所産のものが多いようだが、粗製ながら他遺跡との関連がうかがわれる群もあるので、系列内での細分の再検討と遺跡間の比較を重ねていく必要性を感じる。

耳飾りの系列はダイレクトに空間軸・時間軸を表すとは言えない。あくまでも多種多様に存在する土製耳飾りの捉え方の方法のようなものであり、今後、型式設定するには慎重に検証する必要があるだろう。出土状況、共伴遺物の精度を一定に整えたうえでの資料の扱いが肝要である。

３．地域間で見る土製耳飾りの系列

茅野遺跡出土の土製耳飾りを基準に設定した系列を、他遺跡の出土資料にあてはめた場合、茅野遺跡と同じ系列に属するものとして分類できるものと、そうではなく共通性はありそうだが茅野遺跡のものとは変異の幅がみられるものを分けて、遺跡ごとにグラフに示した（図４−２、図４−３）。

取り扱った遺跡は群馬県内では榛東村下新井遺跡、みなかみ町矢瀬遺跡、渋川市瀧沢遺跡、藤岡市谷地遺跡・中栗須滝川Ⅱ遺跡、桐生市千網谷戸遺跡である。また、群馬県外の遺跡は栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡、埼玉県桶川市高井東遺跡、長野県松本市エリ穴遺跡、長野市宮崎遺跡、新潟県上越市籠峯遺跡である。

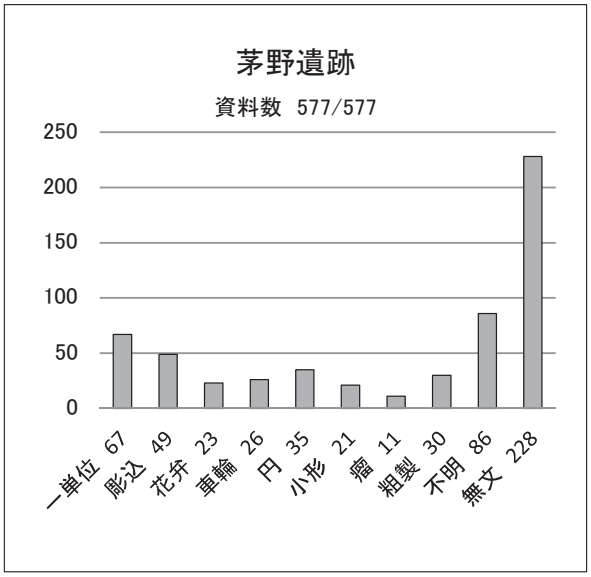
茅野遺跡出土の土製耳飾りを基準として分類した系列を、グラフに灰色で表した。各系列に類する耳飾りの点数を白で表した。また、同一の系列と想定されるが、小破片であるなどにより、全体の文様が判別できないものも各系列の白の群に含める。また、遺物の確認と集計は発掘調査報告書等によるが、報告書によっては出土した土製耳飾りのすべてを図示していないため、全体の数における系列の比は検討対象にならない。ここでは遺跡ごとに各系列に比定したものに、茅野遺跡と近しいものがどのくらいの比率で認められるか（灰色と白の比）を参考にされたい。また、各グラフのデータ数は、瀧沢遺跡の40点からエリ穴遺跡の1,712点と大差があることも留意していただきたい。

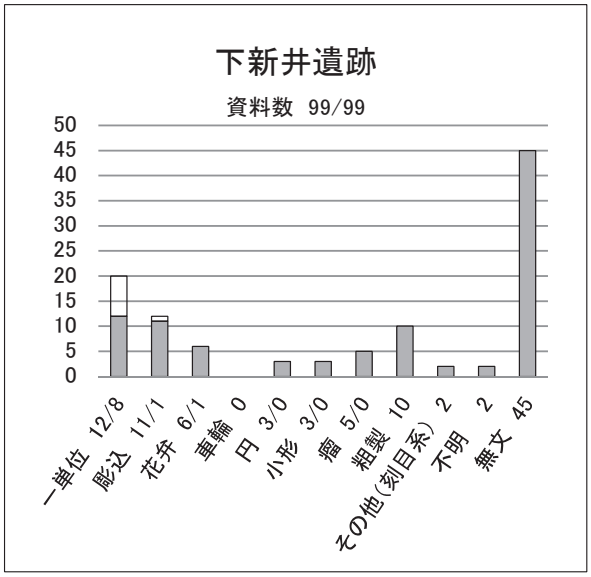
「その他」の区分は、茅野遺跡には見られない、別の系統を示していることを推定させるものとした。「不明」は小片のため類型の判別ができないものを数えた。

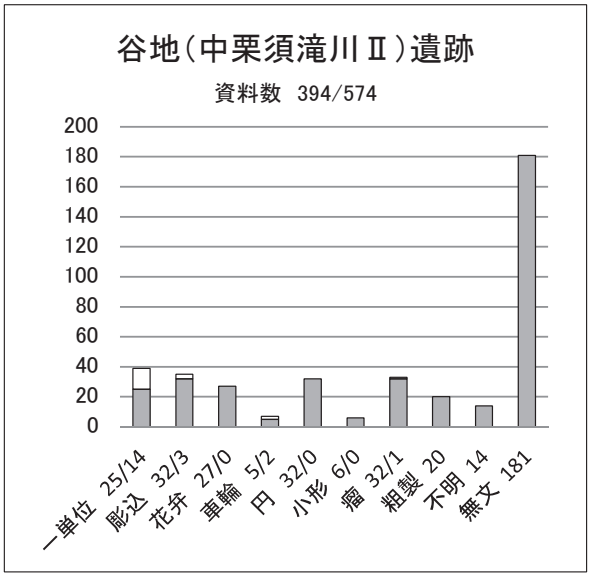
茅野遺跡で設定した系列を示す灰色部分と、変異の幅を示す資料である白の部分では、茅野遺跡から遠隔地遺跡であるほど白の部分の占める割合が多いと予測された。

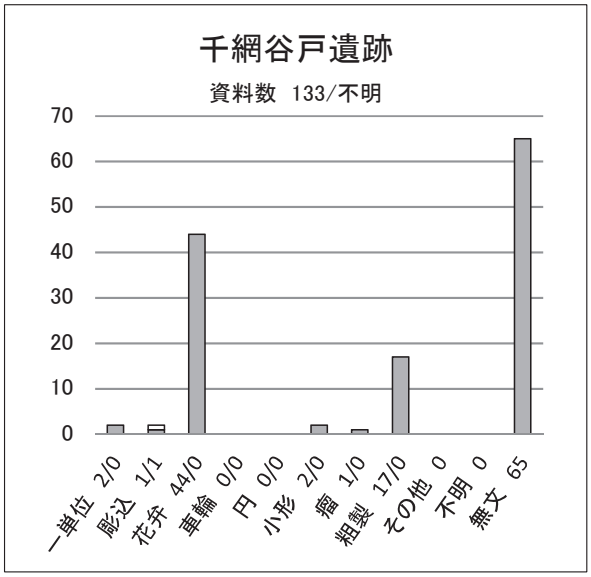
グラフ全体を見ると、最も茅野遺跡との違いが少ない（グラフの白部分が少ない）遺跡は谷地遺跡と千網谷戸である。下新井遺跡の耳飾りとの差異は茅野遺跡よりも前の後期後半～末を主体とするため、時期的な変異によるものと考えられる。千網谷戸遺跡は出土品のすべてを確認していないので花弁系列に偏っている。谷地遺跡は一単位系列以外はほぼ同列に扱うことができる変異幅の少なさを示す。一単位系列に類する６点のうち破片であるため文様の全体を把握することができない理由で類するグループに区分したものが３点である。グラフによる土製耳飾りの系列比較は、茅野遺跡と谷地遺跡との関係性の深さを示していると読み取れる。

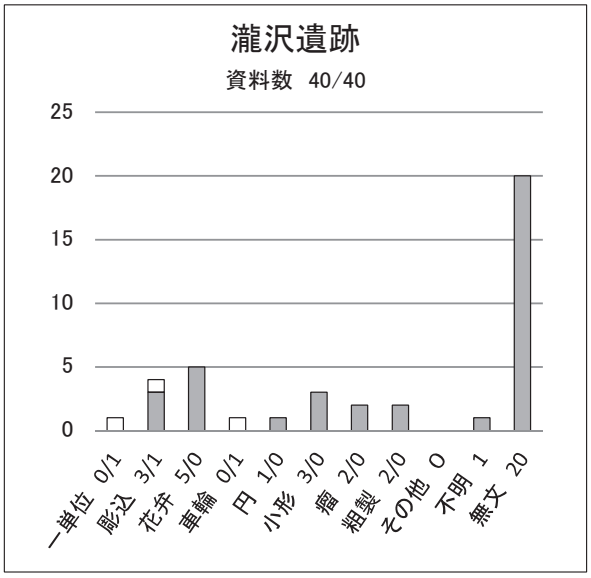
一単位系列を見ると県内の遺跡であっても類するグループが占める割合が一定以上あることを読み取











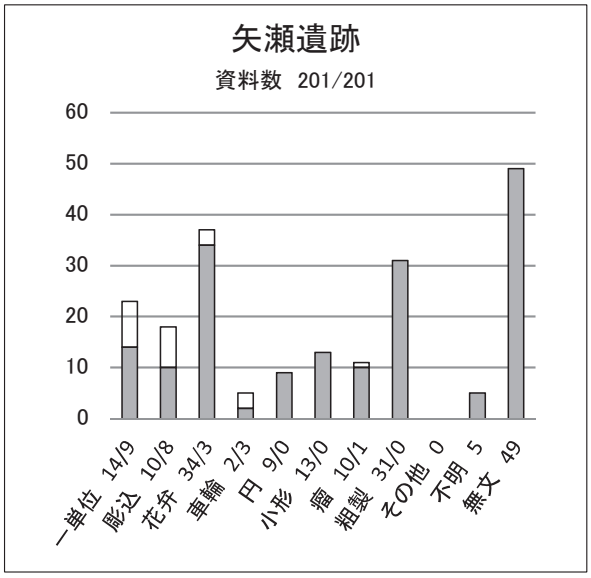


図４－２　遺跡別土製耳飾り系列グラフ（1）

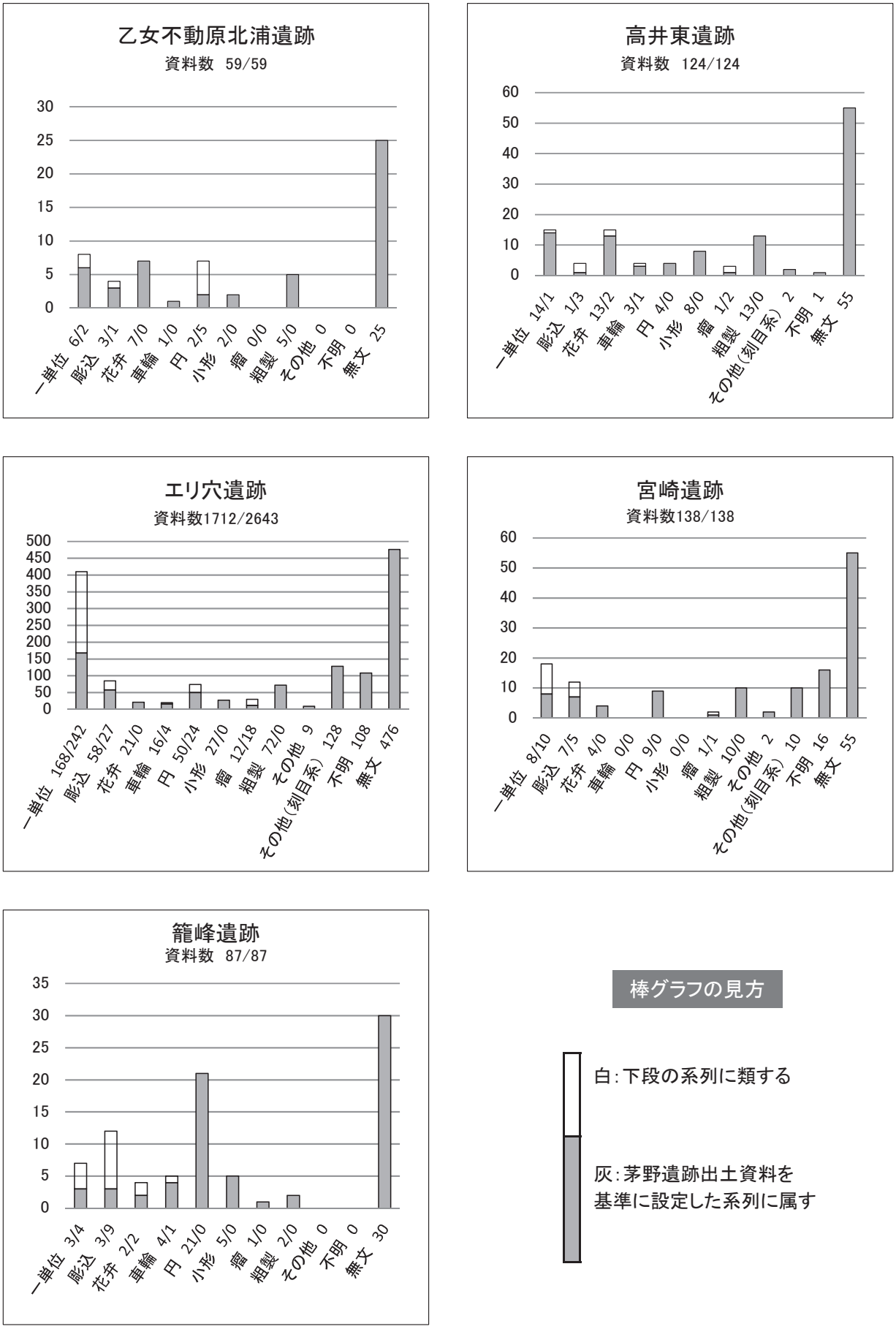


図４－３　遺跡別土製耳飾り系列グラフ（2）

ることができる。変異の幅（茅野遺跡を基準としての表現である）が大きいのは出土点数も多いエリ穴である。一単位系列に該当する耳飾りは類するものも合わせて410点を数える。類似資料のほうが多いという点は、長野方面での一単位系列のバリエーションの豊富さを示唆している。宮崎遺跡においても同様の傾向を示す。

一単位系列のなかでも花弁系列に近い、緻密な掘り込み文様を持つもの（一単位系列５類）の特徴として肩部文様帯がある。周縁部に外側に向け斜めにつけた細幅の文様帯に、玉抱三叉文など連続する三叉文と緻密な刻目を巡らせる、あるいは正面の文様の主要なポイントにあたる部分にあわせて玉抱三叉

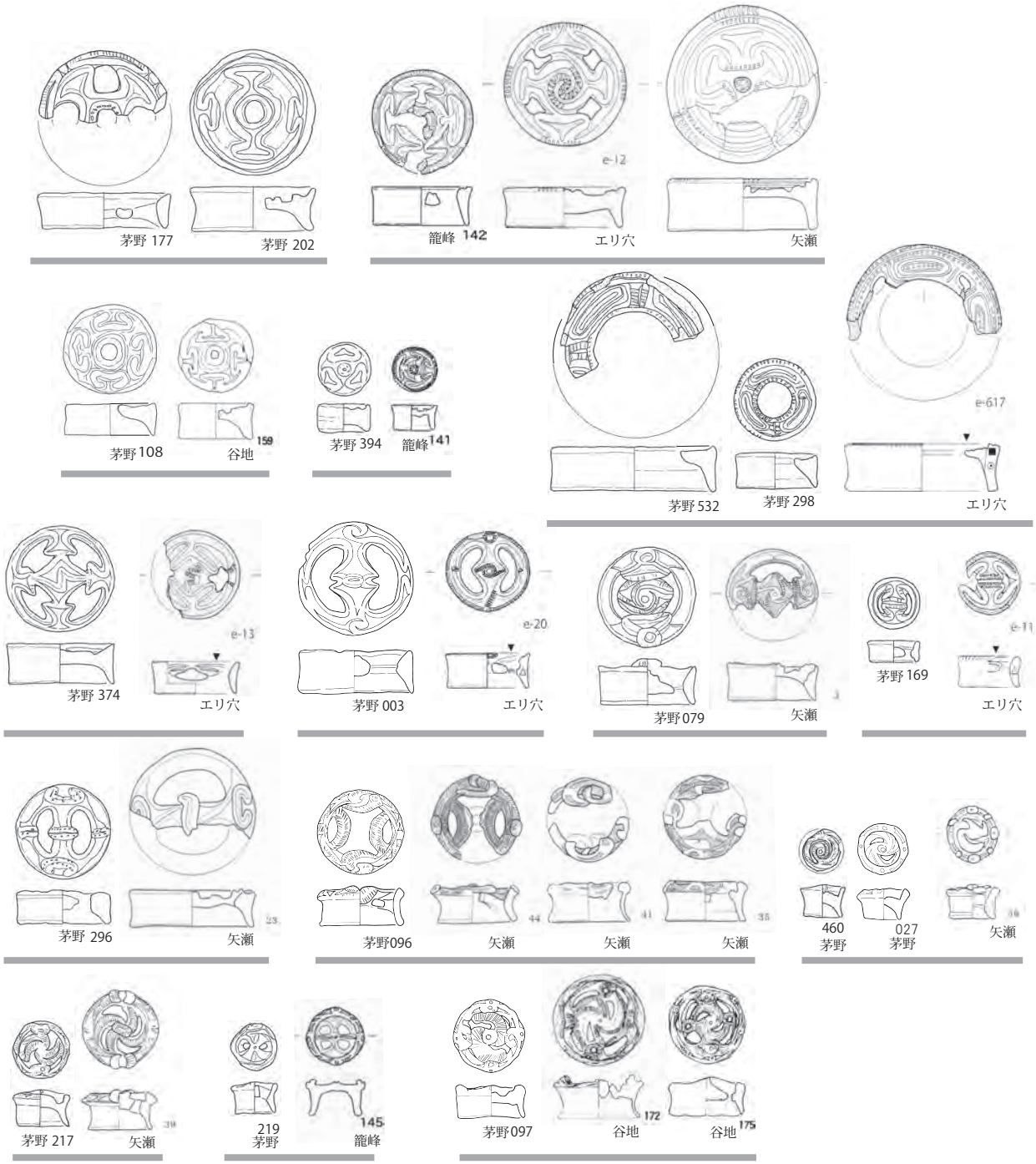


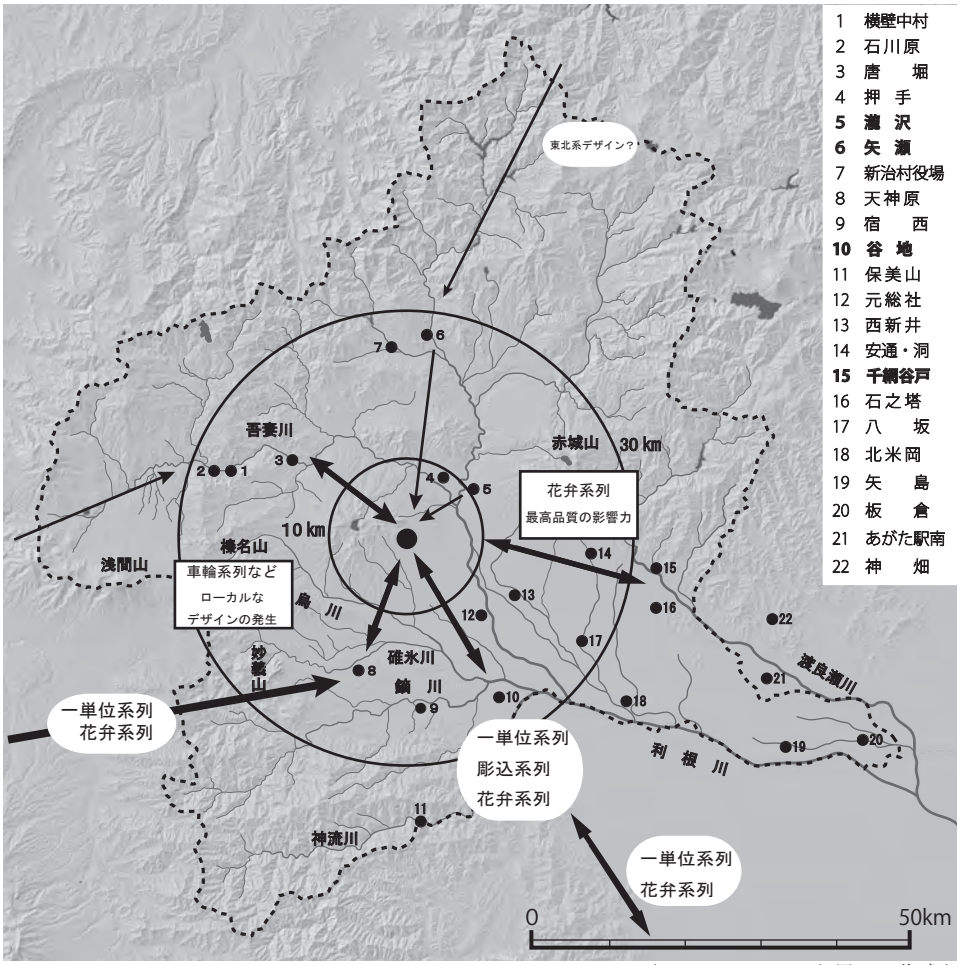
図４−４　土製耳飾りの類似するデザイン

文や三叉文を配置する。肩部文様帯を有することと緻密で華麗な優品であることは一致する。ところが他遺跡をみると、肩部文様帯を持つものは群馬県内には分布するが、高井東、乙女不動原北浦で各１点と少ない。籠峰、宮崎でも、一単位系列が168点も出土しているエリ穴でも見られない。肩部文様帯は花弁系列に多用される加飾法であるが、一単位系列に影響を与えるのは群馬県域を中心とした地域色であると推定し、今後確認を行っていく必要がある。

もう１点、一単位系列などの周縁の主要文様の外側にのみ部分的に刻目を施すものがみられる（133、461、184）。この一単位文様に付随する刻目加飾はエリ穴遺跡の一単位系列精製品に多用されている。宮崎遺跡にも２点見られる。他の遺跡で同様の加飾を有する耳飾りは矢瀬、高井東である。エリ穴など長野県域において豊富な、一単位系列のバリエーションとして生まれ、群馬県域に影響を与えた装飾の要素である可能性を推定し、採用される時期が限定的な装飾である可能性も含め、今後の検討課題としたい。

掘り込み系列を類似資料区分に注目すると籠峰遺跡に変異幅が広くなっている。個別にみると長野県域に近い籠峰遺跡では一単位系列と彫込系列とが融合している特徴を持つものが多くみられ、要素が混在していない純粋な一単位系列、彫込系列をみる機会は少ない。土製耳飾り分布域の周縁にあたる新潟県域では、掘り込み系列と一単位系列を区分して製作する規範が弱まっているかのようである。茅野遺跡以北の瀧沢や矢瀬で掘り込み系列の変異が多いことは関連があるか、今後検討する必要があるだろう。

車輪系列は茅野遺跡以外では非常に少ない。群馬県内の遺跡からは谷地で５点、瀧沢で１点、矢瀬で



（カシミール３Ｄを用いて作成）

図４－５　土製耳飾りの系列から見た茅野遺跡と主要遺跡の関わり

５点である。エリ穴で20点、乙女不動原北浦で１点、高井東で４点出土している。茅野遺跡以外の遺跡で報告されている車輪系列は、ほとんどが１類であり、２類・３類は茅野遺跡地域のオリジナル性が高い類である可能性がある。籠峰遺跡出土資料に注目すると、車輪系列１類に茅野遺跡との共通性が強くあらわれている（報告書図版141、資料№141、142）。ほかに、他遺跡出土の各類型のうち、茅野遺跡出土品と近い形状の資料を図化した（図版４－４）。矢瀬遺跡２号住居跡から出土した№３は茅野遺跡の彫込み系列に類似するブリッジ形状のもの。同じく矢瀬遺跡16号住居跡の№35は花弁系列で、茅野遺跡の№096とよく似る。また矢瀬遺跡遺構外出土土製品№14は車輪系列で、茅野遺跡177に似る。№23は堀込系列で茅野遺跡№296に似ている。籠峯遺跡では図版141の141は車輪系列で茅野の394に似ている。142、143、144が車輪系列で、茅野遺跡の177に類似する。145は花弁系列で茅野遺跡430に類するが下新井遺跡にも酷似する花弁系列がみられる。エリ穴遺跡のｅ−11は彫込系列で、茅野遺跡の№169 に近い。ｅ−12は茅野遺跡の車輪系列である№202と、ｅ−13は茅野遺跡№374、178と、ｅ−20は車輪系列であるが茅野遺跡の土製耳飾り№003と№178に類似性が認められる。ｅ−617は茅野遺跡の№298や532に似る車輪系列である。エリ穴遺跡の１単位系列には正面の外周に刻目を巡らせるものが多い。また堀込系列のブリッジ付け根の三叉文が大きく、一単位系列のそれと似ているものがみられる（ｅ−1460～ｅ−1467）。茅野遺跡の土製耳飾りは、長野県域方面から一単位系列において強い影響を受けている印象を受ける。

遠方の遺跡でも車輪系列では茅野遺跡と共通性が顕著であることがわかる。これまで、花弁系列の傾向として、広域にわたり分布していることとデザインの規格性が強いということを認識してきたが、一見派手さのない車輪系列の耳飾りにも、強い規格性があり、それゆえに遠隔の遺跡間でも共通する形態を持つものが出土する。こういった領域を越えて通用するデザインを「広域デザイン」とすると、茅野遺跡の車輪系列に分類した26点のうち４点がそれにあたる。残り22点は同じ系譜を示しつつも他遺跡出土資料と比較するとどうしても共通性がよわくなるもの、似ているけれど異なる要素も多いと言わざるを得ないものを含む群である。それを「広域デザイン」に対し「ローカルデザイン」と捉える。グラフによる他遺跡との比較で、茅野遺跡の車輪系列には他の遺跡よりも「ローカルデザイン」が豊かに展開していると読み取ることができた。土製耳飾りの分布傾向では、車輪系列はそのなかに「広域デザイン」と「ローカルデザイン」を含んでおり、花弁系列はそのほとんどが「広域デザイン」であると捉えることができる。一単位系列にみる部分的な刻目を加飾する一群は「ローカルデザイン」による装飾といえるだろう。また、同様にその他の系列にもそのなかに含む「広域」と「ローカル」を見出していく作業を行うことで、土製耳飾りの多種多様なデザインの広がりの傾向と遺跡間の影響関係を捉えることができるだろう。

参考・引用文献

月夜野町教育委員会　2005 『上組北部遺跡群Ⅱ　矢瀬遺跡』
群馬県藤岡市教育委員会　1988 『Ｃ７神明北遺跡　Ｃ８谷地遺跡　本文編』
群馬県藤岡市教育委員会　2002 『中栗須滝川Ⅱ遺跡』
松本市教育委員会　2018 『松本市文化財調査報告　№228　長野県松本市　エリ穴遺跡　遺物編１・第３分冊』
新潟県中郷村教育委員会　2000 『籠峰遺跡　発掘調査報告書Ⅱ　遺物編』
群馬県渋川市教育委員会　2008 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ』
群馬県渋川市教育委員会　2008 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅱ』
長野市教育委員会　川田土地改良区　1988 『長野市の埋蔵文化財第28集　宮崎遺跡』
小山市教育委員会　1982 『小山市文化財調査報告書第11集　乙女不動原北浦遺跡　発掘調査報告書』
埼玉県遺跡調査会　1974 『埼玉県遺跡調査会報告　第25集　高井東遺跡調査報告書』

茅野遺跡の縄文土器概観

林　　克　彦

１．出土した縄文土器とその年代

茅野遺跡では縄文時代後・晩期の住居跡が集中して検出されたＡ区と、旧河道とともに水溜め状遺構（堅果類の加工が行われていたと推定されている）が検出されたＥトレンチから多くの縄文土器が出土している。

Ａ区では、縄文時代前期の諸磯ａ式、諸磯ｂ式、中期の阿玉台式、加曽利Ｅ３式、後期の称名寺式、堀之内１式、堀之内２式、加曽利Ｂ１式、加曽利Ｂ２、加曽利Ｂ３式、高井東式、晩期の安行３ａ式、安行３ｂ式、天神原式、千網式（浮線文）が出土している。諸磯ａ式から称名寺式および千網式の出土量は少なく断片的であるが、土器の型式編年上、堀之内１式から天神原式までは型式的に連続して出土しており、特に後期後葉の高井東式中段階（安行１式並行）から晩期前葉の安行３ｂ式までの出土量が多い。

一方、Ｅトレンチでは、加曽利Ｅ式、堀之内１式、堀之内２式、加曽利Ｂ１式、加曽利Ｂ２式、加曽利Ｂ３式、高井東式、安行３ａ式、天神原式が出土しており、いずれも断片的ではあるが、加曽利Ｂ１式、加曽利Ｂ２式の出土量が比較的多い。

Ａ区とＥトレンチの出土土器の様相には若干の相違があり、時期によって、それぞれの土地の使用頻度に高低があったと考えられる。

また、茅野遺跡から出土した土器は、およそ6000年前の諸磯ａ式からおよそ2600年前の千網式まで見られることから、茅野遺跡のある場所は、断続的ながら3400年の長きに渡って人々が活動した場であったと推定される。

２．Ａ区出土の縄文土器について

茅野遺跡Ａ区には、炉の数から推定すると30軒程度の住居が構築されていたと考えられており、Ａ区出土土器は、これらの住居の使用年代を推定する根拠となる。しかしながら、群馬県域の後期後葉から晩期中葉の時期の遺跡では、時間的に前後する複数型式の土器が混在して出土することが一般的で、住居跡から出土する土器も同じ傾向を示し、時間幅の短い一括性の高い土器群が出土することは稀である。茅野遺跡の住居跡出土の土器についても、それぞれの住居跡出土遺物の項で述べられている通り、複数の型式の土器が混在して出土しており、住居の使用年代の推定を難しくしている。

ここでは、Ａ区出土土器について、個々の住居跡の使用年代を決めるための物差しとして土器を検討するのではなく、Ａ区全体の土器の様相について見ることにしたい。

先述したように、Ａ区からは前期の諸磯ａ式に始まり、晩期後葉の千網式までの土器が出土しているが、称名寺式までの出土土器は断片的であり、また、堀之内１式は埋設土器として出土したものもあるが、数量的には少なく、多くを語ることはできない。

後期中葉の加曽利Ｂ１式から加曽利Ｂ３式はやや出土量が多く、深鉢形土器のほか鉢あるいは浅鉢形土器、注口土器など複数の器種が認められる。いずれも群馬県域に一般的な特徴を持つ土器である。

後期後葉の高井東式は古段階（曽谷式並行）、中段階（安行１式並行）、新段階（安行２式～安行３ａ式並行）の変遷を辿るが（林 2008）、茅野遺跡では古段階の土器は少なく、中段階～新段階の土器が豊富である。高井東式はいくつかの類型を含む様式で、茅野遺跡では、関東地方西部域に分布する在地の

類型の他に、長野県北部から上越地方にかけて主に分布する中ノ沢Ｂ類型（高井東式新段階並行）（百瀬 2011）などが出土している。

また、高井東式に伴う土器として、南関東系の安行１式、安行２式、関西系の元住吉山Ⅱ式（あるいはⅠ式の可能性がある）、東北系の瘤付土器第Ⅲ段階、第Ⅳ段階（小林 2008）の土器が見られる。安行１式、安行２式、元住吉山Ⅱ式は断片的であるが、瘤付土器第Ⅲ段階、第Ⅳ段階の土器の出土量は多く、高井東式新段階の土器の出土量と同等か、あるいはそれを凌ぐ量である。これらの後期後葉段階の土器については後述する。

晩期前葉では、安行３ａ式、大洞Ｂ式が主体的に出土し、長野県北部を中心に分布する隆帯文系土器（中ノ沢Ｂ類型）が伴う。茅野遺跡出土土器の中には安行２式と安行３ａ式との区別が難しい土器、瘤付土器第Ⅳ段階の土器と大洞Ｂ式（あるいは大洞Ｂ式由来の安行３ａ式）との区別が難しい土器が見られることから、後期から晩期への移行期に、東北地方の土器の影響を連続的に受けながら間断なく土器が変化して行ったことがうかがわれる。

群馬県域における晩期前葉の土器については、従来、安行３ａ式に分類されてきたが、群馬県域の安行３ａ式段階の土器には南関東地方の安行３ａ式に伴う紐線文系土器（粗製土器）は組成せず、無文の粗製土器が伴うなど、南関東地方の安行３ａ式とは様相が異なる。また、大洞Ｂ式あるいは大洞Ｂ式に由来する土器が相当量伴うと考えられるが、検討できる出土資料が少なく、実態は不明な部分が多かった。茅野遺跡では当該期の土器が多量に出土しており、大洞Ｂ式あるいは大洞Ｂ式に由来する土器もバラエティに富んでいる。当該時期の土器の分析については今後の研究に待つべきところが多いが、茅野遺跡出土土器は、その研究を推進させる重要な資料になると考えられる。

茅野遺跡から出土した安行３ｂ式は安行３ａ式（大洞Ｂ式由来）からの連続性がうかがわれるものが多く、大洞 BC 式が伴う。また、北陸地方を中心に分布する中屋式（１式あるいは２式：安行３ｂ式後半から安行３ｃ式前半並行）の蓋（Ｊ2052）が出土していることが注目される。

晩期中葉は天神原式（安行３ｃ式並行）と大洞Ｃ１式が断片的に出土しているが、中部高地や南関東系の土器はほとんど認められない。また、次期の安行３ｄ式段階の土器は、図示はしていないが、16号住居跡から佐野Ⅱ式と思われる破片が出土しただけである。晩期後葉の段階もまた、千網式が数点出土しただけであり、晩期中葉以降、茅野遺跡における人々の活動が縮小していったことが推定される。

３．後期後葉土器群についての若干の考察

茅野遺跡からは後期後葉の土器が豊富に出土しており、これらの土器群について若干の考察をしておきたい。

当該期の群馬県域の在地の土器型式は高井東式である。高井東式はいくつかの類型を集合した様式であると考えられるが、各類型の検討は十分ではなく、どのような地域性があってどのような変遷を辿るのか、未だ明確になっているとは言えない状況である。これは、一括性の高い出土資料がほとんどないことに加え、周辺地域の土器が多数混在するとともに、それらの土器の影響を受けて変化をした土器が相当数存在するという当該期特有の問題が背景にある。

茅野遺跡出土の高井東式を一瞥すると、他遺跡出土の高井東式と同じように、様々な類型が認められる。この中で、安孫子昭二氏が高井東様式の第Ⅰ段階に位置付けた（安孫子 1993）埼玉県深谷市（旧岡部町）東谷遺跡出土の深鉢形土器の類型（仮に「東谷類型」と呼ぶ）に注目したい。この類型は、口縁部を山形（三角形状）の大波状に作った深鉢形土器で、その波状部に列点を伴う横方向の沈線を数条施し、文様部分の最下端を水平にしていること（文様施文域を三角形状にしていること）が特徴であ

る。また、波底部に上下２箇所を肥厚させた比較的大きめの縦瘤を貼付したものが多いことも特徴の一つとなっている。波頂部に高井東式中段階（安行１式並行）に特有の突起は付けられていない。この類型は東谷遺跡のある埼玉県北部を中心に、関東地方西部一帯から出土しており、群馬県では藤岡市の谷地遺跡などで出土している（藤岡市教育委員会 1988）。茅野遺跡では、Ｊ8004、Ｊ8033、Ｊ14023、Ｊ14024がこの類型の土器と考えられる。Ｊ8004の施文手法は東谷遺跡出土土器に似ているが、Ｊ8033では列点を伴う沈線が口縁部と頸部に分離し、波頂部下に縦刻みを施した横長の瘤が貼付されるなど異なる特徴が見られる。Ｊ14024では、文様構成はＪ8033と似ているものの、頸部の文様が列点を伴う隆帯となっており、また、Ｊ14023では列点を伴う沈線が見られず、列点を伴う隆帯になっている。口縁部文様帯下部（口縁部と頸部の境界）が隆帯化して隆帯文土器に至るという長野県の変遷観（百瀬 2011）を参考にすれば、Ｊ8004→Ｊ8033→Ｊ14024・023と変遷することが考えられ、更に列点や沈線が省略され隆帯と貼付文が主となるＪ14010や貼付文のみとなるＪ9015へと変化するのではないかと考えられる。Ｊ14010に類似した土器が、百瀬長秀氏によって波状縁隆帯文深鉢の下限水平文様タイプとして、中ノ沢Ｋ式第３段階（安行２式並行）に位置付けられている。仮称「東谷類型」の段階や時期を決定するためには、まだ根拠となるような出土事例に恵まれないが、茅野遺跡出土土器を見る限り、少なくとも１段階で終わるものではなく、複数段階にまたがる類型であると判断される。

この類型の他に、口縁部が台形状になり、口縁部に沿って１条ないし数条の沈線を施している深鉢形土器の類型にも注目したい。茅野遺跡ではＪ4013、Ｊ6010、Ｊ17053、Ｊ18006など数点が出土しているのみであるが、Ｊ17053やＪ18006のように横刻みを施した縦瘤が二つ貼付される文様要素は、安行２式や安行２式並行期の瘤付土器に認められることから、この類型の一部が安行２式並行期に位置付けられることは確かだと思われる。

もう一つ、百瀬長秀氏によって低波隆帯文タイプとして分類され、中ノ沢Ｂ類型（晩期初頭～前葉：安行３ａ式並行）に位置付けられた類型の土器にも注目したい。この類型は、波状部の単位が４単位になるものが多いという点で、高井東式大波状口縁深鉢と同じであるが、波状部の高さが低い点が異なる。口縁部文様帯の幅は狭く、文様帯の下端が無文の隆帯となっており、波頂部下の体部に２条一組の沈線による稲妻状文あるいは蛇行垂下文が施されているものが多いという特徴がある。主に長野県北部から上越地方に分布しており、群馬県でも東吾妻町の唐堀遺跡（能登ほか 1983）など長野県に近い群馬県西部域で出土している。安孫子氏はこの類型を高井東様式の第Ⅴ段階・第Ⅵ段階（安行２式～安行３ａ式並行）に位置付けており、高井東式の終末を考える上で重要な類型である。茅野遺跡では、Ｊ4014、Ｊ4016、Ｊ12010、Ｊ13004、Ｊ15059、Ｊ17066、Ｊ18009、Ｊ18029、Ｊ18078など複数の住居跡から出土している。また、百瀬氏が中ノ沢Ｂ類型に位置付けた平縁隆帯文土器も多数出土していることから、この時期に長野県北部の人々との頻繁な交流があったことが推定される。

茅野遺跡からは、後期後葉の南関東系の土器も出土しているが、曽谷式に比定される土器は認められない。安行１式は波状口縁深鉢のＪ2018、Ｊ14001、Ｊ14025などのほか、瓢形のＪ14009、粗製土器のＪ7028が見られ、安行２式も波状口縁深鉢のＪ2019、Ｊ14003、Ｊ18043などのほか、粗製土器のＪ6006、Ｊ6007、Ｊ8029などが見られる。

後期後葉の土器、特に安行２式並行期の東北系の土器（瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ段階）の出土量は極めて多い。在地の土器である高井東式の量に相当するか、あるいはそれを凌駕する量が出土している。器種は波状口縁深鉢、平口縁深鉢が主で、注口土器も一定量伴うが、瘤付土器第Ⅳ段階かと思われる香炉形土器（Ｊ15011）も１点出土している。瘤付土器の中には、瘤付土器に安行式の要素が取り込まれた折衷的な土器が存在することが知られているが（小林 2008）、茅野遺跡でも瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ

段階の土器と安行２式の折衷的な土器が見られる（Ｊ1001、Ｊ18061など）。また、小林圭一氏が、交易品として広範囲の拡がりを有し、広域編年を考察する上での指標となっていると指摘している瘤付土器第Ⅳ段階の「高石野類型注口土器」（東北南半～東関東に主体的に分布）が出土している（Ｊ18070のほかＪ18035なども同類型だと思われる）ほか、同様の文様を持つ浅鉢あるいは鉢形土器（Ｊ9018）が出土していることは注目される。なお、同類型の注口土器は、群馬県域では藤岡市の中栗須滝川Ⅱ遺跡で口縁部の破片が出土している（藤岡市教育委員会 2002）。

瘤付土器としてもう一つ注目すべき土器は８号住居跡から出土した平縁深鉢形土器のＪ8049である。頸部にレンズ状の磨消枠状文を施し、その連結部に２個一対の耳状（２個合わせてＸ状）の貼付文を施した文様構成は、鈴木加津子氏が「山辺沢式日向南系列」として類型化した土器（鈴木 1994）の文様に類似し、器形も同類型の土器と同じである。鈴木氏が提唱した「山辺沢式日向南系列」では枠状文を施した文様帯の直下に磨消入組文あるいは磨消クランク文を施した文様帯が配置されるが、本土器には入組文あるいはクランク文は認められない。その点から全く同じと言うことはできないが、この土器を「山辺沢式日向南系列」あるいは同類型に由来する土器と言うことはできると考える。「山辺沢式日向南系列」は福島県から宮城県を中心に出土しており、群馬県内では初めて出土したものであろう。

後期後葉の関西系土器についても触れておきたい。７号住居跡から出土したＪ7002は、波状口縁の深鉢形土器で、口縁部をくの字に屈曲させ２条の沈線を施している。注目すべきは波頂部の文様で、端部に刺突を伴う縦沈線が施されている。このような文様要素、文様表現の土器は高井東式には認められず、関西地方を中心に分布する元住吉山Ⅱ式（曽谷式並行）に認められることから、本土器は元住吉山Ⅱ式だと考えられる。同じ様に波頂部に縦方向の短沈線を施しているＪ11004も元住吉山Ⅱ式の可能性がある。波頂部に、端部に刺突を伴う縦方向の短沈線を施した土器は関東地方西部域に点々と発見され、群馬県域では藤岡市の谷地遺跡で出土している。

以上、茅野遺跡で出土した後期後葉の土器の一部について検討した。全ての土器を検討した訳ではないが、後期後葉段階には、東北地方から関西地方の土器まで広い範囲の多様な土器がもたらされていたことが分かる。このような広範囲の地域の土器の出土は、後期中葉の加曽利Ｂ３式期には見られなかったことで、その背景には、後期後葉になって人々の交流あるいは人と人とを結ぶネットワークが拡大したことがあったと推定することができるであろう。

４．茅野遺跡出土土器の考古学的意義

最後に、茅野遺跡から出土した土器の考古学的意義について述べておきたい。

一つは土器編年研究上の意義である。先述したように、茅野遺跡からは後期後葉から晩期前葉の土器が豊富に出土しており、その内容も多様である。この時期の土器型式は、高井東式（古、中、新段階）、安行３ａ式、安行３ｂ式で、高井東式については一部の類型について検討したが、検討できなかった多数の類型が残っており、今後、他の遺跡出土土器との比較検討によって高井東式の研究を更に深化させることができると考えられる。

また、群馬県域における晩期前葉の土器については、従来、藤岡市の谷地遺跡や桐生市の千網谷戸遺跡など数遺跡でまとまって出土している以外は、断片的な出土資料しかなく、当該期の土器研究はなかなか進まなかった。しかし、茅野遺跡からは当該期の安行３ａ式、大洞Ｂ式あるいは大洞Ｂ式由来の土器が質量共に豊富に出土しており、今後、茅野遺跡出土土器を分析することによって、群馬県における当該期の土器研究が大きく進展することが期待される。

もう一つは、地域間交流の指標としての意義である。先述したように、茅野遺跡からは、後期後葉段

階以降、東北方面から関西方面まで多方面の土器が出土しており、どの地域の土器がもたらされたか、そしてその背後にある人の移動（地域間交流）がどのようなものであったかを検討することが可能である。

茅野遺跡から出土した他地域の土器を時期別に見ると、高井東式古段階には元住吉山Ⅱ式が伴い、中段階には安行１式が伴う。高井東式新段階には安行２式、中ノ沢Ｂ類型の一部、瘤付土器第Ⅲ段階・第Ⅳ段階の土器が伴い、特に瘤付土器の出土量は高井東式新段階の土器を凌駕するように見えるほどである。晩期前葉の安行３ａ式段階は、安行３ａ式に大洞Ｂ式あるいは大洞Ｂ式に由来する土器が多量に組成し、中ノ沢Ｂ類型が伴う。東北系の土器を大量に伴うという傾向は前時期（安行２式並行）からの連続性が窺われる。

以上のような出土土器の状況から、後期後葉の高井東式新段階（安行２式並行）から晩期前葉の安行３ａ式期に、東北方面、南関東方面、長野方面など四方から活発に人が往来した状況が推測される。後期後葉から晩期前葉の段階の遺物が多量に出土する遺跡は、群馬県域においては、藤岡市の谷地・中栗須滝川Ⅱ遺跡、桐生市の千網谷戸遺跡などに限られており（特に谷地・中栗須滝川Ⅱ遺跡の状況は茅野遺跡の状況によく似ている）、また、それらの遺跡では周辺地域の土器の出土が顕著に見られることから、茅野遺跡を含め、地域間交流のセンター的な役割を担っていたと推定することができるであろう。

茅野遺跡出土土器の研究は緒についたばかりであるが、茅野遺跡出土土器はそれらの研究を推進させる力を内包しており、今後、他遺跡出土土器との比較研究により、編年研究や地域間交流研究が大いに深化されることが期待されるのである。

参考文献

安孫子昭二　1993　「「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分布」『東京考古』11　東京考古談話会
小林圭一　2008　「瘤付土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
鈴木加津子　1994　「「山辺沢式」の埋甕・素描」『利根川』15　利根川同人
能登　健ほか 1983　『唐堀遺跡』吾妻町教育委員会
林　克彦　2008　「高井東式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
藤岡市教育委員会　1988　『Ｃ７神明北遺跡 Ｃ８谷地遺跡』
藤岡市教育委員会　2002　『中栗須滝川Ⅱ遺跡 ―縄文時代集落編―』
百瀬長秀　2011　『中村中平遺跡 遺物編』飯田市教育委員会

茅野遺跡の後・晩期の石器について

大工原　　豊

１．石器組成の特徴

茅野遺跡からは後期後葉～晩期前葉を主体とした多種多様な石器が多量出土している。これらは打製系列（Ａ類・Ｂ類）、使用痕系列（Ｃ１類・Ｃ２類）、複合技術系列（Ｄ類・Ｅ類・Ｆ類）に分類できる。そして、さらに打製系列は押圧剥離系列（Ａ類：石鏃・石錐等）と直接打撃系列（Ｂ類：打製石斧等）に細分され、使用痕系列は形状選択系列（Ｃ１類：石皿・凹石・磨石等）と形状非選択系列（Ｃ２類：敲石・砥石等）に、複合技術系列は非機能系列（Ｄ類：石棒・石剣・岩版等）・機能系列（Ｅ類：磨製石斧・石錘）・装身系列（Ｆ類：石製装身具類）に細分することができる（大工原 2008等）。本遺跡での各系列及び各器種の在り方は、当期の群馬地域においては、ごく一般的なものであると言えよう。すなわち、石器組成をみる限り、本遺跡は一般的な集落遺跡であり、一般的な生業活動が行われていたと判断される。

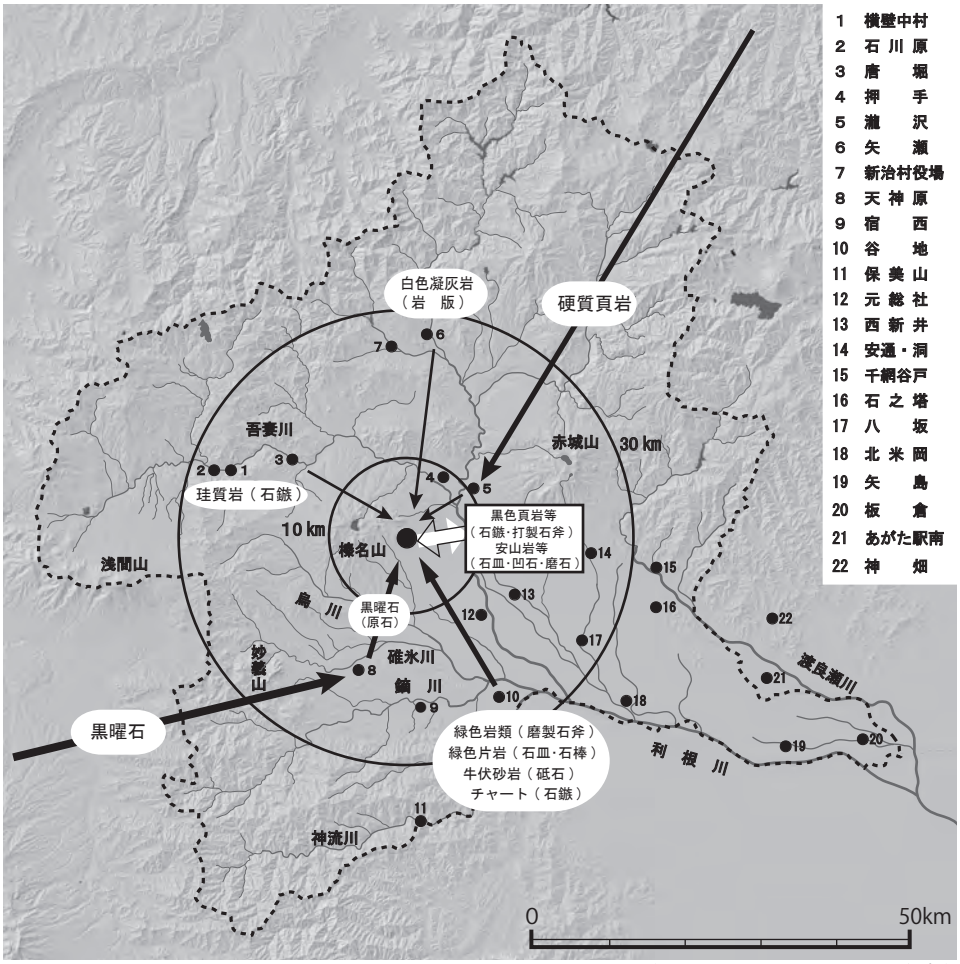
２．石鏃模造品について

晩期前葉の押圧剥離系列は非常に特徴的な在り方を示している。すなわち、石鏃と石鏃模造品が大量に出土している点である。こうした状況は西関東から甲信地域にかけて広範に認められる現象である。石鏃の激増の大きな要因は、石鏃模造品の大量製作である。これらは従来石鏃未成品とされていたものであるが、一般的な石鏃とは異なる工程で製作されており、別の器種として扱うべき石器である。すなわち、石鏃の製作では薄手の素材剥片から押圧剥離により調整加工を行って成品化しているのに対し、石鏃模造品では厚手の素材剥片から両極技法による直接打撃で調整加工を行っており、押圧剥離は行われないか、行われたとしても極めて限定的である。後者では先端が尖っていないものが多く、茎部も丁寧に作出されていないものも多いので、実際に矢に装着して使用することは困難である。つまり、これらは実用的な石鏃の製作途中で放棄されたものではなく、これ自体が完成品なのである。

したがって、石鏃模造品の用途は、実用ではなく儀礼・祭祀に用いられた石器と考えた方が矛盾ないのである。儀礼・祭祀の中での模造弓矢を用いる儀礼は、神社の破魔矢をはじめ、葬送儀礼で用いる民俗事例も広く存在している。これらの儀礼行為と直接結びつけることはできないかもしれないが、石鏃模造品が出現した晩期前葉はこれまで行われていた細形石棒を用いた祭祀が衰退する時期である。それに代わる新たな祭祀行為として石鏃模造品をもちいた「模造弓矢祭祀」が盛行したと考えられる。

３．石器・石器石材の搬入経路について

茅野遺跡で出土した石器及び石器石材の入手先と搬入経路について検討してみたい（図４−６）。本遺跡から約5.5㎞東方に利根川があり、ここに転石として存在する黒色頁岩・黒色安山岩・安山岩などが本遺跡の石器石材の大部分を占めている。黒色頁岩は押圧剥離系列の石鏃・石錐などと、直接打撃系列の打製石斧の主要な石材として用いられている。前者は一連の製作工程を示す石核・剥片・石器が揃っているので、転石として入手して遺跡へ搬入されたものである。これに対し、後者は一連の製作工程を示す資料が遺跡内には存在していないので、転石を河原かその近くで剥片剥離作業が行われ、素材剥片・半成品・完成品として遺跡へ搬入されたものと推定される。また、石皿・凹石・磨石・敲石など使用痕系列の石器は、素材となる手頃な転石を遺跡へ搬入していたと考えられる。



（カシミール３Ｄを用いて作成）

図４－６　群馬県の主要遺跡と茅野遺跡に搬入された石器石材（晩期）

黒曜石の搬入経路については、「茅野型石鏃の研究」（大工原 2016：本書所収）で詳述しているので、繰り返し述べないが、「黒曜石流通の大動脈」上に位置する天神原遺跡（茅野遺跡23.3km：以下同）から間接的に搬入されたものであろう。ここでの流通形態は原石（小形原石：30～100ｇ・超小形原石：30ｇ以下）であったと推定される。

また、東北産の硬質頁岩は、利根川東岸に位置する瀧沢遺跡（8.7km）が流通拠点であり、ここから搬入されたものであろう。茅野遺跡に剥片類がほとんど存在していないことから、完成品の石鏃として搬入されたものと推定される。

珪質岩・珪質流紋岩は吾妻川流域で転石として入手可能な石材であり、吾妻川流域の同時期の遺跡では石鏃・石錐など押圧剥離系列の石器として多用されている。本遺跡から吾妻川までは最短6.2kmなので、直接入手することも可能であるが、剥片類がほとんど存在しないので、完成品として唐堀遺跡（20.6km）などから完成品として搬入された可能性が高い。

白色凝灰岩製の岩版は利根川上流域で産出することが判明しており、流れ下るにつれてサイズが小さくなることが明らかにされている（角田 2010）。本遺跡では55点出土しており、最大20.5cmの資料が存在していることから、矢瀬遺跡（27km）など利根川上流域の遺跡から搬入されたものと推定される。また、黒色頁岩製の安通型石鏃が２点出土しているが、石材と形態からみると矢瀬遺跡出土例に類似しているので、岩版と同様矢瀬遺跡から搬入された可能性が高い。

磨製石斧は緑色岩類製（超塩基性岩を含む）のものが多い。また、石棒・石剣は緑色片岩製のものが

多い。そして、砥石（石庖丁様石器を含む）は牛伏砂岩製のものが大部分である。これらは鏑川・神流川流域で転石として存在している石器石材である。こうしたことから谷地遺跡（22.9km）など群馬南部地域の遺跡から完成品として搬入されたものと判断される。また、結晶片岩の転石（棒状礫）も多く出土しているし、結晶片岩を混入する土製耳飾も多数出土している。しがって、石器及び石材の流通からみる限り、群馬南部地域とは非常に密接な関係が構築されていたことが分かる。

なお、チャート製の石鏃は剥片類がほとんど存在しないことと、形態的に茅野遺跡の主体的な形態と異なるので、完成品として搬入されたものと判断される。搬入先の候補としては、鏑川・神流川流域の谷地遺跡と、渡良瀬川流域の千網谷戸遺跡（29.7km）が上げられる。上述のように茅野遺跡からは群馬県南部で産出する石材が多く搬入されているので、前者の可能性が高い。

以上のように、茅野遺跡に搬入された石器及び石材はすべて半径30km圏内に存在する遺跡からもたらされた可能性が高いことが判明した。また、地形を観ると茅野遺跡と谷地遺跡との間には、大きな自然障壁が存在しておらず、重い石材でも円滑に運搬することが可能であることが分かる。それに対し、ほかの遺跡との間には、山や深い谷などの自然障壁が多く存在しており、実際には移動距離はさらに長く、運搬コストも大きい。

このように後・晩期には、それぞれの集落が特産物・資源をもち、それが流通するネットワークが形成されていた。少量搬入された完形の石器は、集落相互の関係性のなかで交換されたものと推定される。しかし、遠隔地から搬入された黒曜石や硬質頁岩や群馬県南部地域の石器などは交易によってもたらされたものと考えられる。そして、すべての集落が等質的に特産物・資源を有していたわけではない。谷地遺跡のように石材資源に恵まれたムラがある一方、特別な資源を持たないムラも多数存在していたと考えられる。そのため、茅野遺跡や千網谷戸遺跡では土製耳飾を製作することにより、特産物を創造していたと考えられる。現代流に言えば、「地域興し」としてとらえることができるのである。

茅野型石鏃の研究

大工原　　豊

要　　旨

茅野遺跡は群馬県榛名山麓に所在する縄文時代後・晩期の集落遺跡である。この遺跡では晩期前葉の時期に特徴的な細身の凸基有茎鏃が製作されていたことが判明した。これらは黒曜石を素材とし、斉一性の強い形状を有していることから、茅野型石鏃として型式設定した。この石鏃の製作技法を検討すると、一部は30ｇ以下の超小形原石に直接押圧剥離を加えて製作されている。こうした石材利用方法は、極めて特異であり、その背景には黒曜石の流通事情が大きく関係している可能性が高い。おそらく、黒曜石流通網の末端に位置していたことによるものと考えられる。そこで、群馬県内の同時期の主要遺跡における同様な石鏃の存在を確認してみると、茅野型石鏃がまとまって出土する遺跡は存在していないことが分かった。さらに、遺跡ごとの黒曜石の保有量を調べると、群馬県南半部の遺跡では比較的潤沢に黒曜石が流通しているのに対し、北半部の遺跡では保有量が非常に少ないことが分かった。特に、北半部・利根川以東の遺跡では、東北地方原産の珪質頁岩を多く保有しており、黒曜石に依存しない地域が存在していることが判明した。この地域では、大形の安通型石鏃を範型とした在地石材及び珪質頁岩製の凸基有茎鏃が製作されている。したがって、茅野型石鏃を製作する榛名山麓の茅野遺跡は、黒曜石流通の末端に存在する限界集落として位置付けられるとともに、地域集団ごとに異なる型式の石鏃が製作されていたことも判明した。

キーワード：縄文時代晩期，茅野型石鏃，石鏃型式，黒曜石流通，地域集団

１．はじめに

群馬県の中央部には東西に赤城山と榛名山が利根川を挟むかたちで対峙している。その山麓にはいくつかの縄文時代後・晩期の大規模な遺跡が点在存在している。榛名山東南麓に位置する茅野遺跡はその一つである。この遺跡の概要はすでにされているが、土製耳飾りが大量に出土していることで著名である（榛東村教育委員会 1991）。その後、遺構編（榛東村教育委員会 2005）は刊行されたが、遺物編は未刊行である。そのため、今回筆者を研究代表とする科研費事業の調査研究の一環として、茅野遺跡出土の石鏃についての検討を行った。その結果、他の遺跡では見られない特徴的な黒曜石製の石鏃が多数存在していることが確認された。これらについては茅野型石鏃と呼称してその概要を述べている（大工原 2014，2015）。本論ではさらに詳細に検討し、茅野型石鏃の型式学的特徴を明らかにし、正式に型式設定するとともに、後・晩期における黒曜石流通の問題や、地域集団相互の関係について述べることにする。

２．茅野遺跡出土の石鏃の概要

前述のように遺物編の報告書が刊行されていないため、詳細は示し得ないが、実見した所見について述べておく。茅野遺跡から出土した石鏃・石鏃未成品は、約700点である。これを形態別にみると、その大部分は有茎鏃であり、凸基有茎鏃が主体を占める。これ以外にいわゆる石鏃未成品も多数存在している。また、使用されている石材をみると、利根川流域で採取可能な黒色頁岩が多用されており、それ以外に黒色安山岩・チャートといった在地石材が次いで多い。黒曜石は約50点であり、全体の６～７％を占めている。また、東北系の珪質頁岩も少量含まれている。このように、石鏃が多量出土することや

形態的特徴、石材利用の特徴は、晩期前葉の群馬中部地域では一般的傾向と言える（大工原・林 1995；大工原 2003）。

また、本遺跡では黒曜石産地推定のための蛍光Ｘ線分析が実施されている。それによれば、晩期前葉（安行３ａ～３ｂ式期）の住居址（16号住・18号住）出土の剥片・石核・原石51点が分析されており、星ヶ塔40点、小深沢（和田峠）８点、麦草峠１点、板山１点、不明１点である。全体の78.4％が星ヶ塔である（建石ほか 2011）。星ヶ塔が卓越する傾向は、晩期前葉の群馬地域の一般的傾向と合致している（大工原 2011）。

以上のように、茅野遺跡の石鏃は統計学的・量的観点から一瞥した限りにおいては、さしたる特徴を有していないように見える。しかし、型式学的・質的観点から検討すると、茅野遺跡の黒曜石製石鏃の中には大きな特徴を有する一群が存在しているのである。

３．茅野型石鏃の特徴

茅野遺跡には、形態的斉一性の強い黒曜石製の石鏃12点（図４－７　１～12）と、その未成品３点（同図13～15）の計15点が存在している。このうち縄文時代の住居址出土例は11点あり、10点は晩期前葉の安行３ａ～３ｂ式段階の住居址（２号住・４号住・８Ａ号住・15号住・16Ａ号住）である。また、残り１点は後期後葉の高井東式段階の住居址（13号住）から出土しているが、ここでも安行３ａ式土器が混在している。[1] したがって、これらの石鏃は晩期前葉（安行３ａ～３ｂ式期）にほぼ限定される

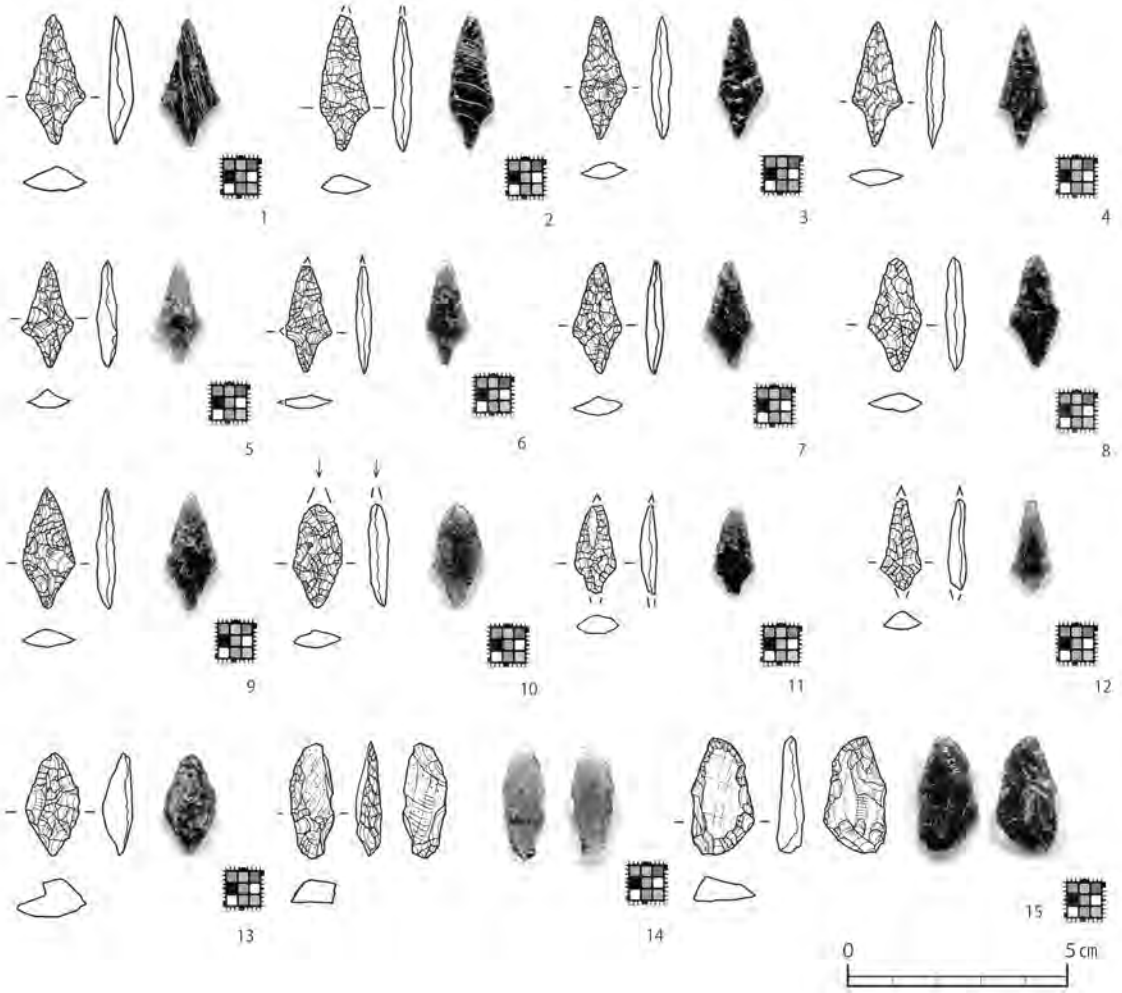


図４－７　茅野遺跡出土の茅野型石鏃とその未成品

と考えて良かろう。

次に、石鏃を技術形態学的に検討してみたい。縄文石器の型式設定の方法としては、石器製作工程全体から特徴を抽出し、製作工程で剥片剥離される器種群に対して「式」を設定する方法と、定型化した器種のみを対象として「型」を設定する方法がある（大工原 2008）。ここでは、石鏃に対して「型」を認定する方法を用いることにする。この場合、形状・製作技術・石材における共通の特徴を抽出することにより、型式を設定することが可能となる。

まず、形状についてみると、いずれも凸基有茎鏃であり、大きさの違いによりやや大きい１形態（１～４）と、やや小さい２形態（２～12）に分類することができる。１形態は長さ28～31㎜、幅11～14㎜、厚さ３～５㎜、重さ0.8～1.2ｇである。また、２形態は長さ24～28㎜、幅９～12㎜、厚さ３～４㎜、重さ0.6～1.0ｇである。いずれの形態も極めて斉一性が高い細身の石鏃であることが分かる（図４-８）。また、両形態とも基部側縁部が単純に屈曲するものと、突出するものが存在するので、さらに細分することが可能である。

晩期前葉においては、凸基有茎鏃が最も主要な形態であることは、すでに指摘しているとおりである（大工原・林 1995；大工原 2003）。しかし、周辺遺跡の黒曜石製の凸基有茎鏃は、もう少し幅広で小形の形態（長さ18～24㎜）が一般的であり、これらの資料はそれに比べると大形・細身であることが特徴である。

欠損率は33％である。御堂島正の実験（御堂島 1991）や橋詰潤の刺突具に残された衝撃剥離痕の分析（橋詰 2009,2014）によれば、先端部や基部に折れ、彫器状剥離、縦溝状剥離が認められるものは、動物の骨など硬いものに命中した際に生ずる衝撃剥離と推定されている。対象とした石鏃の中では、10には先端部に縦溝状剥離が認められるが、それ以外の資料では先端部と基部がわずかな欠損（折れ・潰れ）であり、使用時の衝撃剥離といえるものとは言い難い。おそらく、縄文人が長期間保持している間に生じた欠損、あるいは調査過程の欠損である可能性が高い。なお、御堂島によれば神奈川県早川天神森遺跡（中期後葉）では、黒曜石製の石鏃56点中42点が欠損しており、うち10点に衝撃剥離が観察されたとされる（御堂島 1991）。また、群馬県天神原遺跡ではほぼ同時期の晩期前葉を主体とした有茎鏃の欠損率は、凸基有茎鏃：44.2％、平基有茎鏃：58.5％、凹基有茎鏃：76.4％であり、凸基有茎鏃が他形

表４-１　茅野型石鏃一覧表

No.	遺跡名	器種	形態	石材	出土位置	帰属時期	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(g)	備　考
1	茅　野	石鏃	1	Ob	16A 住	安行3a ～3b	30	14	5	1.2	重文
2	〃	石鏃	1	Ob	2住	安行3a ～3b	(31)	11	4	(1.0)	先端欠損
3	〃	石鏃	1	Ob	F-17		28	11	4	0.9	重文
4	〃	石鏃	1	Ob	2住	安行3a ～3b	29	12	3	0.8	重文
5	〃	石鏃	2	Ob	2住	〃	24	12	4	0.6	重文
6	〃	石鏃	2	Ob	H-13		(24)	(10)	4	(0.6)	先端・側縁部欠損
7	〃	石鏃	2	Ob	8A 住	安行3a ～3b	26	12	4	0.8	重文
8	〃	石鏃	2	Ob	13住	高井東	26	12	4	0.8	重文
9	〃	石鏃	2	Ob	E-16		28	12	4	1.0	重文
10	〃	石鏃	2	Ob	16A 住	安行3a ～3b	(24)	11	4	(0.9)	先端衝撃剥離　重文
11	〃	石鏃	2	Ob	15住	〃	(20)	9	3	(0.4)	先端欠損・原礫面有　重文
12	〃	石鏃	2	Ob	15住	〃	(21)	10	4	(0.6)	先端・基部欠損　重文
13	〃	石鏃未成品	2	Ob	16A 住	〃	23	13	6	1.3	重文
14	〃	石鏃未成品		Ob	B 区一括		27	10	5	1.4	超小形原石素材　重文
15	〃	石鏃未成品		Ob	4住	安行3a ～3b	26	15	5	2.0	超小形原石素材　重文
16	安通・洞No.2	石鏃	2	Ob	C-6a Ⅳa 層		22	10	4	0.5	
17	〃	石鏃	2	Ob	C-7b Ⅲc 層		(16)	12	4	(0.6)	先端・基部欠損
18	横壁中村	石鏃	2	Ob	29区 R-1G		(23)	11	4	(0.7)	基部欠損

態に比べて欠損率が最も低い。その要因は「未成品が含まれている可能性があり、そのために欠損率が低い」と推定されている（安中市教育委員会 1994）。この中には製作時の欠損も含まれていると推定されるが、今回対象とした茅野遺跡の石鏃でも未成品が含まれており、条件は同じである。それでも対象とした石鏃の欠損率が天神原遺跡の石鏃よりも低いことは明らかである。以上のことから、一般的な石鏃に比べ使用頻度は低かったと言えよう。

次に製作技術について検討してみよう。その特徴は石鏃未成品（13～15）の観察により、ある程度うかがい知ることができる。14・15はいずれも表裏両面に剥離面状の原礫面が残されており、板状の超小形原石（ズリ）が素材として用いられている。薄い板状原石に対し、いきなり押圧剥離を行い、石鏃を製作しようとしている。完成品の中にも11のように表面に原礫面が残されているものが存在しており、同様の方法で製作されていた可能性もある。また、平凡な両面交互剥離による押圧剥離技術で調整加工が行われているが、断面形が整ったレンズ状を呈しており、やや精緻に仕上げられている。特に、４・９は精緻であり、技術上級者により製作された範型に忠実な石鏃と言えよう。

ここで特筆すべきは、石鏃素材剥片を作出する一次剥離工程が存在せず、超小形原石にいきなり押圧剥離による調整加工を施して石鏃を製作する特殊な技法が認められることにある。当期の群馬地域において、黒曜石に対してこのような製作技法は極めて稀有なものであり、ほとんど類例がない。製作技術上の大きな特徴である。[2)]

なお、超小形原石とは30ｇ程度以下の原石であり、これらからは４～10ｇほどの幅広剥片（石鏃素材剥片）を作出することはできない。しかし、こうした超小形原石が後・晩期では末端消費地まで流通していたことが確認されているものの、剥片剥離作業が行われることなく、ほとんどは一度も剥離されることなく廃棄されているのである（大工原 2007，2011）。また、後・晩期の超小形原石を産地分析したところ、星ヶ塔・和田峠・麦草峠が確認されており、特定の原産地に限られるものではないことも判明している（建石ほか 2011；大工原 2011）。最初に述べているように、これらの石鏃はすべて黒曜石製である。これだけでも石材の上で共通性を有していると言えるが、さらに詳細に確認してみたい。今回検討対象とした資料のうち２点を除き、重要文化財に指定されているため、直接蛍光Ｘ線分析を行うことができなかった。しかし、前述したように同時期の住居址出土の黒曜石について蛍光Ｘ線分析を実施しており、８割近くは星ヶ塔である（建石ほか 2011）。肉眼観察でも星ヶ塔遺跡の採掘原石の特徴である「透明系Ｂ類」（宮坂 2014）に分類される縞入りの黒曜石製のものが４点存在する（同図１～４）。これらはいずれもやや大形の１形態であり、共通性が認められる。したがって、これらの石鏃の大部分も星ヶ塔の黒曜石が用いられていたと考えて間違いなかろう。

以上のように、茅野遺跡出土の斉一性の高い黒曜石製の凸基有茎鏃は、形状・技術・石材の面から強い共通性有していることが確認された。そこで、これらの石鏃を茅野型

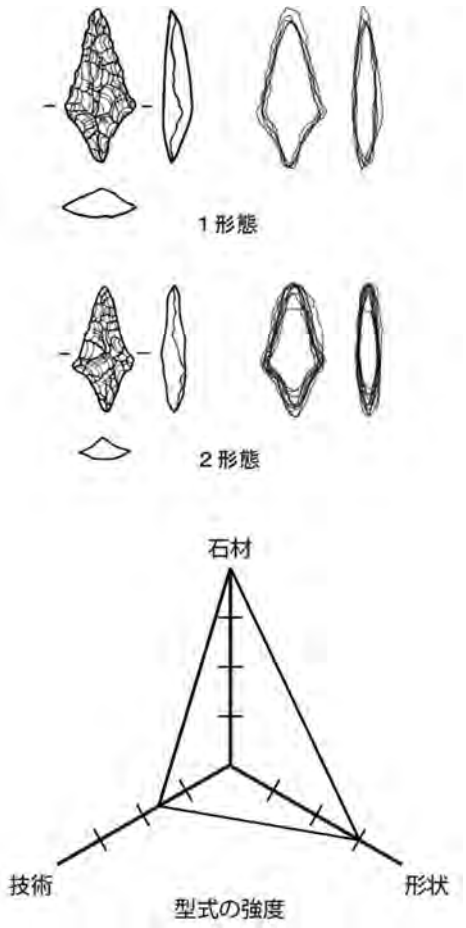


図４－８　茅野型石鏃の半径と形式の強度

石鏃として型式設定することにする。そして、その特徴は次のとおりである。

石材：稀少石材である黒曜石を用いており、その中でも星ヶ塔産の黒曜石が多用される。なお、この型式は黒曜石製であることが必要条件である。

①形状：細身の凸基有茎であり、やや大形の１形態とやや小形の２形態が存在し、いずれも斉一性の強い範型を有している（図４－８）。同時期の周辺遺跡の黒曜石製の石鏃に比べ、やや大形・長身であることも特徴である。

②技術：調整加工段階の押圧剥離技術は平凡であるが、断面形はレンズ状を呈しており、やや精緻に仕上げられている。また、板状の超小形原石（ズリ）を素材とし、いきなり押圧剥離を行って石鏃を製作する技法（カヤノ技法）が認められる。

これを勘案すると、茅野型石鏃の型式強度は図４－８のレーダーチャートとして示すとことができる。原石からいきなり押圧剥離を行うカヤノ技法の技術的特徴は大きいのである、完成品では原礫面が除去されているものがほとんどであり、この技法を確認することは困難である。したがって、型式設定の技術指標としての評価は低くせざるを得ない。

４．周辺遺跡における茅野型石鏃

それでは、周辺遺跡では茅野型石鏃はどの程度存在しているであろうか。当期の遺跡では数百～数千という膨大な数量の石鏃が出土しており、未報告資料も多いため、すべてを網羅的に確認することはできなかった。それでも報告書が刊行されている横壁中村遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013)、瀧沢遺跡（渋川市教育委員会 2008ａ，2008ｂ)、安通・洞№２遺跡（前橋市教育委員会 2013)、矢瀬遺跡（月夜野町教育委員会 2005)、谷地遺跡・中栗須滝川Ⅱ遺跡（藤岡市教育委員会 1982，1988，2002)、天神原遺跡（安中市教育委員会 1994）と、一部報告されている千網谷戸遺跡（薗田 1972；千網谷戸遺跡調査会 1978；桐生市教育委員会 1977，1980，1991)、西新井遺跡（設楽 1984，2012；前橋市教育委員会 2014)、石之塔遺跡（藪塚本町教育委員会 1987）については、文献及び実見調査することにより類例の渉猟・探索を行った。しかし、やや小形・幅広形態の凸基有茎鏃は多くの遺跡で確認されるものの、茅野型石鏃の類例はほとんど確認することができない。やはり、茅野遺型石鏃は茅野遺跡に固有の型式であると判断されるのである。

それでも、わずかに茅野型石鏃を周辺遺跡で確認することができた。赤城山南麓に位置する安通・洞№２遺跡において２点、吾妻川流域の横壁中村遺跡で１点類例が存在する（図４－９　16～18、図４－12)。いずれも２形態に分類されるやや小形のものである。16はサイズ的には小さ過ぎるが、形状的特徴から茅野型の範疇に含めておきたい。なお、安通・洞№２遺跡出土の２点（16・17）は蛍光Ｘ線分析により星ヶ塔と判定されている（建石ほか 2014)。ちなみに、安通・洞№２遺跡の黒曜石では、当期の石鏃・石鏃未成品全点（13点）と剥片の蛍光Ｘ線分析が実施されており、33点中星ヶ塔30点、小深沢１点、高原山１点、不明１点であり、星ヶ塔産が91％を占めている。

今回確認できなかった周辺遺跡でも、このように若干の茅野型石鏃が流通していた可能性は否定できない。しかし、このようにわずかな数量では流

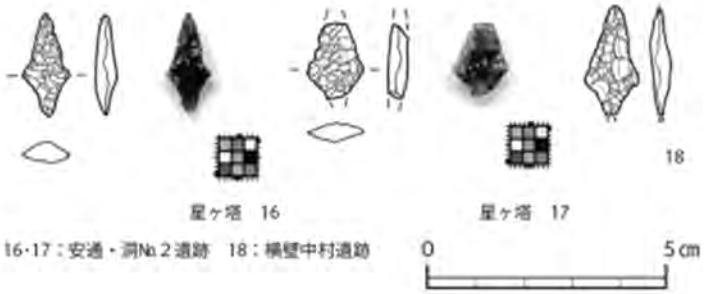


図４－９　周辺遺跡の茅野型石鏃

通目的で製作されていたのではなく。おそらく、集団間の社会的理由により、周辺遺跡へ持ち出されていたものと推定される。この理由については最後に述べてみたい。

いずれにしても、まとまって保有しているのは茅野遺跡のみであり、茅野型石鏃の型式圏はここを中心とした狭い範囲に限定される。したがって、茅野型石鏃は茅野遺跡に居住した集団（茅野集団）によって製作された集団固有の石鏃と考えられる。そして、それは茅野型石鏃が一つの集団を表徴するもの指標となっていたことを示している。つまり、ここでは１型式＝１集団といった図式が成立するのである。

５．茅野型石鏃の周辺

それでは茅野型石鏃は群馬中部地域の中でどれほど特徴的な存在であったのだろうか。これを明らかにするために、茅野遺跡と周辺遺跡における茅野型に類似する形態（凸基有茎鏃）の様相を瞥見してみよう。

茅野遺跡には非黒曜石製の茅野型類似形態が存在している（図４-10　１～14）。これらは細身の凸基有茎鏃であり、在地石材である黒色頁岩を中心に、チャートや珪質凝灰岩などの製材でも製作されている。黒色頁岩製のもの（１～10）では、比較的大形のものが多いが、これは黒色頁岩が最寄りの利根川流域に転石としてあり、入手が容易であったことによるものであろう。これらの石鏃の範型は茅野型石鏃と同じであり、茅野集団の範型が非黒曜石製の石鏃にも適用されていたことを示している。

また、赤城山南麓の安通・洞№２遺跡では、茅野型石鏃よりも幅広の凸基有茎の形態を主たる範型としている。それを大形・優品化した安通型石鏃はその代表例である（大工原 2014, 2016）。しかし、茅野型石鏃に類似した細身の凸基有茎鏃も多数存在している（同図15～35）。ここでは黒色安山岩・黒色頁岩・チャート・珪質頁岩などが用いられている。特に黒色安山岩が多用されている点は、茅野遺跡とは様相が異なる。こうした石材選択性も集団による個性として理解することができる。

また、赤城山西麓に位置する瀧沢遺跡でも、類似形態の凸基有茎鏃が多数存在している（同図36～42）。この遺跡の石鏃は未報告資料が多数あるので、図示したものはその一部である。ここでも黒色頁岩・黒色安山岩・チャート・珪質頁岩等が用いられている。なお、この遺跡は珪質頁岩が多いことが特徴である。この石材は東北地方から搬入されたと推定されるものであり、黒曜石とは別の遠隔地石材が存在している。このことについては、次項で検討する。

このように、周辺遺跡においても、茅野型石鏃と同じ細身の凸基有茎鏃が広く存在しており、晩期前葉の群馬中部地域における範型として、複数の地域集団が共通認識していたものであることが分かる。すなわち、茅野型石鏃とは、地域に通有された範型もとに黒曜石で製作した特異な石鏃と言うことができる。

また、黒曜石を多量保有する群馬南部地域でも、茅野型石鏃と類似する細身の凸基有茎鏃は各種石材で多数存在している（図４-11）。しかし、この地域では黒曜石は無茎鏃に多用される傾向がある（安中市教育委員会 1994；大工原・林 1995）。また、黒曜石製の有茎鏃はむしろ茅野型石鏃よりも小形のものが大部分である。谷地遺跡例のうち、同図20は鏃身部が大きく欠損しているが、茅野型石鏃にやや類似する。しかし、実見したところ茅野型に比べて茎部が長く、正真の茅野型とは異なる。また、大形の事例（同図17～19）は、群馬県北部地域に分布する安通型石鏃（図４-13参照）と類似した幅広の凸基有茎鏃であり、茅野型とは系譜が異なるものである。以上のように、群馬南部地域の遺跡では黒曜石を潤沢に保有していても、茅野型石鏃そのものは見出せないのである。

こうしてみると、黒曜石が乏しい茅野遺跡で作られた茅野型石鏃は単なる実用品としての石鏃ではな

く、ある種の威信財的意味をもった石鏃と考えられるのである。茅野型石鏃はわずかな欠損を除くと欠損率は低いが、これも通常の用途とは異なっていたことを示すものなのかも知れない。

茅野型石鏃の存在から見えてくる信州系黒曜石（主として星ヶ塔産）の流通と、それを巡る集団関係について考察してみたい。これまで検討してきたように、茅野型石鏃は信州系黒曜石の流通の末端に位置する茅野遺跡の集団（茅野集団）によって製作された狭い型式圏の石鏃型式である。群馬地域における縄文時代後期後葉から晩期前葉の主要遺跡（集落遺跡と祭祀遺跡）を図４-12に示した。各遺跡間の直線距離はほぼ10～20㎞であり、この位置関係が当期の集団領域（テリトリー）とほぼ対応しているとみなすことができる。すなわち、半径５～10㎞の範囲が各遺跡の集団領域と考えられる。

茅野遺跡を例にとると、北東ら位置する瀧沢遺跡との距離は8.6㎞、南東に位置する西新井遺跡との距離は11.5㎞であり、少し距離が近いが、その間には利根川があるので、それが集団領域の境界となっていた可能性が高い。

また、南西に位置する天神原遺跡との距離は21.1㎞である。この間は少し離れすぎている。榛名山東南麓は古墳時代の火山堆積物で覆われているので、あるいはこの間にもう一つ未発見の遺跡が存在していたかも知れない。

また、黒曜石を多量保有する遺跡は、群馬南半部に位置する天神原遺跡、谷地遺跡（中栗須滝川Ⅱ遺跡を含む）、千網谷戸遺跡である。後・晩期における黒曜石の数量的変化については、天神原遺跡において土器帰属率を用いた集計がある（安中市教育委員会 1994）。それによれば、後期後半期では2,245ｇであったのが、晩期前葉（安行３ｂ～３ｃ式期）では3,765ｇと約1.7倍に増加している。また、この遺跡では晩期前葉の黒曜石33点が蛍光Ｘ線分析されており、星ヶ塔24点、小深沢（和田峠）８点、不明１点であり、星ヶ塔が72.7％を占めていることも判明している（建石ほか 2008）。谷地遺跡では晩期前葉（安行３ａ式期）の黒曜石12点が分析されており、すべて星ヶ塔産と判定されている（建石ほか 2011）。そして、千網谷戸遺跡では晩期前葉（安行３ａ～大洞Ｃ１式期）の黒曜石94点が分析され、星ヶ塔81点、小深沢（和田峠）７点、板山４点、神津島２点であり、星ヶ塔が86.2％を占めている。このように、群馬南半部の遺跡ではいずれも晩期前葉には星ヶ塔産の黒曜石を主体とした信州産黒曜石が流通していたことが確認できる。

また、集計データはないものの、谷地遺跡と千網谷戸遺跡でも明らかに黒曜石が多量存在している。谷地遺跡では詳細な時期できないものの、後・晩期の黒曜石原石が多量出土しており、その多くは星ヶ塔産であることが判明している（建石ほか 2011）。また、千網谷戸遺跡は群馬東縁部に位置しているにも関わらず、黒曜石が潤沢に存在している。このように群馬地域を東西に横断する天神原―谷地―千網谷戸の３遺跡を結ぶラインは「黒曜石流通の大動脈」である（図４-12）。星ヶ塔産の黒曜石が群馬地域において大量に流通する現象は、星ヶ塔遺跡における黒曜石鉱脈の採掘活動（宮坂 前掲）と密接に連動していることは確実である。黒曜石原産地から大量の黒曜石がストーンロードを通って群馬に流入していたのである。

ところが、茅野遺跡を含め、当期の群馬地域北半部の遺跡では、意外と黒曜石の出土数は少ない。特に、瀧沢遺跡以北の遺跡では非常に少ない。このように、群馬地域では南北で黒曜石の流通量には明らかに差違があり、「大動脈」からはずれた北半部の遺跡への流通は、枝葉的な状況となっている。さらに付け加えれば、茅野遺跡と瀧沢遺跡との間にも流通量に大きな隔たりがある。まさに茅野遺跡は黒曜石流通の限界集落と言える存在だったのである。

今度は視点を変えて、群馬北半部ではどのような石材利用について確認してみたい。非黒曜石製の石鏃の在り方でも述べたように、この地域では在地石材である黒色頁岩・黒色安山岩・チャートが多用さ

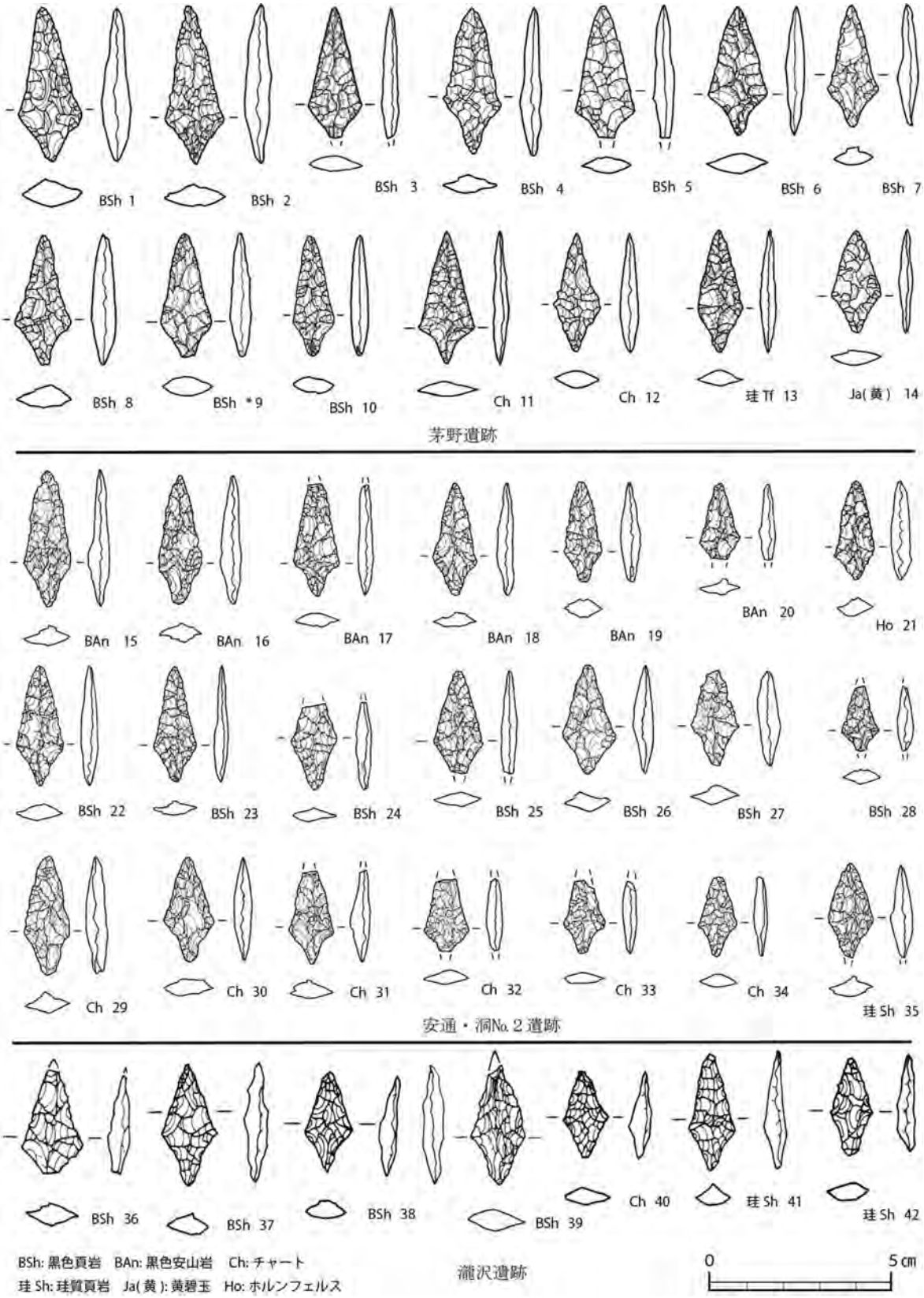


図４−10　非黒曜石製の茅野型類似形態の石鏃

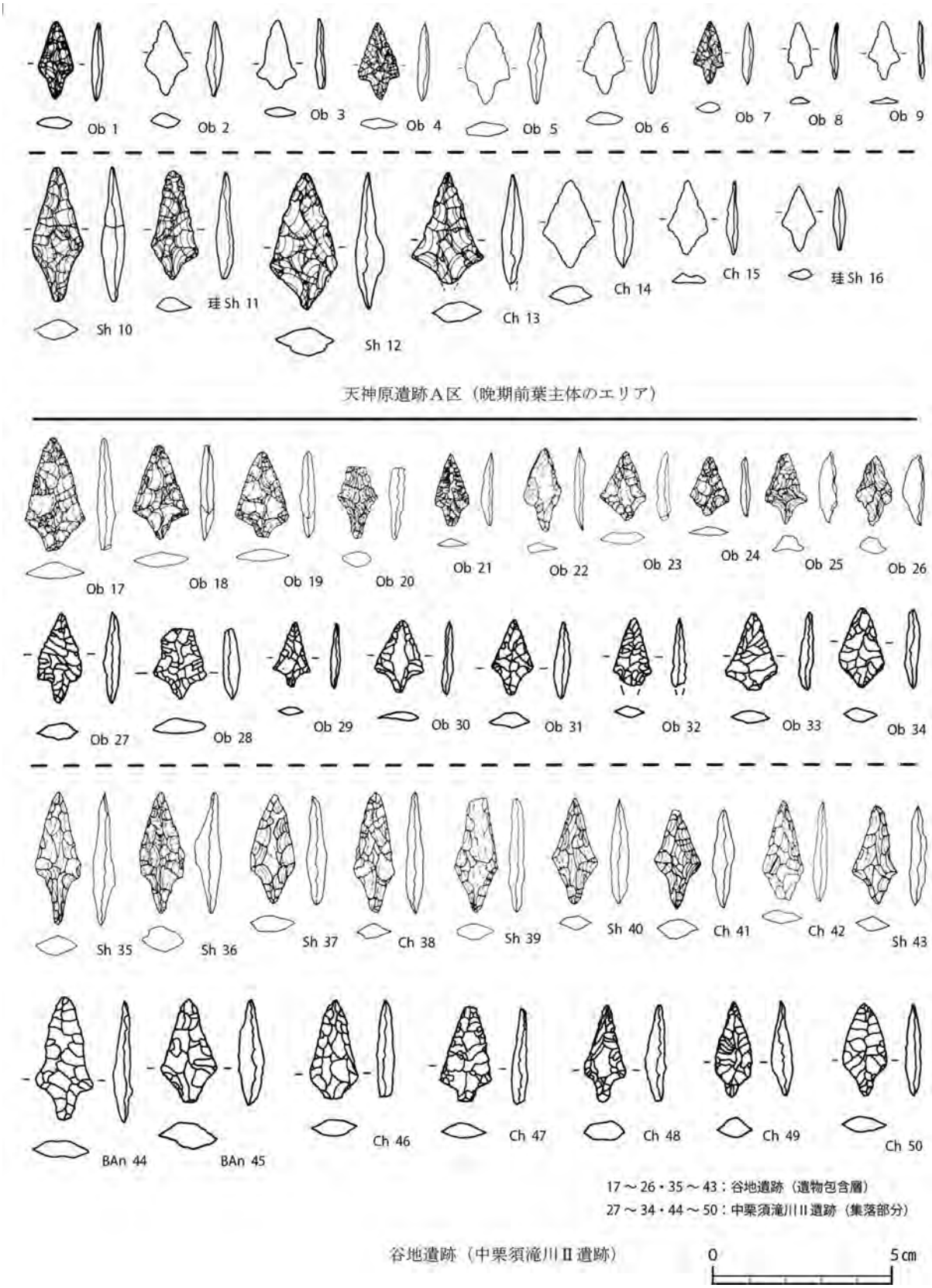
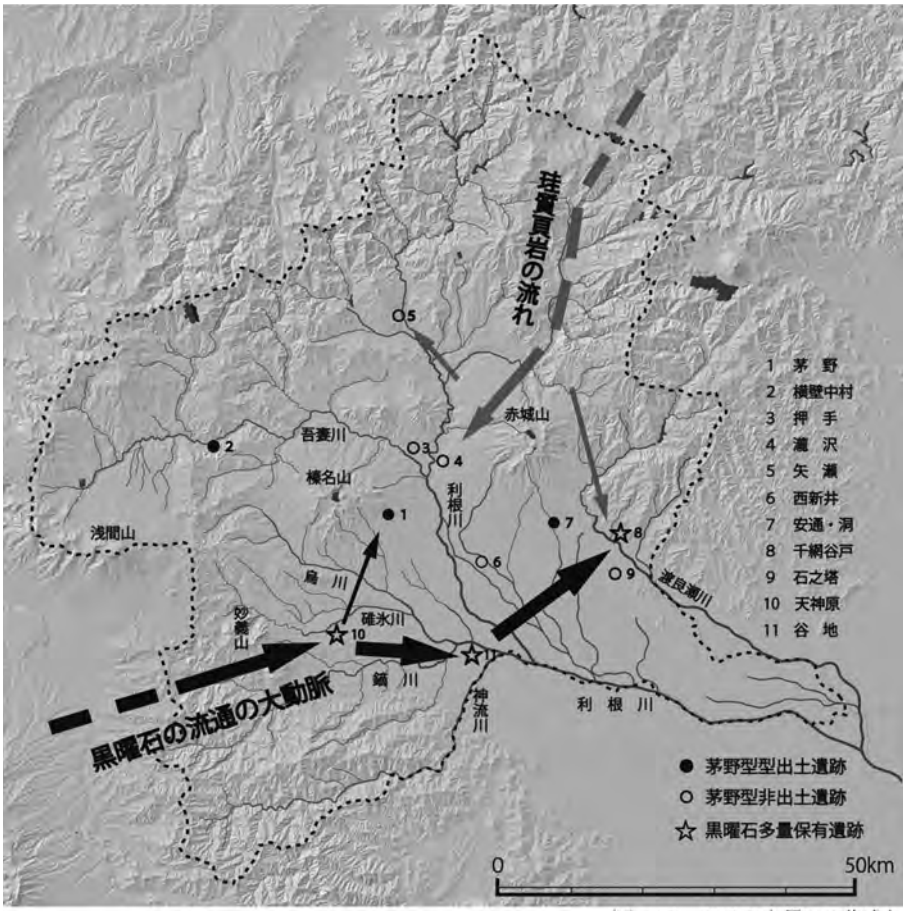


図４−11　群馬南部地域の茅野型類似形態の石鏃



（カシミール３Ｄを用いて作成）

図４−12　群馬地域の晩期前葉の主要遺跡と黒曜石・珪質頁岩の流通

れている（図４−10）。これらは近くに存在する河川から採取した石材である。しかし、珪質頁岩はそれとは異なり、東北地方南部から搬入されたものと推定される。瀧沢遺跡の石器群を実見したところ、珪質頁岩製の石鏃が多数存在しており、拳大の中形原石と子供の掌大の大形剥片（ブランク）が複数存在していることが確認された。これらは石鏃素材剥片を剥離するための原石・ブランクであり、一連の石鏃を製作する工程の石器群が存在している。おそらく、瀧沢遺跡は珪質頁岩流通の拠点的遺跡であり、ここから群馬北半部の遺跡へ珪質頁岩が流通していたものと推定される（図４−12）。

また、安通・洞№２遺跡では、利根川水系の黒色頁岩・黒色安山岩とともに渡良瀬水系のチャートの石鏃も多数存在している。そして、ここでは安通型石鏃を多数保有しているが、この石鏃は群馬地域北半部の遺跡にのみ存在するものであり、儀礼的行為に用いられたと推定されている（大工原 2014，2016）。そして、安通・洞№２遺跡はその中心的な遺跡である。茅野遺跡にも安通型石鏃は２点存在しており（図４−13　１・２）、群馬北半部の地域集団の構成員でもあったと推定されるのである。

つまり、茅野集団は黒曜石の流通網の末端として群馬南半部の集団と交流をもつと共に、群馬北半部の地域集団の構成員でもあった。最後にこのように二つの石鏃型

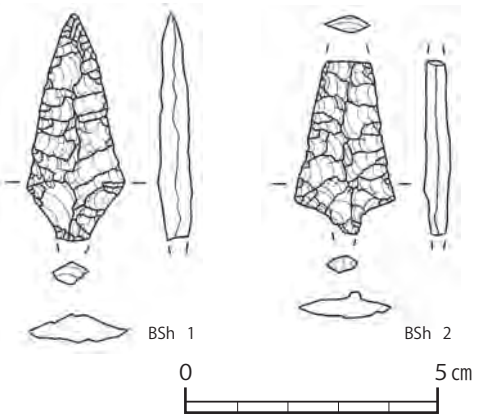


図４−13　茅野遺跡出土の安通型石鏃

式圏の重複する位置にある茅野集団によって製作・保有されていた茅野型石鏃の社会的意義について、一つの仮説を提示しておきたい。おそらく、茅野集団は黒曜石の入手といった側面では、地理的関係から地域集団の中では優位のポジションにあったと推定される。そこで、その優位性を誇示するために黒曜石をできるだけ大きく見せようとするために茅野型石鏃を製作していたのではなかろうか。それが茅野集団の象徴（symbol）であり、アイデンティティーであった。いくつかの近隣他遺跡への流通事例は安通型石鏃と同様に、集団間の紐帯関係を示すために用いられたものであり、北半部の地域集団にとっては、威信財的な価値も有してしたのであろう。カヤノ技法による石鏃製作も、できるだけ大きな石鏃を製作しようとしたことから生まれたものと思われる。しかし、潤沢に黒曜石を保有する群馬南半部の地域集団にとっては、黒曜石は単なる石鏃の素材（生存財）としての意味合いが強く、こうした大形石鏃を製作する必要も生じなかったのであろう。南半部の遺跡から多量出土する黒曜石製の石鏃の方が茅野型石鏃より小形であるのもこれを傍証するものであろう。

６．おわりに

これまで石鏃の研究は、単なる道具としての位置付けによる研究しか行われて来なかった。その最たる例は石器組成での石鏃の数量的把握による研究である。しかし、石鏃を技術形態学的に分析し、型式学の俎上に位置付けることにより、集団関係論へと発展させる余地があることが明らかとなったと思う。今後、さらに多くの石鏃型式を設定し、相互の関係を追究することにより、土器型式の研究と同様に歴史学的・社会学的な研究に用いることが可能となると考えている。このように石鏃型式を設定する作業は、今後も継続して行く必要がある。

謝辞

本研究は科学研究費助成事業　基盤研究（C）「石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備」（JSPS 科研費25370894）の助成を受けたものである。本論を執筆するにあたり、次の方々から多くの有益なご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。小野　昭，谷口康浩，二宮修治，建石　徹，中村　大，眞島英壽，芹澤清八，小菅将夫，軽部達也，宮坂　清，林　克彦，角田祥子，阿久澤智和，後藤佳一，亀井健太郎（敬称略）

註

⑴　出土土器を詳細に観察した本研究協力者・林克彦（石洞美術館）の観察所見による。

⑵　河原喜重子によれば、長野県岡谷市目切遺跡における、中期中葉～後葉の石鏃の中には「厚み４㎜以下の板状原石を素材に作られた完成品」が存在しており、「板状原石は素材として好まれていたことがわかる」という（河原2005）。しかし、時期と場所が異なるので、茅野型石鏃とは無関係である。

引用文献

安中市教育委員会　1994　『中野谷地区遺跡群』

千網谷戸遺跡発掘調査会　1978　『千網谷戸遺跡発掘調査報告書』

大工原豊　2003　「後・晩期の石鏃について」『第11回岩宿フォーラム／シンポジウム　刺突具の系譜　予稿集』，pp.57-64，笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会

大工原豊　2007　「黒曜石交易システム」『縄文時代の考古学６　ものづくり』，pp.164-177，同成社

大工原豊　2008　『縄文石器研究序論』六一書房

大工原豊　2011　「縄文時代における黒曜石の利用と展開」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会　研究発表資料集』，pp.35-46，日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会

大工原豊　2014　「群馬県域における石鏃の型式について」『2014年度青山考古学会　研究発表要旨』，pp.1-6，青山考古学会

大工原豊　2015　「縄文時代のストーンロードと星ヶ塔遺跡」『星ヶ塔黒曜石原産地遺跡国史跡指定記念シンポジウム』，

pp.23-33，下諏訪町教育委員会
大工原豊　2016　「安通型石鏃の研究」『青山考古』31・32合併号，pp.1-18，青山考古学会
大工原豊・林　克彦　1995　「配石墓と環状列石」『信濃』第47巻第４号，pp.32-54，信濃史学会
藤岡市教育委員会　1982　『小野地区遺跡群発掘調査報告書』
藤岡市教育委員会　1988　『神明北遺跡・谷地遺跡』
藤岡市教育委員会　2002　『中栗須滝川Ⅱ遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013　『横壁中村遺跡（13)』
橋詰　潤　2009　「『刺突具』利用の変遷に関する一試論―新潟県域における杉久保石器群から縄文時代草創期の比較から―」『新潟県の考古学Ⅱ』，pp.39-58，新潟県考古学会
橋詰　潤　2014　「刺突具の欠損痕跡と形態の変化から見た狩猟具利用の変化」『岩宿フォーラム2014／シンポジウム　石器の変遷と時代の変革―旧石器から縄文石器へ―　予稿集』，pp.86-93，岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
岩宿博物館　2007　『第44回企画展　千網谷戸遺跡発掘60年』
粕川村教育委員会　1981　『稲荷山・安通，洞』
河原喜重子　2005　「石鏃の製作と技術」『目切・清水田遺跡』，pp.463-468，岡谷市教育委員会
桐生市教育委員会　1977　『千網谷戸遺跡発掘調査概報』
桐生市教育委員会　1980　『千網谷戸遺跡調査報告』
桐生市教育委員会　1991　『千網谷戸遺跡’91発掘調査概報』
前橋市教育委員会　2013　『安通・洞№２遺跡』
前橋市教育委員会　2014　『西新井遺跡第４地点』
御堂島正　1991　「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第92号，pp.79-97，早稲田大学考古学会
宮坂　清　2014　『星ヶ塔黒曜石原産地遺跡―総括報告書―』下諏訪町教育委員会
渋川市教育委員会　2008ａ　『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ』
渋川市教育委員会　2008ｂ　『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅱ』
榛東村教育委員会　1991　『群馬県茅野遺跡　概報』
榛東村教育委員会　2005　『史跡　茅野遺跡　遺構編（一)』
設楽博己　1984　「前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料（上)」『群馬考古通信』第９号，pp.1-22，群馬県考古学談話会
設楽博己　2012　『前橋の縄文後・晩期の遺跡から―設楽コレクション』設楽コレクション図録製作委員会
薗田芳雄　1972　『千網谷戸遺跡 C-ES 地点の調査』両毛考古学会
建石　徹・菅頭明日香・津村宏臣・二宮修治　2008　「黒曜石の縄文石器―産地分析の現状と天神原遺跡出土資料の産地分析―」『ストーンツールズ』，pp.68-72，安中市ふるさと学習館
建石　徹・三浦麻衣子・村上夏希・井上優子・朴　嘉瑛・津村宏臣・二宮修治　2011　「栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析―旧石器時代・縄文時代資料を中心として―」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』，pp.269-306，日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会
建石　徹・大工原豊・二宮修治　2014　「前橋市内遺跡出土黒曜石資料の産地分析について」『年報第44集　平成25年度文化財調査報告書』，pp.90-93，前橋市教育委員会
月夜野町教育委員会　2005　『上組北部遺跡群Ⅱ　矢瀬遺跡』
藪塚本町教育委員会　1987　『石之塔遺跡』

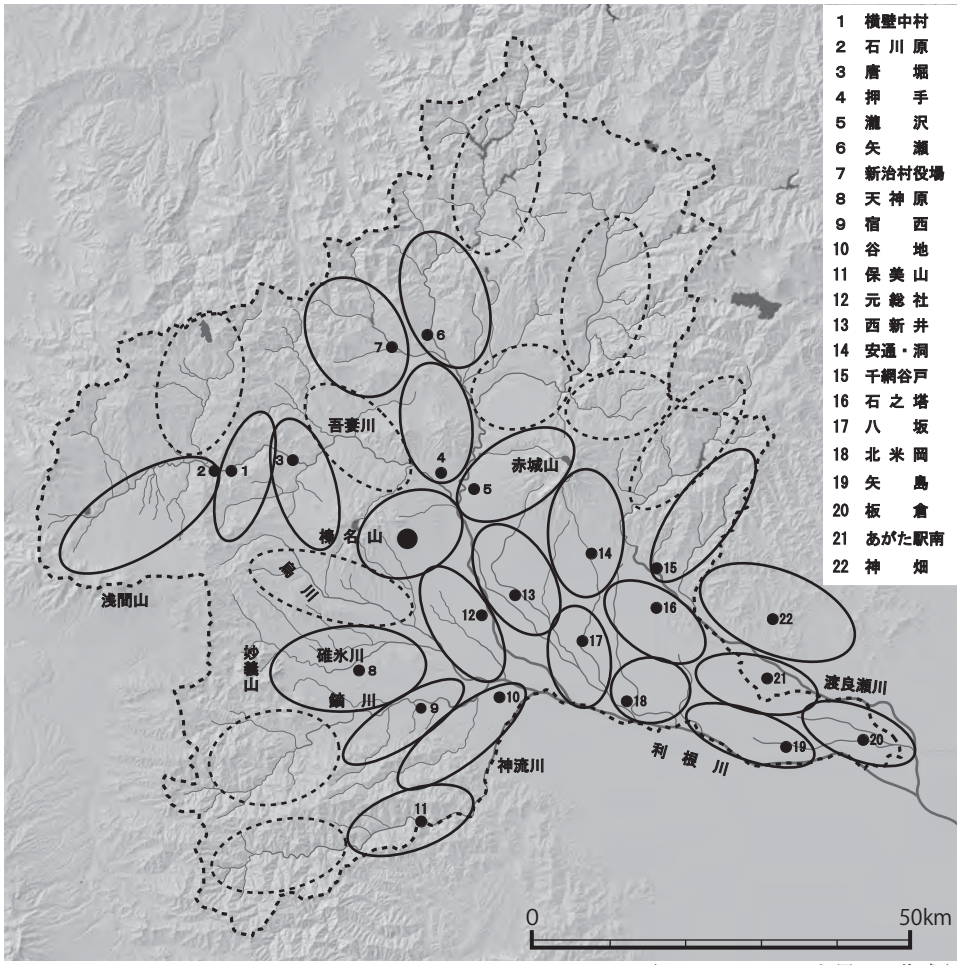
（「資源環境と人類」第６号　1-13頁　2016年３月より再掲載）

縄文時代晩期の遺跡テリトリーと居住人口について

大工原　　豊

１．群馬地域の遺跡テリトリー

これまでの研究成果により、縄文時代の集落の活動領域（遺跡テリトリー）は半径４～10㎞と想定されている。(註1) そこで茅野遺跡の盛行期に当たる晩期前葉の群馬地域の遺跡テリトリーについて検討してみたい。まず主要遺跡の位置を地形図に示した。そして各遺跡のテリトリーが重ならないように楕円を描き、それぞれの遺跡テリトリー想定することにした。この方法はティーセン多角形による分析に準じたものである。ただし、河川や丘陵などの自然障壁がある場合には、それを考慮して境界を想定することにした。その結果図４-14のようにこの地域の遺跡テリトリーを想定した。23遺跡テリトリーが描け、空白部分にはさらに10遺跡テリトリーの存在が想定された。各遺跡のテリトリーは、長半径７～12㎞、短半径３～6.5㎞の楕円形であり、平均領域面積は127.6㎢であった。また、茅野遺跡は長半径7.5㎞×短半径5.5㎞の楕円で、領域面積は129.5㎢と計算された。これらの遺跡テリトリーは等質のものではなく、遺跡ごとに資源開発力や居住人口に差異が存在していたことがうかがえる。また、平野部では遺跡がほぼ同じ間隔で分布しているため、テリトリーの面積もほぼ一定であるが、山間地ではより広い領域をテリトリーとしていたと推定される。また、遺跡間に大きな河川が存在する場合や、背後に



（カシミール３Ｄを用いて作成）

図４-14　縄文晩期前葉の主要遺跡と遺跡テリトリー

広い山地を抱える場合には、遺跡がテリトリーの中心から大きく偏った位置に存在していたようである。

縄文時代における遺跡テリトリーの大きさは、文化的発展により徐々に縮小されていったと考えられる。前期後葉の中野谷松原遺跡（安中市）の場合、テリトリーは半径10km、領域面積は314㎢であったのに対し、晩期前葉では130㎢と40％程度に領域面積が縮小している。これは領域内の食料生産や資源開発がより効率的に行われるようになっていたことを示すものである。

２．居住人口の推定

茅野遺跡では一辺５～６ｍの正方形の住居址であり、ほぼ等間隔に３軒以上が列状に配列する集落構造であったことが判明している。住居址群はさらに調査区外まで延びているので、おそらく５～６軒が同時併存していたと推定される。そして、これを関野克の住居の居住人数の公式（関野 1938　ｎ＝（A−３）／３（ただしｎ：居住人数、Ａ：住居床面積）に当てはめて計算すると、１軒の居住人数は７～11人となる。ゆえに、茅野遺跡の居住人口は35～66人と計算される。これは前期中葉～後葉の拠点集落である中野谷松原遺跡の居住人数とほぼ同じである（大工原 1998ｂ）。

従来、単純に遺跡数や住居数で晩期には人口が大幅に減少したとされてきた（小山 1984等）。しかし、この推計には多くの問題点が存在する。まず、晩期には定住性が高まり居住地が固定化するので、移動頻度の高かった時期より遺跡数は減少する。また、定住化により住居が同じ場所で繰り返し構築されているので、住居数を少なくカウントしてしまう。そして、個々の住居規模はそれまでよりも大きいので、１軒当たりの居住人数も多い。さらに、これまで観てきたように同時併存する集落密度も高いのである。

こうした諸条件を加味して推計すると、群馬地域には茅野遺跡と同様な遺跡が32カ所（栃木県の１遺跡を除く）存在するので、当期の群馬地域の人口は1,120～2,112人と算出される。これに対し、中野谷松原遺跡の試算では前期中葉～後葉の集落の居住人数は40～60人であった。そして、この時期には半径10kmの遺跡テリトリーと推定され、石器石材の違いから群馬地域には９つのエリアが存在している（大工原 2008）。これらが同時併存する遺跡数とすると、群馬地域の前期中葉～後葉の人口は360～540人と推計される。したがって、晩期前葉には前期後葉の３～４倍に増加していることになり、少なくとも群馬地域では、晩期に大幅に人口が減少する現象を確認することはできない。全国規模でこうした分析を累積させて縄文時代の人口を推計すると、これまでとは異なる縄文社会像が見えてくる。

註

1　活動領域について、赤沢威は「遺跡テリトリー」という概念でとらえ「その遺跡に居住していた集団が日常的に食料など各種資源を調達していた領域であり、それは明確に閉じた系を意味している」と定義する（赤沢 1983）。そして、その領域は未開社会の民族事例から半径10kmないし歩行時間２時間の範囲とされている。また、縄文時代の遺跡テリトリーについては、海産資源の獲得状況を用いた冬木貝塚のテリトリー研究（赤沢・小宮 1981）や、新田野貝塚のテリトリー研究（赤沢 前掲）がある。また、内陸部においては、能登健による吾妻川流域における酸性河川と石鏃出土遺跡の在り方から遺跡テリトリーを検討した研究（能登 1985）がある。また、筆者らは前期の大下原遺跡・中野谷松原遺跡に搬入される石器石材の入手場所から集団の活動領域の研究を行っている（磯貝・大工原 1993、磯貝 1994、大工原 1998ａ、磯貝 1998）。これらの研究では半径10kmの遺跡テリトリーは妥当な範囲と結論付けている。しかし、武蔵野台地の中期の遺跡の分布からティーセン多角形を応用した分析を行い、領域の範囲を半径4.48kmと導き出している（谷口 1993・2005）。縄文中期の武蔵野台地のように定住性の時期・地域では、遺跡テリトリーは民族誌の事例よりもはるかに狭い。また、林謙作は石巻湾周辺の後・晩期の遺跡を分析し、遺跡間の距離は４～6.5kmしか離れていないが、これは海に各遺跡の領域が広がっていたことによることを明らかにしている（林 1986）。

引用・参考文献

赤沢　威・小宮　猛　1981　『別冊　冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動』茨城県教育財団

赤沢　威　1983　『狩猟採集民の考古学』海鳴社

磯貝基一・大工原豊　1993　「石器石材の分析」『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会，pp.244-254

磯貝基一　1994　「石器石材の分析安山岩製石器石材について」『中野谷地区遺跡群自然科学編』安中市教育委員会，pp.103-110

磯貝基一　1998　「直接打撃系列（Ｂ類）の石器石材について」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.608-611

今村啓爾　2008　「縄文時代の人口動態」『縄文時代の考古学』10，同成社，pp.63-73

可児通宏　1993　「セトルメント・システム」『季刊考古学』44，雄山閣，pp.77-81

小泉清隆　1985　「古人口論」『岩波講座　日本考古学』２，岩波書店，pp.213-245

小山修三　1984　『縄文時代-コンピュータ―考古学による復元―』中央公論社

関野　克　1938　「埼玉県上福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』53-８

大工原豊　1998ａ　「中野谷松原遺跡の活動領域について」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.578-586

大工原豊　1998ｂ　「縄文時代の集落の景観復元」『中野谷松原遺跡―縄文時代遺物本文編―』安中市教育委員会，pp.549-578

大工原豊　2008　『縄文石器研究序論』六一書房

谷口康浩　1993　「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』44，雄山閣，pp.67-71

谷口康浩　2005　『環状集落と縄文社会構造』学生社

角田真也　2010　「関東地方における〈土版・岩版〉研究の前提―群馬県の白色凝灰岩産地とその意味―」『國學院大學考古学資料館紀要』26，國學院大學考古学資料館，pp.97-121

中村　大　2018　「縄文時代の人口を推定する新たな方法」『環太平洋文明研究』２，pp.39-58

能登　健　1985　「魚の棲まない川」『郷原遺跡』吾妻町教育委員会，pp.43-52

林　謙作　1986　「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座　日本考古学』５，岩波書店，pp.93-124

茅野遺跡・下新井遺跡出土黒曜石資料の産地分析

建 石　　徹・三浦麻衣子・大工原　豊・二 宮 修 治

１．はじめに

筆者らは日本考古学協会2011年度栃木大会において実施されたシンポジウム「石器時代における石材利用の地域相―黒曜石を中心として―」にあたり、茅野遺跡・下新井遺跡を含む栃木県・群馬県内諸遺跡より出土した旧石器時代・縄文時代に帰属する黒曜石資料の産地分析を実施・報告した（建石・三浦・村上・井上・朴・津村・二宮 2011、以下「旧稿」とよぶ場合がある）。

本稿ではこのうち茅野遺跡・下新井遺跡の産地分析報告をあらためておこない、若干の考古学的考察を付すことを目的とする。産地分析結果は旧稿の該当箇所を踏襲する。

２．資料（試料）

産地分析に供した黒曜石資料は、茅野遺跡・下新井遺跡より出土した資料、計74点（茅野遺跡51点、下新井遺跡23点）である。いずれの資料も縄文時代後・晩期に帰属する。各資料の帰属時期・出土遺構・器種等の詳細を表４−２、写真を図４−16・図４−17に後述する産地分析の結果とともに示した。

３．産地分析の方法

産地分析に用いる各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析（非破壊法）を用いた。測定条件を以下に示す。

分析装置：日立ハイテクサイエンス（旧稿当時の社名はセイコーインスツルメント）製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 SEA −5120Ｓ、線源ターゲット：モリブデン（Mo）管球、電圧：45kV、Ｘ線照射径：φ1.8㎜、測定雰囲気：大気、測定時間：100秒、定量分析の計算法：FP 法、標準試料：なし

黒曜石の主成分元素であるケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の８元素のうち、Fe、Ca、Ｋの３元素は、黒曜石の産地間の識別・分類に特に有効であり、産地分析の指標元素となる。筆者らはこれら３元素と、これらと挙動に相関性のある微量成分元素であるマンガン（Mn）、ストロンチウム（Sr）、ルビジウム（Rb）を加えた６元素による検討が東日本の黒曜石の産地分析に有効であることを示してきた。本分析においても、この６元素の測定をおこなった。

測定に際しては機器に備えられた CCD カメラの画像観察により、Ｘ線照射範囲（分析範囲）をなるべく平滑かつ（原礫面等でない）新鮮な面とすることを心がけ、１つの資料につき１回の測定をおこなった。

産地分析のための基準資料として、東日本の代表的な黒曜石産地である北海道白滝・置戸・十勝三股・赤井川、青森県小泊・出来島・鶴ヶ坂・深浦、岩手県雫石・折居・花泉、秋田県金ヶ崎・脇本、宮城県湯の倉・色麻・秋保、山形県月山、新潟県板山・上石川・佐渡、栃木県高原山・日光、長野県小深沢・男女倉・星ヶ塔・麦草峠、神奈川県畑宿、静岡県上多賀・柏峠、東京都神津島（恩馳島）に島根県

表４－２　分析資料および分析結果一覧（分析値は６元素の酸化物の総和を100としたときの百分率）

遺跡名	№.	帰属時期	出土遺構等	器種	目視による特徴	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	原石形状	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb_2O	K_2O	推定産地	併合距離
茅　野	1	晩期前葉 (安行3a ～3b 主体)	A区16住	石核	透明	22	22	17.1	6.6		3.1	25.4	0.2	15.1	0.9	55.3	星ヶ塔	0.120
	2	〃	A区16住	石核	透明	17	24	21	6.68		3.2	25.1	0.3	14.5	1.1	55.9	星ヶ塔	0.463
	3	〃	A区16住	石核	漆黒・縞	16	22	14.5	5.09		2.6	23.9	0.4	15.0	1.0	57.1	星ヶ塔	0.814
	4	〃	A区16住	石核	透明	13	22	16	3.75		3.0	25.0	0.3	13.4	1.0	57.3	星ヶ塔	0.377
	5	〃	A区16住	石核	透明	11	30	13.9	3.39		2.9	25.1	0.3	14.2	1.0	56.6	星ヶ塔	0.217
	6	〃	A区16住	剥片	漆黒・縞	27	15	11.6	1.72		2.9	23.9	0.2	13.7	0.9	58.5	星ヶ塔	0.240
	7	〃	A区16住	剥片	透明	32	24	9.8	4.21		2.9	25.1	0.3	17.1	1.0	53.7	星ヶ塔	0.585
	8	〃	A区16住	剥片	透明	27	18	9.4	3.07		3.2	24.2	0.3	15.8	1.0	55.5	星ヶ塔	0.562
	9	〃	A区16住	剥片	漆黒・縞	28	16	11.5	4.32		3.0	26.0	0.2	14.5	1.0	55.4	星ヶ塔	0.083
	10	〃	A区16住	原石	透明	42	18	10	5.73	角礫	2.9	26.3	0.2	14.7	1.0	55.0	星ヶ塔	0.130
	11	〃	A区16住	剥片	透明・縞	19	15	4.3	0.92		3.2	24.4	0.3	13.6	0.9	57.6	星ヶ塔	0.178
	12	〃	A区16住	削器	透明	32	17	6.4	1.97		2.8	23.7	0.2	23.1	1.0	49.1	不明	
	13	〃	A区16住	剥片	漆黒	19	24	6.3	2.42		2.9	24.6	0.3	14.7	1.0	56.5	星ヶ塔	0.238
	14	〃	A区16住	剥片	透明	18	20	5.7	1.65		4.3	26.3	0.0	14.1	1.9	53.4	小深沢	0.424
	15	〃	A区16住	RF	漆黒	28	11	7.2	1.02		3.4	24.9	0.3	14.7	1.1	55.6	星ヶ塔	0.557
	16	〃	A区16住	剥片	透明・縞	14	20	2.9	0.83		2.8	25.4	0.3	15.2	1.0	55.3	星ヶ塔	0.309
	17	〃	A区16住	剥片	透明	23	14	6.2	1.38		3.3	25.8	0.2	14.1	1.0	55.7	星ヶ塔	0.120
	18	〃	A区16住	RF	漆黒	21	12	8.2	1.5		3.0	25.4	0.2	14.6	1.1	55.7	星ヶ塔	0.255
	19	〃	A区16住	剥片	漆黒・縞	22	25	5.5	1.89		3.6	24.9	0.3	14.7	1.1	55.5	星ヶ塔	0.682
	20	〃	A区16住	剥片	漆黒	9	24	6.8	1.08		2.9	25.5	0.2	14.3	0.9	56.1	星ヶ塔	0.109
	21	〃	A区16住	剥片	漆黒	29	13	6.1	1.49		3.2	25.3	0.3	16.5	0.9	53.8	星ヶ塔	0.543
	22	後期末葉～晩期初頭 (高井東新～安行3a 主体)	A区18住	原石	透明	35	21	11.9	7.96	角礫・光沢	3.2	24.7	0.3	15.6	1.1	55.1	星ヶ塔	0.454
	23	〃	A区18住	石核	透明・縞	30	16	11.1	5.06		2.8	24.8	0.3	16.2	0.9	55.1	星ヶ塔	0.481
	24	〃	A区18住	原石	透明	34	19	13.1	7.78	角礫・光沢	3.0	26.4	0.3	14.1	1.1	55.1	星ヶ塔	0.350
	25	〃	A区18住	石核	漆黒	18	18	8.1	2.53		2.7	25.2	0.3	16.0	1.0	54.9	星ヶ塔	0.477
	26	〃	A区18住	石核	漆黒・縞	16	26	12.4	5.52		3.0	24.5	0.2	13.3	1.1	58.0	星ヶ塔	0.344
	27	〃	A区18住	石核	透明・縞	23	23	7.8	2.83		3.3	25.5	0.3	13.8	1.0	56.1	星ヶ塔	0.256
	28	〃	A区18住	剥片	透明	19	23	3.9	1.38		3.4	25.8	0.1	13.2	1.0	56.5	星ヶ塔	0.308
	29	〃	A区18住	剥片	漆黒・縞	20	30	7.9	3.17		2.9	23.2	0.3	14.1	1.0	58.4	星ヶ塔	0.412
	30	〃	A区18住	剥片	濁	19	11	3.4	0.63		3.0	25.6	0.3	13.7	1.0	56.4	星ヶ塔	0.239
	31	〃	A区18住	剥片	透明・縞	18	20	5.3	1.32		3.3	25.0	0.3	14.3	0.9	56.3	星ヶ塔	0.150
	32	〃	A区18住	剥片	漆黒	17	19	6.8	1.35		3.2	25.3	0.2	14.8	1.1	55.4	星ヶ塔	0.301
	33	〃	A区18住	剥片	漆黒	12	24	5.9	1.35		3.6	25.0	0.0	15.0	1.9	54.5	小深沢	0.320
	34	〃	A区18住	剥片	濁	18	27	5.4	1.89		3.3	25.1	0.3	14.6	1.0	55.7	星ヶ塔	0.291
	35	〃	A区18住	剥片	透明	18	19	5.4	1.21		2.8	23.6	0.4	22.3	0.9	50.0	不明	
	36	〃	A区18住	剥片	漆黒・縞	21	30	11.9	4.38		3.3	23.6	0.3	15.1	1.0	56.8	星ヶ塔	0.303
	37	〃	A区18住	剥片	漆黒	16	18	8.7	2.2		3.5	25.2	0.2	13.8	1.0	56.4	星ヶ塔	0.181
	38	〃	A区18住	剥片	透明・不純物	18	23	5.8	2.12		1.7	33.0	0.7	17.9	0.7	45.9	麦草峠	0.172
	39	〃	A区18住	剥片	濁・不純物	26	18	5.6	2.19		3.0	25.2	0.2	13.1	1.0	57.5	星ヶ塔	0.146
	40	〃	A区18住	剥片	透明・縞	17	18	6.1	2.13		4.2	25.9	0.0	16.1	2.0	51.7	小深沢	0.634
	41	〃	A区18住	剥片	漆黒・縞	27	18	11.9	5.29		2.9	26.3	0.4	12.7	1.0	56.8	星ヶ塔	0.688
	42	〃	A区18住	剥片	透明・縞	22	10	12.5	2		3.6	25.1	0.4	15.6	1.2	54.2	板山	0.615
	43	〃	A区18住	剥片	透明	12	24	9.7	3.27		2.9	25.4	0.3	14.6	1.1	55.8	星ヶ塔	0.373
	44	〃	A区18住	剥片	漆黒・縞	27	11	7.7	3.08		3.3	23.8	0.3	14.7	0.9	56.9	星ヶ塔	0.373
	45	〃	A区18住	剥片	透明	23	19	10.2	3.25		3.2	25.8	0.2	13.2	1.0	56.6	星ヶ塔	0.162
	46	〃	A区18住	剥片	漆黒	21	14	6.9	1.83		3.3	24.8	0.3	14.0	1.1	56.5	星ヶ塔	0.347
	47	〃	A区18住	石核	霜降	12	29	20.9	5.02		4.0	25.3	0.1	14.4	2.0	54.3	小深沢	0.377
	48	〃	A区18住	石核	濁・顆粒	24	14	8.2	2.02		3.6	22.9	0.0	11.0	1.8	60.8	小深沢	1.385
	49	〃	A区18住	石核	透明	17	26	9.8	3.07		3.2	26.9	0.0	15.3	1.6	53.0	小深沢	0.525
	50	〃	A区18住	石核	漆黒・不純物	15	13	9.6	1.98		3.2	27.5	0.1	14.6	1.7	53.0	小深沢	0.276
	51	〃	A区18住	剥片	漆黒	15	13	7.3	1.2		4.0	25.8	0.0	14.1	2.0	54.1	小深沢	0.488
下新井	1	後期後葉～晩期初頭	1住	石鏃（凸有）	透明	30	12	7.2	1.4		3.5	24.8	0.3	15.6	1.1	54.7	星ヶ塔	0.622
	2	晩期初頭	2住	石鏃（凸有）	透明	29	10	5.7	1.45		3.1	24.6	0.3	17.3	1.0	53.7	板山	0.629
	3	晩期初頭	2住	石鏃未成品	濁・不純物	18	11	2.9	0.52		4.1	25.5	0.0	14.2	1.9	54.3	小深沢	0.375
	4	晩期初頭	2住	石鏃（局磨）	透明	10	15	2.5	0.37		4.2	25.0	0.0	14.1	1.9	54.7	小深沢	0.489
	5	後期後葉～晩期初頭	4住・№94	石鏃（凹無）	濁	12	11	2.9	0.25		3.3	21.5	0.0	13.5	1.6	60.1	不明	
	6	後期後葉	E配石	石鏃未成品	透明	19	16	6.5	1.39		3.1	25.1	0.3	13.8	1.0	56.7	星ヶ塔	0.352
	7	後期後葉～晩期初頭	B包含層・№28	石鏃（凸有）	漆黒	19	15	4.5	0.64		3.1	25.0	0.2	15.6	1.0	55.1	星ヶ塔	0.251
	8	〃	A包含層・№75	石鏃（凹無）	透明・縞	14	14	3.3	0.46		3.0	24.2	0.3	14.4	1.1	56.9	星ヶ塔	0.468
	9	〃	A区一括	石鏃未成品	漆黒	19	14	6.1	0.95		1.6	46.1	0.6	21.3	0.7	29.7	高原山	0.138
	10	〃	一括	石鏃（凹無）	濁	16	12	2.7	0.49		2.6	23.3	0.3	14.6	1.0	58.1	星ヶ塔	0.550
	11	〃	1住	剥片	漆黒	17	23	12	4.67		3.4	24.4	0.2	12.2	1.0	58.8	星ヶ塔	0.381
	12	〃	1住	剥片	漆黒・裏	23	26	12.4	5.31		3.0	23.5	0.3	13.5	0.9	59.0	星ヶ塔	0.308
	13	〃	1住	剥片	透明・縞	22	15	12.9	3.36		3.8	23.6	0.0	14.5	1.9	56.3	小深沢	0.453
	14	〃	1住	剥片	漆黒	16	22	5.3	1.53		2.7	24.8	0.3	15.2	0.9	56.1	星ヶ塔	0.355
	15	〃	1住	剥片	漆黒・縞	31	13	13	2.94		3.4	26.8	0.2	14.3	1.1	54.2	星ヶ塔	0.306
	15	後期後葉～晩期初頭	1住	剥片	漆黒・縞	31	13	13	2.94		3.4	26.81	0.16	14.32	1.08	54.22	星ヶ塔	0.306
	16	後期後葉～晩期初頭	1住	剥片	漆黒・縞	24	31	4	2.18		3.12	25.79	0.36	14.18	1	55.56	星ヶ塔	0.441
	17	後期後葉～晩期初頭	1住	剥片	透明・縞	23	18	3.3	0.94		3.32	25.52	0.31	14.4	0.97	55.48	星ヶ塔	0.275
	18	後期後葉～晩期初頭	1住	剥片	透明	16	16	3.3	0.78		2.77	24.28	0.3	15.13	1.1	56.41	星ヶ塔	0.634
	19	後期後葉～晩期初頭	1住	剥片	透明	10	17	3.2	0.47		3.16	24.22	0.31	15.37	0.99	55.95	星ヶ塔	0.405
	20	後期後葉～晩期初頭	B区	原石	漆黒・縞	46	23	17.1	17.82	角礫	2.48	24.05	0.23	15.09	0.92	57.23	星ヶ塔	0.510
	21	後期後葉～晩期初頭	B区	剥片	透明	19	29	6.5	3.02		3.32	25.02	0.31	15.67	0.99	54.69	星ヶ塔	0.437
	22	後期後葉～晩期初頭	B区	剥片	透明・縞	30	20	3.8	1.89		4.33	25.47	0	14.16	2.03	54	小深沢	0.707
	23	後期後葉～晩期初頭	B区	剥片	透明・霜降	17	16	6.5	1.74		3.9	25.23	0	14.54	1.81	54.51	小深沢	0.274

隠岐（久見）を加えた各産地黒曜石を使用した。

産地黒曜石の分析値（代表値）を表４−３に示した。

産地分析は、先の６元素（岩石学の慣例に従い酸化物の形で表記）の測定の結果をもとに、最遠距離法によるクラスター分析を実施し、分析資料（１点ずつ）と産地資料群の併合距離を検討し、産地資料と分析資料の類似性（非類似性）を検討した。クラスター分析には、IBM 社（旧稿当時の社名は SPSS 社）製多変量解析ソフト SPSS(Ver.14.0Ｊ）を用いた。

表４−３　東日本の主な産地黒曜石の６元素組成
（６元素の酸化物の総和を100としたときの百分率）

都道府県	産地	MnO	Fe_2O_3	SrO	CaO	Rb_2O	K_2O
北海道	白滝	1.5	38.9	0.2	11.8	1.0	46.7
	置戸	1.3	37.6	0.4	18.2	0.9	41.7
	十勝三股	1.6	36.1	0.3	16.6	1.0	44.4
	赤井川	1.5	36.2	0.3	18.0	0.8	43.1
青森	小泊	0.9	38.4	0.4	20.8	0.9	38.7
	出来島	4.9	32.7	0.7	19.6	0.6	41.4
	鶴ヶ坂	1.7	36.6	0.4	15.1	1.0	45.2
	深浦	1.4	55.9	0.0	4.1	0.6	37.9
岩手	雫石	2.0	44.9	0.6	23.1	0.5	28.8
	折居	2.0	45.7	0.6	20.6	0.6	30.5
	花泉	2.1	45.7	0.6	22.3	0.5	28.7
秋田	金ヶ崎	1.9	39.1	2.1	26.9	0.6	29.4
	脇本	5.4	24.1	0.5	22.3	1.1	46.6
宮城	湯の倉	1.9	56.0	1.0	27.3	0.2	13.6
	色麻	3.8	55.3	1.1	24.3	0.2	15.2
	秋保	2.3	58.4	0.9	29.0	0.2	9.3
山形	月山	4.3	30.0	0.6	17.4	0.8	46.8
新潟	板山	3.3	29.0	0.4	17.7	1.1	48.5
	上石川	1.7	34.5	0.6	19.9	0.9	42.4
	佐渡	0.9	36.7	0.3	14.7	1.1	46.3
栃木	高原山	1.4	48.5	0.6	20.7	0.6	28.2
	日光	1.7	62.1	0.8	27.5	0.1	7.8
長野	小深沢	3.7	28.2	0.1	14.7	1.8	51.5
	男女倉	2.5	32.0	0.4	16.1	1.0	48.0
	星ヶ塔	3.1	27.3	0.2	13.8	0.9	54.6
	麦草峠	1.6	33.8	0.7	17.2	0.6	46.0
神奈川	畑宿	2.4	61.4	1.0	23.9	0.1	11.3
静岡	上多賀	1.7	53.1	0.9	24.2	0.2	19.9
	柏峠	1.4	51.1	0.6	24.0	0.3	22.7
東京	神津島	3.2	33.8	0.5	19.1	0.6	42.8
島根	隠岐	1.6	45.1	0.0	10.2	1.1	42.1

４．産地分析の結果と考察

表４−３に分析資料の６元素組成を示した。また、個々の分析資料と産地資料群の分析値をクラスター分析した結果、最も類似性の高い（非類似性の低い）産地資料との併合距離（以下、産地資料との併合距離をいう）とその産地も表４−３に示した。産地資料との併合距離が比較的小さく（1.0未満）、個々の分析値にも矛盾がないものを推定産地とした。産地資料との併合距離が比較的大きい（1.0以上）ものは「不明」とした。

本分析により得られた茅野遺跡・下新井遺跡出土黒曜石資料の産地構成は、茅野遺跡が星ヶ塔産39点、小深沢産８点、麦草峠産１点、板山産１点、不明２点、下新井遺跡が星ヶ塔産15点、小深沢産５点、高原山産１点、板山産１点、不明１点であった。

両遺跡出土黒曜石資料の帰属時期はいずれも後期後葉～晩期前葉と考えられるが、遺跡・遺構ごとに若干の時期差があるので、時期ごとの産地構成等の変化について検討してみたい。下新井遺跡は正式報告書が刊行されていないが、後期後葉～晩期初頭の土器が主体であり、黒曜石はこの時期に帰属するものと推定される。遺構・出土位置ごとに時期が若干異なる可能性が高いが、分析資料数が少ないのでここでは23点を一括して傾向を探る。また、茅野遺跡は後期末葉から晩期前葉の土器を主体とする遺跡である。今回分析を行ったのは後期末葉～晩期初頭（高井東式新段階～安行３ａ式）を主体とする18号住

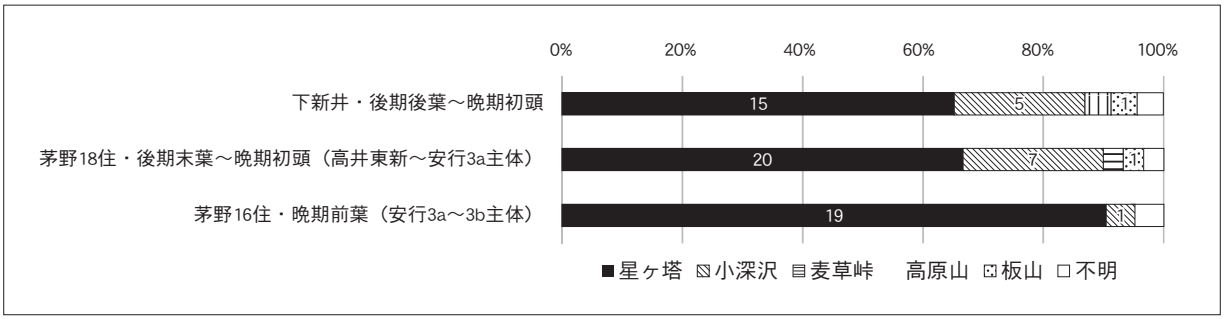


図４−15　茅野遺跡・下新井遺跡出土黒曜石の産地の変化

居址出土資料30点と、晩期前葉（安行３ａ式～３ｂ式）を主体とする16号住居址出土資料21点を分析単位として比較し、その結果を図４-15に示した。

後期後葉～晩期初頭の下新井遺跡出土資料は、星ヶ塔産65％、小深沢産22％である。そして、後期末葉～晩期初頭の茅野遺跡18号住居址出土資料は、星ヶ塔産67％、小深沢産23％である。両者はほぼ同じ傾向を示している。また、麦草峠産（長野県）、高原山産（栃木県）、板山産（新潟県新発田市）など、少量ながら他の産地の黒曜石が含まれる点も共通する。このうち板山産黒曜石の存在については、茅野遺跡において東北地方に分布の中心がある瘤付土器（後期後葉～末葉）が一定量出土していることとあわせて、その搬入経路を推定する上で示唆的である。

これに対し晩期前葉の茅野遺跡16号住居址出土資料は、星ヶ塔産91％、小深沢産５％であり、前時期までと比べて星ヶ塔産の占有率が増加する傾向が認められた。同様の傾向は、群馬地域のほかの遺跡においても確認されており、晩期初頭に黒曜石流通の画期が存在していることが理解できる（大工原 2007；建石・菅頭・津村・二宮 2008；大工原 2011；建石・三浦・村上・井上・朴・津村・二宮 2011ほか）。これらは黒曜石の交易ルートと流通システムが変化したことを示すものといえる。また、その直接的な原因としては、長野県の黒曜石原産地の採掘場所と採掘方法の変化に対応するものである可能性が高い。すなわち、後期中葉では星糞峠（本分析では「小深沢産」と判別される）において流紋岩質粘土層（二次堆積層）から黒曜石が採掘されているが（大竹・矢島・太田・村本 2015；大竹・矢島・太田 2020ほか）、晩期前葉には星ヶ塔において鉱脈からの直接採掘が行われている（宮坂 2011，2017，2020ほか）。採掘される黒曜石は後者が圧倒的に多く、群馬地域では南部に黒曜石流通の大動脈が形成され、黒曜石は威信財的性格から生存財的性格へ変化したことも推察される（大工原 2016）。

群馬地域に限らず、縄文時代後・晩期に帰属する黒曜石資料の産地分析については、いまだ土器型式レベルあるいはそれに準じる細かな帰属時期の検討ができる資料を対象とした分析事例の蓄積に乏しい現状がある。本稿ではこの点で比較的良質な資料群の産地分析報告が実施できたため、そこから読み取れるやや踏み込んだ考古学的所見を披歴することができた。今後、同様の良質な資料群にかかる産地分析事例が蓄積され、より具体的な考察が重ねられることを期待したい。

引用文献

大竹幸恵・矢島國雄・太田光春・村本知栄実　2015　『鷹山遺跡群Ⅶ』長和町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

大竹幸恵・矢島國雄・太田光春　2020　『鷹山遺跡群Ⅷ』長和町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

大工原豊　2007　「黒曜石交易システム―関東・中部地方の様相―」『縄文時代の考古学』６，同成社，pp.164-177

大工原豊　2011　「縄文時代における黒曜石の利用と展開―北関東の様相を中心として―」一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会，pp.35-46

大工原豊　2016　「茅野型石鏃の研究」『資源環境と人類』６，明治大学黒耀石研究センター，pp.1-13

建石　徹・菅頭明日香・津村宏臣・二宮修治　2008　「黒曜石の縄文石器」『ストーンツールズ』安中市ふるさと学習館，pp.68-72

建石　徹・三浦麻衣子・村上夏希・井上優子・朴　嘉瑛・津村宏臣・二宮修治　2011　「栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析―旧石器時代・縄文時代資料を中心として―」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会，pp.269-306

宮坂　清　2011　「縄文石器における黒曜石の利用形態」『季刊考古学』119号，雄山閣，pp.50-54

宮坂　清　2017　『国史跡　星ヶ塔黒曜石原産地遺跡』下諏訪町教育委員会

宮坂　清　2020　「縄文石器の原産地（黒曜石原産地）」『縄文石器提要』ニューサイエンス社，pp.187-196

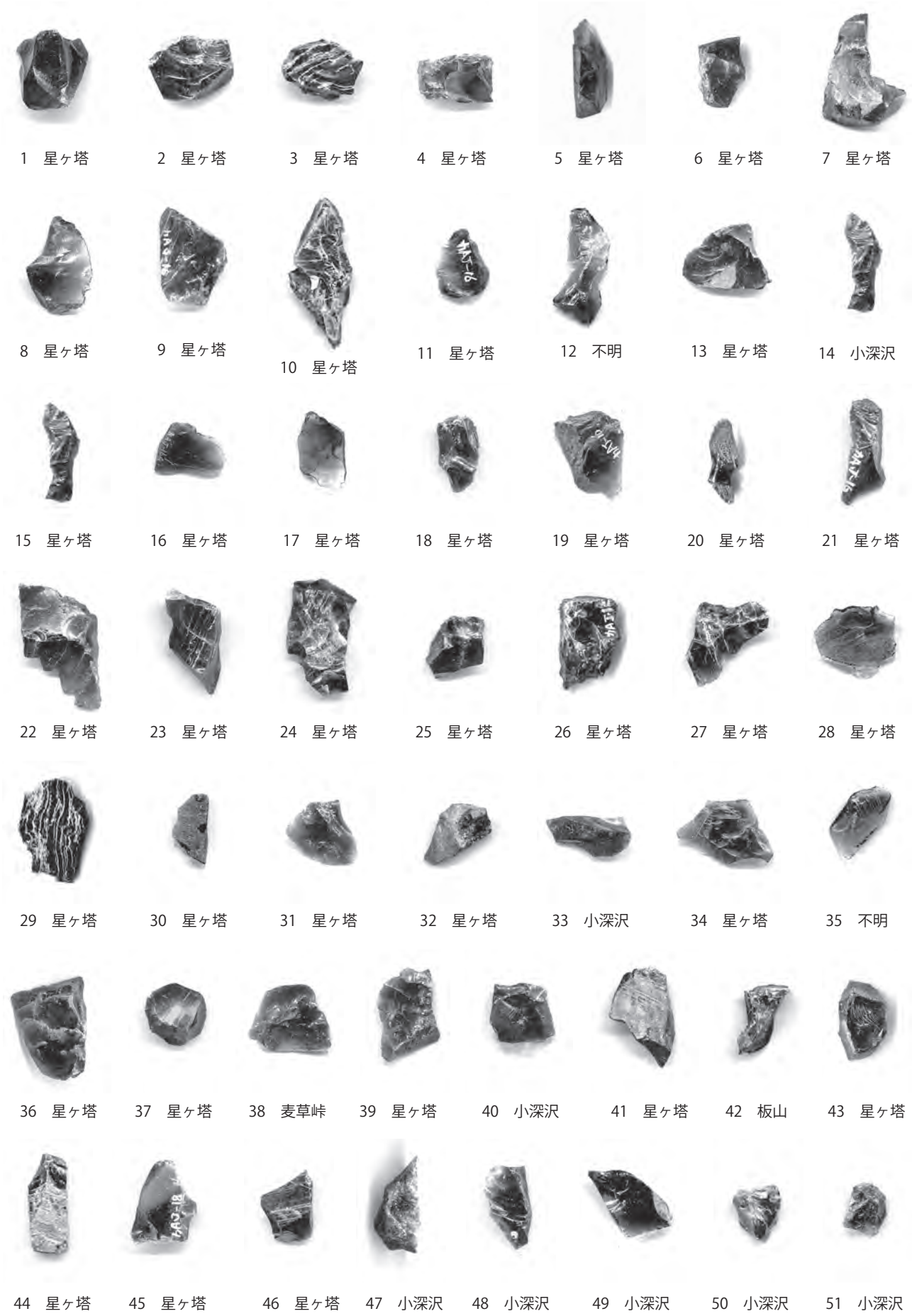


図４−16　茅野遺跡の黒曜石分析資料（縮尺2/3）

図４−17　下新井遺跡の黒曜石分析資料（縮尺2/3）

第５章　ま　と　め

本書には平成元年度、平成２年度に榛東村教育委員会により行われた茅野遺跡の発掘調査により得られた出土資料を図化し、掲載した。

縄文土器は実測図929点、写真924点を掲載した。Ａ区とＥトレンチから多くの土器が出土している。Ａ区では前期（諸磯ａ式）から晩期（千網式）に比定される土器型式が確認され、断続にではあるが3,400年間の人々の活動の痕跡を示す。

なかでも後期後葉段階の土器群の考察から、この時期には東北地方から関西地方までの広範囲にわたる多様な土器がもたらされており、このことは後期中葉の加曽利Ｂ３式期には見られなかったことから、後期中葉から後葉にかけての時期に、人びとのネットワークの範囲が拡大する現象があったことがわかった。

後期後葉高井東式段階の土器群ならびに晩期前葉（安行３ａ式期）の土器群の豊富さは、今後、情報共有により研究の深化につながるだろう。また、後期後葉から晩期前葉の時期には、東北方面、南関東方面、長野方面などからの人々の活発な往来があった状況が推測される。

土製耳飾りは、茅野遺跡の特徴を示す遺物でもあるが、577点出土した。そのうち440点を図化し、全ての写真を掲載した。時期は後期後半から晩期前葉の時期に比定される。そのうち遺構に伴い出土したものはおよそ60％である。分類方法として８つの系列の設定を試みた。花弁系列（小型）は後期後半から晩期前葉に群馬・埼玉を中心に土製耳飾りの優品として非常に影響力のある系列であった。一単位系列は土製耳飾り分布域でも長野方面で豊富なバリエーションを持ち、独自の特徴を持つ一群があり、茅野遺跡をはじめ群馬県においてもその影響がみられる。一単位系列の精製品は、同時期か時期のやや下る、小型の花弁系列に影響を与える。晩期前葉から中葉にかけて、花弁系列のなかでも千網型ともいう大型品が発達するが、茅野遺跡では大型品は破片２点とわずかであり、最も土製耳飾りが華美化する直前に終焉を迎えている。また、彫込系列、車輪系列（この２系列は互いに密接に影響しあう）は、土製耳飾りを使用する関東地方に広く分布するが、茅野遺跡と遠方の遺跡で画一性の強いデザインのものがみられることから、広域デザインとローカルデザインが系列内に存在することを指摘した。車輪系列のなかに茅野遺跡に特有のバリエーションの群があり、これらを茅野デザインと仮称することとした。群馬県域のみならず、埼玉、新潟、栃木、長野といった周辺地域に至る、土製耳飾り分布圏における系列相互のかかわり方を、出土時期の精査とあわせて検討を重ねることで、それぞれの遺跡の性格を土製耳飾りの系列から読み解くことが可能であると考える。

ほかにおもな土製品類としては、土偶（破片）21点や、透かし文様のあるものなど手燭形土製品４点のほか、土版１点、小型土器14点が出土した。

石器の組成は、当該期の一般的な生業活動を行う集落遺跡にみられるものといえる。特徴的な点をあげるとすれば、晩期前葉に大量の石鏃模造品を保有している。509点を図化した。本書考察編において大工原氏は石鏃模造品の用途に触れており、祭祀にかかわる遺物と捉えなおす試みは今後の研究に様々な示唆を与えうるだろう。また、黒曜石は入手がしにくい石材であったとみえ、晩期前葉には、超小型原石に直接押圧剥離して制作した、本遺跡に特徴的な細身の凸基有茎鏃を有しており、これを茅野型石鏃と呼ぶこととした。

石製品では有文の岩版が多くみられることも茅野遺跡の特徴である。本遺跡出土の岩版55点を７類に分類した。使用痕観察から回転擦痕と、たすき掛け状擦痕が観察され、制作→使用・行為（回転、たすき掛け）→被熱、破損→廃棄の過程が想定された。今後、周辺地域との比較検討資料として活用される

ことを期待したい。石棒は27点（大型４点、中～小型23点）、石剣39点が出土した。ほとんどが破損品であるが完形品もある。石材は片岩が多い。装飾品では玉類が14点出土している。

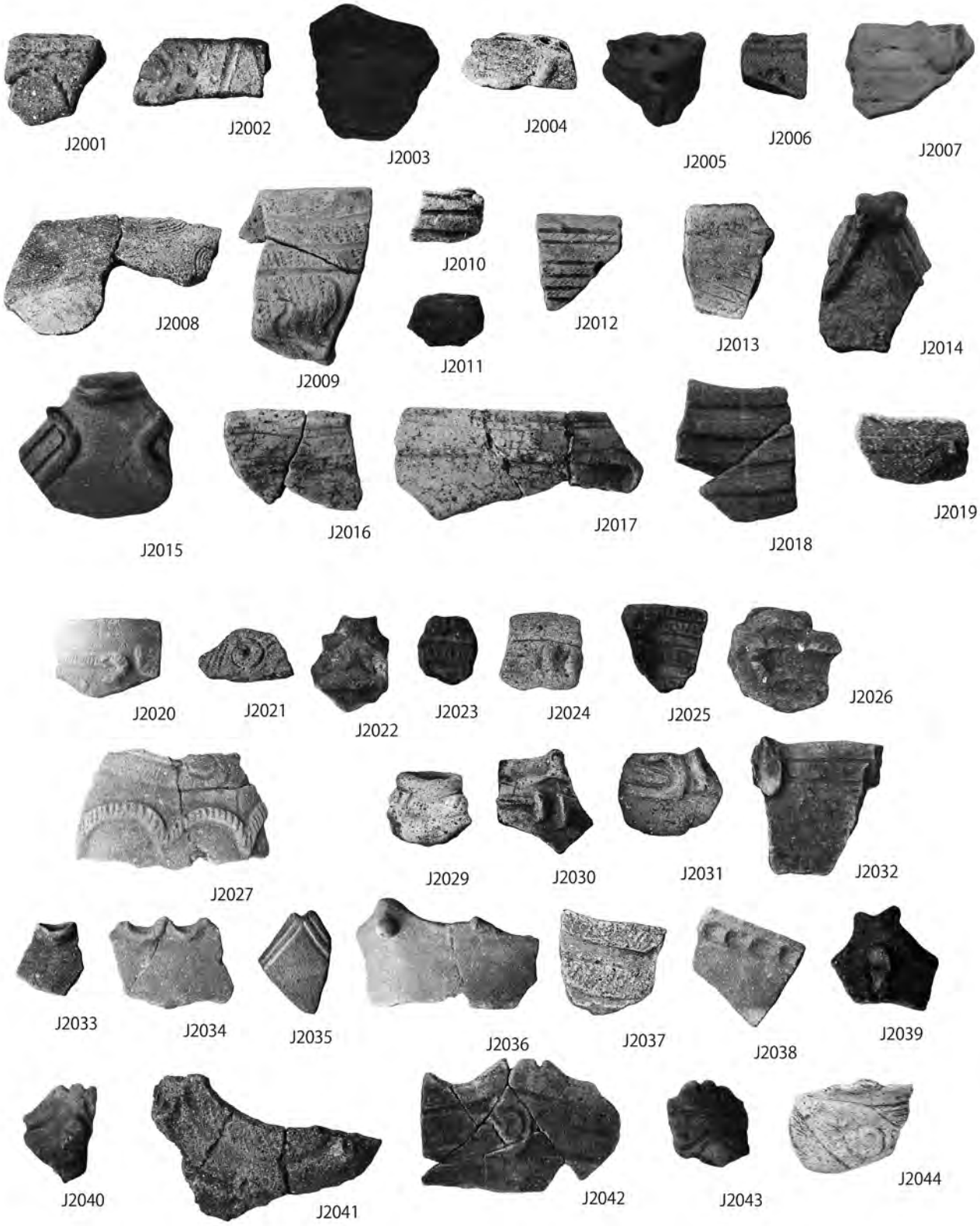
茅野遺跡に搬入されている石器および石器石材については、黒曜石、硬質頁岩ともに半径30キロ圏内の遺跡における集団を介して間接的に入手したと想定したうえで、すべて半径30キロ圏内に存在する可能性からもたらされた可能性が高い。発掘当時には岩版の素材である白色凝灰岩を東北地方に由来する可能性を指摘していたが、その後の研究の進展により、利根川上流域で白色凝灰岩を産出することがわかった。また、石棒、石剣、石皿、棒状礫、板状石製品として結晶片岩を使用しているが、土製耳飾りの胎土中にも結晶片岩が含まれているものがみられた。

黒曜石の産地分析は、茅野遺跡出土の黒曜石製資料51点と下新井遺跡（榛東村新井）の同資料23点を扱い、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析（非破壊法）により行った結果を掲載した。後期後葉から晩期初頭に茅野遺跡にもたらされた黒曜石の産出地は、星ヶ塔産（長野県）、小深沢産（長野県）がほとんどを占め、また少量だが麦草峠産（長野県）、高原山産（栃木県）、板山産（新潟県）のものも見られたが、これは茅野遺跡よりも時期をややさかのぼる下新井遺跡でも同様であった。晩期前葉に比定される茅野遺跡16号住居址出土の黒曜石は20点中19点が星ヶ塔産であったことから、各期の間に黒曜石流通の画期が存在する可能性が指摘された。

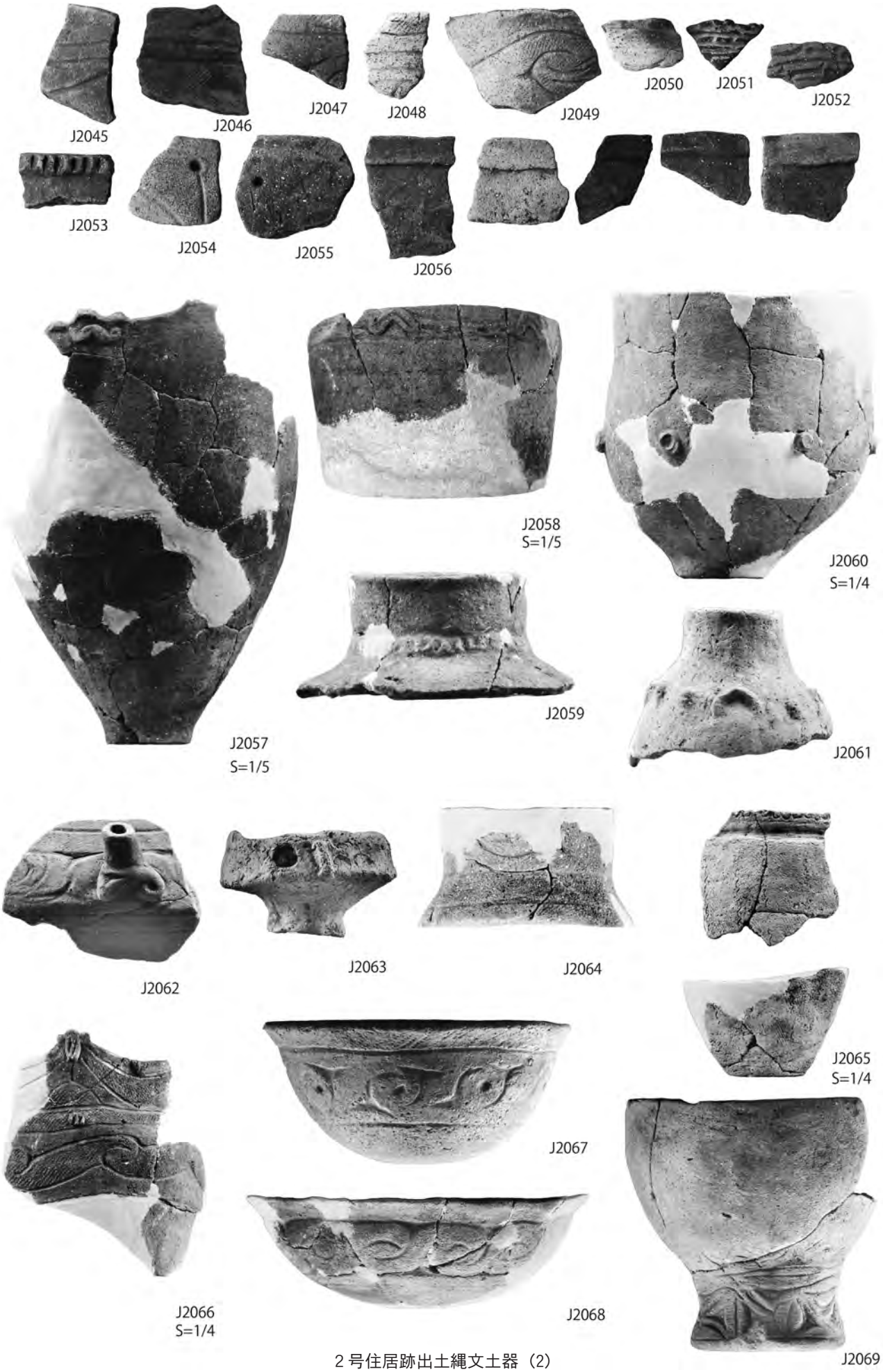
以上茅野遺跡出土遺物の概要をまとめた。発掘後30年以上経過しての発刊となった。茅野遺跡は遺物の量・種類ともに非常に豊かな内容を示し、改めてその価値を再確認することとなった。遺物編として本書に掲載することのできた資料はそのわずか一部に過ぎないが、本書をデータベースあるいは窓口として、一人でも多くの皆様が、茅野遺跡についての理解を深める機会を得ることを希望する。

写　真　図　版

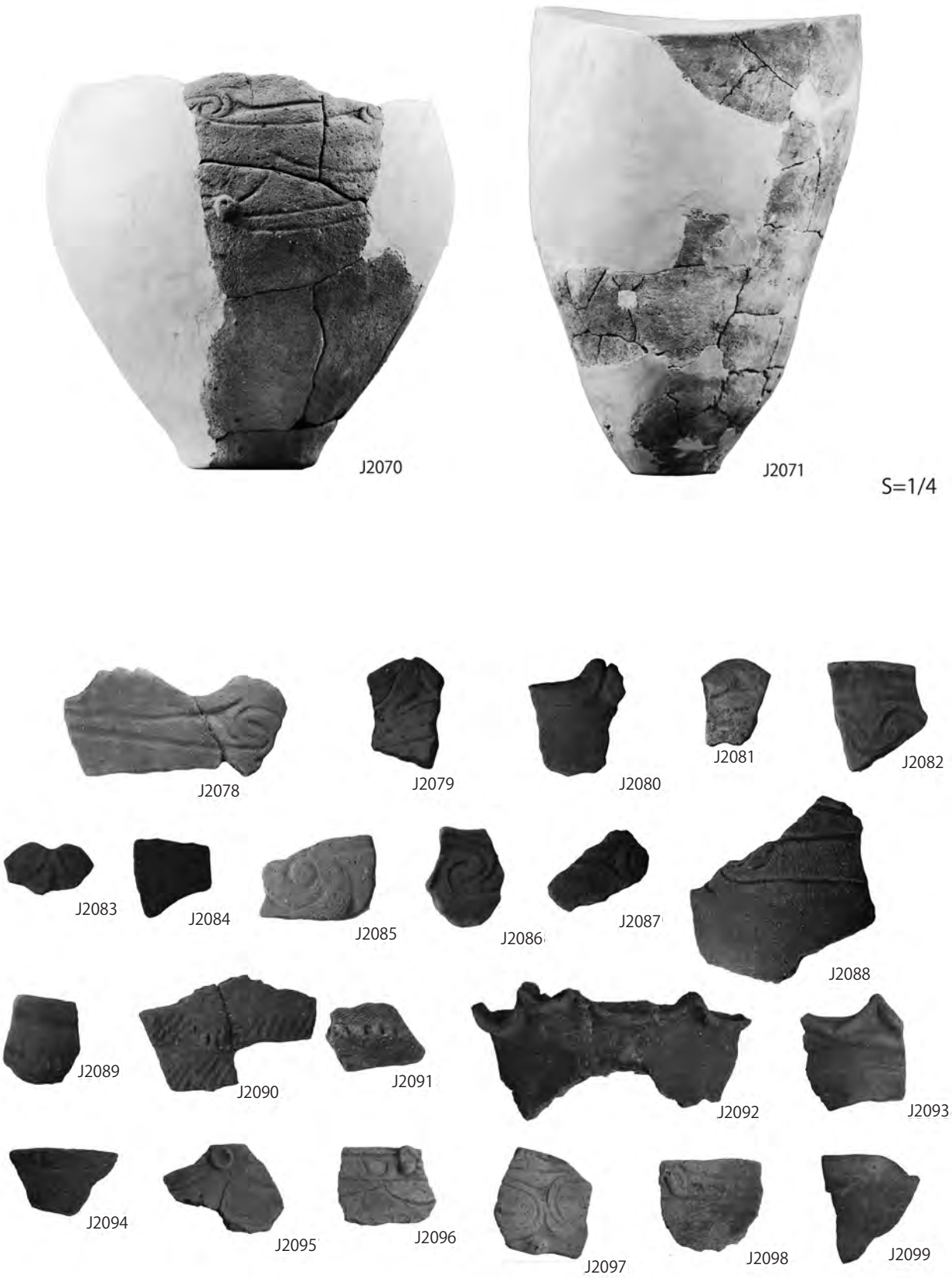
１号住居跡出土縄文土器



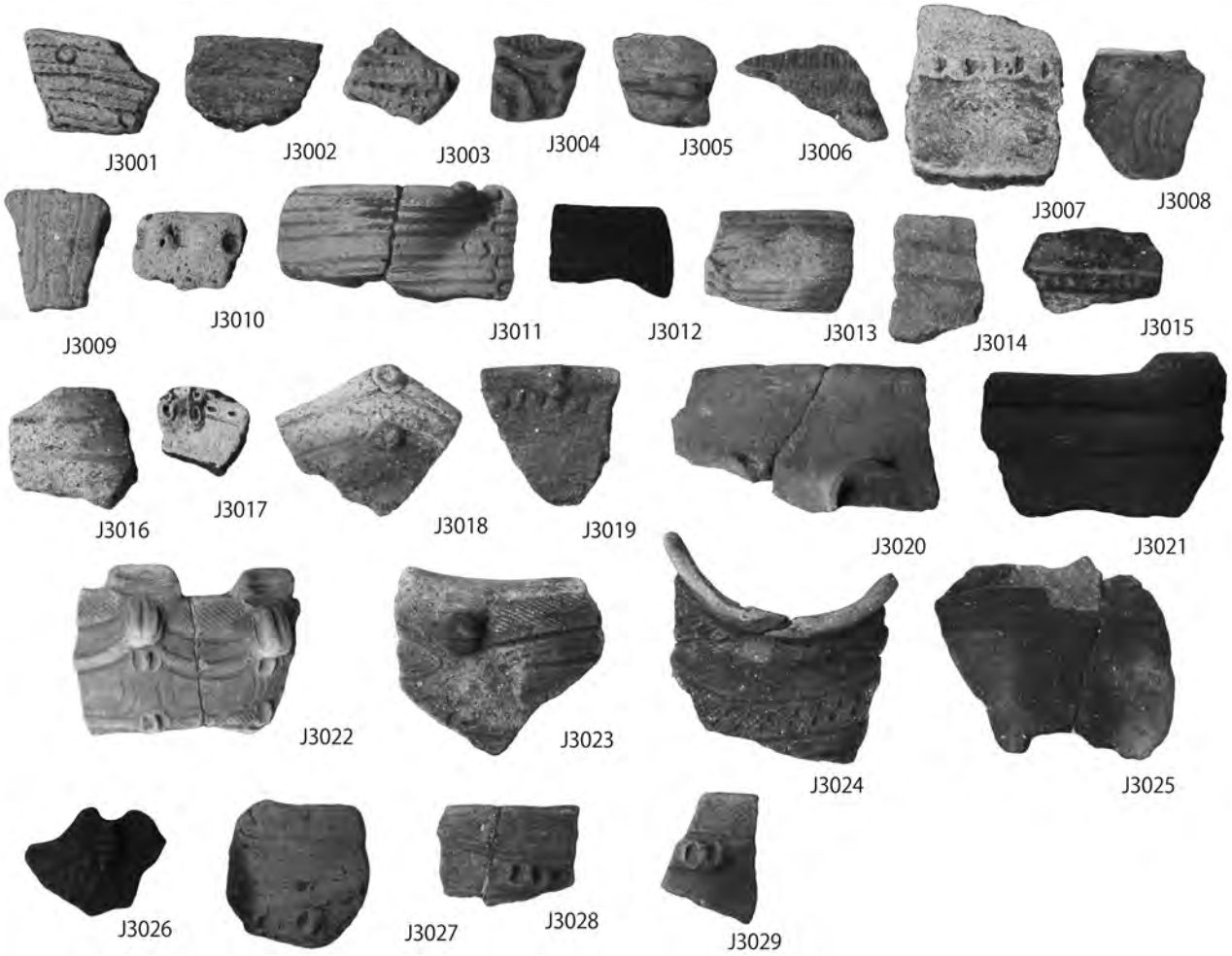
２号住居跡出土縄文土器（1）



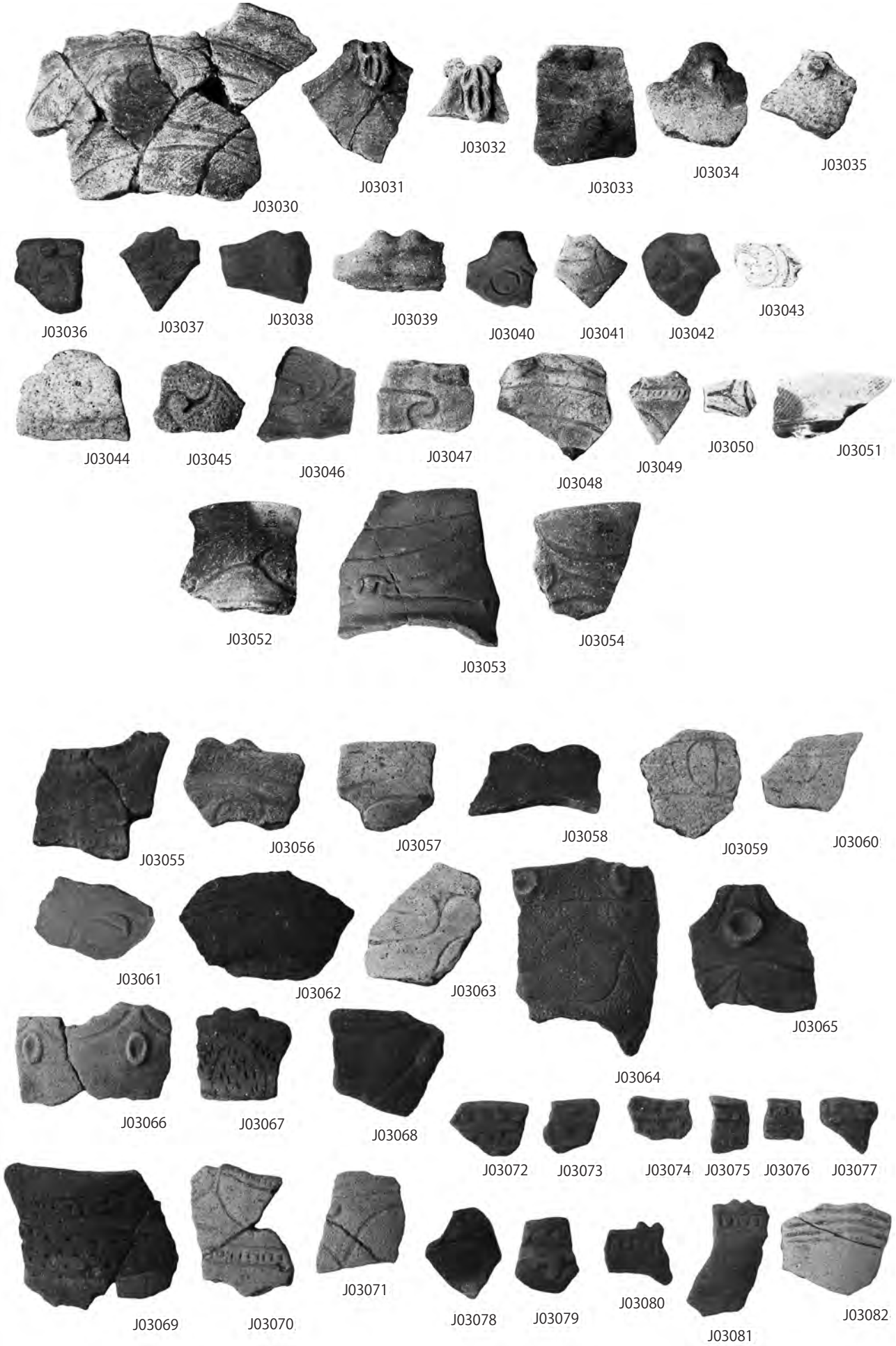
２号住居跡出土縄文土器（2）



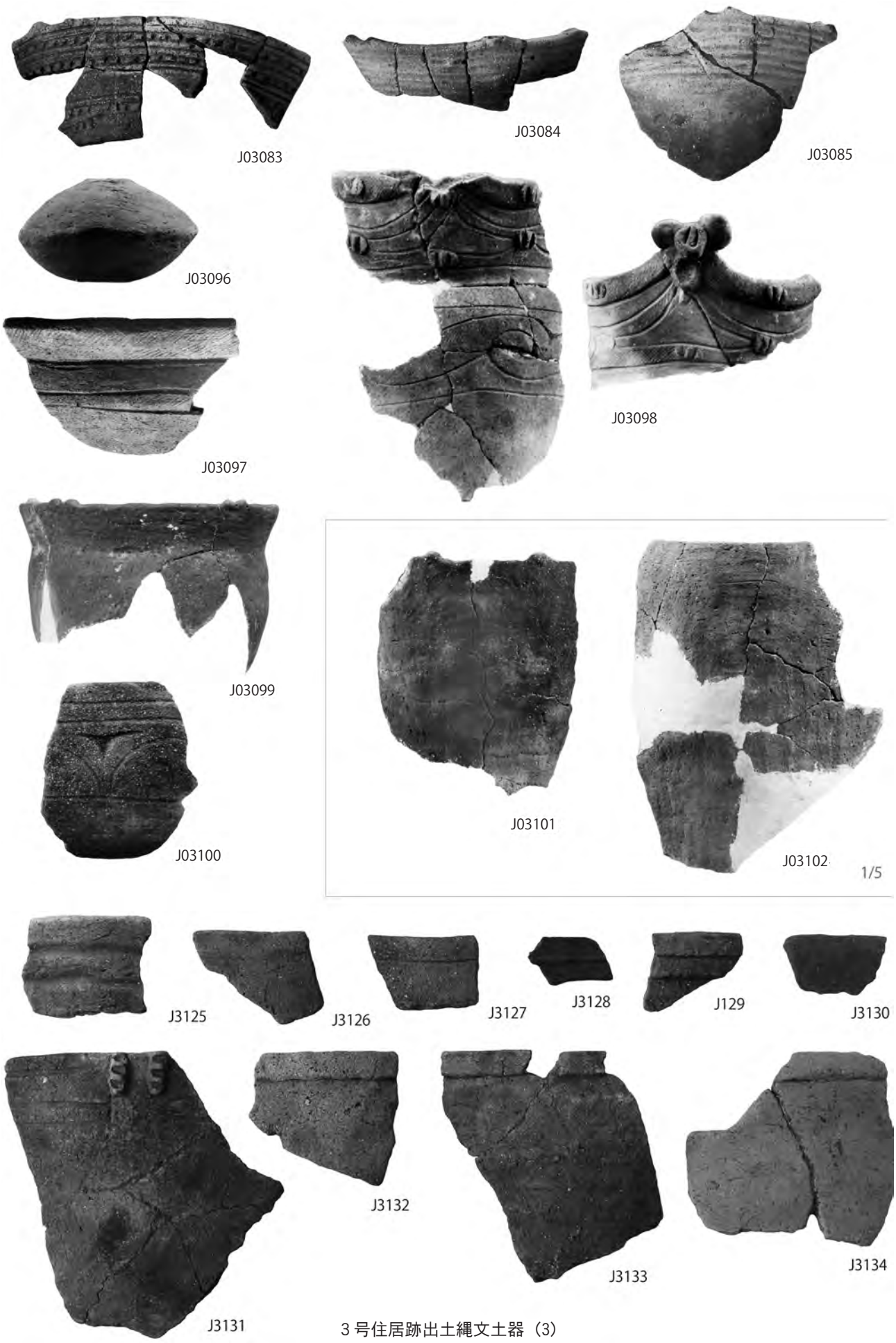
２号住居跡出土縄文土器（3）



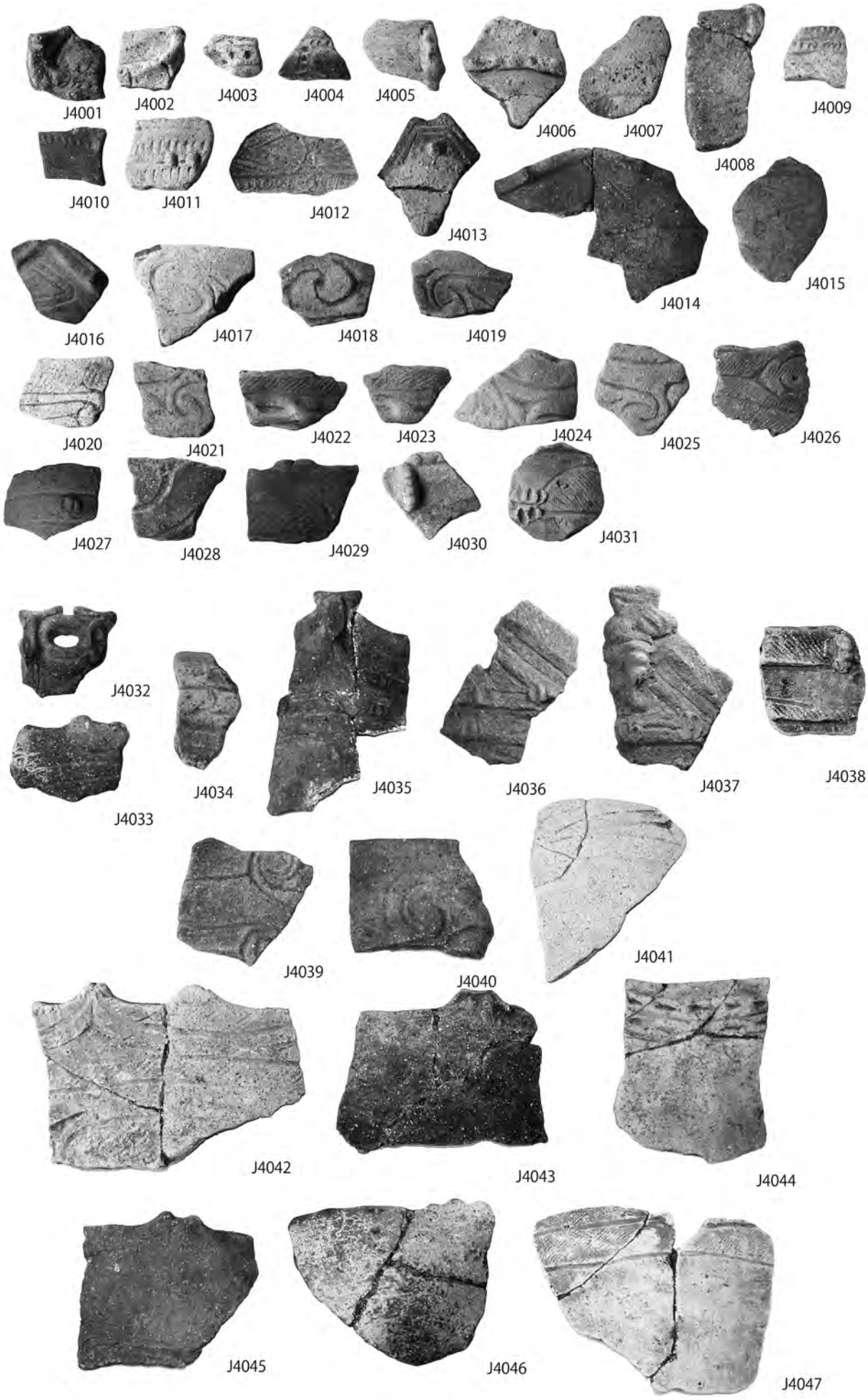
３号住居跡出土縄文土器（1）



3号住居跡出土縄文土器（2）

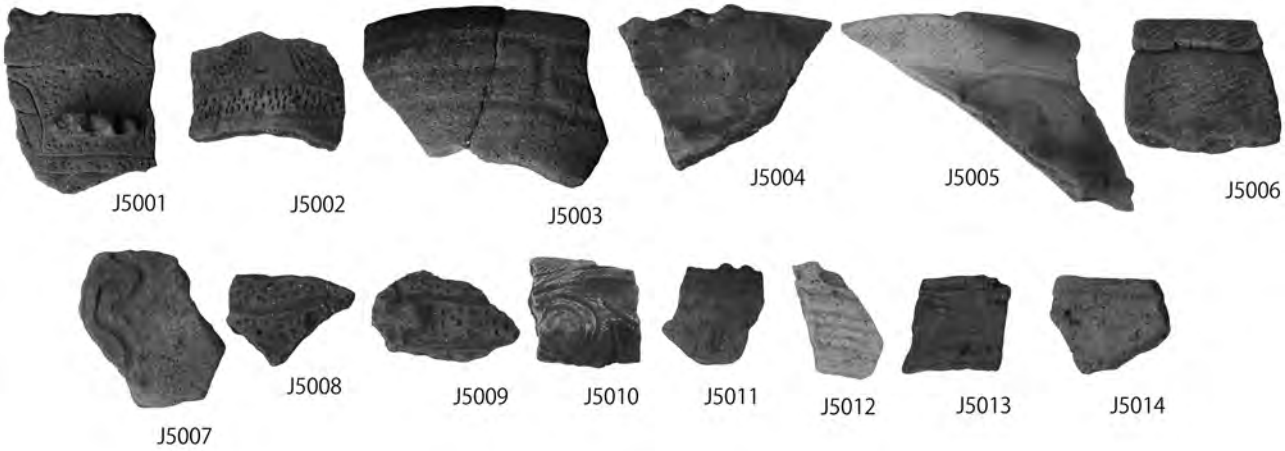


３号住居跡出土縄文土器（3）

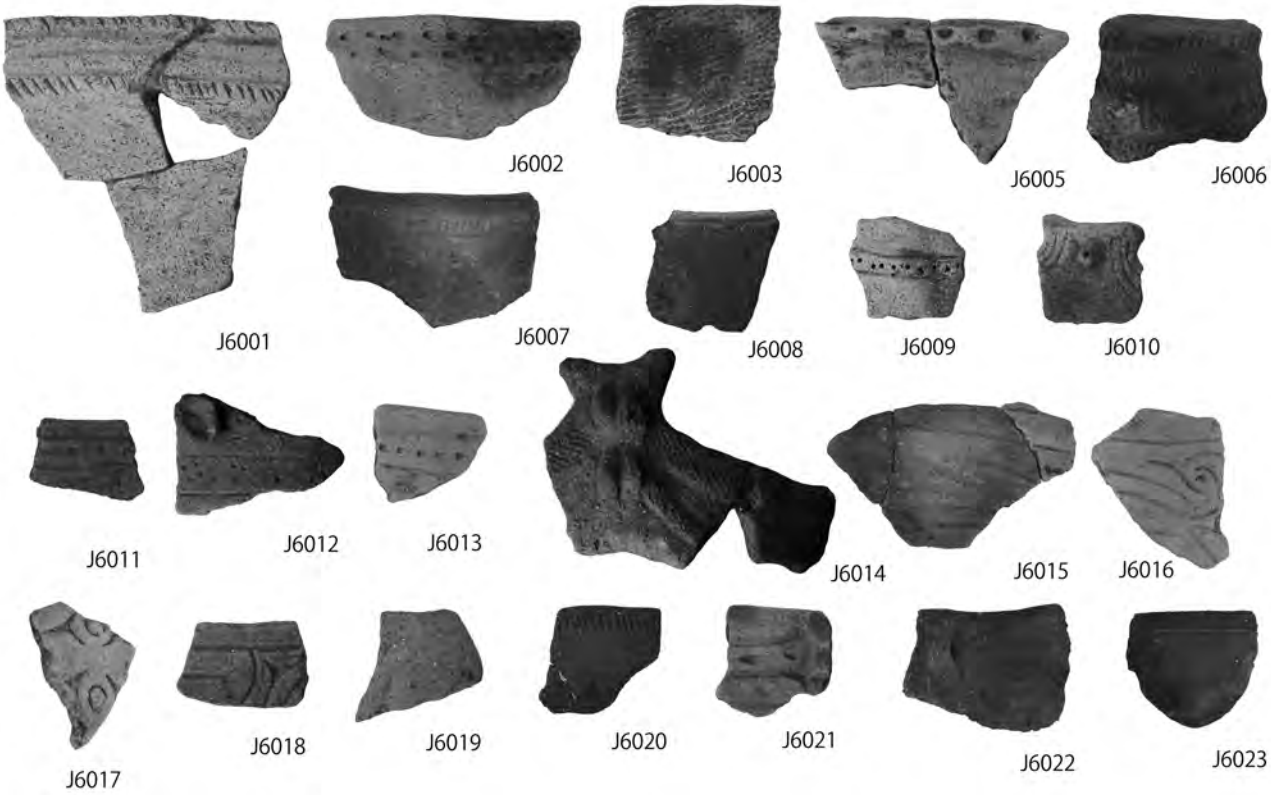


４号住居跡出土縄文土器（1）

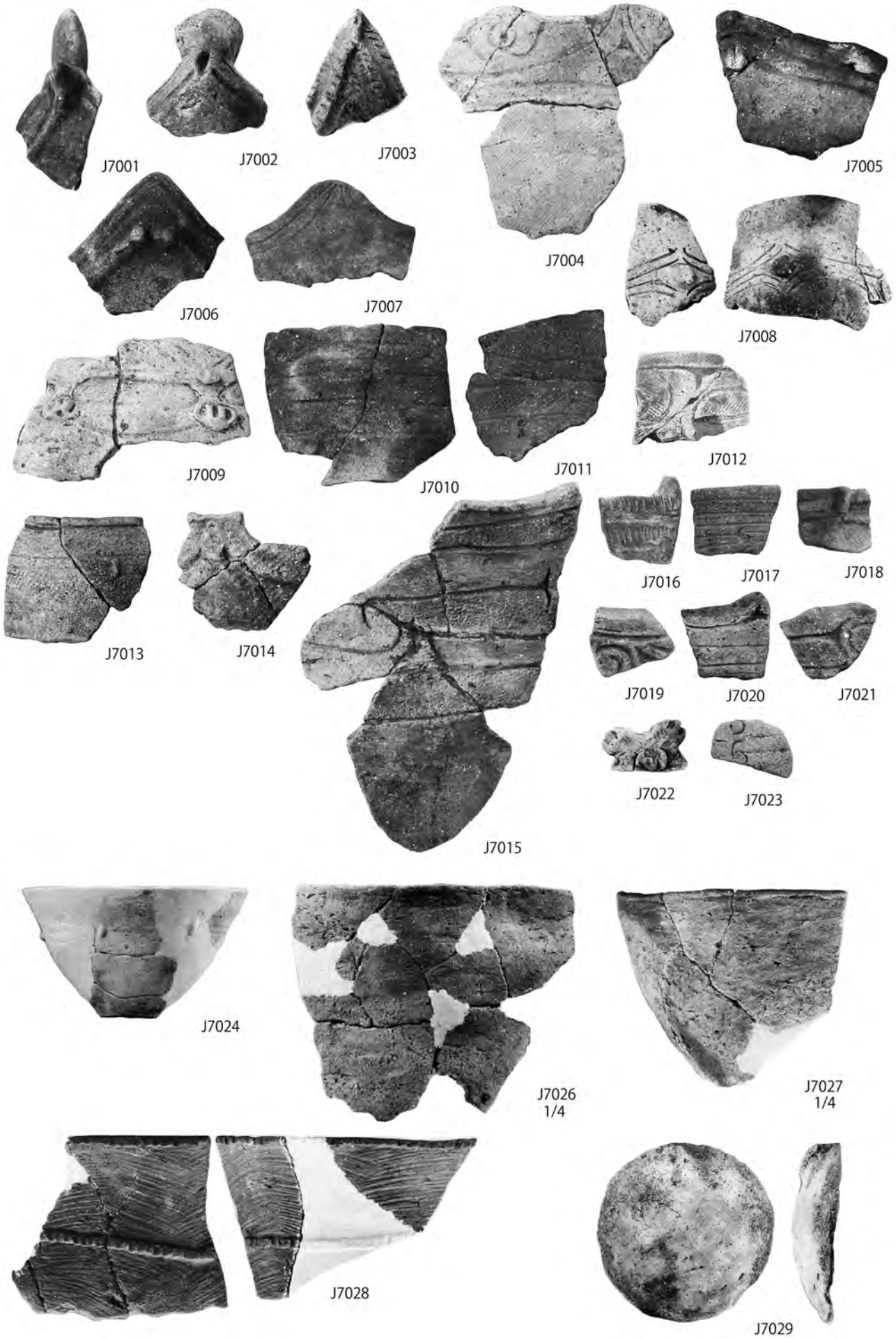
4 号住居跡出土縄文土器（2）



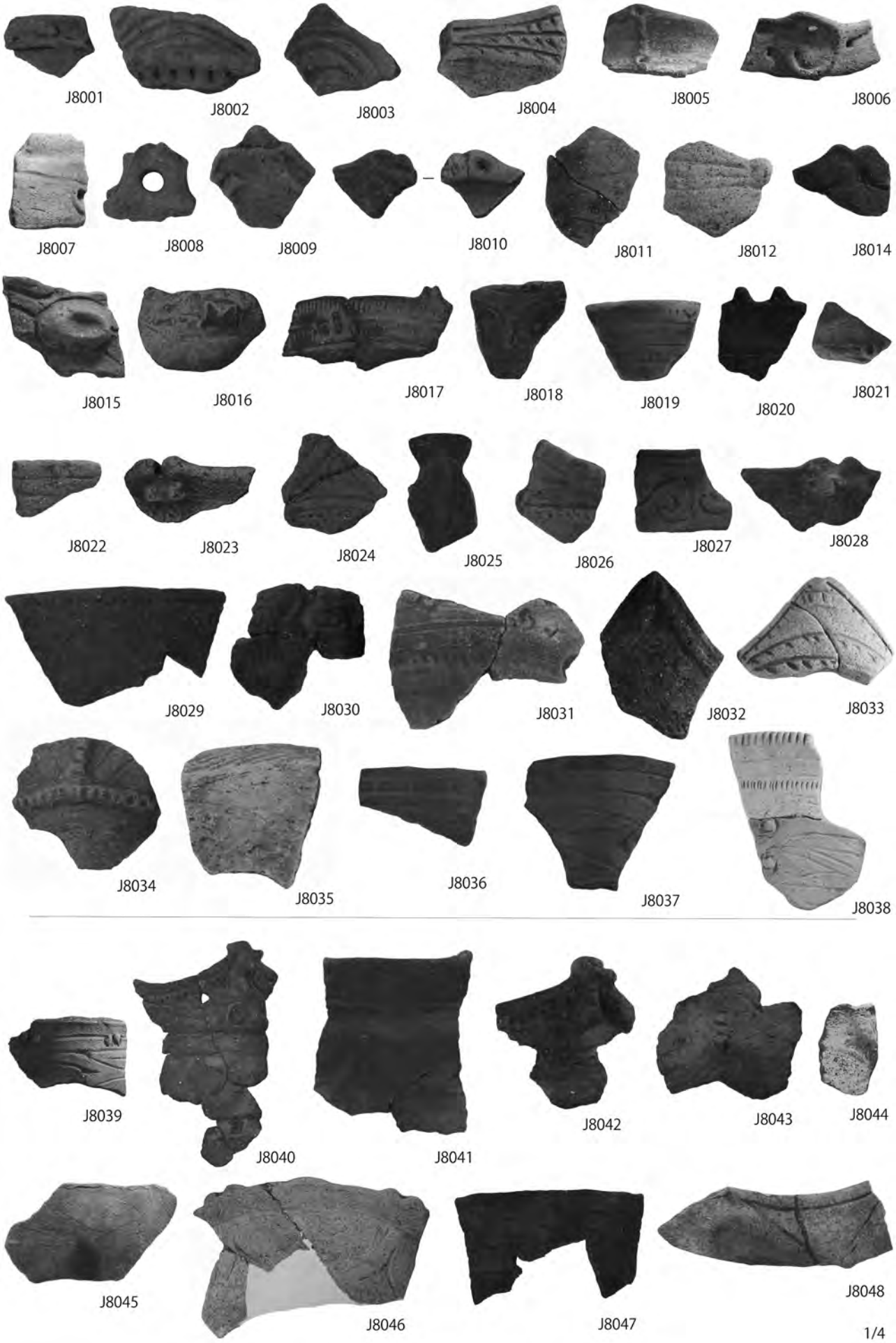
5 号住居跡出土縄文土器



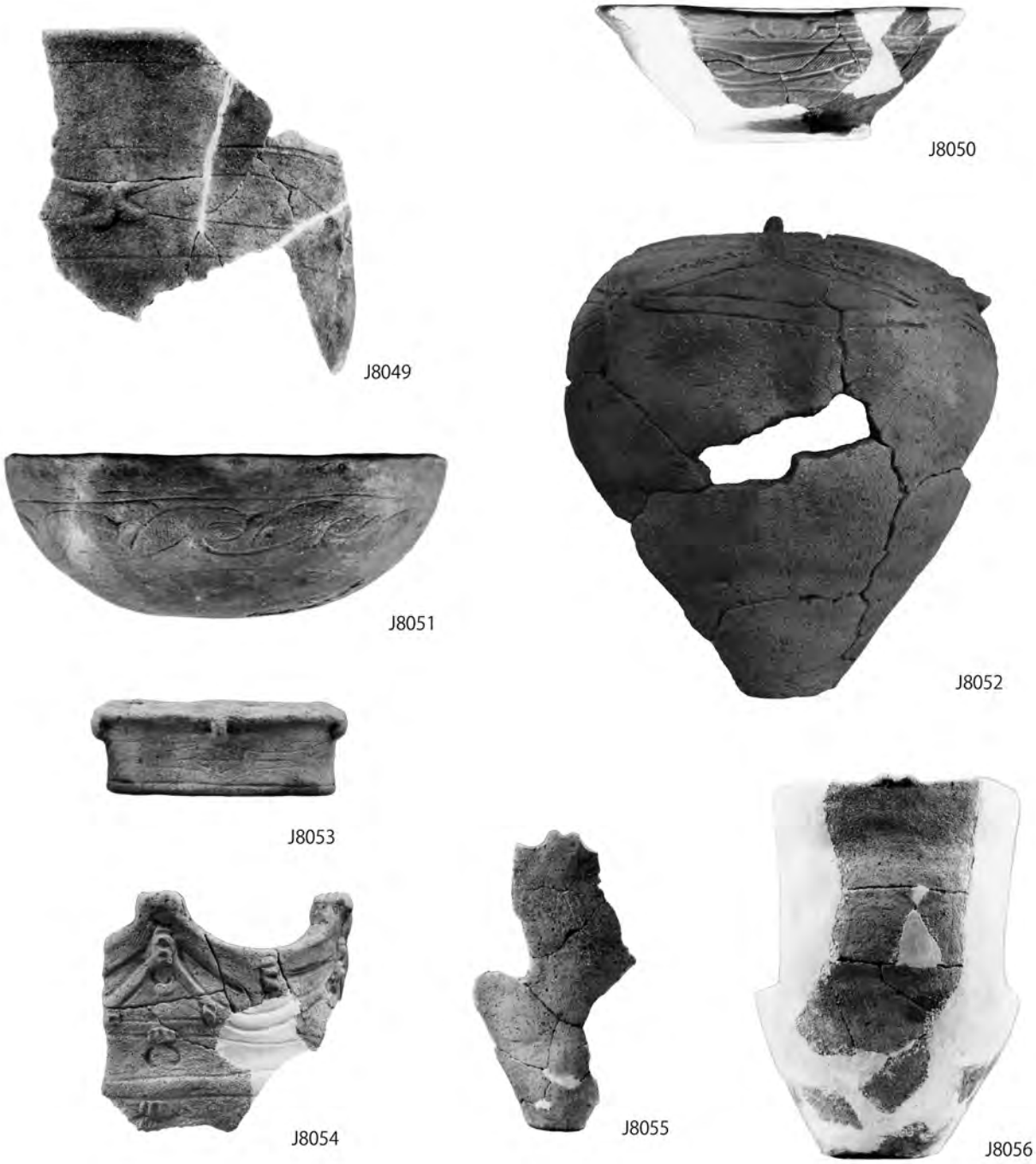
6 号住居跡出土縄文土器



7 号住居跡出土縄文土器

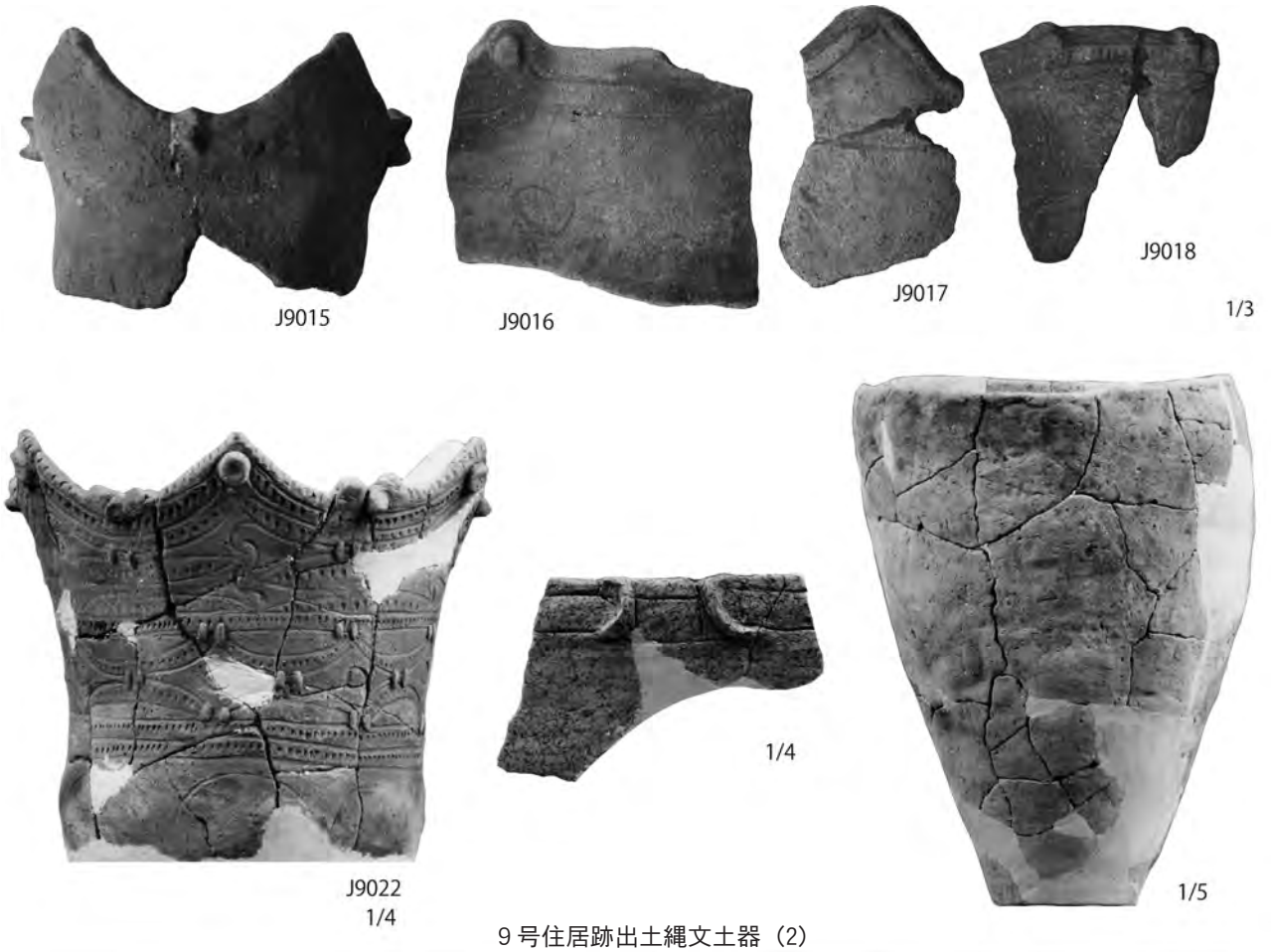


８号住居跡出土縄文土器（1）

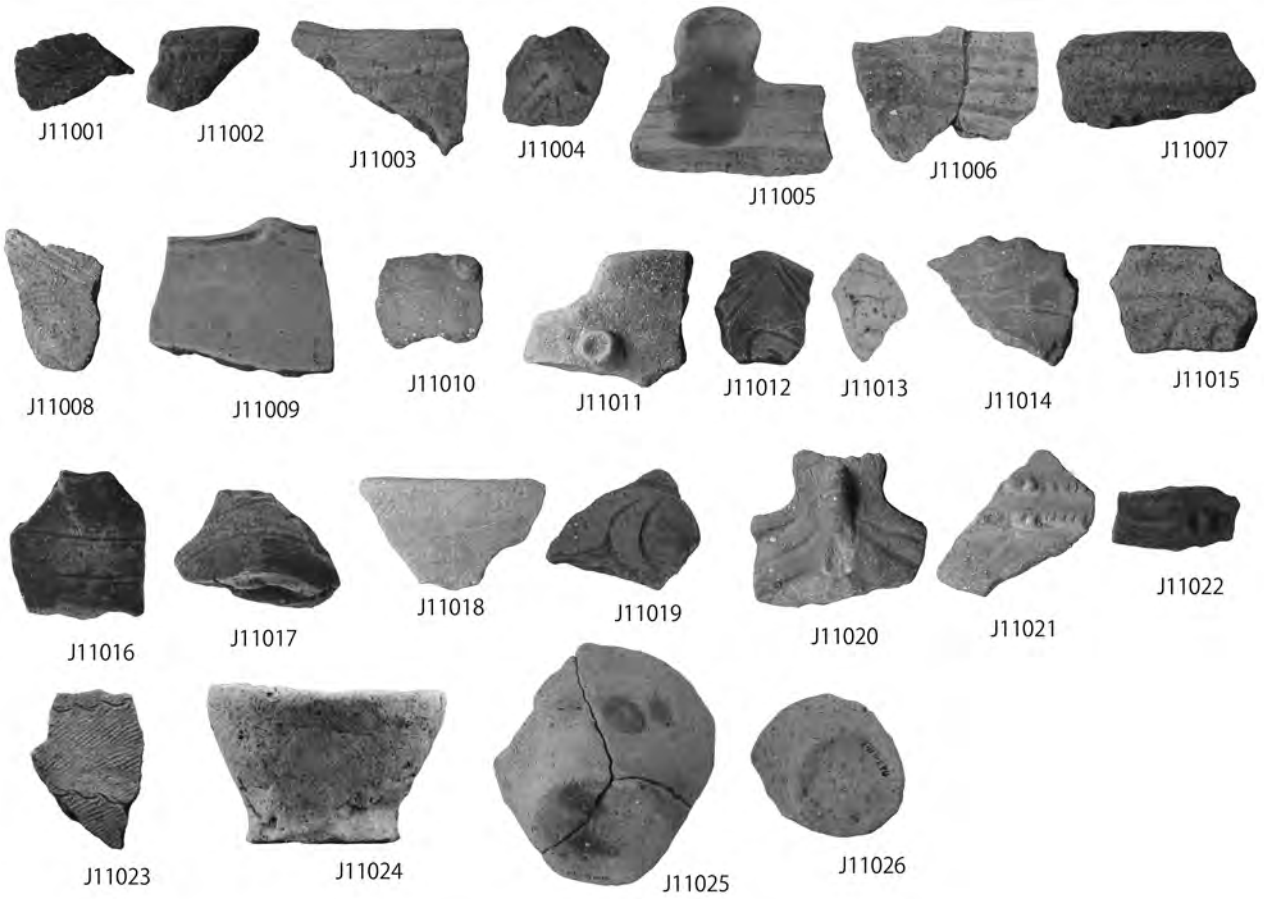


8 号住居跡出土縄文土器（2）

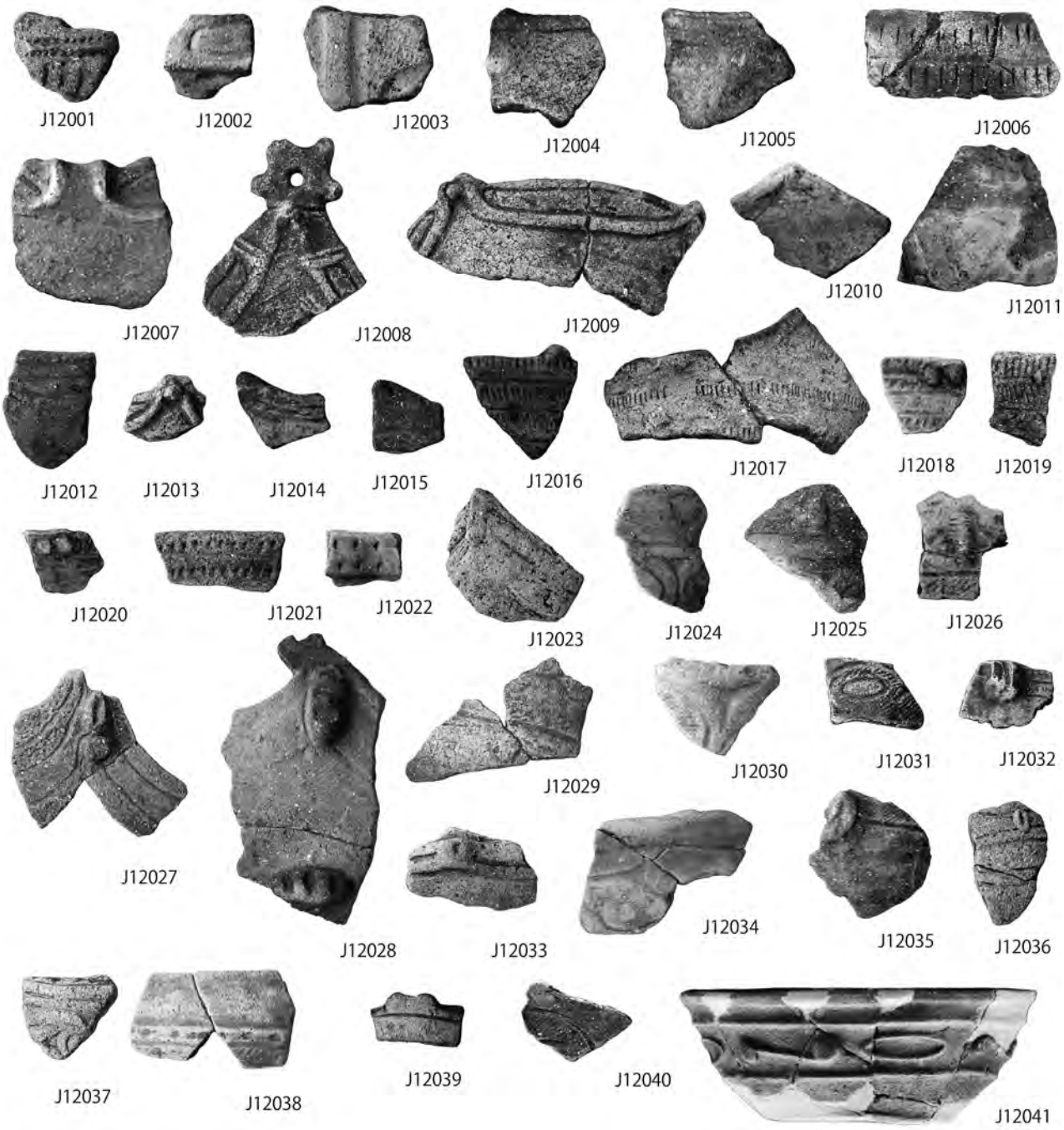
9 号住居跡出土縄文土器（1）



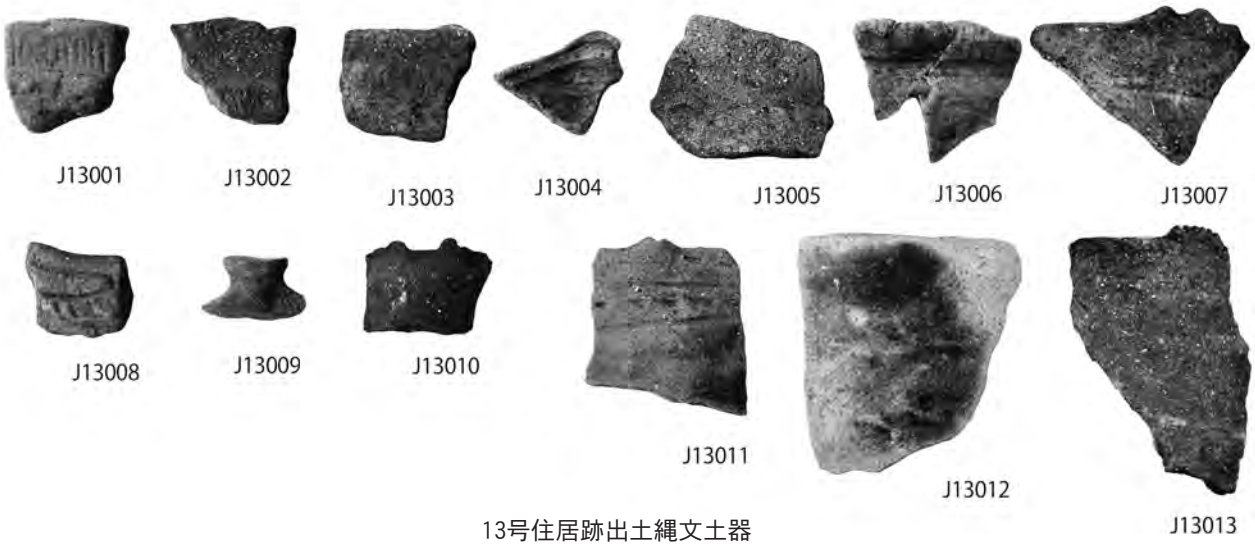
9 号住居跡出土縄文土器（2）



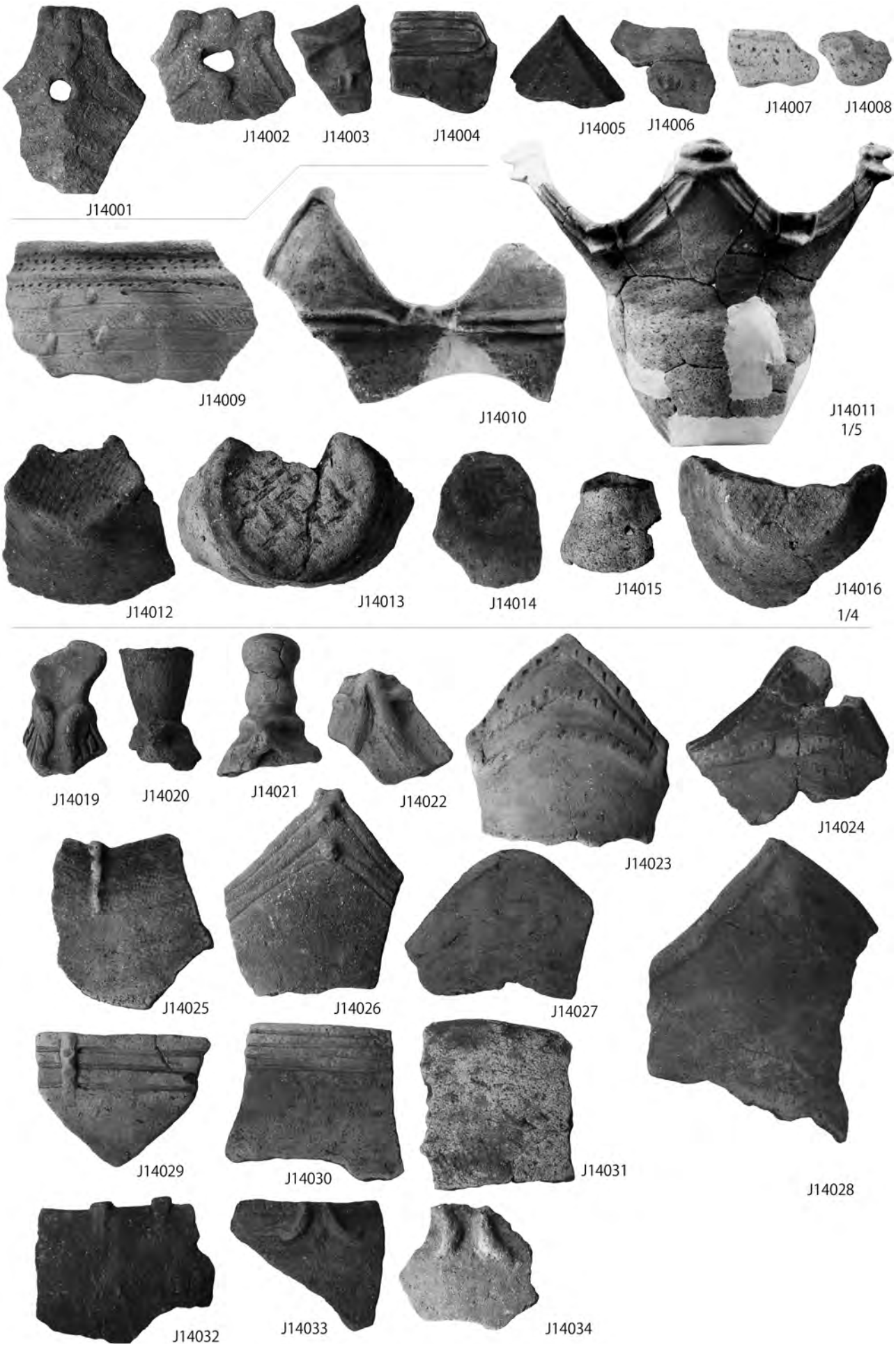
11号住居跡出土縄文土器



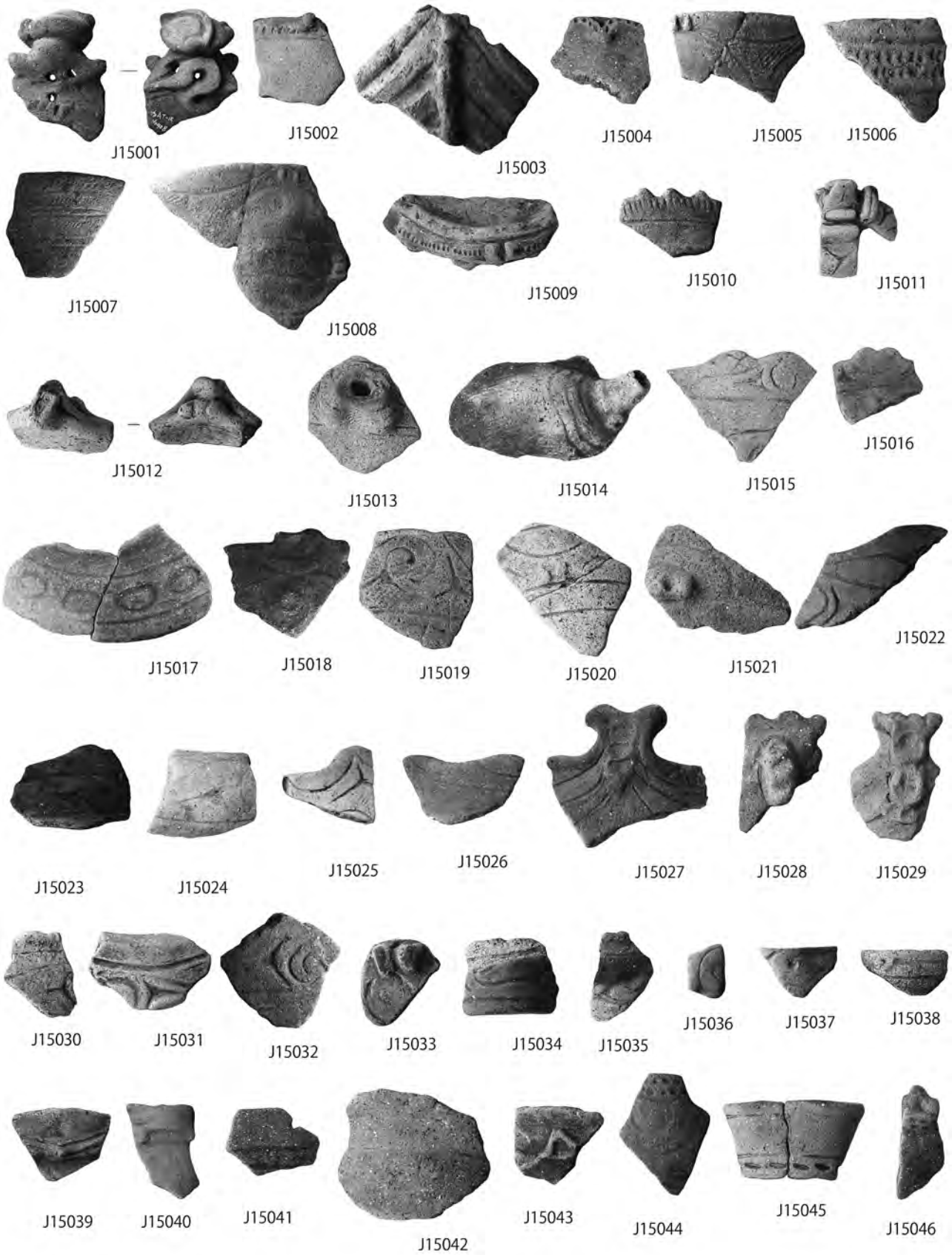
12号住居跡出土縄文土器



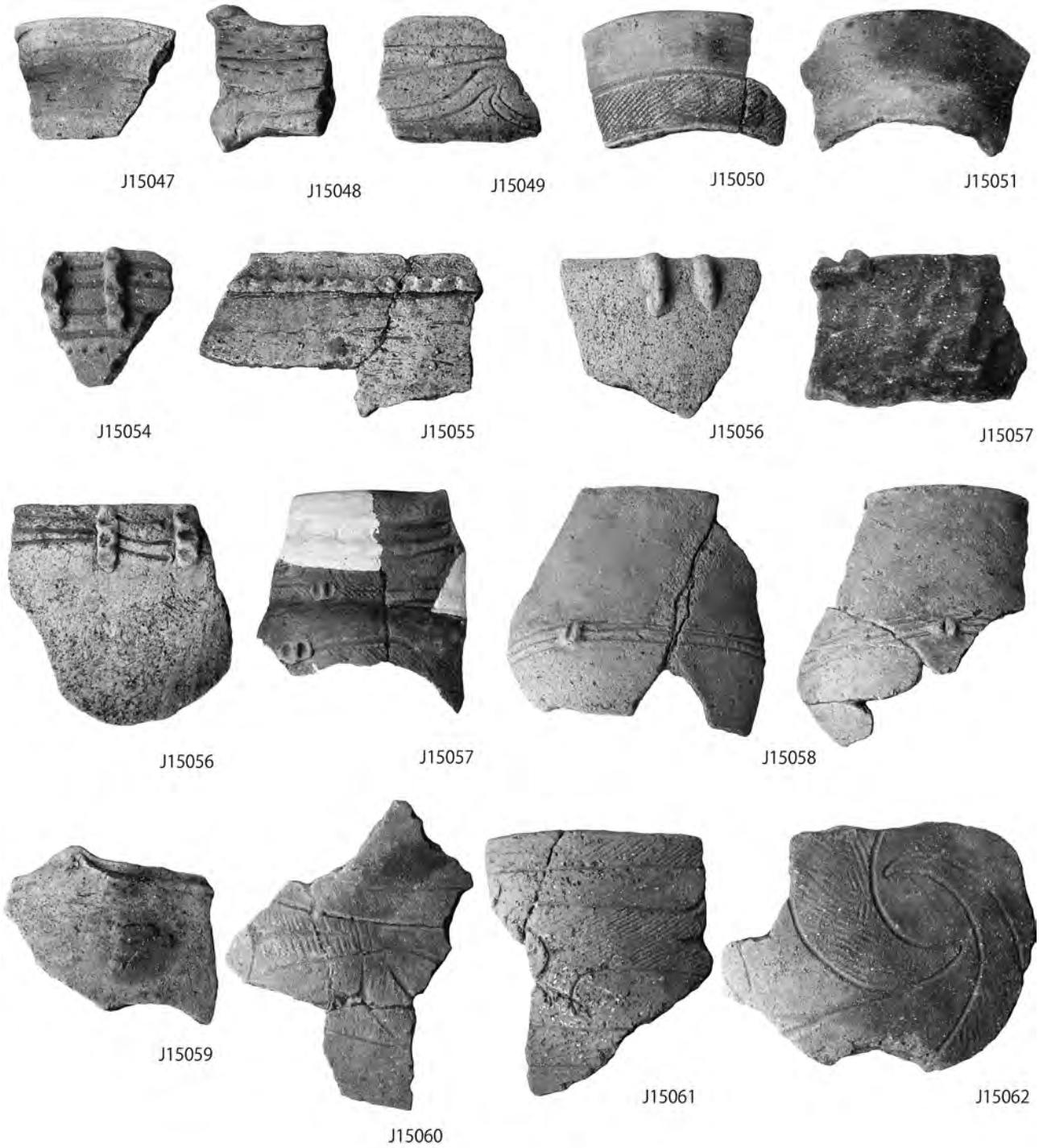
13号住居跡出土縄文土器



14号住居跡出土縄文土器



15号住居跡出土縄文土器（1）



15号住居跡出土縄文土器（2）

J15063

J15066

J16064

J15065

J15067

J15070

J15968

J15071

63~68,70,71　1/3

J15069

1/4

J15072

J15073

1/5

J15074

J15076

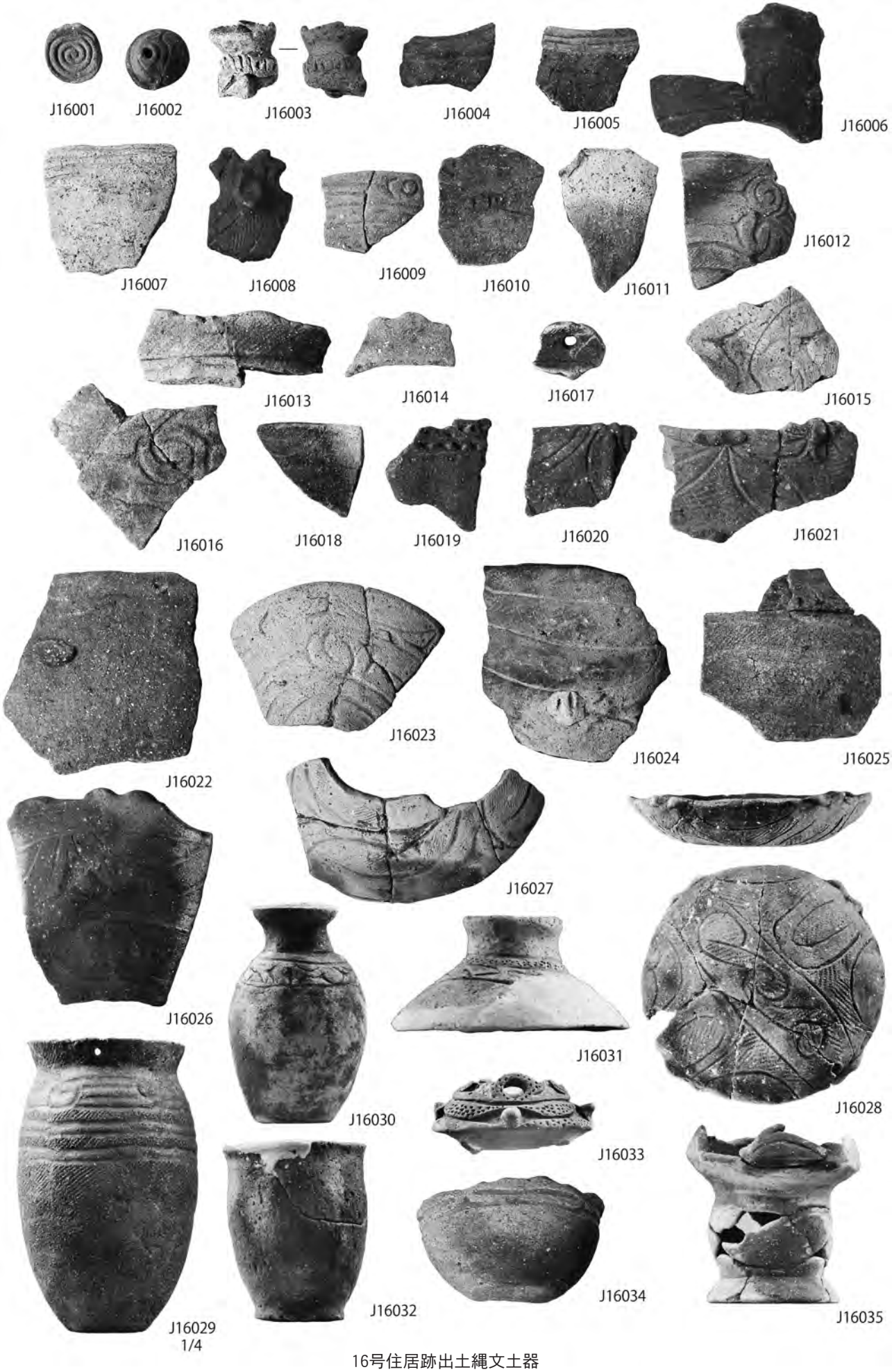
J15077

J15075

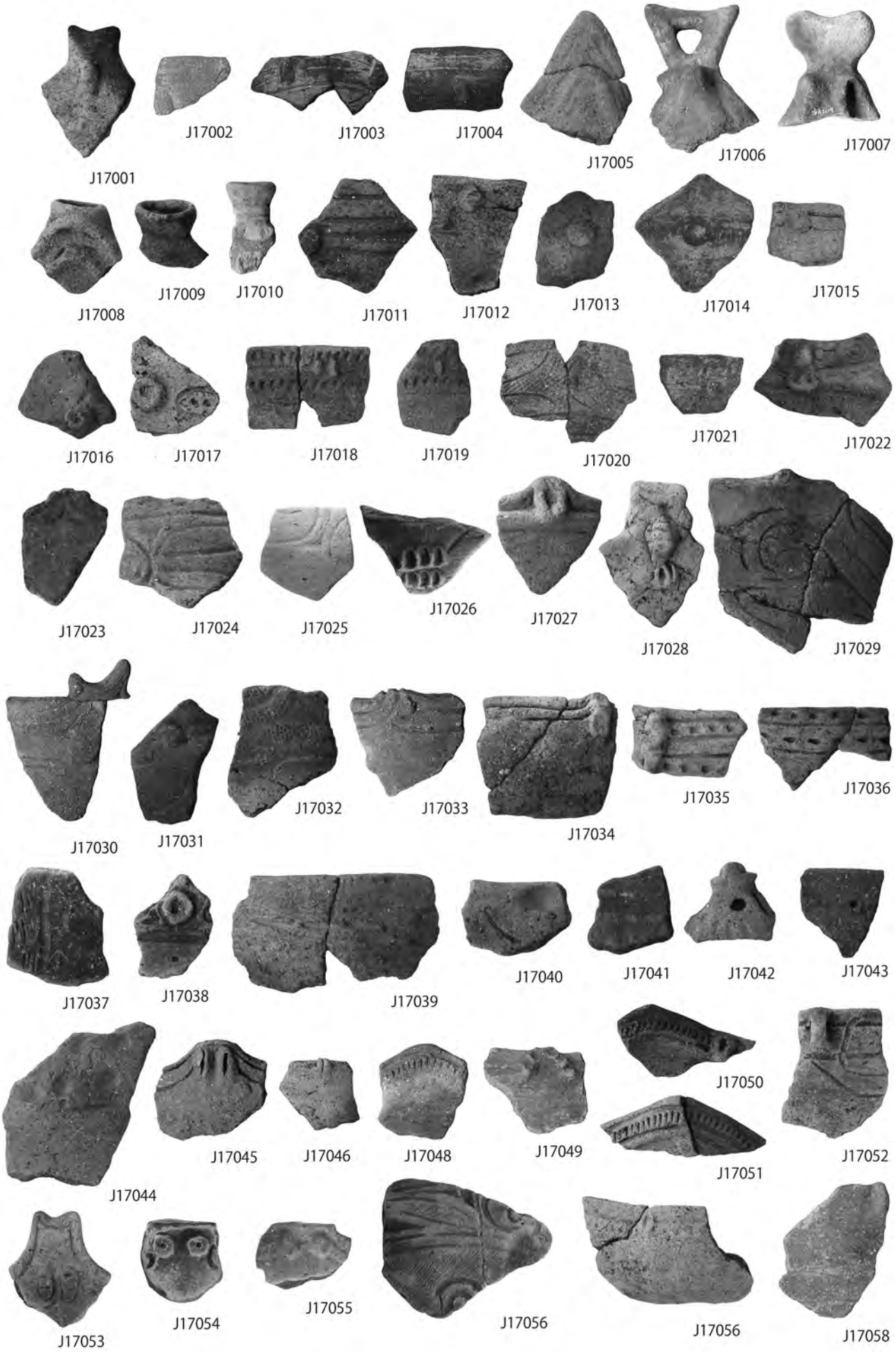
J15078

15号住居跡出土縄文土器（3）

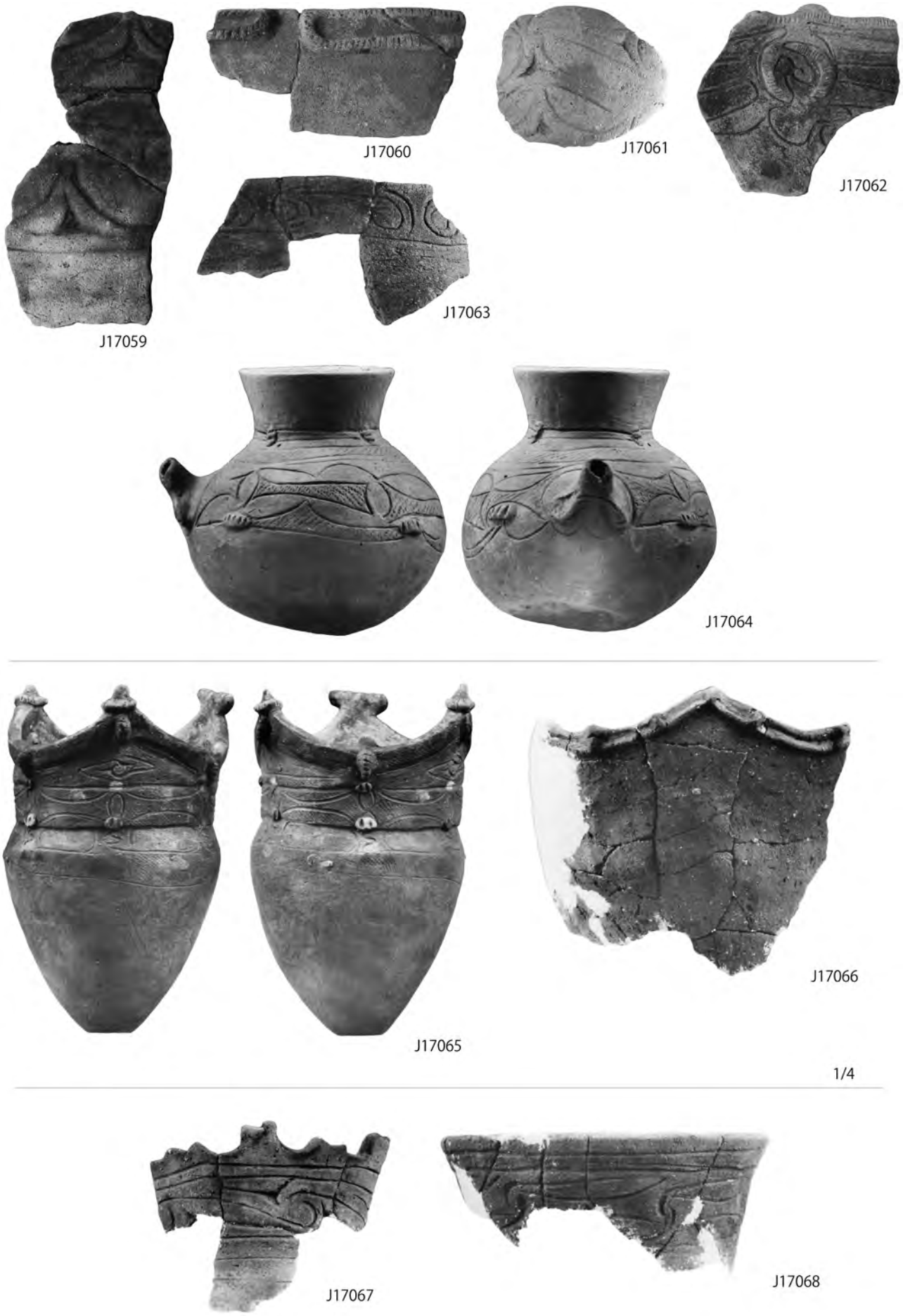
1/4



16号住居跡出土縄文土器



17号住居跡出土縄文土器（1）



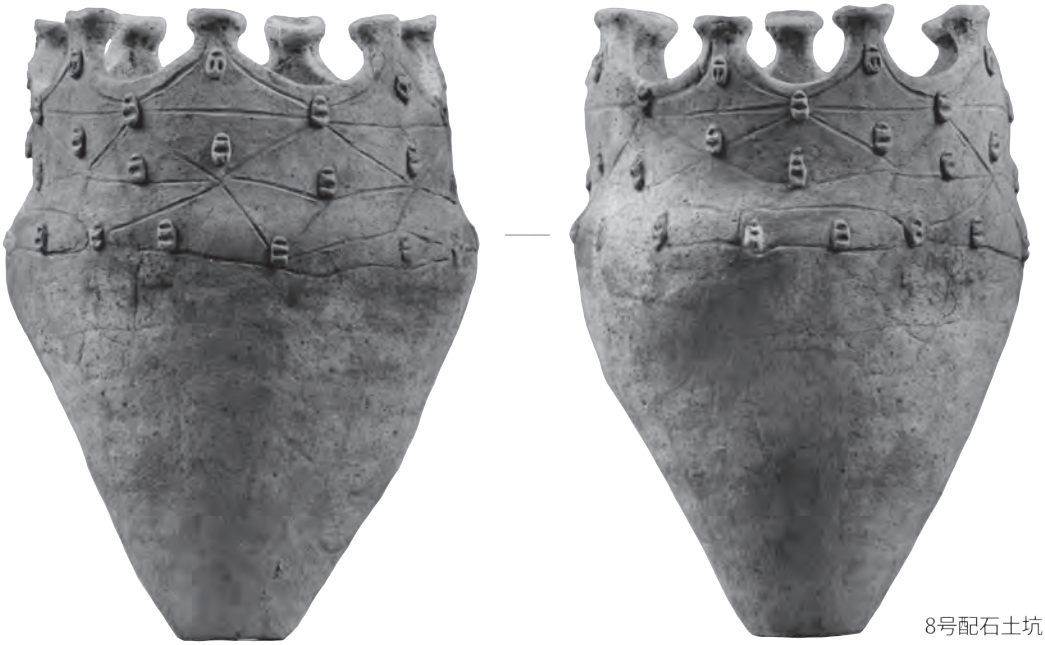
17号住居跡出土縄文土器（2）

18号住居跡出土縄文土器（1）

18号住居跡出土縄文土器（2）

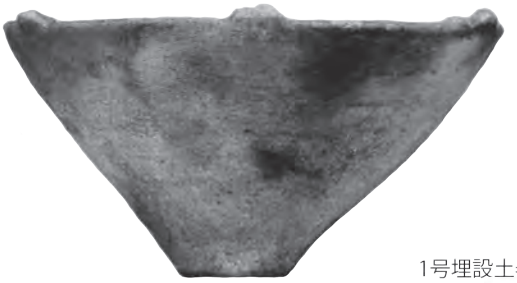
J18084
1/2

18号住居跡出土縄文土器（3）



8号配石土坑

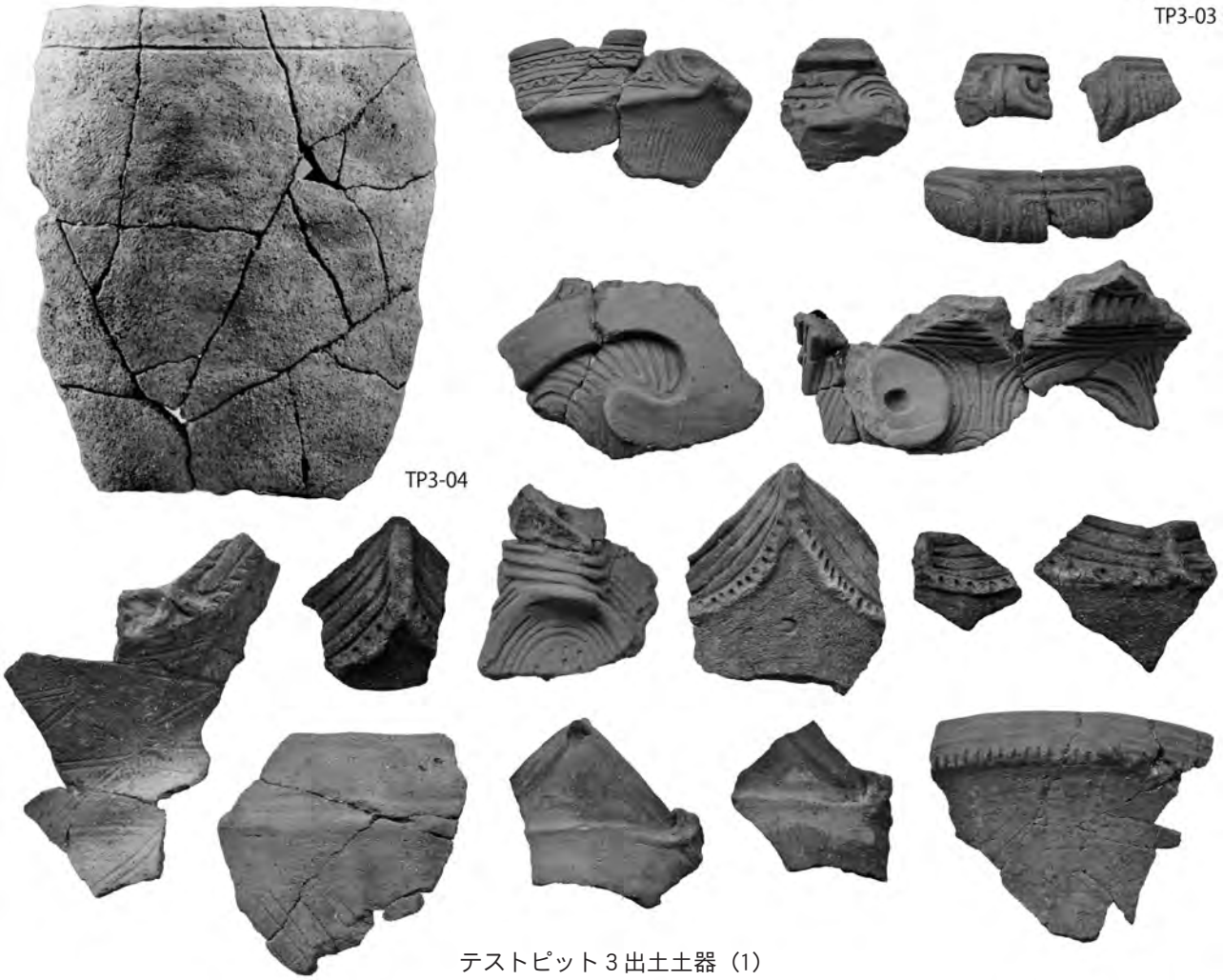
5号土坑



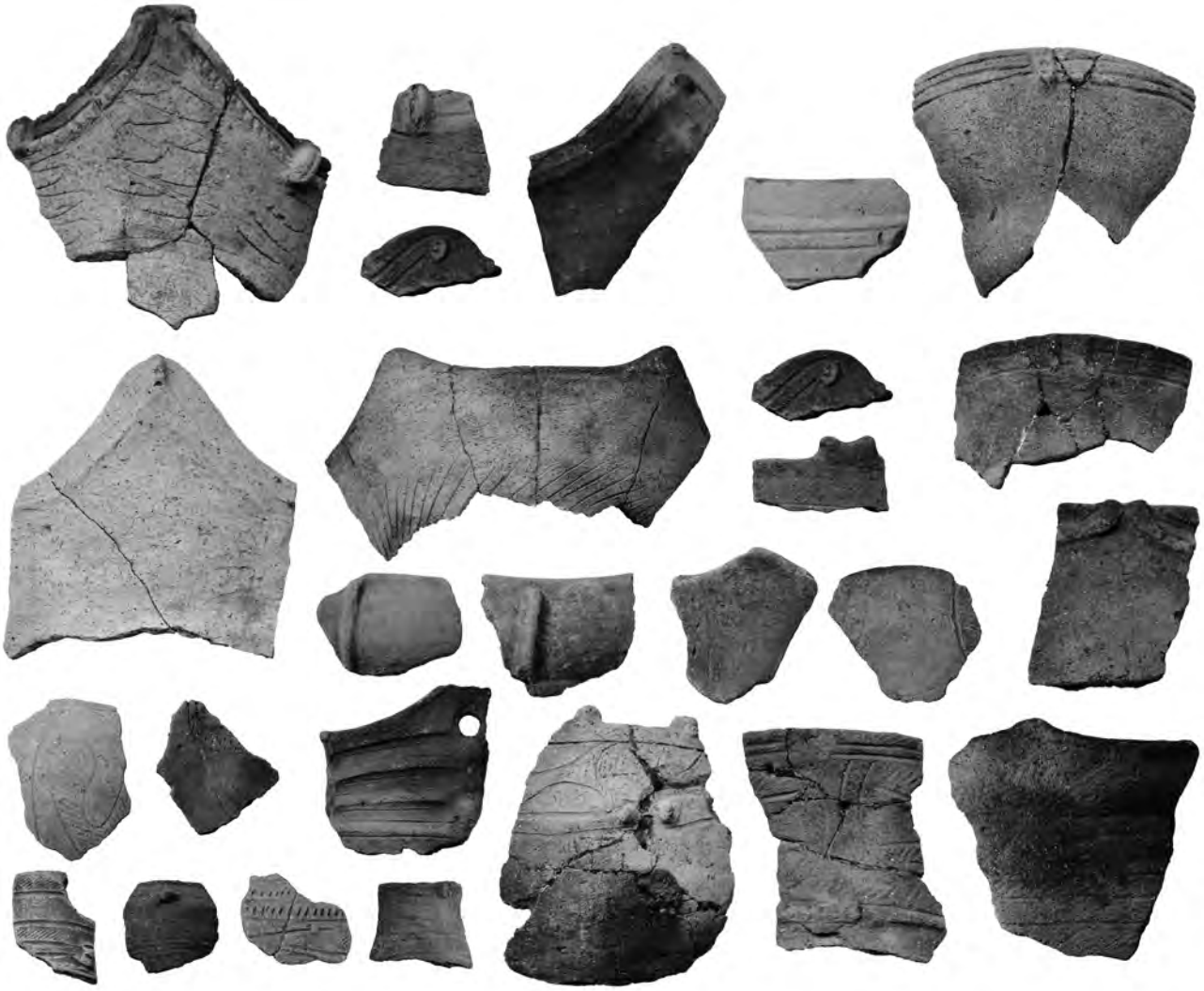
1号埋設土器
1/4

配石土坑・土坑出土土器・埋設土器

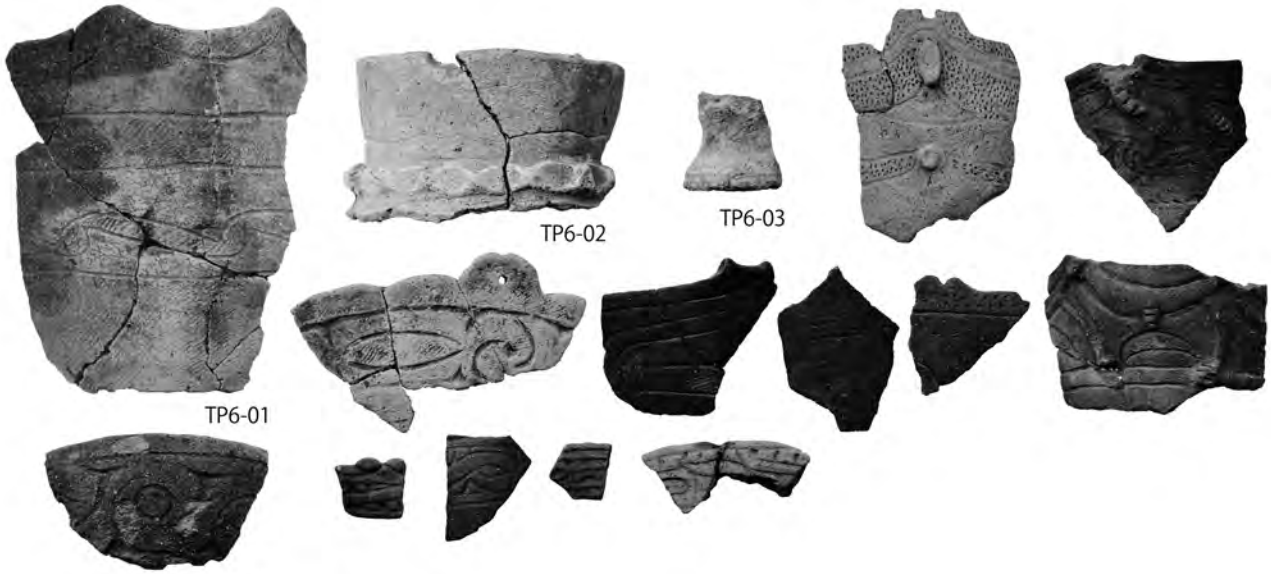
３号埋設土器・Ａ区遺構外出土土器



テストピット３出土土器（1）



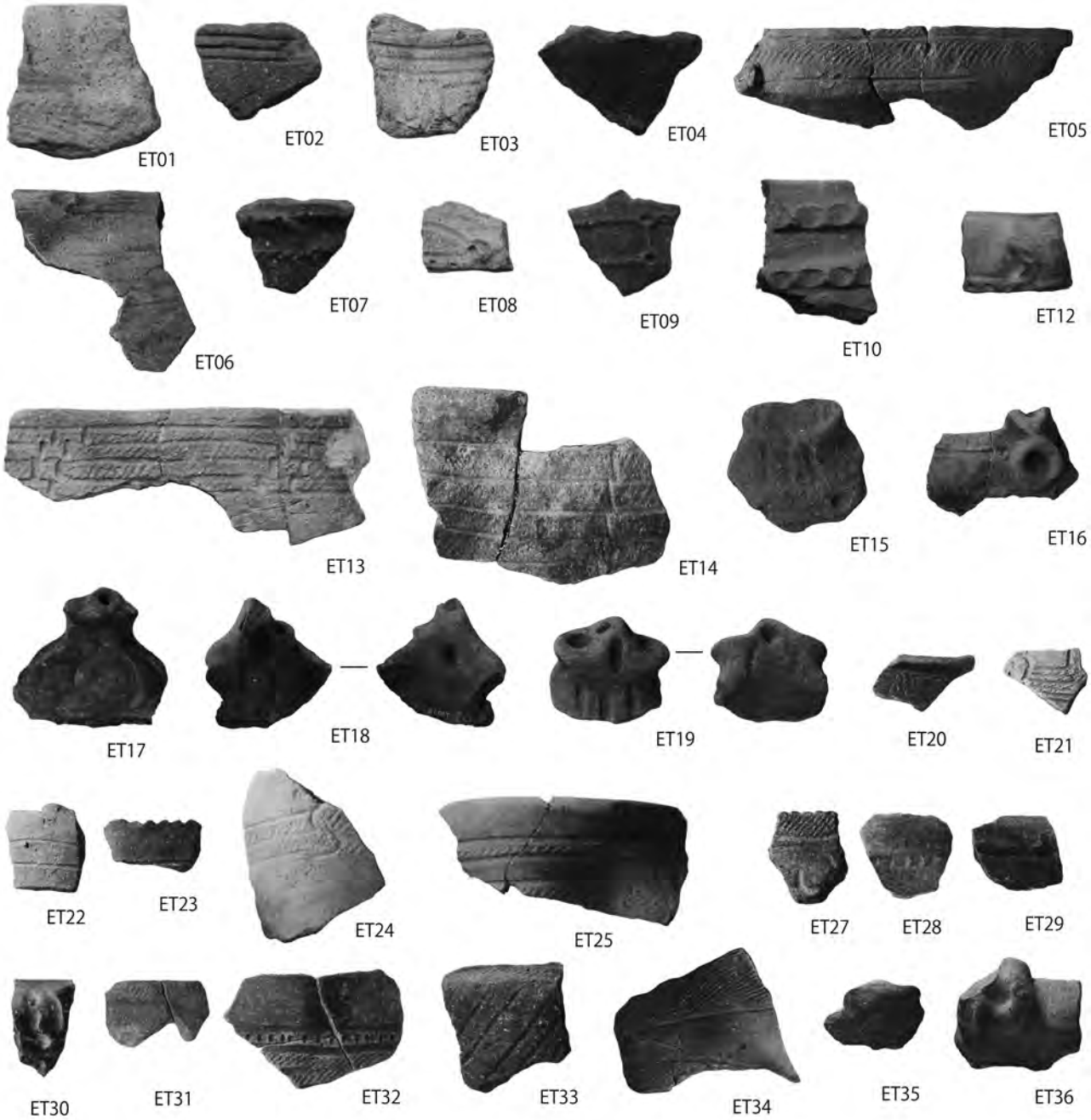
テストピット３出土土器（2）



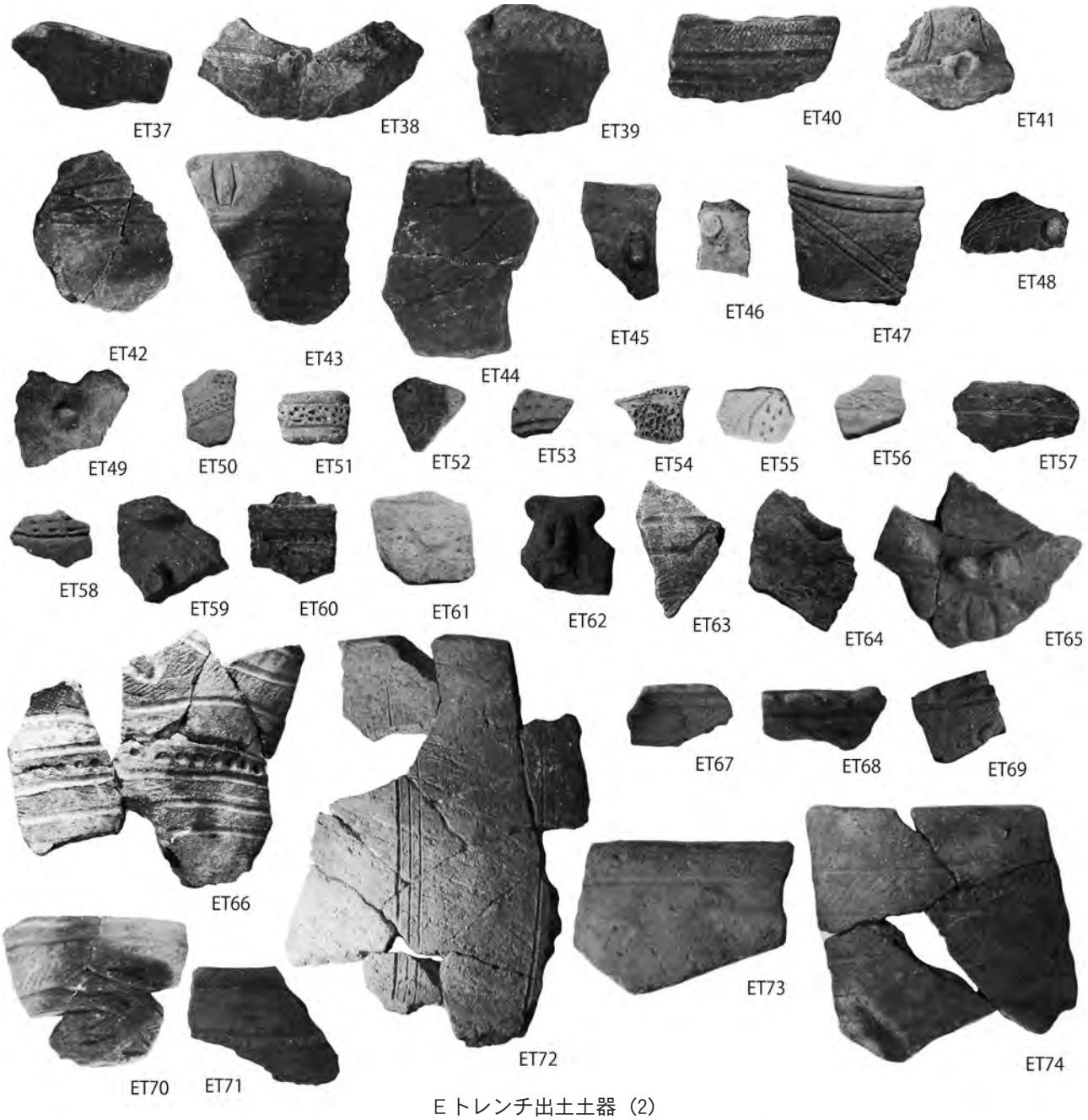
テストピット６出土土器

1/5

Ａトレンチ埋設土器

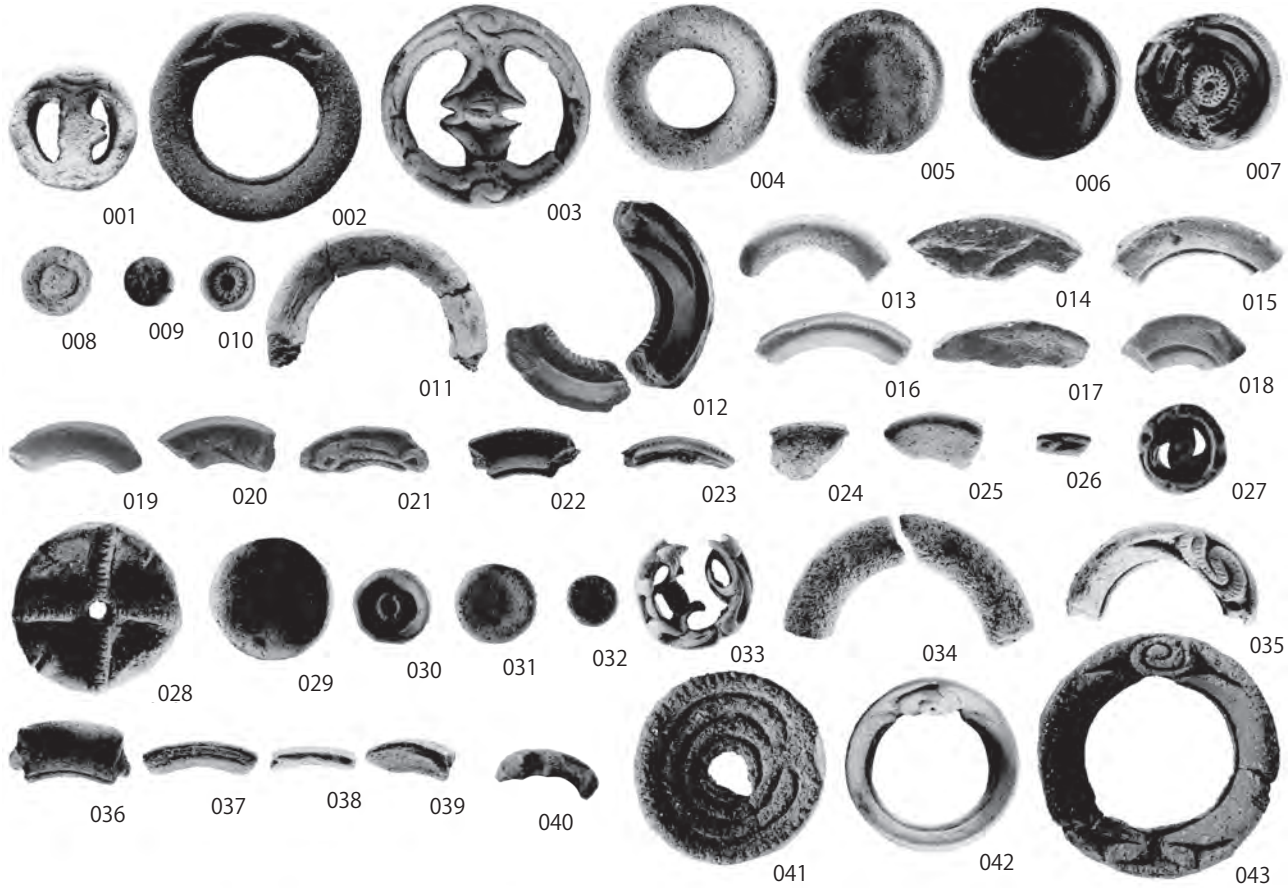


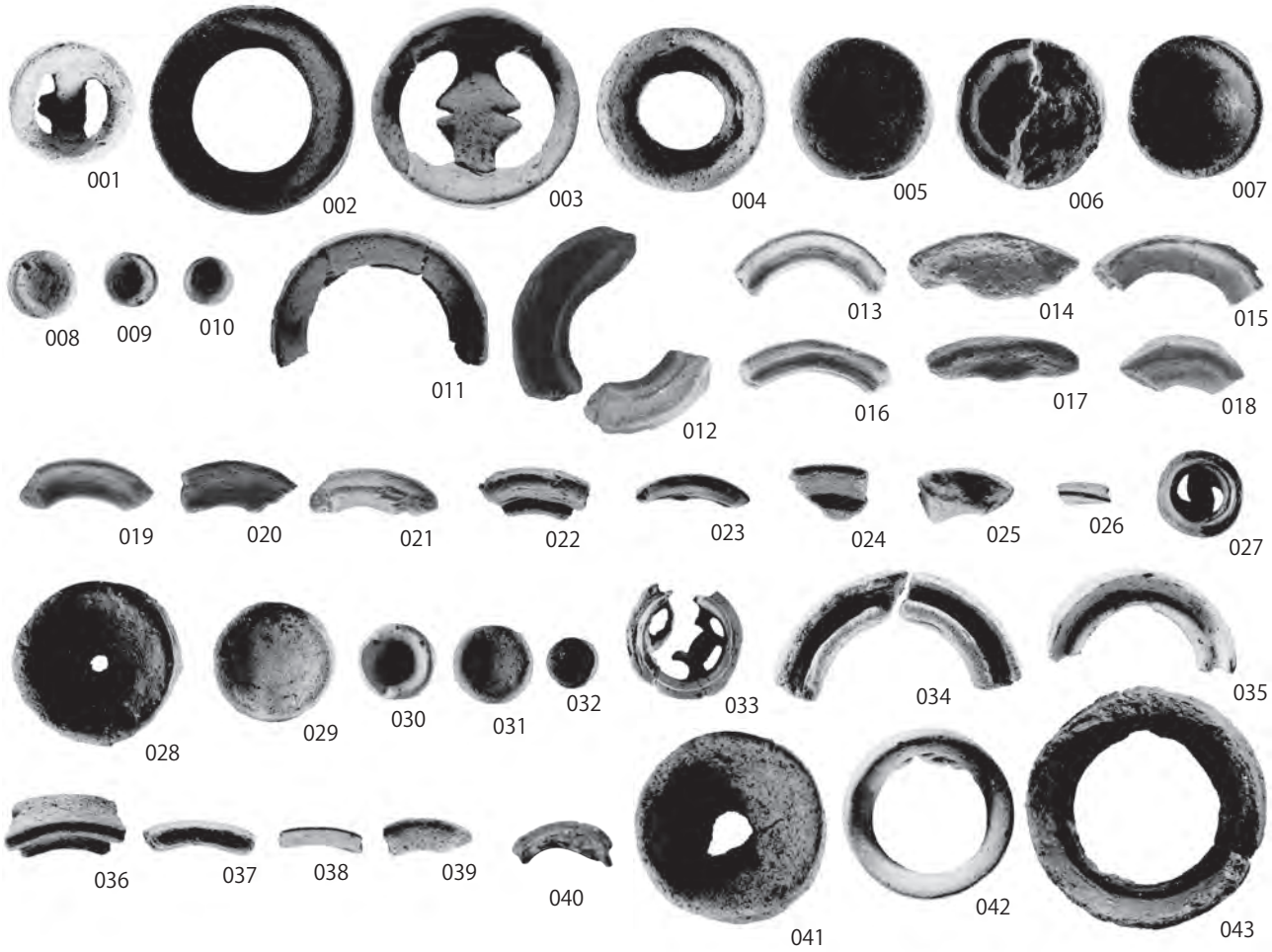
Ｅトレンチ出土土器（1）



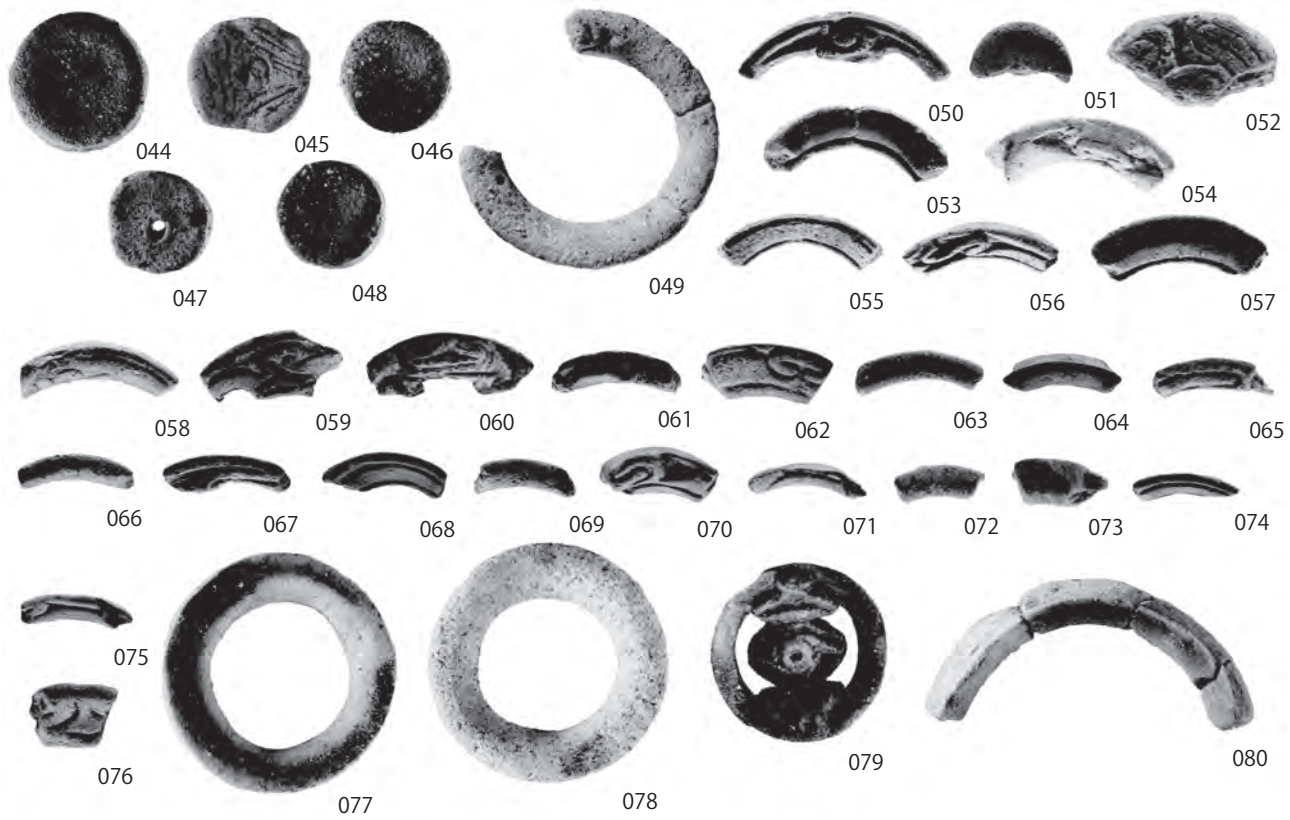
Ｅトレンチ出土土器（2）

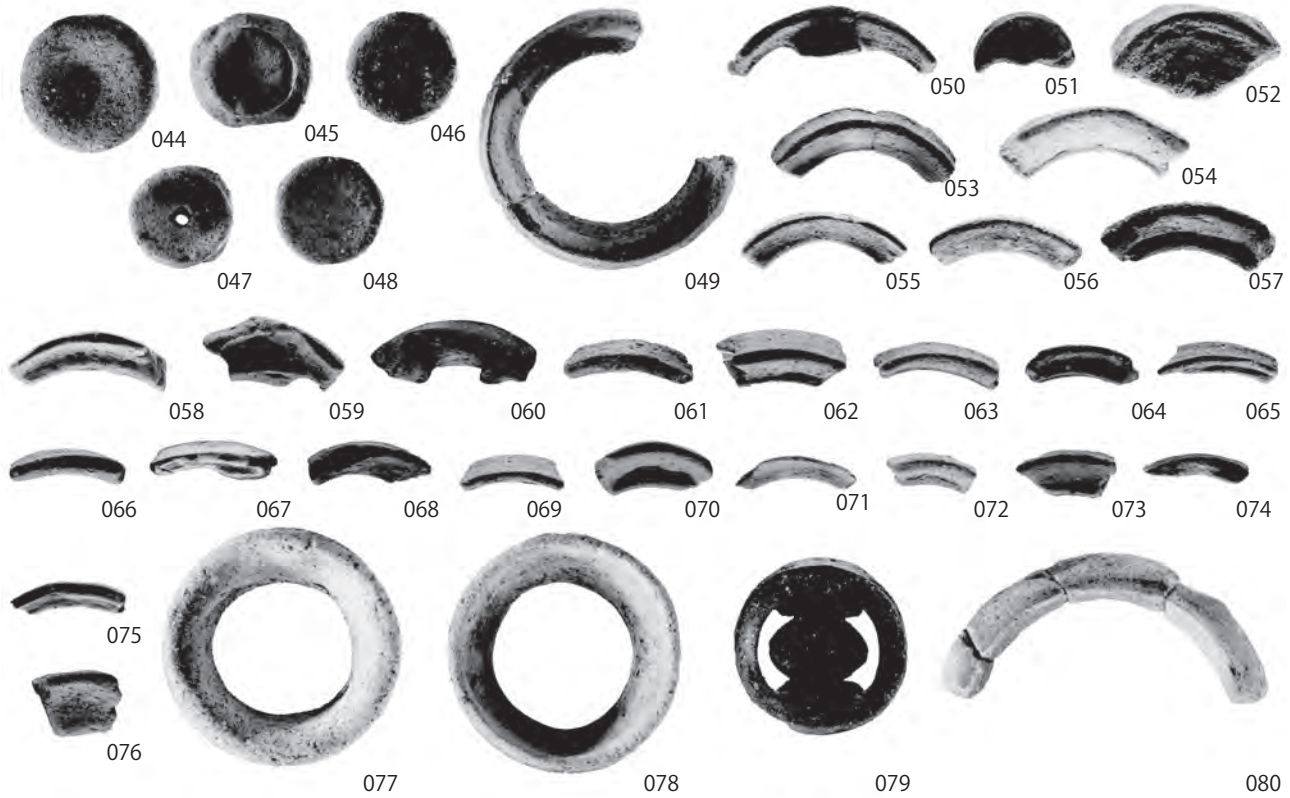
Ｂ区出土土器


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043

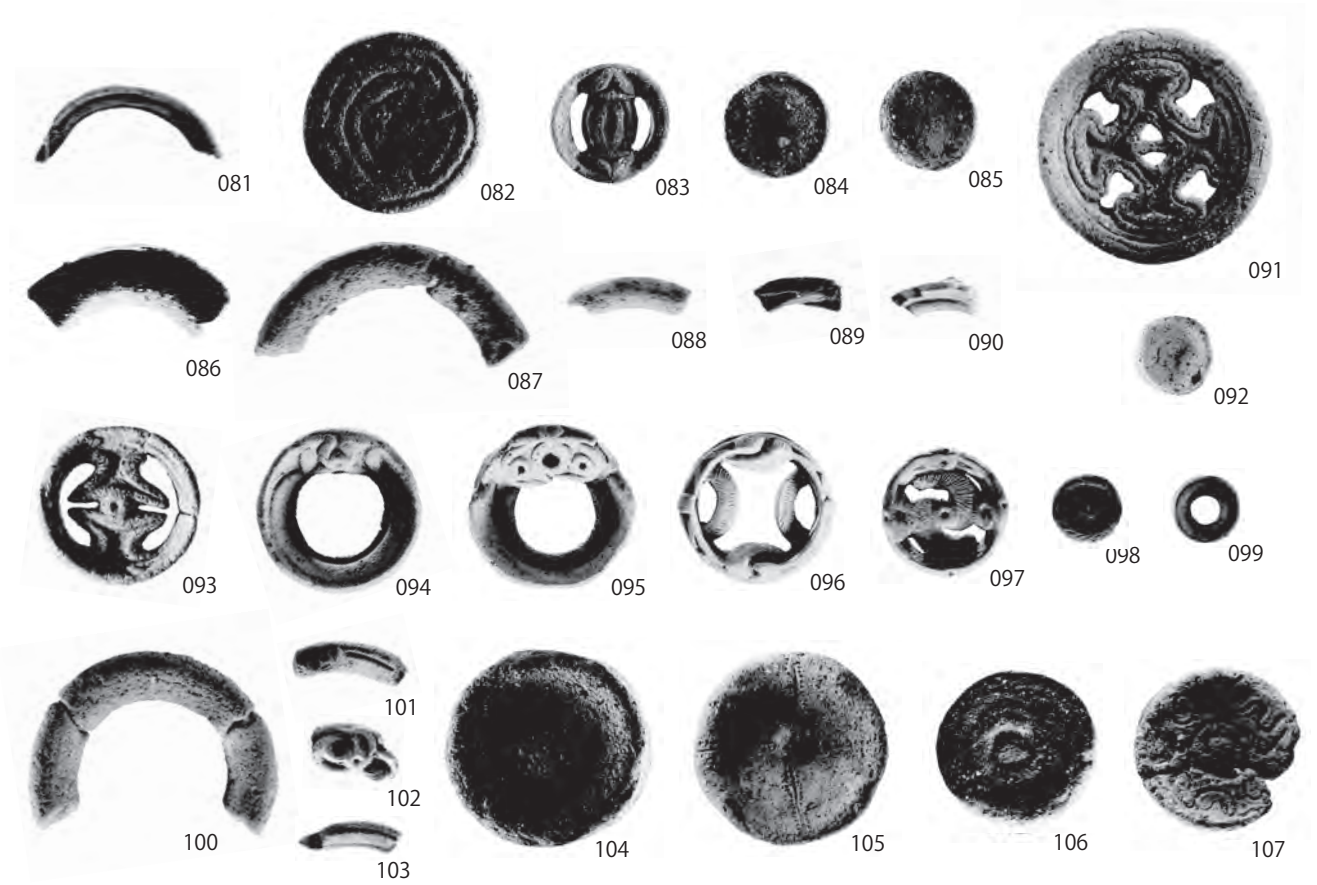

001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043

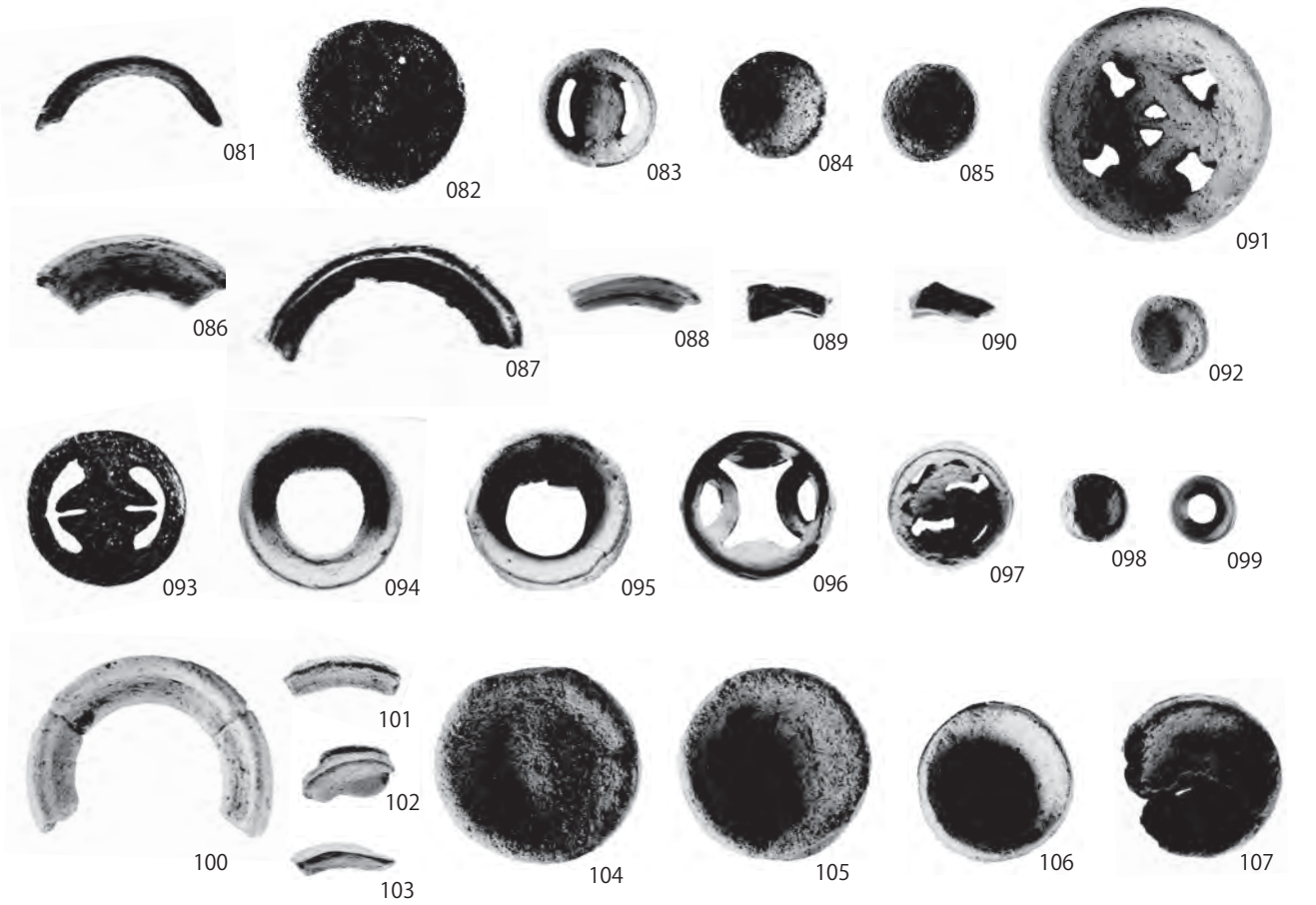
土製耳飾り（1）


044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080

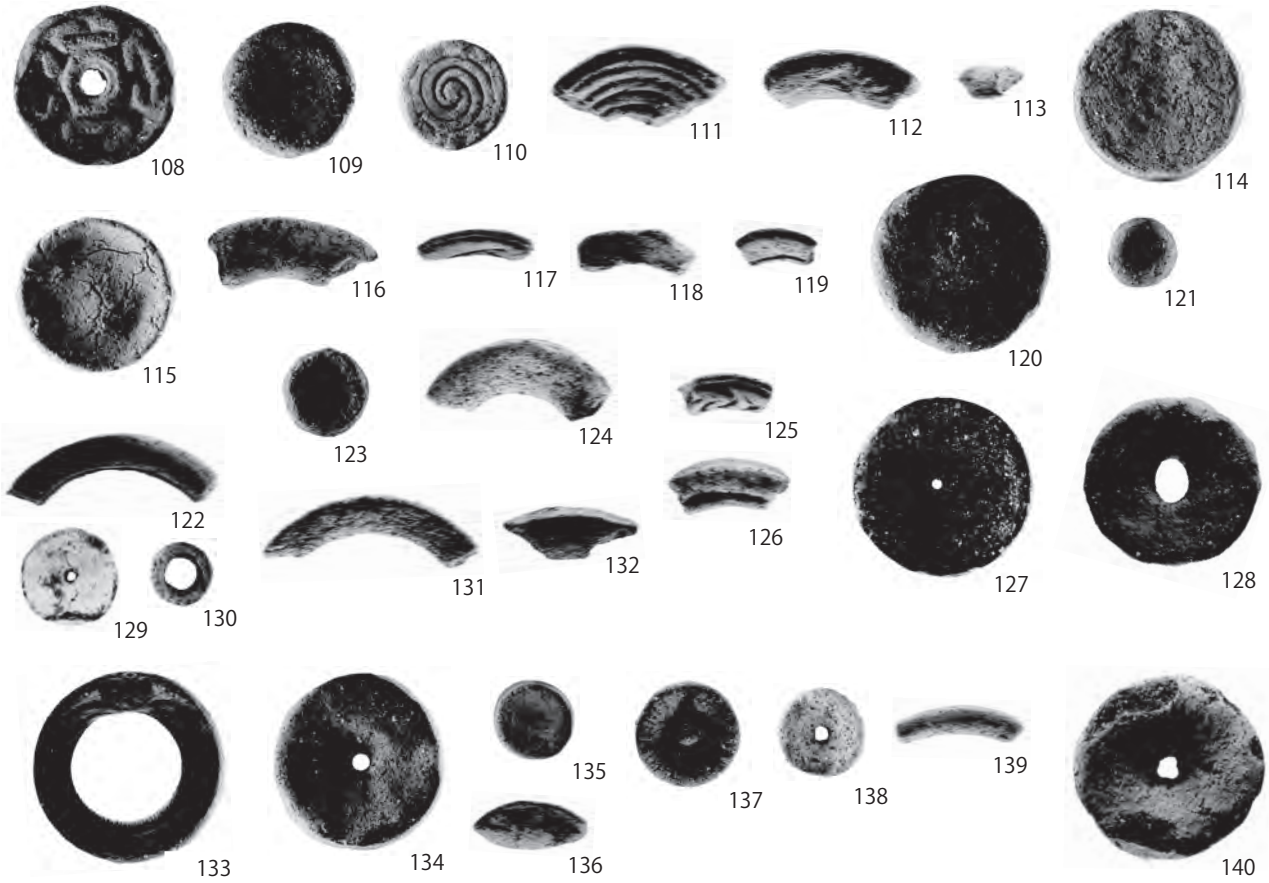

044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080

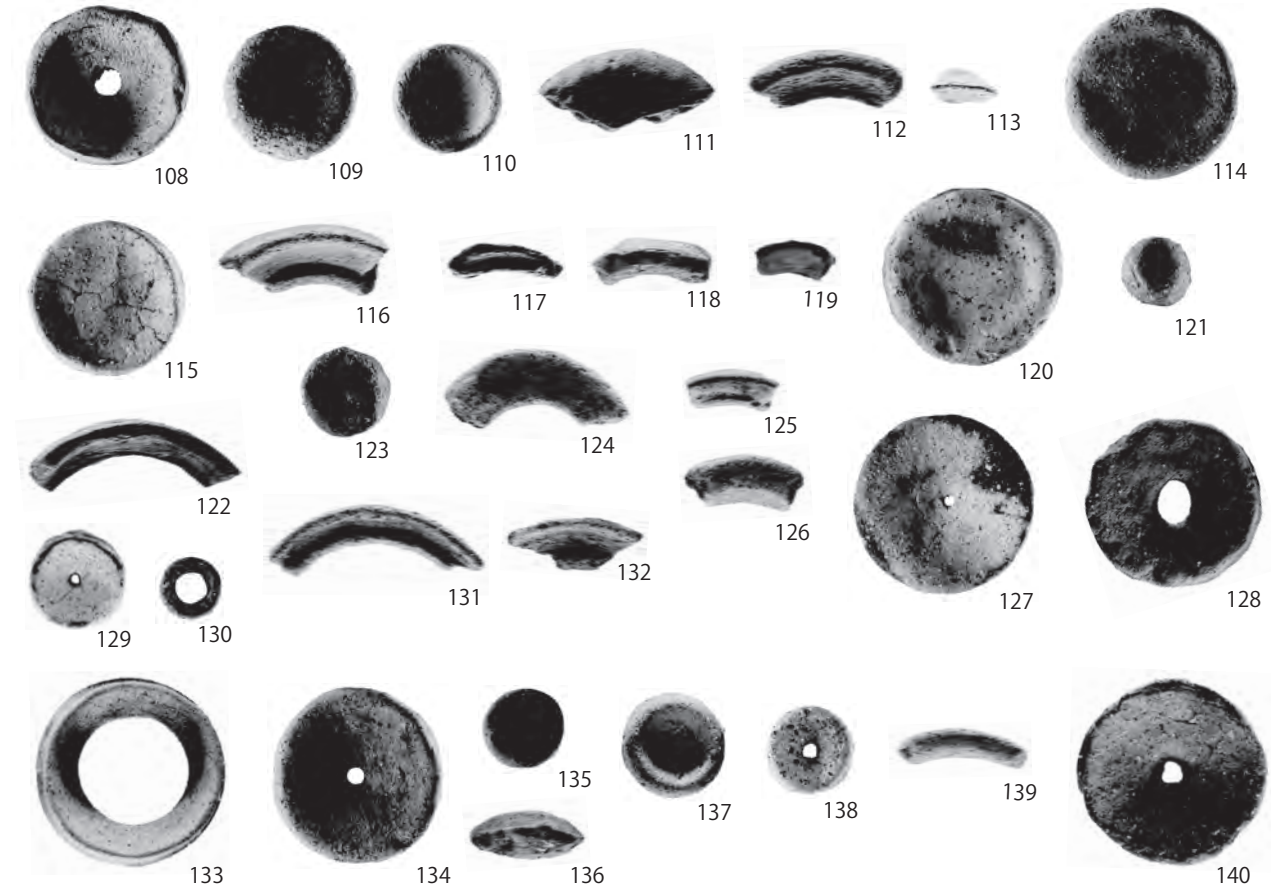
土製耳飾り（2）


081
082
083
084
085
091
086
087
088
089
090
092
093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
104
105
106
107

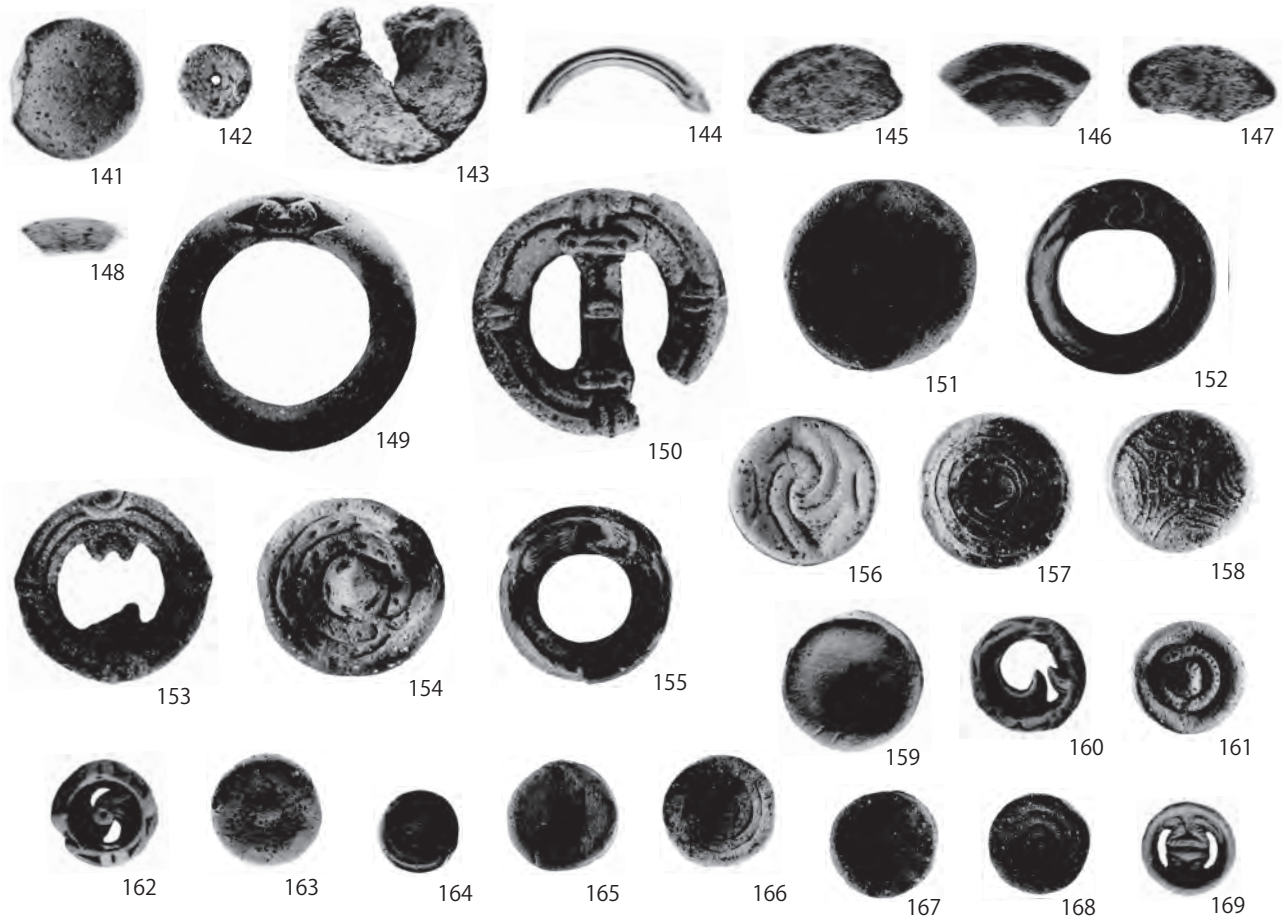

081
082
083
084
085
091
086
087
088
089
090
092
093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
104
105
106
107

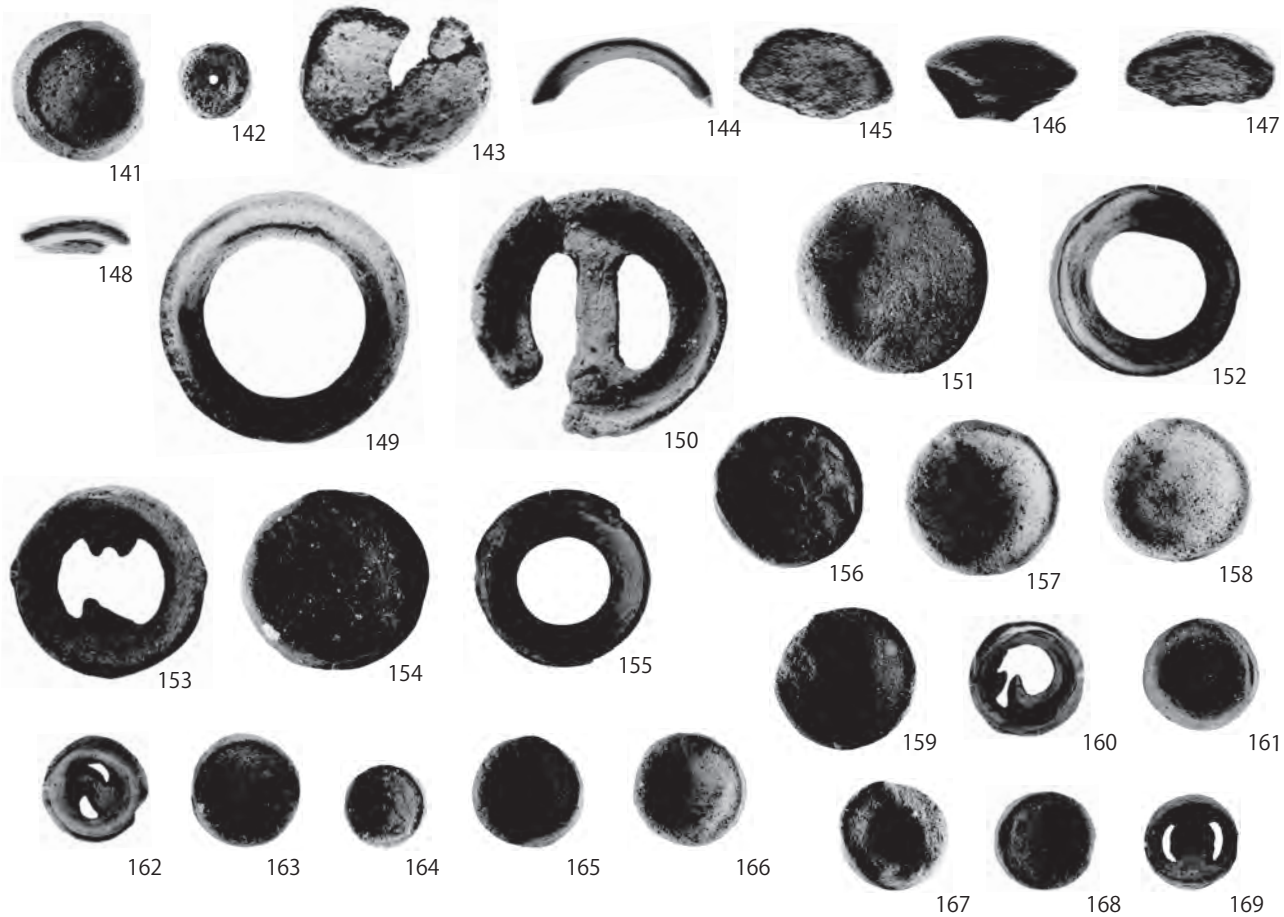
土製耳飾り（3）


108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

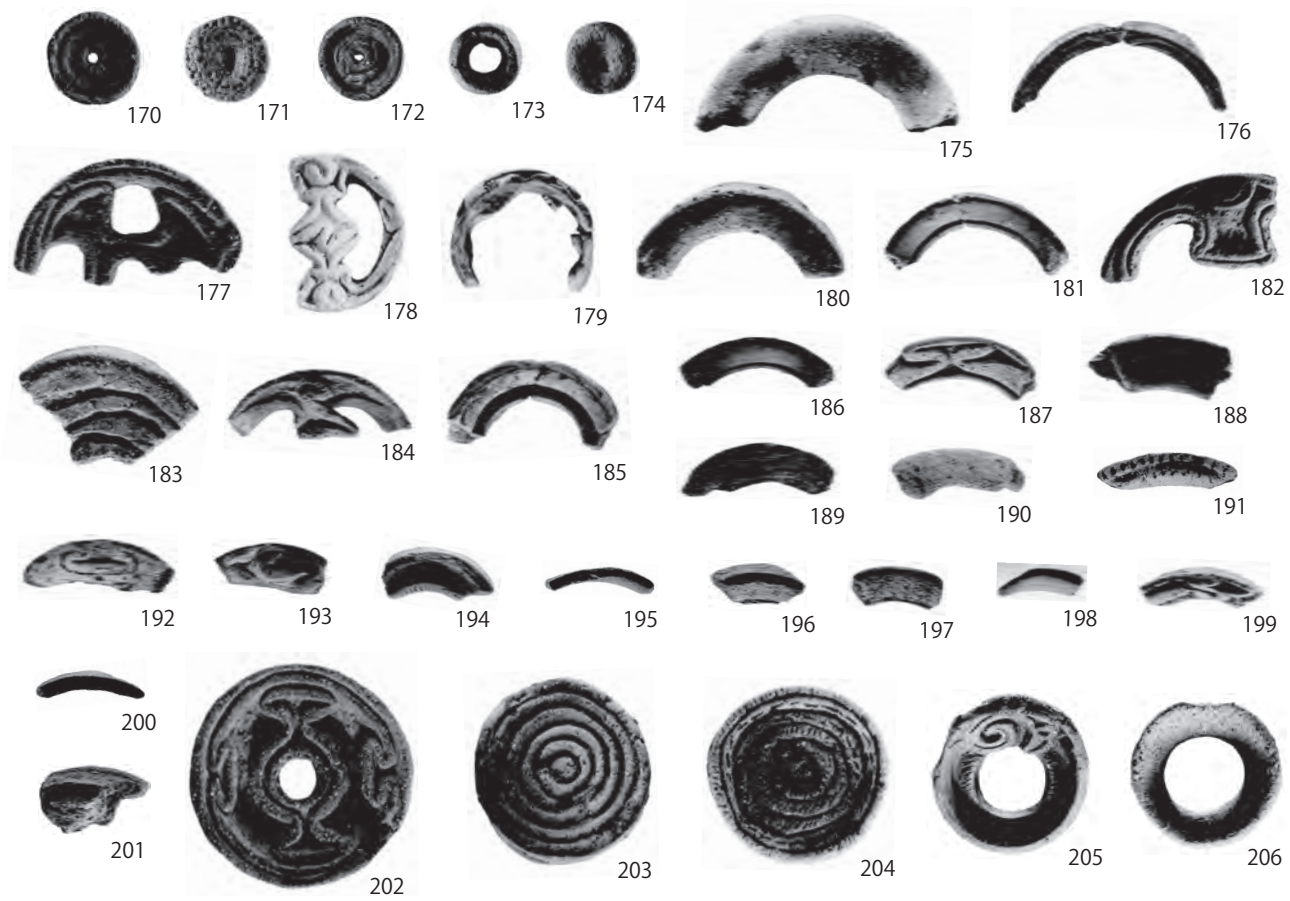

108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

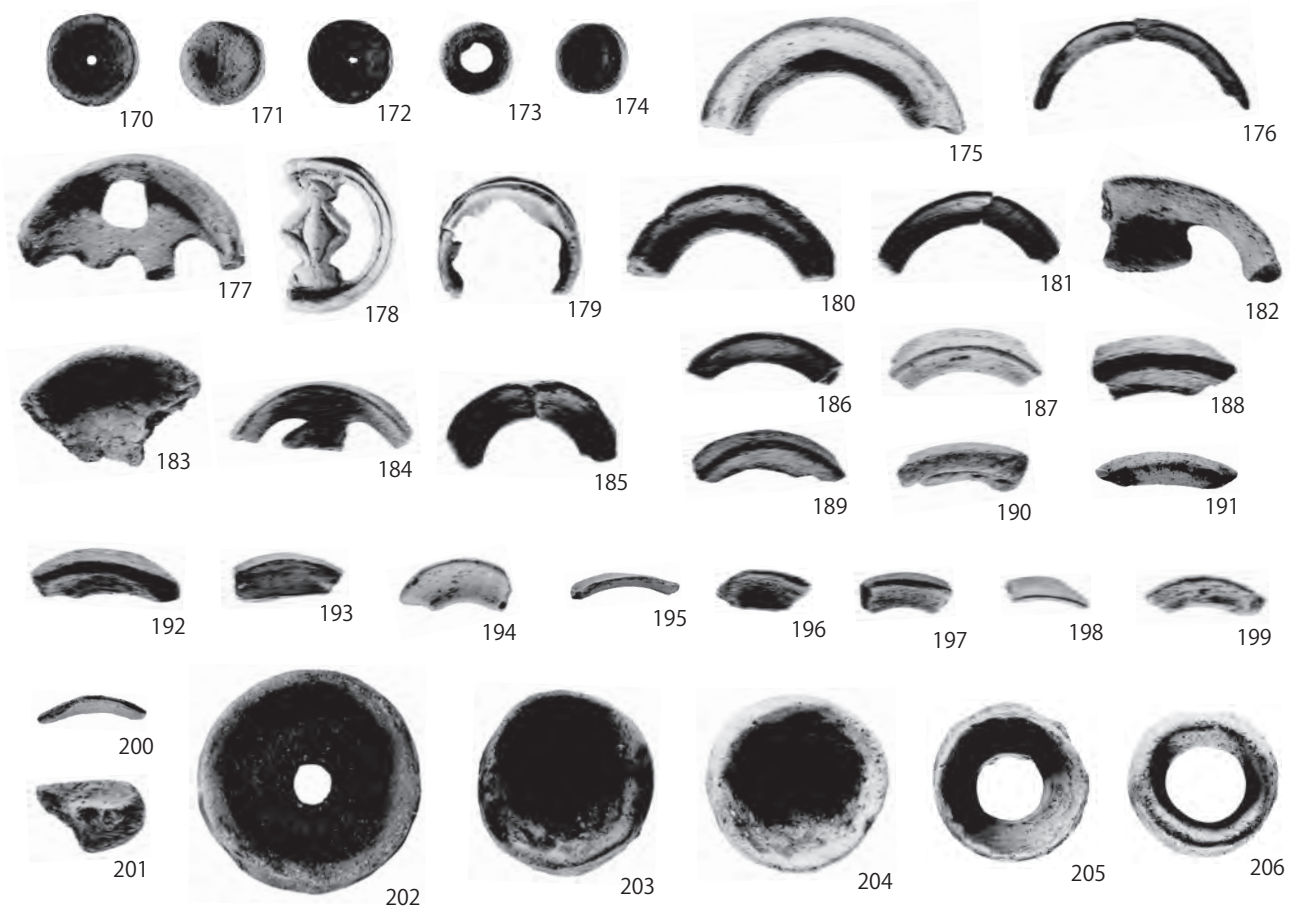
土製耳飾り（4）


141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169

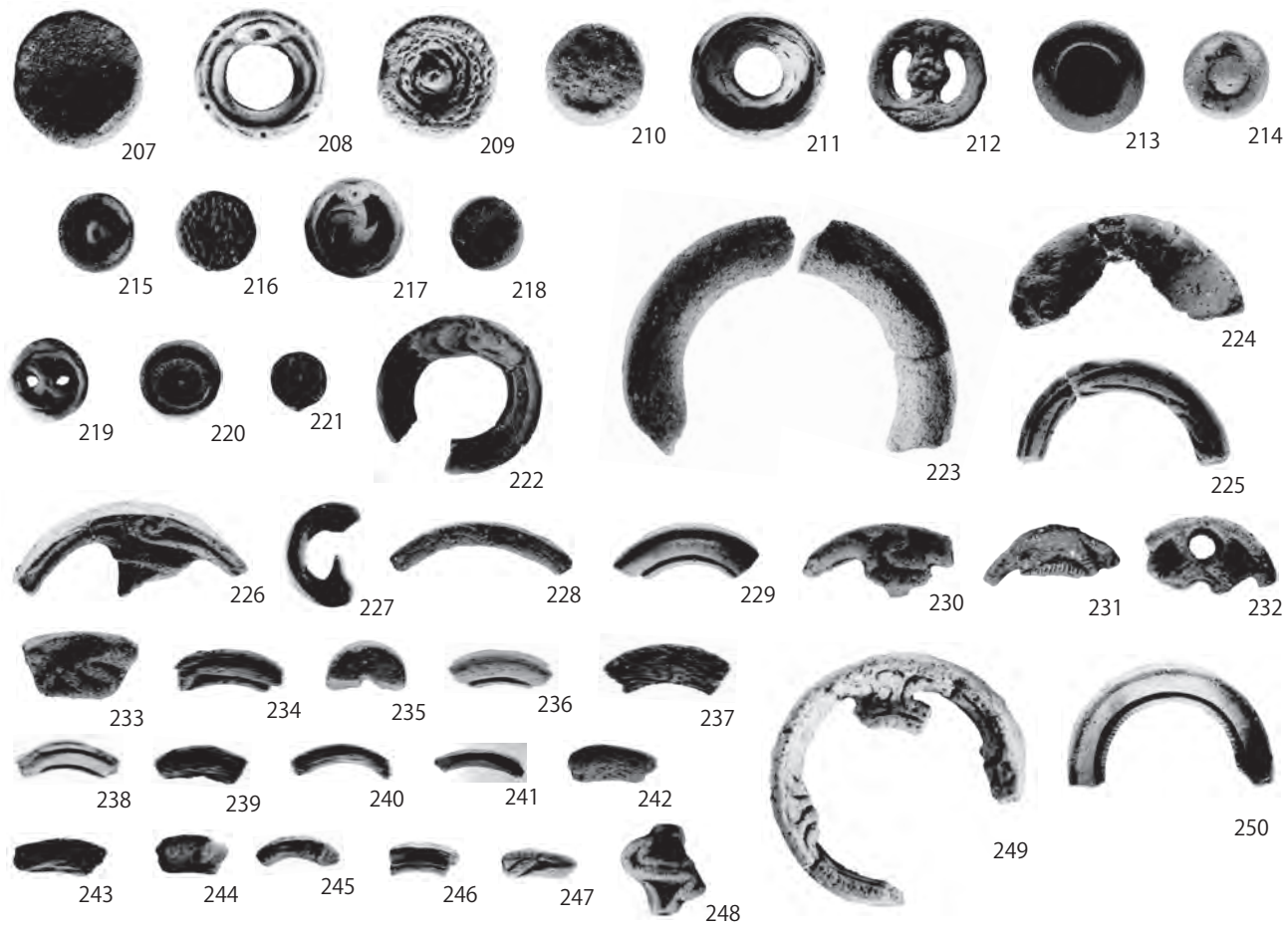

141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169

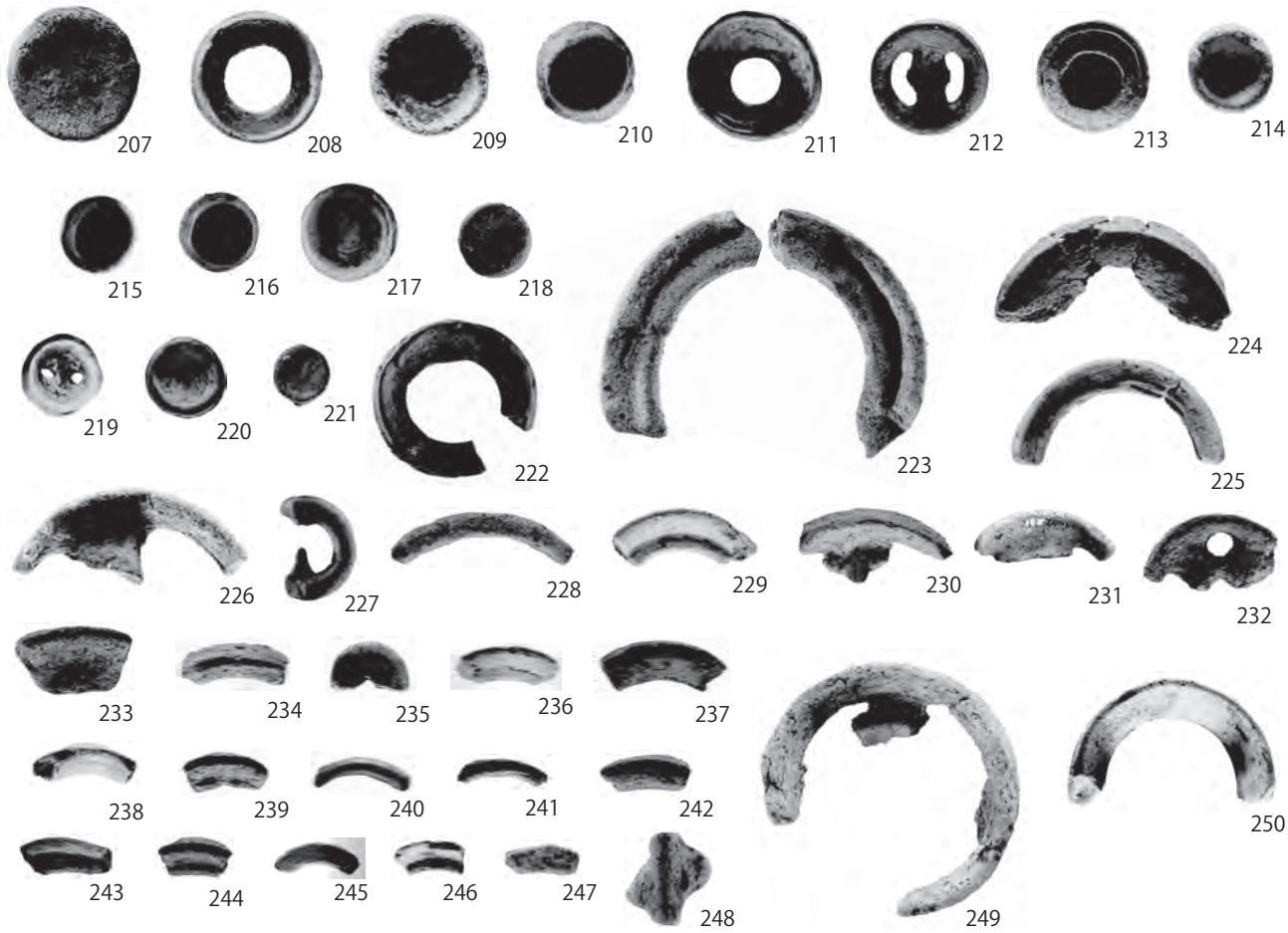
土製耳飾り（5）


170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206

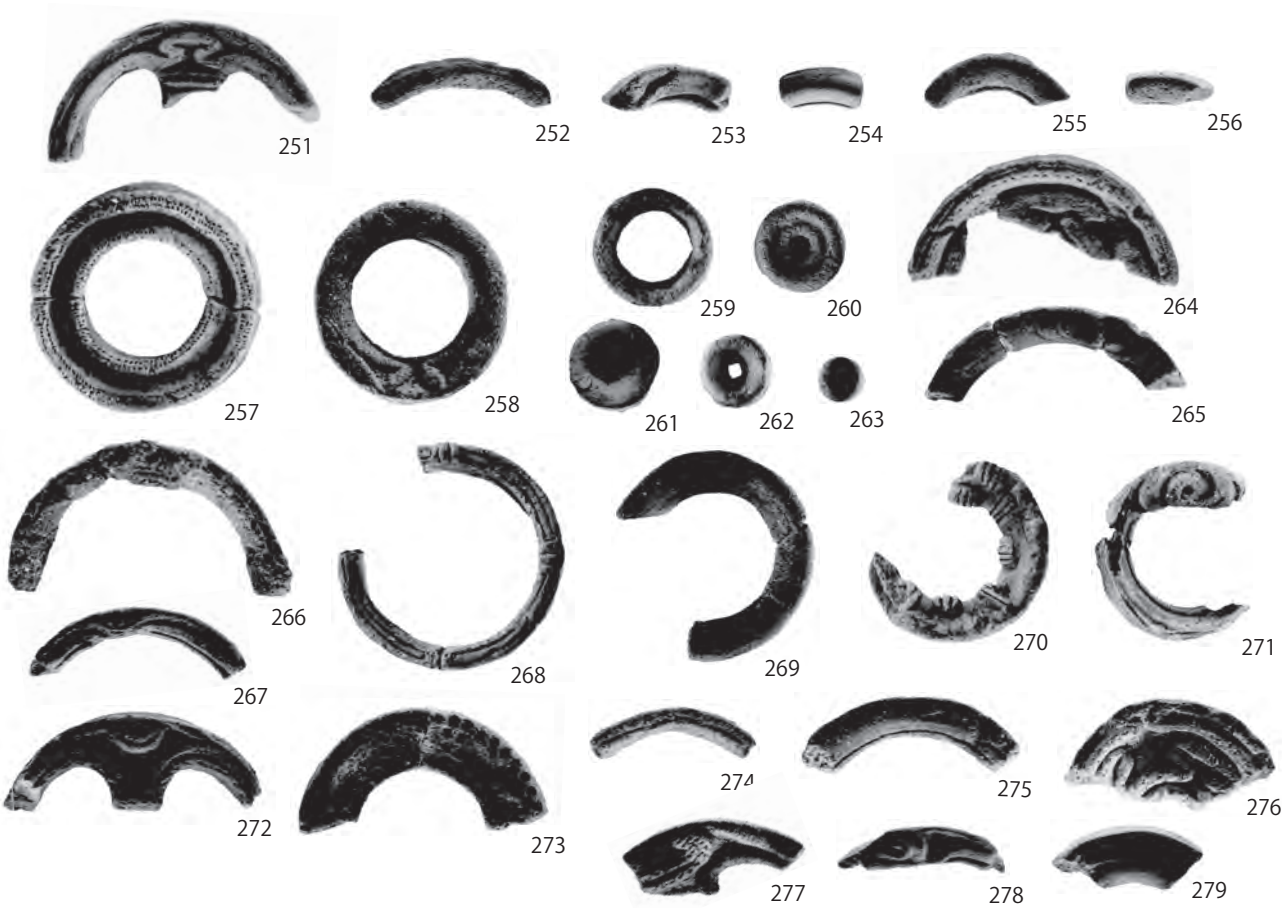

170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206

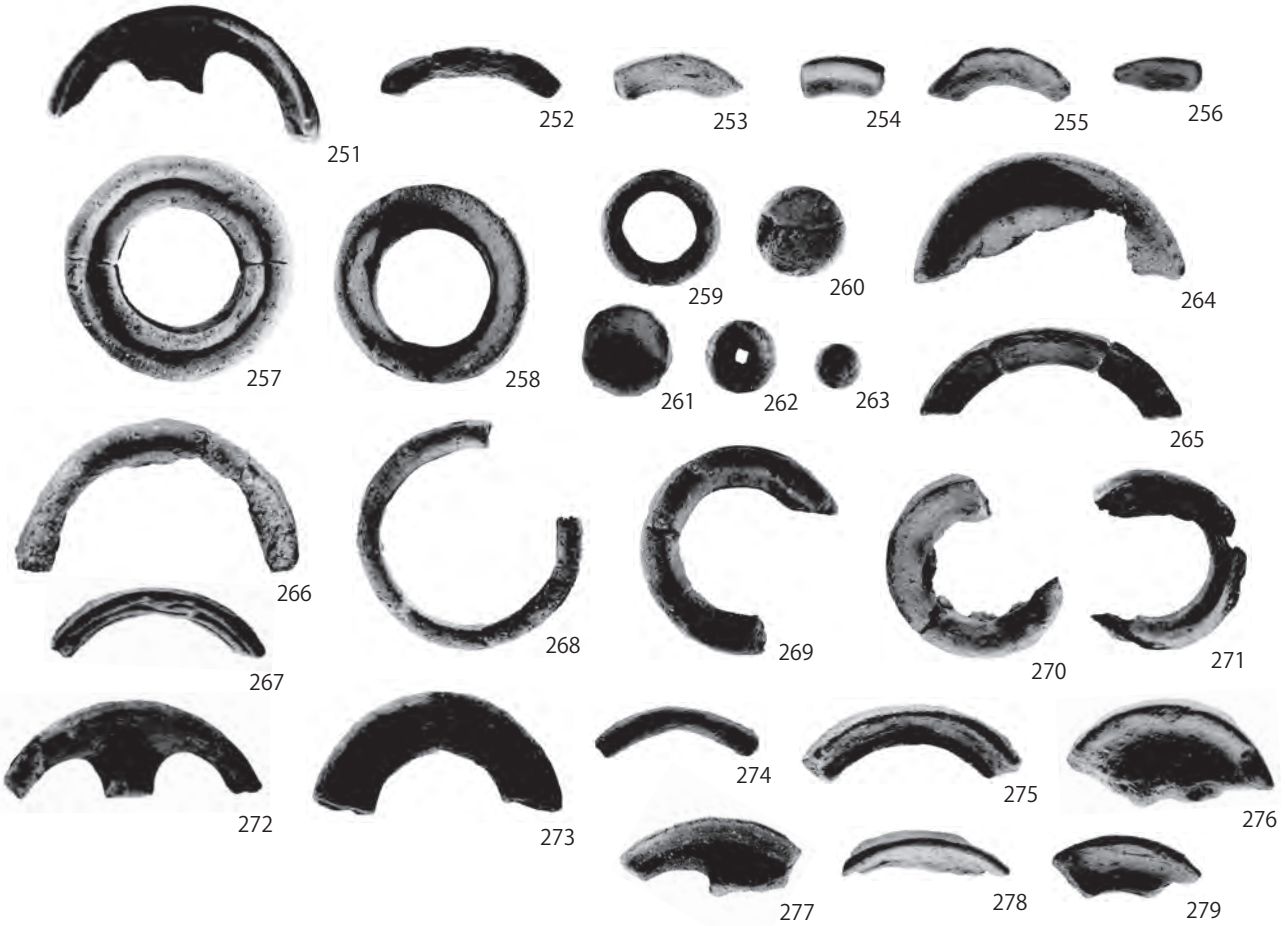
土製耳飾り（6）


207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250

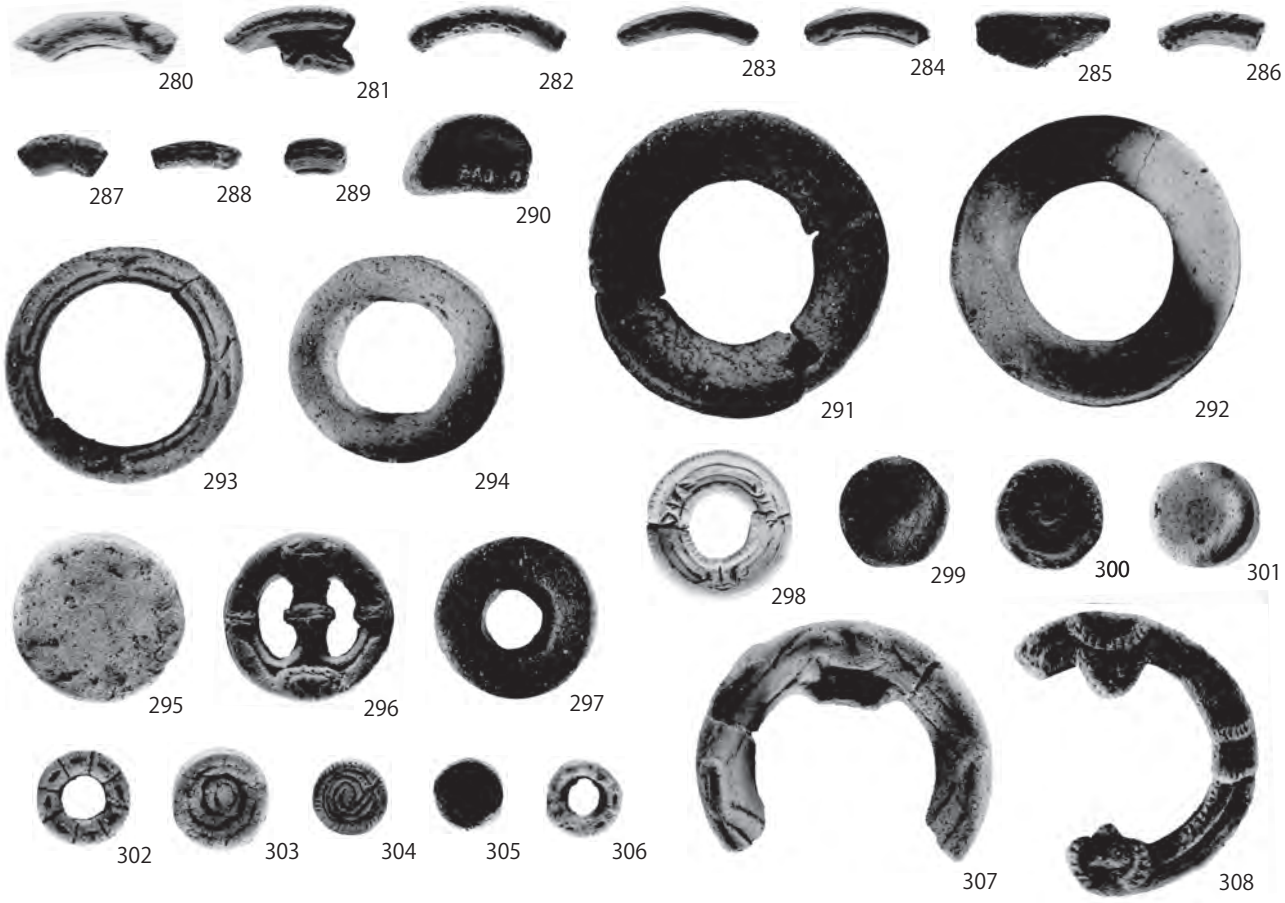

207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250

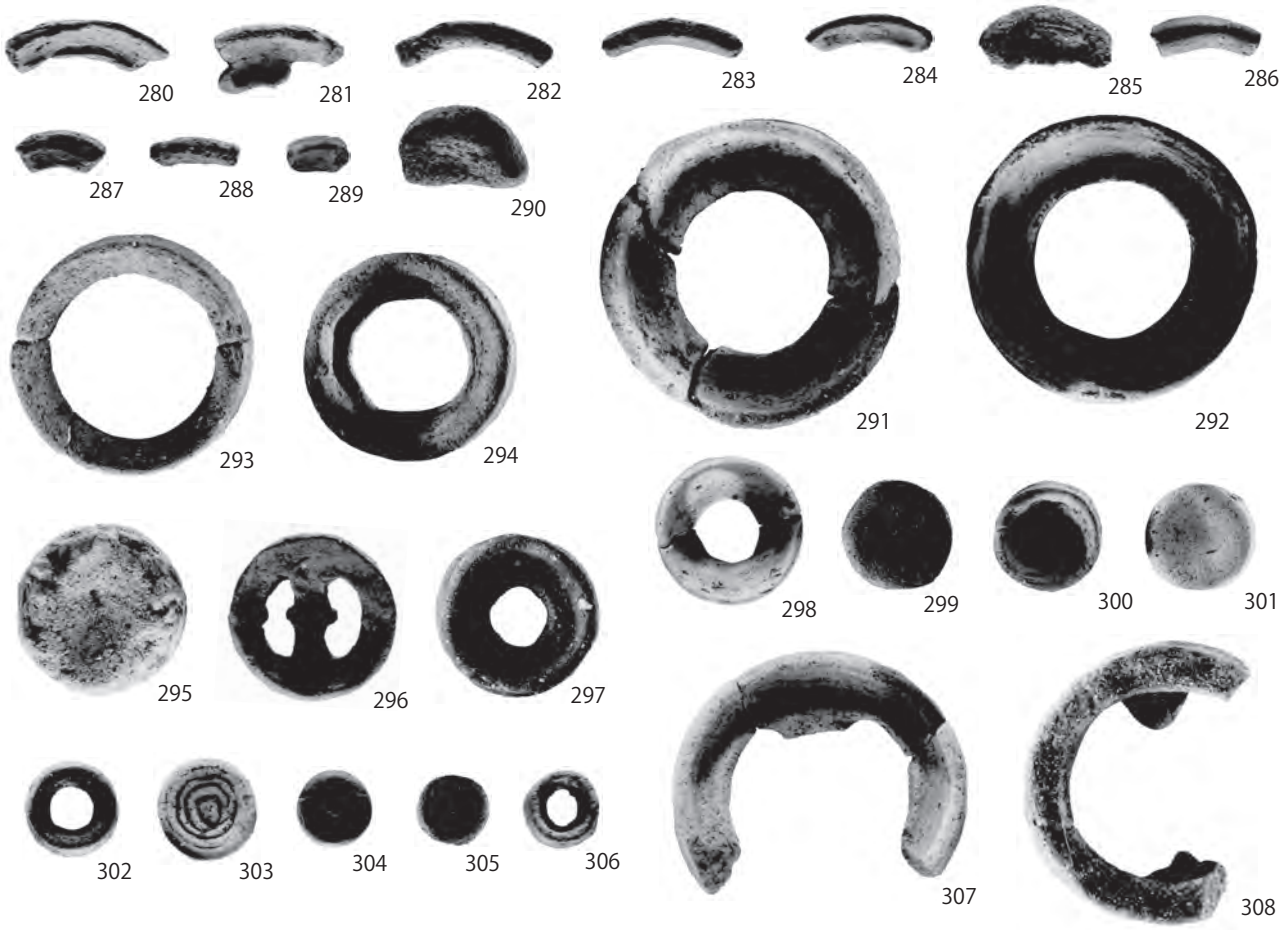
土製耳飾り（7）


251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279

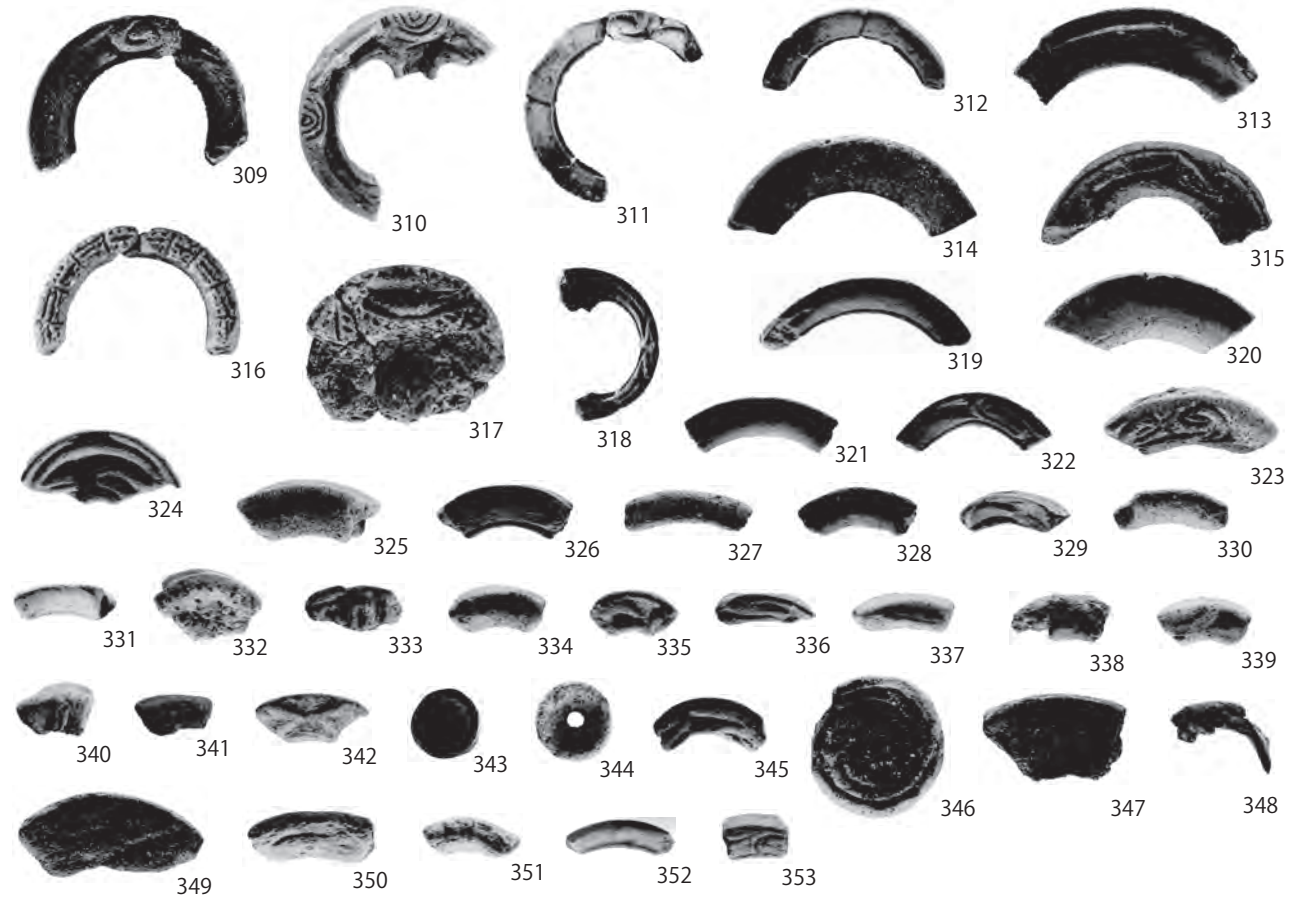

251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279

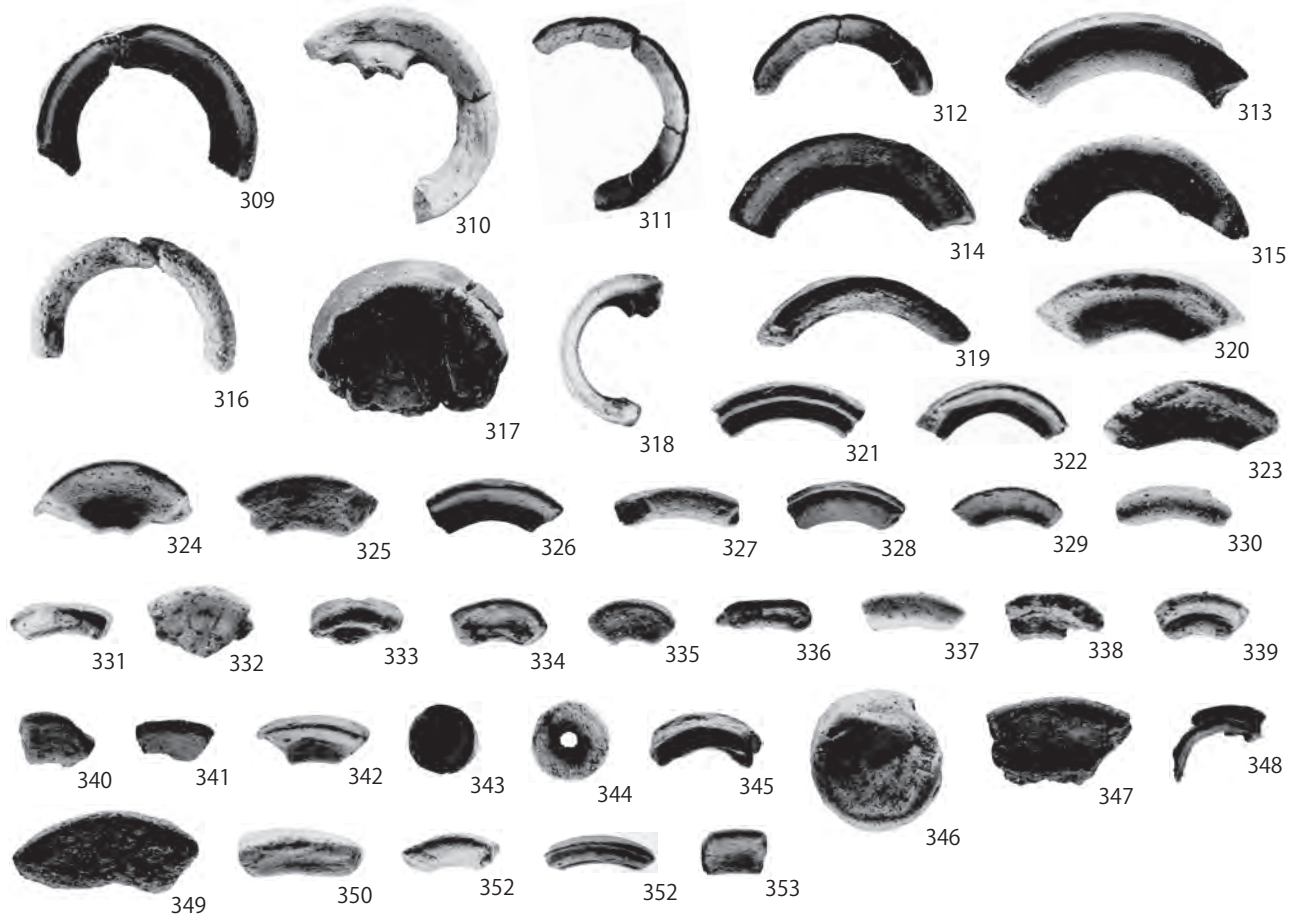
土製耳飾り（8）


280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308

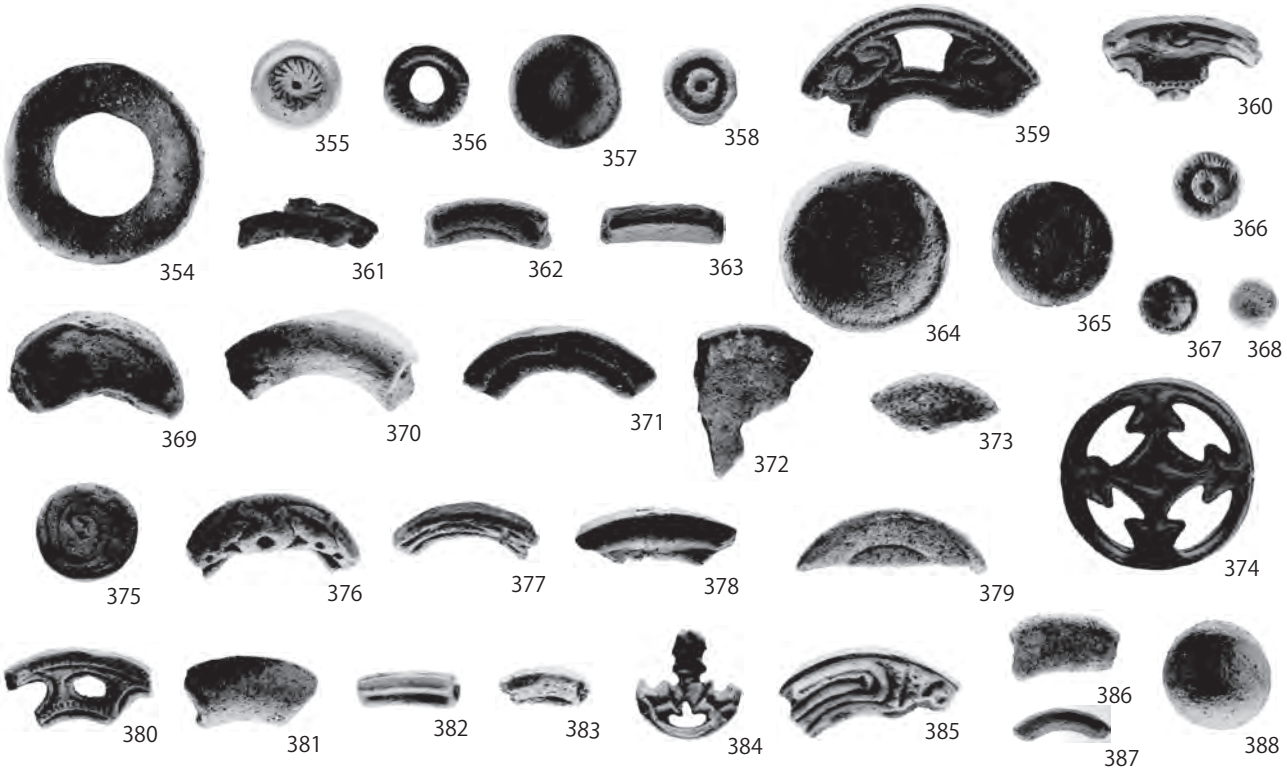

280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308

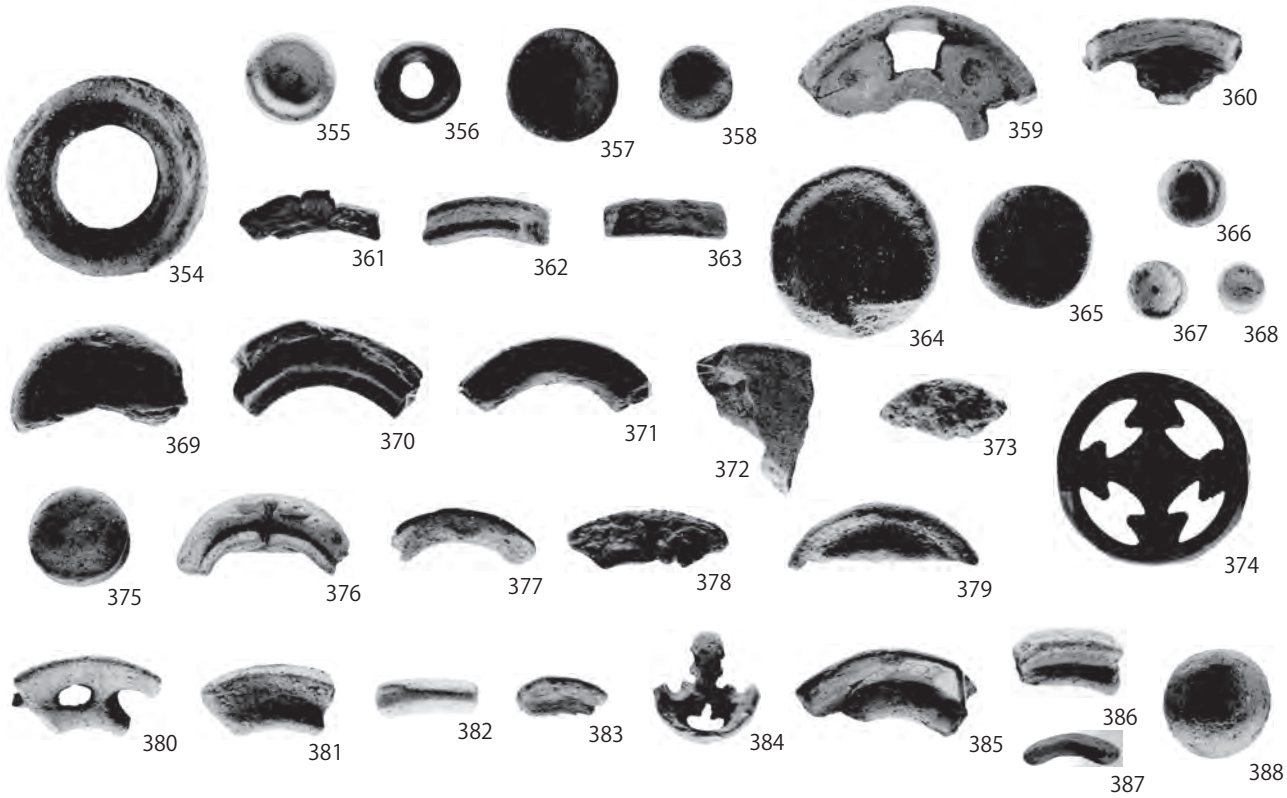
土製耳飾り（9）


309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353

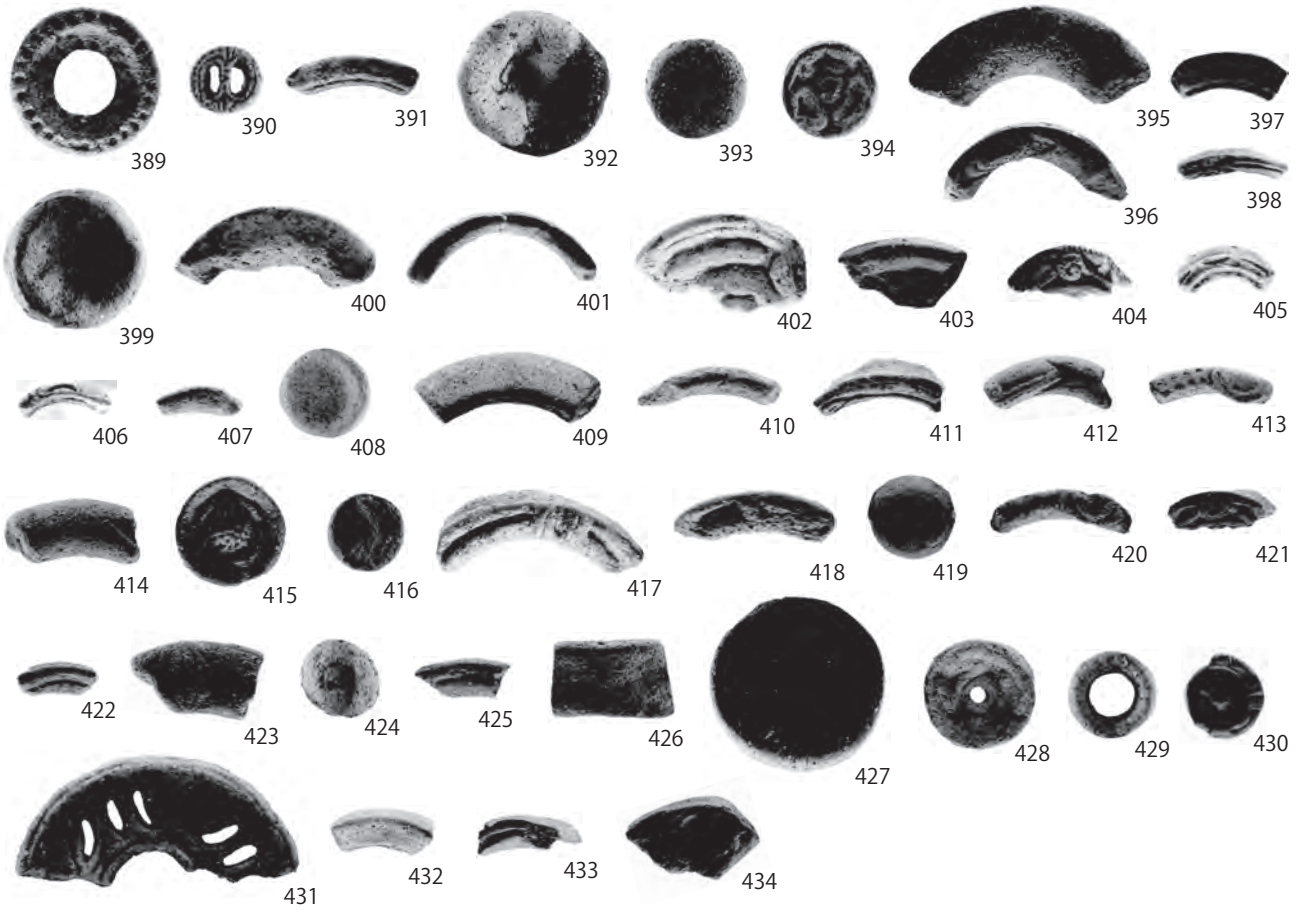

309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
352
352
353

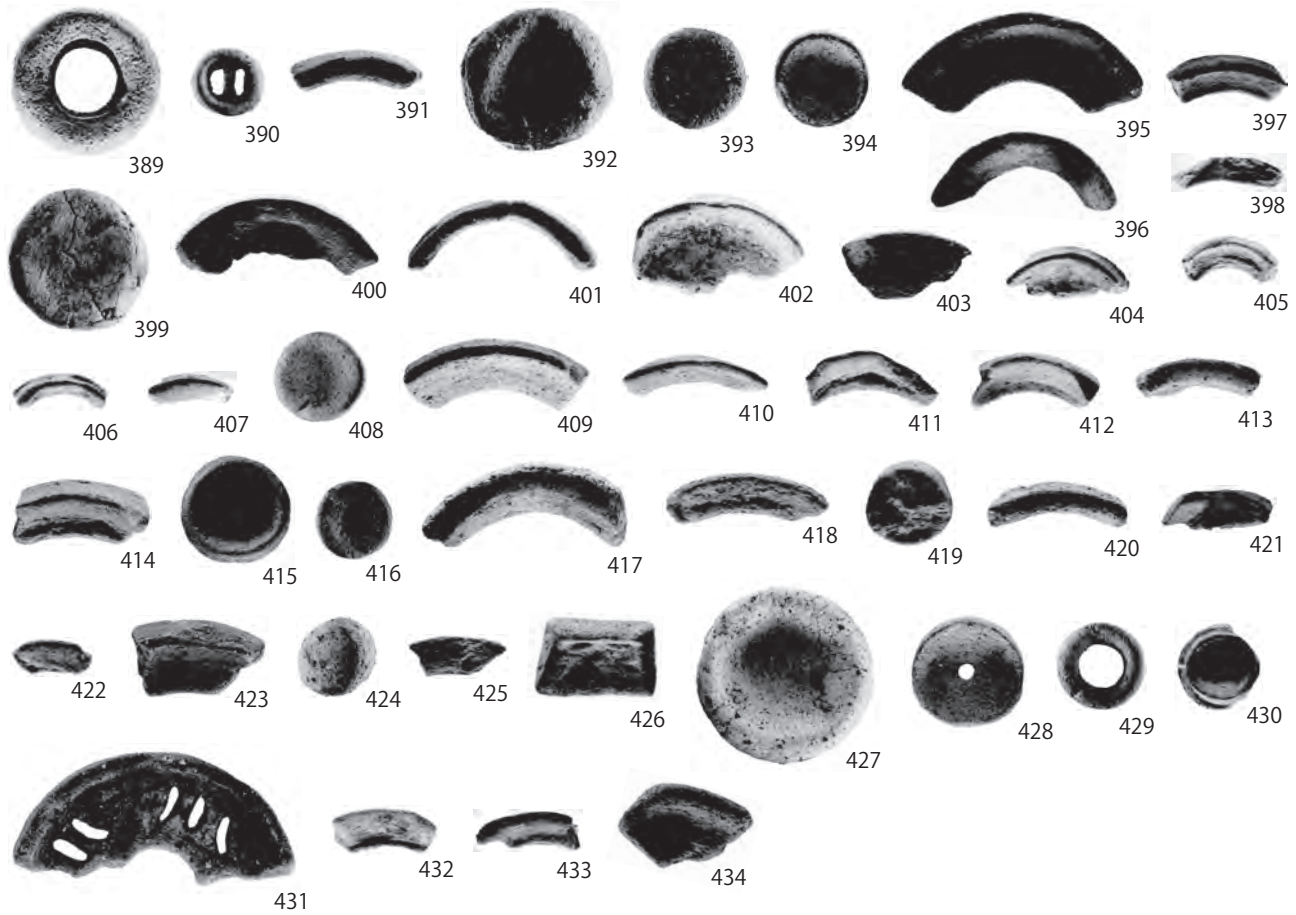
土製耳飾り（10）


354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388

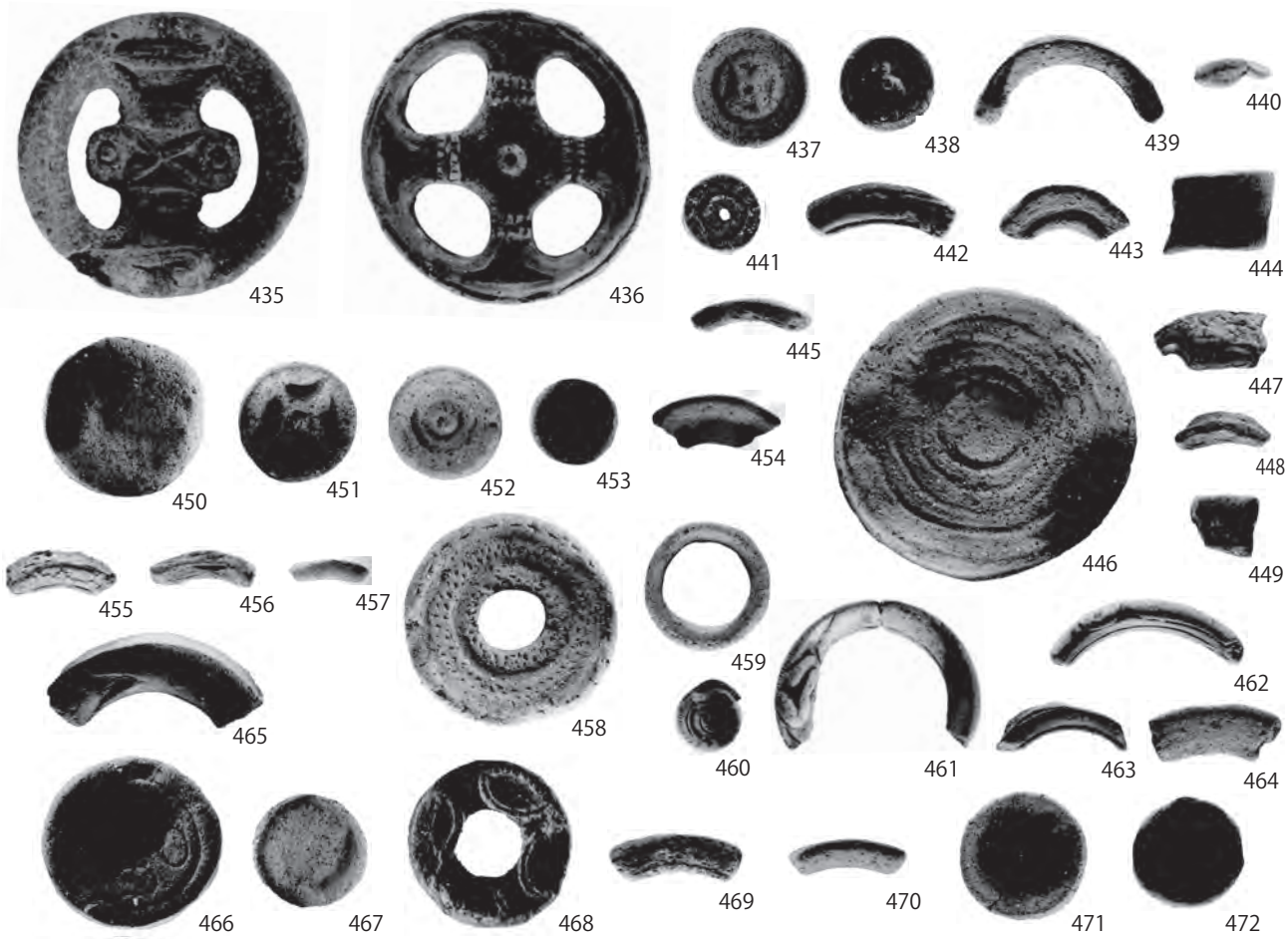

354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388

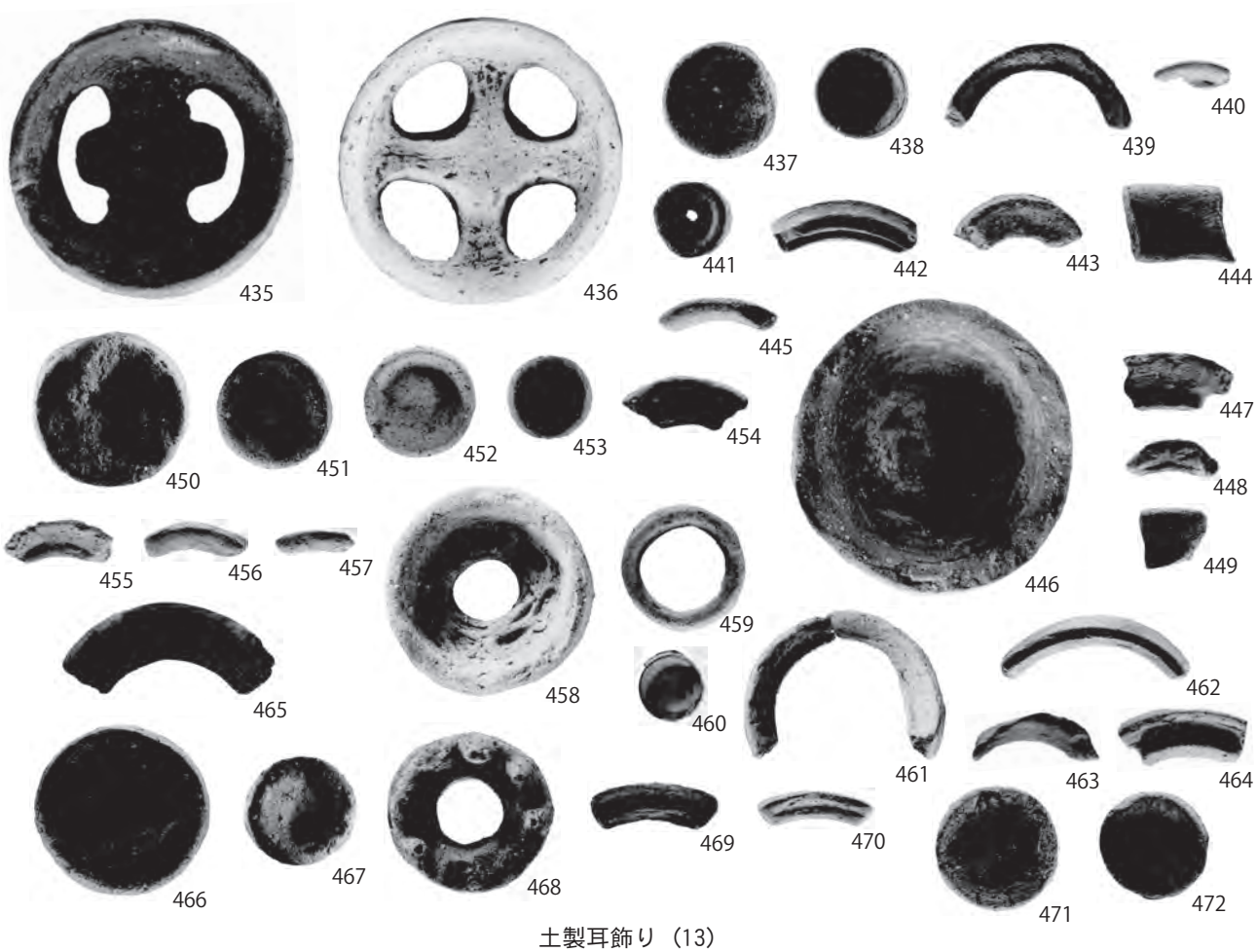
土製耳飾り（11）


389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434

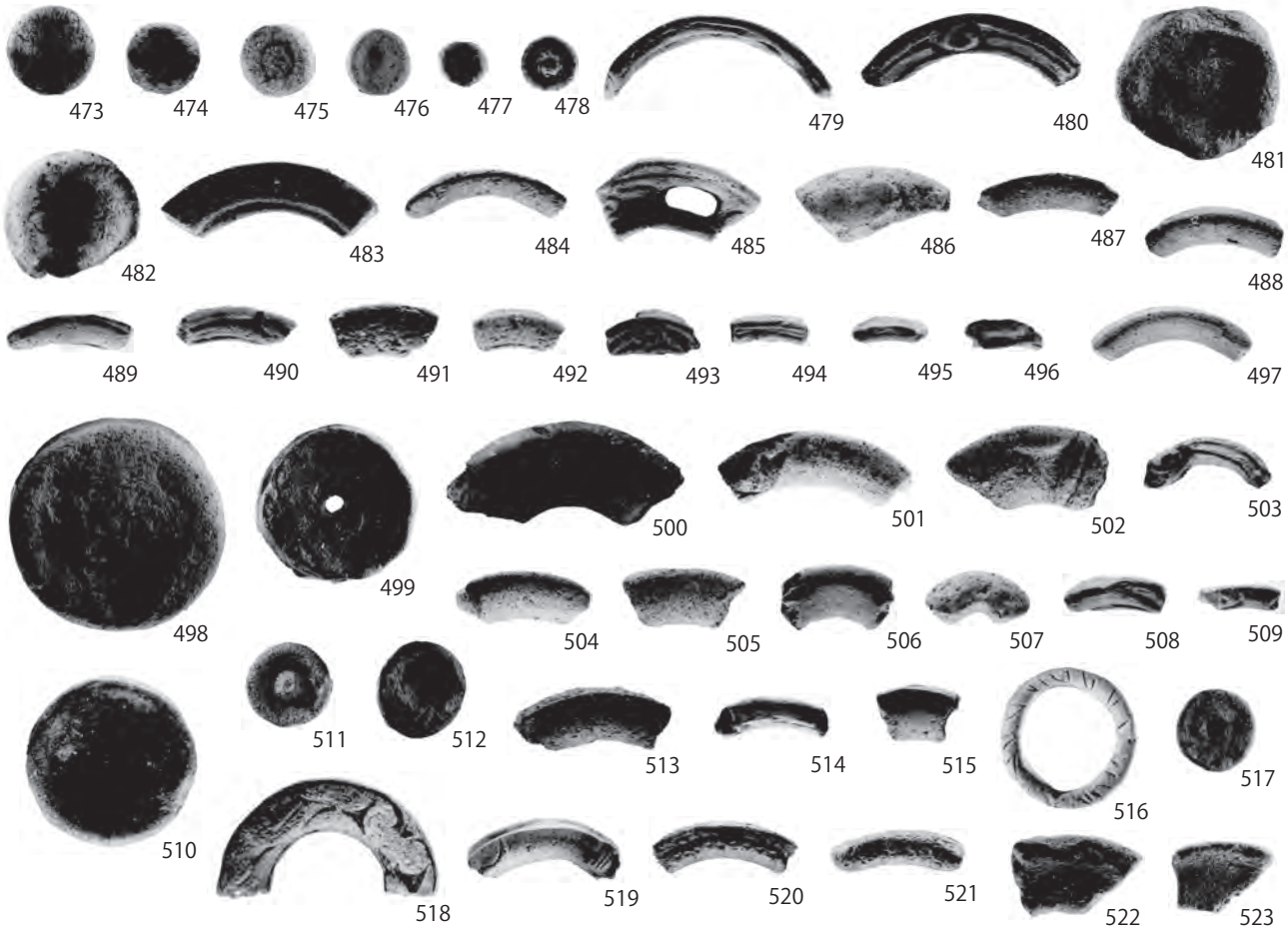

389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434

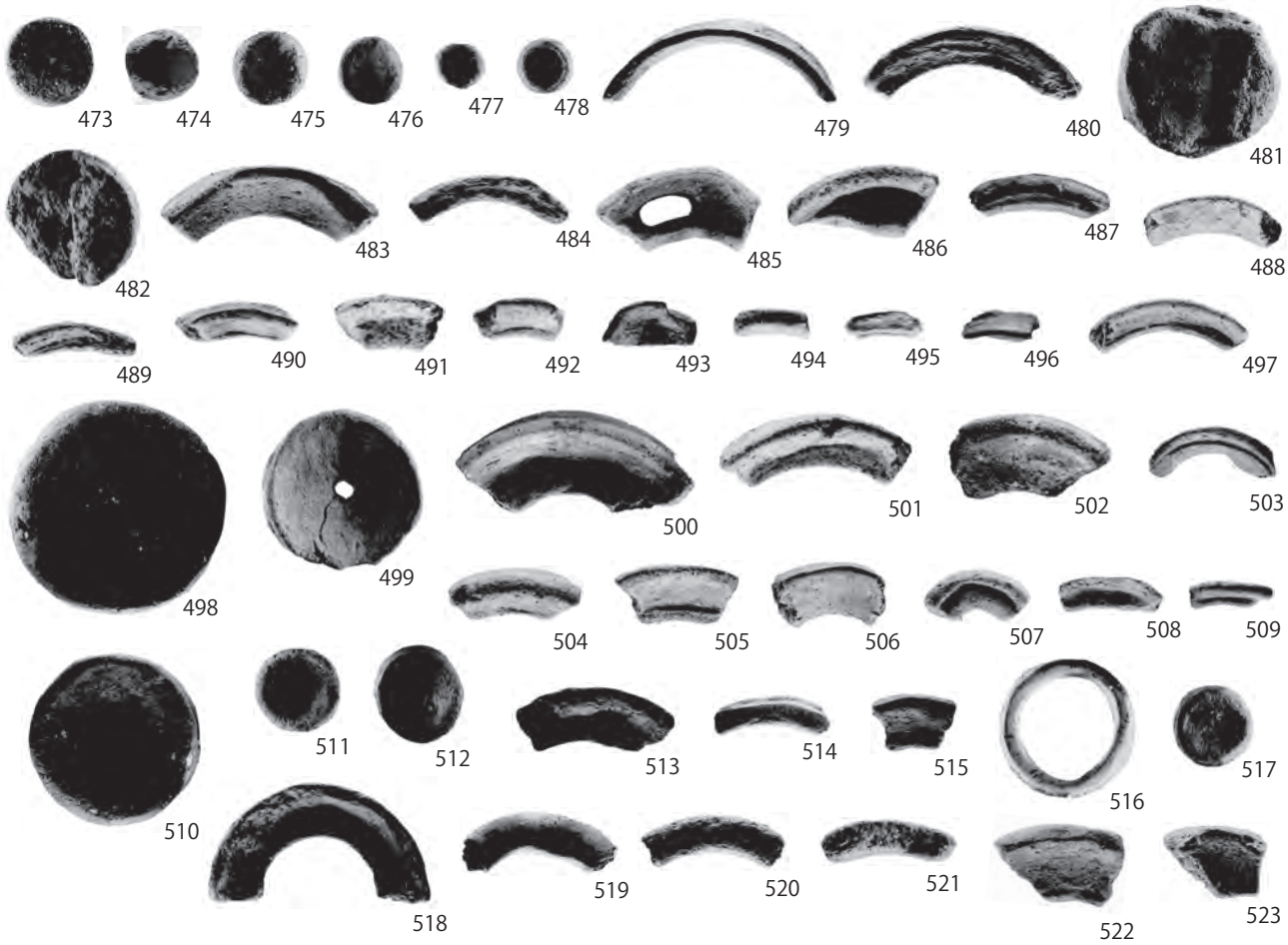
土製耳飾り（12）


435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472

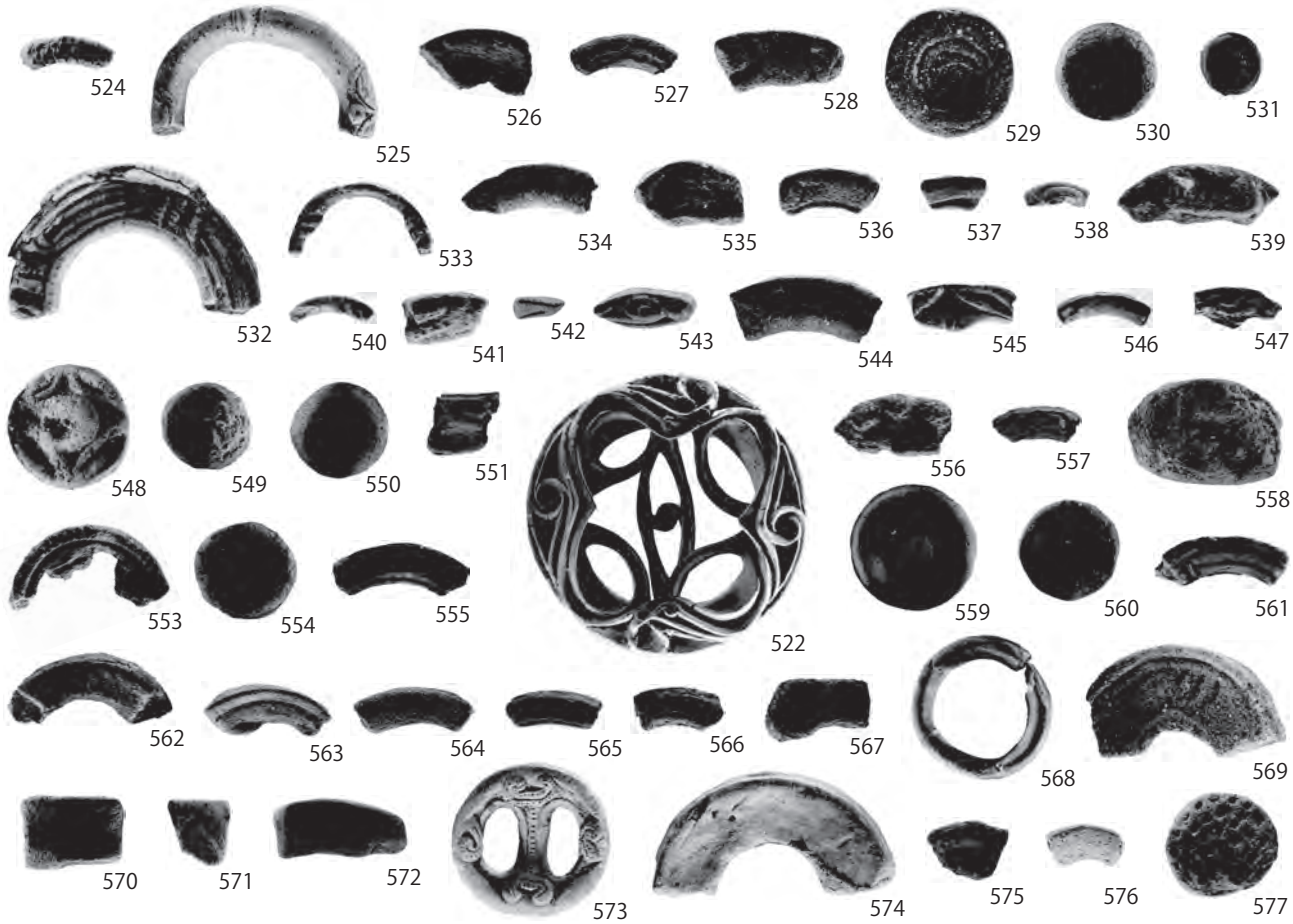

435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472

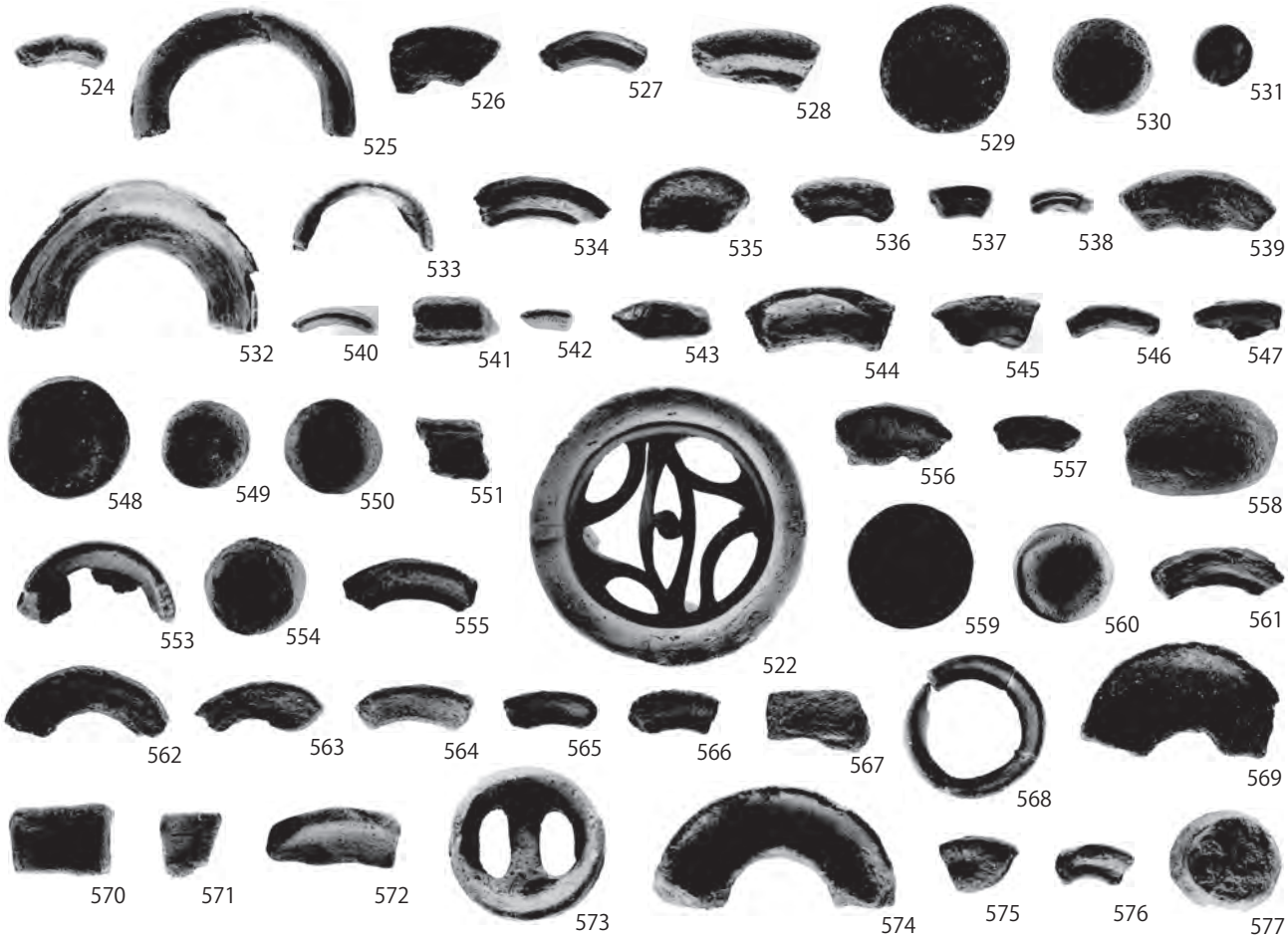
土製耳飾り（13）


473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523

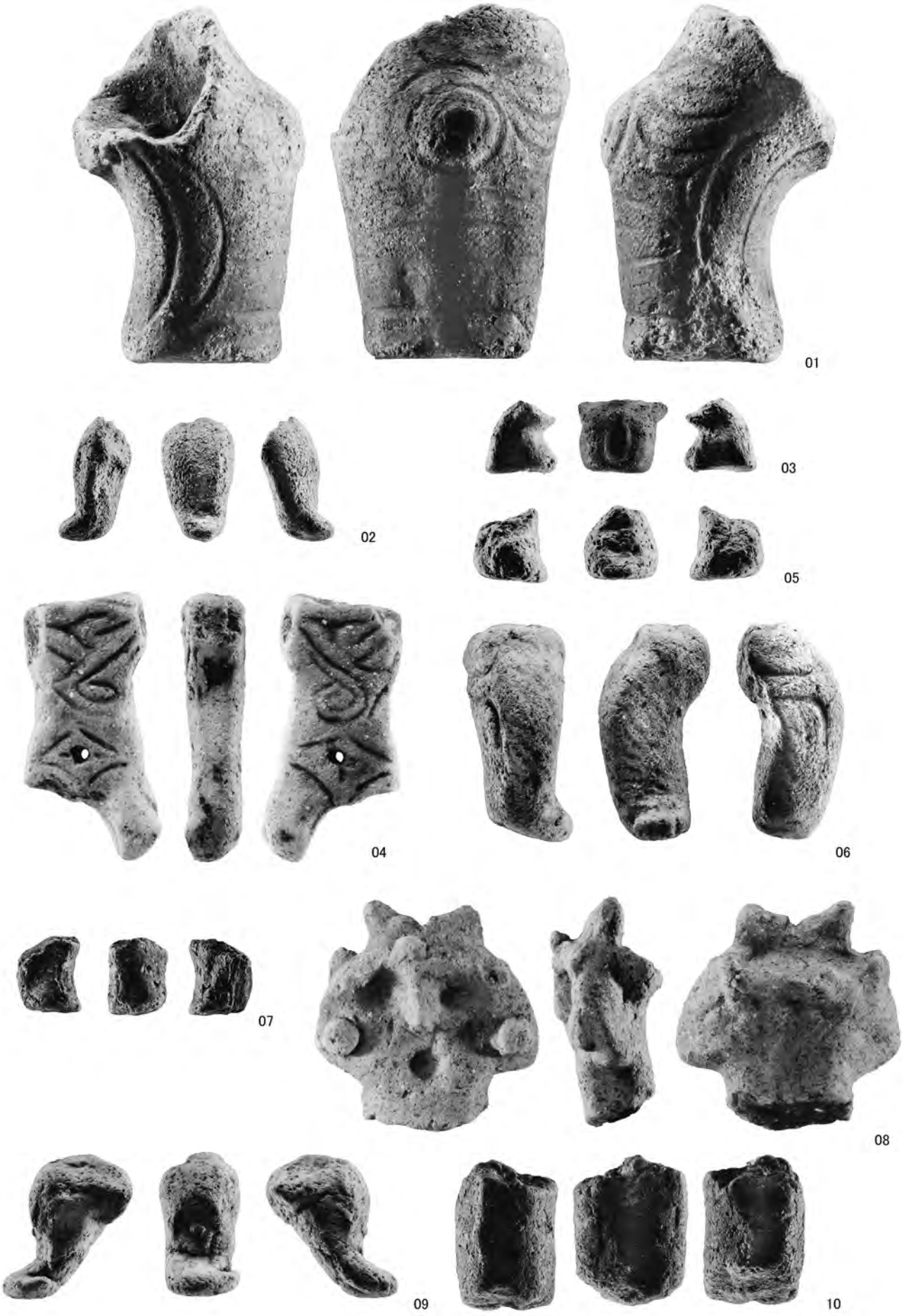

473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523

土製耳飾り（14）


524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
522
556
557
558
553
554
555
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577


524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
522
556
557
558
553
554
555
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577

土製耳飾り（15）



土偶（1）

11

12

13

14

15

16

17

18

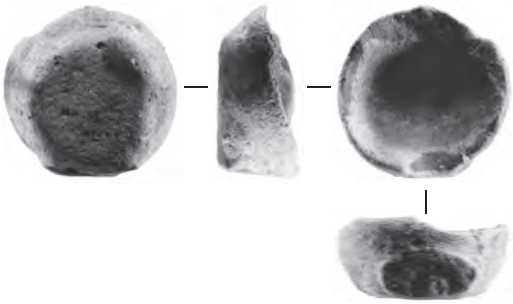
19

20

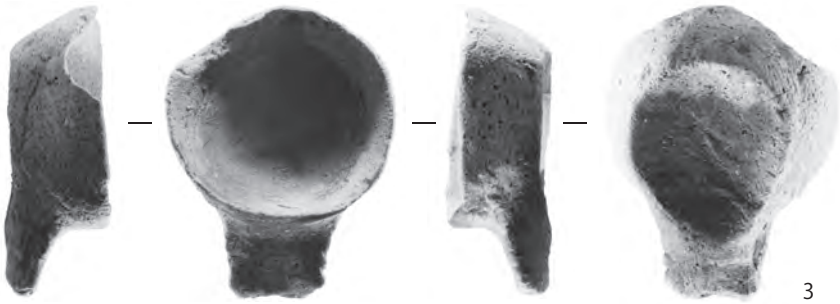
21

土偶（2）

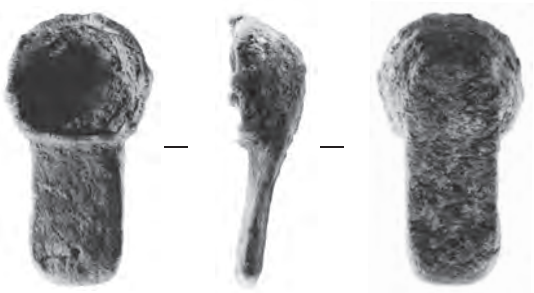
1



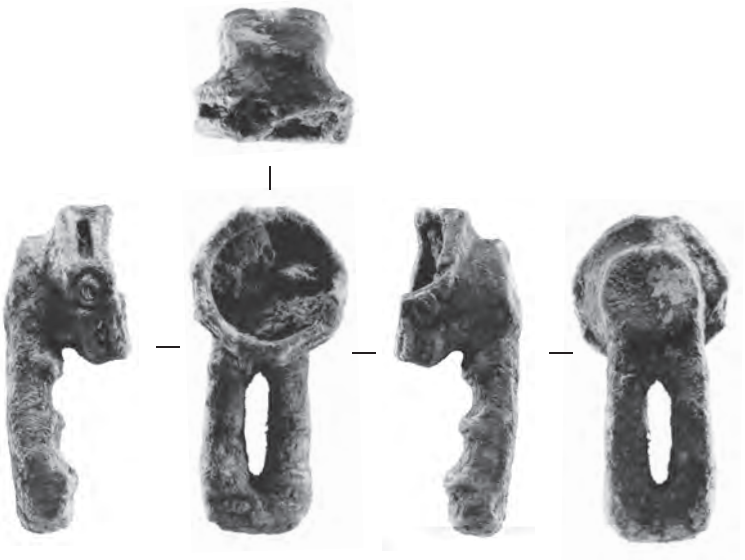
2



3

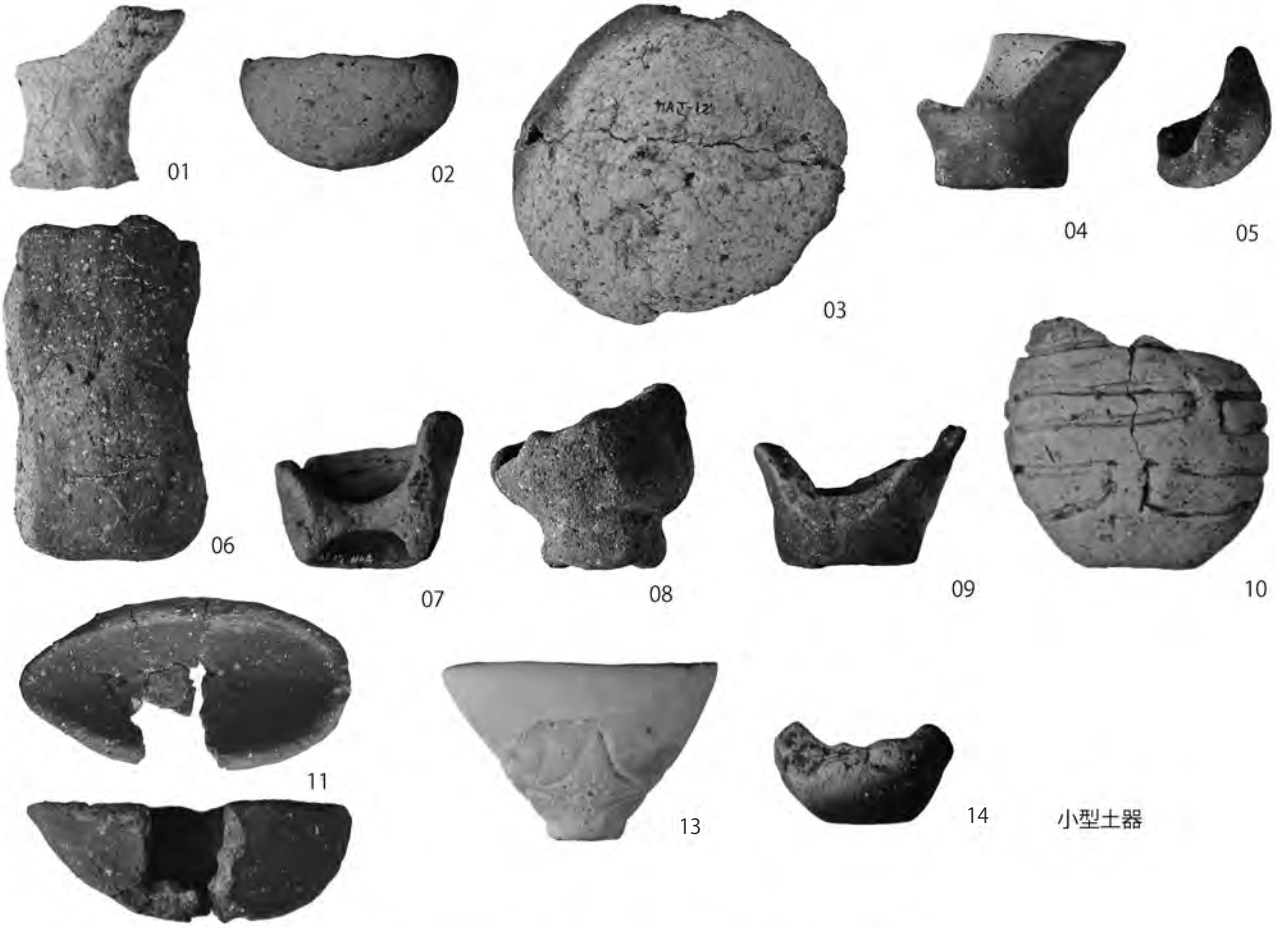


4



5

手燭型土製品



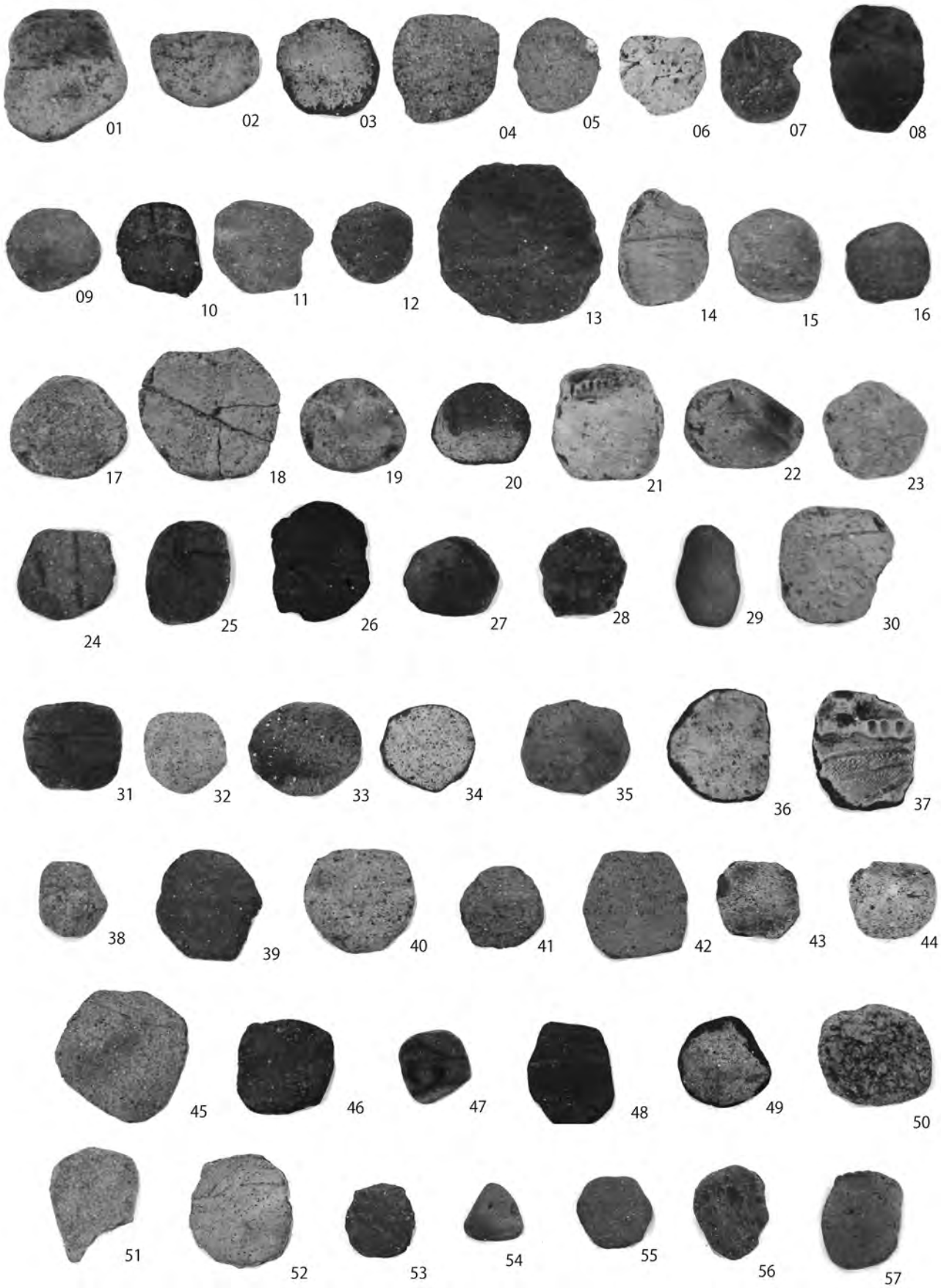
小型土器

土版

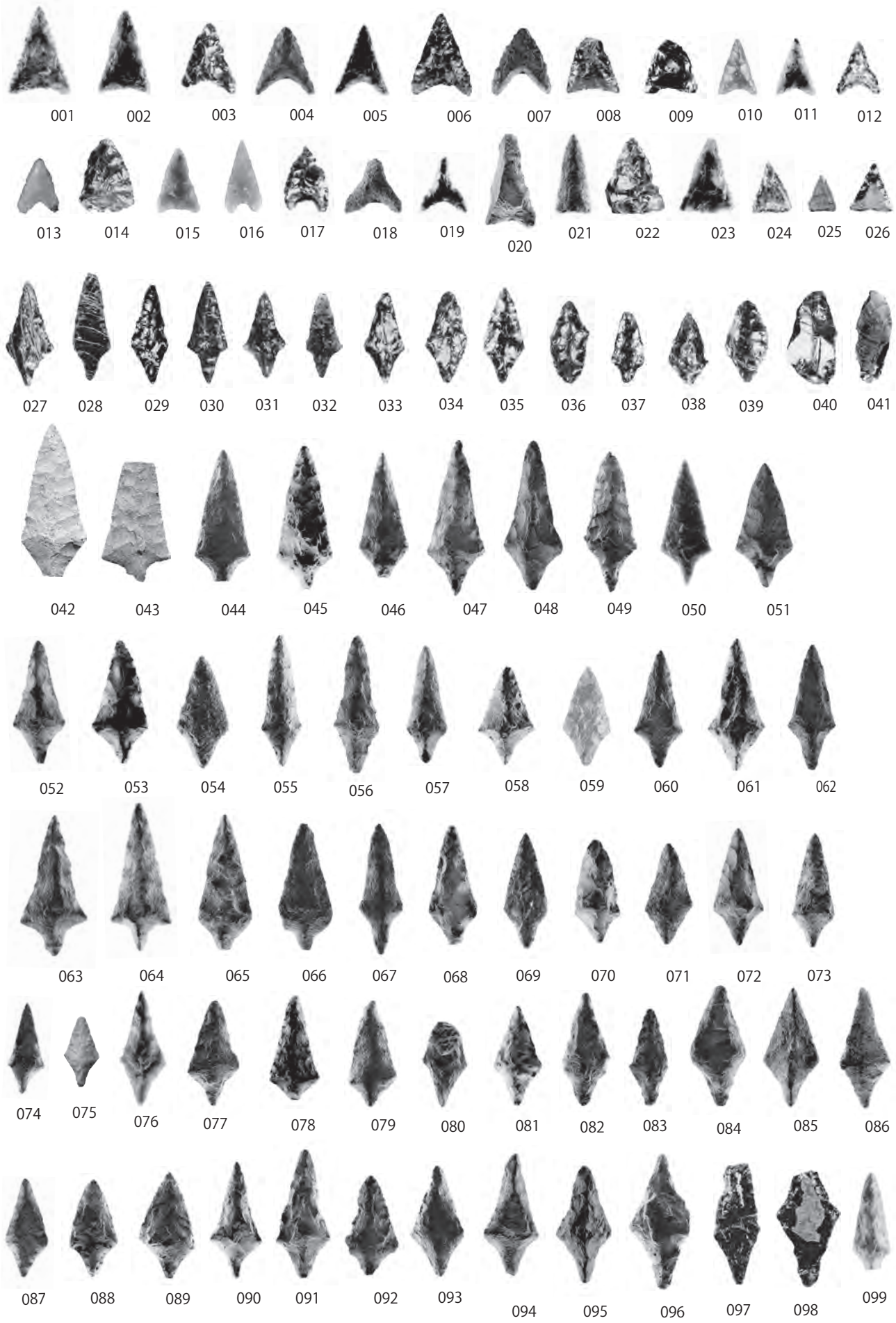
異形土製品

スタンプ形土製品

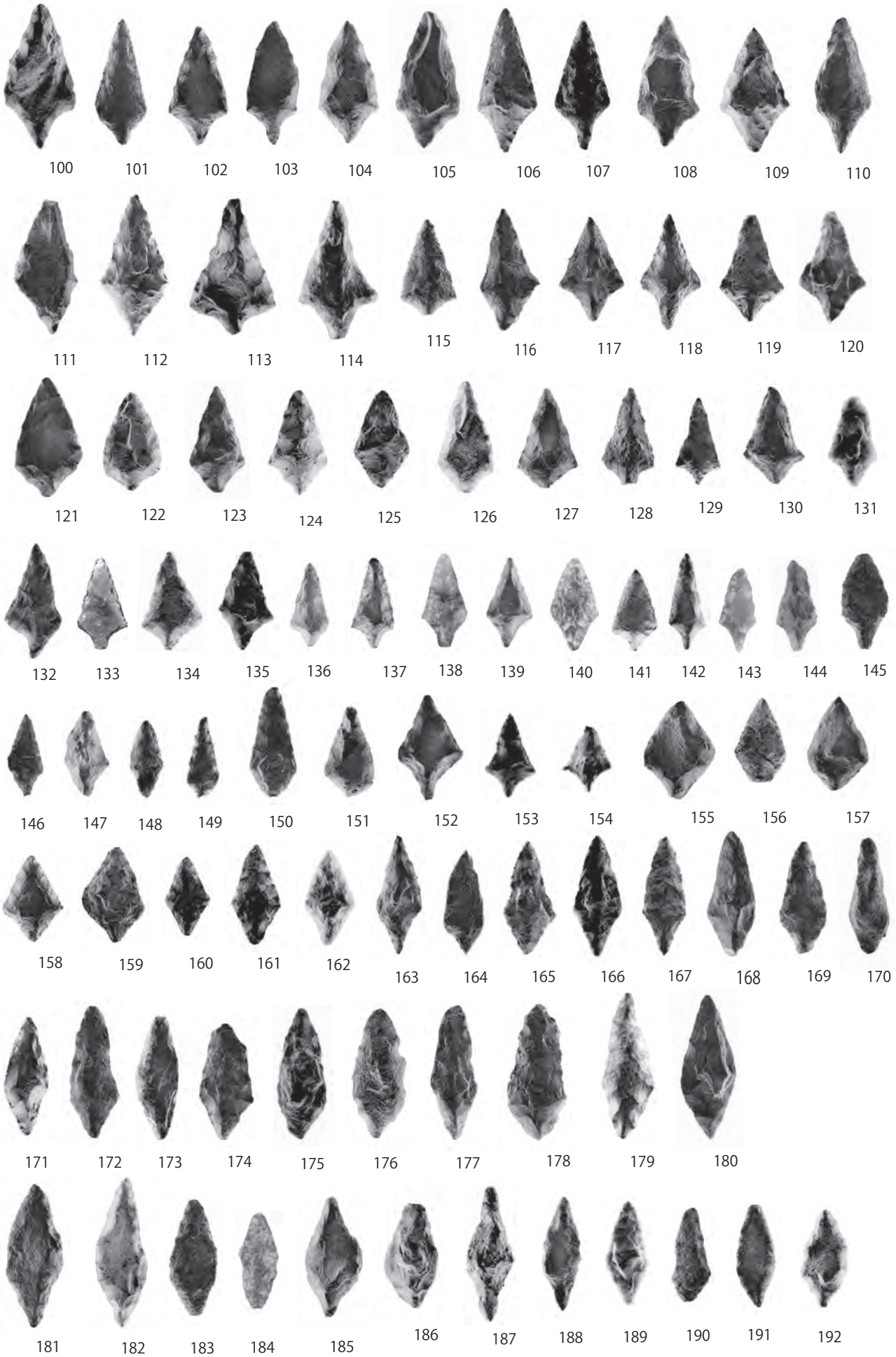
小型土器・土製品　2/3


01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57

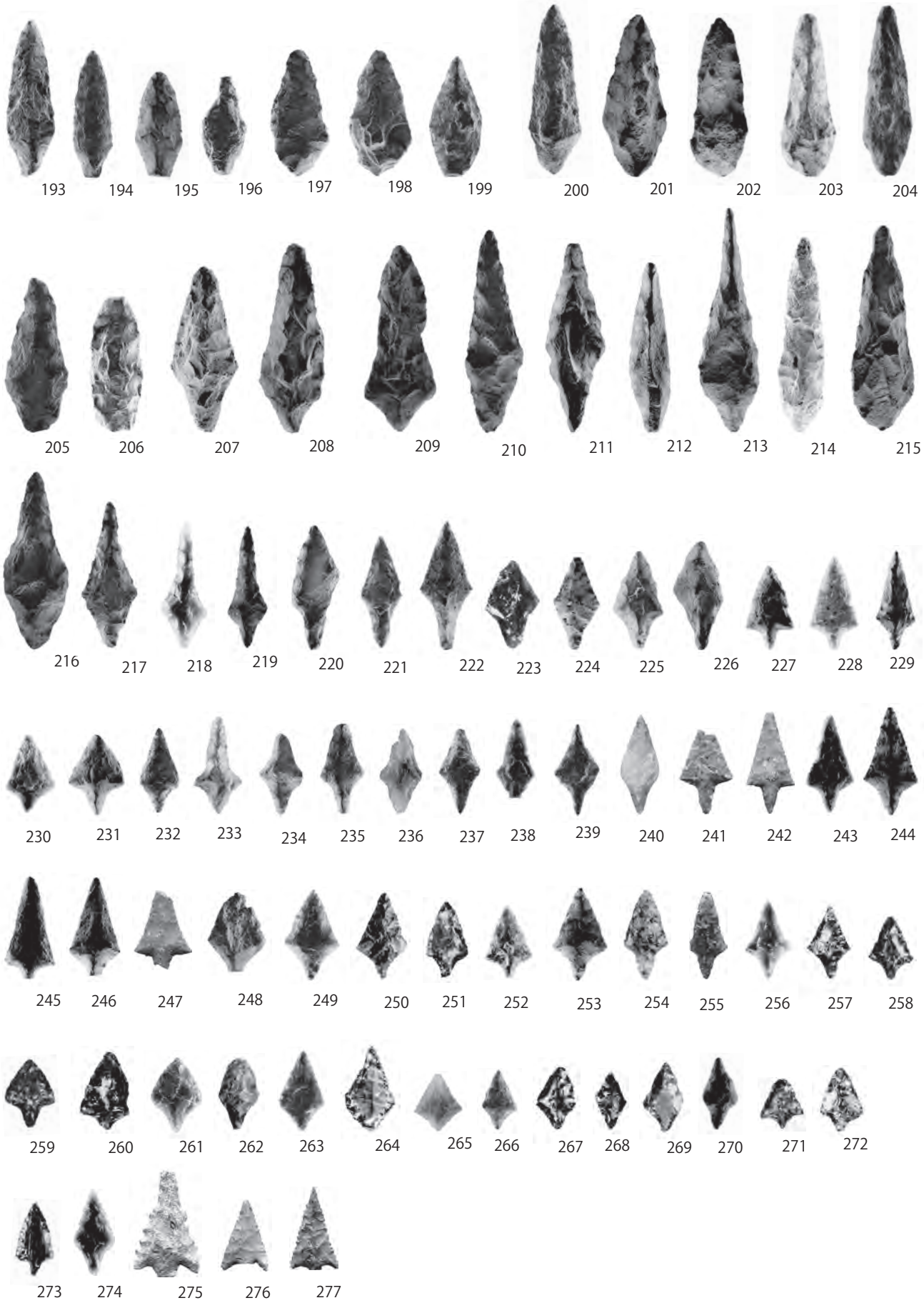
土製円盤


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085
086
087
088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099

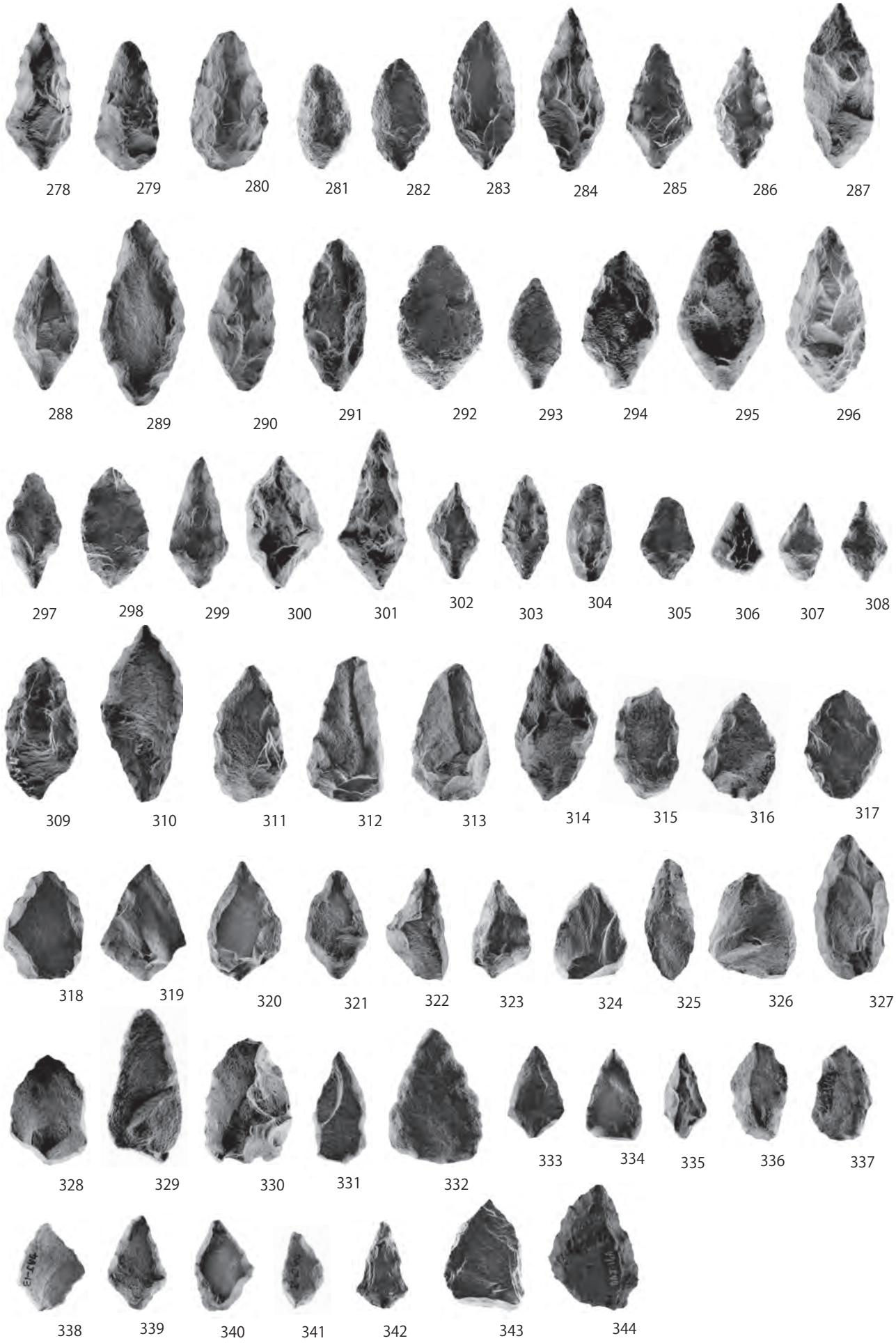
石鏃（1）


100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192

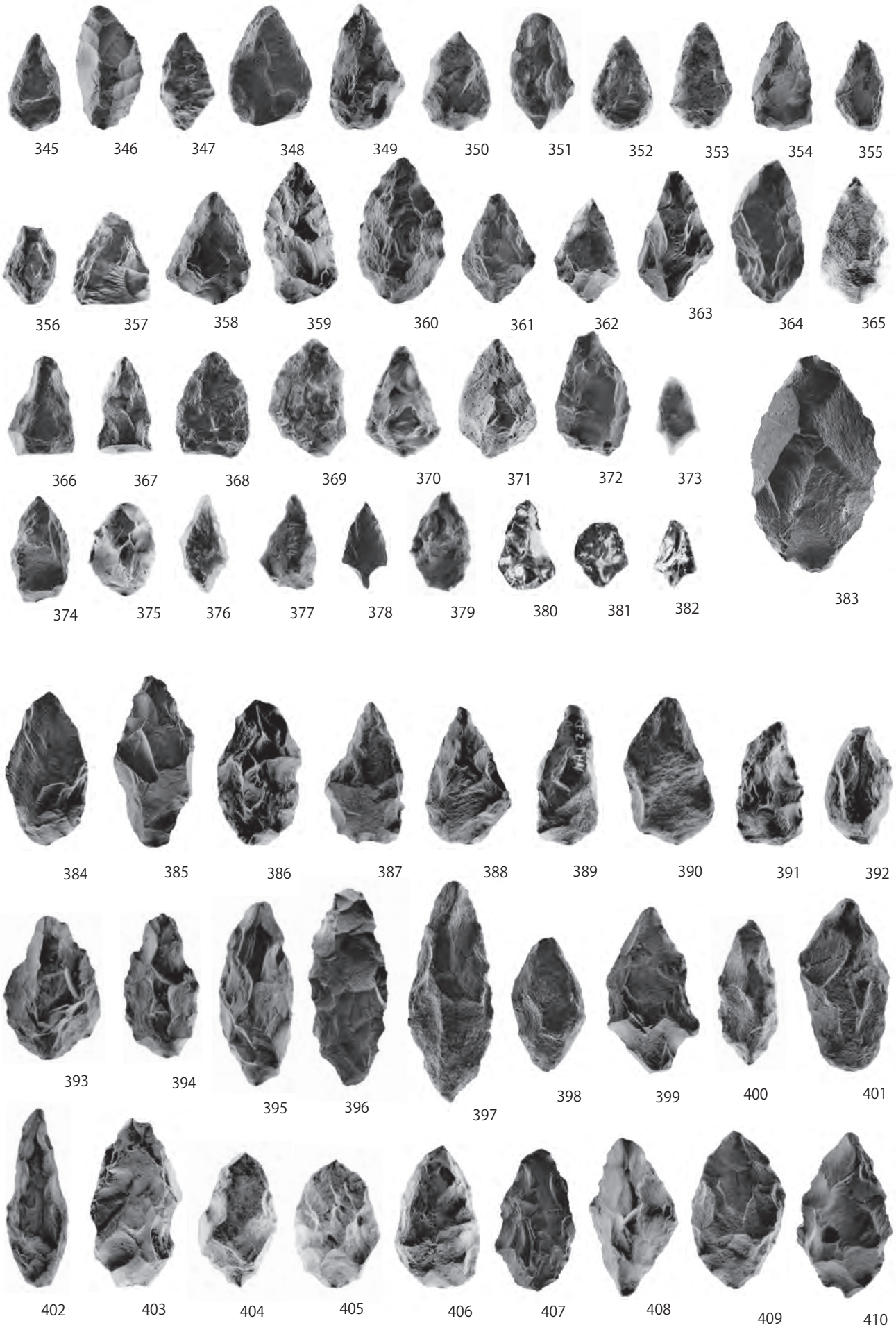
石鏃（2）


193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277

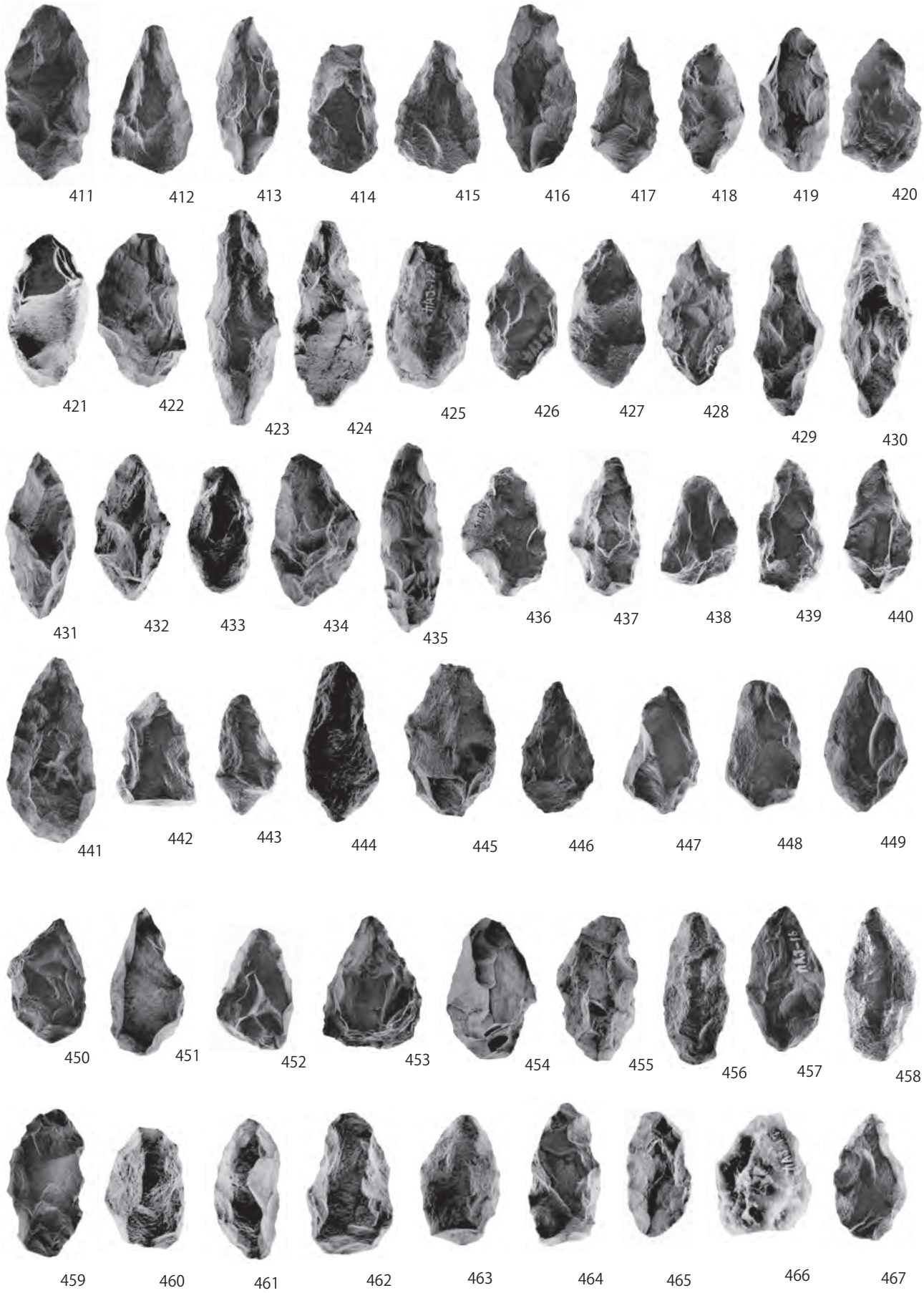
石鏃（3）


278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344

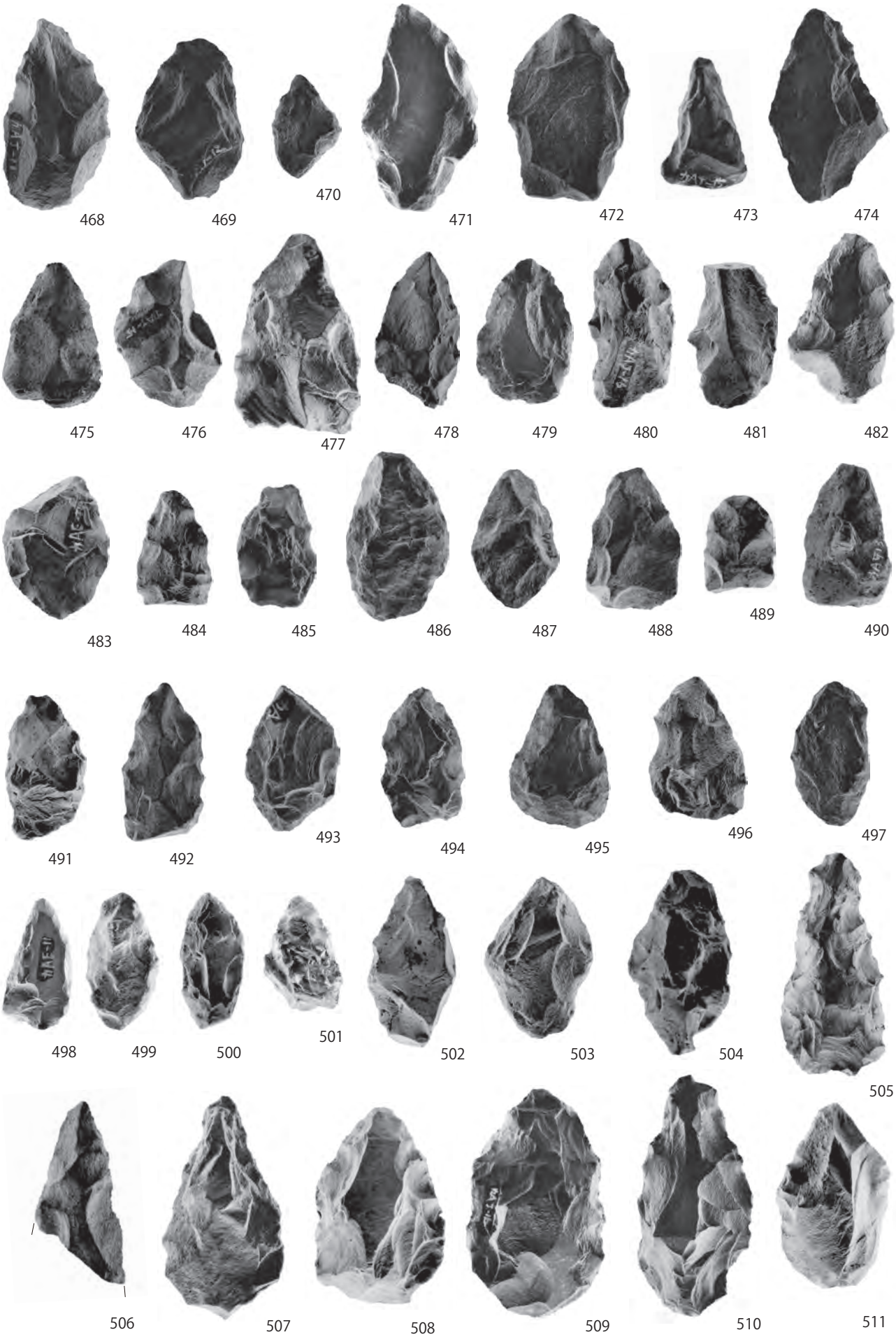
石鏃（未成品）


345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410

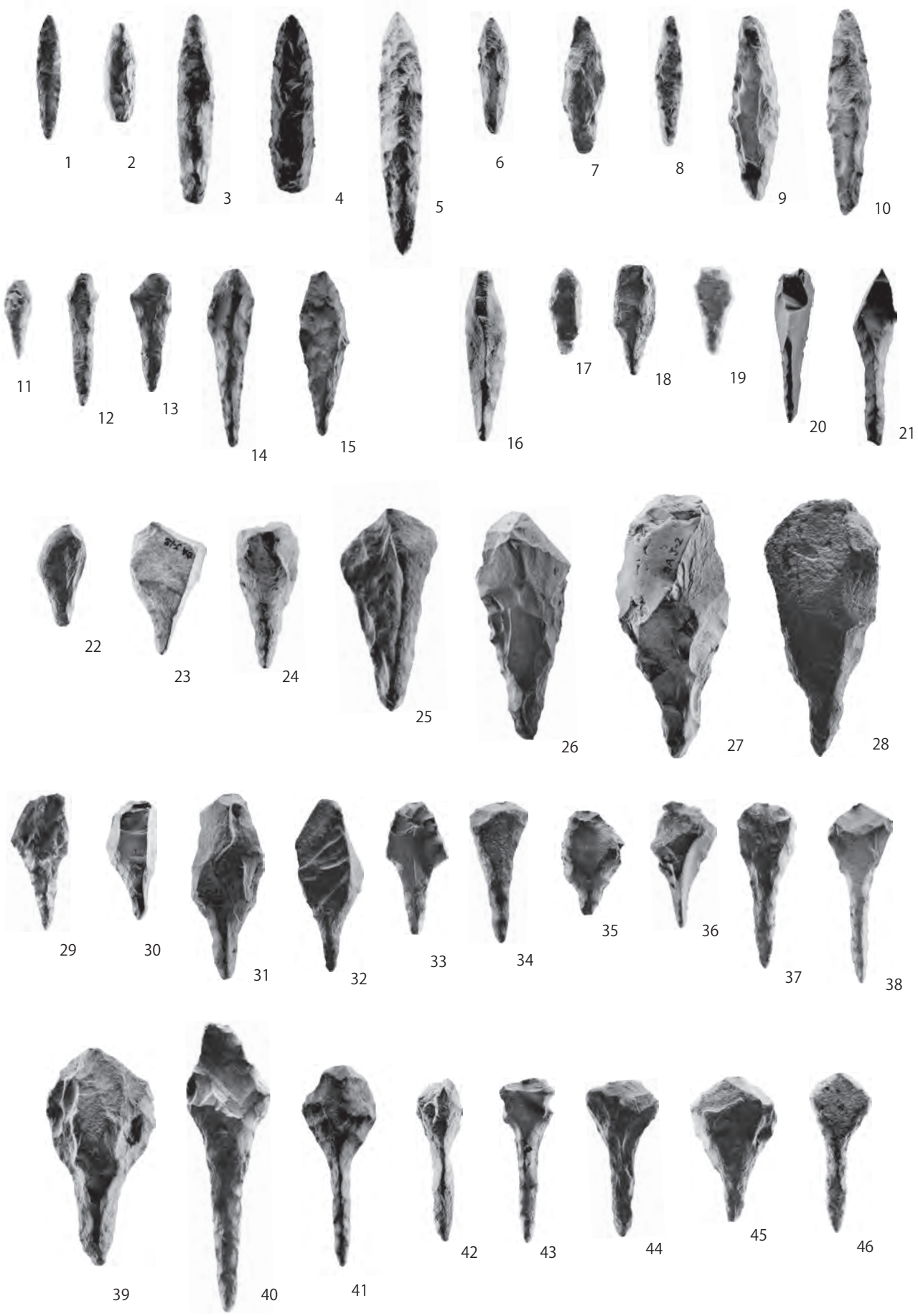
石鏃（模造品）（1）


411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467

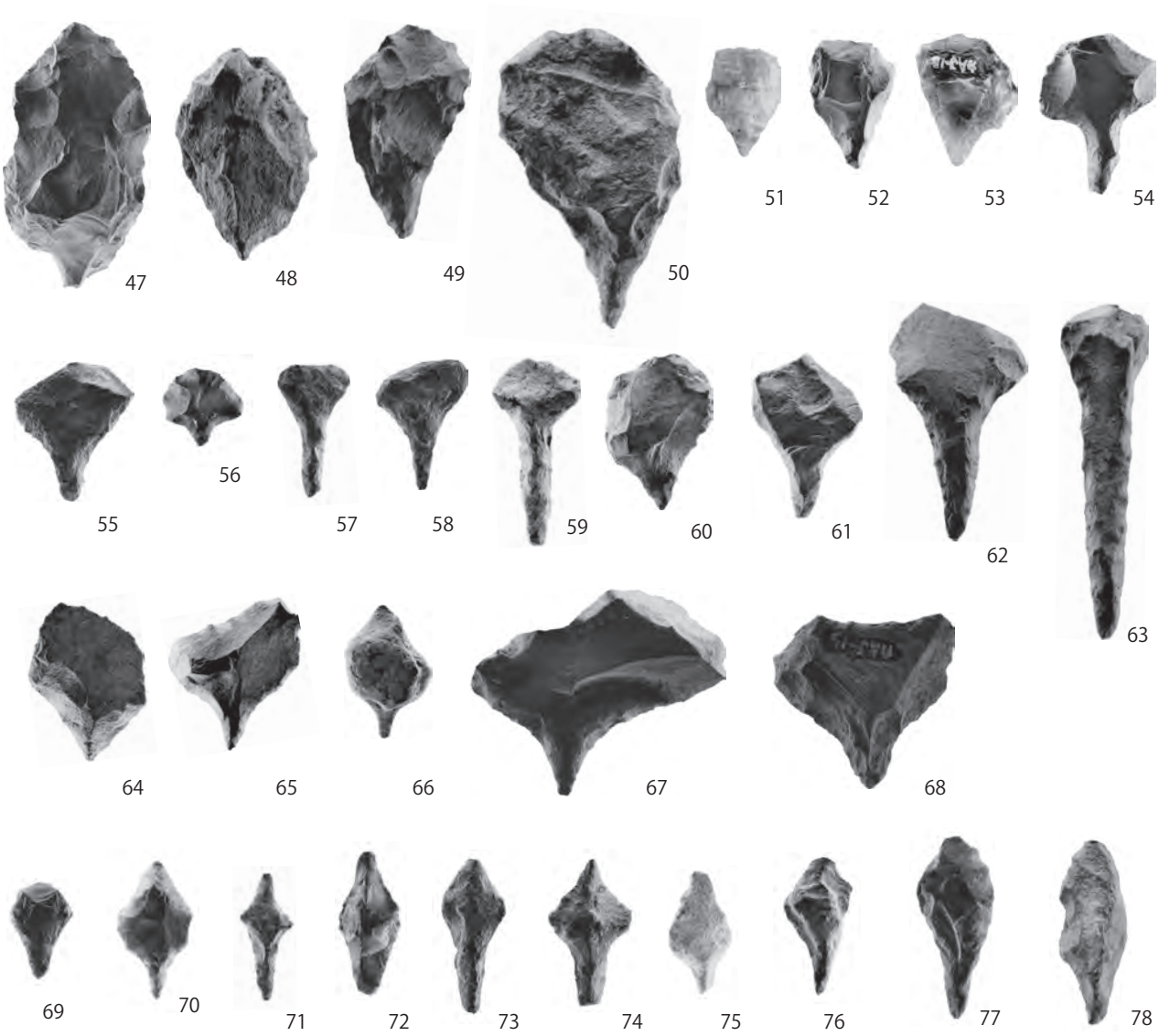
石鏃（模造品）(2)


468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511

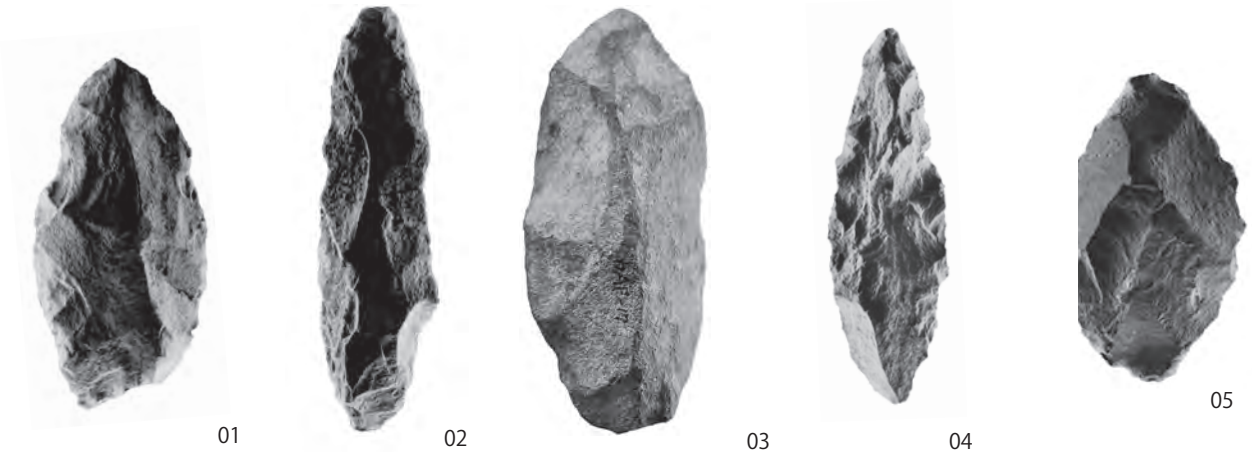
石鏃（模造品）（3）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

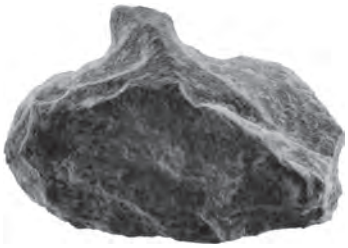
石錐（1）


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78

石錐（2）


01
02
03
04
05

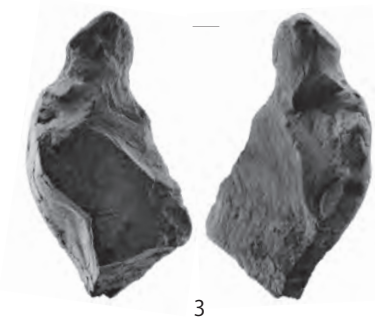
石槍



石匙

1

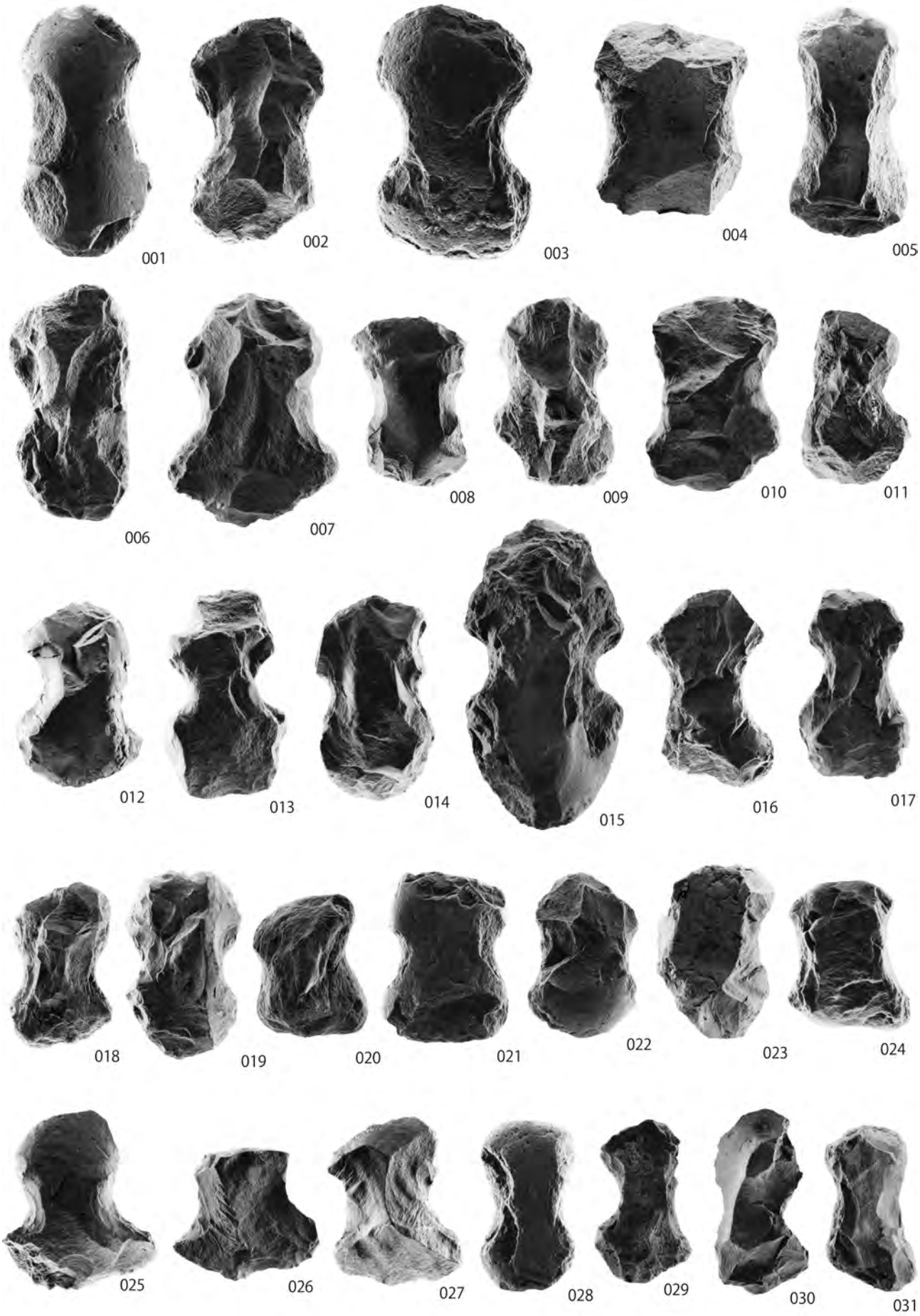
2



3

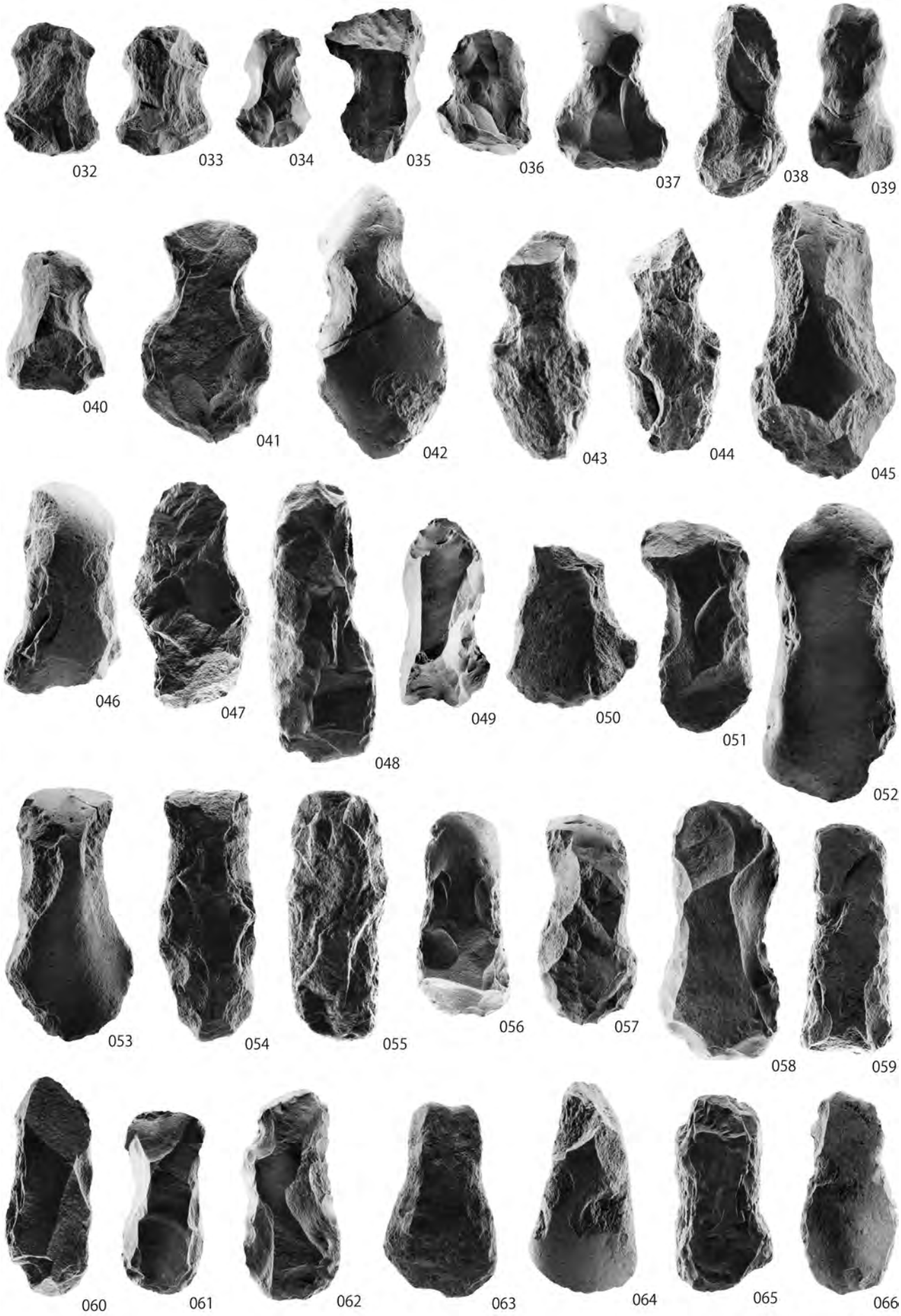
4

スクレイパー

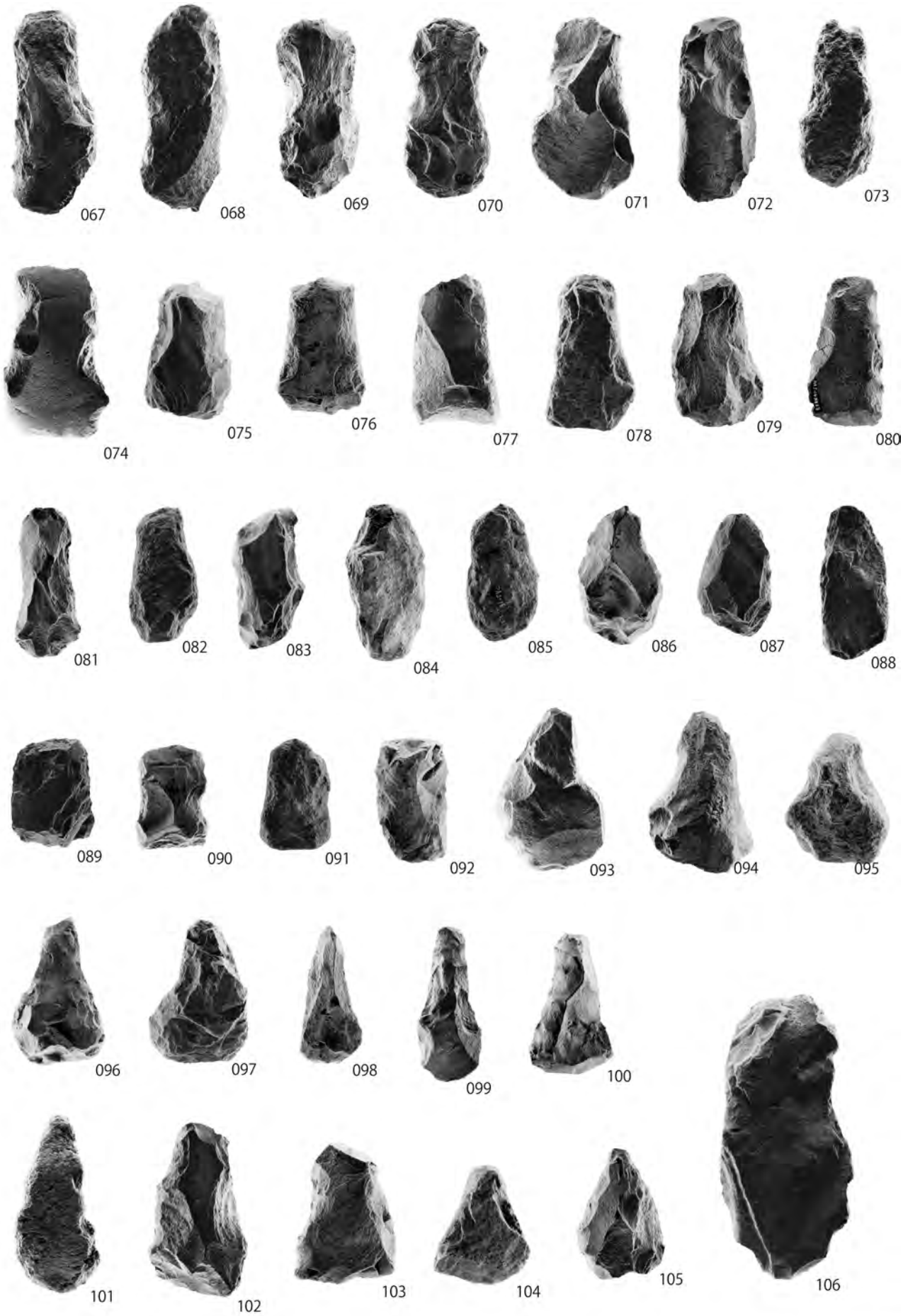


打製石斧（1）

0 5 10 cm
1:3

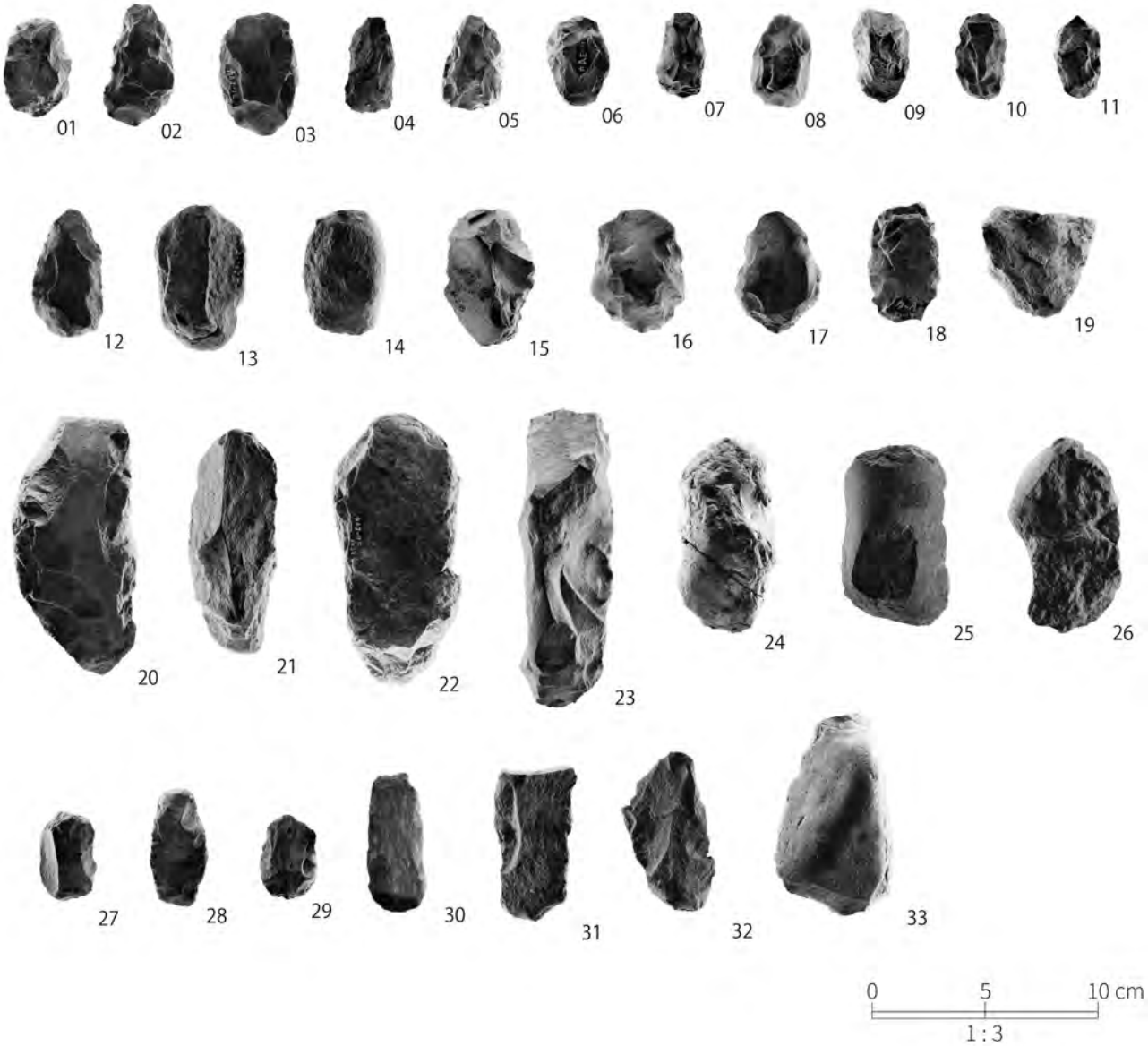

032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
0
5
10 cm
1:3

打製石斧（2）

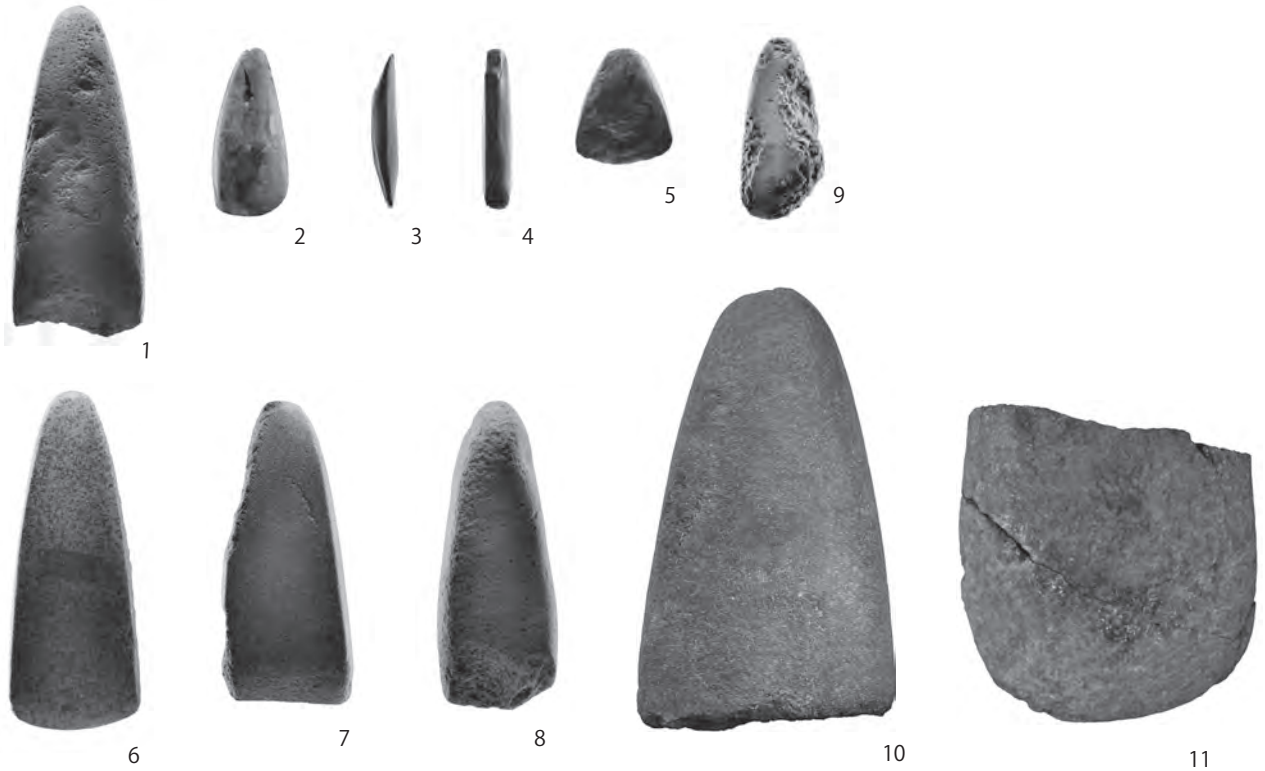


打製石斧（3）

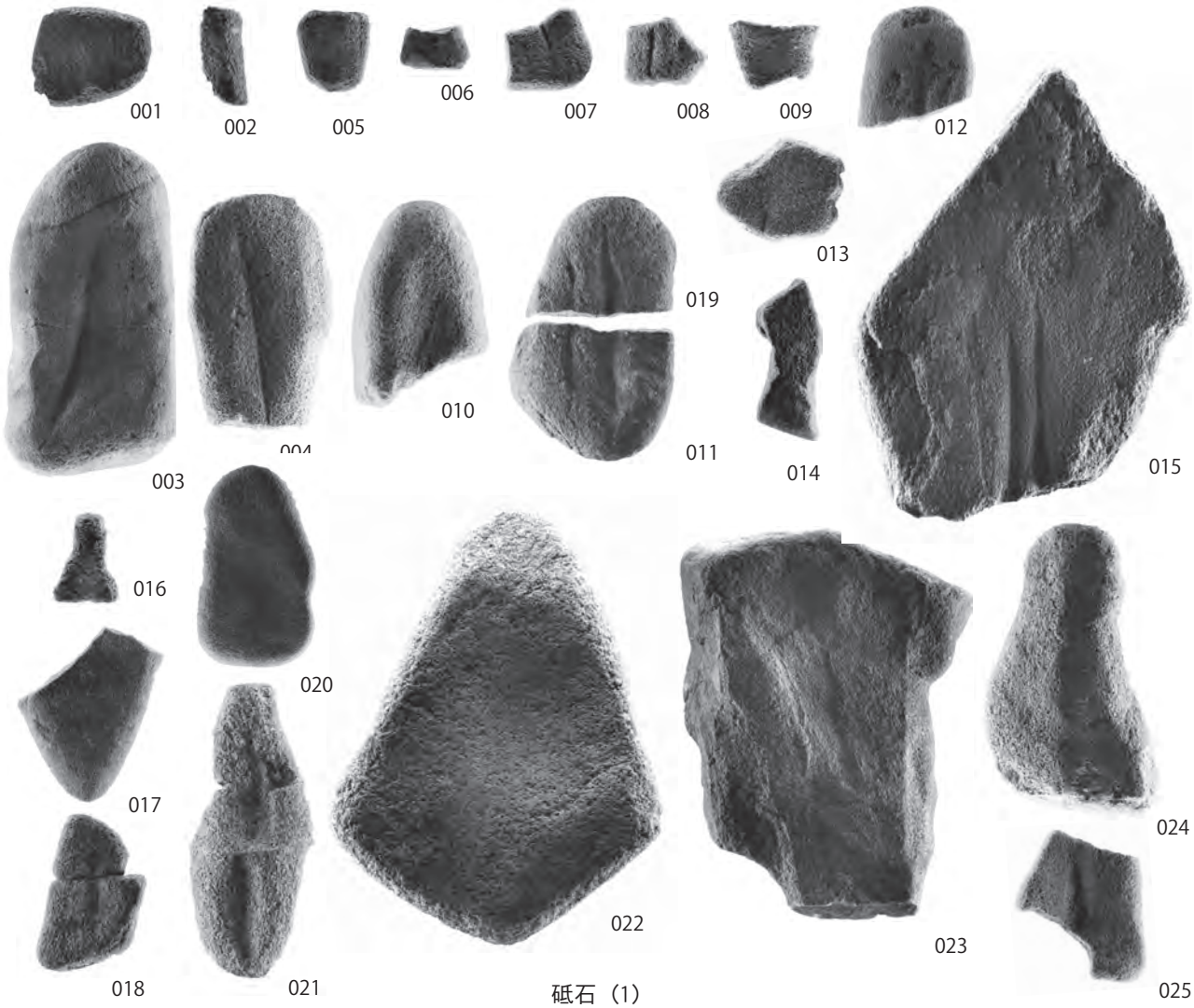
0 5 10 cm
1:3


01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
5
10 cm
1 : 3

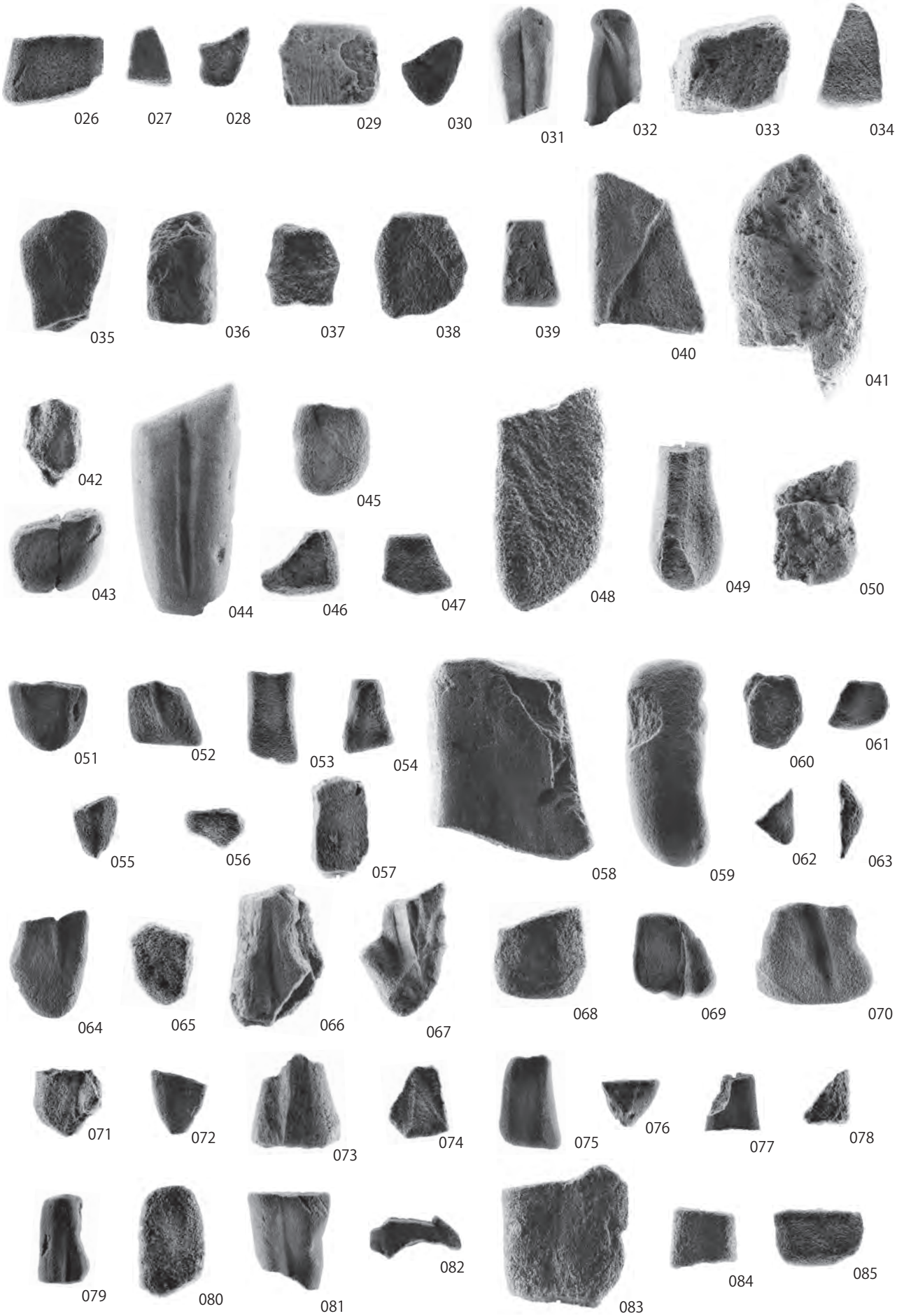
その他の打製石器


1
2
3
4
5
9
6
7
8
10
11

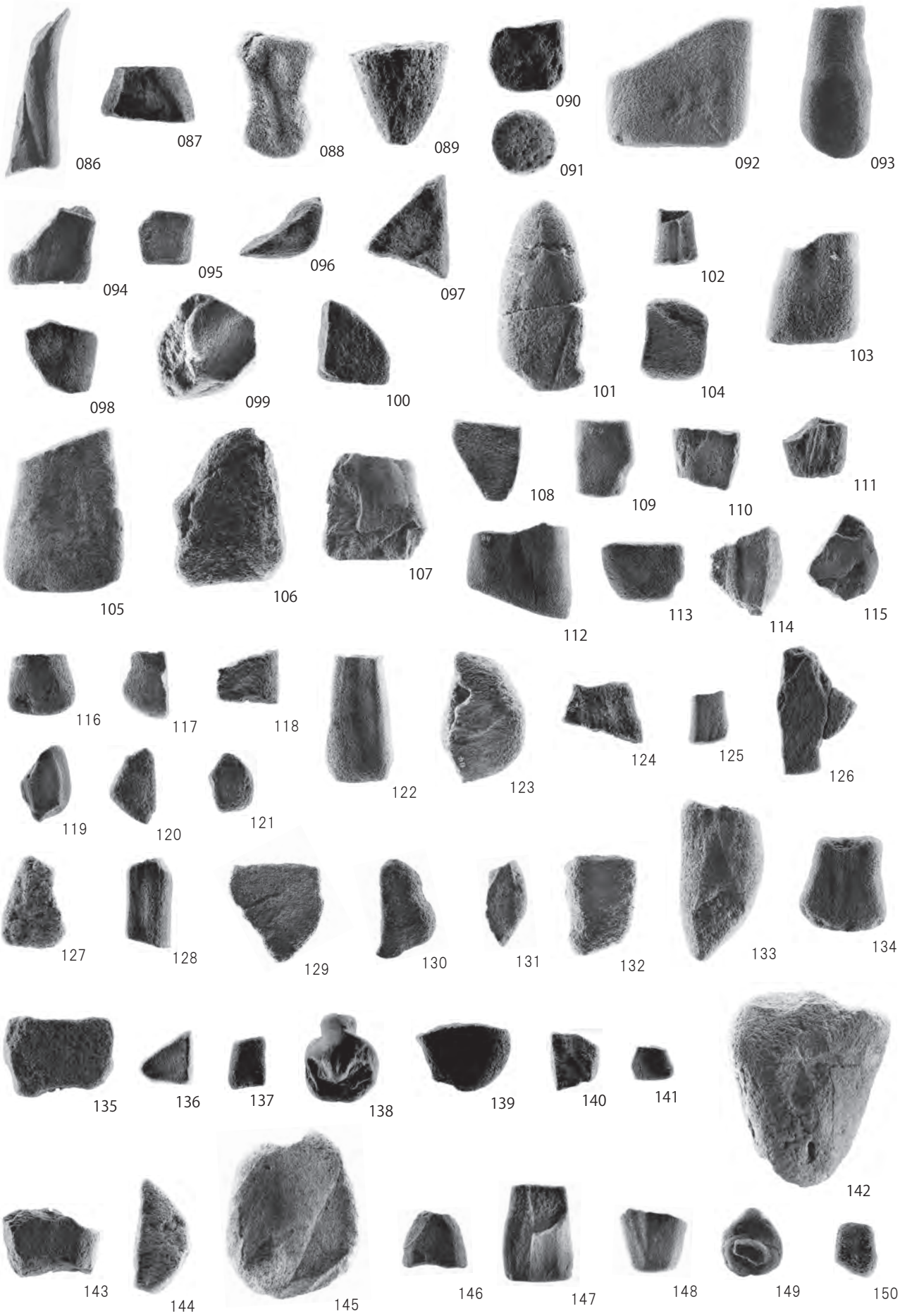
磨製石斧


001
002
005
006
007
008
009
012
003
004
010
019
011
013
014
015
016
020
017
018
021
022
023
024
025

砥石（1）

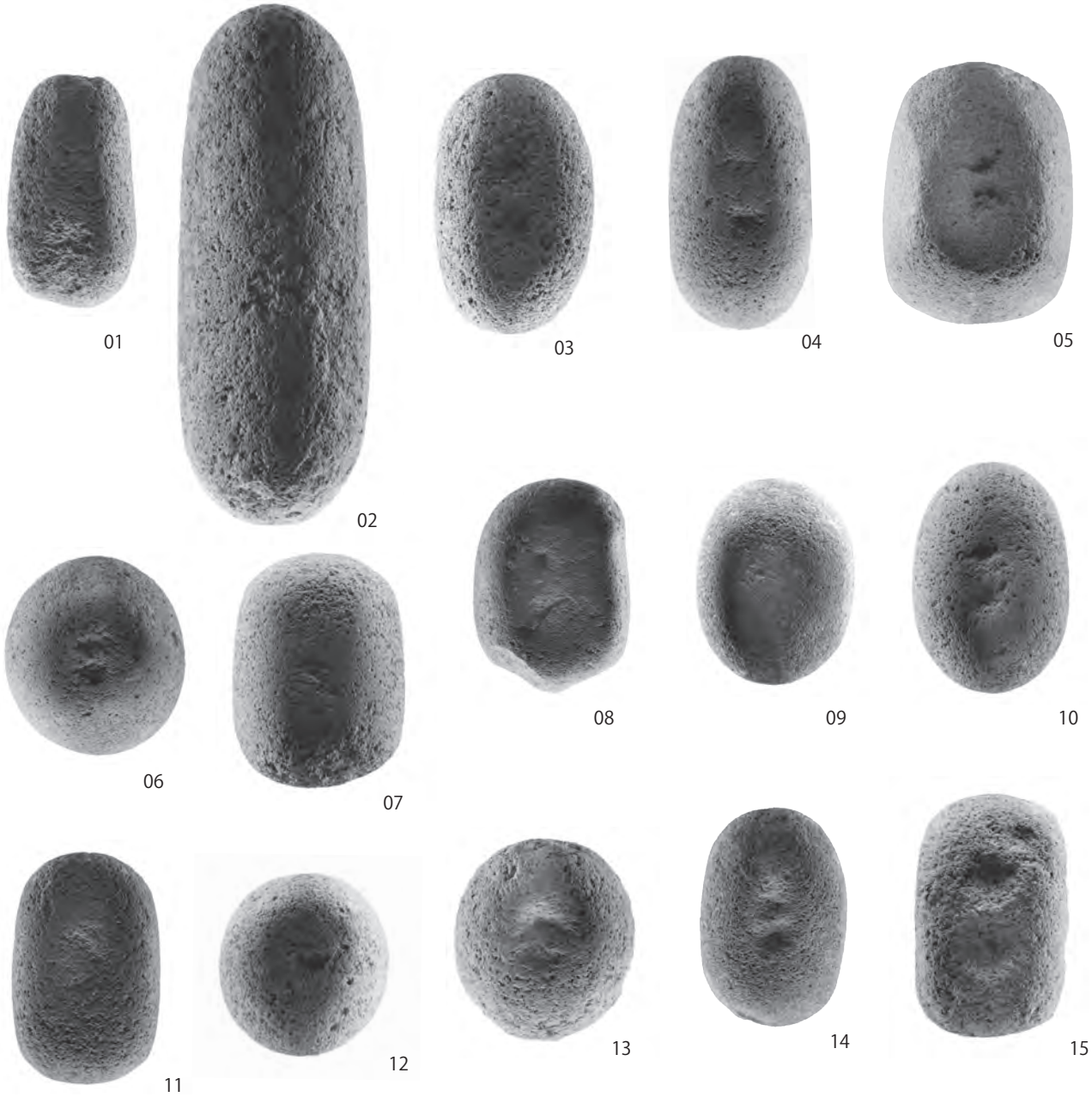

026
027
028
029
030
031
032
033
034
035
036
037
038
039
040
041
042
043
044
045
046
047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
065
066
067
068
069
070
071
072
073
074
075
076
077
078
079
080
081
082
083
084
085

砥石（2）


086
087
088
089
090
091
092
093
094
095
096
097
098
099
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150

砥石（3）

敲石



凹石

多孔石

1

2

3

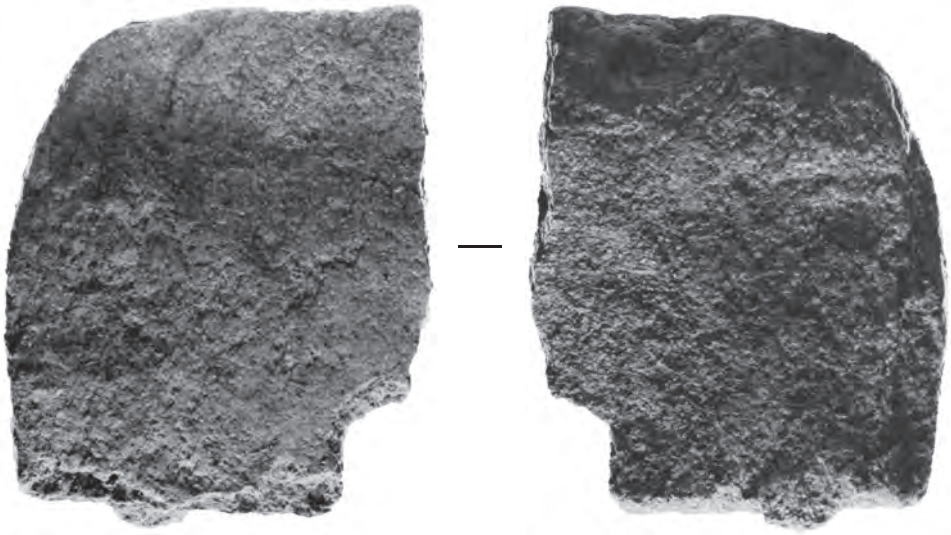
4

5

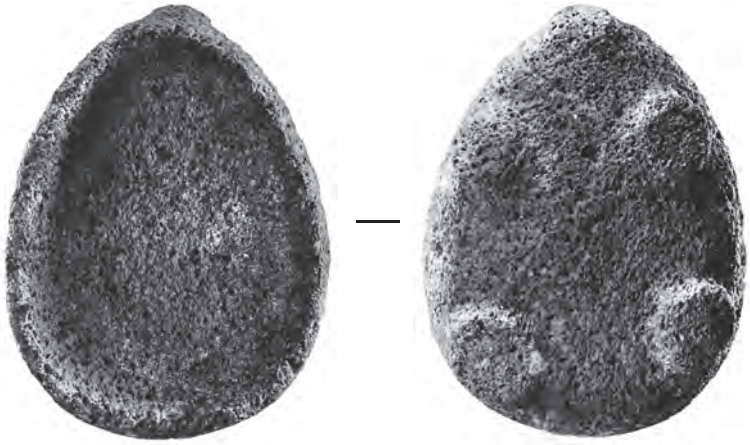
6

7

石錘



1

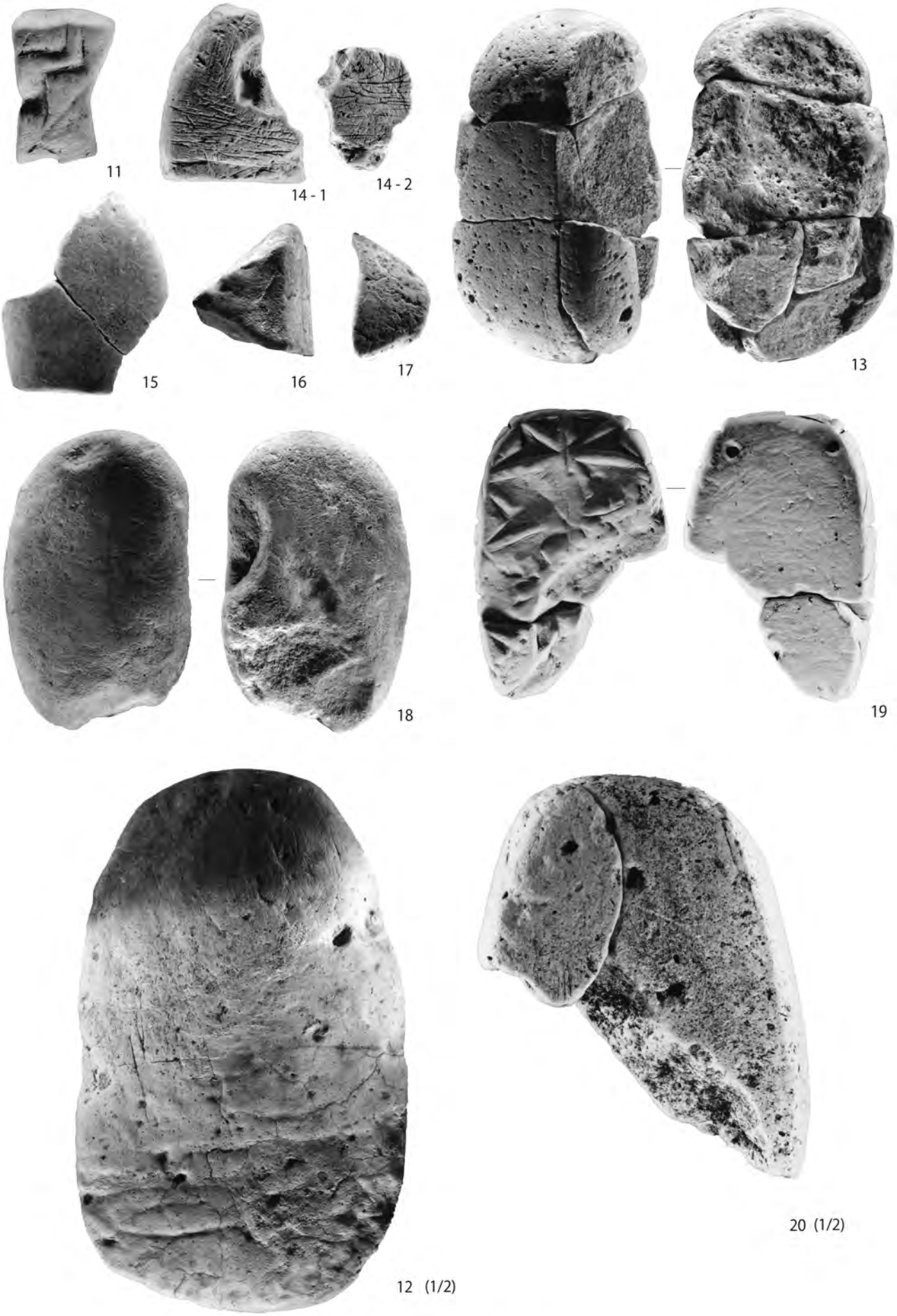


2

3

石皿

岩版（1）



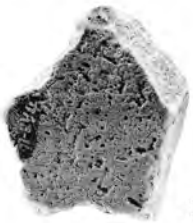
岩版（2）

21

22

23

25

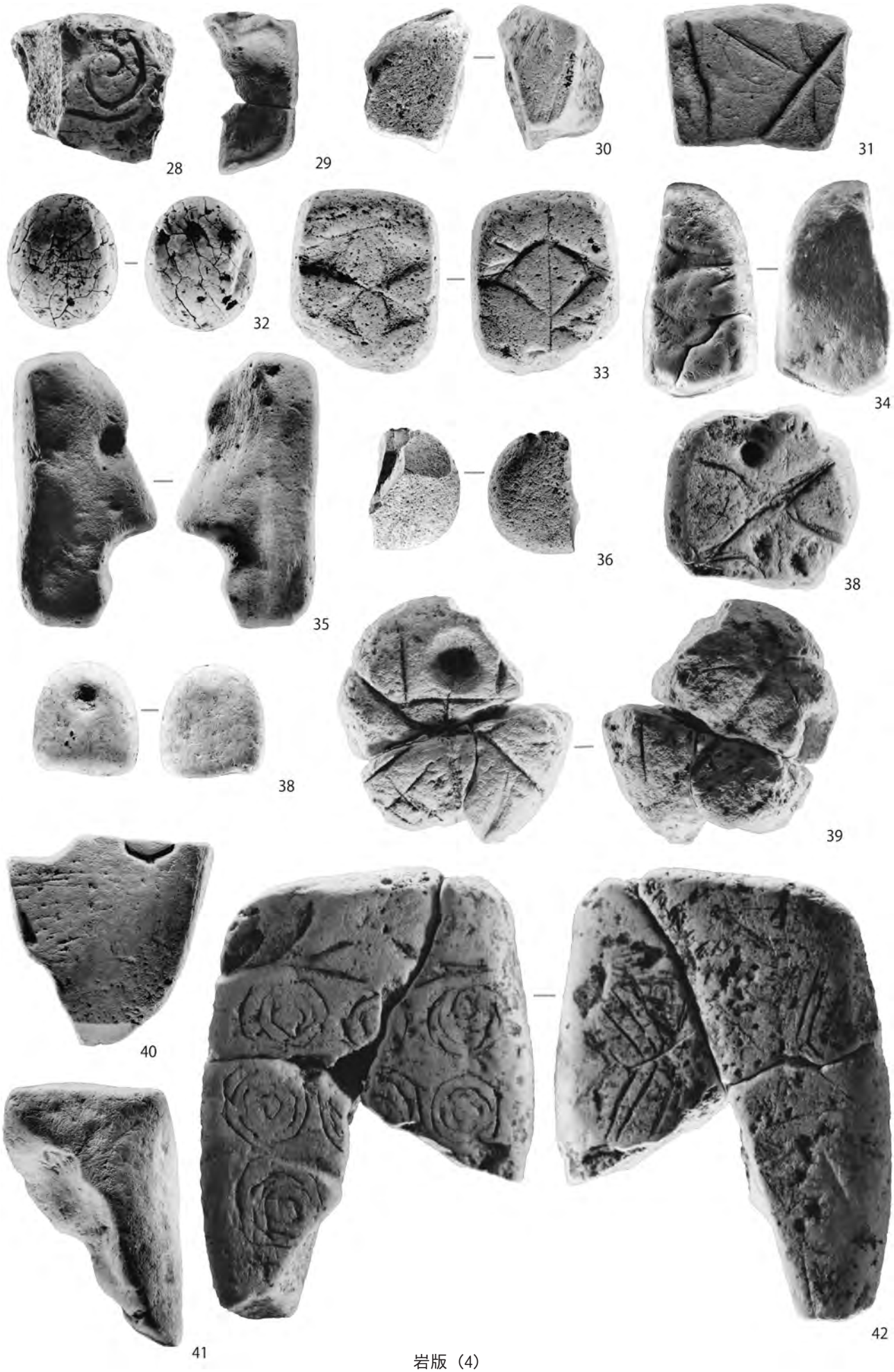


26

27

24

岩版（3）



岩版（4）

43

44

46

45

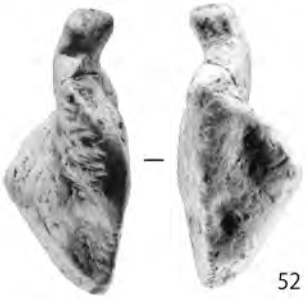
47

48

49

50

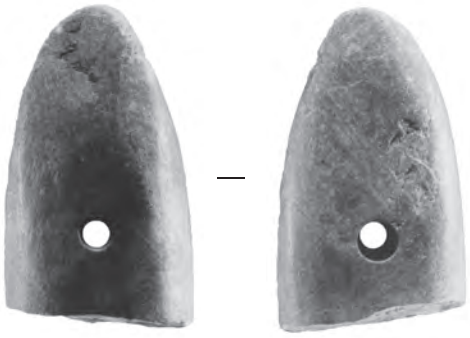
51


52

53

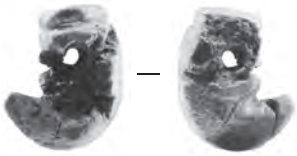
54

55

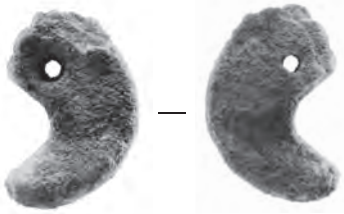


01

大珠



02

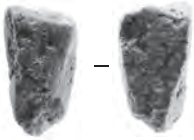


03

04

05

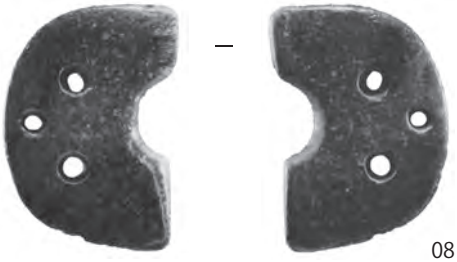
勾玉



06

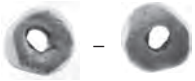
07

09



08

垂飾



10

11

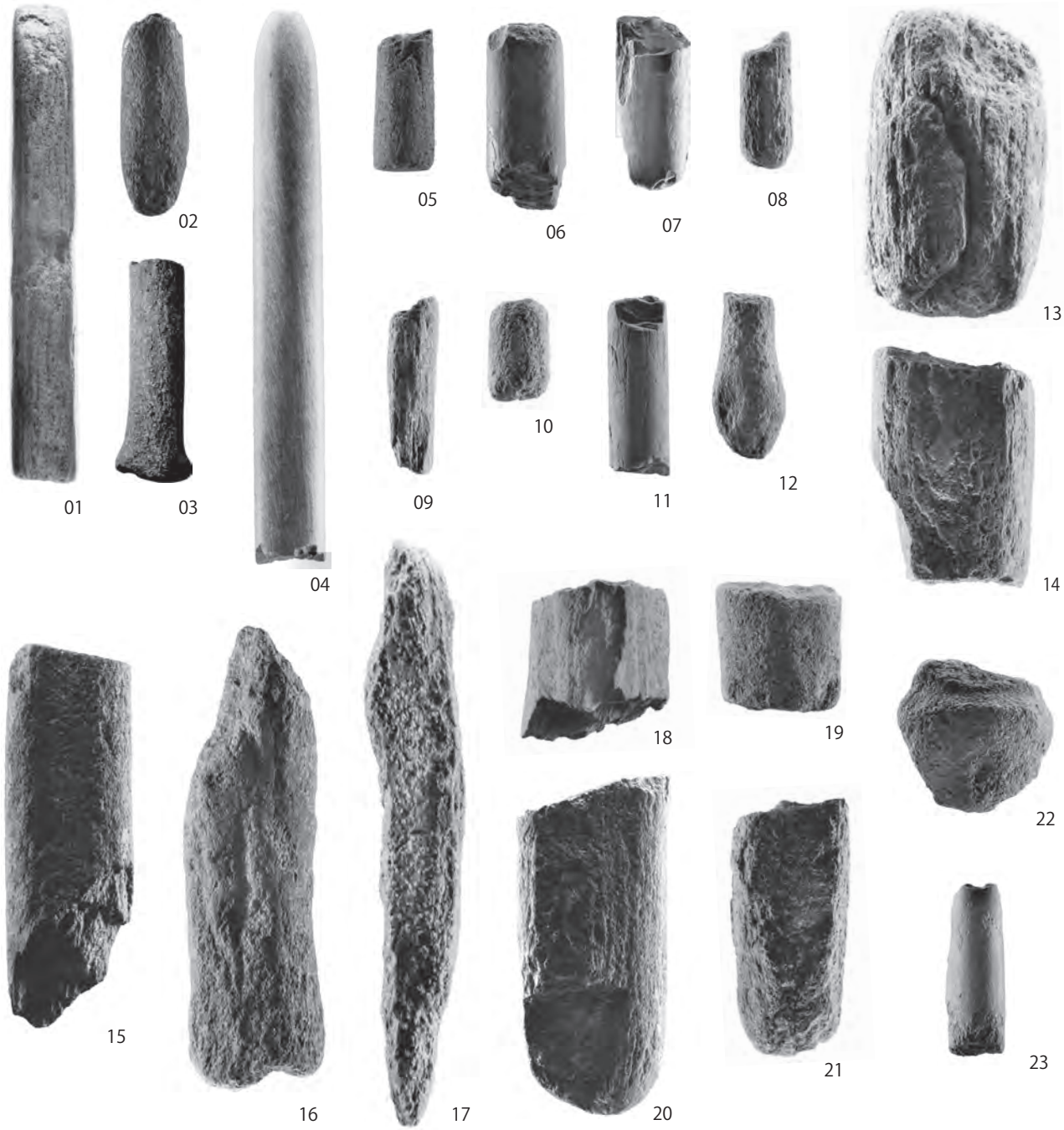
12

13

14

丸玉

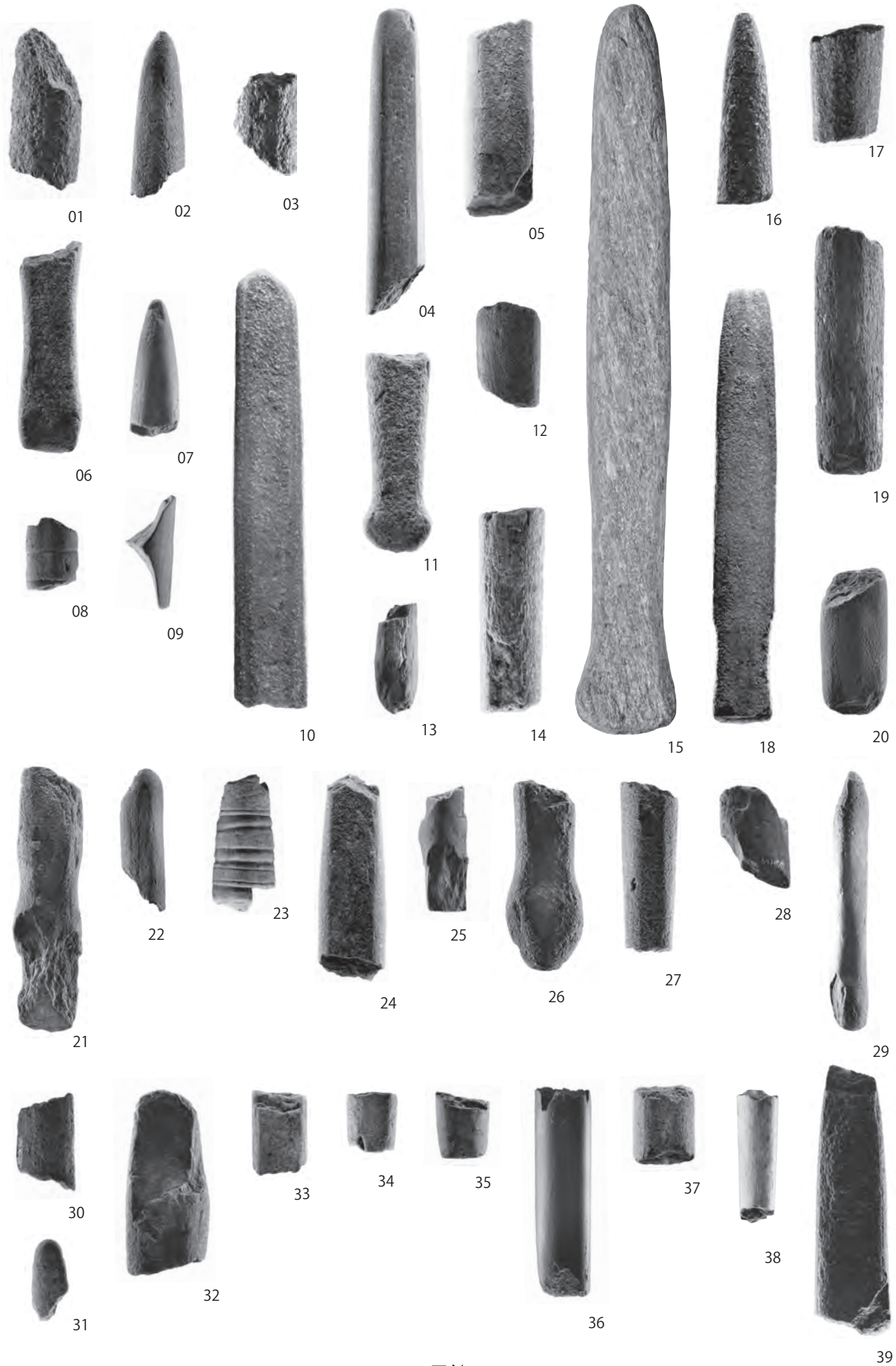
玉類


01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

24
25
26
27

1/6

石棒

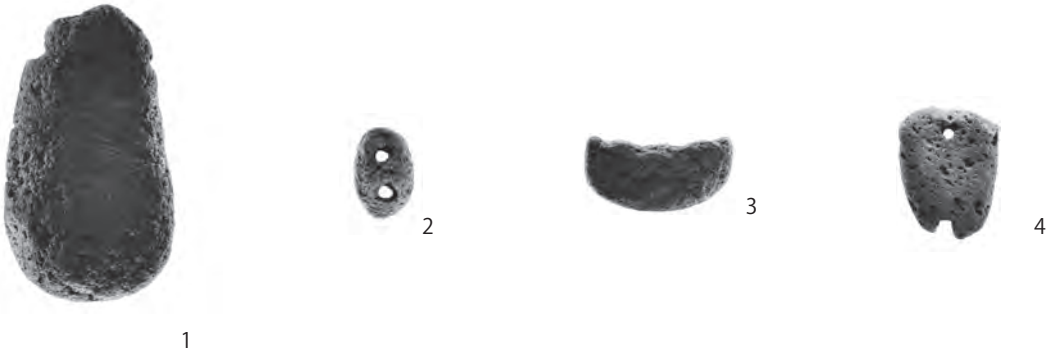

01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

石剣

独鈷石

石針

小型敲石



軽石製品

1

2

3

棒状礫

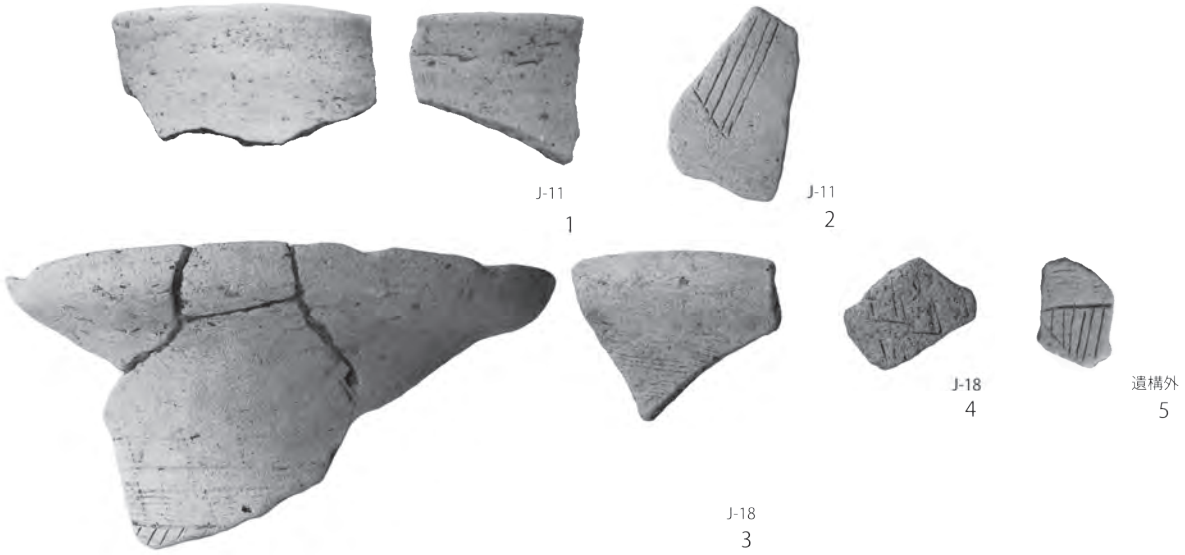
1

2

3

S=1/3

配石土坑から出土した自然礫



弥生時代の土器

抄　　録

フ リ ガ ナ	シセキ　カヤノイセキ
書　　名	史跡　茅野遺跡
副　書　名	圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書
分　冊　名	（二）遺物編
シ リ ー ズ 名	榛東村遺跡発掘調査報告書
シリーズ巻名	第12集
編 著 者 名	角田祥子、林　克彦、大工原豊、建石　徹、三浦麻衣子、二宮修治、石坂　茂
編 集 機 関	榛東村教育委員会
編集機関所在地	〒370-3502　群馬県群馬郡榛東村山子田1912
発 行 年 月 日	2021年２月11日
遺　跡　名	茅野遺跡
調 査 期 間	1989.7.28～1989.12.29　1990.9.20～1990.12.27
調 査 面 積	12,125.84㎡
調 査 原 因	圃場整備事業

遺跡名	所　在　地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経
茅　野　遺　跡	群馬県北群馬郡榛東村大字長岡字神薬師1200番地１、1289番地、1290番地１、1291番地１、1292番地１、1292番地２、1293番地１、1294番地４、1297番地１、1298番地、1299番地、1300番地１、1300番地２、1301番地１、1301番地２、1303番地１、1303番地２、1304番地	10344	榛東村0035	36°27′16″	138°58′41″

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落跡	縄文時代	【縄文時代】 住居：17（Ａ区）、２（Ｂ区） 大形石皿及び水場遺構： １（Ｅトレンチ） 配石土坑：12（Ａ区） 配石遺構：４（Ａ区） 埋設土器：４（Ａ区） ※㈠遺構編に収録	【縄文時代】 土器（後期後半から晩期前葉を主とする。ほかに前期～後期の土器。深鉢、浅鉢、注口土器、台付土器など）石器（石鏃、石鏃未成品、石鏃模造品、打製石斧、磨製石斧など）、石製品（岩版、石棒、石剣、独鈷石、玉類など）、土製品（土製耳飾り、土版、手燭形土製品、土偶など） 【弥生時代】 土器（後期樽式ほか）

榛東村遺跡発掘調査報告書　第12集

史跡　茅野遺跡（かやのいせき）

圃場整備事業に伴う発掘調査及び遺跡範囲確認調査報告書

（二）遺物編

印刷・発行　令和３年２月11日

編集・発行　群馬県榛東村教育委員会
群馬県北群馬郡榛東村山子田1912
電話　0279(54)1133(榛東村耳飾り館)

印　　刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67